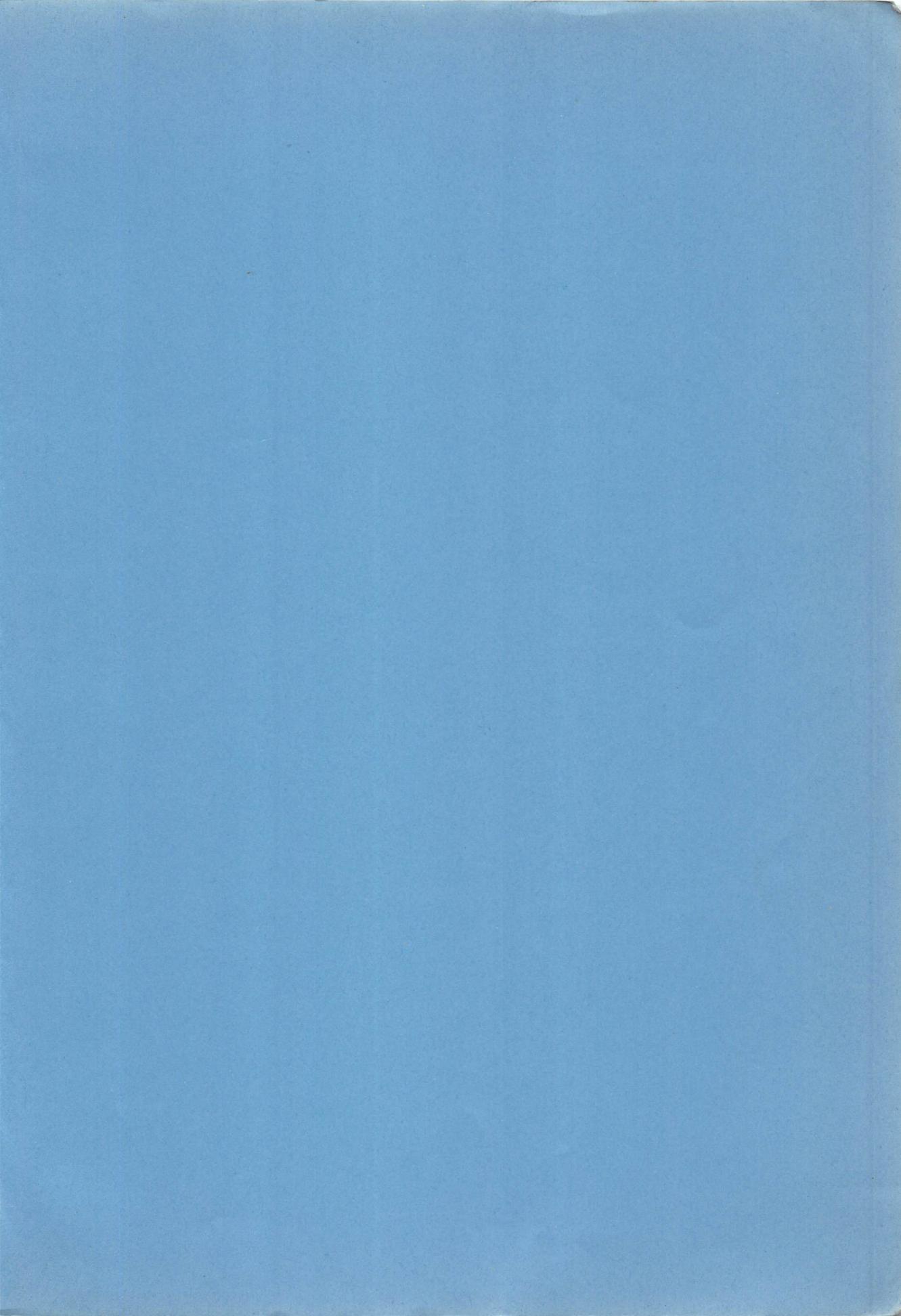


アスキー・マイクロソフトFE 監修

MSX₂ Technical Hand Book

MSX₂ テクニカル・ハンドブック



アスキー・マイクロソフトFE 監修

MSX₂ Technical Hand Book

MSX₂テクニカル・ハンドブック

アスキー出版局

MSX2
MSX
Reference
Handbook

- † MSX、MSX₂はアスキーの商標です。
† MS-DOSは米Microsoft社の商標です。
† CP/M-80は米Digital Research社の登録商標です。

はじめに

MSX パーソナルコンピュータ・システムが世に現れてから、すでに 2 年以上の月日が経過しました。しかし残念ながら MSX がその本来の目標である“ホームコンピュータ・システム”として世間に認められるには、今少しの時間が必要なようです。それどころか、MSX は当初の意図とはかなり掛け離れた部分で評価されることも多く、“単なるゲームマシンにすぎない”という誤った認識さえ一般に浸透しつつあります。これはなぜでしょう？

MSX はソフトウェア的には現在の 8 ビットマシンの最先端をいくものです。BASIC における数値の計算は有効桁数 14 桁の 10 進演算を基本とし、10 兆の単位まで誤差なく表現できます。これはビジネスユースにも十分対応可能です。また実行速度の面でも、MSX の BASIC は 8 ビットマシンの中では最高速の部類に入ります。ディスク操作の環境としては MS-DOS ver 1.25 をもとに作成された MSX-DOS が用意されています。この DOS は、MS-DOS と同様の優れた操作性を備えるとともに、システムコールレベルで CP/M-80 と互換性を持ち、CP/M 上で作成されたプログラムであれば、簡単に MSX-DOS に移植することができます。BASIC や DOS の持つ基本的な入出力操作は、BIOS あるいはシステムコールとして公開され、ユーザーが独自に利用することも可能となっています。

これらの機能にもかかわらず、MSX はその真価が実に目に止まりにくいマシンでした。大きな理由の 1 つは、MSX の画面表示能力にあったといっても間違いはないでしょう。実際、少なくとも 80 文字 × 25 行のテキスト、640 ドット × 200 ドットのグラフィックが標準となった現在のパソコンの中で、MSX の画面表示の機能は確かに見劣りするものでした。

そのような状況下、1985 年 5 月に MSX2 システムの仕様が発表されました。この MSX2 は、従来の仕様と完全な互換性を保つつ多くの新しい機能が追加されています。特に画面表示の機能には大きな改良が加えられました。その結果、いまや MSX はグラフィック機能の面でも 8 ビットマシンの最高峰に位置するものとなったのです。唯一のネックであった画面表示機能が改善された今、MSX はいよいよその能力を多くの分野で発揮していくことでしょう。本書ではこの MSX2 の構造と機能を詳しく解説しました。MSX2 のグラフィック機能、MSX-DOS の機能、そして BIOS ルーチンの使用法など、MSX2 に関する資料やデータは可能な限り掲載しています。これらの情報を MSX2 システムの理解とプログラムの作成に役立たせていただければ幸いです。なお実際には“MSX1”という呼称は存在しませんが、本書の中では従来の仕様に沿って作られた MSX を MSX1 と呼び、MSX2 との区別をしています。

本書はソフトウェアハウスのプログラマなど、ある程度パソコン使用の経験をつんだ方を主な読者対象としています。限られたページ数の中に多くのデータを盛り込むため、初步的な事項についての説明は省かざるを得なかったのです。まだパソコンに触れてまもない初心者の方は、今後アスキー書籍編集部から発行される MSX2 の入門書にぜひご期待ください。

本書を読む前に

第1部 MSX2システム概要

MSX2の機能をハード／ソフトの両面から解説します。

第2部 BASIC

MSX2の拡張部分をサポートするために強化されたMSX-BASIC ver 2.0の機能を述べ、さらにその内部構造、マシン語とのリンク方法などを解説します。

第3部 MSX-DOS

MSX-DOSの操作とシステムコールの使用法を解説します。

第4部 VDPと画面表示

MSX2の画面表示機能を担う新VDP(MSX-VIDEO)の機能と使用法を解説します。

第5部 BIOSによる周辺装置のアクセス

MSXではすべての周辺装置はBIOSを通してアクセスします。ここでは、その具体的な使用法を解説します。

APPENDIX

BIOS一覧、ワークエリア一覧に加え、BASICで使用している浮動小数点演算パッケージ(Math-Pack)、画像データ転送ルーチン(ビットブロック・ransfer)の両者を公開しています。

BIOSエントリおよびワークエリアの表記法について

- MSX2ではBIOSがMAIN-ROMとSUB-ROMに分割されて存在します。これを区別するため、本書では次のような記法でBIOSエントリを表示しています。

BIOSエントリの表示例

- KEYINT (0038H/MAIN) ← MAIN-ROMの0038H番地
- WRTCLK (01F9H/SUB) ← SUB-ROMの01F9H番地

- また、ワークエリアの表示には、次の記法を用いて先頭アドレスと使用するバイト数を表しています。

ワークエリアの表示例

- VARTYP (F663H, 1) ← F663H番地の1バイトを使用
- BUF (F55EH, 258) ← F55EH番地以降258バイトを使用

目 次

はじめに.....	3
本書を読む前に.....	4

第1部 MSX2システム概要

11

1 章 MSX1からMSX2へ.....	13
1.1 MSXとは	13
1.2 MSXの環境と拡張性	14
1.3 MSX2での拡張内容	15
● MSX-BASIC	17
● VDP	17
● RAMディスク機能	19
● メモリ(ROM, RAM, VRAM)	17
● バッテリバックアップのCLOCK-IC	18
● ローマ字カナ変換機能	19
2 章 MSX2システム概要	21
2.1 ハードウェア概要	21
2.1.1 アドレスマップ	21
2.1.2 周辺機器とのインターフェイス	24
2.2 ソフトウェア概要	24

第2部 BASIC

27

1 章 命令一覧	29
1.1 MSX-BASIC ver2.0の命令	30
1.2 MSX DISK-BASICの命令	44
2 章 MSX-BASIC ver 2.0の変更点	49
2.1 スクリーンモードに関する追加, 変更	49
2.2 カラーの指定に関する追加, 変更	51
2.3 文字の表示に関する追加, 変更	53
2.4 グラフィックスの表示に関する追加, 変更	53
2.5 VDPのアクセスに関する追加, 変更	54
2.6 画像データの保存に関する追加, 変更	56
2.7 スプライトに関する追加, 変更	57
2.8 オプション機能に関する追加	59
2.9 時計機能に関する追加	60
2.10 メモリスイッチ機能に関する追加	61
2.11 RAMディスク機能に関する追加	62
2.12 その他の追加機能	64
3 章 BASICの内部構造	65
3.1 ユーザーエリア	65
3.2 ユーザーエリアの詳細	66
● BASICプログラムエリア	67
● フリーエリア	68
● 文字列領域	69
● マシン語領域	69
● 変数領域	68
● スタックエリア	68
● ファイルコントロールブロック	69
● ディスクのワークエリア	69

目 次

3.3 BASICプログラムの格納形式	70
●リンクポインタ	70
●テキスト	71
●行番号	70
4章 マシン語とのリンク	73
4.1 USR関数	73
4.2 USR関数の引数と戻り値によるデータの受け渡し	73
4.3 命令の増設	75
4.4 CMD命令への引数の受け渡し	76
4.5 割り込み使用法	81
5章 ソフトウェア開発上の諸注意	83
●BIOS	83
●RAMとスタックポインタの初期化	83
●デバイスドライバなどのワークエリア	84
●VRAMの初期化	84
●BASICのバージョン番号	85
●エスケープシーケンス	86
●オートスタート	87
●ワークエリア	83
●拡張BIOSのワークエリア	84
●フック	84
●VRAMの容量	85
●インターナショナルMSX	85
●BASICに戻る方法	86
●エラーコード一覧表	88

第3部 MSX-DOS

91

1章 概要	93
1.1 MSX-DOSの特徴	93
●ディスク環境の統一	93
●CP/Mのアプリケーションが利用可能	94
1.2 MSX-DOSの使用環境	94
●必要なシステム	94
●サポートするシステム	94
●サポートするメディア	94
1.3 MSX-DOSのシステム資源	95
●メモリマップ	95
●MSXDOS.SYS	96
●MSX-DOSの起動手順	97
●COMMAND.COM	96
●DOSカーネル	97
2章 操作	99
2.1 基本的な操作	99
●起動時のメッセージ	99
●デフォルト・ドライブ	99
●コマンドの入力	100
●ワイルドカード	101
●テンプレートを使用した入力機能	103
●ディスクエラー	105
●プロンプト	99
●デフォルト・ドライブの変更	100
●ファイル命名規則	101
●デバイス名	102
●その他の特殊キー	103
2.2 内部コマンド	105
●BASIC	106
●DATE	109
●DIR	111
●MODE	112
●REM	113
●TIME	113
●VERIFY	114
●COPY	106
●DEL	110
●FORMAT	111
●PAUSE	112
●REN	113
●TYPE	114

2.3 バッチコマンドの使用法	115
●バッチ変数.....	116
2.4 外部コマンド	117
●外部コマンドの作成.....	117
●AUTOEXEC.BAT	117
●外部コマンドへの引数の受け渡し	118
3章 ディスクファイルの構造	119
3.1 ディスク上のデータ単位	119
●セクタ.....	119
●クラスタ	119
●クラスタからセクタへの換算.....	119
●DPB(ドライブ・パラメータ・ブロック)とブートセクタ	120
●FAT(ファイル・アロケーション・テーブル)	122
●ディレクトリ.....	123
3.2 ファイルのアクセス	125
●FCB(ファイル・コントロール・ブロック)	125
●ファイルのオープン.....	128
●ファイルのクローズ.....	128
●ランダム・ロック・アクセス(レコードによるファイル管理)	128
●シーケンシャルアクセス(固定長レコード+カレントレコード+カレントブロックによる ファイル管理)	130
●ランダムアクセス(固定長レコード+ランダムレコードによるファイル管理)	130
4章 システムコールの使用法	131
●システムコールの形式.....	132
●使用上の注意.....	133
4.1 周辺装置とのI/O	136
4.2 環境の設定と読み出し	139
4.3 アブソリュートREAD/WRITE(セクタの直接アクセス)	143
4.4 FCBを用いたファイルアクセス	146

第4部 VDPと画面表示**155**

1章 MSX-VIDEOの構成	157
1.1 レジスタ	157
1.2 VRAM	159
1.3 I/Oポート	159
2章 MSX-VIDEOのアクセス	161
2.1 レジスタのアクセス	161
2.1.1 コントロール・レジスタへのデータ書き込み	161
2.1.2 パレットの設定	163
2.1.3 ステータスレジスタの読み出し	163
2.2 CPUからのVRAMアクセス	164
3章 MSX2の画面モード	167
3.1 TEXT1モード	168
3.1.1 TEXT1モードの設定	168
3.1.2 TEXT1モードの画面構造	168
3.1.3 TEXT1モードの画面の色の指定	170
3.2 TEXT2モード	171
3.2.1 TEXT2モードの設定	171
3.2.2 TEXT2モードの画面構造	172
3.2.3 TEXT2モードの画面の色とプリント指定	173
3.3 MULTI COLORモード	175
3.3.1 MULTI COLORモードの設定	175
3.3.2 MULTI COLORモードの画面構造	175
3.3.3 MULTI COLORモードの画面の色の指定	176

目 次

3.4 GRAPHIC1モード	178
3.4.1 GRAPHIC1モードの設定	178
3.4.3 GRAPHIC1モードの画面の色の指定	180
3.5 GRAPHIC2, 3モード	181
3.5.1 GRAPHIC2, 3モードの設定	181
3.5.3 GRAPHIC2, 3モードの画面の色の指定	185
3.6 GRAPHIC4モード	185
3.6.1 GRAPHIC4モードの設定	185
3.6.3 GRAPHIC4モードの画面の色の指定	187
3.7 GRAPHIC5モード	188
3.7.1 GRAPHIC5モードの設定	188
3.7.3 GRAPHIC5モードの画面の色の指定	190
3.8 GRAPHIC6モード	191
3.8.1 GRAPHIC6モードと設定	191
3.8.3 GRAPHIC6モードの画面の色の指定	193
3.9 GRAPHIC7モード	193
3.9.1 GRAPHIC7モードの設定	193
3.9.3 GRAPHIC7モードの画面の色の指定	195
4章 画面表示に関する諸機能	197
●画面のON/OFF	197
●Y方向ドット数の切り換え	198
●画面の自動交互表示	198
●画面の縦方向スクロール	200
●走査線位置による割り込みの発生	201
●画面表示位置の補正	197
●表示ページの切り換え	198
●インターレースモードの設定	199
●カラーコード0の機能指定	201
5章 スプライト	203
5.1 スプライトの機能	203
5.2 スプライトモード1	204
5.2.1 最大表示数	204
5.2.2 スプライト表示のための諸設定	204
●スプライトのサイズの設定	204
●スプライトの拡大	205
●スプライトパターン・ジェネレーターテーブルの設定	206
●スプライトアトリビュート・テーブルの設定	206
5.2.3 スプライトの衝突判定	207
5.3 スプライトモード2	208
5.3.1 最大表示数	208
5.3.2 スプライト表示のための諸設定	209
●スプライトサイズ	209
●スプライトの拡大	209
●スプライト表示のON/OFF	209
●スプライトパターン・ジェネレーターテーブルの設定	209
●スプライトアトリビュート・テーブルの設定	209
●スプライトカラーテーブル	210
5.3.3 スプライトの衝突判定	212
6章 VDPコマンドの使用法	215
6.1 VDPコマンドの座標系	215
6.2 VDPコマンドの種類	216
6.3 ロジカルオペレーション	216
6.4 領域指定	218

6.5 各コマンドの使用法	218
6.5.1 HMMC(CPU→VRAM高速転送)	218
6.5.3 HMMM(VRAM間高速転送)	226
6.5.5 LMMC(CPU→VRAM論理転送)	232
6.5.7 LMMM(VRAM→VRAM論理転送)	239
6.5.9 LINE(直線の描画)	245
6.5.11 PSET(点の描画)	253
6.5.2 YMMM(Y軸方向のVRAM間高速転送)	223
6.5.4 HMMV(長方形の高速塗りつぶし)	229
6.5.6 LMCM(VRAM→CPU論理転送)	235
6.5.8 LMMV(VRAM論理塗りつぶし)	242
6.5.10 SRCH(色コードのサーチ)	248
6.5.12 POINT(色コードの読み出し)	255
6.6 コマンドの高速化	261
6.7 コマンド終了時のレジスタの状態	262

第5部 BIOSによる周辺装置のアクセス

263

1章 PSGと音声出力	265
1.1 PSGの機能	265
●PSGのレジスタ	266
●ノイズ周波数の設定(R6)	268
●音量の設定(R8～R10)	269
●エンベロープパターンの設定(R13)	270
●トーン周波数の設定(R0～R5)	266
●音のミキシング(R7)	269
●エンベロープ周期の設定(R11, R12)	270
●I/Oポート(R14, R15)	271
1.2 PSGのアクセス	271
1.3 1ビットサウンドポートによる音声発生機能	273
1.4 1ビットサウンドポートのアクセス	273
2章 カセット・インターフェイス	275
2.1 ポーレート	275
2.2 1ビットの構成	275
2.3 1バイトの構成	276
2.4 ヘッダの構成	277
2.5 ファイルのフォーマット	277
2.6 カセットファイルのアクセス	279
3章 キーボード・インターフェイス	283
3.1 キー配列	283
3.2 キースキャン	283
3.3 文字の入力	286
3.4 ファンクションキー	291
3.5 割り込み中のSTOPキー	291
4章 プリンタ・インターフェイス	293
4.1 プリンタ・インターフェイスの概要	293
4.2 MSX仕様のプリンタへの出力	294
4.3 MSX仕様以外のプリンタへの出力	295
4.4 プリンタのアクセス	295
5章 汎用入出力インターフェイス	297
5.1 ポートの機能	298
5.2 ジョイスティックの使用法	298
5.3 パドルの使用法	301
5.4 タッチパネル, ライトペン, マウス, トラックボールの使用法	302

6 章 CLOCKとバッテリバックアップ・メモリ	307
6.1 CLOCK-ICの機能	307
●CLOCK機能	307
●バッテリバックアップ・メモリ機能	307
6.2 CLOCK-ICの構造	308
6.3 MODEレジスタの機能	308
●ブロックの選択	308
●CLOCKカウントの停止	309
6.4 TESTレジスタの機能	309
6.5 RESETレジスタの機能	310
●アラームのリセット	310
●クロックパルスのON/OFF	310
6.6 クロックおよびアラームの設定	310
●日付と時刻の設定	310
●閏年カウンタ	312
6.7 バッテリバックアップ・メモリの内容	312
●ブロック2の内容	312
●ブロック3の内容	313
6.8 CLOCK-ICのアクセス	314
7 章 スロットとカートリッジ	317
7.1 スロット	317
7.1.1 基本スロットと拡張スロット	317
7.1.2 スロットの選択	319
7.2 インタースロットコール(スロット間コール)	321
7.2.1 インタースロットコールの動作	321
7.2.2 インタースロットコールの使用法	322
7.2.3 スロットの状態を知るためのワークエリア	326
7.3 カートリッジソフトの作成法	328
7.3.1 カートリッジ・ヘッダ	328
●ID	328
●STATEMENT	329
●TEXT	331
7.3.2 カートリッジ用ソフトの作成に関する諸注意	333
●カートリッジで使用するワークエリアの確保	333
●フック	336
●拡張スロットでの動作チェック	339
●INIT	328
●DEVICE	330
●BASICプログラムのROM化の方法	332
●スタックポインタの初期化	339
●CALSLT使用時の注意	339

APPENDIX**341**

A.1 BIOS一覧	343
A.2 Math-Pack	356
A.3 ビットブロック・トランスマップ	362
A.4 ワークエリア一覧	367
A.5 VRAMマップ	382
A.6 I/Oマップ	390
A.7 カートリッジハードウェア仕様	392
A.8 コントロールコード表	407
A.9 キャラクタコード表	408
A.10 エスケープシーケンス表	410
索引	411

1

第 1 部

MSX 2

システム概要

MSX1からMSX2へのバージョンアップは、MSX1との完全互換性を保つことを大前提に行われていますが、その拡張された機能は画面関係を筆頭にかなりの数、かなりの規模に上っています。そこでこの第1部では、MSX1からMSX2になって向上した機能を中心に、ブロック図や規格表などをまじえて簡単に紹介していくことにします。ここでの知識は概念的なものではありますが、第2部以降の解説を理解するためには必要なものです。

1 章 MSX1からMSX2へ

まず最初に、MSX というコンピュータがそもそもどのような主旨で企画・製品化されたものかを振り返り、その後 MSX 1 から MSX 2 への変化をまとめます。

1.1 MSX とは

MSX は、1983 年秋に 8 ビットパソコンの統一仕様として発表されました。発足当時は“互換性”という言葉が正しく理解されていないことも多く、MSX ならほかのどんなパソコンのソフトも動くというような誤解もあったようです。また逆に、MSX は MSX のソフトしか動かないのなら、PC シリーズは PC 用、FM シリーズは FM 用のソフトしか動かないのとどこが違うのかという意見も聞かれました。

コンピュータというマシンがパソコンという形で、一般の人々にも手が届くものになったのはまだここ数年のことです。出始めの頃は一般といっても、パソコンを買ったのは本当のマニアばかりで、互換性はおろか、実用に供することさえ難しかったものでした。ただひたすらコンピュータというものに触れ、その勉強ができればよかったです。しかし、今では普及率もかなりのものとなり、意外な人がなんとなくパソコンを持っているというようなことにさえなってきました。つまり、パソコンはテレビやラジカセのような家電製品になろうとしているわけです。こうなってくると“互換性”という問題が前面にでてきます。メーカーごとに違った放送局が必要なテレビや違ったテープが必要なラジカセといったものは、果たして普及するでしょうか？ 家電製品としてのコンピュータのソフトは絶対に互換性を持っていなければならぬのです。

こうしたことを見越した上で始まったのが MSX です。しかし、コンピュータのメリットが“何でも使える”ことだということを考えると、仕様を統一するといつても、あまりに決めるべき事項が多すぎ、またハードウェアの進歩が速過ぎるために、“決定的”な仕様などは存在し得ないということになります。したがって、MSX では最も基本的なハードウェアおよび DOS、BASIC といった基本ソフトウェア、あらゆる拡張の基礎となるスロットの仕様を決めることから始まりました。コンピュータが単体で利用されているうち(ゲームなど)はまだよいのですが、これが様々な“周辺機器”とつながり、様々なデータを処理、蓄積するようになっていくと、後から後から決めなければならないことが増えてきます。幸い、MSX には多くの家電メーカーの賛同が得ら

れ、ありとあらゆる家電製品をコンピュータとつなげる試みがなされ、仕様ができあがっていきました。これは、MSXを“核”として皆が集まつくるのであって、あるひとつのコンピュータのメーカーが自社のマシンを中心にして、他の“周辺機器”をそろえていくのとは根本的に発想が違うのです。

MSXはこのようにして進められてきたもので、その根底は非常にしっかりととしたものです。BASICの基本演算に倍精度のBCDを採用し、ディスクシステムとしてMS-DOSと同一のファイルフォーマットを使っていることなどは、MSXが本格的コンピュータとして設計されていることを示す良い例です。今後は、こうしたMSXの底力がいろいろな分野で発揮されるようになることでしょう。

1.2 MSXの環境と拡張性

MSXは1985年12月に、普及台数100万台を超え、主にゲーム機または入門機として小中学生の間で使われています。しかし、次第に通信端末、日本語ワープロ、ファクトリ・オートメーション、オーディオ・ビジュアル・コントロールといった分野での利用も進み、その真価を発揮しつつあります。開発環境としてもディスク・システム、MSX-DOSの整備が進み、Cコンパイラ、FORTH、LOGOなどの高級言語が次々と発表、発売されています。BASIC ROM内の入出力ルーチンの集合体であるBIOSや、ディスク・インターフェイスROM内のBDOS(CP/Mのシステムコールとほぼ互換性を持ち、さらに大きく改良されている)は公開され、優れたプログラミング環境を提供しています。漢字の扱い方や、マウス、ライトペン、RS-232Cの規格なども標準化され、周辺機器の統一も進んでいます。また国際的なレベルでもキーボードやキャラクタセットの一部を除いて同一のものとなっていて、それらの違いも各国ごとに規定されています。

周辺機器としては、プリンタ、ディスク・ドライブ、マウスなどの標準的なもの他、LD、VTR、シンセサイザのコントローラ、画像取り込みなどのAV関係の装置、ロボット・コントロール、室温管理などに代表されるFA用の機器、モデムや電話回線を利用するための様々なアダプタ、血圧計と組み合わせた健康管理機器などが開発されています。コンピュータの利用方法がいかに広がってゆくかを見せつけられる思いです。

ゲーム以外の一般的なアプリケーション・ソフトウェアも、最近ではディスク対応のものが増え本格的な実用性を備えてきています。例をあげると、文節変換のできる日本語ワープロ、より上位のシステムとデータを共有できるようなデータベース、CAI、CADなどのシステムがすでに発売されています。

1.3 MSX 2での拡張内容

MSX 2は、1985年5月にMSXの上位互換性を持ったシステムとして発表されました。MSXの仕様に沿って作成されたプログラムは、マシン語のものであってもなんらの変更を加えることなくMSX 2上で動作します。また、カセットやディスク上に蓄積されたデータやプログラムもそのまま使うことが可能です。MSX 2において拡張されたのは主に画面関係の機能で、解像度、扱える色、グラフィック処理の速度などが大幅に改善されました。そのほかにもバッテリバックアップされた時計機能、標準で64Kに統一されたメインRAMを使ったRAMディスク機能などがあげられます。以下本書では、このMSX 2仕様に沿って作られたコンピュータをMSX 2と呼び、従来のMSX仕様に沿って作られたコンピュータをMSX 1と呼ぶことにします。

まず、MSX 1とMSX 2のハードウェアではどこが違うかを、図1.1と図1.2のシステム構成図、および表1.1に示します。以下この中で拡張された各項目について、順に見ていきましょう。

		MSX2仕様	MSX1仕様
CPU		Z80A相当品(クロック 3.579545MHz±1%)	
メモリ	ROM	48K(MSX-BASIC ver2.0) MAIN-ROM 32K SUB-ROM 16K	32K(MSX-BASIC ver1.0) MAIN-ROM 32K
	RAM	64K以上	8K以上
	VRAM	64Kまたは128K	16K
VDP 使用LSI		V-9938(MSX-VIDEO)	TMS9918相当品
CMT		FSK方式 1200/2400 baud	
PSG		8オクターブ3重和音出力(AY-3-8910相当品)	
キーボード(日本版)		英数、ひらがな、カタカナ グラフィック記号対応 JIS配列/50音配列対応(ローマ字入力可能)	英数、ひらがな、カタカナ グラフィック記号対応 JIS配列/50音配列対応
フロッピーディスク※		フォーマットはMS-DOSに準拠	
プリンタ		8ビットパラレル	(※)
ROMカートリッジ		I/Oバス ゲームカートリッジ、拡張バスに対応するスロットを持つ	
ジョイステイック		2	1または2(※)
漢字機能※		統一仕様	各社対応
CLOCK-IC		あり	なし
RAMディスク機能		あり	なし

※はオプションを表す。

表1.1 MSX2とMSX1の仕様比較

第1部 MSX 2システム概要

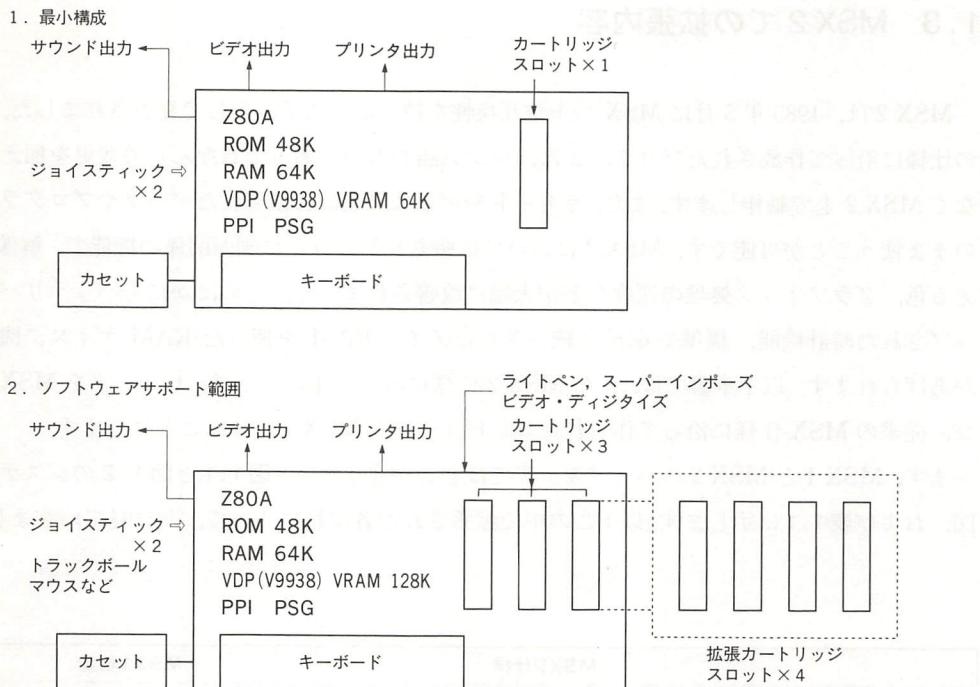


図1.1 MSX2システム構成

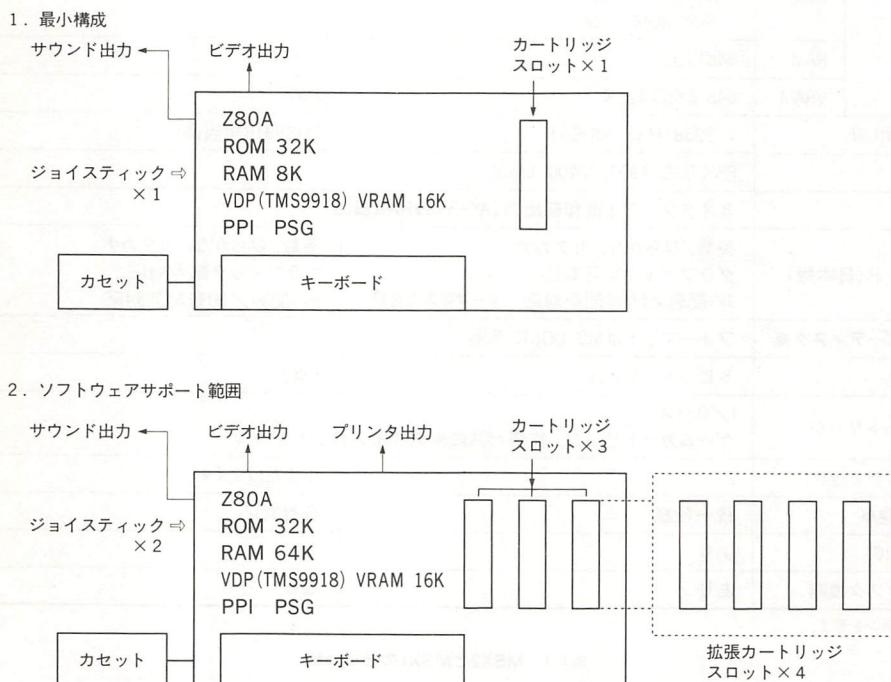


図1.2 MSX1システム構成

● MSX-BASIC

新VDP、バックアップRAM、CLOCK-ICなどをサポートするため、BASICもver1.0からver2.0へ大幅に拡張されました。もちろん、MSX1との互換性は保たれています。ただし、新しく拡張された画面モードなどを使用する場合、今までとは指定方法や指定範囲が若干異なる場合がありますので注意が必要です。

● メモリ(ROM, RAM, VRAM)

MSX2のメモリには、ROM, RAM, VRAMの3種類がありますので、それぞれについて説明しましょう。

ROM

ROMは標準で48K用意されています。MSX1は、標準で32Kですから16K分増えたことになります。この増えた16K分のROMには、主にMSX2に対して拡張された部分をサポートするプログラムが入っています。

32K側のROMにはBASICインタープリタのメインプログラムが入っているので“MAIN-ROM(メインロム)”，16K側のROMには拡張のためのプログラムが入っているので“拡張ROM”，あるいは“SUB-ROM(サブロム)”と呼んでいます。

RAM

RAMは標準で64K用意されており、拡張なしでMSX-DOSを動かすことができます。MSX1では8Kから64KまでRAM容量が様々で、大きなプログラムはRAMを増設しないと動かないことがありました。MSX2ではそのようなことがなくなっています。

VRAM

画面表示機能強化のためVRAMは最低でも64Kと規定されています。MSX1が16Kですから、実に4倍にも拡張されたことになります。しかし、現実的には最大実装の128Kのマシンが多く、そうなるとMSX1の8倍にもなるのです。128K実装しているマシンでは、256色同時表示が可能です。

なお、VRAMが64K実装されているMSXのうち128Kに増設できない機種は、カタログまたは箱にVRAM64Kなどと表示されているはずです。

● VDP

MSXの画面の制御に使用されているのが“VDP(ビデオ・ディスプレイ・プロセッサ)”というLSIです。MSX1で使われていたVDPはTMS9918でしたが、MSX2にはV9938(MSX-

VIDEO) が使われています。V9938 は、TMS9918 と完全に上位互換性を持ったチップで、TMS9918 用に作られたソフトウェアはすべて変更なしに動作します。

表1.2にVDPの仕様を、表1.3にV9938の各画面モードを示します。V9938はこのほかにも、ディジタイズ機能、スーパーインポーズ機能、ハードウェア・スクロール機能などを持った優れたLSIなので、第4部でさらに詳しく解説しています。

		V9938	TMS9918
スクリーンモード		10種類(表1.3参照)	4種類
ドット数(横×縦)		最大512×212 インターレース機能により 縦424ドットも可能	最大256×192
色	指定色	最大512色	最大16色
	同時表示色	最大256色	最大16色
文字構成		英数文字+ひらがな+カタカナ+グラフィック記号 256種8×8ドット	
スプライトの色		1枚につき最大16色	1枚につき1色
パレット機能		あり	なし

表1.2 VDPの仕様

モード	文字数	ドット	色	パレット	スプライト
*テキスト1	40×24		512色中2色	あり	なし
テキスト2	80×24		512色中4色	あり	なし
*マルチカラー		64×48	512色中16色	あり	モード1
*グラフィック1	32×24		512色中16色	あり	モード1
*グラフィック2		256×192	512色中16色	あり	モード1
グラフィック3		256×192	512色中16色	あり	モード2
グラフィック4		256×212	512色中16色	あり	モード2
グラフィック5		512×212	512色中4色	あり	モード2
グラフィック6		512×212	512色中16色	あり	モード2
グラフィック7		256×212	256色中256色	なし	モード2

*はTMS9918と同機能のモードです。ただしパレットはV9938のみの機能です。

表1.3 V9938画面モード一覧

●バッテリバックアップのCLOCK-IC

MSX 2には電池によりバックアップされているRAMがI/Oポートより接続されており、リセット時のセットアップ情報の保存と、カレンダ機能のために使用されています。セットアップ情報とは、リセット時の画面の色や画面モードなどを指し、これを保存しておくことによって、

起動時にユーザーが望む環境に設定することができます。

CLOCK-IC は MSX の電源とは完全に独立して動いているので、リセット後、新たに時間を設定する必要がなくなりました。

● RAM ディスク機能

64K バイトの RAM を実装している MSX 1 のマシンで BASIC を使用している場合、32K の RAM が使用されるのみで、残り 32K はまったく使われませんでした。MSX 2 では、この眠っている RAM を RAM ディスクとして使用することができます。ディスク・ドライブを持っていない人が BASIC プログラムを一時的にロード、セーブするには、とても便利な機能です。

● ローマ字カナ変換機能

MSX のかなキー配列には、JIS 配列と 50 音配列の 2 種類がありますが、英字入力に慣れ親しんだ人にとってはどちらの配列であっても、かな文字の入力は容易ではないでしょう。このため、MSX 2 ではローマ字によるひらがなとカタカナの入力が可能となっており、マン・マシンインターフェイスが一段とよくなりました。このローマ字かな変換機能は、MSX-DOS、MSX-BASIC どちらのモードでも利用できます。

2 章 MSX2 システム概要

ここでは、MSX2 システムの概要を、ソフトウェア／ハードウェアの両面から簡単に見ていくことにします。なお、概念的理解の妨げにならないように、実際のソフトウェア開発時に必要なような具体的な内容(VRAM マップ、I/O マップ、インターフェイス規格など)は、なるべく巻末の APPENDIX にまとめて掲載することにしました。

2.1 ハードウェア概要

まず、MSX2 の全体のハードウェア構成を理解していただくために、ブロック・ダイヤグラムを図1.3 に示します。

2.1.1 アドレスマップ

●メモリマップ

MSX2 に標準で装備されているメモリは、MAIN-ROM、SUB-ROM、64KRAM の 3 つです。それらのメモリは、物理的にはそれぞれ独立した 64K のアドレス空間にあり図1.4 の(1)のように配置されています(64K の各空間を“スロット”，それを 16K ずつ 4 つに分けた各エリアを“ページ”という)。(2)，(3)はそれぞれ BASIC、MSX-DOS を利用する時のメモリの使われ方です。

では、それぞれのメモリについて(イ)のメモリマップを図1.5 に、(ロ)のメモリマップを図1.6 に、(ハ)のメモリマップを図1.7 に示します。

メモリマップ以外で、仕様が規定されているものに、VRAM マップ、I/O マップがありますが、それらは巻末の APPENDIX にまとめて掲載しています。

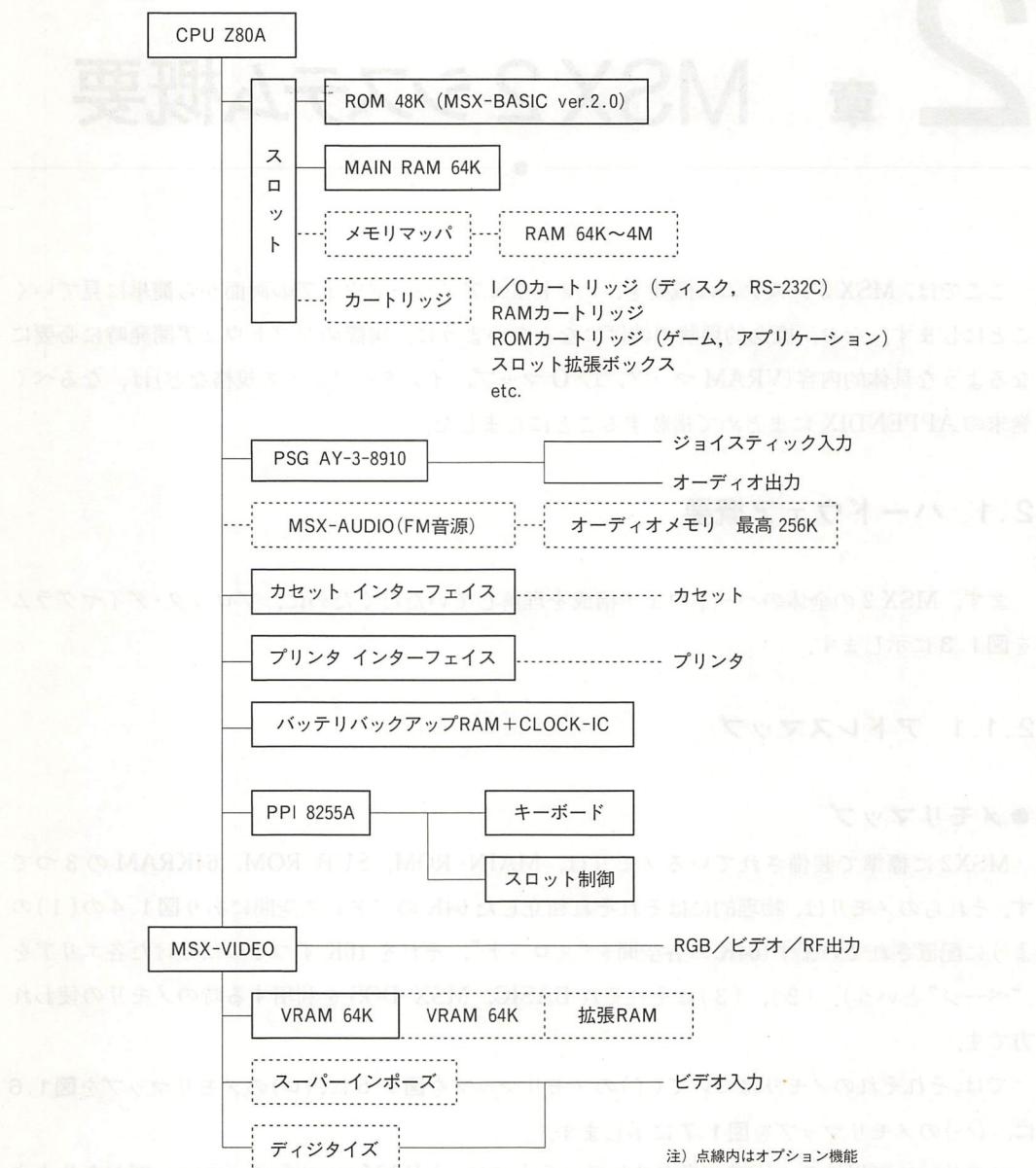
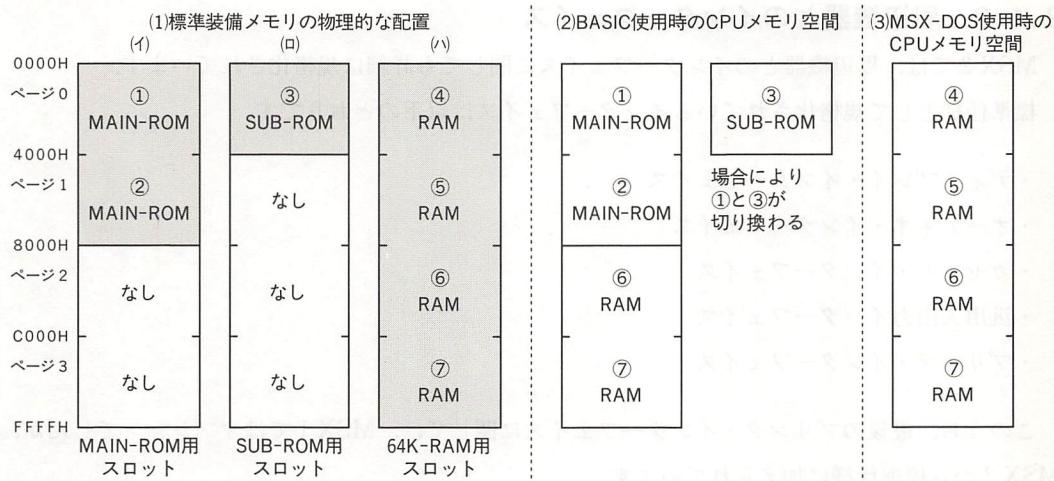


図1.3 MSX2のブロックダイアグラム



注) 64K-RAMの4つのページ (④~⑦) は、実際は同じスロットにあるとは限りません

図1.4 MSX2の標準装備メモリ

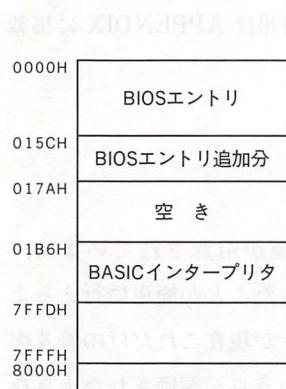


図1.5 MAIN-ROMのメモリマップ

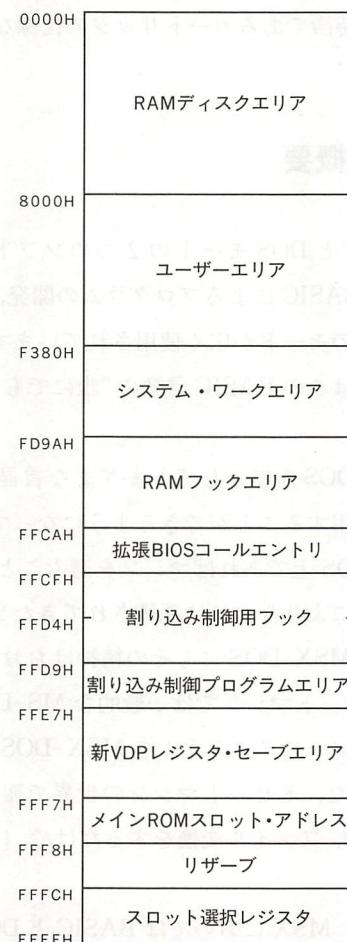


図1.6 SUB-ROMのメモリマップ

図1.7
MAIN-RAMのメモリマップ

2.1.2 周辺機器とのインターフェイス

MSX 2では、周辺機器とのインターフェイスに関する規格化されています。

標準仕様として規格化されているインターフェイスは以下のとおりです。

- ・ディスプレイ・インターフェイス
- ・オーディオ・インターフェイス
- ・カセット・インターフェイス
- ・汎用入出力インターフェイス
- ・プリンタ・インターフェイス

このうち、最後のプリンタ・インターフェイスに関しては、MSX 1ではオプションでしたが、MSX 2から標準仕様に加えられています。

ディスク・ドライブのインターフェイスは、MSX 1と同様オプションになっていますが、MSX 2のメイン RAM が標準で 64K であることを考えると、標準仕様に近い存在といえるでしょう。

その他、MSX の大きな特徴であるカートリッジの仕様など詳細な情報は APPENDIX に掲載しています。

2.2 ソフトウェア概要

MSX には BASIC モードと DOS モードの 2 つのソフトウェア環境が用意されています。BASIC モードでは MSX-BASIC によるプログラムの開発、実行といったことが簡単にできるようになっており、通常はこのモードが広く使用されています。パソコンが現在これだけの普及率を得ているのも、ひとつにはこの BASIC 言語の“誰にでも使える”という点が評価された大きな要因であるといえます。

DOS モードでは MSX-DOS を核としてさまざまな言語、ユーティリティあるいはアプリケーションといったものを使用することができるようになっています。一般に DOS とは、ハードウェアの違いを補い、その DOS 上であればマシンを選ぶことなく同一のプログラムが実行できる場を提供するもので、これにより今までに蓄積してきたソフトウェア資源を有効に利用できることになります。もちろん MSX-DOS にもその精神はおおいに受け継がれています。まず、ディスクのフォーマットが 16 ビットマシンでは一般的な MS-DOS と同一であるため、MS-DOS 上で作成された C 言語などのソースプログラムを MSX-DOS 上でコンパイルし実行するといったことが簡単にできます。また、8 ビットマシンの世界で膨大なアプリケーションの蓄積を持つ CP/M 上のソフトウェアが、ファイル変換をするだけで、ほとんどそのまま実行できることも見逃せません。

そして特筆すべきなのは、MSXにおいては BASIC と DOS が同一のディスクフォーマットを

持ち、資源が共有できるという点でしょう。両者は図1.8に示すように、BIOS(Basic I/O System)を共通の基盤として持つ均一化されたソフトウェア環境の上に成立しています。ディスク操作の基本となる BDOS (Basic Disk Operating System)もまた、この BIOS 上に構築されているのです。MSX では、この共通の BDOS と BIOS を通して、BASIC と DOS に統一されたプログラミング環境を提供しています。

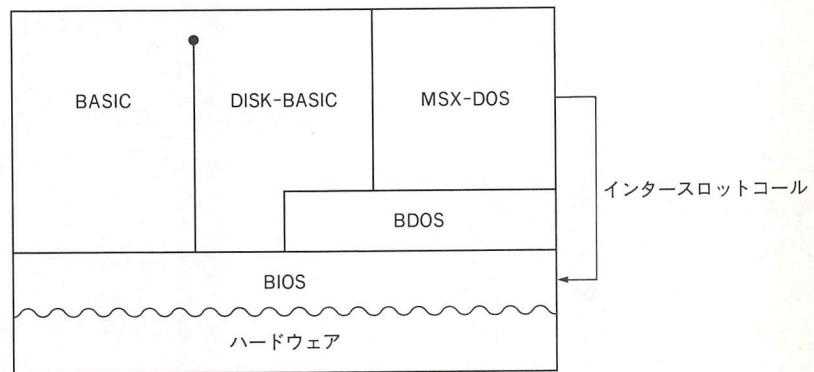


図1.8 MSX1およびMSX2のソフトウェア階層図

第 2 部

BASIC

優れたハードウェア機能を活かすため、MSX 2ではBASICもバージョンアップされました。これがMSX BASIC ver 2.0です。また、ディスクシステムを使用している場合には、このver2.0にさらにディスク操作の命令が追加されたMSX DISK-BASICが利用できます。本章では、この2つのBASICについて説明します。

1 章 命令一覧

まず、BASIC の各命令について、その構文と機能の一覧を示します。それぞれの命令は図2.1 の書式で解説されています。

命令の書式	
命令のタイプ	命令の機能、動作

図2.1 命令一覧表の書式

(a) 命令の構文

キーワードの前に “*” が付いている命令は、ver 1.0 の命令に構文や機能の上で変更があったもの、または ver 2.0 で新しく追加されたものです。

構文の記述には、以下の記法を用いています。

- ・[項目]省略可能であることを示す。
- ・[, 項目 . . .]同様な項目をいくつでも並べてよいことを示す。
- ・{項目 1: 項目 2}どれかひとつの項目を選ぶことを示す。

また、構文の中で使用されている<ファイル名>とは、以下のような形式で、入出力の対象となる I/O 機器やファイルを指定する文字列です。この中で、カセットファイルに対する <filename> は 6 文字以下の任意文字列、ディスクおよび RAM ディスクに対する <filename> は、“<filename> 前部 (8 文字以下) + <拡張子 (3 文字以下)>” の形式の文字列で表されます。<ドライブ> は A～H (上限は接続されているドライブの数により決定) の 1 文字で表されます。

“CAS : <filename> ” カセットファイル

“MEM : <filename> ” RAM ディスク

“CRT : ” テキスト画面

“GRP : ” グラフィック画面

“LPT : ” プリンタ

“<ドライブ> : <filename> ” ディスクファイル

(b) 命令のタイプ

以下の4種類があります。

- ・ファンクション 与えたパラメータにしたがって、なんらかの値を返すもの
- ・システム変数 BASICシステムが持っている変数。一般に代入も可能
- ・ステートメント なんらかの動作を行うもの
- ・コマンド BASICインタープリタ自身に関する指示を与えるもの

(c) 命令の機能または動作

各命令がどのような動作を行うものか簡単に述べます。ver 2.0 で追加または変更された命令については、2章でさらに詳しい説明を行います。

1.1 MSX BASIC ver2.0 の命令

A

文書の命令 (B)	
ABS (<数式>)	ファンクション <数式>の絶対値を返す。
ASC (<文字列>)	ファンクション <文字列>の最初の文字のキャラクタコードを返す。
ATN (<数式>)	ファンクション <数式>の逆正接 (アークタンジェント) を返す。角度の単位はラジアン。
AUTO [<行番号> [, <増分>]]	コマンド 行番号を自動的に発生する。

B

* BASE (<数式>)	システム変数 VRAM 上に割り当てられている画面関係のテーブルアドレスを持つ。
BEEP	ステートメント BEEP 音を音声端子に出力する。
BIN\$(<数式>)	ファンクション <数式>の値を 2進表記の文字列に変換し、その結果を返す。

BLOAD “<ファイル名>” [, R [, <オフセット値>]]

コマンド マシン語プログラムをロードする.

BSAVE “<ファイル名>”, <開始アドレス>, <終了アドレス>

[, <実行開始アドレス>]

コマンド マシン語プログラムをセーブする.

C

CALL <拡張ステートメント名> [(<引数> [, <引数> . . .])]

ステートメント 各種のカートリッジを差し込むことによって追加された拡張ステートメントを呼び出す.

* **CALL MEMINI** [(<RAM ディスクの上限>)]

ステートメント RAM ディスクで使うメモリの上限を指定する.

* **CALL MFILES**

ステートメント RAM ディスクに記録されているファイル名を表示する.

* **CALL MKILL** (“<ファイル名>”)

ステートメント RAM ディスク中のファイルを削除する.

* **CALL MNAME** (“<旧ファイル名>” AS “<新ファイル名>”)

ステートメント RAM ディスク中のファイル名を付け換える.

CDBL (<数式>)

ファンクション <数式> の値を倍精度実数値に変換し、その結果を返す.

CHR\$ (<数式>)

ファンクション <数式> の値のキャラクタコードを持つ文字を返す.

CINT (<数式>)

ファンクション <数式> の値を整数値に変換し、その結果を返す.

* **CIRCLE** { (X, Y) : STEP (X, Y) }, <半径> [, <色> [, <開始角度> [, <終了角度> [, <比率>]]]]

ステートメント (X, Y) を中心とし、<半径>で指定する大きさの円を描く.

CLEAR [<文字列領域の大きさ> [, <メモリの上限>]]

ステートメント 変数の初期化およびメモリ領域の大きさの設定をする.

CLOAD [<ファイル名>]

コマンド カセットからプログラムをロードする.

CLOAD ? [“<ファイル名>”]	コマンド メモリ上のプログラムとカセット上のプログラムを比較する。
CLOSE [[#]<ファイル番号>[, [#]<ファイル番号>・・・]]	コマンド <ファイル番号>に対応するファイルを閉じる。
CLS	ステートメント 画面を消去する。
* COLOR [<前景色> [, <背景色> [, <周辺色>]]]	ステートメント 画面の各部の色を指定する。
* COLOR [=NEW]	ステートメント パレットを初期化する。
* COLOR=(<パレット番号>, <赤の輝度>, <緑の輝度>, <青の輝度>)	ステートメント パレットに色を設定する。
* COLOR=RESTORE	ステートメント カラーパレット保存テーブルの内容をパレット・レジスタに入れる。
* COLOR SPRITE (<スプライト面番号>)=<色>	ステートメント <スプライト面番号>のスプライトを指定した色にする。
* COLOR SPRITE\$(<スプライト面番号>)=<文字式>	ステートメント スプライトの横ラインごとの色を<文字式>で指定する。
CONT	コマンド 停止したプログラムの実行を再開する。
* COPY <ソース> TO <デスティネーション>	ステートメント 画面, 配列, ディスクファイル間で画像データを転送する。
* COPY SCREEN [<モード>]	ステートメント カラーバスのデータを VRAM に書き込む (オプション機能)。
COS(<数式>)	ファンクション <数式>の値に対する余弦 (コサイン) を返す。角度の単位はラジアン。
CSAVE “<ファイル名>” [, <ボーレート>]	コマンド プログラムをカセットにセーブする。

CSNG (<数式>)

ファンクション <数式>の値を単精度実数値に変換し、その結果を返す。

CSRLIN

システム変数 テキスト画面上のカーソルの行位置を持つ。代入はできない。

D**DATA <定数> [, <定数> ···]**

ステートメント READ 命令で読み出すためのデータを用意する。

DEF FN<名前> [(<引数>[, <引数> ···])] = <関数の定義式>

ステートメント ユーザー関数を定義する。

DEFINT <文字の範囲> [, <文字の範囲> ···]

ステートメント 指定された変数を整数型として宣言する。

DEFSNG <文字の範囲> [, <文字の範囲> ···]

ステートメント 指定された変数を単精度実数型として宣言する。

DEFDBL <文字の範囲> [, <文字の範囲> ···]

ステートメント 指定された変数を倍精度実数型として宣言する。

DEFSTR <文字の範囲> [, <文字の範囲> ···]

ステートメント 指定された変数を文字型として宣言する。

DEF USR [<番号>] = <開始アドレス>

ステートメント USR 関数が呼び出すマシン語ルーチンの実行開始アドレスを定義する。

DELETE {[<始点行番号> - <終点行番号>] | <行番号> | - <終点行番号>}

コマンド プログラム中の指定された部分を削除する。

DIM <変数名> (<添字の最大値> [, <添字の最大値> ···])

ステートメント 配列変数を定義し、メモリに割り当てる。

DRAW <文字式>

ステートメント <文字式 (DRAW マクロ)> にしたがって画面に線を描く。

E

END	ステートメント プログラムを終了し、ファイルをすべて閉じ、コマンドレベルに戻る。
EOF (<ファイル番号>)	ファンクション ファイルの終わりに達したかを調べ、終わりなら -1 を返す。
ERASE <配列変数名> [, <配列変数名> ...]	ステートメント 配列変数を削除する。
ERL	システム変数 発生したエラーのエラーコードを持つ。代入はできない。
ERR	システム変数 エラーが発生した行番号を持つ。代入はできない。
ERROR <エラーコード>	ステートメント プログラムをエラー状態にする。
EXP (<数式>)	ファンクション 自然対数の底 e の<数式>乗の値を返す。

F

FIX (<数式>)	ファンクション <数式>の小数点以下を取り去った値を返す。
FOR <変数名> = <初期値> TO <終値> [STEP <増分>]	ステートメント FOR 命令から NEXT 命令までを、指定回数繰り返し実行する。
FRE ({<数式>} <文字式>})	ファンクション 未使用のユーザーエリア、または未使用の文字領域の大きさを返す。

G

* GET DATE <文字変数名> [, A]	ステートメント 日付を文字変数に代入する。
* GET TIME <文字変数名> [, A]	ステートメント 時刻を文字変数に代入する。

GOSUB <行番号>

ステートメント <行番号>にあるサブルーチンを呼び出す。

GOTO <行番号>

ステートメント <行番号>へジャンプする。

H**HEX\$(<数式>)**

ファンクション <数式>の値を16進表記の文字列に変換し、その結果を返す。

IF <条件> THEN {<文> : <行番号>} [ELSE {<文> : <行番号>}]

ステートメント 条件判断を行う。<条件> ≠ 0 ならば真とみなす。

IF <条件> GOTO <行番号> [ELSE {<文> : <行番号>}]

ステートメント 条件判断を行う。<条件> ≠ 0 ならば真とみなす。

INKEY\$

ファンクション キーが押されている場合はその文字を、それ以外は空文字列を返す。

INP(<ポート番号>)

ファンクション <ポート番号>で指定されたポートを読み取り、その結果を返す。

INPUT ["<プロンプト文>" ;] <変数名> [, <変数名> ...]

ステートメント キーボードから入力されたデータを指定の変数に代入する。

INPUT #<ファイル番号>, <変数名> [, <変数名> ...]

ステートメント ファイルからデータを読み込み、指定の変数に代入する。

INPUT\$(<文字数> [, [#]<ファイル番号>])

ファンクション キーボードまたはファイルから、指定された長さの文字列を読み込む。

INSTR([<数式>], <文字式1>, <文字式2>)

ファンクション <文字式1>の左側から<文字式2>を探し始め、見つかればその位置を、そうでなければ0を返す。<数式>は探し始める文字の位置。

INT(<数式>)

ファンクション <数式>以下の最大の整数を返す。

INTERVAL {ON : OFF : STOP}

ステートメント タイマ割り込みを許可, 禁止, 保留する.

K

KEY <キー番号>, <文字列>

コマンド ファンクションキーを再定義する.

KEY LIST

コマンド ファンクションキーの内容を表示する.

KEY (<キー番号>) {ON : OFF : STOP}

ステートメント ファンクションキー割り込みを許可, 禁止, 保留する.

KEY {ON : OFF}

ステートメント ファンクションキーの内容を画面下方に表示するかどうかを指定する.

L

LEFT\$(<文字式>, <数式>)

ファンクション <文字式>の左側から<数式>個分の文字列を取り出す.

LEN(<文字式>)

ファンクション <文字式>の文字数を返す.

[LET] <変数名> = <式>

ステートメント 変数に<式>の値を代入する.

* LINE [{(X1, Y1) : STEP (X1, Y1)}] - {(X2, Y2) : STEP (X2, Y2)} [, <色> [, {B : BF} [, <ロジカルオペレーション>]]]

ステートメント 画面に直線または四角形を描く.

LINE INPUT ["<プロンプト文>"] <文字変数名>

ステートメント キーボードから入力された文字データ1行分すべてを文字型変数に代入する.

LINE INPUT #<ファイル番号>, <文字変数名>

ステートメント 1行単位のデータをファイルから読み込み, 文字変数に代入する.

LIST [[<行番号>] - [<行番号>]]

コマンド メモリ上のプログラムを画面に表示する.

LLIST [[<行番号>]- [<行番号>]]	
コマンド	メモリ上のプログラムをプリンタに出力する。
LOAD "<ファイル名>" [, R]	
コマンド	アスキーセーブしてあるプログラムをロードする。
* LOCATE [<X 座標> [, <Y 座標> [, <カーソルスイッチ>]]]	
ステートメント	テキスト画面でのカーソル位置を指定する。
LOG (<数式>)	
ファンクション	<数式>の自然対数を返す。
LPOS (<数式>)	
システム変数	プリンタのヘッドの位置を持つ。代入はできない。
LPRINT [<式> [{; ; ,} <式> . . .]]	
ステートメント	プリンタに文字や数値を出力する。
LPRINT USING <書式> ; <式> [{; ; ,} <式> . . .]	
ステートメント	<書式>に基づいてプリンタに文字や数値を出力する。

M

MAXFILES=<ファイル数>	
ステートメント	オープン可能なファイルの数を設定する。
MERGE "<ファイル名>"	
コマンド	メモリ上のプログラムとアスキーセーブされた(外部記憶装置の)プログラムを混合する。
MID\$(<文字式>, <数式1> [, <数式2>])	
ファンクション	<文字式>の<数式1>番目から<数式2>個分の文字を取り出す。
MID\$(<文字変数名>, <数式1> [, <数式2>])=<文字式>	
ステートメント	文字変数中の<数式1>番目から<数式2>個分の文字を<文字式>の最初から<数式2>個分の文字と置き換える。
MOTOR [{ON : OFF}]	
ステートメント	カセットのモータを ON/OFF する。

N

NEW

コマンド

メモリ上のプログラムを削除し、変数をクリアする。

NEXT [<変数名> [, <変数名> ···]]

ステートメント FOR 命令の終わりを示す。

O

OCT\$(<数式>)

ファンクション <数式> の値を 8 進表記の文字列に変換し、その結果を返す。

ON ERROR GOTO <行番号>

ステートメント エラー処理ルーチンの開始行を定義する。

ON <数式> GOSUB <行番号> [, <行番号> ···]

ステートメント <数式> の値に応じた<行番号>のサブルーチンを実行する。

ON <数式> GOTO <行番号> [, <行番号> ···]

ステートメント <数式> の値に応じた<行番号>へジャンプする。

ON INTERVAL=<時間> GOSUB <行番号>

ステートメント タイマ割り込みの間隔と、割り込み処理ルーチンの開始行を定義する。

ON KEY GOSUB <行番号> [, <行番号> ···]

ステートメント ファンクションキーによる割り込み処理ルーチンの開始行を定義する。

ON SPRITE GOSUB <行番号>

ステートメント スプライトの重なりによる割り込み処理ルーチンの開始行を定義する。

ON STOP GOSUB <行番号>

ステートメント CTRL+STOP による割り込み処理ルーチンの開始行を定義する。

ON STRIG GOSUB <行番号> [, <行番号> ···]

ステートメント トリガボタンによる割り込み処理ルーチンの開始行を定義する。

OPEN "<ファイル名>" [FOR <モード>] AS #<ファイル番号>

ステートメント ファイルを指定したモードでオープンする。

OUT <ポート番号>, <数式>

ステートメント <ポート番号> で指定された出力ポートにデータを送る。

P

* PAD (<数式>)	
ファンクション	<数式>で指定したタブレット、マウス、ライトペン、トラックボールの状態について調べ、その結果を返す。
* PAINT { (X, Y) : STEP (X, Y) } [, <色> [, <境界色>]]	
ステートメント	指定された<境界色>で囲まれた領域を、<色>で塗りつぶす。
PDL (<パドル番号>)	
ファンクション	指定された番号のパドルの状態を返す。
PEEK (<アドレス>)	
ファンクション	<アドレス>で指定されたメモリ1バイトの内容を返す。
PLAY <文字式1> [, <文字式2> [, <文字式3>]]	
ステートメント	<文字式 (ミュージックマクロ)>にしたがって音楽を演奏する。
PLAY (<ボイスチャンネル>)	
ファンクション	音楽が演奏中かどうか調べ、その結果を返す (演奏中なら-1)。
POINT (X, Y)	
ファンクション	(X, Y) で指定された座標のドットの色を返す。
POKE <アドレス>, <データ>	
ステートメント	<アドレス>で指定されたメモリに<データ>1バイトを書き込む。
POS (<数式>)	
システム変数	テキスト画面でのカーソルの水平位置を持つ。代入はできない。
* PRESET { (X, Y) : STEP (X, Y) } [, <色> [, <ロジカルオペレーション>]]	
ステートメント	グラフィック画面の (X, Y) で指定された座標のドットを消す。
PRINT [<式> [{ ; }, <式>] . . .]]	
ステートメント	画面に文字や数字を表示する。
PRINT USING <書式> ; <式> [{ ; }, <式>] . . .]	
ステートメント	<書式>に基づいて画面に文字や数字を表示する。
PRINT #<ファイル番号>, [<式> [{ ; }, <式>] . . .]]	
ステートメント	<ファイル番号>で指定されたファイルに文字や数字を書き込む。

PRINT #<ファイル番号>, USING <書式>; <式> [{; ; , } <式> . . .]
ステートメント <書式>に基づいて<ファイル番号>で指定されたファイルに文字や数字を書き込む.
* PSET {((X, Y) : STEP (X, Y)) [, <色> [, <ロジカルオペレーション>]]}
ステートメント グラフィック画面の (X, Y) で指定された座標にドットを描く.
* PUT KANJI [(X, Y)], <JIS 漢字コード> [, <色> [, <ロジカルオペレーション> [, <モード>]]]
ステートメント 画面に漢字を表示する (漢字 ROM が必要).
* PUT SPRITE <スプライト面番号> [, {((X, Y) : STEP (X, Y)) [, <色> [, <スプライトパターン番号>]]}]
ステートメント スプライトパターンを表示する.

R

READ <変数名> [, <変数名> . . .]
ステートメント DATA 文のデータを読み込み、変数に代入する.
REM
ステートメント プログラムにコメントを入れる.
RENUM [<新行番号> [, <旧行番号> [, <増分>]]]
コマンド 行番号を付け直す.
RESTORE [<行番号>]
ステートメント READ 命令で読み始める DATA の行番号を指定する.
RESUME {[0] : NEXT : <行番号>}
ステートメント エラー回復処理を終了し、プログラムの実行を再開する.
RETURN [<行番号>]
ステートメント サブルーチンから戻る.
RIGHT\$(<文字式>, <数式>)
ファンクション <文字式> の右側から<数式>個分の文字列を取り出す.
RND [<数式>]
ファンクション 0 以上 1 未満の乱数を返す.
RUN [<行番号>]
コマンド <行番号> からプログラムを実行する.

S

(＜実現＞) SIS

SAVE “<ファイル名>”	
コマンド	プログラムをアスキーセーブする。
* SCREEN <画面モード> [, <スプライトサイズ> [, <キークリックスイッチ> [, <カセットボーレート> [, <プリンタオプション> [, <インターレースモード>]]]]]	ステートメント 画面モード、その他を設定する。
* SET ADJUST (<X座標オフセット>, <Y座標オフセット>)	ステートメント 画面の表示位置を変える。範囲はそれぞれ-7~8.
* SET BEEP <音色>, <音量>	ステートメント BEEP 音を選択する。範囲はそれぞれ1~4.
* SET DATE <文字式> [, A]	ステートメント 日付を設定する。Aはアラームの指定。
* SET PAGE <ディスプレイページ>, <アクティブページ>	ステートメント 表示するページと、データの読み書きを行うページを指定する。
* SET PASSWORD <文字式>	ステートメント パスワードを設定する。
* SET PROMPT <文字式>	ステートメント プロンプトを設定する(6文字まで)。
* SET SCREEN	ステートメント 現在設定されている SCREEN 命令のパラメータを保存する。
* SET TIME <文字式> [, A]	ステートメント 時刻を設定する。Aはアラームの指定。
* SET TITLE <文字式> [, <タイトル色>]	ステートメント リセット時に表示されるタイトル画面のタイトル文字列と色を設定する。
* SET VIDEO [<モード> [, <Ym> [, <CB> [, <同期> [, <音声> [, <ビデオ入力> [, <AV コントロール>]]]]]]]	ステートメント スーパーインポーズその他のモードを設定する(オプション機能)。
SGN (<数式>)	
ファンクション	符号を調べ、その結果を返す(正=1, 零=0, 負=-1).

SIN (<数式>)	ファンクション <数式>の正弦（サイン）を返す。角度の単位はラジアン。
SOUND <レジスタ番号>, <データ>	ステートメント PSG のレジスタに値を書き込む。
SPACE \$(<数式>)	ファンクション <数式>の長さ分の空白を持った文字列を返す。
SPC (<数式>)	ファンクション PRINT 系の命令中で<数式>分の空白を出力する。
SPRITE {ON OFF STOP}	ステートメント スプライトの重なりによる割り込みを許可、禁止、保留する。
SPRITE \$(<スプライトパターン番号>)	システム変数 スプライトパターンを持つ。
SQR (<数式>)	ファンクション <数式>の平方根を返す。
STICK (<ジョイスティック番号>)	ファンクション ジョイスティックの押されている方向を調べ、その結果を返す。
STOP	ステートメント プログラムの実行を停止する。
STOP {ON OFF STOP}	ステートメント CTRL+STOP による割り込みを許可、禁止、保留する。
STRIG (<ジョイスティック番号>)	ファンクション トリガボタンの状態を調べ、その結果を返す。
STRIG (<ジョイスティック番号>) {ON OFF STOP}	ステートメント トリガボタンによる割り込みを許可、禁止、保留する。
STR\$(<数式>)	ファンクション <数式>の値を10進表記の文字列に変換し、その結果を返す。
STRING\$(<数式1>, {<文字式> : <数式2>})	ファンクション <文字式>の先頭文字または<数式2>のコードを持つ文字を<数式1>分の長さの文字列にして返す。

SWAP <変数名>, <変数名>

ステートメント 2つの変数の値を交換する。

T**TAB (<数式>)**

ファンクション PRINT 系の命令中で、指定された桁まで空白を出力する。

TAN (<数式>)

ファンクション <数式>の正接（タンジェント）を返す。角度の単位はラジアン。

TIME

システム変数 インターバルタイマの値を持つ。

TRON

コマンド 実行しているプログラムの行番号を画面に表示し続ける。

TROFF

コマンド TRON をキャンセルし、行番号の表示をやめる。

U**USR [<番号>] (<引数>)**

ファンクション マシン語ルーチンを呼び出す。

V**VAL (<文字式>)**

ファンクション <文字式>を数値に変換し、その結果を返す。

VARPTR (<変数名>)

ファンクション 変数の格納されているアドレスを返す。

VARPTR (#<ファイル番号>)

ファンクション ファイル・コントロールブロックの開始アドレスを返す。

*** VDP (<レジスタ番号>)**

システム変数 VDP のレジスタに対し、データの読み書きをする。

* VPEEK (<アドレス>)

ファンクション VRAM の<アドレス>からデータを読み出す。

* VPOKE <アドレス>, <データ>

ステートメント VRAM の<アドレス>にデータを書き込む。

W

WAIT <ポート番号>, <数式1> [, <数式2>]

ステートメント 入力ポートのデータが指定された値になるまで、実行を中断する。

* WIDTH <桁数>

ステートメント 画面の1行の桁数を指定する。

1.2 MSX DISK-BASIC の命令

B

* BLOAD "<ファイル名>" [{[, R] : [, S]} [, <オフセット>]]

コマンド マシン語プログラムや画面データを、ファイルからロードする。

* BSAVE "<ファイル名>", <開始アドレス>, <終了アドレス> [, {<実行開始アドレス>: S}]

コマンド マシン語プログラムや画面データを、ファイルにセーブする。

C

CLOSE [[#]<ファイル番号> [, [#]<ファイル番号>...]]

ステートメント <ファイル番号>に対応するファイルをクローズする。

CALL FORMAT

コマンド フロッピーディスクをフォーマットする。

CALL SYSTEM

コマンド MSX-DOS に戻る。

COPY “<ファイル名1>” [TO “<ファイル名2>”]
コマンド <ファイル名2>で指定されたファイルに<ファイル名1>の内容をコピーする。
CVD (<8バイト文字列>)
ファンクション 文字列を倍精度実数値に変換し、その結果を返す。
CVI (<2バイト文字列>)
ファンクション 文字列を整数値に変換し、その結果を返す。
CVS (<4バイト文字列>)
ファンクション 文字列を単精度実数値に変換し、その結果を返す。

D

DSKF (<ドライブ番号>)
ファンクション ディスクの残りの容量をクラスタ単位で返す。

E

EOF (<ファイル番号>)
ファンクション ファイルの終わりに達したか否かを調べ、終わりなら-1を返す。

F

FIELD [#]<ファイル番号>, <フィールド幅> AS <文字変数名> [, <フィールド幅> AS <文字変数名>...]
ステートメント ランダム入出力用バッファに、文字変数を割り当てる。
FILES “[<ファイル名>]”
コマンド <ファイル名>に一致したファイルの名前を画面に表示する。

G

GET [#]<ファイル番号> [, <レコード番号>]
ステートメント ランダムファイルから、ランダム入出力用バッファに1レコード読み込む。

第2部 BASIC

INPUT #<ファイル番号>, <変数名> [, <変数名> . . .]

ステートメント ファイルからデータを読み込む。

INPUT\$(<文字数> [, [#]<ファイル番号>])

ファンクション ファイルから、指定された長さの文字列を得る。

K

KILL "<ファイル名>"

コマンド <ファイル名>で指定したファイルを削除する。

L

LFILES ["<ファイル名>"]

コマンド <ファイル名>に一致したファイルの名前をプリンタに出力する。

LINE INPUT #<ファイル番号>, <文字変数名>

ステートメント 1行単位のデータをファイルから文字変数へ読み込む。

LOAD "<ファイル名>" [, R]

コマンド プログラムをメモリ上にロードする。

LOC (<ファイル番号>)

ファンクション ファイル中で最後にアクセスが行われた位置をレコード番号で返す。

LOF (<ファイル番号>)

ファンクション 指定されたファイルの大きさをバイト単位で返す。

LSET <文字変数名>=<文字式>

ステートメント ランダム入出力用バッファに、データを左詰めにして格納する。

M

MAXFILES=<ファイル数>

ステートメント オープン可能な最大のファイル数を宣言する。

MERGE "<ファイル名>"

コマンド メモリ上のプログラムとアスキーセーブされているプログラムを混合する。

MKD\$(<倍精度実数値>)

ファンクション 倍精度実数を内部表現に対応したキャラクタコードに変換する。

MKI\$(<整数値>)

ファンクション 整数を内部表現に対応したキャラクタコードに変換する。

MKS\$(<単精度実数値>)

ファンクション 単精度実数を内部表現に対応したキャラクタコードに変換する。

N**NAME "<ファイル名1>" AS "<ファイル名2>"**

コマンド ファイルの名前を変更する。

O**OPEN "<ファイル名>" [FOR <モード>] AS #<ファイル番号> [LEN=<レコード長>]**

ステートメント ファイルをオープンする。

P**PRINT #<ファイル番号>, [<式> [{; ; ,} <式> . . .]]**

ステートメント シーケンシャルファイルにデータを出力する。

PRINT #<ファイル番号>, USING <書式>; <式> [{; ; ,} <式> . . .]

ステートメント 書式に基づいてシーケンシャルファイルにデータを出力する。

PUT [#]<ファイル番号> [, <レコード番号>]

ステートメント ランダム入出力用バッファ中のデータをランダムファイルに出力する。

R**RSET <文字変数名>=<文字式>**

ステートメント ランダム入出力用バッファに、データを右詰めにして格納する。

RUN "<ファイル名>" [, R]

コマンド ディスクからプログラムをロードし、実行する。

S

SAVE “<ファイル名>” [, A]

コマンド

プログラムをセーブする。Aを指定するとアスキーセーブされる。

V

VARPTR (#<ファイル番号>)

ファンクション ファイル・コントロールブロックの開始アドレスを返す。

2 章 MSX BASIC ver 2.0 の変更点

MSX BASIC ver 2.0 は、MSX BASIC ver 1.0 に比べ大幅に機能が追加、変更されています。それらは、VDP (Video Display Processor) のバージョンアップに伴うものと、RAM ディスク、時計、メモリスイッチなどの諸機能がハードウェア的に追加されたことによるものですが、特に VDP の変更は画面関係のステートメントのほとんどになんらかの影響を与えています。

本章ではそれらのステートメントをピックアップし、追加、変更のあった箇所を示します。なお、文中の“MSX 1”とは MSX BASIC ver 1.0 を、“MSX 2”とは MSX BASIC ver 2.0 を指します。

2.1 スクリーンモードに関する追加、変更

- SCREEN [<画面モード>[, <スプライトサイズ>[, <キークリックスイッチ>[, <カセットポートレート>[, <プリンタオプション>[, <インターレースモード>]]]]]

変更があったのは<画面モード>と<インターレースモード>です。

<画面モード>は、0~8まで指定するようになりました。このうち0~3までは MSX1 と同じで、残りの4~8が新設されたモードです。ひとつの画面モードを指す場合、BASIC では“SCREEN モード”という呼び方をしますが、これは VDP の内部で使用している“画面モード”とは若干の違いがあります。これらの対応と、その意味を表2.1に示します。なお、画面モード2と4の違いはスプライトの表示機能だけです。

<インターレースモード>を指定することで、VDP のインターレース機能の設定ができます（表2.2）。2画面交互表示モードの場合は、“SET PAGE”で指定するディスプレイページが奇数ページでなければなりません。また、その時はディスプレイページとそれよりひとつ番号の小さいページが交互に表示されることになります。

BASICのモード	VDPのモード	意味		
		ドットまたは文字数	同時表示色	スクリーン形式
SCREEN0 : WIDTH40	TEXT1 MODE	40×24文字	512色中 2色	テキスト
SCREEN0 : WIDTH80	TEXT2 MODE	80×24文字	512色中 2色	テキスト
SCREEN1	GRAPHIC1 MODE	32×24文字	512色中 16色	テキスト
SCREEN2	GRAPHIC2 MODE	256×192 ドット	512色中 16色	高解像度グラフィック
SCREEN3	MULTI COLOR MODE	64×48 ドット	512色中 16色	低解像度グラフィック
SCREEN4	GRAPHIC3 MODE	256×192 ドット	512色中 16色	高解像度グラフィック
SCREEN5	GRAPHIC4 MODE	256×212 ドット	512色中 16色	ピットマップグラフィック
SCREEN6	GRAPHIC5 MODE	512×212 ドット	512色中 4色	ピットマップグラフィック
SCREEN7	GRAPHIC6 MODE	512×212 ドット	512色中 16色	ピットマップグラフィック
SCREEN8	GRAPHIC7 MODE	256×212 ドット	256色	ピットマップグラフィック

表2.1 BASIC画面(SCREEN)モードと、VDPの画面モードの対応

インターレースモード	表示機能
0	ノン・インターレース通常表示(省略値)
1	インターレース表示
2	ノン・インターレース, Even／Odd 2画面交互表示
3	インターレース, Even／Odd 2画面交互表示

表2.2 インターレースモードによる表示機能の違い

● SET PAGE <ディスプレイページ>, <アクティブページ>

これは新たに追加されたステートメントで、画面に表示するページと、データを読み書きするページの設定を行うためのものです。これは画面モードが5~8の場合に有効で、指定できる値はVRAMの容量と画面モードによって異なります(表2.3)。

VRAM上でのページの割り振られ方は、APPENDIXのVRAMマップを参照してください。

画面モード	VRAM64K	VRAM128K
SCREEN 5	0~1	0~3
SCREEN 6	0~1	0~3
SCREEN 7	使用不可	0~1
SCREEN 8	使用不可	0~1

表2.3 画面モードとVRAM容量によるページ指定値の範囲

● WIDTH <桁数>

画面モードが0の場合、<桁数>は80まで指定することが可能になりました。

2.2 カラーの指定に関する追加、変更

● COLOR [<前景色>[, <背景色>[, <周辺色>]]]

MSX 2 では、カラーパレット機能が使えるようになったために、画面モードによって色を指定する数値の範囲や意味が異なってきます（表2.4）。なお、<背景色>はテキスト画面以外ではCLS文実行時に変わります。

画面モード6における<周辺色>は特殊な意味を持ちます。図2.2は画面モード6の時の<周辺色>のビットごとの意味です。このモードではフラグ（ビット4）の操作により、X座標の奇数番の縦ラインと偶数番の縦ラインの色を別々に指定することができます。

フラグが0（周辺色値が0～15）の時は別々の色を指定することはできず、奇数番縦ラインの色で周辺色が設定されます。フラグが1（周辺色値が16～31）の時は偶数番縦ラインと奇数番縦ラインの色で周辺色が設定され、その2つの色が異なっていた場合は画面は縦じま模様になります。

7	6	5	4	3	2	1	0
未使用	フラグ	偶数ラインの色	奇数ラインの色				

図2.2 画面モード6のときの周辺色のビットごとの意味

● COLOR=(<パレット番号>, <赤の輝度>, <緑の輝度>, <青の輝度>)

指定したパレットに色を設定します。<パレット番号>の指定は、表2.4を参照してください。ただし、画面モード8の場合はパレット機能がないので何も起こりません（エラーにもならない）。なお、パレット番号の0番は、通常は透明色（周辺が透けて見える）に固定されていますが、VDPのレジスタを変更することにより、他のパレットと同様に扱えるようになります。

VDP(9)=VDP(9) OR &H20 同様に扱う時

VDP(9)=VDP(9) AND &HDF 透明色に固定したい時

画面モード	色指定	番号の範囲
SCREEN 0	パレット番号	0～15
SCREEN 1	パレット番号	0～15
SCREEN 2	パレット番号	0～15
SCREEN 3	パレット番号	0～15
SCREEN 4	パレット番号	0～15
SCREEN 5	パレット番号	0～15
SCREEN 6	パレット番号	0～3
SCREEN 7	パレット番号	0～15
SCREEN 8	色番号	0～255

表2.4 画面モードごとの色指定

各色の輝度は0~7までの8段階指定することができ、その組み合わせにより8(赤)×8(緑)×8(青)=512色を表現することができます。

● COLOR=RESTORE

カラーパレット保存テーブル(APPENDIX VRAMマップ参照)の内容のとおりに、カラーパレット・レジスタを再設定します。たとえば通常とは異ったカラーパレットの設定で描いた画像データをBSAVEした場合、それをBLOADしただけではカラーパレットは変わらないので、はじめの画像は再現できません。そのような場合は、カラーパレット保存テーブルを含めて画像をBSAVEしておきます。そのデータをBLOADした後に、COLOR=RESTORE命令でパレットを再設定することにより、はじめの画像と同じ色を得ることができます。

● COLOR [=NEW]

カラーパレットを、電源投入時と同じ状態に初期化します(表2.5)。プログラムの最初と最後に入れておくとよいでしょう。

パレット番号	色	赤の輝度	青の輝度	緑の輝度
0	透明	0	0	0
1	黒	0	0	0
2	緑	1	1	6
3	明るい緑	3	3	7
4	暗い青	1	7	1
5	明るい青	2	7	3
6	暗い赤	5	1	1
7	シアン	2	7	6
8	赤	7	1	1
9	明るい赤	7	3	3
10	暗い黄	6	1	6
11	明るい黄	6	3	6
12	暗い緑	1	1	4
13	マゼンタ	6	5	2
14	灰	5	5	5
15	白	7	7	7

表2.5 カラーパレットの初期化色とパレット設定値

透明	黒	白
明るい緑	明るい青	明るい赤
シアン	暗い青	暗い赤

2.3 文字の表示に関する追加、変更

- LOCATE [<X 座標> [, <Y 座標> [, <カーソルスイッチ>]]]

テキスト画面上で文字を表示する位置を指定する命令です。

画面モード 0 に 80 衔表示機能が追加されたため、この機能の使用時には、X 座標は最大 79 まで指定可能となりました。

2.4 グラフィックスの表示に関する追加、変更

- LINE [{(X1, Y1) | STEP (X1, Y1)}] – {(X2, Y2) | STEP (X2, Y2)} [, <色>[, {B | BF} [, <ロジカルオペレーション>]]]

- PSET {(X, Y) | STEP (X, Y)} [, <色>[, <ロジカルオペレーション>]]

- PRESET {(X, Y) | STEP (X, Y)} [, <色>[, <ロジカルオペレーション>]]

これらは、画面モードに応じて指定できる座標の範囲が異なります（表 2.6）。

画面モード	X座標	Y座標
SCREEN 2	0～255	0～191
SCREEN 3	0～255	0～191
SCREEN 4	0～255	0～191
SCREEN 5	0～255	0～211
SCREEN 6	0～511	0～211
SCREEN 7	0～511	0～211
SCREEN 8	0～255	0～211

表2.6 画面モードによる座標の指定範囲

新たにロジカルオペレーションの機能が追加されました。<ロジカルオペレーション>を指定すると、指定した<色>ともとの色の間で論理演算が行われ、実際にはその結果の色で描かれます。ロジカルオペレーションの種類は表 2.7 のとおりです。なお<色>の指定は、画面モード 8 を除いてパレット番号で行います。

ロジカルオペレーション	機能
PSET(省略値), TPSET	“指定色”で描く
PRESET , TPRESET	“NOT(指定色)”で描く
XOR , TXOR	“(背景色)XOR(指定色)”で描く
OR , TOR	“(背景色)OR(指定色)”で描く
AND , TAND	“(背景色)AND(指定色)”で描く

注)<色>を(指定色)とする
描かれる所のもの色を(背景色)とする
頭に“T”がついたロジカルオペレーションを指定す
ると<色>が透明色(COLOR 0)の場合、何も行わ
れない

表2.7 ロジカルオペレーション

- CIRCLE {(X, Y) | STEP (X, Y)}, <半径>[, <色>[, <開始角度>[, <終了角度> [, <比率>]]]]

画面モードに応じて、指定できる座標の範囲が異なってきます（2.6参照）。<色>の指定は、画面モード8を除いてパレット番号で行います。

- PAINT {(X, Y) | STEP (X, Y)} [, <色> [, <境界色>]]

画面モードに応じて、指定できる座標の範囲が異なってきます（表2.6参照）。<色>の指定は、画面モード8を除いてパレット番号で行います。画面モード2と4では<境界色>の指定は無効となります。

- PUT KANJI [(X, Y)], <漢字コード>[, <色>[, <ロジカルオペレーション> [, <モード>]]]

漢字を表示します。<漢字コード>は、JIS漢字コードで指定してください。<漢字コード>に指定できる値の有効範囲は&H2121～&H4F53で、厳密には上位バイトが&H21～&H27, &H30～&H4Fで、下位バイトが&H21～&H7Eの値となります。<ロジカルオペレーション>については表2.7を参照してください。<モード>は、表2.8のような意味を持ちます。なお、この命令は画面モード5～8で有効です。

モード	機能
0	16×16ドットで普通に表示する（省略値）
1	偶数番目の線だけを、縦8ドットで表示する
2	奇数番目の線だけを、縦8ドットで表示する

表2.8 PUT KANJIの<モード>

2.5 VDPのアクセスに関する追加、変更

- BASE (<式>)

VRAMに割り振られている、各テーブルの先頭アドレスを返します。<式>と各画面モードのテーブルは、表2.9のように対応しています。

テーブル先頭アドレスの読み出しへすべての<式>に対して可能ですが、書き込みは<式>が0～19（画面モード0～3まで）の時しかできません。

画面モードの2のテーブルアドレスを変更すると、同時に画面モード4のテーブルも変わるので注意してください。

画面モード5～8の場合の返されるアドレスは、アクティブページの先頭アドレスからのオフセット値です。

式	画面モード	テーブル
0	0	パターンネーム・テーブル
1	0	――
2	0	パターンジェネレータ・テーブル
3	0	――
4	0	――
5	1	パターンネーム・テーブル
6	1	カラー・テーブル
7	1	パターンジェネレータ・テーブル
8	1	スプライトアトリビュート・テーブル
9	1	スプライトジェネレータ・テーブル
10	2	パターンネーム・テーブル
11	2	カラー・テーブル
12	2	パターンジェネレータ・テーブル
⋮	⋮	⋮
43	8	スプライトアトリビュート・テーブル
44	8	スプライトジェネレータ・テーブル

表2.9 BASEの設定値とVRAMテーブルの対応

● VDP (<n>)

VDP レジスタの値の読み出しと書き込みを行います。<n>の部分は、実際の VDP のレジスタの番号とは若干のズレがあります。<n>と実際の VDP のレジスタの対応を表2.10に示します。

n	VDPレジスタ番号	アクセスモード
0 ~ 7	0 ~ 7 (MSX1と同じ)	リード/ライト
8	ステータスレジスタ 0	リードのみ
9 ~ 24	8 ~ 23	リード/ライト
33 ~ 47	32 ~ 46	ライトのみ
-1 ~ -9	ステータスレジスタ 1 ~ 9	リードのみ

表2.10 VDPレジスタとの対応

● VPEEK (<アドレス>)

● VPOKE <アドレス>, <データ>

画面モードが5~8の時は、アクティブページの先頭アドレスからのオフセット値を<アドレス>に設定します。<アドレス>に入る値の有効範囲は0~65535で、<データ>に入る値の有効範囲は0~255です。

2.6 画像データの保存に関する追加、変更

- BSAVE <ファイル名>, <開始アドレス>, <終了アドレス>, S
- BLOAD <ファイル名>, S

DISK BASIC のステートメントで、VRAM の内容をディスクファイルにセーブ／ロードする時に使用します。どの画面モードでも有効ですが、画面モード 5～8 の時はアクティブページが対象になります。なお、カセットテープに対しては使用できません。<アドレス>に入る値の有効範囲は -32768～-2,0～65534 (&HFFE) です。

- COPY (X1, Y1)–(X2, Y2) [, <ソースページ>] TO (X3, Y3) [, <デスティネーションページ>[, <ロジカルオペレーション>]]
- COPY (X1, Y1)–(X2, Y2) [, <ソースページ>] TO {<配列変数名> | <ファイル名>}
- COPY {<配列変数名> | <ファイル名>} [, <向き>] TO (X3, Y3) [, <デスティネーションページ>[, <ロジカルオペレーション>]]
- COPY <ファイル名> TO <配列変数名>
- COPY <配列変数名> TO <ファイル名>

COPY 命令は画像データ転送用のステートメントで、画面モード 5～8 の時有効です。対象となるのは VRAM、配列変数、ディスクファイルのいずれかで、それらの間を自由にデータ転送することができます。

(X1, Y1)–(X2, Y2) は、この 2 つの座標を対角線とする四角い領域を転送することを示します。<ソースページ>は転送元の、<デスティネーションページ>は転送先のページを表し、省略するとアクティブページが指定されます。<向き>は、画像データを画面に書き込む際の向きを表し、0～3 の範囲で指定します（図 2.3）。

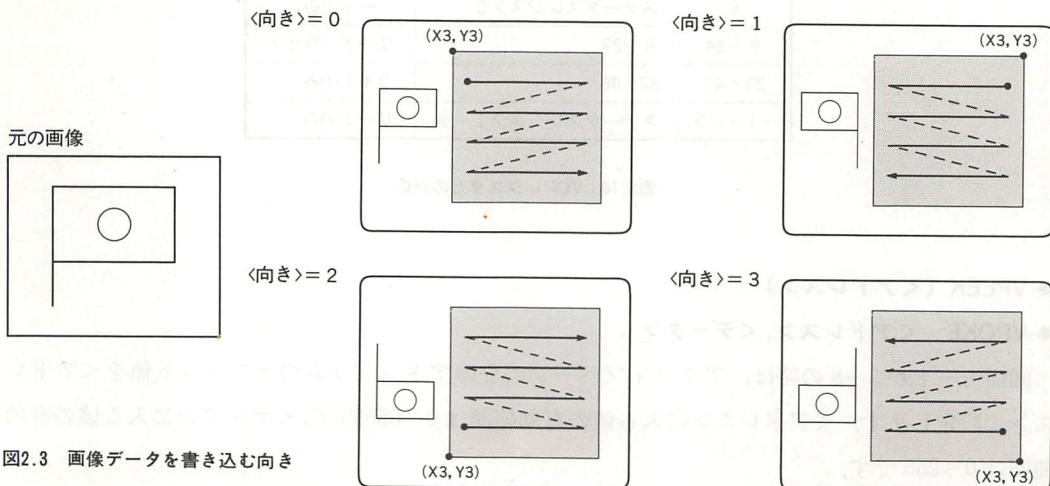


図2.3 画像データを書き込む向き

<配列変数>は、整数型、単精度実数型、倍精度実数型のいずれかの配列変数で、あらかじめ画像データを取り込める大きさの領域を確保しておかなければなりません。大きさは、式1で算出することができます。<ピクセルサイズ>は、画面の1ドットを表すために使うビット数で、画面モード5と7の場合は4、画面モード6の場合は2、画面モード8の場合は8が入ります。また、画像データは図2.4のフォーマットで記憶されます。

式1

$$\text{INT}((<\text{ピクセルサイズ}> * (\text{ABS}(X2-X1)+1) * (\text{ABS}(Y2-Y1)+1)+7)/8)+4 \text{ バイト}$$

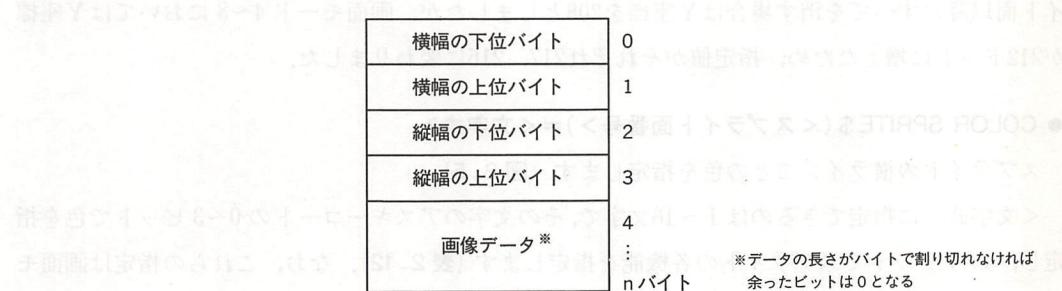


図2.4 画像データのフォーマット

<ロジカルオペレーション>は、転送する先にあるデータと転送するデータの論理演算を指定します。指定するパラメータは表2.7を参照してください。なお頭に“T”をつけた場合は、転送元の透明色の部分は転送されません。

2.7 スプライトに関する追加、変更

MSX 2の画面モード4~8で使用するスプライトは、スプライトモード2と呼ばれ、MSX 1のものと比べかなりの機能アップがされています。たとえばMSX 1では1枚のスプライトで扱うことができるのは1色だけでしたが、MSX 2のこのモードでは横の各ラインに個別の色が指定でき、それにより多色のキャラクタを1枚のスプライトで実現できるようになりました。さらに、ドットごとに色をつけたい場合などは、2枚以上のスプライトを組み合わせて1枚のスプライトのように使用することもできるので、それらを併用するとよいでしょう。また、MSX 1では5個以上のスプライトが横ライン上に並んだ場合5個目以降のスプライトは表示されませんでしたが、MSX 2では8個まで表示可能になり、より自由度の高いものとなっています。

スプライトに指定できる色は画面モード8を除いて表2.4(COLOR文)と同じですが、画面モード8のスプライトはパレットが使えないため指定は色番号となり、使用できる色は表2.11に示す16色のみとなります。

0 : 黒	1 : 暗い青	2 : 暗い赤	3 : 暗い紫	4 : 暗い緑	5 : 暗い水色	6 : 暗い黄色	7 : 灰色
8 : 肌色	9 : 青	10 : 赤	11 : 紫	12 : 緑	13 : 水色	14 : 黄	15 : 白

表2.11 画面モード8におけるスプライト指定色

● PUT SPRITE <スプライト面番号> [, [STEP] (X, Y) [, <色>[, <スプライトパターン番号>]]]

画面モード1~3では指定したスプライト面の表示を消す場合はY座標を209、指定したスプライト面以降のすべてを消す場合はY座標を208としましたが、画面モード4~8においてはY座標が212ドットに増えたため、指定値がそれぞれ217, 216に変わりました。

● COLOR SPRITE\$(<スプライト面番号>) = <文字式>

スプライトの横ラインごとの色を指定します（図2.5）。

<文字式>に指定できるのは1~16文字で、その文字のアスキーコードの0~3ビットで色を指定し、4~7ビットでスプライトの各機能を指定します（表2.12）。なお、これらの指定は画面モード4~8の場合にのみ有効です。

COLOR SPRITE\$=CHR\$(1ライン目の色)+CHR\$(2ライン目の色)……+CHR\$(8ライン目の色)

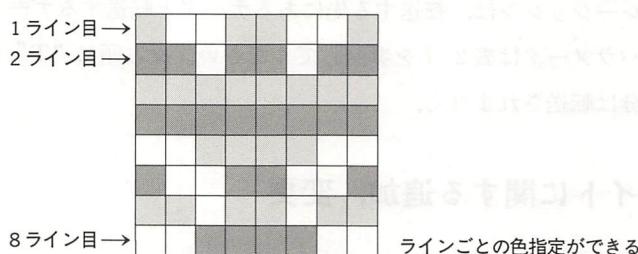


図2.5 スプライトと<文字式>の関係

b7	1ならば、スプライトを32ドット左にずらす
b6	1ならば、連続したスプライト面のスプライトを同時に動かす。このときスプライトの優先順位と衝突は無視され、スプライトが重なった場合それらの色番号をORした色で表示される*
b5	1ならば、スプライトの衝突を無視する
b4	未使用
b0~b3	パレット番号

* たとえばスプライト面1のビット6を'0'、スプライト面2のビット6を'1'としておくと、スプライト面1を動かすだけでスプライト面2が同じ位置に重なって表示される。

表2.12 文字式のビットごとの意味

● COLOR SPRITE (<スプライト面番号>)=<数式>

指定された面のスプライト全体を<数式>の色にします。さきほどの COLOR SPRITE \$は色指定を<文字式>で行いますが、これは<数式>で行うところが違います。色指定の形式は表 2.12と同じですが、b7 の指定はできません。なお、これらは画面モード 4~8 の時に有効です。

2.8 オプション機能に関する追加

● SET VIDEO<モード>[, <Ym> [, <CB>[, <同期>[, <音声>[, <ビデオ入力> [, <AV コントロール>]]]]]

このステートメントは、オプションであるスーパーインポーズやディジタイザに対するステートメントであり、それらの機能を装備している機種に対してのみ使用できます。

<モード>はスーパーインポーズのモード設定をするもので、表 2.13 に示す値が指定できます。

<Ym>が 1 の時、テレビの輝度が半分になります。

<CB>が 1 の時、VDP のカラーバスが入力状態になり、0 の時は、出力状態になります。

<同期>が 1 の時「外部同期」が、0 の時「内部同期」が選択されます。

<音声>は、外部信号を混合して出力するかどうかの指定で、表 2.14 の値が入ります。

<ビデオ入力>は、外部映像信号の入力を切り換え、0 なら RGB マルチコネクタが、1 なら外部映像信号入力コネクタが選択されます。

<AV コントロール>は、RGB マルチコネクタの AV コントロール端子の出力を指定するためのもので、0 なら OFF に、1 なら ON になります。

モード	S1	S0	TP	表示画面
0	0	0	0	コンピュータ
1	0	1	1	コンピュータ
2	0	1	0	スーパーインポーズ
3	1	0	0	テレビ

表2.13 SET VIDEOの<モード>の入力値

(注) モード 0 の場合は、外部同期をかけることはできません。その他のモードでは、VDP のコンポジット出力は使えません。
S1, S0, TP は VDP のレジスタ内のフラグの名称です。

音声	機能
0	外部音声信号を混合しない
1	右チャンネルの外部音声信号を混合する
2	左チャンネルの外部音声信号を混合する
3	両チャンネルの外部音声信号を混合する

表2.14 SET VIDEOの<音声>の入力値

● COPY SCREEN [<モード>]

ディジタイズなどを行い、カラーバスのデータを VRAM に書き込む時に使用します。これは画面モード 5~8 のみ有効です。

<モード>が 0 の時は、1 フィールドの信号をディジタイズしてディスプレイページに書き込み、<モード>が 1 の時は、連続する 2 フィールド（つまり 1 フレーム）の信号を（ディスプレイページ - 1）番のページとディスプレイページに書き込みます。ですからモードが 1 の場合は、ディスプレイページが奇数番のページになっている必要があります。なお、省略した場合は、モードが 0 となります。

2.9 時計機能に関する追加

● GET DATE <文字変数名>[, A]

時計から日付を読み、文字変数に代入するための命令です。読み込まれる日付の形式は次のようにになっています。

YY/MM/DD (YY=西暦の下 2 ケタ, MM=月, DD=日)

例) 85/03/23 (1985 年 3 月 23 日)

なお、オプションの A を指定するとアラームの日付が読み込まれます。

● SET DATE <文字式>[, A]

時計に日付を設定します。パラメータとオプションの形式は “GET DATE” と同じです。

例) SET DATE "85/03/23"

● GET TIME <文字変数名> [, A]

時計から時刻を読み、文字変数に代入するためのステートメントです。読み込まれる時刻の形式は次のようにになっています。

HH : MM : SS (HH=時, MM=分, SS=秒)

例) 22 : 15 : 00 (22 時 15 分 0 秒)

なおオプションの A を指定するとアラームの時刻が読み込まれます。

● SET TIME <文字式> [, A]

時計に時刻を設定します。パラメータとオプションの形式は “GET TIME” と同じです。

例) SET TIME "22 : 15 : 00"

※アラームについて

アラーム機能はオプションなので、指定した時刻に何が起こるかは機種によって異なります(普通はなにも起きない)。

“SET DATE”と“SET TIME”的両方のアラーム設定を行う場合は、かららず“SET TIME”から行います (“SET TIME”を実行すると，“SET DATE”で設定したアラームの日付が、消えてしまう)。

なお、アラームが設定できるのは、分単位です(秒を設定しても無視される)。

2.10 メモリスイッチ機能に関する追加

“SET”命令により、CLOCK-IC内のバッテリバックアップRAMに、以下に挙げるいろいろな設定を記憶させておくことができます。それによってシステム起動時(電源投入時やリセット時)にそれらにしたがった設定が自動的に行われます。なお、“SET TITLE”と“SET PROMPT”, “SET PASSWORD”は同一RAMを使用するため、最後に実行された命令による設定のみが有効になります。

● SET ADJUST(<X 座標オフセット>, <Y 座標オフセット>)

画面の表示位置を設定します。座標オフセットの設定値は、-7～8です。

● SET BEEP <音色>, <音量>

BEEP音を設定します。<音色><音量>の設定値は、ともに1～4です。
<音色>と実際の音の対応を、表2.15に示します。

音色	音
1	ピー(MSX1と同じ)
2	ぼお
3	ぴいんぱおん
4	ぱぴぶっ

表2.15 SET BEEPの<音色>の入力値

● SET TITLE <タイトル>[, <色>]

システム起動時の初期画面に表示されるタイトルと、その時の画面の色を指定します。<タイトル>には、6文字以内の文字列を設定し、<色>には表2.16に示す数値が入ります。<タイトル>がちょうど6文字の場合に限り、タイトル画面を表示したところでキー入力待ちとなります。

〈色〉	1	2	3	4
画面色	青	緑	赤	オレンジ

表2.16 SET TITLEで指定できる色

● SET PROMPT <プロンプト>

プロンプトを設定します。<プロンプト>には6文字以内の文字列を設定します。

● SET PASSWORD <パスワード>

システムのパスワードを設定します。<パスワード>は255文字以内の文字式で、このステートメントを実行した後システムが起動されるとパスワードの入力要求待ちになります。正しいパスワードが入力された場合は通常どおり起動し、それ以外は再び入力待ちとなります。なお、グラフィックキーとストップキーの両方を押しながらシステム起動すると、パスワードの要求は行われません（ただし、キーカートリッジでパスワードの設定をした場合はかならずパスワード入力をしなければ起動しない）。なお、SET TITLEで空文字を指定することにより、パスワードは解除されます。

● SET SCREEN

現在設定されている“SCREEN”文のパラメータを記録します。システム起動時には、それにしたがって自動的に設定がされます。記録される項目は以下のとおりです。

- | | |
|------------------|-------------|
| テキストモードのスクリーン番号, | キークリックスイッチ, |
| テキストモードの表示幅, | プリンタオプション, |
| 前景色, 背景色, 周辺色, | カセットボーレート, |
| ファンクションキースイッチ, | ディスプレイモード |

2.11 RAMディスク機能に関する追加

MSX 1では、0000H～7FFFHまでのRAMはDOSでしか使われませんでしたが、MSX 2ではこの部分を最高32KバイトのRAMディスクとして使用できるようになりました。RAMディスクに対するファイル名の形式は以下になっており、<ファイル名前部>には1～8文字、<拡張子>には1～3文字の長さの文字列が入ります（ただし、“:”（コロン），“.”（ピリオド）およびキャラクタコードの00H～1FHのコントロールキャラクタと2バイトのグラフィック記号は使用できない）。

MEM : <ファイル名前部>[.<拡張子>]

RAM ディスクで実行可能な操作と、それに関係するステートメントは以下のとおりです。

1. BASICプログラムのロード／セーブ（かならずアスキーセーブされる）

SAVE, LOAD, RUN, MERGE

2. シーケンシャルファイルのリード／ライト

OPEN, CLOSE

PRINT #, PRINT USING #

INPUT #, LINE INPUT #, INPUT\$

EOF, LOC, LOF

なお、RAM ディスクでは以下の命令をサポートしていません。

1. ランダムファイルのリード／ライト

BLOAD, BSAVE

COPY

● CALL MEMINI [(<サイズ>)]

RAM ディスクとして使用するメモリを指定し、RAM ディスクの初期化、全ファイルの消去を行います。RAM ディスクを使用する場合は、かならずこのステートメントを実行しておかなければなりません。

<サイズ>には、“RAM ディスクで使用するメモリ容量-1”が入り、これには1023～32767の値の指定ができます(ただしワークエリアとして768 バイト分のRAM を使用)。<サイズ>を省略すると、最高値である32768バイトがRAM ディスクに割り振られます。また“CALL MEMINI (0)”を実行することにより、RAM ディスク機能が解除されます。

● CALL MFILES

RAM ディスク内のファイル名を表示します。

● CALL MKILL (“<ファイル名>”)

指定されたファイルを削除します。

● CALL MNAME (“<旧ファイル名>” AS “<新ファイル名>”)

ファイル名を変更します。

2.12 その他の追加機能

● PAD (<数式>)

タッチパッド（タッチパネル）、ライトペン、マウス、トラックボールの状態を返す関数です。<数式>が0~7の場合は、MSX1と同様タッチパッドの状態を返し、8~11の場合は、ライトペンの状態を返します。なお、“PAD(8)”を実行した時に座標とスイッチの値を読み込むようになっているので、PAD(8)の値が-1であることを確認し、他のデータを読むようにしてください（表2.17）。

式	意味
8	ライトペンのデータが有効であれば-1、無効ならば0を返す
9	ライトペンのX座標を返す
10	ライトペンのY座標を返す
11	ライトペンのスイッチが押されていれば-1、いなければ0を返す

表2.17 ライトペンの状態を返す式

<数式>が12~15の場合はポート1に、16~19の場合はポート2に接続されたマウスまたはトラックボールの状態を返します（表2.18）。マウスとトラックボールの区別は、自動的に行われます。

式	意味
12, 16	-1を返す、入力要求に使用する
13, 17	X座標を返す
14, 18	Y座標を返す
15, 19	0を返す（未使用）

表2.18 マウスまたはトラックボールの状態を返す式

座標データは、PAD(12)またはPAD(16)が評価された時に読み込まれます。座標データを得る際には、あらかじめこれらを評価してから行ってください。トリガボタンの状態の入力は、ジョイスティックと同様にSTRIG関数を使用します。

3 章 BASICの内部構造

BASIC をより高度に利用するためには、BASIC インタプリタがどのようにプログラムを管理し実行しているか、ということに関する知識が不可欠なものとなります。ここでは、そのような BASIC の内部構造について説明します。

3.1 ユーザーエリア

ユーザーエリアの下限アドレスは、MSX1 では RAM 容量が 8K, 16K, 32K, 64K いろいろであったため個々に異なっていましたが MSX2 の場合 RAM 容量は最低でも 64K なので、ユーザーエリアの下限アドレスはつねに 8000H 番地となります。なお、これは BOTTOM (FC48H) の内容から知ることができます。

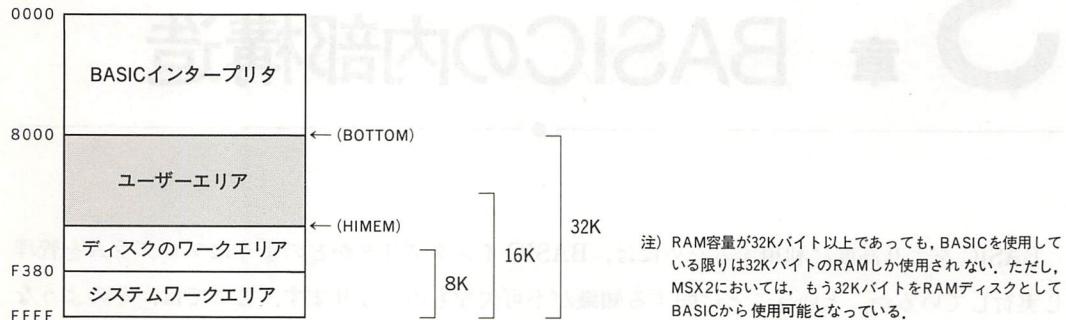
ユーザーエリアの上限アドレスは、ディスクが実装されていない場合 F380H 番地ですが、ディスクが実装されている場合 (DISK-BASIC 使用時) はドライブ数やディスク容量などにより変わってきます。これはリセット後 CLEAR 文を実行する前の HIMEM (FC4AH) の内容から知ることができます。主なディスク装置を実装した時のユーザーエリアの上限アドレスを表2.19 に示します (この値は編集部独自の調査によるもので、同じ型番の製品でも値が異なる可能性あり)。

ディスクドライブ名	メディア	ドライブ数	ユーザーエリアの上限
ディスクなしの状態	—	—	&HF380
ソニー(HB-701FD)	1DD	1	&HE68C
		2	&HE276
ソニー(HBD-30W)	2DD	1	&HE48D
		2	&HDE77
東芝(HX-F100)	1DD	1	&HE68E
		2	&HE278
ピクター(HC-F303)	1DD	1	&HE68F
		2	&HE279
ヤマハ(FD-05)	2DD	1	&HE48D
		2	&HDE77
松下(CF-3300)	2DD	1	&HE48D
		2	&HDE77

表2.19 主なディスク装置によるユーザーエリアの違い

注) ドライブ数の "1" のものは、1 ドライブ実装の時「CTRLキー」を押しながらリセットした場合。

MSX を起動した時のメモリの状態を図 2.6 に示します。



なお、MSX 2 でプログラムを作る場合、ユーザー領域の上限アドレスとしては一番低い「2DD 2 ドライブ」のディスク装置の実装を念頭において、8000H 番地～DE3FH 番地に作成するよう推奨されています。しかし、ディスクのワークエリアがさらに大きくなる可能性もあるので、アプリケーションプログラムはかならず HIMEM の内容を確かめ、最悪の場合でも暴走しないように対処してください。対処の方法としては、次のようなものが考えられます。

1. ワークエリアをリロケータブルにする
2. ワークエリアを BOTTOM から確保する
3. ドライブの数を減らすように指示して停止する

MSX はディスクが実装されている場合も SHIFT キーを押しながらセットすることにより、ディスクを切り離すことができます。また、ディスクが 1 ドライブだけ実装されている時に普通に起動すると、MSX は 2 ドライブ分のディスクのワークエリアをとってしまうので(主に 2 ドライブのシミュレータに使用される)、このような時は CTRL キーを押しながらセットすることにより、1 ドライブ分のワークエリアのみ確保して起動させることができます。これらを行うことによって、少しあはユーザー領域を増やすことができます。

3.2 ユーザー領域の詳細

BASIC 使用時にユーザー領域がどのように使われているかを図 2.7 に、それらのエリアがどこから始まっているかの情報を持つワークエリアを表 2.20 に示します。なお、このワークエリアは読み出し専用となっているため(イニシャライズルーチンがリセット時に設定する)、書き換えた場合の動作に関しては保証されません。

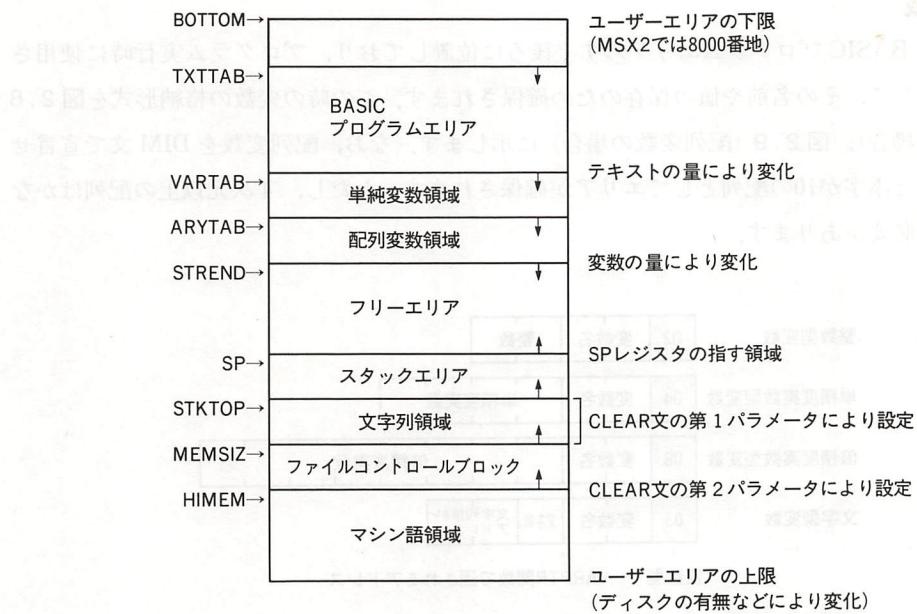


図2.7 ユーザーエリアの状態

エリア名	開始アドレス	終了アドレス
ユーザーエリア	[BOTTOM (FC48H)]	リセット時の [HIMEM (FC4AH)] - 1
プログラムエリア	[TXTTAB (F676H)]	[VARTAB (F6C2H)] - 1
単純変数エリア	[VARTAB (F6C2H)]	[ARYTAB (F6C4H)] - 1
配列変数エリア	[ARYTAB (F6C4H)]	[STREND (F6C6H)] - 1
フリーエリア	[STREND (F6C6H)]	[SPレジスタ] - 1
文字列領域 (文字列領域の空エリアの先頭)	[STKTOP (F674H)] [FRETOP (F69BH)]	[MEMSIZ (F672H)] - 1
ファイルコントロールブロック	[MEMSIZ (F672H)]	[HIMEM (FC4AH)] - 1
マシン語領域	[HIMEM (FC4AH)]	ユーザーエリアの終わりまで

表2.20 各エリアの開始と終了アドレスを持つワークエリア

各ユーザーエリアの役割を以下に示します。

● BASIC プログラムエリア

BASICで作成したプログラムは、ユーザーエリアの下限アドレス(MSX2では8000H番地)から格納され、その大きさはプログラムの量とともに変化します。

● 変数領域

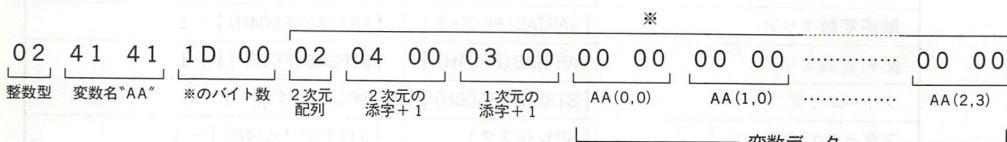
変数領域は BASIC プログラムエリアのすぐ後ろに位置しており、プログラム実行時に使用された変数に関して、その名前や値の保存のため確保されます。この時の変数の格納形式を図 2.8 (単純変数の場合)、図 2.9 (配列変数の場合) に示します。なお、配列変数を DIM 文で宣言せずに使用すると添字が 10 の配列としてエリアが確保されます。ただし、4 次元以上の配列はかならず宣言する必要があります。



図2.8 単純変数の格納形式

データ本体					
変数型 (1バイト)	変数名 (2バイト)	データ本体の長さ (2バイト)	次元数 (1バイト)	次元ごとの添字の 最大数 + 1 (次元数 × 2バイト)	変数データ

例) DEFINT A : DIM AA(2,3)



注 变数データの形式は単純変数の格納形式と同じ、2バイトの数値は上位と下位バイトが逆に格納される。

図2.9 配列変数の格納形式

● フリーエリア

プログラムエリアや変数領域が大きくなったり、スタックが多くなって、フリーエリアがなくなると“OUT OF MEMORY” エラーになります。なお、BASIC の FRE 関数で PRINT FRE(0) を評価することにより、その大きさを知ることができます。

● スタックエリア

BASIC が使用するスタックエリアです。GOSUB 命令や FOR 命令などの実行時に上位アドレス側から順に使用されます。

● 文字列領域

文字列変数の内容を保存するために使用される領域で、上位アドレス側から順に使用されています。なお、この領域の大きさは BASIC の CLEAR 文の第 1 パラメータで指定することができます、省略時は 200 バイトの大きさで確保されます。このエリアがすべて使われてしまうと “OUT OF STRING SPACE” となります。BASIC の FRE 関数で PRINT FRE (“ ”) を評価することにより、残りの領域の大きさを知ることができます。

● ファイルコントロールブロック

ファイルの情報を保存する領域で、1 ファイルごとに 10BH (267) バイト分の領域が取られます。ファイルいくつ分の領域を確保するかは BASIC の MAXFILES 文で指定でき、リセット時はファイル 1 つ分 (MAXFILES = 1) の領域が取られています。しかし、それとは別に SAVE, LOAD 命令のために、常時かならず 1 つ分の領域が確保されているので、実際にはこれも含めて 2 つ分の領域が確保されることになります。ファイルコントロールブロックの形式を表 2.21 に示します。

変位	ラベル	意味
+ 0	FL.MOD	ファイルがオープンされたモード
+ 1	FL.FCA	BDOS 用 FCB へのポインタ (Low)
+ 2	FL.LCA	BDOS 用 FCB へのポインタ (High)
+ 3	FL.LSA	バックアップキャラクタ
+ 4	FL.DSK	デバイスナンバー
+ 5	FL.SLB	インターフリタが内部で使用
+ 6	FL.BPS	FL.BUF の位置
+ 7	FL.FLG	いろいろな情報をもつフラグ
+ 8	FL.OPS	仮想的なヘッドの位置
+ 9 ~	FL.BUF	ファイルバッファ (256 バイト)

表 2.21 ファイルコントロールブロック (FCB) の形式

● マシン語領域

マシン語プログラムを扱ったりメモリを直接操作する場合の領域です。これらを行う場合は、CLEAR 命令によって、あらかじめこの領域を確保しておく必要があります。

● ディスクのワークエリア

ディスクが実装時に取られるワークエリアを図 2.10 に示します。この領域はディスクが実装されていない場合はまったく存在しませんので注意してください。なお、図中右のラベルは、そこにこのアドレスの情報があることを意味します。

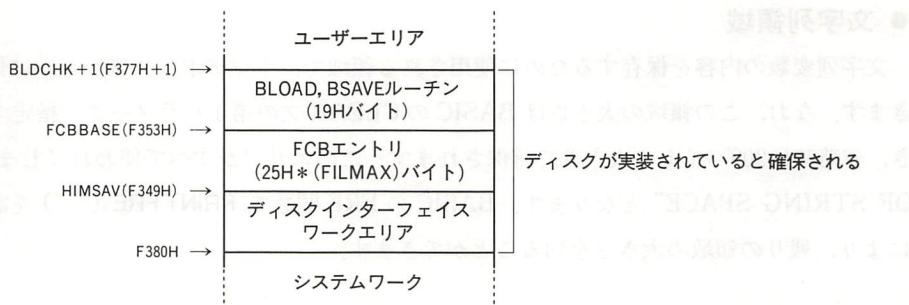


図2.10 ディスクのワークエリア

3.3 BASIC プログラムの格納形式

プログラムはメモリ上に図2.11のような形式で記憶されており、その内容には以下のような意味があります。

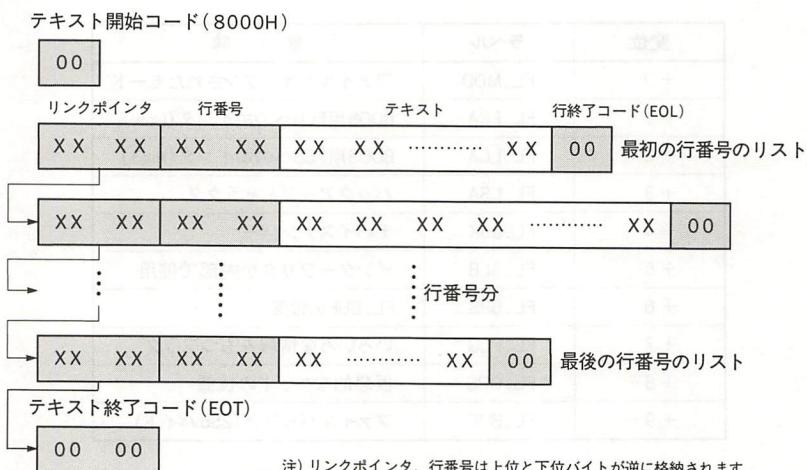


図2.11 テキスト格納形式

● リンクポインタ

次の行へのテキストポインタが絶対アドレスで書かれています。

● 行番号

文字どおりプログラムの行番号が格納されており、通常は 0~65529 (0000H~FFF9H) の値が入ります。メモリを直接操作することにより 65530 以上の行番号を作ることも可能ですが、LIST コマンドはその行以降を表示しません。

● テキスト

ここにプログラム本体が中間コード形式で格納されています。中間コードに変換されるものは、予約語(キーワード), 演算子, 数値で, その他のもの(変数名や文字列定数など)はキャラクタコードの形で格納されます。中間コードを表2.22に, テキスト中の数値形式を図2.12に示します。

キャラクタコードについては, 卷末の付録を参照してください。なお, グラフィックキャラクタは「CHR\$(1)+(グラフィックキャラクタコード+64)」の2バイト(2文字分)で格納されますので, グラフィック文字を取り扱う時には注意が必要です。

>	EE	CMD	D7	ERR	E2	LIST	93	PAINT	B F	SPRITE	C7
=	EF	COLOR	BD	ERROR	A6	LLIST	9E	PDL	FF A4	SQR	FF87
<	F0	CONT	99	EXP	FF 8B	LOAD	B5	PEEK	FF 97	STEP	DC
+	F1	COPY	D6	FIELD	B1	LOC	FF AC	PLAY	C1	STICK	FFA2
-	F2	COS	FF 8C	FILES	B7	LOCATE	D8	POINT	ED	STOP	90
*	F3	CSAVE	9A	FIX	FF A1	LOF	FF AD	POKE	98	STR\$	FF93
/	F4	CSNG	FF 9F	FN	DE	LOG	FF 8A	POS	FF 91	STRIG	FFA3
~	F5	CSRLIN	E8	FOR	82	LPOS	FF 9C	RESET	C3	STRING\$	E3
¥	FC	CVD	FF AA	FPOS	FF A7	LPRINT	9D	PRINT	91	SWAP	A4
ABS	FF 86	CVI	FF A8	FRE	FF 8F	LSET	B8	PSET	C2	TAB(DB
AND	F6	CVS	FF A9	GET	B2	MAX	CD	PUT	B3	TAN	FF8D
ASC	FF 95	DATA	84	GOSUB	8D	MERGE	B6	READ	87	THEN	DA
ATN	FF 8E	DEF	97	GOTO	89	MID\$	FF 83	REM	3A8F	TIME	CB
ATTR\$	E9	DEFDBL	AE	HEX\$	FF 9B	MKD\$	FF B0	RENUM	AA	TO	D9
AUTO	A9	DEFINT	AC	IF	8B	MKI\$	FF AE	RESTORE	8C	TROFF	A3
BASE	C9	DEFSNG	AD	IMP	FA	MKS\$	FF AF	RESUME	A7	TRON	A2
BEEP	C0	DEFSTR	AB	INKEY\$	EC	MOD	FB	RETURN	8E	USING	E4
BIN\$	FF 9D	DELETE	A8	INP	FF 90	MOTOR	CE	RIGHT\$	FF 82	USR	DD
BLOAD	CF	DIM	86	INPUT	85	NAME	D3	RND	FF 88	VAL	FF94
BSAVE	D0	DRAW	BE	INSTR	E5	NEW	94	RSET	B9	VARPTR	E7
CALL	CA	DSKF	FF A6	INT	FF 85	NEXT	83	RUN	8A	VDP	C8
CDBL	FF A0	DSKI\$	EA	IPL	D5	NOT	E0	SAVE	BA	VPEEK	FF98
CHR\$	FF 96	DSKO\$	D1	KEY	CC	OCT\$	FF 9A	SCREEN	C5	VPOKE	C6
CINT	FF 9E	ELSE	3AA1	KILL	D4	OFF	EB	SET	D2	WAIT	96
CIRCLE	BC	END	81	LEFT\$	FF 81	ON	95	SGN	FF 84	WIDTH	A0
CLEAR	92	EOF	FF AB	LEN	FF 92	OPEN	B0	SIN	FF 89	XOR	F8
CLOAD	9B	EQV	F9	LET	88	OR	F7	SOUND	C4		
CLOSE	B4	ERASE	A5	LFILES	BB	OUT	9C	SPACE\$	FF 99		
CLS	9F	ERL	E1	LINE	AF	PAD	FF A5	SPC(DF		

表2.22 中間コード一覧表

8進数(&0)	0B	XX	XX	
16進数(&H)	0C	XX	XX	
行番号(RUN後)	0D	XX	XX	分歧命令の飛び先となる行のメモリ上の絶対アドレス-1
行番号(RUN前)	0E	XX	XX	分歧命令の飛び先の行番号。一度RUNされると識別コードがODHとなり絶対アドレスになる。
10~255の整数(%)	0F	XX		
0~9の整数(%)	11~1A			
256~32767の整数(%)	1C	XX	XX	
単精度実数(!)	1D	XX	XX	XX
倍精度実数(#)	1F	XX	XX	XX
2進数(&B)	'&'	'B'	'&B'につづく'0'や '1'のキャラクタ	

図2.12 テキスト中の数値形式

数値は予約語や変数名との区別をつけるために“識別コード”と呼ばれる番号が割り付けられており、それを見ることで後に続く値がどのようなものかわかるようになっています。

2バイトの数値の場合は、上位と下位バイトが逆に格納されます。符号付き数値については、識別コードの前に+または-の中間コードが置かれるのみであり、数値自体はかならず正の数で記憶されます。浮動小数点表記法についてはおおむね巻末のマスパック(Mathematical Package)の説明と同じですが、上記のように数値はかならず正の数で記憶される点に注意してください。2進数(&B)については、識別コードは割り当てられておらず、アスキーコードそのままの形で記憶されます。

0A	0B	0C	0D	0E	0F	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	1A	1B	1C	1D	1E	1F
0A	0B	0C	0D	0E	0F	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	1A	1B	1C	1D	1E	1F
0A	0B	0C	0D	0E	0F	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	1A	1B	1C	1D	1E	1F
0A	0B	0C	0D	0E	0F	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	1A	1B	1C	1D	1E	1F
0A	0B	0C	0D	0E	0F	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	1A	1B	1C	1D	1E	1F

参考一覧一覧中 35 頁

4 章 マシン語とのリンク

これまで説明したように、MSX BASIC ver 2.0 は強力な機能を備えていますが、さらに実行速度を上げたい、あるいは MSX 2 のハードウェア機能をとことんまで引き出したいと思ったら、やはりどうしても多少のマシン語は使用せざるを得ません。本章では、その必要が生じた時のために、BASIC からマシン語プログラムを呼び出す方法、およびその際に知っておくべきいくつかの情報について説明します。

4.1 USR 関数

BASIC からのマシン語の呼び出しは、以下の手順で行います。USR 関数のカッコの中は、引数としてマシン語に値を渡すために用いられます。引数は数式、文字式のいずれでもかまいません。

- ① DEF USR 文で、マシン語プログラムの実行開始アドレスを指定する。
- ② USR 関数でマシン語を呼び出す。
- ③ マシン語から BASIC に戻る場合は、RET 命令 (C9H) を実行する。

例) C000 番地が実行開始アドレスであるマシン語プログラムを呼び出す。

```
DEF USR=&HC000  
A=USR(0)
```

4.2 USR 関数の引数と戻り値によるデータの受け渡し

BASIC からマシン語に引数を渡す場合、マシン語側ではレジスタ A の内容でその型を知ることができます(表 2.23)。目的の値は引数の型により図 2.13 のような形式で格納されていますから、それに応じて値を受け取ります。例として、文字列型の引数を受け取るプログラムをリスト 2.1 に示します。

2	2バイト整数型
3	文字列型
4	単精度実数型
8	倍精度実数型

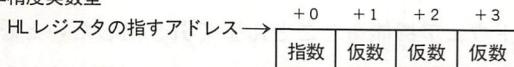
表2.23 レジスタAに代入される引数の型

2バイト整数型

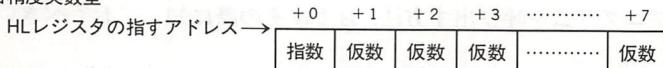


注) XXは、そこが何であっても関係がないことを示す。

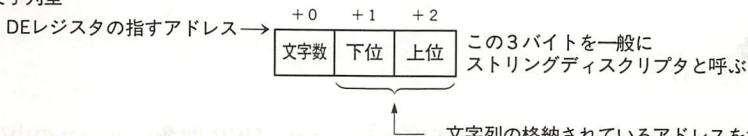
単精度実数型



倍精度実数型



文字列型



↑ 文字列の格納されているアドレスを指す

図2.13 引数による値のわたされ方

リスト2.1 文字型の引数の使用例

```

=====
; List 2.1      print string with USR function
;              to use, do  DEF USR=&HB000 : A$=USR("STRING")
=====
;
CHPUT    EQU     00A2H          ;character output
ORG      0B000H
;
RDARG:  CP      3
        RET      NZ          ;parameter is not string
;
        PUSH    DE
        POP     IX          ;IX := string descriptor
        LD      A,(IX+0)       ;get string length
        LD      L,(IX+1)       ;get string pointer(low)
        LD      H,(IX+2)       ;get string pointer(high)
        OR      A
        RET      Z          ;if length=0
;
RD1:   PUSH    AF
        LD      A,(HL)        ;get a character
        CALL    CHPUT          ;put a character
        POP     AF
        DEC     A
        RET      Z
        INC     HL
        JR      RD1
;
END

```

逆に、引数として渡されたこれらの値をマシン語の中で書き換えることによってUSR関数の値としてBASICに引き渡すことができます。この場合、VALTYP(F663H)を変更することにより戻り値をBASICからの引数の型以外のものに変更することも可能です。ただし、文字列型の場合、文字数を変えることはできません。

4.3 命令の増設

MSXでは現在“CMD”と“IPL”という予約語が未使用となっており、この予約語のフック（それぞれFE0DH, FE03H）を自分で作成した任意のマシン語ルーチンにジャンプするよう書き換えるだけで、新しい命令を作成することができます。簡単な例をリスト2.2に示します。

リスト2.2 CMD命令の増設

```
=====
; List 2.2  make CMD command ( turn on/off the CAPS LOCK )
;           to initialize command:   DEF USR=&HB00 : A=USR(0)
;           to use command:        CMD
;=====

CHGCAP EQU    0132H      ;CAPS LAMP on/off
CAPST  EQU    0FCABH     ;CAPS LOCK status
HCMD   EQU    0FE0DH     ;CMD HOOK

ORG    0B000H

;---- CMD initialize -----  この部分を実行するとCMDコマンドが増設される
LD S  BC,5      ;NEW HOOK SET
LD DE,HCMD
LD HL,HDAT
LD IR
RET

;---- new HOOK data -----  フック(FE0DH)に書き込む5バイトデータ
HDAT: POP AF
      JP CAPKEY
      NOP

;---- executed by CMD -----  CMDコマンドの実体
CAPKEY: CALL CHGCAP
        LD A,(CAPST)
        CPL
        LD (CAPST),A
        RET

END
```

フックに書き込む最初の“POP AF”は、この場合“CMD”的実行の時にスタックに積まれるエラー処理アドレスを捨てるためのものです。これを入れておかないと、“RET命令”でBASICに戻るはずがエラー処理ルーチンにジャンプしてしまいます。ユーザールーチン内でエラーを出

したい場合はこのアドレスを取っておくのも 1 つの方法です。

なお、これらのフックは本来は将来の拡張用にリザーブしてある場所なので、商用のアプリケーション・プログラムで使用してはいけません。

4.4 CMD 命令の拡張

より複雑なステートメントの拡張を行うには、CMD 命令にも引数を渡せると便利です。マシン語を呼び出した際、HL レジスタが BASIC テキスト中の “CMD” の次の位置を指していますから、これをを利用して後に続く文字列の評価を行えば目的は果たせます。これらを行うために有効と思われる内部ルーチンを、以下に示します。

● CHRGTR (4666H／MAIN)テキストから 1 文字取り出す(図2.14)。

入力：HL ← テキストを指すアドレス

出力：HL ← 取り出した文字のアドレス

A ← 取り出した文字

Z フラグ ← 文末（：または 00H）ならば ON

CY フラグ ← 0 ~ 9 ならば ON

機能：(HL + 1) の場所のテキストから 1 文字取り出す。スペースはスキップされる。

● FRMEVL (4C64H／MAIN)テキスト中の式を評価する(図2.15)。

入力：HL ← テキスト中の式の先頭アドレス

出力：HL ← 式の次のアドレス

[VALTYP (F663H)] ← 型に応じて 2, 3, 4, 8 の値が入る。

[DAC (F7F6H)] ← 式の評価結果

機能：式を評価し、型に応じて出力する。

● FRMQNT (542FH／MAIN)式を 2 バイト整数型で評価する。

入力：HL ← テキスト中の式の先頭アドレス

出力：HL ← 式の次のアドレス

DE ← 式の評価結果

機能：式を評価し、整数型(INT)で出力する。結果が 2 バイト整数型の範囲に納まらない場合には “Overflow” エラーを発生し、BASIC コマンドレベルに戻る。

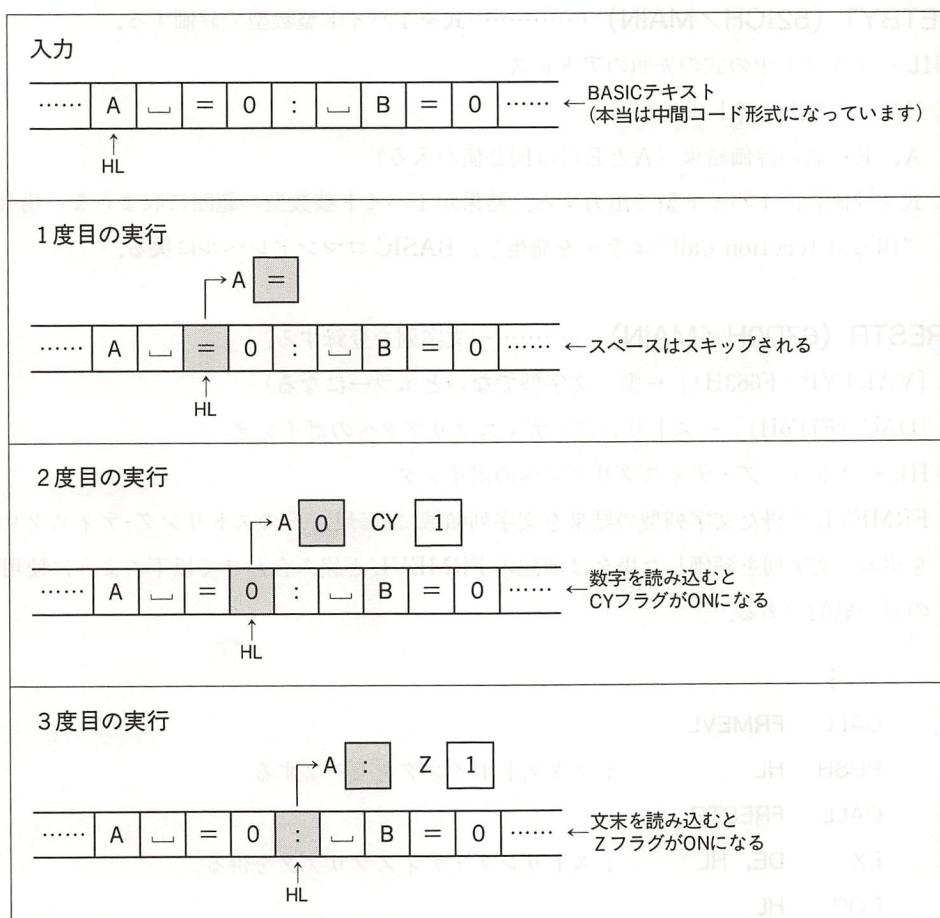


図2.14 CHRGTRの入出力状態

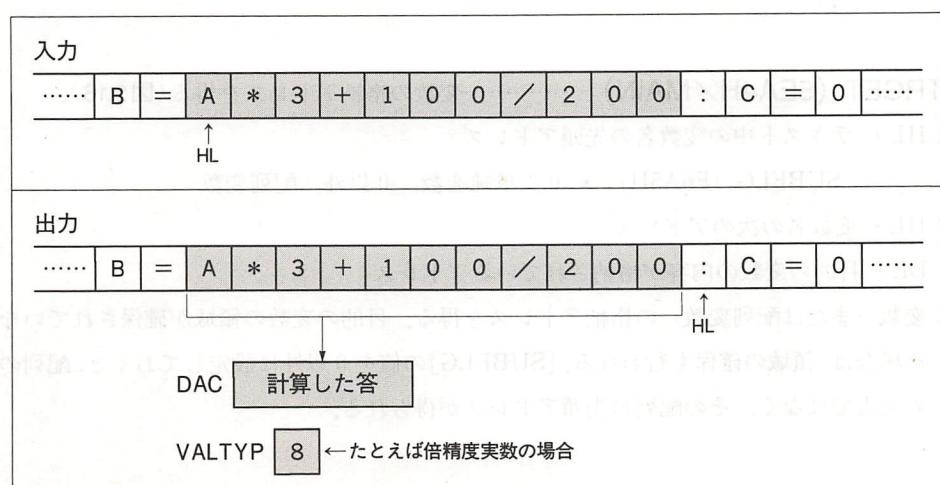


図2.15 FRMEVLの入出力状態

● GETBYT (521CH/MAIN)式を1バイト整数型で評価する。

入力 HL ← テキスト中の式の先頭のアドレス

出力 : HL ← 式の次のアドレス

A, E ← 式の評価結果 (A と E には同じ値が入る)

機能 : 式を評価し、1バイト型で出力する。結果が1バイト整数型の範囲に収まらない場合には "Illegal function call" エラーを発生し、BASIC コマンドレベルに戻る。

● FRESTR (67D0H/MAIN)文字列を登録する。

入力 : [VALTYP (F663H)] ← 型 (文字型でないとエラーになる)

[DAC (F7F6H)] ← ストリング・ディスクリプタへのポインタ

出力 : HL ← ストリング・ディスクリプタへのポインタ

機能 : FRMEVL で得た文字列型の結果を文字列領域に登録し、そのストリング・ディスクリプタを得る。文字列を評価した場合は前記の FRMEVL と組み合わせて以下のように使用するのが一般的である。

```
:
CALL FRMEVL
PUSH HL      ; テキストポインタをセーブする
CALL FRESTR
EX DE, HL    ; ストリング・ディスクリプタを得る
POP HL
LD A, (DE)   ; 入力された文字列の長さを得る
:
```

● PTRGET (5EA4H/MAIN)変数の格納アドレスを得る(図2.16)。

入力 : HL ← テキスト中の変数名の先頭アドレス

[SUBFLG (F6A5H)] ← 0 : 単純変数, 0以外 : 配列変数

出力 : HL ← 変数名の次のアドレス

DE ← 目的の変数の内容が格納されているアドレス

機能 : 変数 (または配列変数) の格納アドレスを得る。目的の変数の領域が確保されていなかった場合は、領域の確保も行われる。[SUBFLG]の値を0以外に設定しておくと、配列の個々の要素ではなく、その配列の先頭アドレスが得られる。

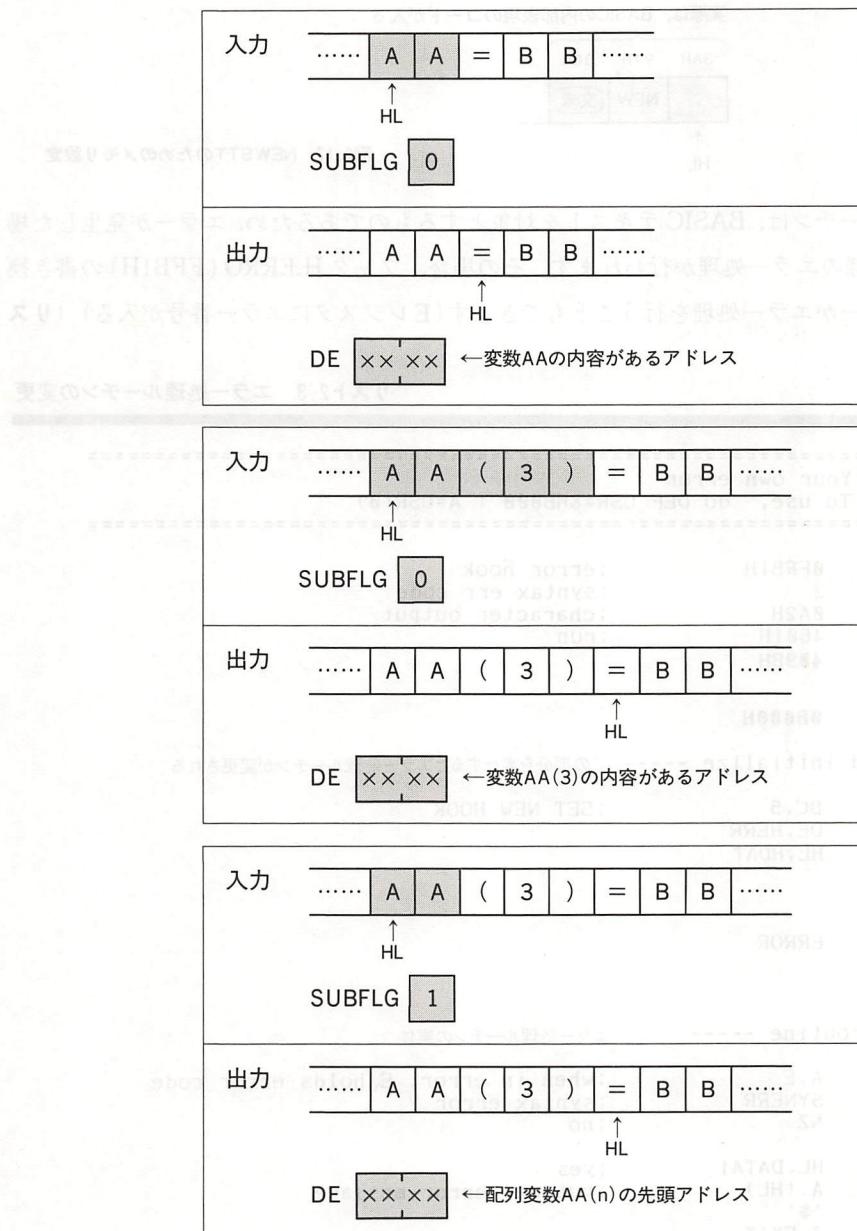


図2.16 PTRGETの入出力状態

● NEWSTT (4601H/MAIN)任意のテキストを実行する。

入力：HL ← 実行するテキストのアドレス

出力：――

機能：テキストの実行を行う。テキストは図2.17の状態となっている必要がある。

実際は、BASICの内部表現のコードが入る



図2.17 NEWSTTのためのメモリ設定

これらの内部ルーチンは、BASIC テキストを対象とするものであるため、エラーが発生した場合は BASIC と同様のエラー処理が行われます。その場合、フック H.ERRO (FFB1H) の書き換えにより、ユーザーがエラー処理を行うこともできます (Eレジスタにエラーコードが入る) (リスト 2.3)。

リスト 2.3 エラー処理ルーチンの変更

```

=====
; List 2.3 Your own error
; To use, do DEF USR=&HB000 : A=USR(0)
;-----

; HERR EQU 0FFB1H ;error hook
SYNERR EQU 2 ;syntax err code
CHPUT EQU 0A2H ;character output
NEWSTT EQU 4601H ;run
READYR EQU 409BH ;exit

ORG 0B000H

;---- command initialize ---- この部分を実行するとエラー処理ルーチンが変更される
LD BC,5 ;SET NEW HOOK
LD DE,HERR
LD HL,HDAT
LDIR
RET

HDAT: JP ERROR
NOP
NOP

;---- error routine ----- エラー処理ルーチンの実体
ERROR: LD A,E ;when in error, E holds error code
CP SYNERR ;syntax error ?
RET NZ ;no

LOOP: LD HL,DATA1 ;yes
LD A,(HL) ;put new error message
'$'
JR Z,EXIT
PUSH HL
CALL CHPUT
POP HL
INC HL
JR LOOP

EXIT: JP READYR

DATA1: DEFM 'キヤハツ マチカ イチャッタ' ;new error message
DEFB 07H,07H,07H,'$'

END

```

4.5 割り込み使用法

Z80CPUにはINTとNMIの2つの割り込み端子がありますが、MSXで使用しているのはINTのみです。INT端子には60 [Hz]の信号が入力されており、1秒に60回のタイマ割り込みが実行されるようになっています。Z80の割り込みモードが1に設定されているため、割り込みがかかると38H番地がコールされ、そこからタイマ割り込みルーチンへジャンプし、キー入力をはじめとする種々の処理を行っています。

このタイマ割り込みルーチンは、途中でフック H.TIMI (FD9FH) にジャンプします。このフックを利用することで、このタイマ割り込みルーチンに任意の機能を追加することが可能です。ここで注意しなければならないのは、通常ここにはRET命令が書かれているだけですが、ディスクなどの周辺機器が接続されていて、すでにこのフックが使用中の時です。この場合、知らずに書き換えるとそれら周辺機器が以後使用不能になってしまうので、どのマシンでも正常に実行できるようにするために、あらかじめそれに対する処理をしておく必要があります。割り込みの使用例とともにこれらの対処の一例をリスト2.4に示します。

リスト2.4 タイマ割り込みフックの正しい使用法

```
=====
; List 2.4 How to use HOOK safely
; This routine uses TIMER INTERRUPT HOOK
; and turn on/off CAPS LOCK
; To start, do DEF USR=&HB000 : A=USR(0)
; To end,   do DEF USR=&HB030 : A=USR(0)
=====
;
CHGCAP EQU    0132H      ;CAP LAMP on/off
CAPST  EQU    0FCABH     ;CAP LOCK status
TIMI   EQU    0FD9FH     ;timer interrupt HOOK
JPCODE EQU    0C3H
TIMER  EQU    020H

ORG    0B000H

----- interrupt on -----      フック書き換え時には以前のフックを保存する

INTON: DI
       LD     HL,TIMI        ;OLD HOOK SAVE
       LD     DE,HKSAVE
       LD     BC,5
       LDIR

       LD     A,JPCODE        ;NEW HOOK SET
       LD     (TIMI),A
       LD     HL,INT
       LD     (TIMI+1),HL
       EI
       RET

ORG    0B030H
```

```

;----- interrupt off -----      保存しておいたフックを元に戻して終了する

INTOFF: DI
        LD      HL,HKSAVE      ;RECOVER HOOK
        LD      DE,TIMI
        LD      BC,5
        LDIR
        EI
        RET

;----- interrupt routine -----      フックの元に戻す

INT:    PUSH   AF
        LD      A,(CAPST)
        OR      A
        JR      Z,CAPON

CAPOFF: LD      A,(COUNT1)
        DEC     A
        LD      (COUNT1),A
        JR      NZ,FIN
        LD      A,TIMER
        LD      (COUNT1),A
        XOR     A
        LD      (CAPST),A
        LD      A,0FFH
        CALL    CHGCAP
        JR      FIN

CAPON:  LD      A,(COUNT2)
        DEC     A
        LD      (COUNT2),A
        JR      NZ,FIN
        LD      A,TIMER
        LD      (COUNT2),A
        LD      A,0FFH
        LD      (CAPST),A
        XOR     A
        CALL    CHGCAP

FIN:   POP    AF
        CALL   HKSAVE      ;old HOOK call
        RET

COUNT1: DEFB   TIMER
COUNT2: DEFB   TIMER

HKSAVE: NOP
        NOP
        NOP
        NOP
        RET

END

```

5

ソフトウェア開発上 の諸注意

MSX用のソフトウェアを開発する際、それがどのようなMSX機種上でも問題なく動作するために、ぜひとも守って頂きたい事項がいくつかあります。本章ではそれらの事項について述べるとともに、その他ソフトウェア作成時に知っていると役立つ種々の情報を紹介します。

● BIOS

BIOSを使う目的は、ハードウェアとソフトウェアを分離し、万一ハードウェアが変更されたとしてもソフトウェアをそのまま使えるようにすることです。商用のアプリケーション・プログラムで入出力処理を行う際には、かならず BIOS を使用してください(ただし VDP に関してはこの限りではない)。

BIOSはMAIN-ROMの0000H番地から始まるジャンプテーブルを通して呼び出されます。MSX2のSUB-ROMにも同様のジャンプテーブルがあり、これは拡張機能の呼び出しに使われます。ジャンプテーブルの分岐先、つまり BIOS の内容はハードウェアの変更や機能の拡張のために変更される可能性がありますので、アプリケーション・プログラムがそこを直接呼び出してはいけません。本書の中にも、BIOSのジャンプテーブル以外のアドレスを呼び出しているような例がありますが、あくまでも参考とするにとどめておいてください(APPENDIX BIOS一覧表参照)。なお、マスパックおよび前述のステートメント拡張に関する内部ルーチンは、今後もアドレスを変更しないので、アプリケーションから呼び出してもかまいません。

● ワークエリア

MAIN-RAMのF380H～FFFFH番地は、BIOSとBASIC インタープリタのワークエリアですから、不用意に使わないでください。ワークエリア内の使われていない場所は将来の使用のために予約されているのでこちらも使用できません。なお、ディスクのワークエリアについては「3.1ユーザーエリア」の項を参照してください。

● RAMとスタックポインタの初期化

電源投入時のRAMの内容は不定で、システムのワークエリア以外の領域は初期化されません。ワークエリアの初期化はアプリケーション・プログラム自身で行ってください。RAMの内容

が00Hであることを期待しているために動かないソフトがあり、問題になりました。

ROMカートリッジのINITルーチン(第5部7章参照)が呼ばれた時のスタックポインタの値は不定で、ディスク・インターフェイスが先に初期化されたような場合にはそうでない場合よりもスタックポインタの値が小さくなります。スタックポインタの初期化を行わないプログラムがこのために暴走し、問題になりました。INITルーチンで起動し、そのまま処理が続く(つまりディスク等の周辺機器やBASICインタープリタを使う必要がない)プログラムはかならずスタックポインタを初期化してください。

● 拡張 BIOS のワークエリア

拡張 BIOS コールを使う時には、スロットが切り換えられても CPU がワークエリアを参照できるように、スタックを C000H 番地よりも上位に置いてください。同様の理由で、RS-232C の FCB も 8000H 番地より上位に置いてください。

● デバイスドライバなどのワークエリア

デバイスドライバや BASIC から呼ばれるサブルーチンのように、他のプログラムと同時にメモリに存在するプログラムは、ワークエリアの確保に特に注意を要します。

カートリッジの INIT ルーチンが BOTTOM (FC48H) を書き換え、古い BOTTOM と新しい BOTTOM の間を自分のワークエリアとして予約し、さらに、そのワークエリアのアドレスを SLTWRK (FD09H) というスロット別に割り当てられた 2 バイトの領域に記録します。詳しくは第5部7章を参照してください。

● フック

たとえば、RS-232C カートリッジが割り込み処理のためにフックを書き換えた場合、次のカートリッジが同じフックを書き換えると RS-232C のカートリッジは割り込みフックを使用することができなくなってしまいます。このようなことを防ぐために、フックを書き換える場合には以前のフックの内容(例では、RS-232C カートリッジの割り込み処理ルーチンへのインターフォントコール命令)を別の場所にコピーしておき、自分がフックから呼ばれた際にはかならずそれを呼び出すことで、そのフックを使おうとしているカートリッジすべてに制御が渡るようにしてください(図2.18)。詳しくは第5部7章を参照してください。

● VRAM の初期化

アプリケーション・プログラム起動時の VRAM の内容は不定ですから VRAM はかならず初期化してから使用してください。

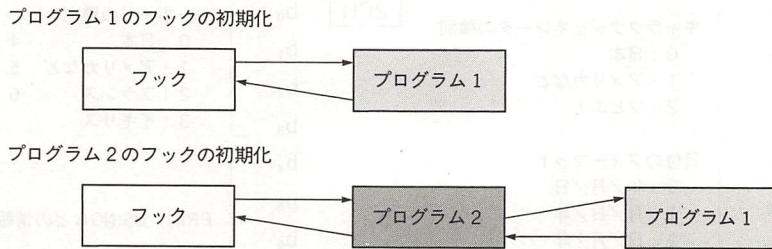


図2.18 フックの初期化

● VRAM の容量

MODE (FAFCH) のビット 1, ビット 2 で VRAM 容量を知ることができます (表2.24).

[FAFCH]		VRAMの容量
ビット2	ビット1	
0	0	16K(MSX1)
0	1	64K(MSX2)
1	0	128K(MSX2)

表2.24 VRAM容量を知る方法

● BASIC のバージョン番号

アプリケーション・プログラムが BASIC のバージョン番号を知るために、以下の方法があります。

- MAIN-ROM の 2DH 番地の内容を読む (00H=ver1.0, 01H=ver2.0)
- ver2.0 以降では EXBRSA (FAF8H) に SUB-ROM のスロットアドレスが入っている。入っていなければ (00H) ver1.0 である

● インターナショナル MSX

MSX は世界各国で使うために多くの種類がありますが、以下の項目が国により大きく異なります。

- キーボード配列、文字セット、PRINT USING の書式
- タイマ割り込みの周波数など

ID バイトという ROM 内の情報を読むことで (図2.19), 本体の種類がわかり、各国の MSX に対応することができます (表2.25).

2BH	b ₀	キャラクタジェネレータの種別	2CH	b ₀	キーボードの種別
	b ₁	0 : 日本		b ₁	0 : 日本 4 : ドイツ
	b ₂	1 : アメリカなど		b ₂	1 : アメリカなど 5 : ソビエト
	b ₃	2 : ソビエト		b ₃	2 : フランス 6 : スペイン
	b ₄	日付のフォーマット		b ₄	3 : イギリス
	b ₅	0 : 年／月／日		b ₅	PRINT USINGなどの情報
	b ₆	1 : 月／日／年		b ₆	
	b ₇	2 : 日／月／年		b ₇	
	b ₇	インターラプト周期(VSYNC)			
		0 : 60Hz			
		1 : 50Hz			

図2.19 IDバイトの内容

国名	TVセット	日付フォーマット	初期画面モード	PRINT USING		
				文字列の長さ指定	文字の置き換え	通貨シンボル
日本	NTSC (60Hz)	年／月／日	SCREEN 1	&	@	¥(エン)
イギリス	PAL (50Hz)	日／月／年	SCREEN 0	\	&	£(ポンド)
国際的	PAL (50Hz)	月／日／年	SCREEN 0	\	&	\$ (ドル)
アメリカ	NTSC (60Hz)	月／日／年	SCREEN 0	\	&	\$ (ドル)
フランス	SECAM (50Hz)	日／月／年	SCREEN 0	\	&	\$ (ドル)
ドイツ	PAL (50Hz)	日／月／年	SCREEN 0	\	&	\$ (ドル)
ソビエト	NTSC (60Hz)	月／日／年	SCREEN 0	\	&	\$ (ドル)
スペイン	PAL (50Hz)	月／日／年	SCREEN 0	\	&	\$ (ドル)

表2.25 国別のMSX仕様

● エスケープシーケンス

MSXにはエスケープシーケンス機能があります (APPENDIX 参照), これは BASIC の PRINT 命令, BIOS および BDOS コール(MSX-DOS)のコンソール出力で利用できます。エスケープシーケンスの機能は, DEC 製 VT52 ターミナルおよびヒースキット製 H19 ターミナルのサブセットになっています。

● BASIC に戻る方法

・ ウォームスタート

MAIN-ROM のスロットを選択した後, MAIN-ROM の 409BH 番地へジャンプしてください。BASIC のワークエリアが壊れていなければ, BASIC のコマンド入力状態になります。なお, ジャンプする時のレジスタやスタックの内容はいっさい無視されます。

もう 1 つの方法として, 内部ルーチンである NEWSTT (第2部4.4参照) で次の命令を実行することによっても行うことができます (図2.20)。



図2.20 ウォームスタートのためのNEWSTTの入力設定

● オートスタート

BIOS や BASIC のワークエリアを使用しないような単純なゲームカートリッジなどでは ROM のヘッダの “INIT” の場所にプログラム実行開始アドレスを書くことで、そのプログラムを起動することができます。しかし、この方法を使うと他のカートリッジの初期設定が行われないために、ディスクドライブなどが使えなくなります。

それを避けるために、FEDAH に “H.STKE” というフックがありますから、カートリッジの “INIT” ルーチン実行時に起動させたいプログラムへのインターフェースコール命令をここに書き、RET 命令でシステムに戻ってください。すると、すべてのカートリッジの初期設定が終わり、ディスクがあれば DISK BASIC の環境が整ってからそのフックが呼び出されますから、目的のプログラムを起動することができます。なお、この方法はディスクがない場合でも有効です（APPENDIX 参照）。

エラーコード一覧表

1.	NEXT without FOR	NEXT 文に対応する FOR 文がない。
2.	Syntax error	構文に誤りがある。
3.	RETURN without GOSUB	RETURN 文と GOSUB 文の対応がとれていない。
4.	Out of DATA	READ 文で読むべきデータがない。
5.	Illegal function call	関数の使い方に誤りがある。数値の指定に誤りがある。
6.	Overflow	数値がオーバーフローした。
7.	Out of memory	フリーエリアがなくなった。
8.	Undefined line number	指定した行番号がプログラムにない。
9.	Subscript out of range	配列変数の添字の値が宣言された範囲を超えている。
10.	Redimensioned array	配列を二重定義しようとした。
11.	Division by zero	0 除算しようとした。0 に対して負のベキ乗を行った。
12.	Illegal direct	ダイレクトモードでは実行できないステートメントをダイレクトモードで実行しようとした。
13.	Type mismatch	データの型が一致していない。
14.	Out of string space	文字列領域がなくなった。
15.	String too long	文字列が 255 文字を超えた。
16.	String formula too complex	指定した文字列が複雑すぎる。
17.	Can't CONTINUE	CONT コマンドの実行ができる状態ではない。
18.	Undefined user function	DEF FN 文で定義されていないユーザー定義関数を使おうとした。
19.	Device I/O error	デバイスの入出力中にエラーが発生した。
20.	Verify error	カセットとメモリのプログラムが同じでない。
21.	No RESUME	エラー処理ルーチンに RESUME 文がない。

22.	RESUME without error	エラー処理ルーチン以外で RESUME 文を使用した。
23.		未定義
24.	Missing operand	必要なパラメータの指定がされていない。
25.	Line buffer overflow	入力データの文字数が多すぎる。
26. 49.		未定義
50.	FIELD overflow	FILED 文で定義したフィールドのサイズが 256 バイトを超えた。
51.	Internal error	BASIC 内部でエラーが発生した。
52.	Bad file number	OPEN されていないファイル番号を指定した。 指定したファイル番号が MAXFILES 文で指定した数を超えている。
53.	File not found	指定したファイルがない。
54.	File already open	このファイルはすでに OPEN されている。
55.	Input past end	ファイルをすべて読んでしまった後、さらに読み込むとした。
56.	Bad file name	ファイル名の指定に誤りがある。
57.	Direct statement	アスキー形式のプログラムをロード中、プログラム以外のデータがあった。
58.	Sequential I/O only	シーケンシャルファイルに対してランダムアクセスを行おうとした。
59.	File not OPEN	指定したファイルがまだ OPEN されていない。
60.	Bad FAT	ディスクのフォーマットが正常でない。
61.	Bad file mode	OPEN されているモードに対して、正常な入出力を行っていない。
62.	Bad drive name	ドライブ名の指定に誤りがある。
63.	Bad sector number	セクタ番号に誤りがある。
64.	File still open	ファイルがクローズされていない。
65.	File already exists	NAME 文で指定したファイル名が、すでにディスクに存在している。

66.	Disk full	ディスクの空き領域がなくなった。
67.	Too many files	ファイル数が 112 を超えた（ディレクトリの空きがなくなった）。
68.	Disk write protected	ディスクが書き込み禁止状態になっている。
69.	Disk I/O error	ディスクの入出力中になんらかの障害が起こった。
70.	Disk offline	ディスクケットが入っていない。
71.	Rename across disk	NAME 文を異なるディスク間で行おうとした。
72. ↓ 255.	未定義	

※ユーザーがエラー定義したい場合は、番号の大きい方から使用してください

第3部

MSX-DOS

コンピュータを単なるゲームマシンとしてではなく、何らかの目的に役立つ実用的な道具として使用するためには、大容量かつ高速にアクセス可能な外部記憶装置、すなわちディスクドライブがどうしても必要になります。そして、ディスクに蓄えられた大量のデータを効率良く操作するためには、優れたDOS(ディスク・オペレーティング・システム)の存在は欠かせません。MSXシステムのために作られたMSX-DOSは、16ビットマシンの世界で定評のあるMS-DOSの流れを汲み、Z80CPU用のDOSとしては現在最高のディスク操作環境をユーザーに提供します。MSXの実力は、このMSX-DOSを使用することによって、初めて発揮されるのだと言ってもよいでしょう。第3部では、このMSX-DOSの基本的な操作と、システムコールを通した利用法を解説します。

1 章 概 要

MSX-DOSとは、いったいどのようなソフトウェアであり、ユーザーに何をもたらしてくれるのでしょうか。本章ではMSX-DOSの持つ特徴と機能、そのソフトウェア構成などの解説を通して、MSX-DOSを紹介していきます。

1.1 MSX-DOS の特徴

● ディスク環境の統一

MSX-DOSはMSXコンピュータのためのディスク・オペレーティング・システムです。MSXのすべてのバージョンに対応し、MSX2と従来のMSXのどちらのハードウェア上でも問題なく動作可能です。また、MSXにおけるディスクの取り扱いは、かならず何らかの形でMSX-DOSを介して行われます。MSX DISK-BASICにおいても例外ではなく、そのディスク入出力には、BDOSコールと呼ばれるMSX-DOSの機能の一部が利用されています。したがってMSX-DOSとDISK-BASICには同一のディスク・フォーマットが用いられ、一部のパソコンで見られるように、BASICとDOSの間のファイル変換を行う必要はありません。このことは、MSX-DOSをMSXのプログラム開発環境として使用する場合、操作性およびファイル資源の有効利用という点で、非常に大きなメリットとなります。

● MS-DOSとの互換性

MSX-DOSは、16ビット・パソコン用のディスク・オペレーティング・システムとして作られたMS-DOS(ver1.25)をもとに作成され、MS-DOSと共にファイル・フォーマットが用いられています。そのためMS-DOSとファイルレベルでの互換性があり、MS-DOSのディスクに書き込まれているファイルをMSX-DOSで読み書きする、逆にMSX-DOSのディスク上のファイルをMS-DOSを用いて読み書きすることができます。また、DOSを操作するコマンドのレベルでも両者は統一が図られているため、MSX-DOSでDOSに親しんだユーザーは、後々16ビット機を使用することになった場合、MS-DOSへの移行にとまどうことがありません。

● CP/M のアプリケーションが利用可能

さらに、CP/M-80 とシステムコールの互換性があり、CP/M 上で作成された大部分のプログラムは、1 バイトも手を加えずに MSX-DOS で実行可能です。これは、CP/M 用の膨大なアプリケーションが MSX-DOS 上で手軽に利用できることを意味します。多くの優れたソフトウェアを MSX ユーザーに提供するソフトウェア・バスとしても、MSX-DOS はたいへん有効な存在となり得るのです。

1.2 MSX-DOS の使用環境

● 必要なシステム

MSX-DOS を使用するためには、最低限 64K バイトの RAM を実装した MSX 本体と、CRT、ディスクドライブ 1 台、そしてディスク・インターフェイス ROM が必要です。RAM が 64K バイトに満たない場合はディスクドライブが存在しても MSX-DOS は起動せず、DISK-BASIC の環境しか利用できません。MSX 2 仕様のコンピュータは、少なくとも 64K バイトの RAM を実装することが保証されていますから、かならず MSX-DOS に対応可能です。ディスク・インターフェイス ROM は、実際はつねにディスクドライブに付属して供給され、ドライブ内蔵の MSX では本体内、ディスクカートリッジ使用の場合はカートリッジ内に存在します。

● サポートするシステム

MSX-DOS は、8 台までのディスクドライブをサポートします。なお、1 ドライブシステムの場合、2 ドライブ・シミュレーション（1 台のドライブをディスクケットを交互に入れ換えることで時分割的に 2 ドライブとして用いるもの）の機能を持ちます。周辺装置は、キーボード入力、画面出力、プリンタ出力に対応しています。

● サポートするメディア

ディスクの物理的な構造に依存しない柔軟なファイル管理機構を持つ MSX-DOS は、多種のメディアに対応可能ですが、標準として用いられるのは 3.5 インチ倍密度のフロッピーディスクです。このディスクには、1DD と呼ばれる片面タイプと 2DD と呼ばれる両面タイプの 2 種類があります。また、それぞれのフォーマット形式にも 1 トラックが 8 セクタまたは 9 セクタの 2 種類があります。都合 4 種類のメディアが利用可能です。これらは表 3.1 に示した形式（マイクロソフト・フォーマット）でフォーマットされます。

	1DD, 9セクタ	2DD, 9セクタ	1DD, 8セクタ	2DD, 8セクタ
メディア ID	0F8H	0F9H	0FAH	0FBH
面数	1	2	1	2
1面に含まれるトラック数	80	80	80	80
1 トラックに含まれるセクタ数	9	9	8	8
1 セクタに含まれるバイト数	512	512	512	512
クラスタのサイズ	2セクタ	2セクタ	2セクタ	2セクタ
FATのサイズ	2セクタ	3セクタ	1セクタ	2セクタ
FATの個数	2	2	2	2
作成可能ファイル数	112	112	112	112

注) 表中の言葉の意味については、3章を参照

表3.1 MSX-DOSのサポートするメディア

1.3 MSX-DOS のシステム資源

● メモリマップ

MSX-DOS を構成するソフトウェアは、COMMAND.COM, MSXDOS.SYS, ディスク・インターフェイス ROM の 3 つの部分に分かれています。MSX-DOS が動作している時にはメモリ上で図 3.1 に示す位置を占めています。COMMAND.COM および MSXDOS.SYS は、MSX-DOS が起動するまではファイルとしてディスク上に存在し、MSX-DOS が起動すると RAM に読み込まれます。ディスク・インターフェイス ROM は、ディスクドライバ、DOS カーネル、DISK-BASIC インタープリタを含みます。

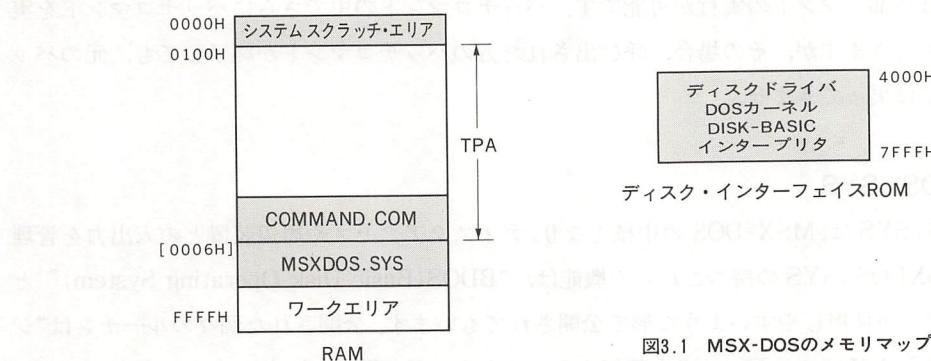


図3.1 MSX-DOSのメモリマップ

RAM 上の 00H~0FFH 番地は、システムスクラッチ・エリアと呼ばれ、MSX-DOS が他のプログラムとのデータの受け渡しに利用する領域です。後述するシステムコールを使う場合には、この領域が重要な役割を果たします。0100H 番地から始まり、RAM の 0006H 番地の内容で示されるアドレスまでの領域は、TPA(Transient Program Area) と呼ばれ、ユーザーが自由に利用可

能です。MSXDOS.SYS は TPA より上位アドレスに常駐し(この部分が壊れると暴走する), COMMAND.COM は TPA 内に置かれます。

● COMMAND.COM

MSX-DOS の基本的な操作は、キーボードからコマンドを入力し実行させる、という処理の繰り返しです。この時、文字列の入力からコマンドの解釈実行までの作業、いわゆるユーザー・インターフェイスに相当する部分を受け持つのが COMMAND.COM というプログラムです。COMMAND.COM が実行するプログラムは、内部コマンド、バッチコマンド、外部コマンドの3つに分けられます。

内部コマンドは COMMAND.COM の内部に組み込まれているものであり、RAM 上に存在しています。内部コマンドが入力されると、COMMAND.COM はすぐにその部分をコールし、コマンドを実行します。

外部コマンドの場合、COMMAND.COM は、まずディスクからそのルーチンを TPA に読み込み、実行に移ります(外部コマンドの実行はつねに100H番地から始まる)。この時、COMMAND.COM は自分自身の領域を外部コマンドのために解放します。つまり、COMMAND.COM を消して、その上に外部コマンドを書き込んでしまってもかまわないので、外部コマンドが“RET”によって終了すると、まず MSXDOS.SYS によって COMMAND.COM が破壊されているかどうかが調べられ(チェック・サムを用いる)、そうであれば再び COMMAND.COM を RAM 上にロードしてから COMMAND.COM に制御が移ります。

バッチコマンドは、通常はコマンドラインから行う入力を、指定されたバッチファイルから取り込むように変更することで処理されます。バッチコマンドの各ステップでは、任意の内部コマンドあるいは外部コマンドの実行が可能です。バッチコマンドの中でさらにバッチコマンドを実行することができますが、その場合、呼び出された方のバッチコマンドが終了しても、元のバッチコマンドには戻ってきません。

● MSXDOS.SYS

MSXDOS.SYS は、MSX-DOS の中核となり、ディスクアクセスや周辺装置との入出力を管理します。MSXDOS.SYS の持つこれらの機能は、“BDOS(Basic Disk Operating System)”として、ユーザーが使用しやすいような形で公開されてもいます。公開された個々のルーチンは“システムコール”と呼ばれ、ディスクを使用するソフトウェアの開発には欠かせない存在となっています(4章参照)。ただし、それぞれの処理は MSXDOS.SYS 自身によって行われているのではなく、実際の作業は DOS カーネルが受け持っています。MSXDOS.SYS は、COMMAND.COM や外部コマンドからくる入出力の要求を整理して DOS カーネルに発注する仲立ちの役割を果たしています。

なお MSXDOS.SYS の内部には、図 3.2 に示すように BDOS の他に BIOS と呼ばれる部分が含まれています。この BIOS とは、CP/M との互換性のために設けられたもので、通常は使用されません。

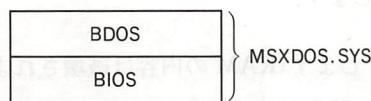


図 3.2 MSXDOS.SYS

● DOS カーネル

DOS カーネルは、ディスク・インターフェイス ROM 中に存在する基本入出力ルーチンであり、MSXDOS.SYS の BDOS 機能を実行する部分です。実際、DOS カーネルがあればシステムコールの機能はすべて実行可能ですが、DISK-BASIC では、直接この DOS カーネルをコールすることで、システムコールを実現しています。

● MSX-DOS の起動手順

MSX-DOS の起動は以下の過程により行われます。

1. MSX をリセットすると、始めにすべてのスロットを調べ、調べたスロットの先頭に(41H, 42H)の 2 バイトが書き込まれていれば、そのスロットには何らかの ROM が接続されていると判断します。ROM が接続されていれば、ROM のヘッダ部分にアドレスを設定された INIT(初期化)ルーチンを実行します。ディスク・インターフェイス ROM の INIT ルーチンの場合は、まずそのインターフェイスに接続されているドライブのためにワークエリアを確保します。
2. すべてのスロットを調べ終わったら、次に FEDAH(H.STKE)を参照します。このアドレスの内容が C9H でなければ(INIT ルーチンの実行中に H.STKE のフックに対して何らかのルーチンが設定されていれば)DISK-BASIC のための環境を設定し、H.STKE ヘジャンプします。
3. もし上記の調査で H.STKE の内容が C9H であれば、今度は TEXT エントリを持つカートリッジを各スロットへ探しにいき、存在すれば DISK-BASIC のための環境を設定した後、そのカートリッジの BASIC プログラムを実行します。
4. 次に、ブートセクタ(論理セクタ#0)の内容が C000H～C0FFH へ転送されます。この時、“DRIVE NOT READY” または “READ ERROR” が発生した場合、あるいは転送されたセクタの先頭が EBH でも E9H でもなかった場合、DISK-BASIC が起動します。

5. 次に, C01EH のルーチンが CY フラグをリセットした状態でコールされます。通常はこのアドレスには “RET NC” のコードが書き込まれているため、何も実行しないでリターンします。この部分に任意のマシン語プログラムのブートプログラムを書き込んでおけば、そのプログラムがオートスタートします。

6. 次に, RAM 容量をチェックします(RAM の内容は破壊されません)。もし 64K バイトの容量がなかった場合は DISK-BASIC が起動します。

7. 次に MSX-DOS の環境が初期化され、さらに CY フラグをセットした状態で C01EH がコールされます。ここでは MSXDOS.SYS が 100H からのアドレスにロードされ、100H へジャンプします。この後 MSX-DOS は自分自身を高位アドレスに転送します。MSXDOS.SYS が存在しない場合には、DISK-BASIC が起動します。

8. MSXDOS.SYS は COMMAND.COM を 100H からのアドレスにロードし、その先頭へジャンプします。COMMAND.COM も、自分自身を高位アドレスに転送し、そこで初めて実行に移ります。COMMAND.COM が存在しない場合には、“INSERT A DISKETTE”的メッセージが表示されて、正しいディスクケットがドライブにセットされるのを待ちます。

9. MSX-DOS が最初にブートされた時、“AUTOEXEC.BAT” という名前のファイルが存在すれば、それをバッチファイルとして実行します。MSX-DOS が起動せず DISK-BASIC が立ち上がった場合、“AUTOEXEC.BAS” という名前の BASIC プログラムが存在すれば、それを実行します。

2 章 操作

本章では、MSX-DOS の操作の基本となるキーボードからのコマンドライン入力の方法、およびその際に心得ておくべき事項と、MSX-DOS で利用可能な各種のコマンドの実際の使用法について説明します。

2.1 基本的な操作

● 起動時のメッセージ

MSX-DOS が起動すると、まず画面に次のようなメッセージが表示されます。

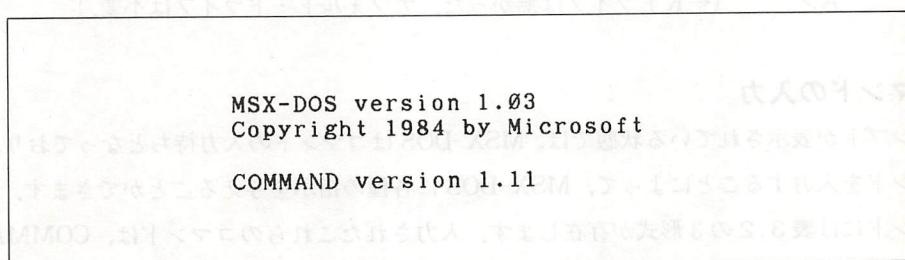


図3.3 起動時の画面

上の2行は、MSXDOS.SYS のバージョンとそのコピー ライトの表示です。1行おいて次の行は、COMMAND.COM のバージョンを表示しています。

● プロンプト

そしてバージョンの下に、プロンプト（入力促進記号）が表示されます。MSX-DOS のプロンプトは、デフォルト・ドライブ名 + “>” の2文字で表されます。

● デフォルト・ドライブ

プロンプトの1文字目に表示されている“デフォルト・ドライブ”とは、ドライブ名を省略した際に自動的にアクセスされるドライブのことです。たとえば、デフォルト・ドライブをAとした時、B ドライブ上の“BEE”というファイルを参照するためには“B:BEE”的に表さな

ければなりません。しかし、デフォルト・ドライブAにある“ACE”というファイルは、ドライブ名を省略して単に“ACE”と表すことができます。

例1) A>DIR B:BEE (\leftarrow B ドライブの“BEE”を参照している。)

例2) A>DIR ACE (\leftarrow A ドライブの“ACE”を参照している。)

● デフォルト・ドライブの変更

2 ドライブ以上のシステムを使用しているならば，“B:”と入力することによってデフォルト・ドライブはBに変更されます。C～Hのドライブにデフォルト・ドライブを変更する場合も同様に“C:”などと入力します。ただし、存在しないドライブを指定した場合はエラーとなります。

例1) A>B:

B> (\leftarrow デフォルト・ドライブがBに変更された。)

例2) A>K:

Invalid Drive Specification

A> (\leftarrow K ドライブは無かった。デフォルト・ドライブは不変。)

● コマンドの入力

プロンプトが表示されている状態では、MSX-DOSはコマンドの入力待ちとなっており、ここでコマンドを入力することによって、MSX-DOSに各種の指示を与えることができます。

コマンドには表3.2の3形式が存在します。入力されたこれらのコマンドは、COMMAND.COMというプログラムによって解釈実行されます。MSX-DOSの操作とは、“コマンドを入力する→COMMAND.COMに実行させる”という動作の繰り返しにすぎません。

(1) 内部コマンド	COMMAND.COMの組み込みコマンド。 RAM上に存在するマシン語ルーチンである。 後述の13種類が用意されている。
(2) 外部コマンド	ディスク上に存在するマシン語ルーチンである。 実行時にはディスクからロードされる。 ファイル名に“COM”という拡張子を持つ。
(3) バッチコマンド	複数のコマンドを記述したテキストファイル。 記述した順にコマンドが実行される(バッチ処理)。 ファイル名に“BAT”という拡張子を持つ。

表3.2 3形式のコマンド

● ファイル命名規則

MSX-DOS で扱うファイルは、以下に記述した形式の“ファイルスペック”によって表されます。

- (1) ファイルスペックは「<ドライブ>:<ファイル名>」の形で表される。
- (2) <ドライブ>は A～H の 1 文字で表される。ただし、デフォルト・ドライブを指定する場合は、後のコロン ":" とともに省略できる。
- (3) <ファイル名>は「<ファイル名前部>.<拡張子>」の形で表される。
- (4) <ファイル名前部>は 1 文字以上 8 文字以下の文字列である。8 文字以上指定した場合、9 文字目以降は無視される。
- (5) <拡張子>は 0 文字以上 3 文字以下の文字列である。3 文字以上指定した場合、4 文字目以降は無視される。
- (6) <拡張子>は前のピリオド “.” とともに省略できる。
- (7) <ファイル名前部>および<拡張子>に使用できる文字は表 3.3 のとおりである。
- (8) アルファベットの大文字と小文字は区別されない。

使用可能の文字	A～Z 0～9 \$ & # % ' () - @ ^ { } ~ ' ! 80H～FFH のキャラクタコードに相当する文字
使用不可の文字	" * + , . / : ; = ? [] 00H～20H のキャラクタコードに相当する文字

表3.3 ファイル名として使用可能な文字

● ウィルドカード

ファイルスペックの<名前>および<拡張子>の記述に“ワイルドカード”と呼ばれる特殊文字を使用すると、一度に複数のファイルを指定することができます。ワイルドカードには“?”と“*”の 2 種類があります。

- (1) “?” は任意の 1 文字にあてはまります。

例) “TEXT”, “TEST”, “TENT” ← “TE ? T”
“F1-2.COM”, “F2-6.COM” ← “F ? - ? .COM”

(2) “*”は任意長の文字列にあてはまります。

- 例) “A”, “AB”, “ABC” ← “A *”
 「“COM”という拡張子を持つファイル」 ← “*.COM”
 「すべてのファイル」 ← “*.*”

なお、実際のファイル名とワイルドカードを使用したファイル名を比較する場合、<ファイル名前部>の8文字に満たない部分および<拡張子>の3文字に満たない部分は、スペース(“ ”)で埋められているものとして考えます。このため、“A ? ? ?. ? ?”という指定は、図3.4に示すように“ABCDE.123”とは一致しませんが、“AZ.9”とは一致してしまいます。

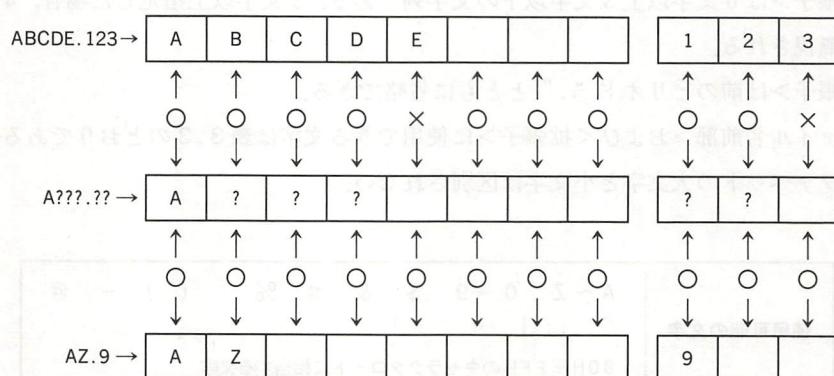


図3.4 ワイルドカードの一一致

また、“*”はいったん8個あるいは3個の“?”と置き換えてから解釈されます。したがって、たとえば“A*B”というファイル名は“Aで始まりBで終わる任意の文字列”とはみなされません。これは下記のように単に“Aで始まる任意の文字列”である、と解釈されてしまいます。

A * B (“*”が“?”に展開される)

↓

A ? ? ? ? ? ? ? B (8文字以降が削除される)

↓

A ? ? ? ? ? ? ?

● デバイス名

MSX-DOSでは、周辺装置(デバイス)とのデータ入出力に特別なコマンドを必要としません。これは、対象となるそれぞれの装置を一種のファイル(デバイスファイル)とみなし、そのファイ

ルに対して読み書きを行うという形で入出力の動作が行われるからです。このため、MSX-DOS のユーザーは、入出力装置をディスク上のファイルとまったく同様に取り扱うことが可能です。MSX-DOS が標準でサポートしているデバイスには表 3.4 に示す 5 種類があり、専用のデバイス名で指定されます。ですからディスク上のファイルに、これらの名前をファイル名として使用することはできません。また、これらのデバイス名にドライブの指定や拡張子を付けたものも、単なるデバイス名と一緒に扱われます。

デバイス名	指定される入出力装置
AUX	入出力拡張用の予約名、普通はNULと同じ効果を持つ。
CON	コンソール（入力として使用された場合はキーボード、出力として使用された場合は画面）。
LST	プリンタ（出力のみ、入力としては使用できない）。
PRN	プリンタ（LSTと同様）。
NUL	結果を画面やファイルに出力したくない場合にダミーとして使用する特別なデバイス。入力に用いると、かならずEOF状態になる。

表3.4 デバイス名

● テンプレートを使用した入力機能

コマンド入力時には“テンプレート”という文字バッファ領域が使用できます。テンプレートには前回入力したコマンド行がそのまま記憶され、コマンド入力時にはキーボードとテンプレートのどちらから読み込みを行うかということが 1 文字ごとに選択できます。このテンプレートの機能を利用すれば、前回に入力したコマンドを再度実行すること、あるいはその一部分だけを書き換えて実行することなどが簡単に行えます。テンプレートを操作するためには、表 3.6 に示したキーを使用します。

● その他の特殊キー

テンプレートを操作するもの以外に、次のコントロールキーが使用できます。これらの特殊キーの機能は、後述する一部のシステムコール使用時にもサポートされます。

	機能
^ C	実行中のコマンドを中断します。
^ S	画面出力を一時停止します。
^ P	画面へ表示する文字を同時にプリンタへ出力するようになります。
^ N	^ P の設定を取り止め、画面出力のみとします。

表3.5 特殊キーの機能

名称	使用するキー	機能
COPY1	[→], ^¥	テンプレートから1文字入力し、コマンドラインに表示する。
COPYUP	[SELECT], ^X	次に指定する文字（キーボードにより指定）の直前までテンプレートから入力し、コマンドラインに表示する。
COPYALL	[↓], ^_	テンプレートの現在参照している位置から行末までの文字をすべて入力し、コマンドラインに表示する。
SKIP1	[DEL]	テンプレートの文字を1文字スキップする。
SKIPUP	[CLS], ^L	次に指定する文字（キーボードにより指定）の直前までテンプレートをスキップする。
VOID	[↑], [ESC], ^^, ^U, ^[テンプレートは変えずに、現在の1行の入力をとりやめる。
BS	[←], [BS], ^H, ^]	1文字分の入力を取り消し、テンプレートの参照位置を1文字前に戻す。
INSERT	[INS], ^R	挿入モード／通常入力モードを切り換える。 挿入モードでは、テンプレートの参照位置を固定したまま、キーボードからの入力をコマンドラインに表示する。
NEWLINE	[HOME], ^K	その時点のコマンドラインの内容をテンプレートに転送する。
リターンキー		その時点のコマンドラインの内容をテンプレートに転送し、それを実行する。
上記以外の通常キー		キーに相当する文字がコマンドラインに表示され、テンプレートの文字を1文字スキップする。

表3.6 テンプレートの機能

キーボード入力	コマンドライン表示	テンプレート内容(_は現在参照位置)
DIR ABCDE	A>DIR ABCDE	_____
[RETURN]	A>	DIR ABCDE
[↓]	A>DIR ABCDE	DIR ABCDE_
[←][←][←]	A>DIR AB	DIR ABCDE
[INS] XYZ	A>DIR ABXYZ	DIR ABCDE
[→][→][→]	A>DIR ABXYZCDE	DIR ABCDE_
[↑]	A>	DIR ABCDE
[↓]	A>DIR ABCDE	DIR ABCDE_
[↑]	A>	DIR ABCDE
XXX	A>XXX	DIR ABCDE
[↓]	A>XXX ABCDE	DIR ABCDE_
[HOME]	A>XXX ABCDE@	XXX ABCDE

表3.7 テンプレート操作の実例

● ディスクエラー

ディスクアクセス時にエラーが発生した場合、MSX-DOSは何回か再試行を試みます。それでもなおエラーが起きるならば、次のメッセージを出力し、どのような対応をするべきか質問してきます。A, R, Iの中からひとつ選んでキーを押してください。

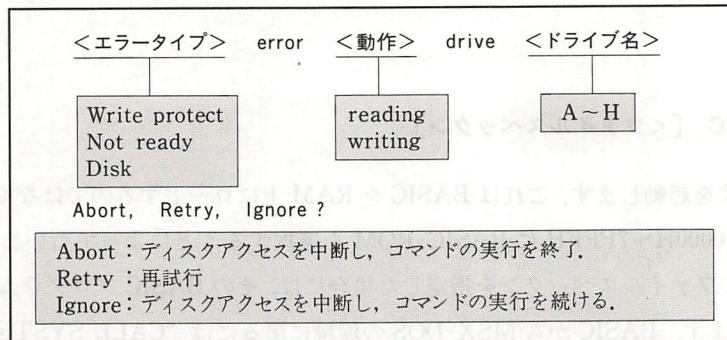


図3.5 エラーの表示

また、この形式以外に次のようなエラーが発生することもあります。これはFATの中のポインタが、存在しないクラスタを指していることを示しています。このエラーが発生した場合、そのディスクケットはもう使用不可能となっています。

Bad FAT

2.2 内部コマンド

内部コマンドは、COMMAND.COMに組み込まれたマシン語プログラムです。ディスクから読み込む必要がなく、高速に実行可能です。内部コマンドには、以下の13種類が用意されています。本節では、これらのコマンドの使用法を解説します。

- BASIC MSX DISK BASICへジャンプする
- COPY ファイルをコピーする
- DATE 日付の表示、変更
- DEL ファイルを削除する
- DIR ファイルの一覧を表示する
- FORMAT ディスクをフォーマットする
- MODE 1行に表示される文字数の変更
- PAUSE バッチコマンドの処理を一時停止する

REM バッチコマンド中にコメント行を入れる
REN ファイル名を変更する
TIME 時刻の表示、変更
TYPE ファイルの内容を出力する
VERIFY ベリファイモードのON/OFFを行う

● BASIC

書式 BASIC [<ファイルスペック>]

DISK-BASIC を起動します。これは BASIC を RAM 上にロードするのではなく、スロット切り換えによって 0000H~7FFFH に BASIC-ROM を選択することによって行いますから、瞬時に起動します。<ファイルスペック>を指定した場合には、その BASIC プログラムを自動的に読み込み、実行します。BASIC から MSX-DOS の環境に戻るには “CALL SYSTEM” を実行します。

● COPY

基本的には、あるファイルの内容を他のファイルにコピーするコマンドです。ただし、パラメータの指定法によって種々の異なった動作を行います。

(1) ファイルの複製

書式 COPY <ファイルスペック1> <ファイルスペック2>

<ファイルスペック1>で指定されるファイルを複製し、<ファイルスペック2>で指定されるファイルを作ります。ただし、ひとつのドライブ上に同じ名前のファイルを作成することはできません。ドライブが異なる場合は、同じファイル名を指定することは可能です。

使用例

A>COPY ABC XYZ ← “ABC”というファイルをコピーし、“XYZ”というファイルを作成する
A>COPY B : ABC XYZ ← B ドライブ上の“ABC”というファイルをコピーし、“XYZ”というファイルを作成する
A>COPY B : ABC C : XYZ ← B ドライブ上の“ABC”というファイルをコピーし、C ドライブ上に“XYZ”というファイルを作成する

ファイルコピーの際、アスキーモードとバイナリモードの選択が可能です。アスキーモードは“／A”スイッチで指定、バイナリモードは“／B”スイッチで指定します。デフォルトではバイナリモードが選択されます(ただし、後述のようにファイルの結合を行う場合、デフォルトの指定はアスキーモード)。両モードの違いを表3.8に示します。

	ソースファイルの読み出し	デスティネーションへの書き込み
アスキーモード	1AH(ファイルエンドマーク) 以降は無視する	最後に1バイトの1AHを付 加する
バイナリモード	物理的なファイルサイズま で読み出す	何も変更せずに書き込む

表3.8 アスキーモードとバイナリモード

使用例

- | | |
|--------------------|------------------------------------|
| A>COPY /A ABC XYZ | ←ABCをXYZにコピーする(両ファイルともアスキーモード) |
| A>COPY ABC/A XYZ/B | ←ABCをアスキーモードで読み出し、XYZにバイナリモードで書き込む |

(2)他のドライブへのファイル複写

書式 COPY <ファイルスペック> [<デスティネーション・ドライブ>:]

<ファイルスペック>で指定されるファイルを、<デスティネーション・ドライブ>に同一のファイル名でコピーします。<デスティネーション・ドライブ>を省略した場合にはデフォルト・ドライブにコピーされます。なお<ファイルスペック>に含まれるドライブ名が<デスティネーション・ドライブ>と一致してはいけません。

<ファイルスペック>にワイルドカードを使用して複数のファイルをコピーすることも可能です。このような場合、ひとつのファイルがコピーされるごとに、そのファイル名が画面に表示されます。

使用例

- | | |
|-----------------|---|
| A>COPY *.COM B: | ←デフォルト・ドライブ上の“COM”という拡張子を持つすべてのファイルをBドライブにコピーする |
| A>COPY B:ABC | ←Bドライブ上のABCというファイルをデフォルト・ドライブ上にコピーする |

(3) 多数ファイルの一括複製

書式 COPY <ファイルスペック1> <ファイルスペック2>
 ワイルドカード記述 ワイルドカード記述

デスティネーションとなる<ファイルスペック2>をワイルドカードを用いて記述した場合、その中のワイルドカードキャラクタに相当する部分は<ファイルスペック1>の対応位置の文字と置き換えられます。たとえば

COPY AB-07.021 FL?X*.V??

を実行すると、図3.6のように解釈され、“FL-X7.V21”というファイルにコピーが作成されます。

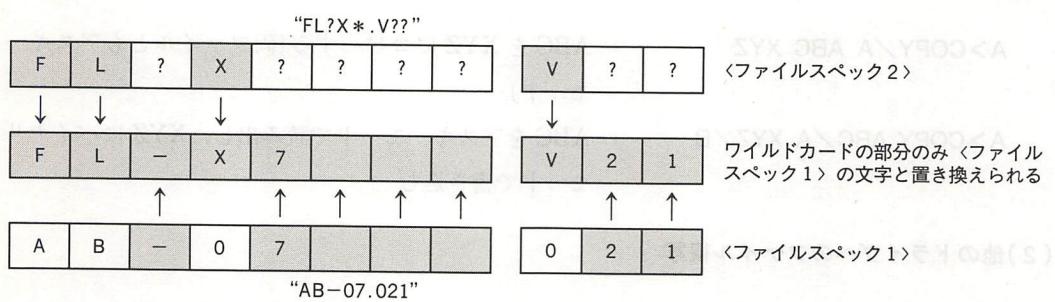


図3.6 デスティネーションファイルのワイルドカード指定

さらに<ファイルスペック1>の指定にもワイルドカードを適用すると、多数のファイルの複製を一度に作成することができます。

使用例

A>COPY *.ASM *.MAC ← “ASM”という拡張子を持つすべてのファイルについて、拡張子を“MAC”に変えたものを作成する

A>COPY A.*.* B:Z.*.* ← Aで始まるファイルの先頭の文字をZに変えたものを、Bドライブに作成する

(4) ファイルの結合

書式 COPY <複数のファイルスペック> <ファイル名>
 ワイルドカードによる指定、あるいは
 複数のファイルスペックを“+”で接続したもの

ソースとなるファイルが複数であり、それを受けたデスティネーションが単独のファイル名の場合、すべてのソースファイルの内容が結合されて、指定したデスティネーションファイルに格納されます。複数のソースファイルを指定するには、ワイルドカードを用いる方法と、個々のファイルスペックをプラス記号“+”で接続する方法があります。

ファイルの結合が行われる際、デフォルトでアスキーモードが選択され、1AHをファイルエンドマークと判断します。そのため、1AHというデータを含むバイナリファイルをCOPYコマンドで結合しようとすると、最初に出てきた1AH以降のデータが欠落してしまいます。これを避けるためには、/Bスイッチを指定し、バイナリモードでCOPYコマンドを使用してください。

また、ソースファイルの指定に2回以上ワイルドカードが現れると、2回目以降のワイルドカードは(3)の場合と同様、最初のファイル名を参照して展開されます。このことを利用すると、同じようなファイルの組の結合が一度に行えます。

使用例

A>COPY X+Y+Z XYZ

←X,Y,Zのファイルを結合し、XYZというファイルに格納する

A>COPY *.LST ALL

←拡張子“LST”を持つすべてのファイルを結合し、ALLというファイルに格納する

A>COPY/B * .DAT ALL

←すべての“.DAT”ファイルをバイナリモードで結合する

A>COPY ASC/A+BIN/B AB/B

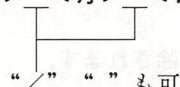
←ASCというアスキーファイルとBINというバイナリファイルを結合してABに格納する

A>COPY *.LST+*.REF *.PRN

←ファイル名前部が等しい、拡張子“LST”的ファイルと、拡張子“REF”的ファイルを結合して、拡張子“PRN”的ファイルを作成する

● DATE

書式 DATE [<年>-<月>-<日>]



内蔵のCLOCK-ICに日付を設定します。CLOCK-ICを持たないMSXの場合は、特定のワークエリアに書き込まれます。MSX-DOSでファイルを作成あるいは変更すると、ここで設定した

日付情報がファイルごとに記録されます。

＜年＞／＜月＞／＜日＞の指定を省略して DATE コマンドを実行した場合には、現在設定されている日付が下図のように表示され、さらに新しい日付の入力待ちとなります。ここで RETURN キーだけを押せば日付は変更されません。

Current date is <曜日> <年>-<月>-<日>

Enter new date :

DATE コマンドで設定する日付のフォーマットは、＜年＞、＜月＞、＜日＞の3つのフィールドを“-”または“/”または“.”で区切って並べたものです。それぞれのフィールドには、次のような数値を与えることができます。

＜年＞：1980～2079(西暦年数)

0～79(2000年～2079年とみなされる)

80～99(1980～1999年とみなされる)

＜月＞：1～12

＜日＞：1～31

なお海外バージョンの MSX-DOS では、日付のフォーマットが異なり、＜月＞-＜日＞-＜年＞または＜日＞-＜月＞-＜年＞の順で表します。

● DEL

書式 DEL <ファイルスペック>

ERASE でも可

指定されたファイルを削除します。<ファイルスペック>にワイルドカードを用いて複数のファイルを指定することもできます。

“DEL *.*”を実行するとディスクケット上のすべてのファイルが削除されるわけですが、あまりにも危険な操作のため、この場合に限り確認を求めてきます。

A>DEL *.*

Are you sure (Y/N) ?

ここで“Y”または“y”を押すと、全ファイルが削除されます。

なお、“ERASE”によっても DEL コマンドと同じファイル削除の操作が可能です。

● DIR

書式 DIR [<ファイルスペック>] [/W] [/P]

<ファイルスペック>で指定したファイルに関して、

<ファイル名> <ファイルサイズ> <作成日> <作成時>

の情報を、左から順に1行に表示します。これらの情報が1行に収まらない場合には、右端に近い項目の表示は省略します。

<ファイルスペック>の指定には、通常のワイルドカードに加えて、以下に示す略記法が使えます。

略記法	正式な記法
DIR	= DIR *.*
DIR <ドライブ> :	= DIR <ドライブ> : *.*
DIR <ファイル名前部>	= DIR <ファイル名前部> .*
DIR .<拡張子>	= DIR *.<拡張子>

/Wスイッチを指定すると、<ファイル名>のみを1行に詰めて表示します。/Pスイッチを指定すると、ファイルの数が多くて画面がスクロールしてしまう場合に、画面が一杯になった時点でのいったん表示を停止し、任意のキーを押すまで待ってくれるようになります。

使用例

A>DIR	←A ドライブ上のすべてのファイルの情報を表示する
A>DIR B :	←B ドライブ上のすべてのファイルの情報を表示する
A>DIR TEST	←“TEST”という<ファイル名前部>を持つすべてのファイルの情報
	を表示する
A>DIR /W	←A ドライブ上にあるすべてのファイル名を表示する

● FORMAT

書式 FORMAT

ディスクケットを、MSX-DOS用にフォーマットします。すなわち、ディレクトリとFATを初期化し、すべてのファイルを消去します。MSX-DOSはMS-DOSと同一のディスクフォーマットを持っていましたから、ここでフォーマットしたディスクケットはMS-DOSからも自由に書き込み／読み出しが可能です。

FORMAT コマンドを実行すると、

Drive name? (A, B) (←ドライブの数によって異なる)

のように、フォーマットしたいディスクの入っているドライブ名を質問してきます。これに“A”または“B”と答えると、片面フォーマットと両面フォーマットを選択できるドライブを使用している場合はメニューが表示されます。そこでフォーマットの種類を指定すると、

Strike a key when ready

と表示してキー入力待ち状態になります。ここで任意のキーを押すとフォーマット作業が始まります。フォーマットのメニューについては、ディスクドライブの説明書をご覧ください。

● MODE

書式 MODE <1行の文字数>

画面の1行に表示される文字数を設定します。<1行の文字数>には、1~80の値が設定でき、その値に応じてスクリーンモードも変わります。

<1行の文字数> スクリーンモード

1~32	GRAPHIC1(SCREEN 1)
33~40	TEXT1(SCREEN 0:WIDTH 40)
41~80	TEXT2(SCREEN 0:WIDTH 80)

● PAUSE

書式 PAUSE [<コメント>]

MSX-DOS には、テキストファイルに記述された一連のコマンドを自動的に実行する“バッチ処理”的機能があります。このバッチ処理の実行中に、ディスクの差し替え操作などのためコマンド処理の流れを一時停止させたいことがあります。PAUSE コマンドは、そのような場合に使用します。

このコマンドが実行されると、まず画面に

Strike a key when ready...

と表示されて、キー入力待ちとなります。ここで Ctrl-C 以外の任意のキーを押せば、PAUSE コマンドは終了し、作業が先へ進みます。Ctrl-C を押すと、バッチ処理を中断します。“PAUSE”

の後ろにはどんなコメントを書いてもかまいません。これを利用して、何のためにキー入力待ちとなったのか表示することもできます。

● REM

書式 REM [<コメント>]

バッチコマンド中にコメントを記述するために用いられます。コマンドとして何も実行しません。なお、“REM”と<コメント>の間はスペースを空けなければいけません。

● REN

書式 REN <ファイルスペック> <ファイル名>
RENAME も可

<ファイルスペック>で指定したファイルの名前を変更する命令です。<ファイルスペック>、<ファイル名>とともに、ワイルドカードを使用することができます。<ファイル名>をワイルドカードで指定した場合には、ワイルドカード部分は<ファイルスペック>の対応する位置の文字に置き換えられます(COPY コマンド参照)。

すでに存在するファイルと同じ名前に変更しようとするとエラーになります。

使用例

A>REN ABC XYZ ←“ABC”というファイル名を“XYZ”に変更する

A>REN B:ABC XYZ ←B ドライブ上の“ABC”というファイル名を“XYZ”に変更する

A>REN *.BIN *.COM ←ファイルの拡張子が“BIN”であるものを、すべて“COM”に変更する

● TIME

書式 TIME [<時> [:<分> [:<秒>]]]

内蔵のCLOCK-ICに時刻を設定します。CLOCK-ICを持たないMSXの場合は、何も起こりません。MSX-DOSでファイルを作成あるいは変更すると、ここで設定した時刻情報がファイルごとに記録されます。

時刻の指定を省略してTIMEコマンドを実行した場合には、現在設定されている時刻が次のように表示され、さらに新しい時刻の入力待ちとなります。この時RETURNキーだけを押せば時

刻は変更されません。

Current time is <時> : <分> : <秒> . <秒/100> <p または a>

Enter new time :

TIME コマンドで設定する時刻のフォーマットは、<時>、<分>、<秒>の3つのフィールドを“：“で区切って並べたものです。<分>以降あるいは<秒>以降は省略可能あり、省略すると0とみなされます。それぞれのフィールドには、次のような数値を与えることができます。

<時> : 0~23

- | | |
|--------|-----------------|
| 12A | (0時とみなされる) |
| 0A~11A | (0時~11時とみなされる) |
| 12P | (12時とみなされる) |
| 1P~11P | (13時~23時とみなされる) |

<分> : 0~59

<秒> : 0~59

使用例

A>TIME 12 ←時刻を12:00:00に設定

A>TIME 1:16P ←時刻を13:16:00に設定

● TYPE

書式 TYPE <ファイルスペック>

<ファイルスペック>で指定したファイルの内容を画面に表示するためのコマンドです。<ファイルスペック>にワイルドカードを使用すると、それに一致する最初のファイルを表示します。このコマンドは、アスキーファイルの表示を目的としたものであり、バイナリファイルを表示すると画面におかしなコントロールキャラクタが送られてしまいます。

● VERIFY

書式 VERIFY {ON | OFF}

ベリファイモードの設定／解除を行います。ベリファイモードをONに設定しておくと、ディスクへのデータ書き込みの後にはかならずそれを読み出し、書き込みが正しく実行されたことをチェックします。ただし、その分ディスクアクセスに要する時間は長くなります。デフォルトでは、“VERIFY OFF”に設定されています。

2.3 バッチコマンドの使用法

MSX-DOSには、いくつかのコマンドを操作手順にしたがって並べておき、その流れに沿って自動的に一連の処理を実行させる機能があります。この操作手順が書かれているファイルを“バッチファイル”と呼び、バッチファイルによって定義される一連の操作を“バッチコマンド”と呼びます。

バッチファイルには、拡張子“BAT”が付けられます。そしてそのファイル名(から拡張子“BAT”を除いた部分)をコマンドラインから入力すると、MSX-DOSはファイルから1行ずつコマンドを読み込み、次々と実行していきます。

たとえば次のような処理を考えてみましょう。

1. Aドライブ上の“COM”という拡張子を持ったファイルを、すべてBドライブにコピーする。
2. Bドライブに最終的に集まった“.COM”ファイルの一覧表を表示する。
3. Aドライブの“.COM”ファイルをすべて削除する。

この処理は次のようなコマンドをMSX-DOSに順に与えることで実現できるはずです。

```
A>COPY A:*.COM B:  
A>DIR B:.COM/W  
A>DEL A:*.COM
```

もし、この3行をまとめて“MV.BAT”というバッチファイルを作成しておけば、コマンドラインから“MV”と入力するだけで自動的に目的の処理が実行できることになります。以下にその実行例を示します。

<pre>A>COPY CON MV.BAT COPY A:*.COM B: DIR B:.COM/W DEL A:*.COM ^Z</pre>	} “MV.BAT”的作成 Ctrl-Z+リターンキーの入力
<pre>A>TYPE MV.BAT COPY A:*.COM B: DIR B:.COM /W DEL A:*.COM</pre>	

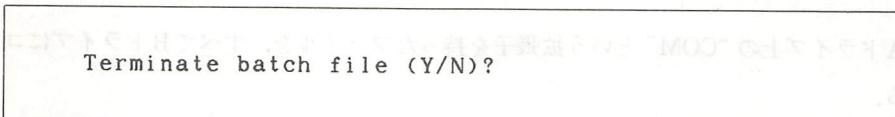
} “MV.BAT”的確認

```

A>MV                                バッチコマンド "MV" を起動
A>COPY A : *.COM B :                1行目の自動読み込みとその処理
:
A>DIR B : .COM                      2行目の自動読み込みとその処理
:
A>DEL A : *.COM                     3行目の自動読み込みとその処理
:

```

バッチコマンドの途中で Ctrl-C が押された場合、その時点で実行していた行の処理は中断され、さらに画面に図3.7 のように表示されて入力待ちになります。



Terminate batch file (Y/N)?

図3.7 バッチ処理の中断

ここで "Y" を選択するとバッチコマンド全体が終了して MSX-DOS に戻り、"N" を選ぶとバッチファイルの次の行が読み込まれて、バッチコマンド自体の処理は続けられます。

● バッチ変数

バッチコマンドをより柔軟に使用するため、バッチコマンドにはコマンドラインから任意の文字列をパラメータとして渡すことができます。渡されたパラメータは、バッチコマンドの中で、"% n (nは0~9の数字1文字)" の記号で参照されます。この "% n" をバッチ変数と呼びます。

バッチ変数 %1, %2, ……は、コマンドラインで指定したパラメータと左から順に対応し、%0 はバッチコマンド自身の名前に対応します。

```

A>COPY CON TEST.BAT .....バッチコマンドの作成
REM %0 %1 %2 %3
^Z
      1 file copied
A>TYPE TEST.BAT
REM %0 %1 %2 %3 .....3つの引数を表示するバッチコマンド

A>TEST ONE TWO THREE FOUR .....バッチコマンドに引数を与えて実行
A>REM TEST ONE TWO THREE
A>

```

図3.8 バッチ変数の使用例

● AUTOEXEC.BAT

“AUTOEXEC.BAT”という名前のバッチファイルは、MSX-DOSでは特にMSX-DOS起動時のオートスタートプログラムとして使用されます。MSX-DOSが起動した時、COMMAND.COMはこのAUTOEXEC.BATファイルが存在するかどうかを調べ、もし存在すれば実行します。

2.4 外部コマンド

外部コマンドは拡張子“COM”を持つファイルの形でディスクケット上に存在し、この外部コマンドの名前(から拡張子を除いた部分)をコマンドラインから入力すると以下の手順で実行に移されます。

- ①外部コマンドを100H番地以降にロードする
- ②100H番地をコールする

● 外部コマンドの作成

100H番地に置かれて動作するようなマシン語ルーチンを作成し、それに“COM”という拡張子を持つファイル名を付けてセーブすれば、そのままMSX-DOSから実行可能な外部コマンドとなります。

たとえば、1文字出力ルーチン(システムコール参照)を使ってコントロールコード“0CH”を出力し、画面のクリアを行うプログラムを考えます。これは次のように8バイトのサイズになります。

リスト3.1 CLS.COMの内容

1E 0C	LD E,0CH ; E := control-code of CLS
0E 02	LD C,02H ; C := function No. of CONSOLE OUTPUT
CD 05 00	CALL 0005H ; call BDOS
C9	RET

この8バイトをCLS.COMという名前のファイルに書き込めば、画面をクリアする外部コマンド“CLS”が完成します。次のサンプルプログラムは、BASICのシーケンシャルファイル・アクセスの機能を利用し、これを作るものです。プログラムを実行し終えると、CLSコマンドがディスクケット上に作成されています。MSX-DOSに戻って動作を確かめてください。

リスト3.2 CLS.COMの作成

```

100 '===== This program makes "CLS.COM" =====
110 '
120 OPEN "CLS.COM" FOR OUTPUT AS #1
130 '
140 FOR I=1 TO 8
150   READ D$
160   PRINT #1,CHR$(VAL("&H"+D$));
170 NEXT
180 '
190 DATA 1E,0C,0E,02,CD,05,00,C9

```

● 外部コマンドへの引数の受け渡し

引数を持った外部コマンドを作成する場合、コマンドラインからその外部コマンドに引数を渡す方法が2つあります。まず、ファイル名を引数としてコマンドに渡したい時には、システム・スクラッチャリヤの5CH番地と6CH番地を用います。COMMAND.COMは外部コマンド実行の際、つねにコマンドラインの第1パラメータおよび第2パラメータをファイル名とみなし、それをドライブ番号(1バイト)+ファイル名前部(8バイト)+拡張子(3バイト)に展開して5CH番地および6CH番地に格納します。これはFCBの先頭の12バイトと同じ形式を持っていますので、これらの番地をFCBの先頭アドレスとして設定することによって、ファイルのオープンをはじめとする種々の操作が可能です。ただし、この方法では両FCBの先頭アドレスの差は16バイトしかありませんから、完全なFCBとして使用できるのは5CH番地または6CH番地の片方だけです。次に、数値などのファイル名以外の引数をコマンドに渡したい場合、または3つ以上のファイル名を扱うような外部コマンドを作成する場合には、DMA領域(初期設定アドレス0080H)を用います。DMA領域には、COMMAND.COMによって、その外部コマンドが起動されたコマンドライン全体からコマンド名自身を除いた部分が、そのバイト数(1バイト)+コマンドライン本体の形式で格納されていますから、外部コマンド内でそれを適当に解釈して利用することができます。4章のリスト3.3にこのDMA領域を用いた引数の受け渡しの例がありますので参照してください。

3 章 ディスクファイルの構造

システムコールを用いてディスクをアクセスする場合にどうしても必要なのは、ディスク上のデータがどのような構造を持ち、どんな方法で管理されているか、という情報です。そこで本章では、まず MSX-DOS におけるディスクとのデータのやりとりの基本単位となる“論理セクタ”的説明から始め、最終的には人間にとて最も便利な“ファイル”によるデータ管理の方法まで話を進めます。

3.1 ディスク上のデータ単位

● セクタ

MSX-DOS は、3.5インチ 2DD でもハードディスクでも、いかなるタイプのディスクドライブも基本的にアクセスが可能です。それらの異なるメディアを統一的に扱うため、システムコールでは“論理セクタ”をディスク上のデータの基本単位として考えます。論理セクタは 0 から順に付けられた番号によって指定されます。

● クラスタ

システムコールを使用している限りでは、前述のとおりセクタがデータの基本単位であると考えて間違いはありません。ところが、実際にはディスク上のデータは複数のセクタから成る“クラスタ”を単位として管理されています。FAT の項で述べるように、クラスタは 2 から始まる通し番号で指定され、データ領域の先頭がクラスタ #2 の位置に相当します。1 クラスタが何セクタから成るかという情報を得るには、ファンクション 1BH (ディスク情報の獲得) のシステムコールを用います。

● クラスタからセクタへの換算

後述のディレクトリや FCB には、ディスク上のデータの位置がクラスタで示されている部分があります。クラスタで示されたこれらのデータをシステムコールでアクセスするためには、あるクラスタが何番のセクタに対応しているか、という関係を求めなければなりません。これは、クラスタ #2 とデータ領域の開始セクタが同一の位置に存在しているという事実をもとに、以下の

ように計算することができます。

1. 与えられたクラスタ番号をCとする。
2. データ領域の開始セクタを調べ(DPBを読む), これをS0とする。
3. 1クラスタが何セクタに相当するか調べ(ファンクション1BH), これをnとする。
4. 求めるセクタ番号Sは $S = S0 + (C-2) * n$ の計算で得られる。

MSX-DOSでは、ディスクの中のセクタを表3.9に示す4つの領域に分けています。ディスクに書き込まれたファイルデータの本体は“データ領域”的部分に記録され、それ以外の3つの領域にはデータを管理するための情報が書き込まれています。これらの位置関係は図3.9のとおりです。ブートセクタはかならずセクタ#0に存在しますが、FAT、ディレクトリ、データ領域の開始セクタの位置はメディアによって異なるため、DPBを参照する必要があります。

ブートセクタ	MSX-DOSの起動プログラムとディスク固有の情報
FAT	ディスク上のデータの物理的な管理情報
ディレクトリ	ディスク上のファイルの管理情報
データ領域	実際のファイルデータ

表3.9 ディスクの内容

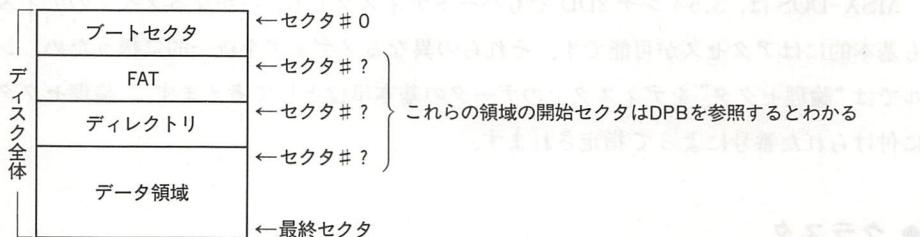


図3.9 ディスクの中の要素の位置関係

● DPB(ドライブ・パラメータ・ブロック)とブートセクタ

MSX-DOSでは、接続されている個々のドライブごとに“DPB”という領域がメモリ上のワーカエリアに設けられ、各ドライブに固有の情報が記録されます。MSX-DOSは3.5インチ2DD, 5インチ2Dなど、どのようなタイプのディスクドライブにも対応可能となっていますが、それはこのDPBを参照して個々のドライブに対応した処理を行うことによって、メディア間の差異が吸収できるからに他なりません。

DPBに書き込まれる情報は、もともとはディスク上のブートセクタ(セクタ#0)に存在しているものであり、それがMSX-DOSの起動時に読み出されてきます。ただし、ブートセクタの内容とDPBの内容には図3.10と図3.11に示すように、データの並べ方などの点で多少の違いがあります。

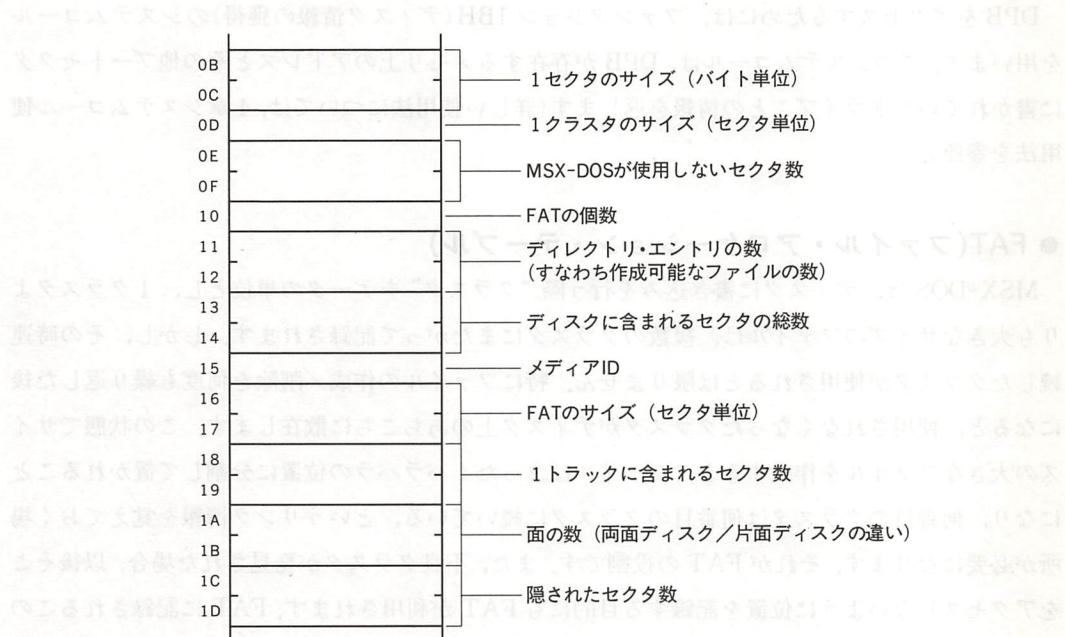


図3.10 ブートセクタの情報

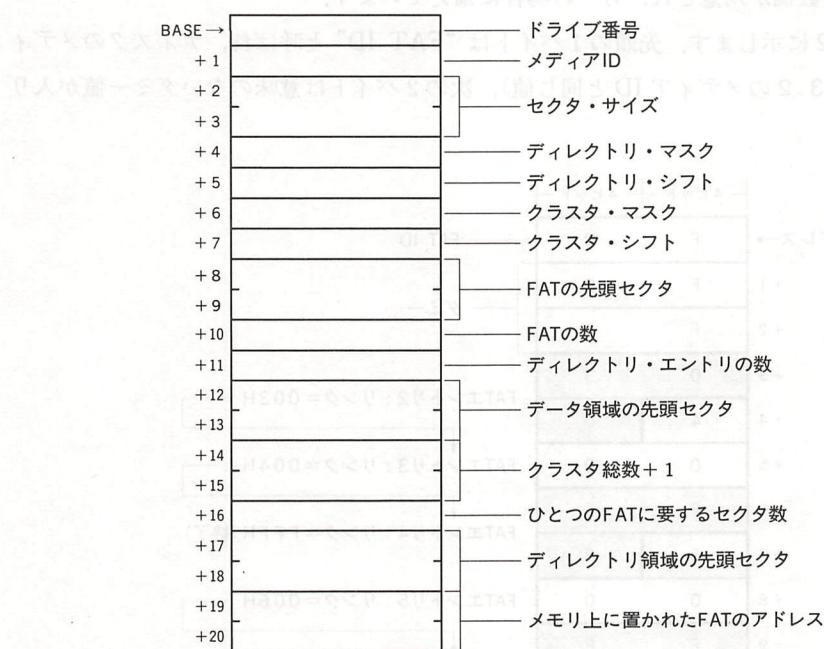


図3.11 DPBの構造

DPB をアクセスするためには、ファンクション 1BH(ディスク情報の獲得)のシステムコールを用います。このシステムコールは、DPB が存在するメモリ上のアドレスとその他ポートセクタに書かれていたドライブごとの情報を返します(詳しい使用法については、4 章システムコール使用法を参照)。

● FAT(ファイル・アロケーション・テーブル)

MSX-DOS は、ディスクに書き込みを行う際“クラスタ”をデータの単位とし、1 クラスタよりも大きなサイズのファイルは、複数のクラスタにまたがって記録されます。しかし、その時連続したクラスタが使用されるとは限りません。特にファイルの作成／削除を何度も繰り返した後になると、使用されなくなったクラスタがディスク上のあちこちに散在します。この状態でサイズの大きなファイルを作成すると、ファイルはまったくバラバラの位置に分割して置かれることになり、何番目のクラスタは何番目のクラスタに続いている、というリンク情報を覚えておく場所が必要になります。それが FAT の役割です。また、不良クラスタが発見された場合、以後そこをアクセスしないように位置を記録する目的にも FAT が利用されます。FAT に記録されるこのようなクラスタのリンク情報や不良クラスタ情報は、ディスクファイルを管理する上で不可欠なものであり、一部でも破損してしまうとディスク全体が使用できなくなる恐れがあります。そのため FAT はつねに複数個が用意され、万一の場合に備えています。

FAT の例を図 3.12 に示します。先頭の 1 バイトは“FAT ID”と呼ばれ、ディスクのメディアタイプを示す値(表 3.2 のメディア ID と同じ値)，次の 2 バイトは意味のないダミー値が入り

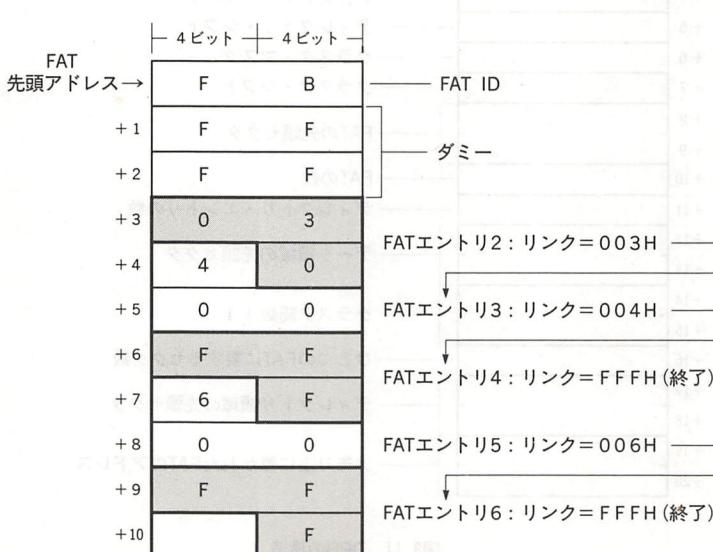


図3.12 FATの実例

ます。そしてその次から、1クラスタにつき12ビットという変則的なフォーマットで実際のリンク情報が記録されます。それぞれのリンク情報を記録している12ビットの領域はFATエントリと呼ばれます。FATエントリは2番から始まることに注意してください。FATエントリの番号は、それに対応するクラスタの番号もあります。FATエントリに記録された12ビットのリンク情報は、図3.13の要領で読み取ってください。

リンク情報は、次に続くクラスタ番号を示す値です。もしFFFHとなっている場合は、そのクラスタでファイルが終了したことを意味します。図3.12の例では、クラスタ#2→クラスタ#3→クラスタ#4、という3クラスタ分の大きさのファイルと、クラスタ#5→クラスタ#6、の2クラスタ分のファイルが存在していることがわかります(クラスタが番号の小さい順にリンクしているのは図を見やすくするために、実際には番号順である必要はない)。

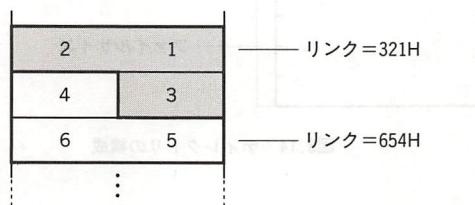


図3.13 FATの読み方

● ディレクトリ

前述のFATはディスク上のデータの物理的な位置関係を表すものであり、そこに書き込まれたデータ内容に関する情報は含んでいません。したがって、あるファイルがどのようなデータから構成されているかを知るには、FATとは別の情報源が必要です。これが“ディレクトリ”です。ディレクトリは32バイトで構成され、図3.14に示すようにファイル名、ファイル属性、作成の日付、作成の時刻、ファイルの先頭クラスタ番号、ファイルサイズの各情報を記録しています。

ディレクトリ中にある“ファイル属性”は、ファイルに不可視属性を設定するもので。このバイトの下から2ビット目を“1”にすると、そのディレクトリで指定されるファイルはシステムコールではアクセス不可能となります(図3.15参照)。ファイル属性バイトはMS-DOSのディレクトリにも同じものが存在し、そちらでは1バイト中の他のビットを用いて書き込み禁止属性などを設定することもできるのですが、MSX-DOSにはその機能は備わっていません。

日付と時刻は、図3.16、3.17に示すように、それぞれ2バイトの領域を3つのビットフィールドに分割して記録しています。“秒”用のビットフィールドが5ビットしかないため、時間の最小単位は2秒となっています。“年”は7ビットに0~99の値を設定することで、西暦1980年~2079年を表します。

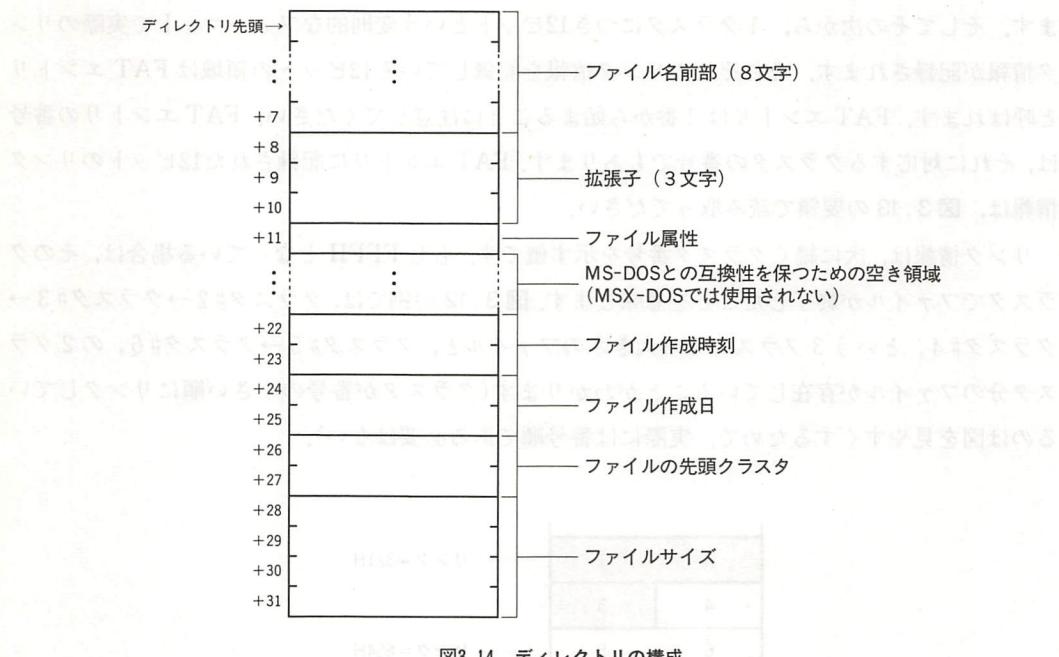


図3.14 ディレクトリの構成

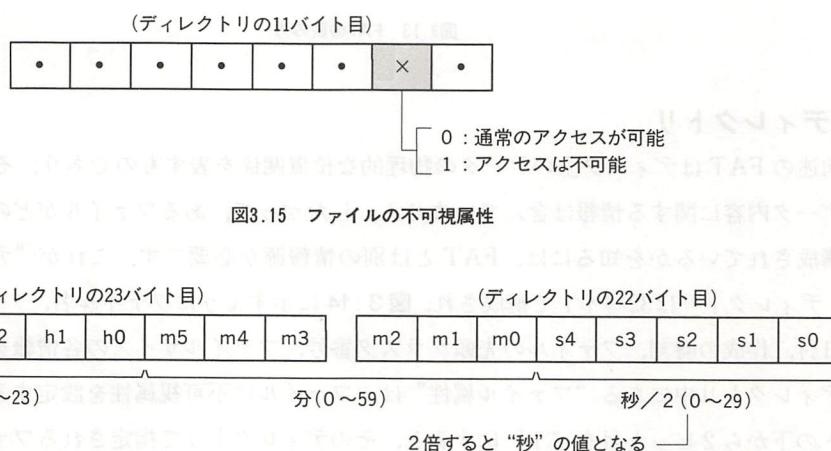


図3.16 時刻を表すビットフィールド

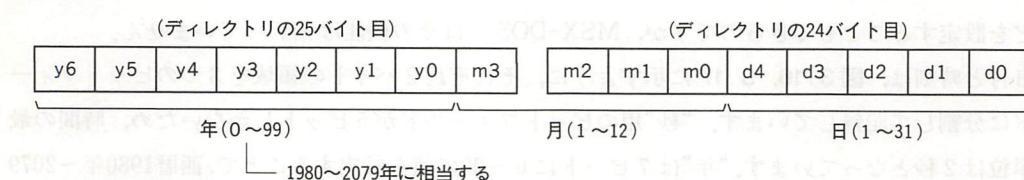


図3.17 日付を表すビットフィールド

このディレクトリ情報が実際に記録されている場所が、ディスク上のディレクトリ領域です(図3.9参照)。その位置(先頭セクタ)は、DPBに記録されています。ディレクトリ領域には、図3.8に示すように32バイトごとにディレクトリ・エントリ(ディレクトリの格納場所)が並んでいます。ファイルの作成を行うと、使われていないディレクトリ・エントリの中で、番号がいちばん小さいところに目的のファイルのディレクトリが作られます。ファイルが削除されると、該当するディレクトリ・エントリの最初の1バイトにE5Hが書き込まれ、そのディレクトリ・エントリが空いたことを示します。ディレクトリ・エントリがすべて使用されてしまうと、データ領域がいくら残っていても新しいファイルを作ることはできません。ディレクトリ・エントリの数、すなわち1枚のディスク上に作成できるファイルの数も、DPBに記録されています。

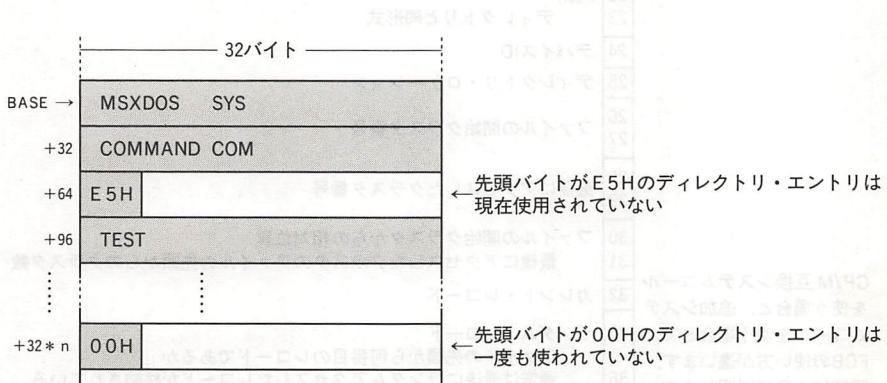


図3.18 ディレクトリ領域の構成

3.2 ファイルのアクセス

● FCB(ファイル・コントロール・ブロック)

ディレクトリ領域に記録された情報を用いると、データを“ファイル”として扱うことが可能となります。この方法の特徴は、データの位置をセクタ番号やクラスタ番号のような具体的な数値で表現するのではなく、“名前”を用いてファイルを指定できるという点にあります。目的のファイルがディスク上のどのアドレスに存在しているか、ということはすべてシステムコールにまかせ、人間はただファイル名を指示するだけでそれをアクセスできるのです。この時、ディレクトリとともに大きな役割を果たすものがFCBです。

FCBは、システムコールを用いてファイルを扱う際、必要となる情報を格納しておく領域です。ひとつのファイルを扱うごとに図3.19で示すような37バイトのメモリが必要になります。FCBはメモリ上のどこに置かれてもかまいませんが、MSX-DOSの機能を活かすため、005CHのアドレスがしばしば用いられます。

FCB 先頭からのバイト数	↓	ドライブ番号
0		ファイル名
1		ファイル名前部..... 8バイト
2		拡張子..... 3バイト
3		カレント・ブロック
4		ファイルの先頭から現在のブロックまでのブロック数
5		レコードサイズ
6		1 ~ 65535
7		ファイルサイズ
8		1 ~ 4294967296
9		日付
10		ディレクトリと同形式
11		時刻
12		ディレクトリと同形式
13		デバイスID
14		ディレクトリ・ロケーション
15		ファイルの開始クラスタ番号
16		最後にアクセスしたクラスタ番号
17		CP/M 互換システムコール
18		使う場合と、追加シス
19		テムコールを使う場合とで、
20		FCBの使い方が違います。
21		詳細は4章で説明します。
22		カレント・ブロック
23		ランダム・レコード
24		ファイルの先頭から何番目のレコードであるか
25		通常は最後にランダムアクセスしたレコードが格納されている
26		最後にアクセスしたクラスタ番号
27		ファイルの開始クラスタからの相対位置
28		最後にアクセスしたクラスタのファイルの先頭からのクラスタ数
29		ランダム・レコード
30		ファイルの先頭から何番目のレコードであるか
31		通常は最後にランダムアクセスしたレコードが格納されている
32		最後にアクセスしたクラスタ番号
33		ファイルの開始クラスタからの相対位置
34		最後にアクセスしたクラスタのファイルの先頭からのクラスタ数
35		ランダム・レコード
36		ファイルの先頭から何番目のレコードであるか

図3.19 FCBの構造

・ ドライブ番号(00H)

ファイルの存在するディスクドライブを示します。

(0 → デフォルト・ドライブ, 1 → A : , 2 → B :)

・ ファイル名前部(01H~08H)

ファイル名前部は最大8文字まで指定可能です。8文字に満たない場合は、その分がスペース(20H)で埋められます。

・ 拡張子(09H~0BH)

拡張子は最大3文字まで指定可能です。3文字に満たない場合は、その分がスペース(20H)で埋められます。

・ カレント・ブロック(0CH~0DH)

シーケンシャル・アクセスの際、参照中のブロック番号を示します(4章のファンクション14H, 15H参照)。

• レコードサイズ(0EH~0FH)

1回のアクセスで読み出しあるいは書き込みを行うデータ単位(レコード)のサイズをバイト数で指定します(ファンクション 14H, 15H, 21H, 22H, 27H, 28H 参照)。

• ファイルサイズ(10H~13H)

バイト単位で、ファイルの大きさを示します。

• 日付(14H~15H)

最後にファイルに書き込みを行った日付を示します。フォーマットはディレクトリに記録されているものと同様です。

• 時刻(16H~17H)

最後にファイルに書き込みを行った時刻を示します。フォーマットはディレクトリに記録されているものと同様です。

• デバイス ID(18H)

周辺装置をファイルとしてオープンする場合、このデバイス ID フィールドに表3.10のような値が設定されます。通常のディスクファイルの場合には、このフィールドの値は40H+ドライブ番号です。

デバイス名	デバイスID
CON (Console)	0FFH
PRN (Printer)	0FBH
LST (List=Printer)	0FCH
AUX (Auxiliary)	0FEH
NUL (Null)	0FDH

表3.10 デバイスID

• ディレクトリ・ロケーション(19H)

ディレクトリ領域の中で、何番目のディレクトリ・エントリに該当するファイルであるかを示します。

• 先頭クラスタ(1AH~1BH)

ディスクにおけるファイルの先頭のクラスタを示します。

• 最終アクセスクラスタ(1CH~1DH)

最後にアクセスされたクラスタを示します。

• 最終アクセスクラスタの先頭クラスタからの相対位置(1EH~1FH)

最後にアクセスされたクラスタの先頭クラスタからの相対位置を示します。

・カレントレコード(20H)

シーケンシャルアクセスの際、現在参照中のレコードを示します(ファンクション14H, 15H参照)。

・ランダムレコード(21H～24H)

ランダムアクセスおよびランダムブロックアクセスの際、アクセスしたいレコードを指定します。前記のレコードサイズフィールドを1～63の値に設定していると21H～24Hの4バイト全体が使用されますが、レコードサイズが64以上の場合には21H～23Hの3バイトしか意味を持ちません(ファンクション14H, 15H, 21H, 22H, 27H, 28H参照)。

● ファイルのオープン

FCBを用いてファイルをアクセスするには、まずファイルをオープンする手続きが必要になります。“ファイルのオープン”とは、システムコールのレベルでは、ファイル名フィールドだけが定義された不完全なFCBを、ディレクトリエリアに記された情報を用いて完全なFCBに変換することを意味しています。図3.20に“オープンされていないFCB”と“オープンされたFCB”的違いを示します。

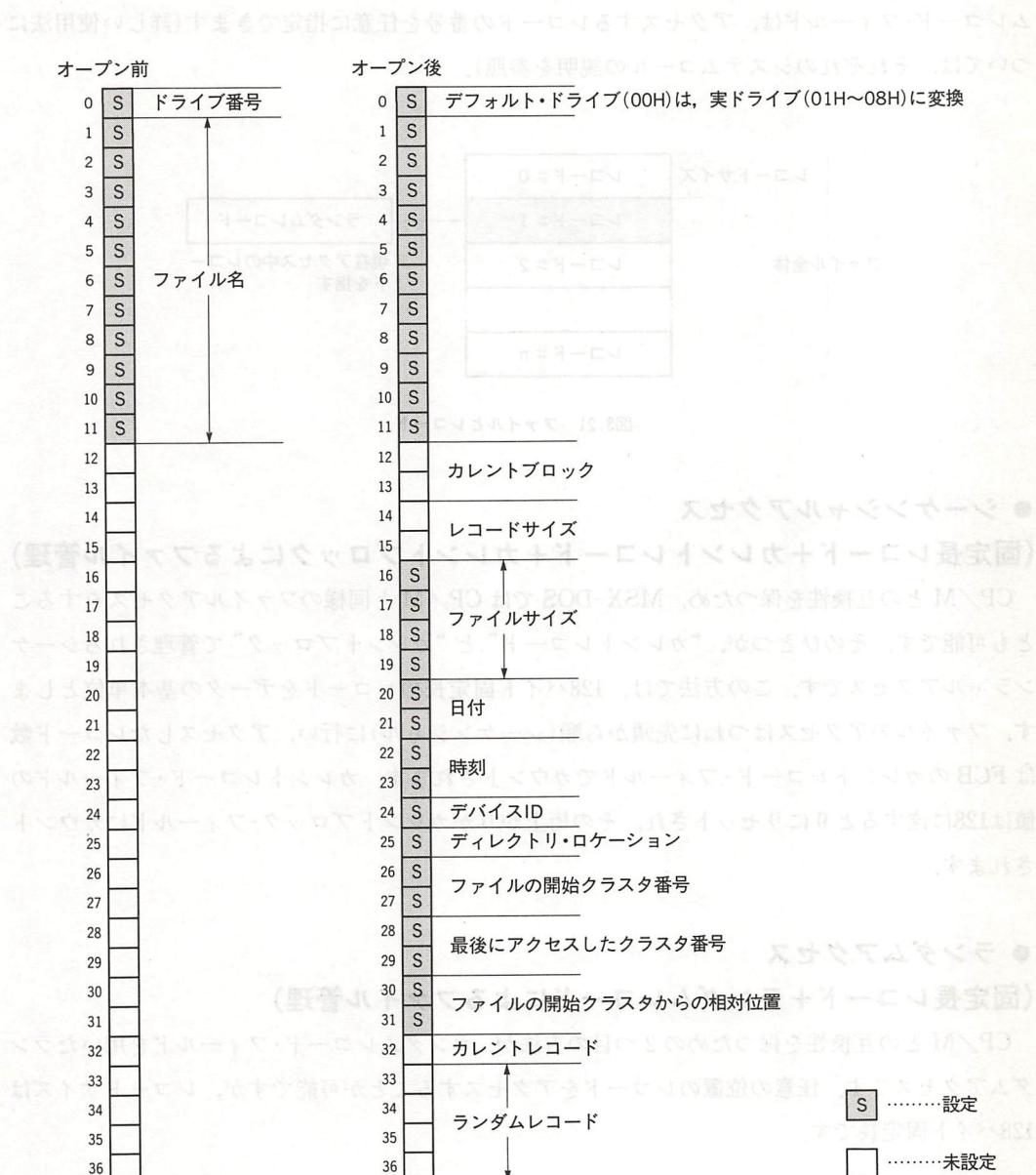
● ファイルのクローズ

ファイルをオープンして書き込みを行った場合、それに伴って、ファイルサイズをはじめとするFCBの各フィールドの内容も変更を受けます。この更新されたFCBの情報をディレクトリ領域に戻しておかないと、次回ファイルをアクセスする際に、ディレクトリの情報と実際のファイルの内容がくい違ってしまいます。更新されたFCBの情報をディレクトリに戻すというこの操作が、システムコールにおけるファイルのクローズに相当します。

● ランダム・ブロック・アクセス(レコードによるファイル管理)

MSX-DOSには、“RANDOM BLOCK READ”および“RANDOM BLOCK WRITE”という、たいへん有能なシステムコールが存在します。このシステムコールを用いると、ファイルを任意の大きさのデータ単位に分割し、その先頭から順に0, 1, 2…という番号を付けて管理できます。このデータ単位を“レコード”と呼びます。レコードのサイズは1バイト以上であればどんな値を設定してもかまいません。ひとつのファイル全体を1レコードとして扱うこと(究極のシーケンシャルアクセス)も、データ1バイトずつを1レコードとして扱うこと(究極のランダムアクセス)も、128バイトを1レコードとして扱うこと(CP/M方式)も可能です。

その際、FCBの“レコードサイズ”と“ランダムレコード”的両フィールドがレコードの指定に用いられます。レコードサイズ・フィールドの値は1レコードのバイト数を示します。ランダ



ムレコード・フィールドは、アクセスするレコードの番号を任意に指定できます(詳しい使用法については、それぞれのシステムコールの説明を参照)。

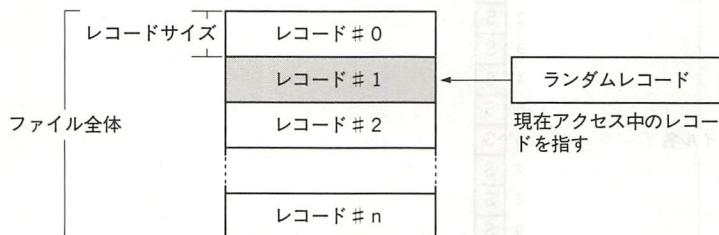


図3.21 ファイルとレコード

● シーケンシャルアクセス

(固定長レコード+カレントレコード+カレントブロックによるファイル管理)

CP/Mとの互換性を保つため、MSX-DOSではCP/Mと同様のファイルアクセスをすることも可能です。そのひとつが、“カレントレコード”と“カレントブロック”で管理されるシーケンシャルアクセスです。この方法では、128バイト固定長のレコードをデータの基本単位とします。ファイルのアクセスはつねに先頭から順(シーケンシャル)に行い、アクセスしたレコード数はFCBのカレントレコード・フィールドでカウントされます。カレントレコード・フィールドの値は128に達すると0にリセットされ、その桁上がりがカレントブロック・フィールドにカウントされます。

● ランダムアクセス

(固定長レコード+ランダムレコードによるファイル管理)

CP/Mとの互換性を保つための2つ目の方法が、ランダムレコード・フィールドを用いたランダムアクセスです。任意の位置のレコードをアクセスすることが可能ですが、レコードサイズは128バイト固定長です。

4 章 システムコールの使用法

システムコールとは、MSX-DOS の基本的な入出力操作を行う BDOS を、汎用のサブルーチンとしてまとめたもので、あらかじめ決められた手順にしたがってシステムコールを呼び出すことによって MSX のディスクシステムが持つ基本的な機能が簡単に実行できます。

システムコールの役割には、大きく分けると次の 2 つがあります。1 つは、基本的な機能をあらかじめ用意することによってユーザーの負担を少なくすること。もう 1 つは、すべてのプログラムが基本的な機能を共有することによって、移植性や汎用性を高めることです。システムコールを自由自在に活用することによって、プログラム開発の期間は短縮され、できあがったプログラムは移植性の高いものとなります。

システムコールを実行するには、Z80CPU の C レジスタに決められたファンクション番号を入れ、次のアドレスをコールします。

0005H	MSX-DOS
F37DH(&HF37D)	MSX DISK-BASIC

たとえば、ファンクション番号が 01FH であり、前準備として A レジスタに 00H をセットすることになっているシステムコールがあるとすると、MSX-DOS の場合、このシステムコールは次のようにして呼び出します。

```

LD   A, 00H
LD   C, 01FH
CALL 0005H
:

```

CALL 文の後には、戻り値(処理の結果)を受け取ったり、退避していたレジスタを復帰させたりする事後処理が続きます。システムコールは DISK-BASIC から利用することもでき、その場合は F37DH 番地がエントリ・アドレスとなります。この場合には、実際は CLEAR 文で確保した領域にマシンコードを格納し、その先頭アドレスをUSR 関数で呼び出してやることになります。

● システムコールの形式

本章では、以下の書式によってシステムコールの使用法を紹介します。

ファンクション：ファンクション番号

設定：システムコールを行う前にレジスタやメモリ上にセットすべき値

戻り値：システムコールから戻った時にセットされている値

ファンクション番号とは、さまざまなシステムコールの種類を判別するためのもので、それぞれのシステムコールに対応する番号が決められています。システムコールを呼び出す時には、このファンクション番号をCレジスタにセットします。

設定：

また、システムコールの前準備として、レジスタやメモリに必要な値をセットしなければならないことがあります、これを本章では“設定：”の部分に示します。

戻り値：

システムコールの結果得られた値は、多くの場合レジスタやメモリの内容にセットされることになります。これを、本章では出力と呼びますが、この出力がどこに、どのようにセットされているかを“戻り値：”の部分に示します。

ただし、システムコールを使用した後では、この戻り値としてセットされるレジスタやメモリ以外のレジスタの内容が破壊されていることがあります。そこで、システムコールを使用する場合には、そのシステムコールを呼び出す前に、破壊されてしまうレジスタの内容を、適当な場所(スタックなど)に退避させておくようにしてください。

MSXのシステムコールは表3.11に示す42個ありますが、本章ではこれらを次の4つに分類して説明します。

- ・周辺装置とのI/O
- ・環境設定
- ・アブソリュートREAD/WRITE(セクタの直接アクセス)
- ・FCBを用いたファイルアクセス

ファンクションNo.	機能	ファンクションNo.	機能
00H	システムリセット	14H	シーケンシャルなファイルの読み出し
01H	コンソールから1文字入力(入力待ちあり, エコーバックあり, コントロールコードチェックあり)	15H	シーケンシャルなファイルの書き込み
02H	コンソールへ1文字出力	16H	ファイルの作成
03H	補助入力装置から1文字入力	17H	ファイル名の変更
04H	補助出力装置へ1文字出力	18H	ログイン・ペクトルの獲得
05H	プリンタへ1文字出力	19H	デフォルト・ドライブ名の獲得
06H	コンソールから1文字入力(入力待ちなし, エコーバックなし, コントロールコードチェックなし)/1文字出力	1AH	DMAアドレスの設定
07H	コンソールから1文字入力(入力待ちあり, エコーバックなし, コントロールコードチェックなし)	1BH	ディスク情報の獲得
08H	コンソールから1文字入力(入力待ちあり, エコーバックなし, コントロールコードチェックあり)	1CH~20H	無効
09H	文字列出力	21H	ランダムなファイルの読み出し
0AH	文字列入力	22H	ランダムなファイルの書き込み
0BH	コンソールからの入力チェック	23H	ファイルサイズの獲得
0CH	バージョン番号の獲得	24H	ランダムレコード・フィールドの設定
0DH	ディスクリセット	25H	無効
0EH	デフォルト・ドライブの選択	26H	ランダムブロック書き込み
0FH	ファイルのオープン	27H	ランダムブロック読み出し
10H	ファイルのクローズ	28H	ランダムなファイルの書き込み(不用部を00Hで埋める)
11H	ワイルドカードに一致する最初のファイルの検索	29H	無効
12H	ワイルドカードに一致する2番目以降のファイルの検索	2AH	日付の獲得
13H	ファイルの抹消	2BH	日付の設定
		2CH	時刻の獲得
		2DH	時刻の設定
		2EH	ペリファイ・フラグの設定
		2FH	論理セクタの読み出し
		30H	論理セクタの書き込み

表3.11 システムコール一覧

● 使用上の注意

システムコールのファンクション番号は00Hから30Hまでですが、この中には以下に示す7個の無効なシステムコールがあります。

1CH~20H, 25H, 29H

これらの無効なシステムコールを呼び出した場合には、Aレジスタに00Hがセットされる以外は何も行いません。また、ファンクション31H以降のシステムコールは未定義であり、使用した場合の結果は不定(安全性を保証できない)となりますので注意してください。

リスト3.3 ユーティリティ・ルーチン

```

=====
; List 3.3 utility.mac
; these routines are used in other programs
; GETARG, STOHEX, PUTHEX, PUTCHR, DUMP8B
=====

PUBLIC GETARG          ; 本プログラムリストに含まれる5つのユーティリティ・ルーチンは、後述のサンプルプログラム中で利用される。
PUBLIC STOHEX
PUBLIC PUTHEX
PUBLIC PUTCHR
PUBLIC DUMP8B

BDOS EQU 0005H
DMA   EQU 0080H

----- DE := address of arg(A)'s copy -----
GETARG: PUSH AF          ; デフォルトのDMA領域(0080H～)に格納されたコマンド
        PUSH BC          ; ラインの第nパラメータ(nはAレジスタで指定)をメモリに取り込み、その先頭アドレスをDEレジスタに返す。
        PUSH HL
        LD    C,A
        LD    HL,DMA
        LD    B,(HL)
        INC   HL
        INC   B

SKPARG: DEC B
        JR   Z,NOARG
SKP1:  LD   A,(HL)
        INC  HL
        CALL TRMCHK
        JR   NZ,SKP1
SKP2:  LD   A,(HL)
        INC  HL
        CALL TRMCHK
        JR   Z,SKP2
        DEC  HL
        DEC  C
        JR   NZ,SKPARG

CPYARG: LD   DE,BUFMEM
CPY1:   LD   A,(HL)
        LD   (DE),A
        INC  HL
        INC  DE
        CALL TRMCHK
        JR   NZ,CPY1
        DEC  DE
        LD   A,'$'
        LD   (DE),A
        LD   DE,BUFMEM
        JR   EXIT

NOARG:  LD   DE,BUFMEM
        LD   A,'$'
        LD   (DE),A

```

```

----- EXIT: -----
EXIT:  POP    HL
      POP    BC
      POP    AF
      RET

----- TRMCHK: -----
TRMCHK: CP    09H
        RET   Z
        CP    0DH
        RET   Z
        CP    .
        RET   Z
        CP    ;;
        RET

----- HL := hexadecimal value of [DE] -----
STOHEX: PUSH   AF
        PUSH   DE
        LD     HL, 0000H
        CALL   STOH1
        POP    DE
        POP    AF
        RET

----- STOH1: -----
STOH1: LD     A, (DE)
        INC   DE
        SUB   '0'
        RET
        CP    10
        JR    C, STOH2
        SUB   'A' - '0'
        RET
        CP    6
        RET
        NC
        ADD   A, 10
STOH2: ADD   HL, HL
        ADD   HL, HL
        ADD   HL, HL
        ADD   HL, HL
        OR    L
        LD    L, A
        JR    STOH1

----- print A-reg. in hexadecimal form (00-FF) -----
PUTHEX: PUSH   AF
        RR    A
        RR    A
        RR    A
        RR    A
        CALL   PUTHX1
        POP    AF
PUTHX1: PUSH   AF
        AND   0FH
        CP    10
        JR    C, PUTHX2
        ADD   A, 'A' - 10 - '0'
PUTHX2: ADD   A, '0'
        CALL   PUTCHR
        POP    AF
        RET

```

出入力操作用の関数を用いて、データを入出力する。主に音を構成する音関数である。また、音の出力用の関数である。

```

;----- put character -----
PUTCHR: PUSH AF
        PUSH BC
        PUSH DE
        PUSH HL
        LD E,A
        LD C,02H
        CALL BDOS
        POP HL
        POP DE
        POP BC
        POP AF
        RET

;----- dumps 8byte of [HL]~[HL+7] in hexa & ascii form -----
DUMP8B: PUSH HL
        LD B,8
DUMP1: LD A,(HL)
        INC HL
        CALL PUTHEX
        LD A,'.'
        CALL PUTCHR
        DJNZ DUMP1
        POP HL
        LD B,8
DUMP2: LD A,(HL)
        INC HL
        CP 20H
        JR C,DUMP3
        CP 7FH
        JR NZ,DUMP4
DUMP3: LD A,'.'
DUMP4: CALL PUTCHR
        DJNZ DUMP2
        LD A,0DH
        CALL PUTCHR
        LD A,0AH
        CALL PUTCHR
        RET

;----- work area -----
BUFMEM: DS 256
END

```

4.1 周辺装置とのI/O

入出力に利用するシステムコールであり、コンソール(画面／キーボード)やAUX(外部入出力)，プリンタなどに関する制御を行います。文字列入力やプリンタ出力などのサブルーチンを作成するのは、多くのプログラムに必要なルーチンワークですが、本節のシステムコールを利用することにより、簡単に汎用的なプログラムを組むことができます。

● コンソール入力

ファンクション：01H

設定：なし

戻り値：Aレジスタ←コンソールから入力した1文字

入力がない場合(キーが押されておらず、入力バッファも空の場合)には、入力待ちを行う。入力された文字はコンソールにエコーバックされる。以下に示すコントロールキャラクタの入力が可能であり、Ctrl-Cを受け付けるとプログラムの実行を中断してMSX-DOSのコマンドレベルに戻る。Ctrl-Pを受け付けると、以後の入力はすべてプリンタにもエコーバックされるようになり、この状態は、Ctrl-Nを受け付けることで解除される。

Ctrl-C システム・リセット

Ctrl-P プリンタへのエコー開始

Ctrl-N プリンタへのエコー停止

● コンソール出力

ファンクション：02H

設定：Eレジスタ←出力する文字コード

戻り値：なし

Eレジスタで指定した文字を画面に表示する。Ctrl-Sの入力があると表示動作を停止するが、任意のキー押すことによって再び表示動作を開始する。

● 外部入力

ファンクション：03H

設定：なし

戻り値：Aレジスタ←AUXデバイスから読み込んだ1文字

● 外部出力

ファンクション：04H

設定：Eレジスタ←AUXデバイスに出力するキャラクタコード

戻り値：なし

● プリンタ出力

ファンクション：05H

設定：Eレジスタ←プリンタに出力するキャラクタコード
戻り値：なし

● 直接コンソール入出力

ファンクション：06H

設定：Eレジスタに0FFHをセットすれば入力、0FFH以外をセットすれば出力となる。Eレジスタに0FFH以外の値がセットされていた場合は、セットされた値をキャラクタコードとみなしてコンソールに出力する。

戻り値：Eレジスタが0FFHにセットされていた場合(入力)には、Aレジスタに入力の結果がセットされる。Aレジスタにセットされる値は、キーが押されていた場合はそのキャラクタコード、押されていなかった場合は00Hとなる。Eレジスタが0FFH以外にセットされていた場合(出力)には、戻り値はなし。

コントロールキャラクタのサポート、入力のエコーバックは行わない。

● 直接コンソール入力 その1

ファンクション：07H

設定：なし

戻り値：Aレジスタ←コンソールから入力した1文字

コントロールキャラクタのサポートは行わない。エコーバックは行わない。

● 直接コンソール入力 その2

ファンクション：08H

設定：なし

戻り値：Aレジスタ←コンソールから入力した1文字

エコーバックは行わない。コントロールキャラクタはファンクション01Hと同様に処理する。

● 文字列出力

ファンクション：09H

設定：DEレジスター←メモリ上に用意した、コンソールに出力するべき文字列の先頭アドレス

戻り値：なし

文字列の最後には、終端記号として24H(" \$ ")を付加しておく必要がある。ファンクション02

H(コンソール出力)と同様に CTRL-S を処理する。

● 文字列入力

ファンクション: 0AH

設定: 最大入力文字数(1~0FFH)をセットしたメモリのアドレスを, DE レジスタにセットする。

戻り値: DE レジスタに示されたアドレスに 1 を加えたアドレスにはコンソールから実際に入力された文字数を, DE レジスタに示されたアドレスに 2 を加えたアドレス以降には, コンソールから入力された文字列をセットする。

リターンキーの入力をコンソールからの入力の終端とみなす。ただし, 入力文字数が指定の文字数(DE レジスタで示されるアドレスの内容=1~255)を超える場合には, 指定の入力文字数までを入力文字列とみなしてメモリにセットした後, 処理を終了する。次の文字からリターンキーまでの入力は無視される。このシステムコールによる文字列入力時には, テンプレートによる編集が可能である。

● コンソールの状態チェック

ファンクション: 0BH

設定: なし

戻り値: キーボードが押されていた場合には 0FFH を, 押されていなかった場合 00H を, A レジスタにセットする。

4.2 環境の設定と読み出し

デフォルト・ドライブの変更やシステムのさまざまなデフォルト値のセットなど, MSX システムの環境設定を行うためのシステムコールです。

● システム・リセット

ファンクション: 00H

設定: なし

戻り値: なし

MSX-DOS 上からコールした場合には, 0000H に分岐することによってシステムがリセットされる。MSX DISK-BASIC 上からコールした場合には, MSX DISK-BASIC がウォームスター

ト(Warm Start)する。つまり、ロードされているプログラムを破壊せずに BASIC のコマンドレベルに戻る。

● バージョン番号の獲得

ファンクション：0CH

設定：なし

戻り値：HLレジスタ←0022H

このシステムコールは、CP/Mにおける、さまざまな CP/M のバージョン番号を獲得するためのものであるが、MSX-DOS の場合には、一律に0022Hがセットされる。

文や数値や文字列を入力するときに下から上郵便の表示のとおりに記入の一例を示す。

● ディスクリセット

ファンクション：0DH

設定：なし

戻り値：なし

変更されたがまだディスクに書き込まれていないセクタがあれば、それをディスクに書き込んだ後、デフォルト・ドライブをAドライブにセットし、DMAを0080Hにセットする。

● デフォルト・ドライブの設定

ファンクション：0EH

設定：Eレジスター←デフォルト・ドライブ番号(A=00H, B=01H, ...)

戻り値：なし

システムコールによるディスクアクセスは、特に指定しない限りデフォルト・ドライブ番号で示されるデフォルト・ドライブに対して行われる。ただし、システムコールを呼び出す際に指定されたFCBにセットされているドライブ番号が00H以外であった場合には、本システムコールによってセットされているデフォルト・ドライブの設定は無視される。

● ログイン・ベクトルの獲得

ファンクション：18H

設定：なし

戻り値：HL レジスタ←オンライン・ドライブ情報

オンライン・ドライブとは、MSXに正常な状態で接続され、かつその電源が投入されているドライブを指す。このシステムコールを実行すると各ドライブがオンラインであるか否かを調べ、

その結果を図3.22のようにHLレジスタに入れて返す。それぞれのビットが“1”ならば対応するドライブはオンラインであり，“0”ならばそうでないことを示す。

レジスタ名	H								L							
ビット番号	7	6	5	4	3	2	1	0	7	6	5	4	3	2	1	0
ドライブ名	MSX-DOSでは意味を持たない								H:	G:	F:	E:	D:	C:	B:	A:
オンライン/オフライン	各ビットについて、オンラインなら1が、オフなら0がセットされる。															

図3.22 ログイン・ベクトル

● デフォルト・ドライブ番号の獲得

ファンクション：19H

設定：なし

戻り値：Aレジスタ←デフォルト・ドライブ番号(A=00H, B=01H, ...)

● 転送先アドレスの設定

ファンクション：1AH

設定：DEレジスタ←設定する転送先アドレス(DMAアドレス)

戻り値：なし

DMAアドレスは、システムリセット時に0080Hに初期化されるが、このファンクション1AHのシステムコールを用いることによって、任意のアドレスに設定し直すことができる。

● ディスク情報の獲得

ファンクション：1BH

設定：Eレジスタ←目的のディスクが入っているドライブ番号

(デフォルト・ドライブ=00H, A=01H, B=02H...)

戻り値：Aレジスタ←1クラスタあたりの論理セクタ数

(Eレジスタの設定が不適当だった場合FFH)

BCレジスタ←論理セクタのサイズ

DEレジスタ←クラスタの総数

HLレジスタ←未使用クラスタの総数

IXレジスタ←DPBの先頭アドレス

IYレジスタ←メモリ上のFATの先頭アドレス

指定ドライブのディスクの情報を得るシステムコールである。ドライブ番号に00Hを指定する

とデフォルト・ドライブの指定になる。それ以外は、A ドライブなら01H, B ドライブなら02H, …を指定する。

このシステムコールは MSX-DOS 用に変更されたもので、CP/M との互換性はない。

● 日付の獲得

ファンクション：2AH

設定：なし

戻り値：HLレジスタ←年

Dレジスタ←月

Eレジスタ←日

Aレジスタ←曜日

このシステムコールは MSX-DOS 用に増設されたもので、CP/M との互換性はない。

● 日付の設定

ファンクション：2BH

設定：HL レジスタ←年

Dレジスタ←月

Eレジスタ←日

戻り値：設定が成功したかどうかを A レジスタにセットする。成功なら00H が、失敗なら 0FFH がセットされる。

このシステムコールは MSX-DOS 用に増設されたもので、CP/M との互換性はない。

● 時刻の獲得

ファンクション：2CH

設定：なし

戻り値：H レジスタ←時 (1 台目～3 台目まで) A レジスタ←分 (1 台目～3 台目まで)

Lレジスタ←分

Dレジスタ←秒

Eレジスタ←1/100 秒

このシステムコールは MSX-DOS 用に増設されたもので、CP/M との互換性はない。

● 時刻の設定

ファンクション: 2DH

設定: H レジスタ ← 時

L レジスタ ← 分

D レジスタ ← 秒

E レジスタ ← 1/100 秒

戻り値: 成功なら 00H が、失敗なら 0FFH が A レジスタにセットされる。

このシステムコールは MSX-DOS 用に増設されたもので、CP/M との互換性はない。

● ベリファイ・フラグの設定

ファンクション: 2EH

設定: ベリファイ・フラグをリセットする時には、E レジスタ ← 00H

ベリファイ・フラグをセットする時には、E レジスタ ← 00H 以外の値

戻り値: なし

ベリファイ・フラグを設定すると、以後のディスクに対する書き込みがベリファイ付きで行われるようになる。つまり、書き込んだ後でその内容をディスクから読み出して、書き込むべき内容と比較して等しいかどうかをチェックする。

このシステムコールは MSX-DOS 用に増設されたもので、CP/M との互換性はない。

4.3 アブソリュート READ/WRITE(セクタの直接アクセス)

MSX では、“論理セクタ”と呼ばれるものを最小の単位としてディスクを管理しています。論理セクタとは、ディスクの物理的なセクタとは無関係に定められたセクタであり、第 0 論理セクタから最大論理セクタ(ディスクの種類によってその数は異なる)までの一連の番号が付けられています。

この論理セクタのおかげで、MSX-DOS や MSX DISK-BASIC のユーザーは、ディスクのメディアタイプによって異なる 1 トラックごとの物理セクタ数の違いを考慮せずにディスクをアクセスすることが可能となっています。実際には FCB(ファイル・コントロール・ブロック)を介するシステムコールを用いることで、論理セクタさえも意識しない手軽でキメ細かなファイルの取り扱いができますから、この論理セクタを実際に使用する必要はありません。しかし、論理セクタを用いたアクセスも用途によっては必要であり、MSX-DOS および MSX DISK-BASIC では、論理セクタのアクセスするシステムコールも用意しています。

本節では、この論理セクタのアクセスを行うシステムコールを説明します。

● 論理セクタを用いた読み出し

ファンクション：2FH

設定：読み出しを開始する論理セクタの番号(複数の場合はその先頭の論理セクタ番号)をDEレジスタにセットする。読み出す論理セクタの個数をHレジスタに、読み出すディスクのドライブ番号(A:00H, B:01H...)をLレジスタにセットする。

戻り値：読み込んだ内容を DMA バッファにセットする。

指定ドライブの指定論理セクタから、指定された個数の(連続した)論理セクタを読み出し、その内容を DMA 以降のメモリに格納する。その際、格納されるメモリ領域は、ファンクション1AH(転送先アドレスの設定)によって充分な量(読み出す論理セクタの個数×論理セクタのサイズバイト以上)を確保しておく必要がある。

このシステムコールは MSX-DOS 用に増設されたもので、CP/M との互換性はない。

● 論理セクタを用いた書き込み

ファンクション：30H

設定：書き込む内容を DMA で示されるアドレス以降のメモリ領域にセットする。
書き込みを始める論理セクタの番号を、DE レジスタにセットする。書き込む論理セクタの個数を H レジスタにセットする。書き込むドライブ番号(A:00H, B:01H...)を L レジスタにセットする。

戻り値：なし

このシステムコールは MSX-DOS 用に増設されたもので、CP/M との互換性はない。

リスト3.4 クラスタ・ダンプ

```
=====
; List 3.4      cluster dump
; This program must link List 3.3
=====

EXTRN  GETARG      コマンドラインで指定した任意クラスタの先頭の128バイ
EXTRN  STOHEX     トをダンプする。
EXTRN  PUTHEX
EXTRN  PUTCHR
EXTRN  DUMP8B

BDOS   EQU    0005H

----- program start -----
LD     A,1
CALL  GETARG      ;[DE] := 1st argument of command line
CALL  STOHEX      ;HL := evaluate [DE] as hexadecimal
                  ;      this is target cluster No.
```

```

PUSH    HL
LD      E,00H          ;request the default drive
LD      C,1BH          ;get disk information
CALL    BDOS
POP    HL
CP      0FFH          ;fail ?
JR      NZ,L2          ;if not fail, A := sector/cluster and goto L2

LD      DE,ERMSG1      ;[DE] := 'Cannot get Disk information.'
LD      C,09H          ;string output function
CALL    BDOS
RET

L2:   LD      E,(IX+12)    ;DE := 1st sector of data area
LD      D,(IX+13)
DEC    HL
DEC    HL              ;HL := cluster No. - 2
LD      B,H
LD      C,L              ;BC := cluster No. - 2
LOOP: DEC    A              ;Count N times
      JR      Z,RESULT
      ADD    HL,BC
      JR      LOOP
RESULT: ADD   HL,DE          ;HL := sector of target cluster
      PUSH   HL          ;save target sector
      LD      DE,NEWDMA    ;we reserved 1024 bytes area for DMA
      LD      C,IAH          ;Set DMA address function
      CALL   BDOS
      LD      C,19H
      CALL   BDOS          ;default drive ?
      LD      L,A
      POP    DE          ;DE := target sector
      LD      H,1              ;H := 1 (read 1 sector only)
      LD      C,2FH          ;absolute read function
      CALL   BDOS          ;data will be set into DMA

DUMP:  LD      HL,NEWDMA    ;HL := DMA address
      LD      DE,0000H        ;DE := relative address from cluster top
      LD      B,16            ;dump 16 lines
DLOOP: PUSH   BC
      LD      A,D
      CALL   PUTHEX
      LD      A,E
      CALL   PUTHEX
      LD      A,' '
      CALL   PUTCHR
      PUSH   HL
      LD      HL,8
      ADD    HL,DE
      EX      DE,HL          ;DE := DE+8
      POP    HL
      CALL   DUMP8B          ;8 bytes dump subroutine (in another file)
      POP    BC
      DJNZ   DLOOP
      RET                 ;all work have done.

----- work area -----
NEWDMA: DS     1024          ;Private DMA area
ADRS:  DS     2
ERMSG1: DB     'Cannot get Disk information.$'
ERMSG2: DB     'Cannot read that cluster.$'

END

```

4.4 FCB を用いたファイルアクセス

前節で述べた論理セクタを直接読み書きするタイプのシステムコールでは、ファイル単位のアクセスが非常に困難であり、ファイルを基本としたディスクアクセスを行うためには、FCB を介するシステムコールを使用する必要があります。

FCB を用いるシステムコールには、大きく分けて次の 3 つの種類が存在します。1 つはシーケンシャル・ファイルアクセスであり、もう 1 つはランダム・ファイルアクセスです、この 2 つは CP/M との互換性を保つために用意されたシステムコールであり、MSX-DOS が持っている力を充分に引き出すものとはいえません。それに対して、3 つ目のランダム・ロック・アクセスは MSX システムに独自のシステムコールになっています。このランダム・ロック・アクセスは、次のような特徴を持っています。

- ・レコードサイズを任意に設定できる
- ・複数のレコードをランダムにアクセスできる
- ・ファイルの大きさをバイト単位で管理できる

本節では、このランダム・ロック・アクセスを含む、FCB を利用したファイルアクセスのためのシステムコールを説明します。

● ファイルのオープン

ファンクション：0FH

設定：DE レジスター←オープンされていない FCB の先頭アドレス

戻り値：ファイルのオープンが成功すれば 00H を、失敗すれば 0FFH を A レジスタにセットする。ファイルのオープンが成功した場合には、指定された FCB の各フィールドの設定が行われる

ドライブ番号に 00H をセットすると、ファンクション 0EH(デフォルト・ドライブの設定)によって設定されているデフォルト・ドライブによる指定が有効になる。デフォルト・ドライブ以外のファイルをオープンする場合には、A ドライブなら 01H、B ドライブなら 02H、…のように指定する。

このシステムコールを利用してファイルをオープンすると、ディスク上のディレクトリ領域の情報から、レコードサイズ、カレントブロック、カレントレコード、ランダムレコードの各フィールドを除く、すべての FCB のフィールドが設定される。設定されないフィールドについては、本システムコール実行後にユーザーが必要に応じて設定する必要がある。FCB の各フィールドがセットされたこの状態が、FCB を介するシステムコールを利用するユーザーにとって真に

“ファイルがオープンされた状態”であり、以下に説明する、FCBを用いたファイルアクセスを行うシステムコールが利用できるようになる。

● ファイルのクローズ

ファンクション：10H

設定：DEレジスタ←オープンされたFCBの先頭アドレス

戻り値：ファイルのクローズが成功すれば00Hを、失敗すれば0FFHをAレジスタにセットする。さらにFCBのドライブ番号を設定する。

現在のメモリ上のFCBの内容をディスク上の該当するディレクトリ・エリアに書き込むことによって、ファイルの更新に関する整合性を保つ。ファイルに対して読み込みしか行っていない場合には、このシステムコールを使ってファイルをクローズする必要はない。

● ファイルの検索 その1

ファンクション：11H

設定：DEレジスタ←オープンされていないFCBの先頭アドレス

戻り値：ファイルが見つかった場合には00Hを、見つからなかった場合には0FFHをAレジスタにセットする。見つかった場合にはさらに、DMAで示される領域にそのファイルのディスク上のディレクトリ・エントリ(32バイト)をセットする。また、FCBのドライブ番号もセットする。

ファイル名にはワイルドカード・キャラクタを使用することができる。たとえば、ワイルドカード・キャラクタを使って“????????.c”という指定を行うと、「先頭の文字列は何でもよいが、末尾に“.c”が付くファイル名」を検索し、最初にマッチしたファイルのディレクトリ情報をDMA以降に書き込む。マッチするすべてのファイルを検索したい場合や、マッチするファイルが1個だけかどうかを知りたい場合には、次に紹介するファンクション12Hを利用する必要がある。

● ファイルの検索 その2

ファンクション：12H

設定：なし

戻り値：見つかった場合には00Hを、見つからなかった場合には0FFHをAレジスタにセットする。見つかった場合にはさらに、DMAで示される領域にそのファイルのディレクトリ・エントリ(32バイト)をセットする

このシステムコールは、ファンクション11Hのワイルドカード・キャラクタによるファイル名の指定とマッチした複数のファイルを検索する時に使用するもので単独で使用しても意味がない。

このシステムコールを使用すると、ファンクション11Hによってマッチした複数のファイルのディレクトリ情報を、1つずつ順番に得ていくことができる。

● ファイルの抹消

ファンクション：13H

設定：DE レジスタ←オープンされた FCB の先頭アドレス

戻り値：抹消が成功した場合には00Hを、失敗した場合には 0FFH を A レジスタにセットする

ファイル名にワイルドカード・キャラクタを使用して、複数のファイルを一度に抹消することができる。

● シーケンシャルな読み出し

ファンクション：14H

設定：DE レジスタ←オープンされた FCB の先頭アドレス

FCB のカレントブロック←読み出しを開始するブロック

FCB のカレントレコード←読み出しを開始するレコード

戻り値：読み込みが成功すれば 00H を、失敗すれば 01H を A レジスタにセットする。
成功した場合には、読み込んだ 1 レコードを DMA で示される領域にセットする

FCB のカレントブロックとカレントレコードは、読み込み後に自動的に更新される。つまり、連続して読み込む場合には、カレントブロックとカレントレコードをセットする必要はない。読み込むレコードサイズは128バイト固定。

● シーケンシャルな書き込み

ファンクション：15H

設定：DE レジスタ←オープンされた FCB の先頭アドレス

FCB のカレントブロック←書き込みを開始するブロック

FCB のカレントレコード←書き込みを開始するレコード

DMA 以降の128バイト←書き込むデータ

戻り値：書き込みが成功すれば 00H を、失敗すれば 01H を A レジスタにセットする。

FCB のカレントブロックとカレントレコードは、書き込み後に自動的に更新される。

● ファイルの作成

ファンクション：16H

設定：DE レジスタ←オープンされていない FCB の先頭アドレス

戻り値：ファイルの作成が成功すれば00Hを、失敗すれば0FFHをAレジスタにセットする

FCB 中のレコードサイズ、カレントブロック、カレントレコード、ランダムレコードの各フィールドについては、これらを本システムコールの実行後に必要に応じてセットしておく必要がある。

● ファイル名の変更

ファンクション：17H

設定：旧ファイル名に対応する FCB の18バイト目(FCB のファイルサイズ・フィールドの2バイト目=旧ファイル名の16バイト後方)からの11バイトに(18~28バイト)新ファイル名をセットし、その FCB のアドレスを DE レジスタにセットする

戻り値：ファイル名の変更が成功すれば00Hを、失敗すれば0FFHをAレジスタにセットする

新旧ファイル名に、ワイルドカード・キャラクタ“?”を使用できる。たとえば、旧ファイル名に“?????????.o”を、新ファイル名に“?????????.obj”を指定すれば、“.o”という拡張子を持つすべてのファイルについて、拡張子を“.obj”に変更することができる。

● ランダムな読み出し

ファンクション：21H

設定：DE レジスタ←オープンされた FCB の先頭アドレス

FCB のランダムレコード←読み出すレコード

戻り値：読み込みが成功すれば 00H を、失敗すれば 01H を A レジスタにセットする。

読み込みが成功した場合には、DMA で示される領域に読み込んだ 1 レコードの内容をセットする

レコードの大きさは128バイト固定長。

● ランダムな書き込み

ファンクション：22H

設定：DEレジスタ←オープンされたFCBの先頭アドレス

FCBのランダムレコード←書き込むレコード

DMA以降の128バイト←書き込むデータ

戻り値：書き込みが成功すれば00Hを、失敗すれば01HをAレジスタにセットする

レコードの大きさは128バイト固定長。

● ファイルサイズの獲得

ファンクション：23H

設定：DEレジスタ←オープンされたFCBの先頭アドレス

戻り値：ファイルサイズの獲得が成功すれば00Hを、失敗すれば0FFHをAレジスタにセットする。獲得が成功すれば、FCBのランダムレコード・フィールドに、指定されたファイルの128バイト単位のサイズをセットする。

ファイルのサイズは128バイト単位で計算されます。つまり、200バイトであれば2が、257バイトであれば3がセットされます。

● ランダムレコード・フィールドの設定

ファンクション：24H

設定：DEレジスタ←オープンされたFCBの先頭アドレス

FCBのカレントブロック←目的のブロック

FCBのカレントレコード←目的のレコード

戻り値：ランダムレコード・フィールドに、指定されたFCBのカレントブロック・フィールドとカレントレコード・フィールドから計算したカレントレコード・ポジションをセットする

● ランダムな書き込み その2(ランダム・ブロック・アクセス)

ファンクション：26H

設定：DEレジスタ←オープンされたFCBの先頭アドレス

FCBのレコードサイズ←書き込むレコードサイズ

FCBのランダムレコード←書き込みを開始するレコード

HL←書き込むレコード数

DMA以降のメモリ領域←書き込むデータ

戻り値：データの書き込みに成功すれば 00H，失敗すれば 01H を A レジスタにセットする

書き込みが終わると、ランダムレコード・フィールドの値が自動的に更新されて、最後に書き込んだレコードの次のレコードを指す。ひとつのレコードの大きさは FCB のレコードサイズ・フィールドによって 1 バイトから 65535 バイトまで任意に設定できる。

このシステムコールは MSX-DOS 用に増設されたもので、CP/M との互換性はない。

● ランダムな読み出し その 2(ランダム・ロック・アクセス)

ファンクション：27H

設定：DE レジスタ←オープンされた FCB の先頭アドレス

FCB のレコードサイズ←読み出すレコードサイズ

FCB ランダムレコード←読み出しを開始するレコード

HL ← 読み出すレコード数

戻り値：データの読み出しに成功すれば 00H，失敗すれば 01H を A レジスタにセットする。さらに HL レジスタに、実際に読み込んだレコードの個数をセットする

読み込みが終わると、ランダムレコード・フィールドの値が自動的に更新される。このシステムコール実行後、HL レジスタには実際に読み込んだレコードの総数がセットされる。つまり、指定した数のレコードを読み込み終わる前にファイルの終わりに達してしまった場合には、それまでに読み込んだ実際のレコード数が HL レジスタに入ることになる。

このシステムコールは MSX-DOS 用に増設されたもので、CP/M との互換性はない。

● ランダムな書き込み その 3

ファンクション：28H

設定：DE レジスタ←オープンされた FCB の先頭アドレス

FCB のランダムレコード←書き込むレコード

DMA 以降の 128 バイト←書き込むデータ

戻り値：書き込みが成功すれば 00H を、失敗すれば 01H を A レジスタにセットします。

レコードの大きさは 128 バイト固定長。

本システムコールでは、書き込みによってファイルが大きくなる場合、追加されたレコードを 00H で埋めて、指定されたレコードに書き込みを行う。この点を除けばファンクション 22H (ランダムな書き込み)と同じである。

リスト3.5 ファイル・ダンプ

```

=====
; List 3.5    file dump
;           this program must link List 3.3
;
=====
;
;      EXTRN  GETARG          コマンドラインで指定した任意ファイル をダンプする。
;      EXTRN  STOHEX
;      EXTRN  PUTCHR
;      EXTRN  PUTHEX
;      EXTRN  DUMP8B
;
BDOS  EQU   0005H          コマンドラインの第1パラメータとして指定したファイル
FCB   EQU   005CH          名は、デフォルトFCBエリア(005CH～)に格納される。
;
----- program start -----
;
LD    DE,FCB               ;DE := default FCB address
LD    C,0FH                ;open file function
CALL BDOS
OR    A                    ;success ?
JR    Z,READ              ;if so, goto READ
;
LD    DE,ERMSG1            ;[DE] := 'Cannot open that file.'
LD    C,09H                ;string output function
CALL BDOS
RET
;
READ: LD    A,2
      CALL GETARG
      CALL STOHEX
      LD    (ADRS),HL        ;set address counter
;
      LD    DE,NEWDMA
      LD    C,1AH
      CALL BDOS              ;set DMA address function
;
      LD    HL,8
      LD    (FCB+14),HL       ;record size := 8
;
      LD    HL,0
      LD    (FCB+33),HL
      LD    (FCB+35),HL       ;random record := 0
;
RD1:  LD    HL,NEWDMA
      LD    B,8
RD2:  LD    (HL),'
      INC  HL
      DJNZ RD2
;
      LD    HL,1
      LD    DE,FCB
      LD    C,27H
      CALL BDOS              ;random block read function
      OR    A
      JR    Z,DUMP              ;success ?
;
      LD    DE,ERMSG2            ;[DE] := 'OK.'
      LD    C,09H
      CALL BDOS              ;string output function
RET

```

```
DUMP: LD      HL,(ADRS)
      LD      A,H
      CALL   PUTHEX
      LD      A,L
      CALL   PUTHEX
      LD      A,' '
      CALL   PUTCHR
      LD      DE,8
      ADD    HL,DE
      LD      (ADRS),HL

      LD      HL,NEWDMA
      CALL   DUMP8B           ;dump 8 byte

      JR      RD1

;---- work area ----

ADRS: DS      2
NEWDMA: DS     8

;---- error message ----

ERMSG1: DB      'Cannot open that file.$'
ERMSG2: DB      'Ok.$'

END
```

第4部

VDPと画面表示

MSX2の画面表示用LSI(VDP)には、これまでMSXに使用されていたTMS9918Aと上位互換性を持つ、V9938(MSX-VIDEO)が使用されています。MSX2の特徴である優れたグラフィック機能の大部分は、このLSIが担っているといつてもよいでしょう。

第4部ではこのMSX-VIDEOの使用法について、BASICではサポートされていない機能まで含め詳しく説明していきます。なお、ハードウェアスペック的な情報など、本書で説明できなかつた部分に関して興味をお持ちの方は「V9938 MSX-VIDEO テクニカルデータブック(アスキー出版局発行)」を参照していただくとよいでしょう。

△ 電 子 示 表 面 画 面 ADP

電子表面画面上のADPは、最近の傾向では、VGA、AGP16bit、DVI等の接続端子を備えた複数の端子をもつものが多くなっている。飛翔する物体用にDC30V、DC5V、DC12V、DC24V等の多様な供給電圧が用意されている。

電子表面画面上のADPは、DC30V-DVI端子を用いた物が多い。これは、電源供給回路が複数あるため、各端子に適した電圧を供給することができる。また、電源供給回路が複数あるため、一つの端子が故障しても他の端子は正常に動作する。しかし、電源供給回路が複数あるため、電源供給回路の構成が複雑化する。また、電源供給回路が複数あるため、電源供給回路の構成が複雑化する。

1 章 MSX-VIDEOの構成

MSX-VIDEO は次のような特徴を持ち、TMS9918A と比べて大幅に表示能力が向上しています。

- ・9ビットのカラーパレットによって、512色の表現が可能
- ・最大512×424ドットの分解能(インターレース使用時)
- ・最大256色が同時に表示可能
- ・グラフィック的に操作しやすいフルビットマップ・モードの採用
- ・1行80文字のテキスト表示モードの採用
- ・LINE, SEARCH, AREA-MOVE などがハードウェア的に実行可能
- ・スプライトは同一水平ラインに8個まで表示可能
- ・スプライトは1ラインごとに異なった色の指定が可能
- ・ビデオ信号のディジタイズ機能内蔵
- ・スーパーインポーズ機能内蔵

これらの機能を実現する MSX-VIDEO の画面表示システムの構成要素は、数多くのレジスタ群、MSX-VIDEO によって管理される VRAM、MSX-VIDEO と CPU 間のデータ受け渡しを行う I/O ポートの 3 つの部分に大別されます。

1.1 レジスタ

MSX-VIDEO は、その多くの機能を実現するために、内部に49本のレジスタを備えています。これを本書では“VDP レジスタ”と呼ぶことにします。VDP レジスタは機能によって以下の 3 種に分類されます。なおコントロール・レジスタ群とステータス・レジスタ群については、BASIC から VDP(n) というシステム変数を用いて参照することも可能です。

(1) コントロール・レジスタ群(R#0～R#23, R#32～R#46)

MSX-VIDEO の動作を制御する書き込み専用 8 ビットレジスタ群です。一般に R#n の記号で表されます。R#0～R#23 は主に画面モードの設定に用いられ、R#32～R#46 は 5 章で述べる VDP

コマンドの実行時に用いられます。R#24～R#31に相当する番号のコントロール・レジスタは存在しません。各コントロール・レジスタの役割を表4.1に示します。

名称	対応するVDP(n)	機能	名称	対応するVDP(n)	機能
R# 0	VDP(0)	モードレジスタ#0	R# 20	VDP(21)	カラーバースト信号1
R# 1	VDP(1)	モードレジスタ#1	R# 21	VDP(22)	カラーバースト信号2
R# 2	VDP(2)	パターンネームテーブル	R# 22	VDP(23)	カラーバースト信号3
R# 3	VDP(3)	カラーテーブル(LOW)	R# 23	VDP(24)	画面のハードスクロール
R# 4	VDP(4)	パターンジェネレータテーブル	R# 32	VDP(33)	SX : 転送元X座標(LOW)
R# 5	VDP(5)	スプライトアトリビュートテーブル(LOW)	R# 33	VDP(34)	SX : 転送元X座標(HIGH)
R# 6	VDP(6)	スプライトパターンジェネレータテーブル	R# 34	VDP(35)	SY : 転送元Y座標(LOW)
R# 7	VDP(7)	周辺色／テキストモード時の文字色	R# 35	VDP(36)	SY : 転送元Y座標(HIGH)
R# 8	VDP(9)	モードレジスタ#2	R# 36	VDP(37)	DX : 転送先X座標(LOW)
R# 9	VDP(10)	モードレジスタ#3	R# 37	VDP(38)	DX : 転送先X座標(HIGH)
R# 10	VDP(11)	カラーテーブル(HIGH)	R# 38	VDP(39)	DY : 転送先Y座標(LOW)
R# 11	VDP(12)	スプライトアトリビュートテーブル(HIGH)	R# 39	VDP(40)	DY : 転送先Y座標(HIGH)
R# 12	VDP(13)	テキストプリント時の文字色	R# 40	VDP(41)	NX : X方向転送ドット数(LOW)
R# 13	VDP(14)	プリント周期	R# 41	VDP(42)	NX : X方向転送ドット数(HIGH)
R# 14	VDP(15)	VRAMアクセスアドレス(HIGH)	R# 42	VDP(43)	NY : Y方向転送ドット数(LOW)
R# 15	VDP(16)	S#nの間接指定	R# 43	VDP(44)	NY : Y方向転送ドット数(HIGH)
R# 16	VDP(17)	P#nの間接指定	R# 44	VDP(45)	CLR : 対CPUデータ転送用
R# 17	VDP(18)	R#nの間接指定	R# 45	VDP(46)	ARG : 転送方向／VRAM・拡張RAM指定
R# 18	VDP(19)	画面位置の補正(ADJUST)	R# 46	VDP(47)	CMR : VDPコマンドを発行
R# 19	VDP(20)	割り込み発生の走査線番号			

VDPコマンド用レジスタ

表4.1 コントロール・レジスター一覧

(2)ステータス・レジスタ群(S#0～S#9)

MSX-VIDEOから得られる各種の情報を読み取るための、読み出し専用8ビットレジスタ群です。一般にS#nという記号で表されます。各レジスタの役割を表4.2に示します。

名称	対応するVDP(n)	機能	名称	対応するVDP(n)	機能
S# 0	VDP(8)	割り込み情報	S# 5	VDP(-5)	検出したY座標(LOW)
S# 1	VDP(-1)	割り込み情報	S# 6	VDP(-6)	検出したY座標(HIGH)
S# 2	VDP(-2)	VDPコマンド制御情報／その他	S# 7	VDP(-7)	VDPコマンドで得られたデータ
S# 3	VDP(-3)	検出したX座標(LOW)	S# 8	VDP(-8)	サーチコマンドで得られたX座標(LOW)
S# 4	VDP(-4)	検出したX座標(HIGH)	S# 9	VDP(-9)	サーチコマンドで得られたX座標(HIGH)

表4.2 ステータス・レジスター一覧

(3) パレット・レジスタ群(P#0～P#15)

カラーパレットを設定するためのレジスタ群です。一般にP#nという記号で表されます。nはパレット番号を表し、各パレットを512色中の1色に設定する働きをします。1つのパレットレジスタは9ビット長となっており、RGB各色につき、それぞれ3ビットずつ使用されます。

1.2 VRAM

MSX-VIDEOには128KバイトのVRAM(Video RAM)と64Kバイトの拡張RAMを接続できます。MSX-VIDEOは、この128Kバイトのアドレス空間をアクセスするため、17ビットのアドレス・カウンタを持っています。なお、これらのメモリはMSX-VIDEO自身によって管理されるもので、CPUから直接アクセスすることはできません。

拡張RAMは、VRAMのようにその内容を画面に表示することはできませんが、VDPコマンド実行時にはVRAMと同等に扱うことが可能です。実際、画像データを取り扱う際、これだけの広い領域がワークエリアとして使えると、たいへん便利です。ただし、MSX2の仕様には拡張RAMを実装しなければならないという項目は含まれていませんから、これを使うと互換性を欠く恐れがあります。

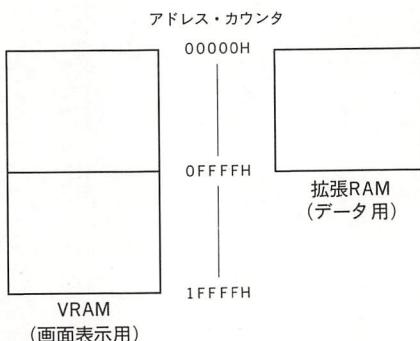


図4.1 VRAMと拡張RAM

1.3 I/Oポート

MSX-VIDEOは外部とデータをやりとりするために、4つのI/Oポートを持っています。これらのポートは表4.3に示したような機能を持ち、CPU(Z80)のI/Oアドレスを通して接続されています。表中n, n'で表されたアドレスはMAIN-ROMの6, 7番地に記録されています。通常はn=n'=98Hですが、機種によっては異なる可能性もありますので、より安全確実なプログラムを目指すためには、この番地の内容を読んでポートアドレスを得なければいけません。

なお、一般に MSX ではプログラムの互換性を確保するために入出力はすべて BIOS を通して実行することが推奨されていますが、画面表示に関しては特にスピードを要求されることが多いため、これらの I/O ポートを介して MSX-VIDEO を直接アクセスすることが許されています。

	アドレス	用 途
ポート # 0 (READ)	n	VRAMからのデータ読み出し
ポート # 0 (WRITE)	n'	VRAMへのデータ書き込み
ポート # 1 (READ)	n + 1	ステータス・レジスタの読み出し
ポート # 1 (WRITE)	n' + 1	コントロール・レジスタへの書き込み
ポート # 2 (WRITE)	n' + 2	パレット・レジスタへの書き込み
ポート # 3 (WRITE)	n' + 3	間接指定されたレジスタへの書き込み

注) n の値はMAIN-ROMの
6番地を参照して得る
n'の値はMAIN-ROMの
7番地を参照して得る

表4.3 MSX-VIDEOのポート



2章 MSX-VIDEO のアクセス

前述のように、MSX-VIDEO は I/O ポートを通して直接(BIOS を使わず)アクセスすることができます。ここでは、その具体的な方法について説明しましょう。

2.1 レジスタのアクセス

2.1.1 コントロール・レジスタへのデータ書き込み

コントロール・レジスタは書き込み専用のレジスタです。前述のように BASIC からは VDP(n) を参照することによって、一部(R#0～R#23)のコントロール・レジスタの内容を知ることができます。これはレジスタへの書き込み時に RAM 上のワークエリア (F3DFH～F3E6H, FFE7H～FFF6H) に記録しておいた値を読んでいるだけです。

コントロール・レジスタにデータを書き込むには、以下に示す 3 種類の方法があります。ただし、MSX ではスプライテの衝突発生などを調べるために、タイマ割り込みルーチン内で MSX-VIDEO をアクセスしているので、ここに述べた方法を用いてレジスタをアクセスする時には、割り込みを禁止してアクセスの手順が狂わないように注意してください。

(1) 直接指定によるデータ書き込み

第 1 の方法は、レジスタの直接指定によるアクセスです。図 4.2 のように、ポート #1 にまず書き込みたいデータを出力、続けて同じくポート #1 に書き込みを行うレジスタ番号(上位 2 ビットは“10”としておく)を出力することによって行います。

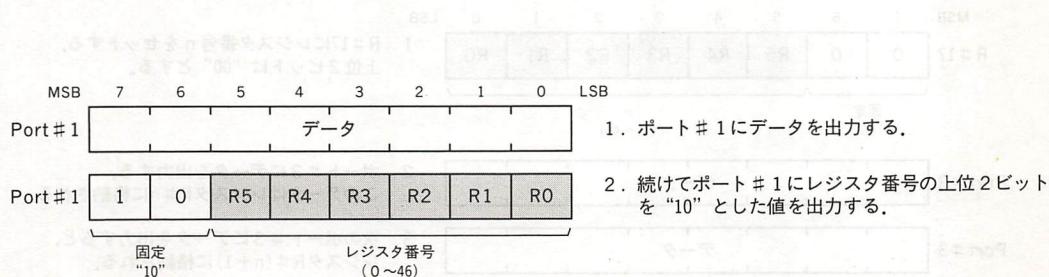


図4.2 直接指定によるR#nのアクセス

ポート#1は、2.2で述べるように VRAM のアドレスを設定する場合にも用いられますが、どちらの動作を行うかは、このポートに2回目に送られるデータの最上位ビットを参照して選択されます。ここで述べたコントロール・レジスタへのデータ書き込みが実行されるのは、同ビットが“1”の時です。

(2) 間接指定によるデータ書き込み(非オートインクリメント・モード)

第2の方法は、いったん目的とするレジスタの番号をR#17に書き込み、その値によって間接的に指定を行う方法です。まず、直接指定法を用いてR#17(コントロール・レジスタ間接指定レジスタ)にアクセスしたいレジスタの番号を設定します。以後は、ポート#3にデータを出力すれば目的のレジスタにデータを書き込むことができます。この方法はVDPコマンドの実行時など、同じレジスタに連続してデータを送る時に使用します。

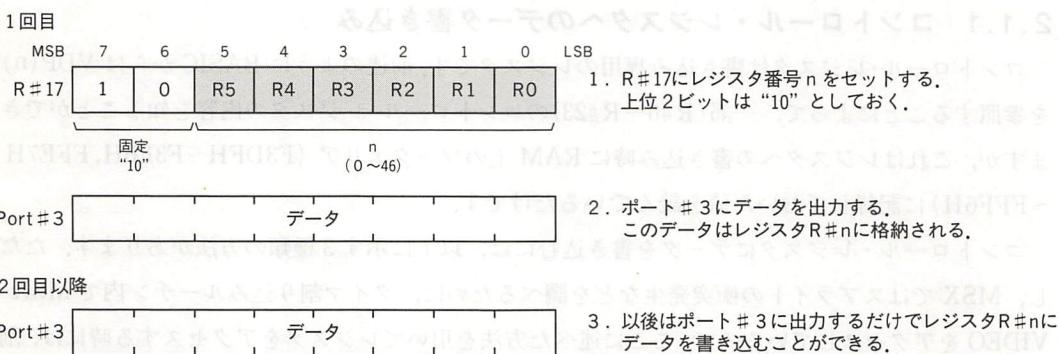


図4.3 間接指定(非オートインクリメント・モード)によるR#nのアクセス

(3) 間接指定によるデータ書き込み(オートインクリメント・モード)

間接指定法において、R#17に設定するレジスタ番号の上位2ビットを“00”としておくと、ポート#3にデータを出力するたびにR#17の内容がインクリメントされます。この方法を用いる

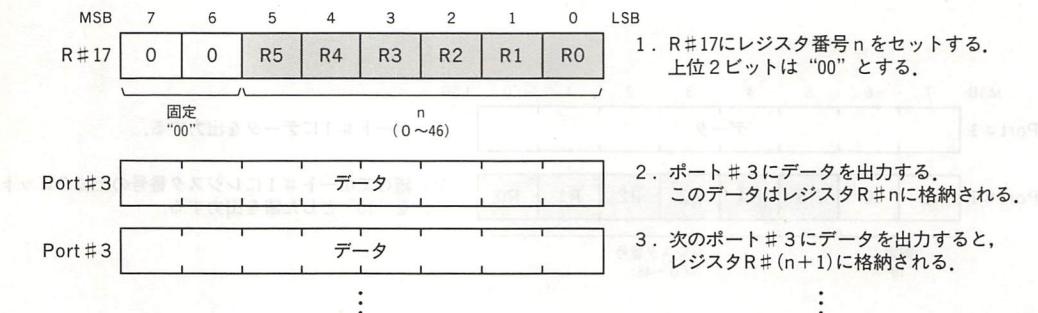


図4.4 間接指定(オートインクリメント・モード)によるR#nのアクセス

と連続するコントロール・レジスタへのデータ書き込みが効率的に行えますから、スクリーンモードの変更時など、連続した多数のレジスタを一度に書き換える場合に役立ちます。

2.1.2 パレットの設定

パレットを設定するには、次のようにR#16(パレット・レジスタ間接指定レジスタ)でパレット番号を指定し、ポート#2へデータを書き込みます。パレット・レジスタは9ビットの長さを持つため、まず赤の輝度と青の輝度、次に緑の輝度と、データは2回に分けて出力します。

ポート#2へ2回データが送られると、R#16は自動的にインクリメントされます。この機能によって、全パレットの初期設定などを簡単に行うことができます。

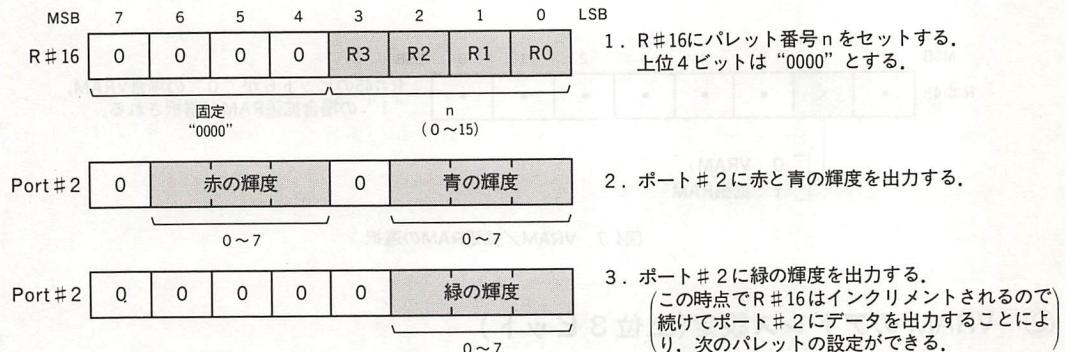


図4.5 パレットの設定

2.1.3 ステータス・レジスタの読み出し

ステータス・レジスタは読み出し専用のレジスタです。図4.6のようにR#15(ステータス・レジスタ間接指定レジスタ)にステータス・レジスタ番号を設定すると、ポート#1からその内容を読み出すことができます。ただしステータスレジスタをアクセスする前にはかならず割り込みを禁止し、そして目的の処理が終了した後でR#15の値を0にしてから割り込みを解除してください。

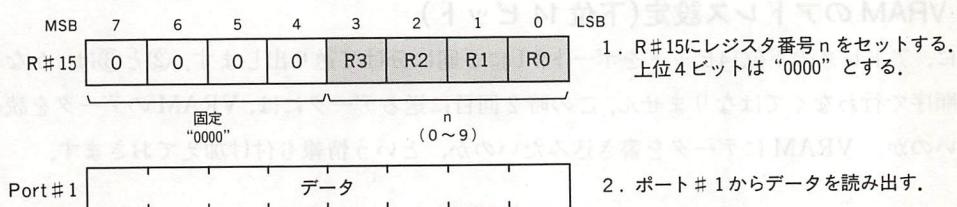


図4.6 ステータス・レジスタのアクセス

2.2 CPUからのVRAMアクセス

VRAMの任意のアドレスをCPU側からアクセスする場合は、以下のような手順により行います。

① バンク切り換え

VRAMの前半(00000H～0FFFFH)と拡張RAMは、MSX-VIDEOから見て同一のアドレスに存在しており、バンク切り換えによって両者を使い分けるようになっています。MSX 2では拡張RAMは使用しませんから、常にVRAMのバンクを選択してください。バンクの切り換えはR#45のビット6によって行います。

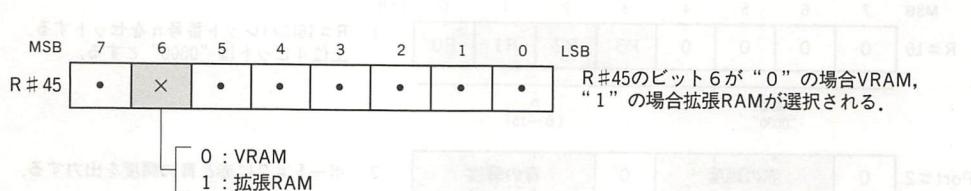


図4.7 VRAM／拡張RAMの選択

② VRAMのアドレス設定(上位3ビット)

128KバイトのVRAMをアクセスするための17ビットのアドレス情報は、アドレス・カウンタ(A16～A0)に設定されます。アドレス・カウンタの設定は、まず上位3ビットから行います。これにはR#14を用います。

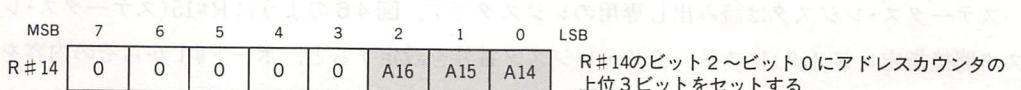


図4.8 上位3ビットの設定

③ VRAMのアドレス設定(下位14ビット)

次に、アドレスの下位14ビットをポート#1に2回に分けて送り出します。②と③は、かならずこの順序で行わなくてはなりません。この時2回目に送るデータには、VRAMのデータを読み出したいのか／VRAMにデータを書き込みたいのか、という情報も付け加えておきます。

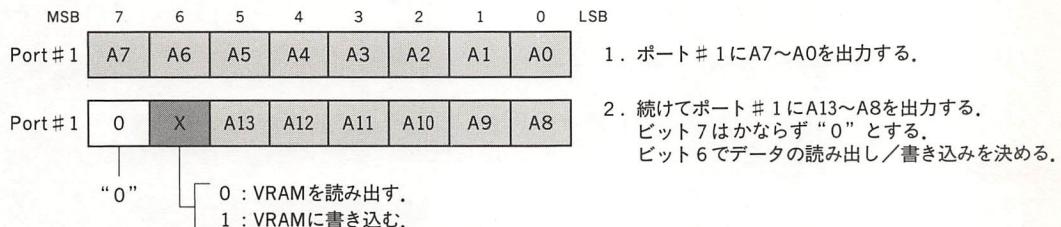


図4.9 下位14ビットとリード／ライト動作の設定

④ VRAM の読み出し／書き込み

アドレス・カウンタに値をセットし終えたら、ポート # 0 を通してデータの読み書きを行います。なおデータの読み出し／書き込みの指定は、前述のようにアドレス・カウンタの A13～A8 を設定する時に同時に行います。

この時、データを 1 バイト読み書きするごとに、アドレス・カウンタは自動的にインクリメントします。この機能を用いると VRAM の連続したアドレスを簡単にアクセスできます。

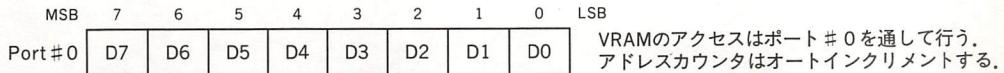


図4.10 ポート #0を通じたVRAMのアクセス

3章 MSX 2 の画面モード

MSX 2 には、表 4.4 に示す10種の画面モードが存在します。表中で、“*”の印を付けた6つの画面モード(TEXT 2 および GRAPHIC 3～GRAPHIC 7)が MSX 2 で新設されたものです。従来からあった他のモードも、TMS9918A から MSX-VIDEO への変更に伴い、多少機能が増えた部分があります。以下、これら10種類の画面モードの特徴と、その具体的な使用法について説明を行います。

モード名	相当するSCREENモード	特徴
TEXT 1	SCREEN 0 (WIDTH 40)	1行40文字のテキスト、文字の色は1色
* TEXT 2	SCREEN 0 (WIDTH 80)	1行80文字のテキスト、文字はプリント可能
MULTI COLOR	SCREEN 3	1文字を4ブロック分割した擬似グラフィック
GRAPHIC 1	SCREEN 1	1行32文字のテキスト、色付き文字が可能
GRAPHIC 2	SCREEN 2	256×192、ドット単位で色を指定する
* GRAPHIC 3	SCREEN 4	スプライトモード2が使えるGRAPHIC 2
* GRAPHIC 4	SCREEN 5	256×212、ドットごとに16色可能
* GRAPHIC 5	SCREEN 6	512×212、ドットごとに4色可能
* GRAPHIC 6	SCREEN 7	512×212、ドットごとに16色可能
* GRAPHIC 7	SCREEN 8	256×212、ドットごとに256色可能

表4.4 MSX2の画面モード一覧

3.1 TEXT1 モード

TEXT1とは以下に示す仕様の画面モードをいいます。

画 面：横40文字×縦24行

背景色／文字色ともに512色中から任意に選択可能

文 字：256種の文字が使用可能

文字の大きさは横6ドット×縦8ドット

1文字ごとにフォントの定義が可能

必要メモリ：文字フォント用…2048バイト(8バイト×256文字)

画面表示用………960バイト(40文字×24行)

BASIC：SCREEN 0(WIDTH 40)に相当

3.1.1 TEXT1 モードの設定

TEXT1に限らず MSX-VIDEO の画面モードの設定は、R#0とR#1の中の5ビットを用いて行います。TEXT1モードの場合は、図4.11に示すとおりです。

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#0		•	•	•	•	0	0	0	•	
R#1		•	•	•	1	0	•	•	•	

図4.11 TEXT1モードの設定

3.1.2 TEXT1 モードの画面構造

●パターンジェネレータ・テーブル

文字フォントを記憶している領域を、パターンジェネレータ・テーブルと呼びます。パターンジェネレータ・テーブルはVRAM上に置かれ、その先頭から1文字につき8バイトずつ使用して各フォントが定義されていますがフォントの横1ライン中、下位2ビットは画面に表示されません。したがって、1文字は 6×8 のサイズとなります。それぞれの文字フォントには0~255の番号が付けられ、これが文字のキャラクタコードに相当します。文字を画面に表示する時には、このキャラクタコードで指定します。

パターンジェネレータ・テーブルの位置はR#4で指定します。ただし指定できるのはパターン

ジェネレータ・テーブルの先頭アドレスの上位 6 ビット (A16~A11)のみであり、アドレスの下位 11 ビット (A10~A0) は常に “00000000000” であるとみなされます。したがって、パターンジェネレータ・テーブルが設定可能なアドレスは、00000H から 2 K バイト単位の位置になります。BASIC からは、このアドレスを BASE(2) というシステム変数を用いて参照できます。図 4.12 はパターンジェネレータ・テーブルの構造です。

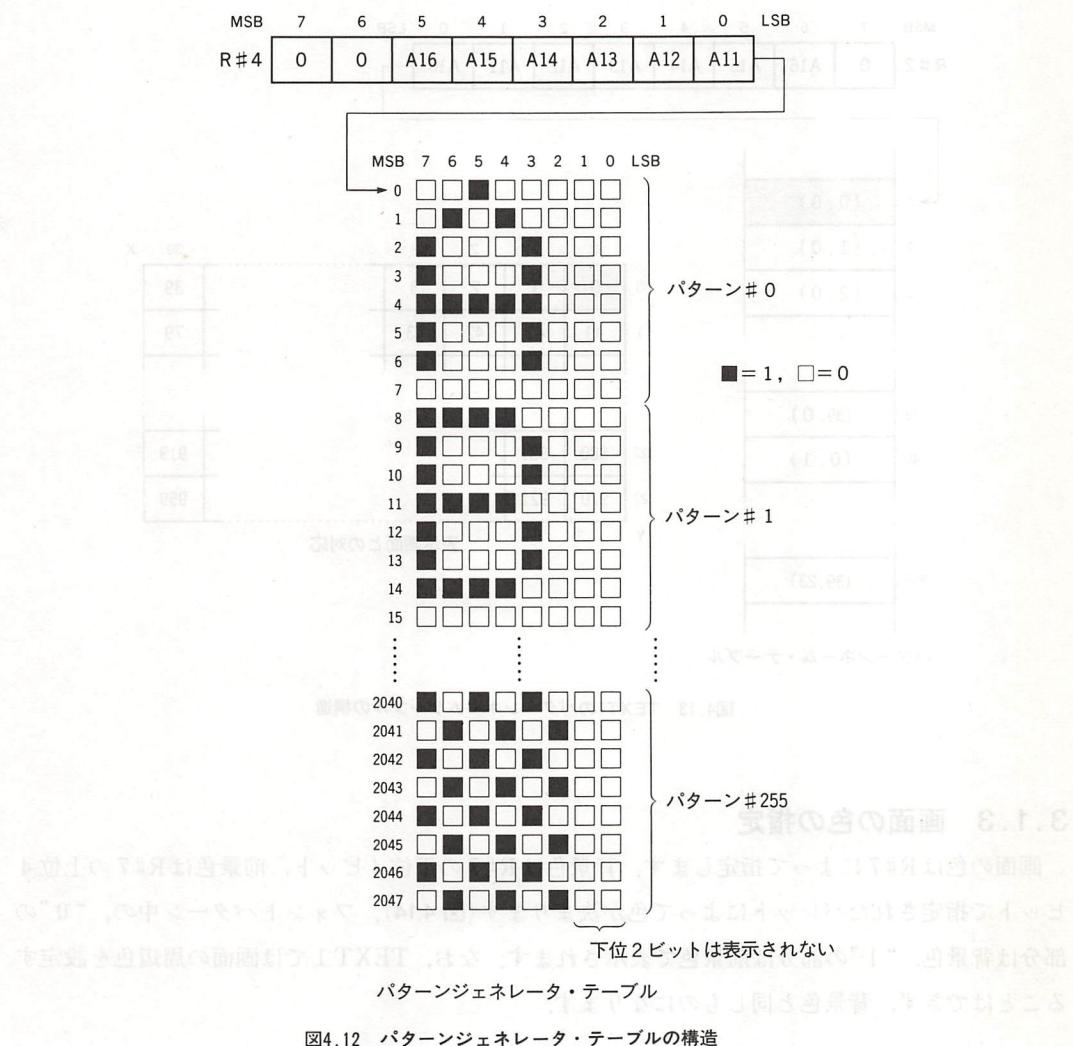


図4.12 パターンジェネレータ・テーブルの構造

●パターンネーム・テーブル

パターンネーム・テーブルとは、1バイトが画面上の1文字に対応するメモリ配列です。このテーブルに0～255のキャラクタコードを書き込むと、対応する画面上の位置にコードで指定した文字が表示されます。

パターンネーム・テーブルの先頭アドレスは、R#2を用いて指定します。指定できるのはアドレスの上位7ビット(A16~A10)のみであり、下位10ビット(A9~A0)は常に“0000000000”とみなされます。したがって、パターンネーム・テーブルが設定可能なアドレスは、00000Hから1Kバイト単位の位置になります。BASICからは、このアドレスをBASE(0)というシステム変数を用いて参照できます。図4.13はパターンネーム・テーブルの構造です。

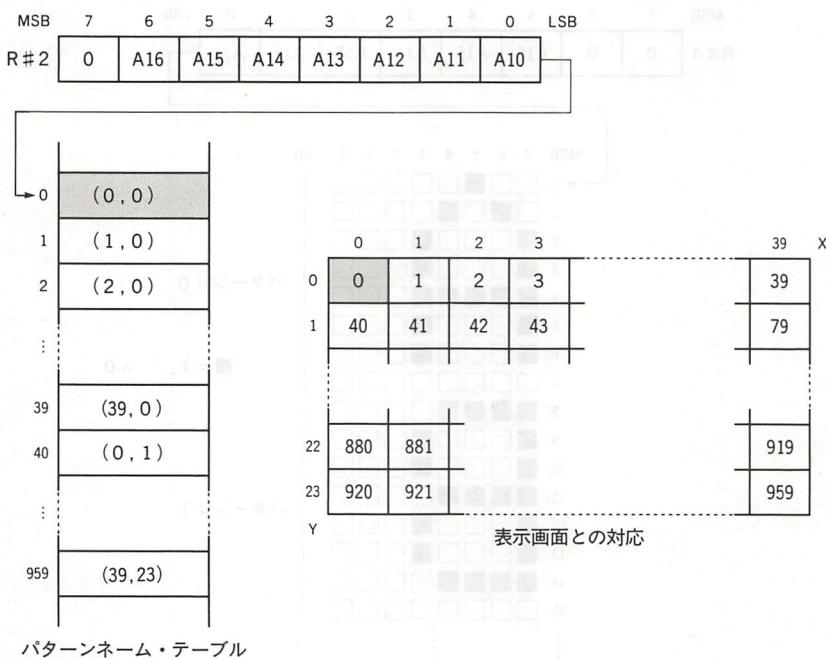


図4.13 TEXT1のパターンネームテーブルの構造

3.1.3 画面の色の指定

画面の色はR#7によって指定します。背景色はR#7の下位4ビット、前景色はR#7の上位4ビットで指定されたパレットによって色が決まります(図4.14)。フォントパターン中の、“0”的部分は背景色、“1”的部分は前景色で表示されます。なお、TEXT1では画面の周辺色を設定することはできず、背景色と同じものになります。



図4.14 TEXT1の色指定

3.2 TEXT 2 モード

TEXT 2 とは以下に示す仕様の画面モードをいいます。

画 面：横 80 文字×縦 24 行（または縦 26.5 行）

背景色／文字色ともに 512 色中から任意に選択可能

プリンク機能の指定により、他に 2 色表示可能

文 字：256 種の文字が使用可能

文字の大きさは横 6 ドット×縦 8 ドット

1 文字ごとにフォントの定義が可能

1 文字ごとにプリンク（点滅）可能

必要メモリ：24行設定時

文字フォント用…2048 バイト (8 バイト × 256 文字)

画面表示用………1920 バイト (80 文字 × 24 行)

プリンク属性用…240 バイト (=1920 ビット)

26.5 行設定時

文字フォント用…2048 バイト (同上)

画面表示用………2160 バイト (80 文字 × 27 行)

プリンク属性用…270 バイト (=2160 ビット)

BASIC : SCREEN 0(WIDTH 80) に相当

3.2.1 TEXT 2 モードの設定

TEXT 2 モードの設定は図 4.15 のとおりです。

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#0		•	•	•	•	0	1	0	•	
R#1		•	•	•	1	0	•	•	•	

図4.15 TEXT 2 モードの設定

●行数の設定(24 行 / 26.5 行)

TEXT 2 モードでは、R#9のビット 7 の値によって、1画面24行または26.5行の切り換えが可能です。ただし、1画面の行数を26.5行とした場合、最下行に表示した文字はパターンの上半分しか表示されません。この機能は BASIC ではサポートされていません。

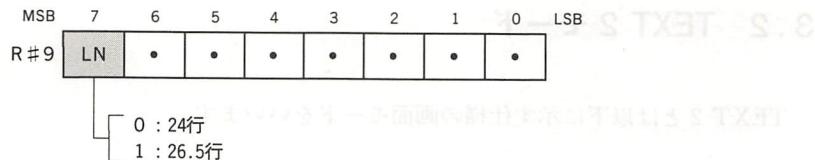


図4.16 行数の切り換え

3.2.2 TEXT 2 の画面構造

● パターンジェネレータ・テーブル

TEXT 1 のパターンジェネレータ・テーブルとまったく同じ構造と機能を持ちます。TEXT 1 の説明を参照してください。

● パターンネーム・テーブル

TEXT 2 では、1画面に表示される文字が最大2160($=80 \times 27$)文字と増えたため、パターンネーム・テーブルの占める大きさも最大2160バイトになりました。

パターンネーム・テーブルは、先頭アドレスの上位5ビット(A16~A12)をR#2に書き込んで位置を設定します。アドレスの下位12ビット(A11~A0)は常に“000000000000”とみなされ、パターンネーム・テーブルが設定可能なアドレスは、00000Hから4Kバイト単位の位置になります。

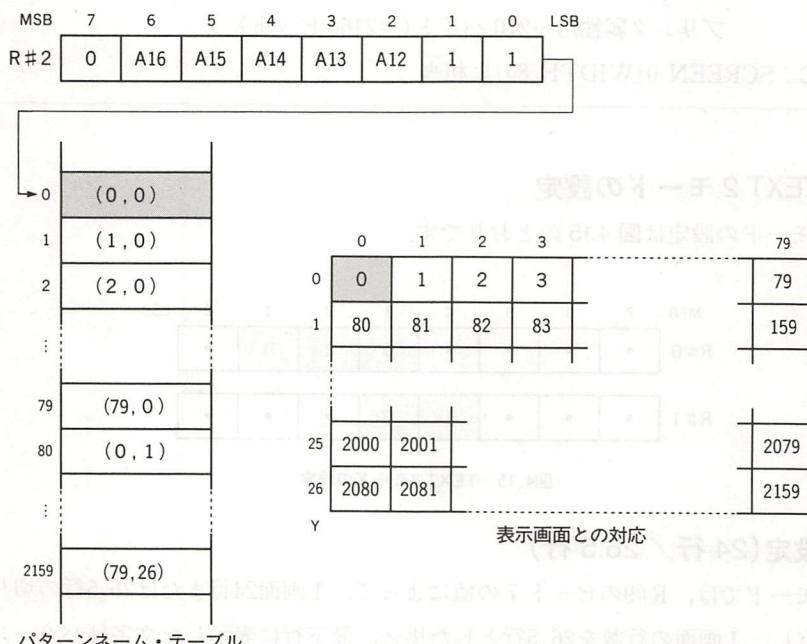


図4.17 TEXT2のパターンネームテーブルの構造

● プリンクテーブル

TEXT 2 モードでは、文字ごとにプリンク(点滅)させることができます。画面上のどの位置の文字をプリンクさせるかという情報を記憶しておく領域がプリンクテーブルです。プリンクテーブルは、その 1 ビットが画面上(すなわちパターンネーム・テーブル上)の 1 文字に対応しており、対応するビットの内容が“1”である文字にプリンク属性が与えられます。

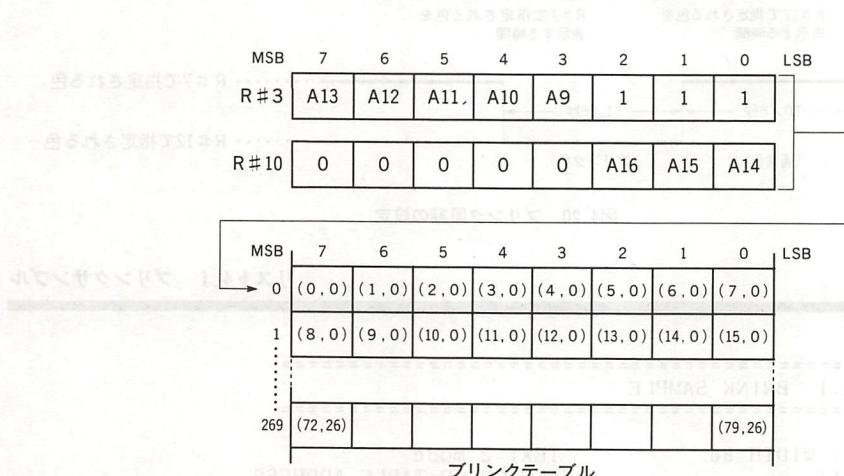


図4.18 TEXT2のプリンクテーブルの構造

プリンクテーブルの先頭アドレス指定は、その上位 8 ビット (A16～A9) を R#3 と R#10 に設定することによって行います。プリンクテーブルを設定可能なアドレスは、00000H から 512 バイト単位の位置になります。

3.2.3 画面の色と文字のプリンク指定

前景色は R#7 の上位 4 ビット、背景色は R#7 の下位 4 ビットで指定されます。さらに、プリンクテーブルによってプリンク属性を与えられた文字は、R#7 で指定される本来の色と、R#12 で指定されるプリンク色とを交互に繰り返します。

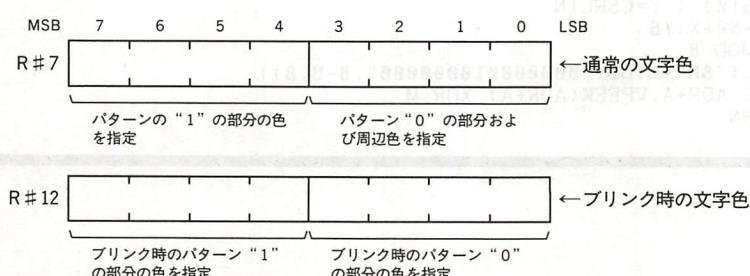


図4.19 画面の色とプリンク色の設定

第4部 VDPと画面表示

繰り返しの周期はR#13で設定されます。R#13の上位4ビットは本来の文字色が表示されている時間、下位4ビットはブリンク色が表示されている時間を1/6秒単位で表しています。

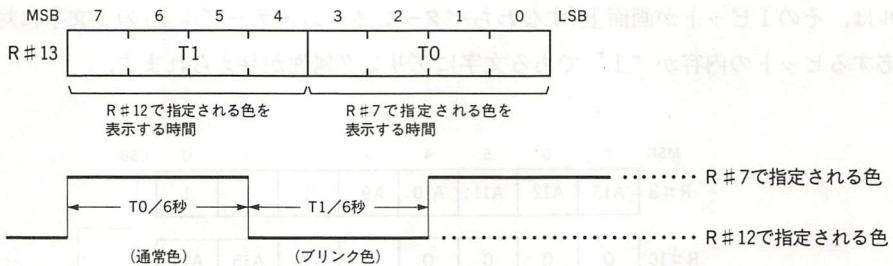


図4.20 ブリンク周期の設定

リスト4.1 ブリンクサンプル

```

1000 '=====
1010 ' LIST 4.1 BRINK SAMPLE
1020 '=====
1030 '
1040 SCREEN 0 : WIDTH 80           'TEXT 2 mode
1050 ADR=BASE(1)                  'TAKE COLOR TABLE ADDRESS
1060 '
1070 FOR I=0 TO 2048/8            'reset blink mode
1080 VPOKE ADR+I,0
1090 NEXT
1100 '
1110 VDP(7) =&HF1                 'text color=15,back color=1
1120 VDP(13)=&H1F                 'text color=1, back color=15
1130 VDP(14)=&H22                 'set interval and start blink
1140 '
1150 PRINT "Input any character : ";
1160 '
1170 K$=INPUT$(1)
1180 IF K$<CHR$(28) THEN 1230
1190 IF K$>" " THEN GOSUB 1280
1200 PRINT K$;
1210 GOTO 1170
1220 '
1230 VDP(14)=0                   'stop blink
1240 END
1250 '
1260 ----- set blink mode -----
1270 '
1280 X=POS(0) : Y=CSRLIN
1290 A=(Y*80+X)\$8
1300 B=X MOD 8
1310 M=VAL("&B"+MID$("000000010000000",8-B,8))
1320 VPOKE ADR+A,VPEEK(ADR+A) XOR M
1330 RETURN

```

3.3 MULTI COLOR モード

MULTI COLOR モードとは以下に示す仕様の画面モードをいいます。

画面：横64ブロック×縦48ブロック

512色中の16色が同時に表示可能

ブロック：ブロックの大きさは横4ドット×縦4ドット

ブロックごとの色指定が可能

必要メモリ：カラー設定用…2048バイト

位置指定用……768バイト

スプライト：スプライトモード1

BASIC : SCREEN 3 に相当

3.3.1 MULTI COLOR モードの設定

MULTI COLOR モードの設定は、図4.21に示すとおりです。

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#0		•	•	•	•	0	0	0	•	
R#1		•	•	•	0	1	•	•	•	

図4.21 MULTI COLORモードの設定

3.3.2 MULTI COLOR モードの画面構造

● パターンジェネレータ・テーブル

このモードでは、2ブロック×2ブロックで1パターンが構成されており、1個のパターン名には4個のパターンが対応しています。パターン中の色は、パターンジェネレータ・テーブルの2バイトで表されます。パターンジェネレータ・テーブルの先頭アドレスはR#4で指定します。ただし指定できるのはアドレスの上位6ビット(A16～A11)のみであるため、パターンジェネレータ・テーブルに設定可能なアドレスは00000Hから2Kバイト単位の位置となります（図4.22）。

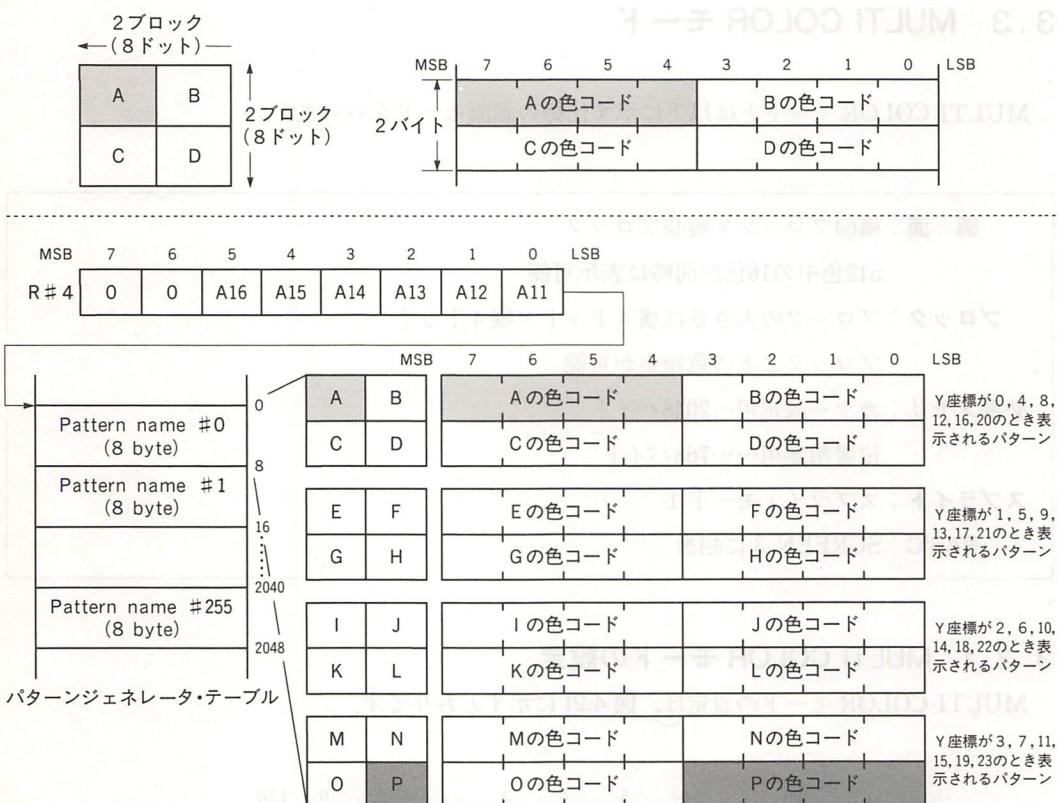


図4.22 MULTI COLORのパターンジェネレータ・テーブルの構造

● パターンネーム・テーブル

画面上の任意の位置に指定のパターンを表示するためのテーブルです。1個のパターン名中の4つのパターンはY座標の値により、そのうちの1つが表示されるようになっています。BASICでは図4.23のようにこのテーブルの内容を設定しています。パターンネーム・テーブルの先頭アドレスはR#2で指定します。ただし指定できるのはアドレスの上位7ビット(A16~A10)のみであるため、パターンネーム・テーブルに設定可能なアドレスは00000Hから1Kバイト単位の位置となります(図4.24)。

3.3.3 MULTI COLORモードの画面の色の指定

R#7で画面の周辺色が指定できます(図4.25)。

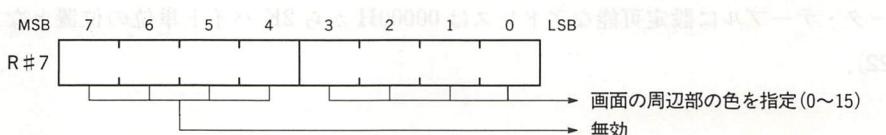


図4.25 周辺色の指定

パターン 0

結果として
パターン 0
がここに表
示される

(64×48 ブロック)

1つのデータは 2×2
ブロックに対応

図4.23 BASICのパターンネーム・テーブルの設定

MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#2	0	A16	A15	A14	A13	A12	A11	A10	

パターンネーム・テーブル

0	(0, 0)
1	(1, 0)
2	(2, 0)
:	
31	(31, 0)
32	(0, 1)
:	
767	(31, 23)

表示画面との対応

0	1	2	3	31
1	32	33	34	35	63
22	704	705	735		
23	736	737	767		

図4.24 MULI COLORモードのパターンネーム・テーブルの構造

3.4 GRAPHIC 1 モード

GRAPHIC1 モードとは以下に示す仕様の画面モードをいいます。

画面：横32パターン×縦24パターン

512色中の16色が同時に表示可能

パターン：256種類のパターンが使用可能

パターンの大きさは横8ドット×縦8ドット

パターンごとに任意の图形定義が可能

8パターンごとに異なる色が設定可能

必要メモリ：パターンフォント用…2048バイト

カラーテーブル用……32バイト

スプライト：スプライトモード1

BASIC : SCREEN1 に相当

3.4.1 GRAPHIC 1 モードの設定

GRAPHIC 1 モードの設定は、図4.26に示すとおりです。

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#0		•	•	•	•	0	0	0	•	
R#1		•	•	•	0	0	•	•	•	

図4.26 GRAPHIC 1 モードの設定

3.4.2 GRAPHIC 1 モードの画面構造

● パターンジェネレータ・テーブル

このモードでは、0～255のコードに相当する256種類のパターンを画面に表示できます。それぞれのパターンのフォントはパターンジェネレータ・テーブルに定義されます(図4.27)。パターンジェネレータ・テーブルの先頭アドレスはR#4で指定します。ただし指定できるのはアドレスの上位6ビット(A16～A11)のみです。

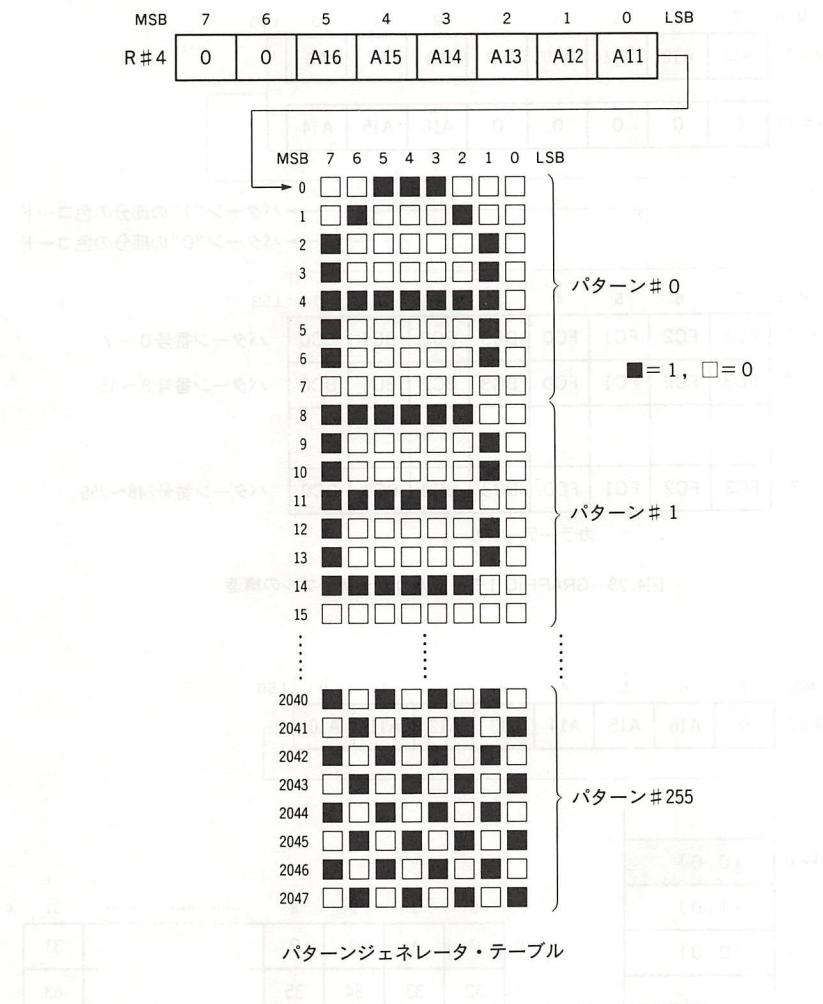


図4.27 GRAPHIC 1モードのパターンジェネレータ・テーブルの構造

● カラーテーブル

また、8パターンごとの色指定をカラー・テーブルで行います。各パターンのビットが“0”的部分と“1”的部分の色を指定できます(図4.28)。カラー・テーブルの先頭アドレスはR#3とR#10で指定します。ただし指定できるのはアドレスの上位11ビット(A16～A6)のみです。

● パターンネーム・テーブル

パターンネーム・テーブルは768バイトの大きさを持ち、画面上のパターンと1対1に対応しています(図4.29)。パターンネーム・テーブルの先頭アドレスはR#2で指定します。ただし指定できるのはアドレスの上位7ビット(A16～A10)のみです。

第4部 VDPと画面表示

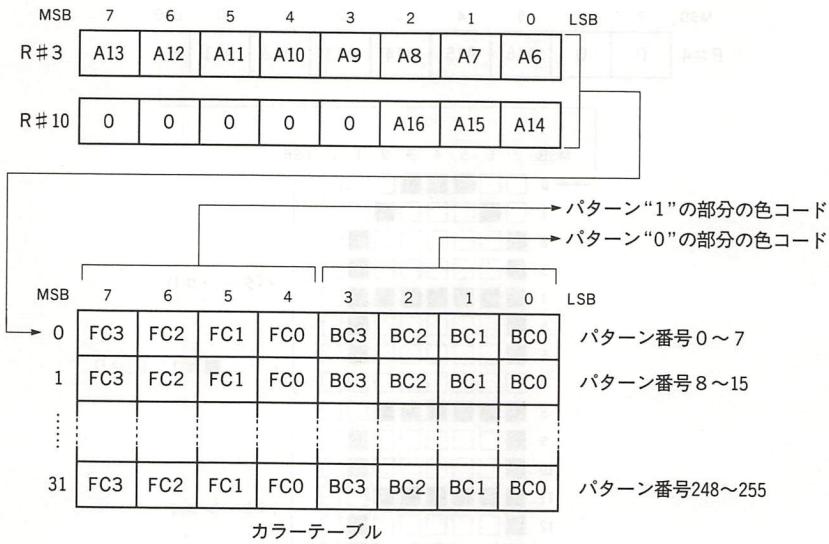


図4.28 GRAPHIC 1モードのカラーテーブルの構造

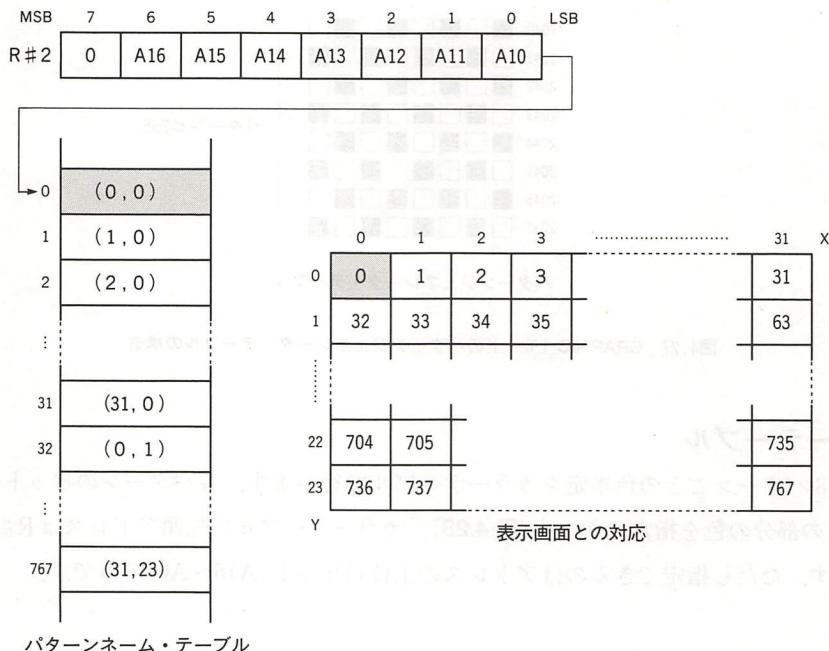


図4.29 GRAPHIC 1モードのパターンネーム・テーブルの構造

3.4.3 画面の色の指定

R#7で画面の周辺色が指定できます(図4.30)

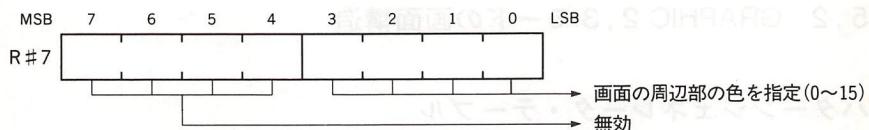


図4.30 GRAPHIC 1モードの画面の色の指定

3.5 GRAPHIC 2, 3 モード

GRAPHIC 2, 3モードとは以下に示す仕様の画面モードをいいます。

画 面：横32パターン×縦24パターン

512色中の16色が同時に表示可能

パターン：768種類のパターンが使用可能

パターンの大きさは横8ドット×縦8ドット

パターンごとに任意の図形定義が可能

ただし、横8ドット内に2色までしか使用できない

必要メモリ：パターンフォント用…6144バイト

カラー一テーブル用……6144バイト

スプライト：GRAPHIC 2 はスプライトモード1

GRAPHIC 3 はスプライトモード2

BASIC：GRAPHIC 2 は SCREEN 2 に相当

GRAPHIC 3 は SCREEN 4 に相当

3.5.1 GRAPHIC 2, 3 モードの設定

GRAPHIC 2, 3モードの設定は、それぞれ図4.31に示すとおりです。

GRAPHIC2モードの設定

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#0		•	•	•	•	0	0	1	•	
R#1		•	•	•	0	0	•	•	•	

GRAPHIC3モードの設定

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#0		•	•	•	•	0	1	0	•	
R#1		•	•	•	0	0	•	•	•	

図4.31 GRAPHIC 2, GRAPHIC 3モードの設定

3.5.2 GRAPHIC 2, 3 モードの画面構造

● パターンジェネレータ・テーブル

このモードでは GRAPHIC 1 と同等のパターンジェネレータ・テーブルを 3 組用意し、768種類のパターンの表示が可能です。したがって画面上に重複するパターンが 1 つも表示されないようになります。その状態でパターンジェネレータ・テーブル側を操作すれば疑似的に 256×192 ドットのグラフィック表示を行うことができます。パターンジェネレータ・テーブルの先頭アドレスは R#4 で指定します。ただし指定できるのはアドレス上位 4 ビット (A16~A13) のみであるため、設定可能なアドレスは 00000H から 8K バイト単位の位置となります。(図 4.32)。

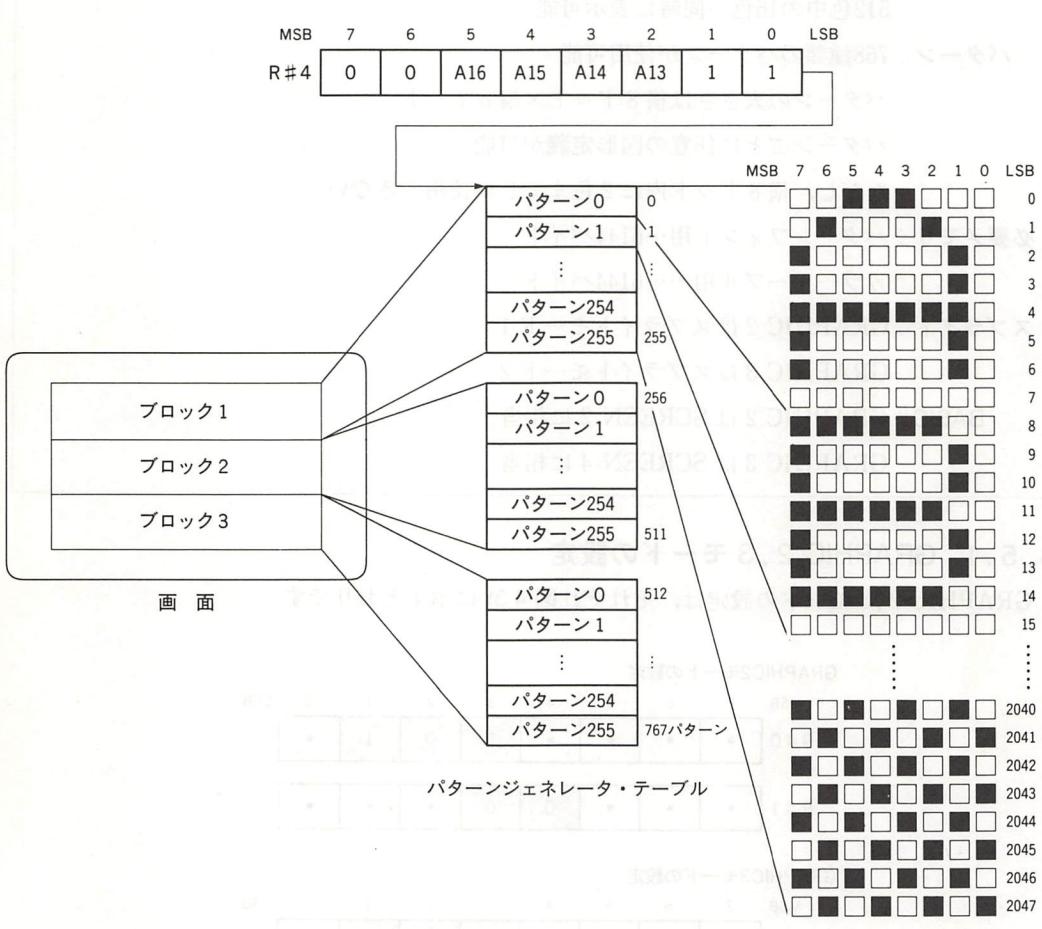


図4.32 GRAPHIC 2, GRAPHIC 3 モードのパターンジェネレータ・テーブルの構造

● カラーテーブル

また、パターンジェネレータ・テーブルと同じサイズのカラーテーブルを持ち、各パターンの横1ラインごとにビットが“0”の部分と“1”的部分の色を指定できます(図4.33)。カラーテーブルの先頭アドレスはR#3とR#10で指定します。ただし指定できるのはアドレスの上位4ビット(A16～A13)のみです。

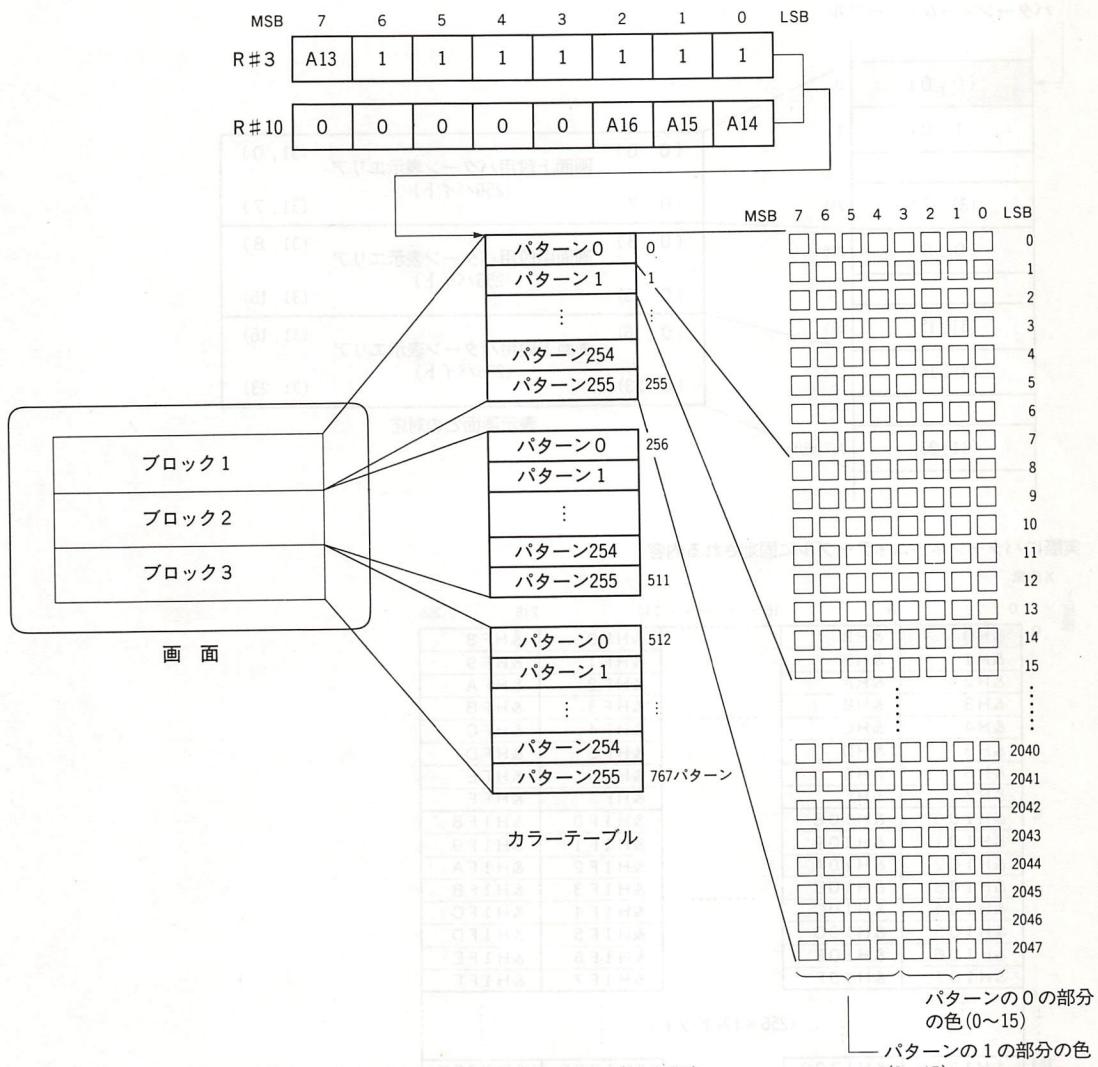
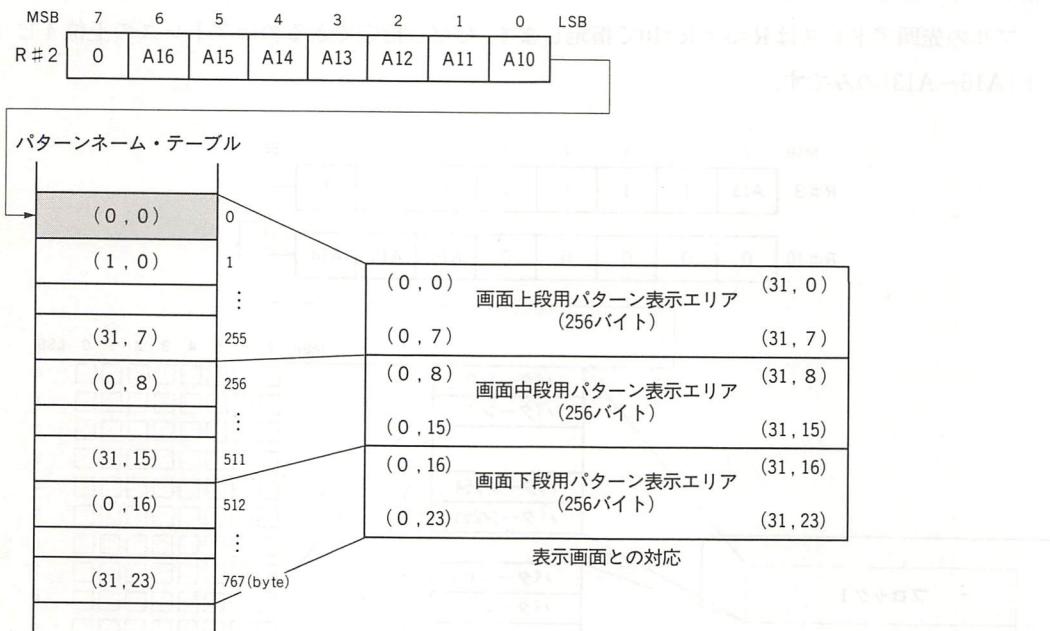


図4.33 GRAPHIC 2, GRAPHIC 3モードのカラーテーブルの構造

● パターンネーム・テーブル

パターンネーム・テーブルは上段、中段、下段の3つに分割され、それぞれがパターンジェネレータの別々の256バイトを参照してパターンを表示します(図4.34)。このような方法をとること

とによって、パターンネーム・テーブル上の768バイトがすべて異なったパターンフォントを表示することができます。



実際にパターンネーム・テーブルに固定される内容

X 座標		Y 座標			
0	8	0	16	240	248
&H0	&H8			&HF0	&HF8
&H1	&H9			&HF1	&HF9
&H2	&HA			&HF2	&HFA
&H3	&HB			&HF3	&HFB
&H4	&HC			&HF4	&HFC
&H5	&HD			&HF5	&HFD
&H6	&HE			&HF6	&HFE
&H7	&HF			&HF7	&FFF
&H100	&H108			&H1F0	&H1F8
&H101	&H109			&H1F1	&H1F9
&H102	&H10A			&H1F2	&H1FA
&H103	&H10B			&H1F3	&H1FB
&H104	&H10C			&H1F4	&H1FC
&H105	&H10D			&H1F5	&H1FD
&H106	&H10E			&H1F6	&H1FE
&H107	&H10F			&H1F7	&H1FF
16		
184	&H1700	&H1708		&H17F0	&H17F8
	&H1701	&H1709		&H17F1	&H17F9
	&H1702	&H170A		&H17F2	&H17FA
	&H1703	&H170B		&H17F3	&H17FB
	&H1704	&H170C		&H17F4	&H17FC
	&H1705	&H170D		&H17F5	&H17FD
	&H1706	&H170E		&H17F6	&H17FE
191	&H1707	&H170F		&H17F7	&H17FF

注) 値はパターンジェネレータ・テーブルのベースアドレス
からのオフセットです

図4.34 GRAPHIC 2, GRAPHIC 3モードのパターンネーム・テーブルの構造

3.5.3 画面の色の指定

R#7で画面の周辺色が指定できます(図 4.35)。

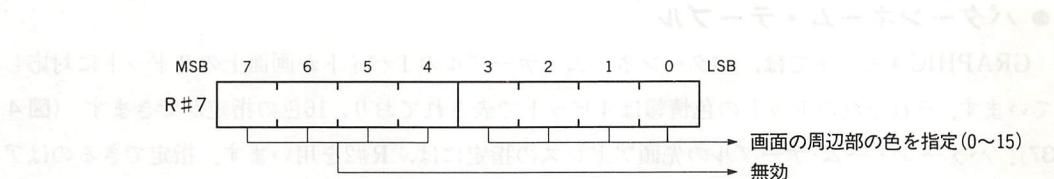


図4.35 GRAPHIC 2, GRAPHIC 3モードの画面の色の指定

3.6 GRAPHIC 4 モード

GRAPHIC 4 モードとは、以下に示すモードのことをいいます。

画 面：横256ドット×縦212ドット（または縦192ドット）

同時に16色が表示可能

16色のそれぞれは、512色中から任意の1色を選択可能

コマンド：VDP コマンドによる高速グラフィック可能

スプライト：モード 2 のスプライト機能が使用可能

必要メモリ：192ドット設定時

ビットマップ画面……24Kバイト(6000Hバイト)

(4ビット×256×192)

212ドット設定時

ビットマップ画面……26.5Kバイト(6A00Hバイト)

(4ビット×256×212)

BASIC：SCREEN 5に対応

3.6.1 GRAPHIC 4 モードの設定

GRAPHIC 4 モードの設定は図 4.36 に示すとおりです。

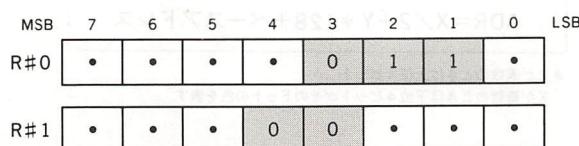


図4.36 GRAPHIC 4モードの設定

3.6.2 GRAPHIC 4 モードの画面構造

● パターンネーム・テーブル

GRAPHIC 4 モードでは、パターンネーム・テーブルの 1 バイトが画面上の 2 ドットに対応しています。それぞれのドットの色情報は 4 ビットで表されており、16色の指定ができます（図 4.37）。パターンネーム・テーブルの先頭アドレスの指定には、R#2を用います。指定できるのはアドレスの上位 2 ビット (A16~A15)のみであり、下位 15 ビットはすべて “0” とみなされます。したがって、パターンネーム・テーブルが設定可能なアドレスは、00000H, 08000H, 10000H, 18000H の 4箇所だけです。

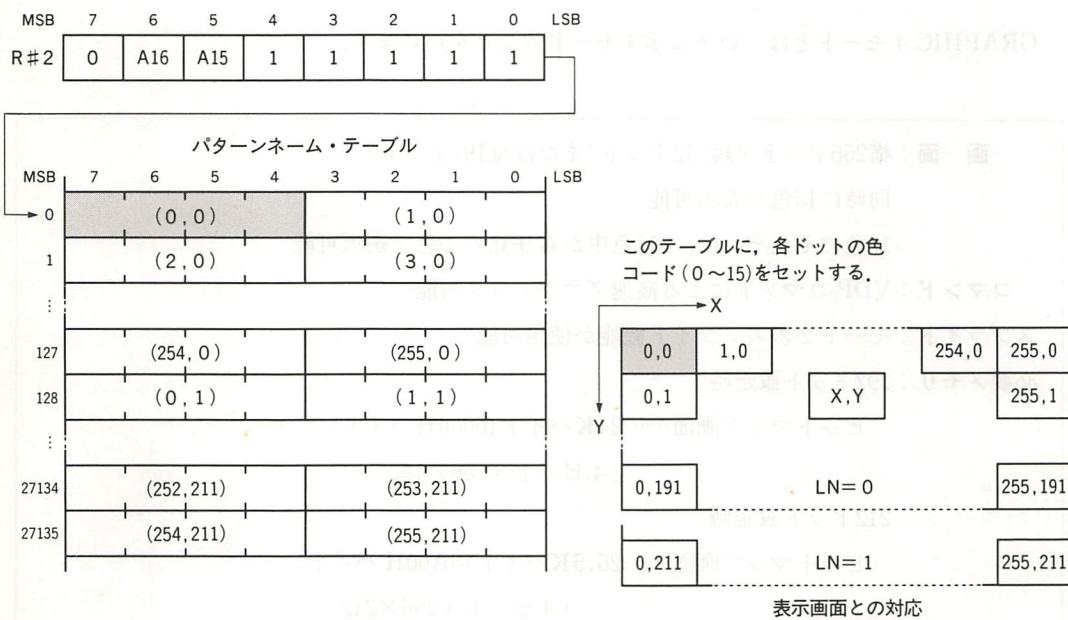


図4.37 GRAPHIC 4モードのパターンネーム・テーブルの構造

このことから、画面上で(X,Y)の座標にあるドットは、式 4.1 でアクセスできることがわかります。リスト 4.2 は、式 4.1 を確認するためのプログラムです。

$$\text{ADR} = X / 2 + Y * 128 + \text{ベースアドレス}$$

* Xが偶数のときは上位 4 ビット
Xが奇数のときは下位 4 ビットがそのドットの色を表す

式4.1 座標(X,Y)のドットをアクセスする式

リスト4.2 BASICで書いたGRAPHIC 4モード用PSET

```

100 ' =====
110 ' LIST 4.2 dot access of GRAPHIC 4 mode
120 ' =====
130 '
140 SCREEN 5
150 BA=0
160 FOR I=0 TO 255
170   X=I:Y=I\$2
180   COL=15
190   GOSUB 1000
200 NEXT
210 END
220 '
1000 ' =====
1010 ' PSET (X,Y),COL
1020 ' COL:color BA:graphic Base Address
1030 ' =====
1040 '
1050 ADR=X\$2+Y*\$128+BA
1060 IF X AND 1 THEN BIT=&HF0:C=COL ELSE BIT=&HF:C=COL*\$16
1070 D=VPEEK(ADR)
1080 D=(D AND BIT) OR C
1090 VPOKE ADR,D
1100 RETURN

```

3.6.3 画面の色の指定

R#7で画面の周辺色が指定できます(図 4.38)。

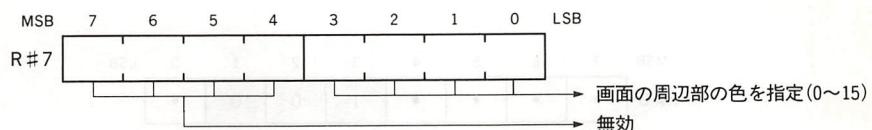


図4.38 GRAPHIC 4モードの画面の色の指定

3.7 GRAPHIC 5 モード

GRAPHIC 5 モードとは、以下に示す仕様の画面モードをいいます。

画面：横512ドット×縦212ドット（または縦192ドット）

同時に4色が表示可能

4色のそれぞれは、512色中から任意の1色を選択可能

コマンド：ハードウェアによるグラフィックコマンドが使用可能

スプライト：モード2のスプライト機能が使用可能

必要メモリ：縦192ドット設定時

ビットマップ画面……24Kバイト(6000Hバイト)

(2ビット×512×192)

縦212ドット設定時

ビットマップ画面……26.5Kバイト(6A00Hバイト)

(2ビット×512×212)

BASIC：SCREEN 6に対応

3.7.1 GRAPHIC 5 モードの設定

GRAPHIC 5 モードへの設定は図4.39に示すとおりです。

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#0		•	•	•	•	1	0	0	•	
R#1		•	•	•	0	0	•	•	•	

図4.39 GRAPHIC 5モードの設定

3.7.2 パターンネーム・テーブル

GRAPHIC 5 モードでは、パターンネーム・テーブルの1バイトが画面上の4ドットに対応しています。それぞれのドットの色情報は2ビットで表され、4色が指定できます。パターンネーム・テーブルの設定は、GRAPHIC5 モードと同様、R#2にアドレスの上位2ビットを書き込むことによって行います。設定可能なアドレスは、00000H, 08000H, 10000H, 18000Hの4箇所です（図4.40）。

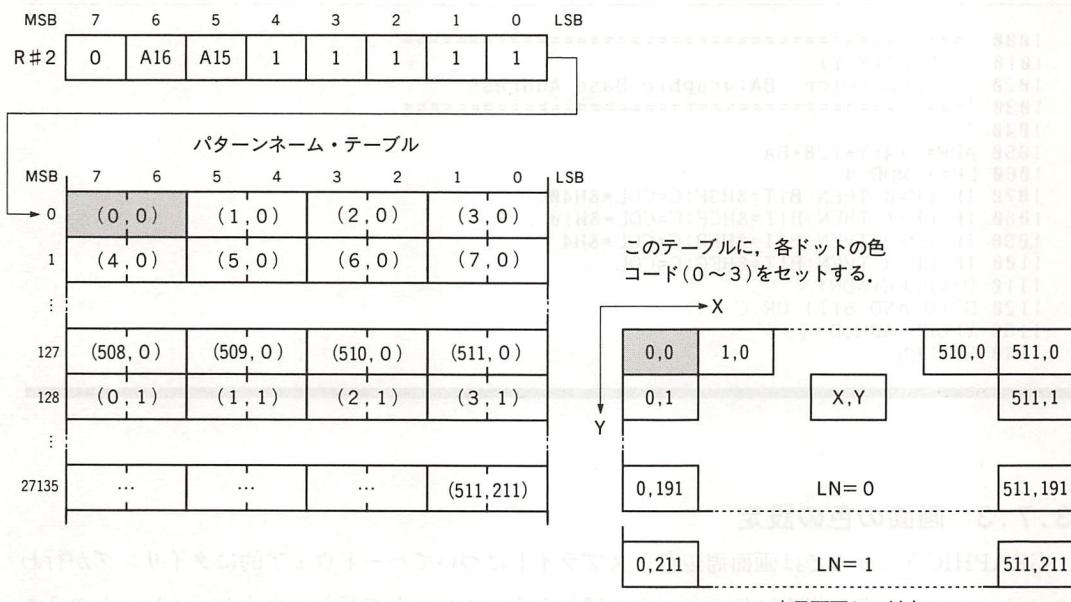


図4.40 GRAPHIC 5モードのパターンネーム・テーブルの構造

のことから、(X,Y)の位置にあるドットは、式4.2でアクセスできることになります。リスト4.3がその確認のためのプログラムです。

$$\text{ADR} = X / 4 + Y * 128 + \text{ベースアドレス}$$

*X MOD 4が0のときは7, 6ビット
X MOD 4が1のときは5, 4ビット
X MOD 4が2のときは3, 2ビット
X MOD 4が3のときは1, 0ビットがそのドットの色を表す

式4.2 座標(X, Y)のドットをアクセスする式

リスト4.3 BASICで書いたGRAPHIC 5モード用PSET

```

100 ' =====
110 ' LIST 4.3  dot access of GRAPHIC 5 mode
120 ' =====
130 .
140 SCREEN 6
150 BA=0
160 FOR I=0 TO 511
170   X=I: Y=I\2
180   COL=3
190   GOSUB 1000
200 NEXT
210 END
220 .

```

```

1000 '=====
1010 ' PSET(X,Y)
1020 '   COL:color BA:graphic Base Address
1030 '=====
1040 '
1050 ADR=X*4+Y*128+BA
1060 LP=X MOD 4
1070 IF LP=0 THEN BIT=&H3F:C=COL*&H40
1080 IF LP=1 THEN BIT=&HCF:C=COL*&H10
1090 IF LP=2 THEN BIT=&HF3:C=COL*&H4
1100 IF LP=3 THEN BIT=&HFC:C=COL
1110 D=VPEEK(ADR)
1120 D=(D AND BIT) OR C
1130 VPOKE ADR,D
1140 RETURN

```

3.7.3 画面の色の設定

GRAPHIC 5 モードでは画面周辺色とスプライトについてハードウェア的にタイリングが行われます。これらの色の指定は他のモードと同じように 4 ビットで行われますが、4 ビットのうち上位 2 ビットは X 座標が偶数のドット、下位 2 ビットは X 座標が奇数のドットの色をそれぞれ表します(図 4.41)。

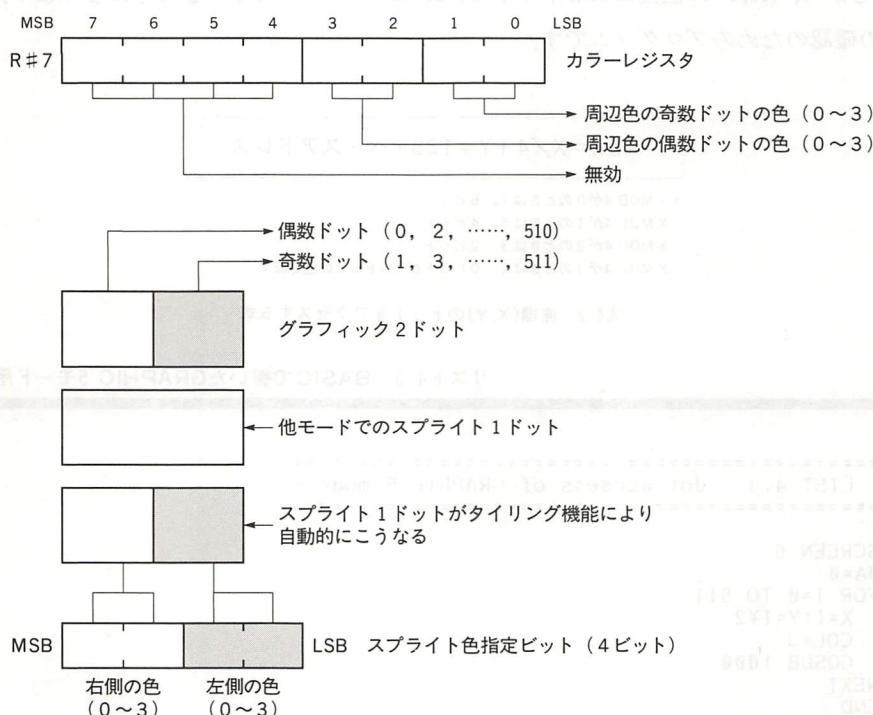


図4.41 GRAPHIC 5モードの画面の色の指定

3.8 GRAPHIC 6 モード

GRAPHIC 6 モードとは、以下に示す仕様の画面モードをいいます。

画面：横512ドット×縦212ドット（または縦192ドット）

16色が同時に表示可能

16色のそれぞれは、512色中から任意の1色を選択可能

コマンド：ハードウェアによるグラフィックコマンドが使用可能

スプライト：モード2のスプライト機能が使用可能

必要メモリ：縦192ドット設定時

ビットマップ画面用……48Kバイト(C000Hバイト)

(4ビット×512×192)

縦212ドット設定時

ビットマップ画面用……53Kバイト(D400Hバイト)

(4ビット×512×212)

ただし、ハードウェアの都合上 VRAM が 64K バイトの機種ではまったくこのモードは使用不可能

BASIC：SCREEN 7 に対応

3.8.1 GRAPHIC 6 モードの設定

GRAPHIC 6 モードへの設定は図 4.42 に示すとおりです。

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#0		•	•	•	•	1	0	1	•	
R#1		•	•	•	0	0	•	•	•	

図4.42 GRAPHIC 6モードの設定

3.8.2 パターンネーム・テーブル

GRAPHIC 6 モードは、パターンネーム・テーブルの 1 バイトが画面上の 2 ドットに対応しています。それぞれのドットの色情報は 4 ビットで表されており、16色の指定ができます（図 4.43）。パターンネーム・テーブルの先頭アドレス指定は、R#2 にアドレスの最上位ビットを書き込むことによって行います。設定可能なパターンネーム・テーブルのアドレスは 00000H または 10000H

Hの2箇所だけです。座標(X,Y)のドットは、式4.3でアクセスすることができます。リスト4.4がその確認のためのプログラムです。

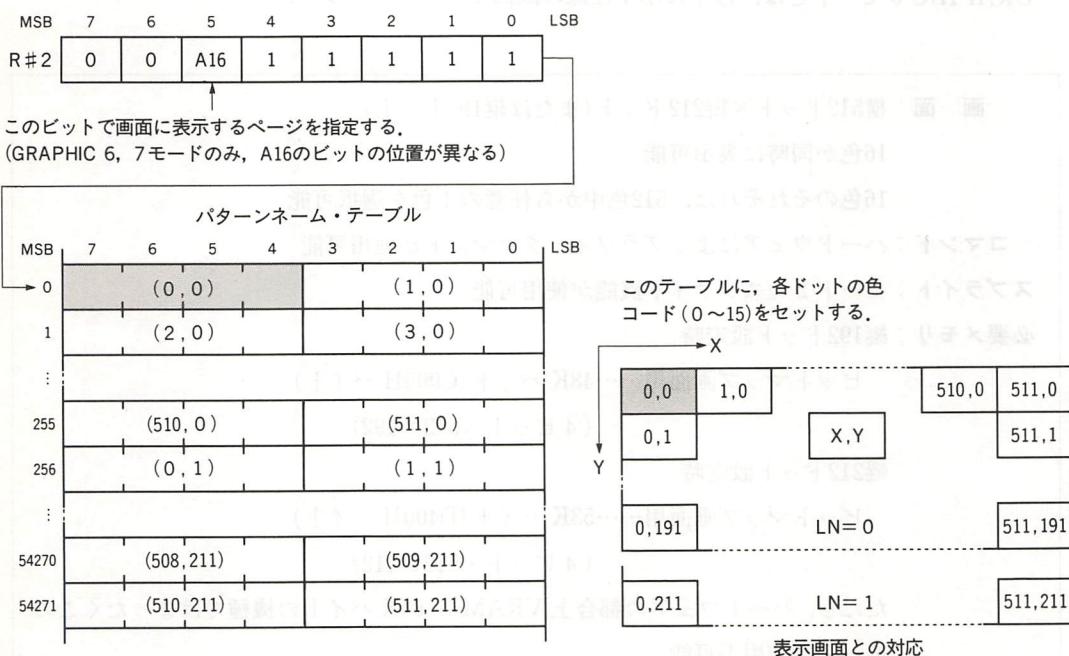


図4.43 GRAPHIC 6モードのパターンネーム・テーブルの構造

$$ADR = X/2 + Y * 256 + ベースアドレス$$

* Xが偶数のときは上位4ビット
Xが奇数のときは下位4ビットがそのドットの色を表す

式4.3 座標(X, Y)のドットをアクセスする式

リスト4.4 BASICで書いたGRAPHIC 6モード用PSET

```

100 ' =====
110 ' LIST 4.4  dot access of GRAPHIC 6 mode
120 ' =====
130 '
140 SCREEN 7
150 BA=0
160 FOR I=0 TO 511
170   X=I: Y=I\2: COL=15: GOSUB 1000
180 NEXT
190 END
200 '
1000 ' =====
1010 ' PSET (X,Y)
1020 '   COL:color BA:graphic Base Address
1030 ' =====
1040 '
1050 ADR=X\2+Y*256+BA
1060 IF X AND 1 THEN BIT=&HF: C=COL ELSE BIT=&HF0 :C=COL*16
1070 VPOKE ADR,(VPEEK(ADR) AND BIT) OR COL
1080 RETURN

```

3.8.3 画面の色の指定

- R#7で画面の周辺色の指定ができます(図4.44)。

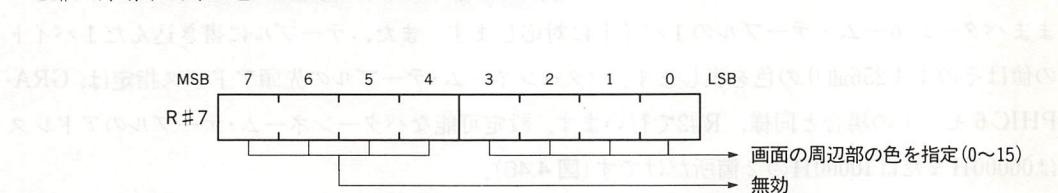


図4.44 GRAPHIC 6モードの画面の色の指定

3.9 GRAPHIC 7 モードの使用法

GRAPHIC 7 モードとは、以下に示す仕様の画面モードをいいます。

画 面：横256ドット×縦212ドット（または縦192ドット）

256色が同時に表示可能

コマンド：ハードウェアによるグラフィックコマンドが使用可能

スプライト：モード2のスプライト機能が使用可能

必要メモリ：縦192ドット設定時

ビットマップ画面用……48K バイト (C000H バイト)

(8ビット×256×192)

縦212ドット設定時

ビットマップ画面用……53K バイト (D400H バイト)

(8ビット×256×212)

GRAPHIC 6 と同様に VRAM が 64K バイトの機種ではまったくこのモード

は使用不可能

BASIC：SCREEN 8 に対応

3.9.1 GRAPHIC 7 モードの設定

GRAPHIC 7 モードの設定は、以下に示すとおりです。

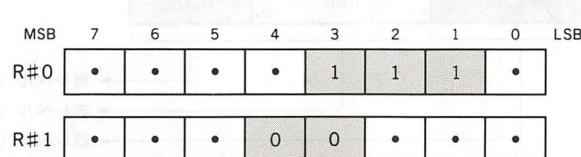


図4.45 GRAPHIC 7モードの設定

3.9.2 パターンネーム・テーブル

GRAPHIC 7 モードはすべてのモードの中で最も単純な構成であり、画面上の1ドットがそのままパターンネーム・テーブルの1バイトに対応します。また、テーブルに書き込んだ1バイトの値はそのまま256通りの色を表します。パターンネーム・テーブルの先頭アドレス指定は、GRAPHIC 6 モードの場合と同様、R#2で行います。設定可能なパターンネーム・テーブルのアドレスは00000Hまたは10000Hの2箇所だけです(図4.46)。

1バイトのデータは図4.47のように、緑3ビット、赤3ビット、青2ビットの輝度情報を直接表しています。画面上で(X, Y)の座標にあるドットは、式4.4でアクセスすることができます。

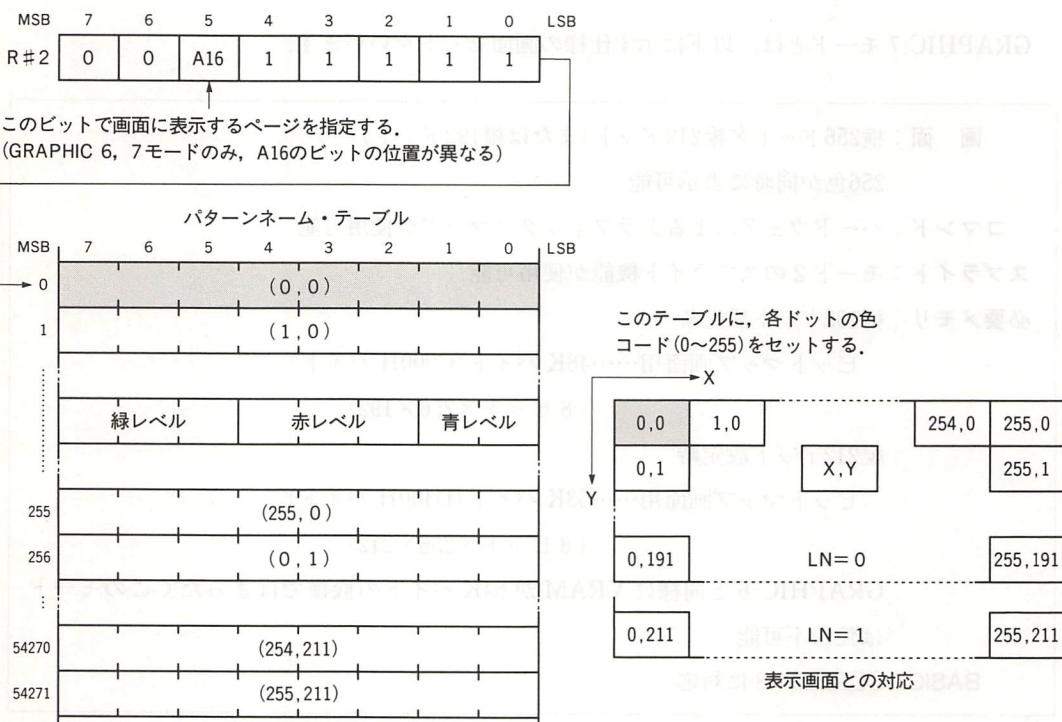


図4.46 GRAPHIC 7モードのパターンネーム・テーブルの構造

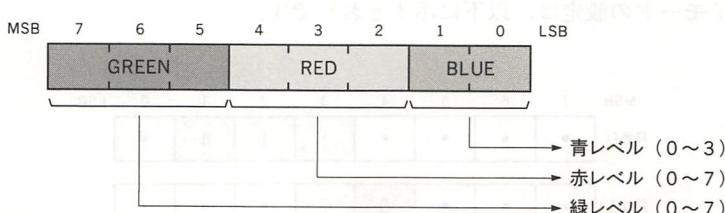


図4.47 RGBの輝度情報

$$\text{ADR} = X + Y * 256 + \text{ベースアドレス}$$

式4.4 座標(X, Y)のドットをアクセスする式

3.9.3 画面の色の指定

R#7で画面の周辺色を指定できます(図 4.48)

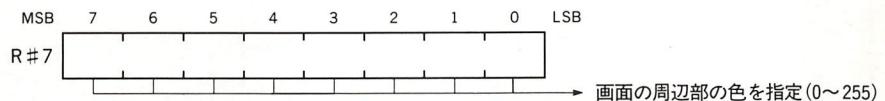


図4.48 GRAPHIC 7モードの画面の色の指定

4章 画面表示に関する諸機能

MSX-VIDEO は画面の ON/OFF や表示位置の補正など、画面表示に関する種々の細かい設定が可能です。本章では、それらの設定によって使用可能な MSX-VIDEO の機能を説明します。

● 画面の ON / OFF

R#1のビット6を用いて、画面のON/OFFを行います(図4.49)。OFFにすると、画面はR#7レジスタの下位4ビット(GRAPHIC7の場合は8ビット)で指定される色に変わり、その際VDPコマンドで描画を行う際の速度が少し向上します。

MSB 7 6 5 4 3 2 1 0

R#1 • X • • • • • •

0 : 画面表示OFF
1 : 画面表示ON

図4-49 画面のON/OFF

BASICによる実行例

VDP(1)=VDP(1) AND &B10111111 ←画面表示OFF

● 画面表示位置の補正

R#18は画面の表示位置を補正するためのレジスタです(図4.50)。BASICの“SET ADJUST”命令の機能に相当します。

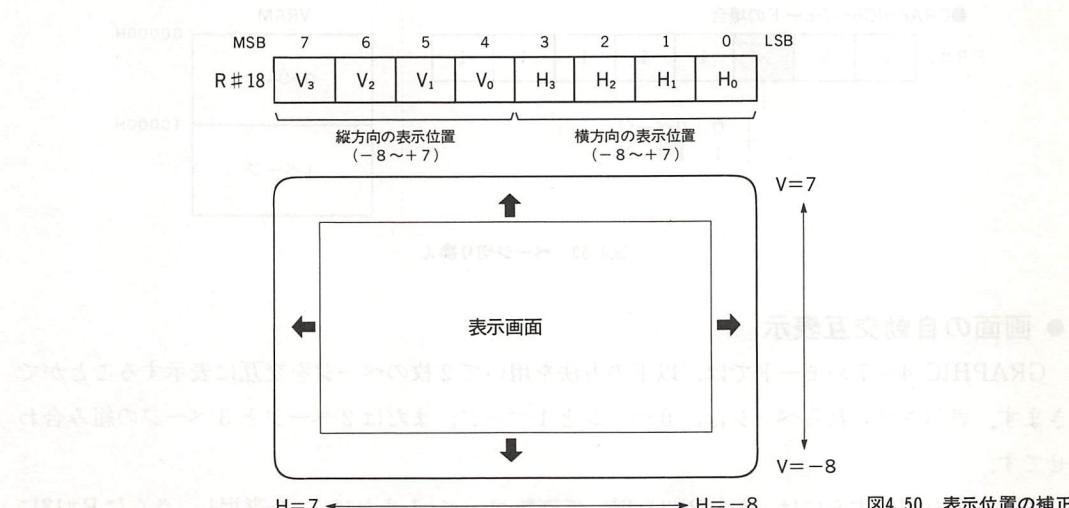


図4.50 表示位置の補正

● Y方向ドット数の切り換え

R#9のビット7を用いて、画面のY方向のドット数を192ドットまたは212ドットのどちらかに切り換えることができますが、この機能は、TEXT 2およびGRAPHIC 4~7の5種類の画面モードにおいてのみ有効です。なお、TEXT 2モードで212ドットを設定した場合、テキストの行数は26.5($=212/8$)となって、27行目の文字は上半分しか表示されません。

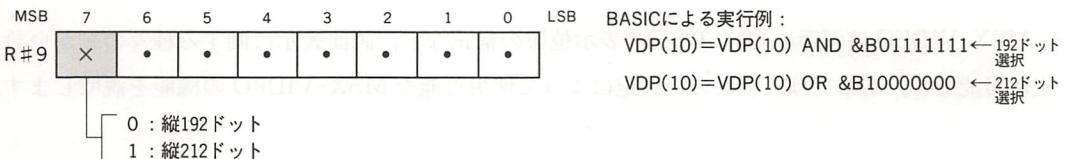
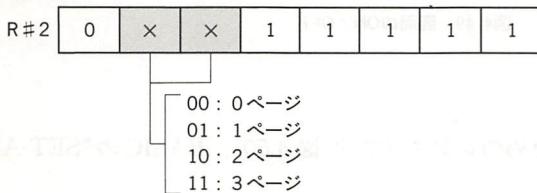


図4.51 縦のドット数切り換え

● 表示ページの切り換え

GRAPHIC 4~7モードでは、R#2でパターンネーム・テーブルの先頭アドレスを設定することにより、簡単に表示ページが切り換えられます。実際、BASICの“SET PAGE”命令の第2パラメータでは、このようにして表示ページを切り換えていきます。

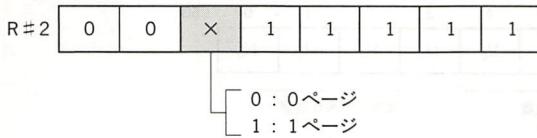
●GRAPHIC4~5モードの場合



VRAM

0ページ	0000H
1ページ	0800H
2ページ	1000H
3ページ	1800H

●GRAPHIC6~7モードの場合



VRAM

0ページ	0000H
1ページ	1000H

図4.52 ページ切り換え

● 画面の自動交互表示

GRAPHIC 4~7のモードでは、以下の方法を用いて2枚のページを交互に表示することができます。表示させられるページは、0ページと1ページ、または2ページと3ページの組み合わせです。

交互表示を開始するには、まずR#2を用いて奇数ページ(1または3)を選択し、さらにR#13に

画面交代の周期を設定します。R#13の上位4ビットは偶数ページの表示時間、下位4ビットは奇数ページの表示時間を、それぞれ1/6秒単位で表したものです。両方の時間ともに0を設定した場合には、奇数ページのみ表示されます。

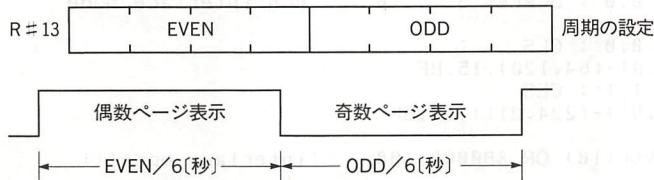


図4.53 画面交代の周期の設定

● インターレースモードの設定

インターレースとは、通常の画面と走査線を通常より半ライン下にずらした画面を高速に切り換えるながら表示し、疑似的にY方向の分解能を2倍に高める手法です。MSX-VIDEOでは、R#9のビット3を“1”にすることによって、インターレースモードが設定されます。2枚の画面は1/60秒ごとに切り換わります。

また、GRAPHIC 4～7の画面モードで奇数ページを選択し、さきほど述べた画面の交互表示を行う場合、普通は1/6秒を単位とするゆっくりとしたスピードで画面が切り換わるのですが、R#9のビット2を“1”としておくと、1/60秒間隔で交互表示が行われます。この機能とインターレース機能を組み合わせると、画面の縦方向の表示ドット数を2倍にすることができます。

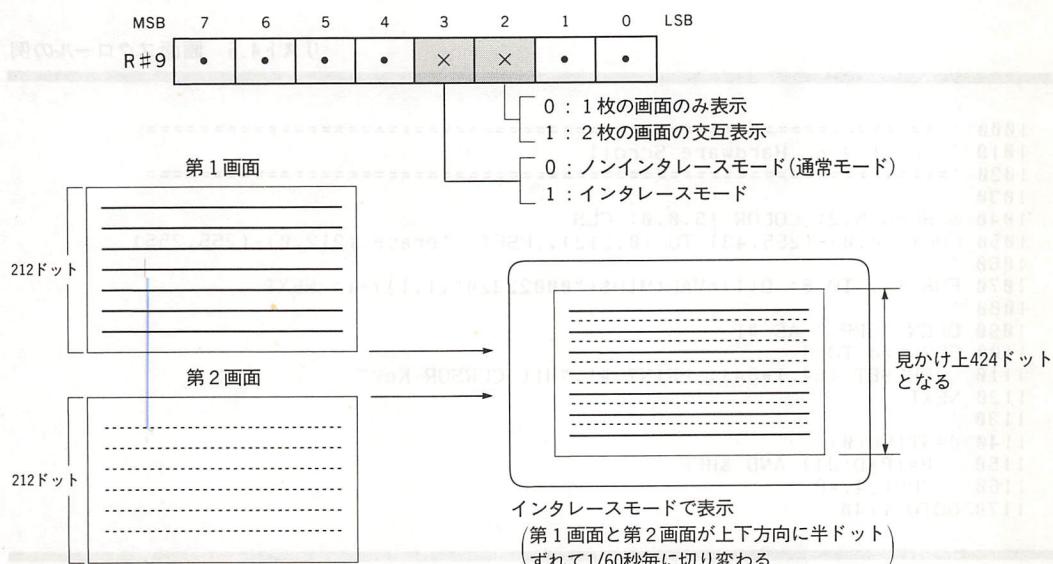


図4.54 インターレースモードの設定

リスト4.5 インターレースの使用例

```

1000 =====
1010 ' List 4.5 interlace mode
1020 =====
1030 '
1040 COLOR 15,0,0 : SCREEN 5,,,,0      'non interlace mode
1050 '
1060 SET PAGE 0,0 : CLS
1070 LINE (32,0)-(64,120),15,BF
1080 SET PAGE 1,1 : CLS
1090 LINE(192,91)-(224,211),15,BF
1100 '
1110 VDP(10)=VDP(10) OR &B00001100    'interlace mode!!!
1120 '
1130 FOR I=32 TO 192
1140   SET PAGE 1,0
1150   LINE(I,0)-STEP(0,120),0
1160   LINE(I+33,0)-STEP(0,120),15
1170   SET PAGE 1,1
1180   LINE(256-I,91)-STEP(0,120),0
1190   LINE(223-I,91)-STEP(0,120),15
1200 NEXT I
1210 '
1220 VDP(10)=VDP(10) AND &B11110011    'interlace off

```

● 画面の縦方向スクロール

R#23は画面の表示開始ラインを設定するレジスタです。このレジスタの値を変えることによって、画面の縦方向スクロールを行うことができます。ただし、スクロールは256ライン単位で行われますから、スプライト用テーブルなどは他のページに移動させなくてはなりません。この例をリスト4.6に示します。

リスト4.6 画面スクロールの例

```

1000 =====
1010 ' List 4.6 Hardware Scroll
1020 =====
1030 '
1040 SCREEN 5.2: COLOR 15,0,0: CLS
1050 COPY (0,0)-(255,43) TO (0,212),,PSET  'erase (212,0)-(255,255)
1060 '
1070 FOR I=1 TO 8: D(I)=VAL(MID$("00022220",I,1))-1: NEXT
1080 '
1090 OPEN "GRP:" AS #1
1100 FOR I=0 TO 3
1110   PRESET (64,I*64): PRINT #1,"Hit CURSOR Key"
1120 NEXT
1130 '
1140 J=STICK(0)
1150   P=(P+D(J)) AND &HFF
1160   VDP(24)=P
1170 GOTO 1140

```

● 色コード 0 の機能指定

16種類の色コードの中で、0だけは特別な機能を持ち、この色を指定した部分は、カラーパレット P#0にどんな色が設定されても“透明色(画面の周辺色が透けて見える)”とみなされます。しかし、R#8のビット5を“1”になるとこの機能は解消され、色コード0はパレットP#0が定義する色に変わります。

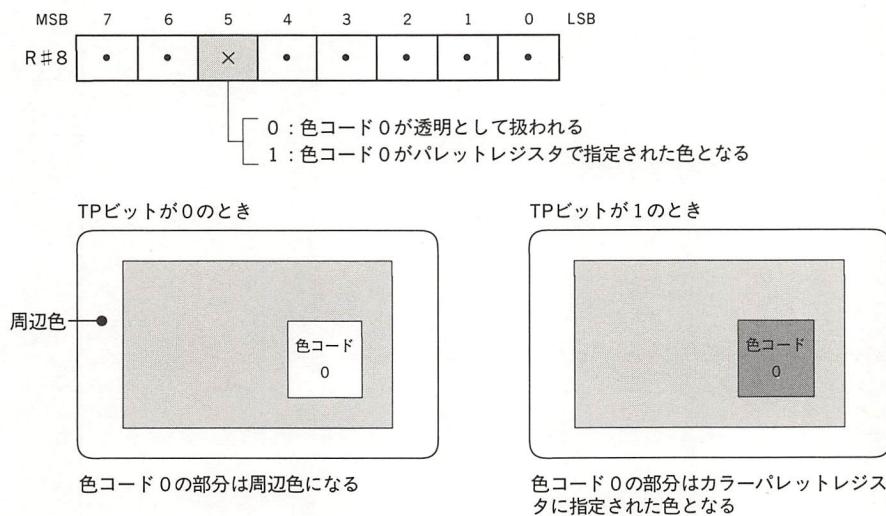


図4.55 色コード 0 の機能

● 走査線位置による割り込みの発生

MSX-VIDEOでは、CRTが特定の走査線の表示を終えた瞬間に割り込みを発生させることができます。その場合は割り込みを発生させたい走査線番号をR#19に設定し、R#0のビット4を“1”にしておいてください(図4.56)。

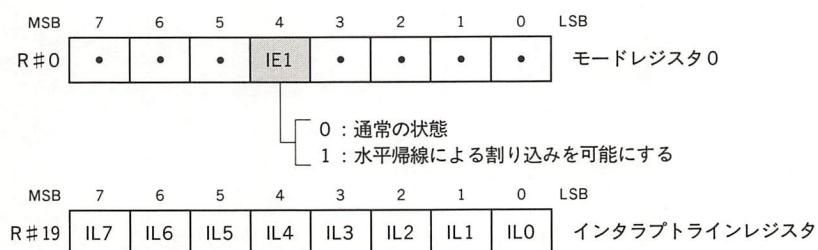


図4.56 走査線割り込みの発生

5 章 スプライト

スプライトとは、 8×8 または 16×16 ドットの大きさを持つキャラクタパターンを画面上の任意の座標に表示する機能です。この機能を用いることにより、たとえばゲームのキャラクタの表示を簡単に行うことができます。

表示する時に指定するパラメータは、X座標、Y座標、キャラクタ番号、カラーコードの4つで、このデータをあらかじめ設定したスプライトアトリビュート・テーブルに書き込むことによりスプライトは表示されます。

MSX 2 のスプライトには2種類のモードがあります。1つは従来の TMS9918 互換モードであり、これをスプライトモード1といいます。もう1つは新しく追加された高機能なスプライトモードで、こちらをスプライトモード2といいます。以下、スプライト機能の概要をまとめた後、この両者を順に説明していきます。

5.1 スプライトの機能

1つの画面には、最高で32個のスプライトを表示することができます。

スプライトの大きさは 8×8 ドット、または 16×16 ドットの2種類あり、2つを同時に指定することはできません。また、一般にスプライトの1ドットの大きさは、グラフィックの1ドットと同じですが、GRAPHIC 5 および 6 モード(両者とも 512×212 ドットの分解能)の場合には、横方向の大きさがグラフィックの2ドット分になります(結局、どのモードでも表示されるスプライトの絶対的な大きさは変わらない)。

その他のスプライトの機能に関しては、スプライトモードが1と2のどちらであるかによって変わってきます。スプライトのモードは、設定されている画面モードによって次のように自動的に選択されます。

スプライトモード1	GRAPHIC 1	(SCREEN 1)
が選択される		GRAPHIC 2	(SCREEN 2)
		MULTI COLOR	(SCREEN 3)

スプライトモード2	GRAPHIC 3	(SCREEN 4)
が選択される		GRAPHIC 4	(SCREEN 5)
		GRAPHIC 5	(SCREEN 6)
		GRAPHIC 6	(SCREEN 7)
		GRAPHIC 7	(SCREEN 8)

5.2 スプライトモード1

スプライトモード1はMSX1のスプライトと同機能です。したがって、このモードを使ってい
る限りはMSX1でも動作可能です。

5.2.1 最大表示数

32個のスプライトには、それぞれ0～31の番号が付けられていて、番号の若い方から高い優先順位が与えられています。画面の同一水平線上にスプライトが並んだ場合、優先度の高い順に4つまで表示され、5番目以降のスプライトの重なった部分は表示されません。

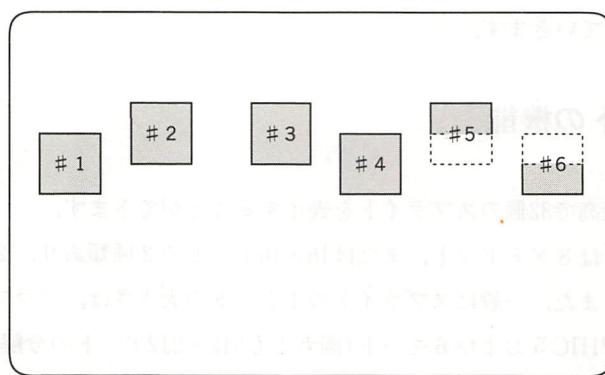


図4.57 スプライトの最大表示数(スプライトモード1)

5.2.2 スプライト表示のための諸設定

スプライトを表示するために必要な諸設定を以下に示します。

●スプライトのサイズの設定

8×8ドットまたは16×16ドットのどちらかを設定します(図4.58)。デフォルト(省略値)は8×8ドットになっています。

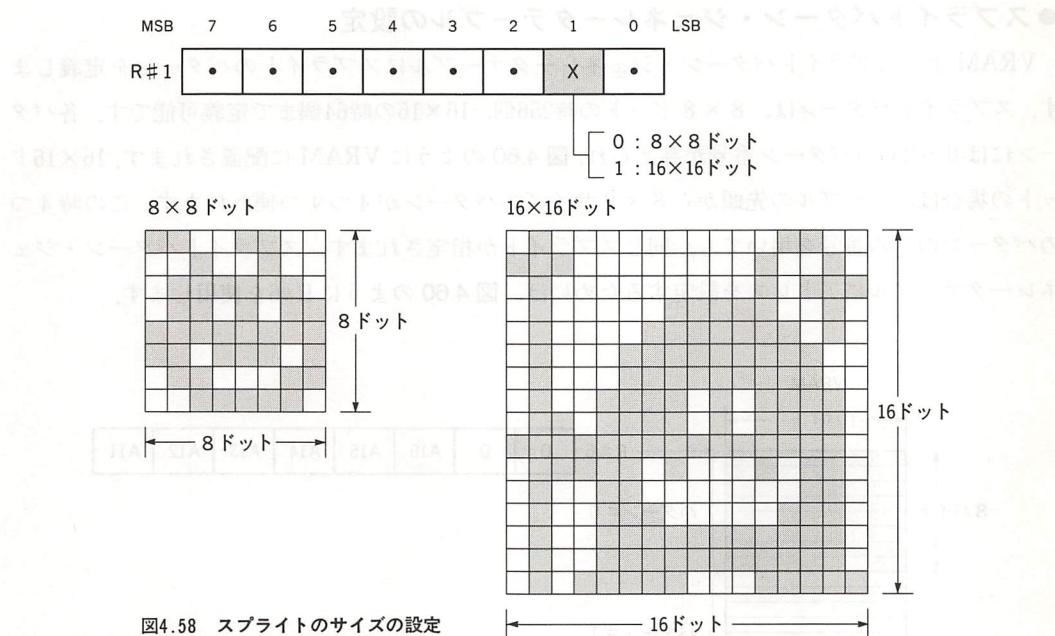


図4.58 スプライトのサイズの設定

●スプライトの拡大

スプライトの1ドットを画面の1ドットに対応させるか、または縦横2倍に拡大するかを設定します(図4.59)。デフォルトは1対1の対応になっています。

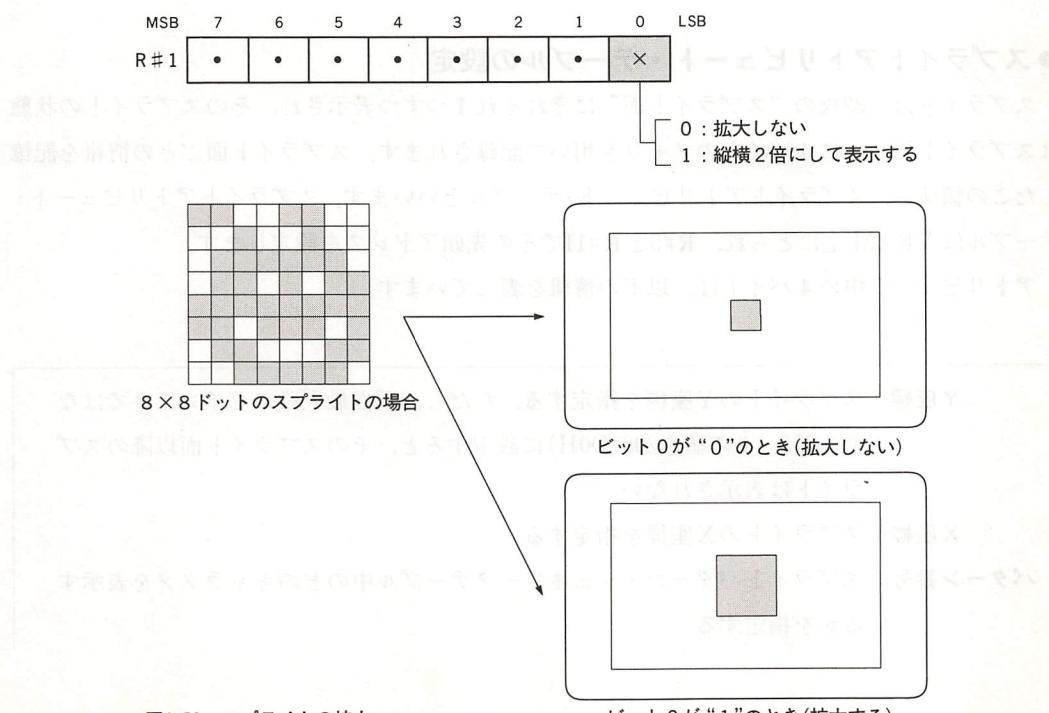


図4.59 スプライトの拡大

●スプライトパターン・ジェネレーターテーブルの設定

VRAM 上のスプライトパターン・ジェネレーターテーブルにスプライトのパターンを定義します。スプライトパターンは、 8×8 ドットの時256個、 16×16 の時64個まで定義可能です。各パターンには 0 ~ 255 のパターン番号が与えられ、図 4.60 のように VRAM に配置されます。 16×16 ドットの場合は、テーブルの先頭から 8×8 サイズのパターンが 4 つずつ使われます。この時 4 つのパターンのどの番号を用いても、同じスプライトが指定されます。スプライトパターン・ジェネレーターテーブルにアドレスを設定するためには、図 4.60 のように R#6 を使用します。

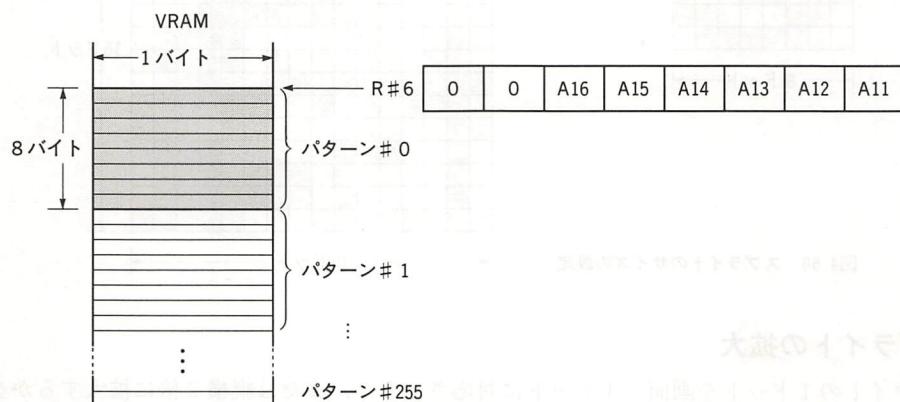


図4.60 スプライトパターン・ジェネレーターテーブルの構造(スプライトモード1)

●スプライトアトリビュート・テーブルの設定

スプライトは、32枚の“スプライト面”にそれぞれ1つずつ表示され、そのスプライトの状態はスプライト面ごとに4バイトのメモリを用いて記録されます。スプライト面ごとの情報を記憶したこの領域を、スプライトアトリビュート・テーブルといいます。スプライトアトリビュート・テーブルは VRAM 上にとられ、R#5 と R#11 でその先頭アドレスを設定します。

アトリビュート中の4バイトは、以下の情報を表しています。

Y座標：スプライトのY座標を指定する。ただし、画面最上段のラインは 0 ではなく、255。この値を208(D0H)に設定すると、そのスプライト面以降のスプライトは表示されない

X座標：スプライトのX座標を指定する

パターン番号：スプライトパターン・ジェネレーターテーブル中のどのキャラクタを表示するかを指定する

色コード：スプライトパターンのビットが“1”である部分の色(パレット番号)を指定する

EC：このビットを“1”にすると、スプライトは左へ32ドット分シフトされる。
この機能を使用すると、画面の左端からスプライトを1ドットずつ出現させることができる

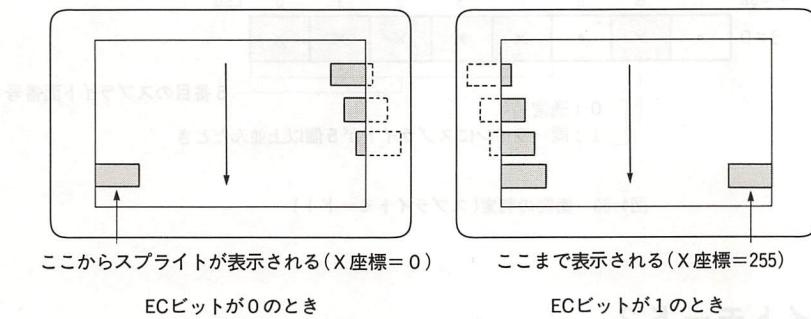
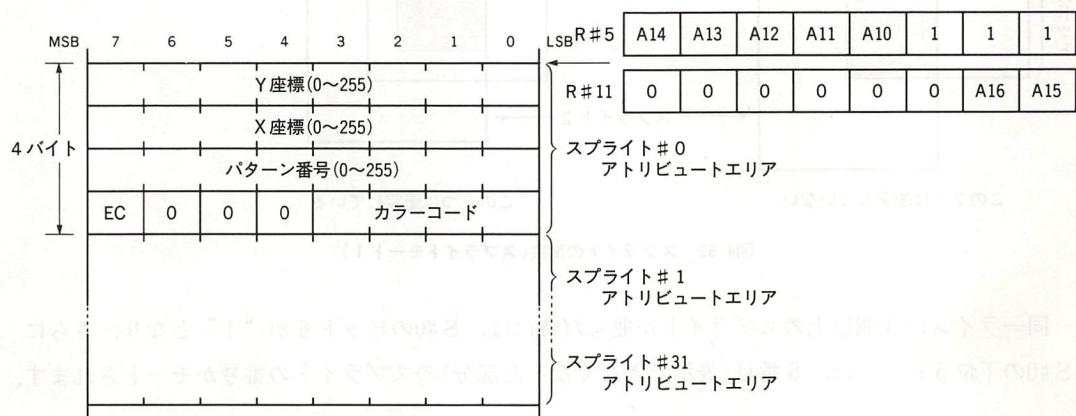


図4.61 スプライトアトリビュート・テーブルの構造(スプライトモード1)

5.2.3 スプライトの衝突判定

2個のスプライトが衝突した時、S#0のビット5が“1”になって衝突の発生を知らせます。ここで“衝突”とは、“透明色”ではない色のスプライトパターン中の“1”的ビット同士が同一座標を占めた場合を指します(図4.62)。

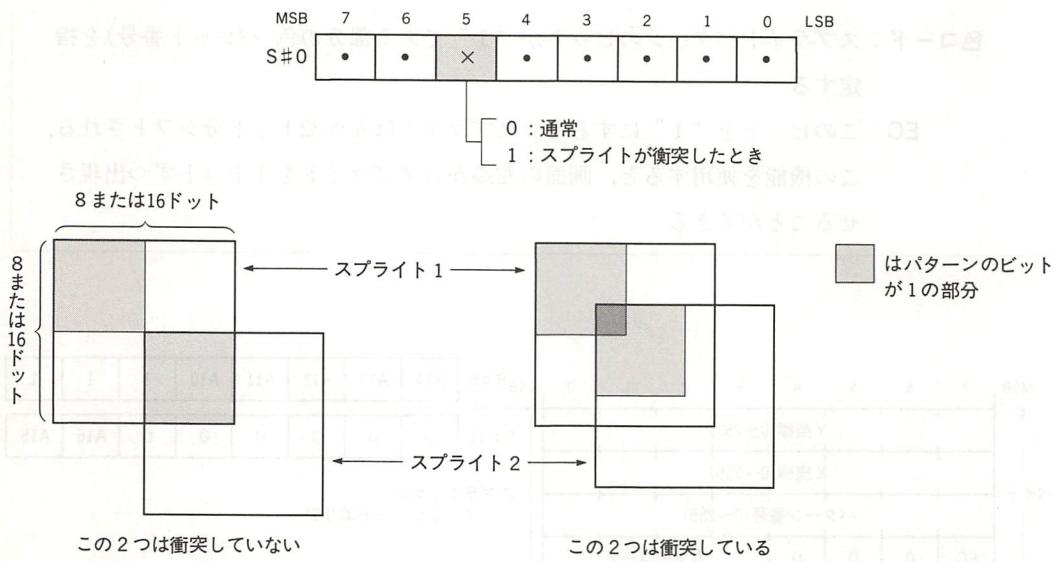


図4.62 スプライトの衝突(スプライトモード1)

同一ラインに5個以上のスプライトが並んだ時には、S#0のビット6が“1”となり、さらにS#0の下位5ビットに、5番目(表示できなくなった部分)のスプライトの番号がセットされます。

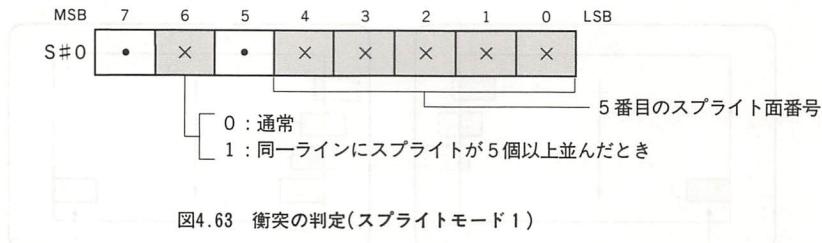


図4.63 衝突の判定(スプライトモード1)

5.3 スプライトモード2

スプライトモード2は、MSX-VIDEOで新設されたモードです。したがって、TMS 9918との互換性はありません。

5.3.1 最大表示数

1画面に表示できるスプライトの数はやはり32個ですが、画面の同一水平ライン上には優先度の高い順に8つまで表示できます。9番目以降のスプライトの重なった部分は表示されません。

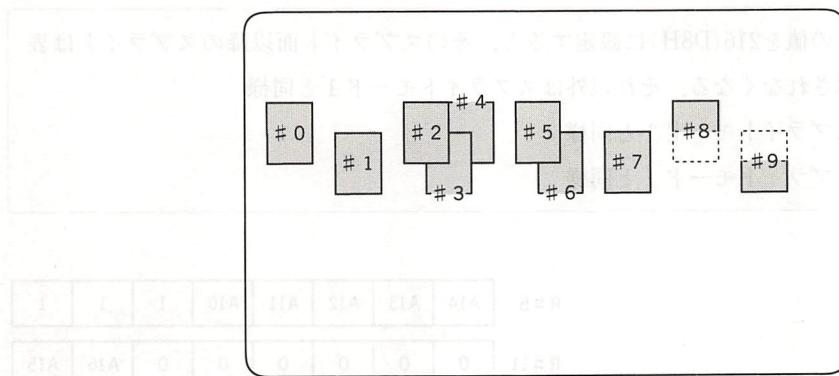


図4.64 スプライトの最大表示数(スプライトモード2)

5.3.2 スプライト表示のための諸設定

- スプライトサイズ…………スプライトモード1と同様。
- スプライトの拡大…………スプライトモード1と同様。
- スプライト表示のON/OFF

スプライトモード2では、R#8のビット1によってスプライトの表示をON／OFFすることができます。スプライトがまったく画面に現れない場合、このビットが“1”に設定されている可能性があります。

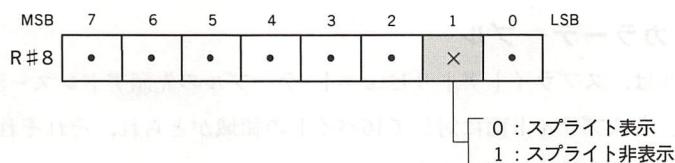


図4.65 スプライト表示の指定

- パターンジェネレータ・テーブルの設定 …… スプライトモード1と同様。
- スプライトアトリビュート・テーブル

スプライトモード2ではスプライトの横1ラインごとに異なる色を付けることが可能となり、そのため色情報はスプライトアトリビュート・テーブルから独立して、次に述べるスプライトカラーテーブルに記憶されることになりました。スプライトアトリビュート・テーブルには、以下の3種類の情報が格納されます(図4.66)。

Y座標：この値を216(D8H)に設定すると、そのスプライト面以降のスプライトは表示されなくなる。それ以外はスプライトモード1と同様

X座標：スプライトモード1と同様

パターン番号：スプライトモード1と同様

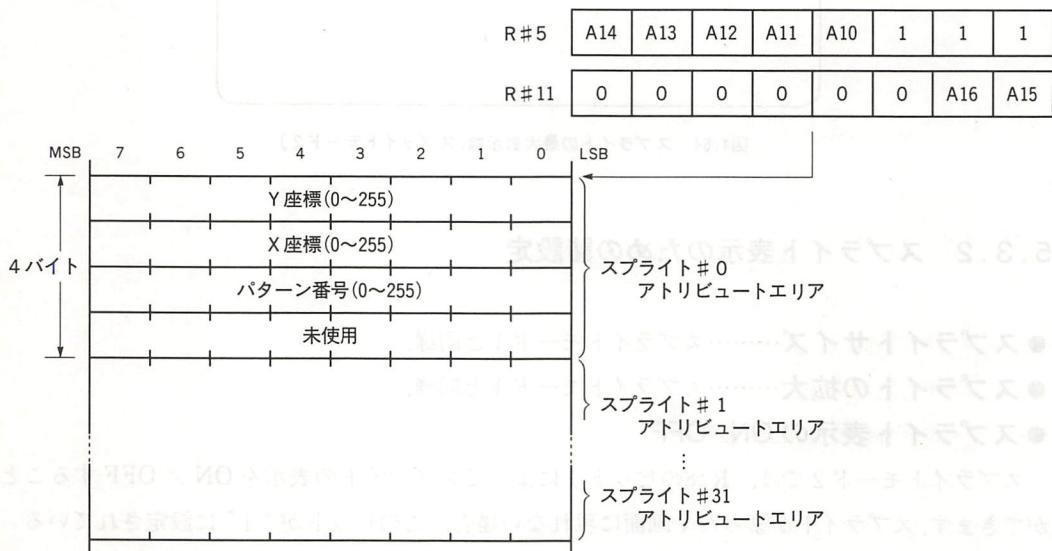


図4.66 スプライトアトリビュート・テーブルの構造(スプライトモード2)

●スプライトカラー・テーブル

カラー・テーブルは、スプライトアトリビュート・テーブルの先頭アドレス—512の位置に自動的に設定されます。各スプライト面に対して16バイトの領域がとられ、それぞれスプライトの1ラインごとに以下のようないい定を行います。

色コード：1ラインごとに色指定可能。

EC：スプライトモード1のアトリビュート・テーブルのECビットと同様、“1”であるときはスプライトの表示位置が左へ32ドット分シフトされる。これも1ラインごとに指定可能。

CC：CCビットが“1”的場合、「このスプライトよりも優先順位が高く、かつCCビットが“0”で、最もこのスプライト面に近い」スプライトと等しい優先順位が得られる。等しい優先順位を持つスプライトが重なった場合には、その両者の色コードのOR(論理和)をとったものが表示される。この場合、重なっても衝突は発

生しない(図4.68参照)。

IC: このビットが“1”であるスプライト(の1ライン)は、他のスプライトとの衝突を発生しない。

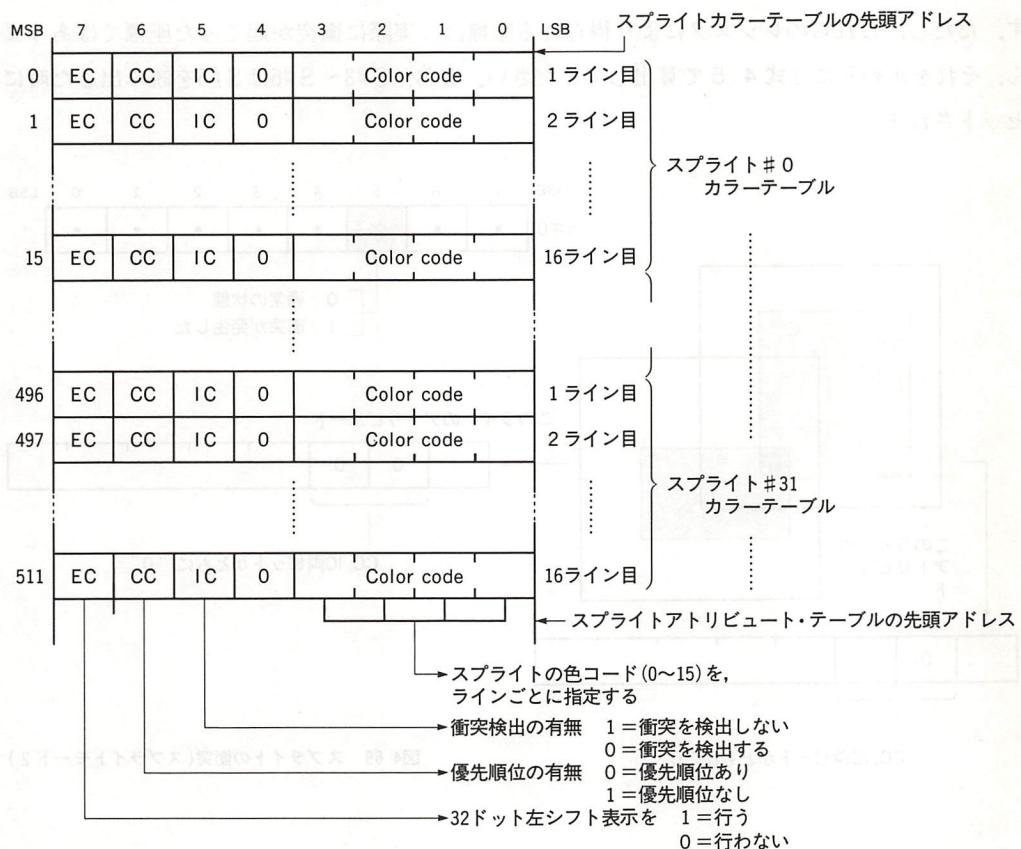
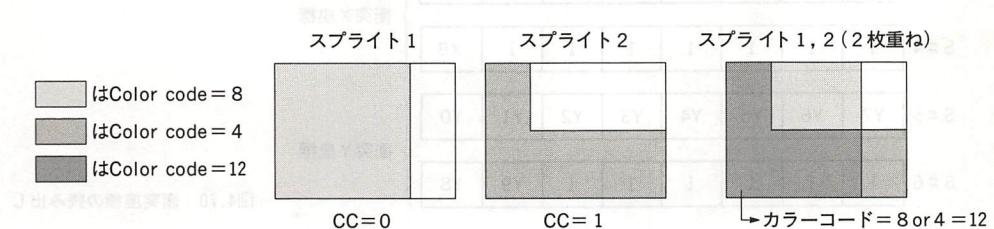


図4.67 スプライトカラーテーブルの構造(スプライトモード2)



注1) CCを1にしたスプライトは、そのスプライトより若い番号で最もそのスプライトに近いスプライトの
CC=0の部分とパターンが重なっても衝突の検出は、行わない。

2) CC=1のスプライトを表示させるには、表示させたいスプライトより若い番号のスプライトのccbitを
0にしなければならない。

図4.68 cc bitの意味

5.3.3 スプライトの衝突判定

スプライトモード2における“衝突”とは、スプライトの表示色が透明でなく、かつCCビットが0であるライン上の“1”的ビット同士が重なった場合をいいます。2つのスプライトが衝突した場合はS#0のビット5が“1”になり、衝突が検出できます(図4.69)。この時スプライトモード1と異なり、衝突の発生した座標を図4.70のようにS#3～S#6によって知ることができます。ただし、これらのレジスタにより得られる座標は、実際に衝突が起こった座標ではありません。それを求めるには式4.5で算出してください。なお、S#3～S#6はS#5を読み出した時にリセットされます。

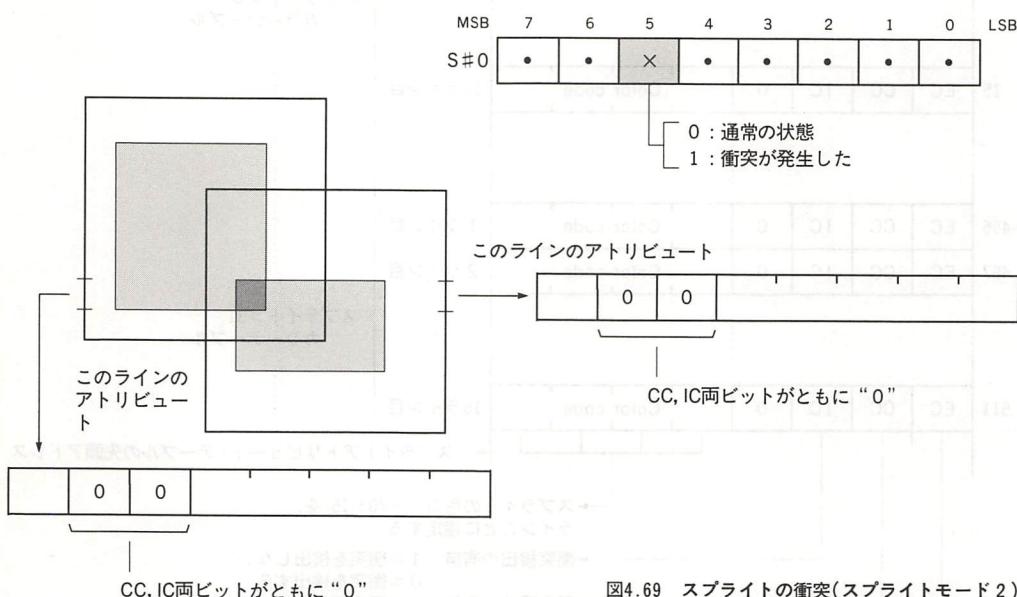


図4.69 スプライトの衝突(スプライトモード2)

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
S#3	X7	X6	X5	X4	X3	X2	X1	X0		衝突 X 座標
S#4	1	1	1	1	1	1	1	X8		
S#5	Y7	Y6	Y5	Y4	Y3	Y2	Y1	Y0		衝突 Y 座標
S#6	1	1	1	1	1	1	Y9	Y8		

図4.70 衝突座標の読み出し

$$(\text{衝突が起こった X 座標}) = (S\#3, S\#4 \text{ の X 座標}) - 12$$

$$(\text{衝突が起こった Y 座標}) = (S\#5, S\#6 \text{ の Y 座標}) - 8$$

式4.5 実衝突座標の算出

同一水平ライン上に9個以上のスプライトが並んだ時には、S#0のビット6が“1”になり、さらにS#0の下位5ビットに9番目に優先順位の低いスプライト面の番号が入ります(図4.71)。

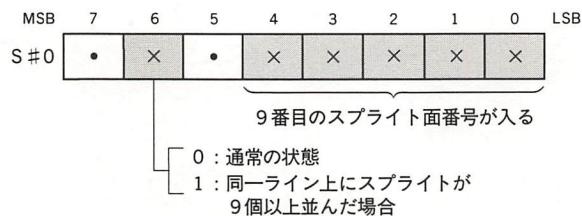


図4.71 スプライトの衝突(スプライトモード2)

6章 VDPコマンドの使用法

MSX-VIDEO では GRAPHIC 4～GRAPHIC 7 モードにおいて、基本的なグラフィック処理をハードウェアによって行えるようになっており、それらをまとめて VDP コマンドと呼んでいます。VDP コマンドによるグラフィックの描画は、必要なパラメータを設定した後にコマンドを起動するのみでよく、ソフトウェアの負担軽減およびグラフィックのスピードアップの点で大きな効果が得られます。本章ではこの VDP コマンドについて説明します。

6.1 VDP コマンドの座標系

VDP コマンドを実行する際、ソース(転送元)あるいはデスティネーション(転送先)の位置はすべて図 4.72 のような(X,Y)座標で表されます。また同図からわかるように、コマンド実行時にはページの区別はいっさいなくなり、128Kバイトの VRAM 全体が 1 つの大きな座標系の中に置かれます。

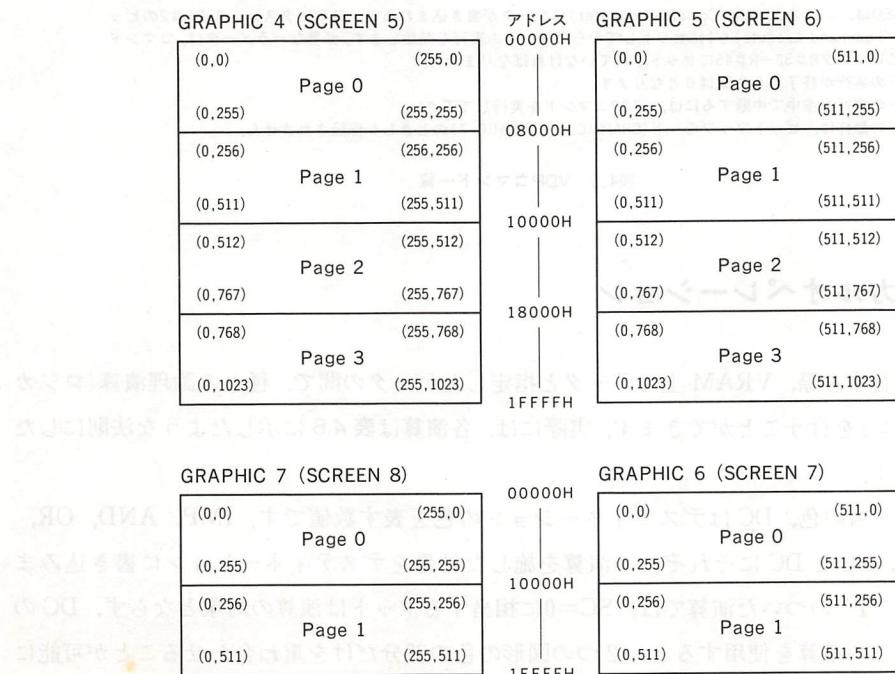


図4.72 VRAMの座標系

6.2 VDPコマンドの種類

MSX-VIDEOで実行できるコマンドには、表4.5に示す12種類があります。

コマンド名	転送先	転送元	転送単位	ニーモニック	R#46(上位4ビット)			
High speed move (高速移動)	VRAM	CPU	バイト	HMMC	1	1	1	1
	VRAM	VRAM	バイト	YMMM	1	1	1	0
	VRAM	VRAM	バイト	HMMM	1	1	0	1
	VRAM	VDP	バイト	HMMV	1	1	0	0
Logical move (論理移動)	VRAM	CPU	ドット	LMMC	1	0	1	1
	CPU	VRAM	ドット	LMCM	1	0	1	0
	VRAM	VRAM	ドット	LMMM	1	0	0	1
	VRAM	VDP	ドット	LMMV	1	0	0	0
Line(描線)	VRAM	VDP	ドット	LINE	0	1	1	1
Search(探索)	VRAM	VDP	ドット	SRCH	0	1	1	0
Pset(描点)	VRAM	VDP	ドット	PSET	0	1	0	1
Point	VDP	VRAM	ドット	POINT	0	1	0	0
未使用	—	—	—	—	0	0	1	1
	—	—	—	—	0	0	1	0
	—	—	—	—	0	0	0	1
Stop	—	—	—	—	0	0	0	0

- MSX-VIDEOは、レジスタR#46(Command register)にデータが書き込まれると、ステータスレジスタS#2のビット0(CE/Command Execute)を1にセットしてからコマンドの実行を開始します。必要なパラメータは、コマンド実行前にレジスタR#32～R#45にセットされていなければなりません。
 - コマンドの実行が終了するとCEは0となります。
 - コマンドの実行を途中で中断するには、STOPコマンドを実行して下さい。
 - コマンドの動作は、ビットマップモード(GRAPHIC 4～GRAPHIC 7)のときしか保証されません。

表4.5 VDPコマンド一覧

6.3 ロジカルオペレーション

コマンドを実行する際、VRAM上のデータと指定したデータの間で、種々の論理演算(ロジカルオペレーション)を行うことができます。実際には、各演算は表4.6に示したような法則にしたがって行われます。

表中SCはソースの色、DCはデスティネーションの色を表す数値です。IMP, AND, OR, EOR, NOTは、SCとDCにそれぞれの演算を施した結果をデスティネーションに書き込みます。また、頭に“T”のついた演算では、SC=0に相当するドットは演算の対象とならず、DCのまま残ります。この演算を使用すると、2つの図形の色の部分だけを重ね合わせることが可能に

なり、アニメーションなどに威力を發揮します。

この演算の例をリスト4.7に示します。

演算名	Operation (演算動作)	L03	L02	L01	L00
IMP	$DC = SC$	0	0	0	0
AND	$DC = SC \times DC$	0	0	0	1
OR	$DC = SC + DC$	0	0	1	0
EOR	$DC = \overline{SC} \times DC + SC \times \overline{DC}$	0	0	1	1
NOT	$DC = \overline{SC}$	0	1	0	0
—		0	1	0	1
—		0	1	1	0
—		0	1	1	1
TIMP	if $SC = 0$ then $DC = DC$ else $DC = SC$	1	0	0	0
TAND	if $SC = 0$ then $DC = DC$ else $DC = SC \times DC$	1	0	0	1
TOR	if $SC = 0$ then $DC = DC$ else $DC = SC + DC$	1	0	1	0
TEOR	if $SC = 0$ then $DC = DC$ else $DC = \overline{SC} \times DC + SC \times \overline{DC}$	1	0	1	1
TNOT	if $SC = 0$ then $DC = DC$ else $DC = SC$	1	1	0	0
—		1	1	0	1
—		1	1	1	0
—		1	1	1	1

*SC=Source Color code

*DC=Destination Color code

*EOR=Exclusive OR

表4.6 ロジカルオペレーション一覧

リスト4.7 Tつき演算の例

```

1000 '=====
1010 ' List 4.7 logical operation with T
1020 '=====
1030 '
1040 SCREEN8 : COLOR 15,0,0 : CLS
1050 DIM A%(3587)
1060 '
1070 LINE (50,50)-(60,100),48,B : PAINT(51,51),156,48
1080 CIRCLE (55,30),30,255 : PAINT(55,30),240,255
1090 COPY(20,0)-(90,100) TO A%
1100 CLS
1110 '
1120 R=RND(-TIME)
1130 FOR Y=0 TO 100 STEP 3
1140   X=INT(RND(1)*186)
1150   COPY A% TO (X,Y),,TPSET
1160 NEXT
1170 '
1180 GOTO 1180

```

6.4 領域指定

AREA-MOVE に属するコマンドは、任意の長方形に囲まれた領域内の画像データを転送するものです。転送元領域は、図 4.73 のように長方形の 1 つの頂点と各辺の長さによって指定され、SX, SY は転送元長方形の基準点、NX, NY は各辺の長さ(ドット数)、DIX, DIY の 2 ビットはデータ転送の方向を表します(DIX と DIY の意味はコマンドの種類によって異なる)。DX, DY には転送先領域の基準点を指定します。

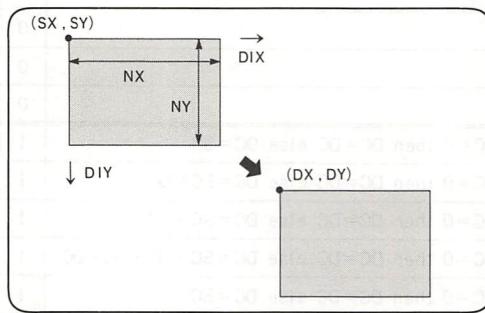


図4.73 領域の指定

6.5 各コマンドの使用法

コマンドは大きく分けて高速転送コマンド、論理転送コマンド、描画コマンドの 3 種類あり、使用法もさまざまです。次にそれらを 1 つ 1 つ解説します。

6.5.1 HMMC(CPU → VRAM 高速転送)

VRAM の指定された領域に CPU からデータをバイト単位で転送します(図 4.74)。ロジカルオペレーションは指定できません。この HMMC をはじめとする高速転送コマンドでは、データはバイト単位で転送されます。したがって、GRAPHIC 4~6 のモードではそれぞれ X 座標の下位 1 ビット、2 ビット、1 ビットが参照されない点に注意してください(図 4.75)。

図 4.76 に示すパラメータをレジスタに設定します。この時点で、CPU 側から転送するデータの最初の 1 バイトだけは R#44 に書き込んでおきます。R#46 にコマンドコード F0H を書き込むとコマンドの実行が開始され、MSX-VIDEO は R#44 のデータを受け取って VRAM に書き込み、その後 CPU 側からのデータ待ち状態になります。

CPU 側では、第 2 バイト以降のデータを R#44 に書き込んでいきます。ただし S#2 の TR ビットを参照し、MSX-VIDEO がデータ受け入れ可能な状態(TR ビットが“1”)になるのを待ってデ

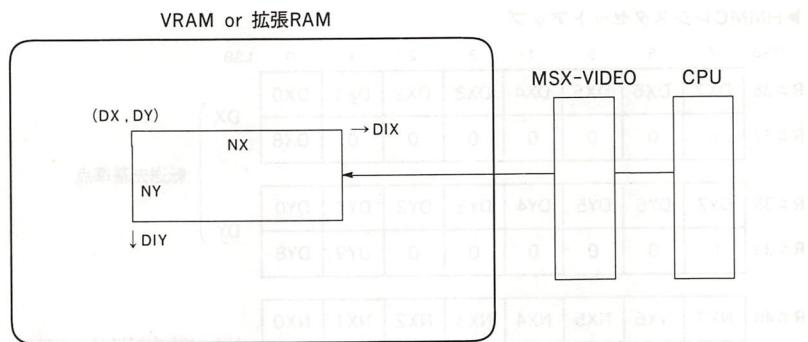
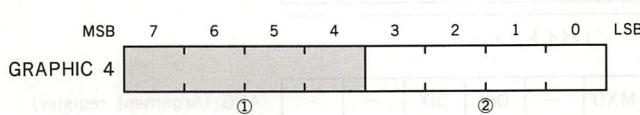
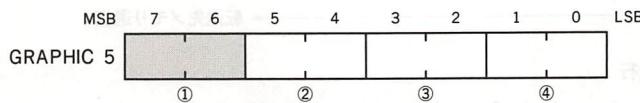


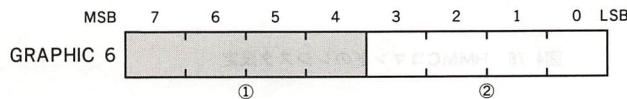
図4.74 HMMCコマンドの動作



VRAM 1バイトで2ドットを表すため, X座標の下位1ビットは参照しない。



VRAM 1バイトで4ドットを表すため, X座標の下位2ビットは参照しない。



VRAM 1バイトで2ドットを表すため, X座標の下位1ビットは参照しない。

図4.75 参照されないドット

ータを送らなくてはいけません。S#2のCEビットが“0”になるとすべてのデータ転送が終わることを示します(図4.77)。リスト4.8にHMMCのサンプルを示します。

▶ HMMCレジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#36		DX7	DX6	DX5	DX4	DX3	DX2	DX1	DX0	
R#37		0	0	0	0	0	0	0	DX8	
R#38		DY7	DY6	DY5	DY4	DY3	DY2	DY1	DY0	
R#39		0	0	0	0	0	0	DY9	DY8	
R#40		NX7	NX6	NX5	NX4	NX3	NX2	NX1	NX0	
R#41		0	0	0	0	0	0	0	NX8	
R#42		NY7	NY6	NY5	NY4	NY3	NY2	NY1	NY0	
R#43		0	0	0	0	0	0	NY9	NY8	
R#44		CR7	CR6	CR5	CR4	CR3	CR2	CR1	CR0	
	X=2N				X=2N+1				CLR (GRAPHIC4, 6)	
	X=4N				X=4N+1				CLR (GRAPHIC5)	
	X=4N+2				X=4N+3				CLR (GRAPHIC7)	
	1バイト／ドット								(N=0, 1, ……, 127)	
R#45		0	-	MXD	-	DIY	DIX	-	-	ARG (Argument register)
									→ 転送方向 (X) → 転送方向 (Y) → 転送先メモリ選択	

▶ HMMCコマンド実行

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#46		1	1	1	1	-	-	-	-	CMR

図4.76 HMMCコマンドのレジスタ設定

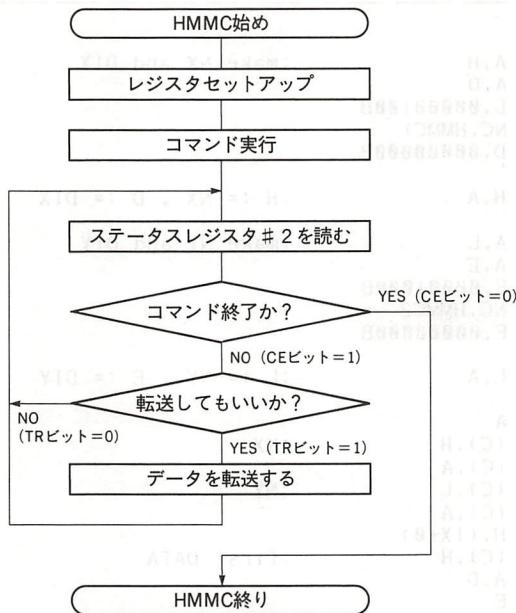


図4.77 HMMCコマンド実行のフローチャート

リスト4.8 HMMCコマンド実行例

```

=====
; List 4.8   HMMC sample
;          to use, set H,L,D,E,IX and go
;          RAM [IX] ---> VRAM (H,L)-(D,E)
=====

;
RDVDP EQU 0006H
WRVDP EQU 0007H
----- program start -----
HMMC:  DI ; disable interrupt
       CALL WAIT.VDP ; wait end of command

       LD A,(WRVDP)
       LD C,A
       INC C ; C := PORT#1's address
       LD A,36
       OUT (C),A
       LD A,17+80H
       OUT (C),A ; R#17 := 36

       INC C
       INC C ; C := PORT#3's address
       XOR A
       OUT (C),H ; DX
       OUT (C),A
       OUT (C),L ; DY
       OUT (C),A
  
```

```

LD      A,H           ;make NX and DIX
SUB    A,D
LD      D,00000100B
JR     NC,HMMC1
LD      D,00000000B
NEG
HMMC1: LD      H,A           ;H := NX , D := DIX
LD      A,L           ;make NY and DIY
SUB    A,E
LD      E,00000100B
JR     NC,HMMC2
LD      E,00000000B
NEG
HMMC2: LD      L,A           ;L := NY , E := DIY
XOR    A
OUT    (C),H           ;NX
OUT    (C),A
OUT    (C),L           ;NY
OUT    (C),A
LD      H,(IX+0)
OUT    (C),H           ;first DATA
LD      A,D
OR     E
OUT    (C),A           ;DIX and DIY
LD      A,0F0H
OUT    (C),A           ;HMMC command
LD      A,(RDVDP)
LD      C,A           ;C := PORT#1's address
LD      A,2
CALL   GET.STATUS
BIT    0,A           ;check CE bit
JR     Z,EXIT
BIT    7,A           ;check TR bit
JR     Z,LOOP
INC    IX
LD      A,(IX+0)
OUT    (C),A
JR     LOOP
LOOP: LD      A,2
CALL   GET.STATUS
BIT    0,A           ;check CE bit
JR     Z,EXIT
BIT    7,A           ;check TR bit
JR     Z,LOOP
INC    IX
LD      A,(IX+0)
OUT    (C),A
JR     LOOP
EXIT: LD      A,0
CALL   GET.STATUS
EI
RET
GET.STATUS: PUSH  BC           ;read status register specified by A
PUSH  BC,(RDVDP)
INC   C
OUT   (C),A
LD    A,8FH
OUT   (C),A
IN    A,(C)
POP   BC
RET

```

XG:	A,00	TUG
rd:	A,00	TUG
	A,00	TUG

```

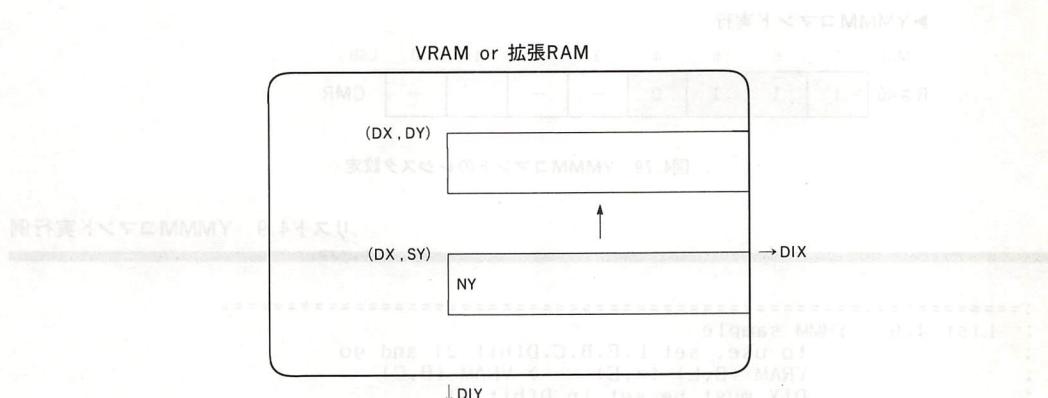
WAIT.VDP:
LD      A,2          ;wait VDP ready
CALL   GET.STATUS
AND    1
JR    NZ,WAIT.VDP
XOR    A
CALL   GET.STATUS
RET
END

```

6.5.2 YMMM(Y軸方向のVRAM間高速転送)

VRAM の指定された領域のデータを VRAM の他の領域にバイト単位で転送します。ただしこのコマンドでの転送はY軸方向だけに限られます(図 4.78)。

図 4.79 に示すデータをレジスタに設定した後、R#46にコマンドコード E0H を書き込むとコマンドの実行が開始されます。S#2の CE ビットが“1”的間はコマンド実行中であることを示します。リスト 4.9 に YMMM のサンプルを示します。



MXD : 転送先 メモリ選択 0=VRAM, 1=拡張RAM

SY : 転送元基準点 Y 座標 (0~1023)

NY : Y 方向転送ドット数 (0~1023)

DIX : 転送元基準点から左右どちらの画面端までを転送するかを設定する。0=右, 1=左

DIY : 転送基準点から見た NY の方向。0=下, 1=上

DX : 転送先基準点 X 座標 (0~511) *

DY : 転送先基準点 Y 座標 (0~1023)

*DXは、GRAPHIC 4/GRAPHIC 6モードのときは下位1ビット、GRAPHIC 5 モードのときは下位2ビットが無視される。

図4.78 YMMMコマンドの動作

▶YMMMレジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#34		SY7	SY6	SY5	SY4	SY3	SY2	SY1	SY0	
R#35		0	0	0	0	0	0	SY9	SY8	SY → 転送元基準点
R#36		DX7	DX6	DX5	DX4	DX3	DX2	DX1	DX0	
R#37		0	0	0	0	0	0	0	DX8	DX → 転送先および転送元基準点
R#38		DY7	DY6	DY5	DY4	DY3	DY2	DY1	DY0	
R#39		0	0	0	0	0	0	DY9	DY8	DY → 転送先基準点
R#42		NY7	NY6	NY5	NY4	NY3	NY2	NY1	NY0	
R#43		0	0	0	0	0	0	NY9	NY8	NY → Y方向転送ドット数
R#45		0	-	MXD	-	DIY	DIX	-	-	ARG (Argument register)
										→ 転送方向 (X) → 転送方向 (Y) → 転送先メモリ選択

▶YMMMコマンド実行

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#46		1	1	1	0	-	-	-	-	CMR

図4.79 YMMMコマンドのレジスタ設定

リスト4.9 YMMMコマンド実行例

```

=====
; List 4.9 YMMM sample
; to use, set L,E,B,C,D(bit 2) and go
; VRAM (B,L)-(*,E) ---> VRAM (B,C)
; DIX must be set in D(bit 2)
=====

RDVDP EQU 0006H
WRVDP EQU 0007H

----- program start -----
YMMM: DI ; disable interrupt
      PUSH BC ; save destination
      CALL WAIT.VDP ; wait end of command

      LD A,(WRVDP)
      LD C,A
      INC C ; C := PORT#1's address
      LD A,34
      OUT (C),A
      LD A,17+80H
      OUT (C),A ; R#17 := 34

```

```

INC C ;C := PORT#3's address
INC C ;C := PORT#3's address
XOR A ;SY
OUT (C),L ;SY
OUT (C),A ;SY

LD A,L ;make NY and DIY
SUB A,E
LD E,00001000B
JP NC,YMM1
LD E,00000000B
NEG
YMM1: LD L,A ;L := NY , D := DIY
LD A,D
OR E

POP DE ;restore DX,DY
PUSH AF ;save DIX,DIY
XOR A
OUT (C),D ;DX
OUT (C),A ;DY
OUT (C),E ;DY
OUT (C),A ;dummy
OUT (C),A ;dummy
OUT (C),L ;NY
OUT (C),A ;dummy
OUT (C),A ;dummy
POP AF
OUT (C),A ;DIX and DIY
LD A,11010000B ;YMM command
OUT (C),A

```

EI
RET

GET.STATUS:

```

PUSH BC
LD BC,(RDVDP)
INC C
OUT (C),A
LD A,8FH
OUT (C),A
IN A,(C)
POP BC
RET

```

WAIT.VDP:

```

LD A,2
CALL GET.STATUS
AND I
JP NZ,WAIT.VDP
XOR A
CALL GET.STATUS
RET

```

END

YMM1: 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

DX0	DX1	DX2	DX3	DX4	DX5	DX6	DX7	DX8	DX9	DXA	DXB	DXC	DXD	DXE	DXF
SY0	SY1	SY2	SY3	SY4	SY5	SY6	SY7	SY8	SY9	SYA	SYB	SYC	SYD	SYE	SYF
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

DX0	DX1	DX2	DX3	DX4	DX5	DX6	DX7	DX8	DX9	DXA	DXB	DXC	DXD	DXE	DXF
SY0	SY1	SY2	SY3	SY4	SY5	SY6	SY7	SY8	SY9	SYA	SYB	SYC	SYD	SYE	SYF
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

DX0	DX1	DX2	DX3	DX4	DX5	DX6	DX7	DX8	DX9	DXA	DXB	DXC	DXD	DXE	DXF
SY0	SY1	SY2	SY3	SY4	SY5	SY6	SY7	SY8	SY9	SYA	SYB	SYC	SYD	SYE	SYF
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

DX0	DX1	DX2	DX3	DX4	DX5	DX6	DX7	DX8	DX9	DXA	DXB	DXC	DXD	DXE	DXF
SY0	SY1	SY2	SY3	SY4	SY5	SY6	SY7	SY8	SY9	SYA	SYB	SYC	SYD	SYE	SYF
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

DX0	DX1	DX2	DX3	DX4	DX5	DX6	DX7	DX8	DX9	DXA	DXB	DXC	DXD	DXE	DXF
SY0	SY1	SY2	SY3	SY4	SY5	SY6	SY7	SY8	SY9	SYA	SYB	SYC	SYD	SYE	SYF
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

6.5.3 HMMM(VRAM間高速転送)

VRAMの指定された領域のデータをVRAMの他の領域にバイト単位で転送します(図4.80)。

図4.81に示すパラメータをセットした後、R#46にD0Hを書き込むとコマンドを実行します。コマンド実行中は、S#2のCEビットが“1”になります。リスト4.10にHMMMのサンプルを示します。

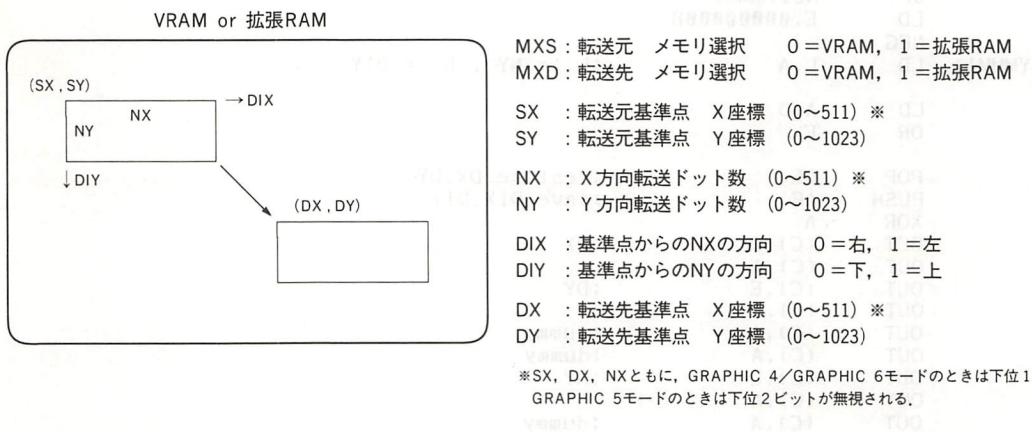
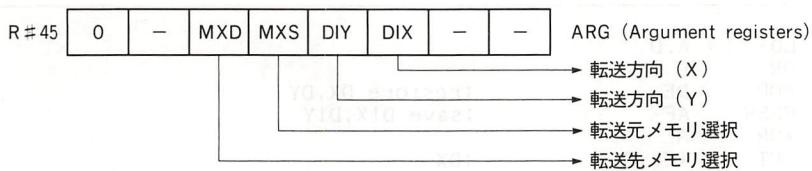


図4.80 HMMMコマンドの動作

▶HMMMレジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#32		SX7	SX6	SX5	SX4	SX3	SX2	SX1	SX0	SX } 転送元基準点
R#33		0	0	0	0	0	0	0	SX8	SY } 転送元基準点
R#34		SY7	SY6	SY5	SY4	SY3	SY2	SY1	SY0	DX } 転送先基準点
R#35		0	0	0	0	0	0	SY9	SY8	DY } 転送先基準点
R#36		DX7	DX6	DX5	DX4	DX3	DX2	DX1	DX0	
R#37		0	0	0	0	0	0	0	DX8	
R#38		DY7	DY6	DY5	DY4	DY3	DY2	DY1	DY0	
R#39		0	0	0	0	0	0	DY9	DY8	
R#40		NX7	NX6	NX5	NX4	NX3	NX2	NX1	NX0	NX→X方向転送ドット数
R#41		0	0	0	0	0	0	0	NX8	
R#42		NY7	NY6	NY5	NY4	NY3	NY2	NY1	NY0	NY→Y方向転送ドット数
R#43		0	0	0	0	0	0	NY9	NY8	



▶Hmmmコマンド実行

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#46		1	1	0	1	-	-	-	-	CMR

図4.81 Hmmmコマンドのレジスタ設定

リスト4.10 Hmmmコマンド実行例

```

=====
; List 4.10 Hmmm sample
;          to use, set H,L,D,E,B,C and go
;          VRAM (H,L)-(D,E) ---> VRAM (B,C)
=====

RDVDP EQU    0006H
WRVDP EQU    0007H

----- program start -----

Hmmm:   DI                  ; disable interrupt
         PUSH   BC      ; save destination (DX,DY)
         CALL   WAIT.VDP ; wait end of command

         LD     A,(WRVDP)
         LD     C,A
         INC    C        ; C := PORT#'s address
         LD     A,32
         OUT   (C),A
         LD     A,80H+17
         OUT   (C),A      ; R#17 := 32

         INC    C
         INC    C        ; C := PORT#3's address
         XOR   A
         OUT   (C),H      ; SX
         OUT   (C),A
         OUT   (C),L      ; SY
         OUT   (C),A

         LD     A,H
         SUB   A,D
         LD     D,00000100B
         JP    NC,Hmmm1
         LD     D,0000000B
         NEG

Hmmm1:  LD     H,A      ; H := NX , D := DIX
         LD     A,L
         SUB   A,E
         LD     E,00000100B
         JP    NC,Hmmm2
         LD     E,0000000B
         NEG

Hmmm2:  LD     L,A      ; L := NY , E := DIY

```

```

LD A,D
OR E
POP DE ;restore DX,DY
PUSH AF ;save DIX,DIY
XOR A
OUT (C),D ;DX
OUT (C),A
OUT (C),E ;DY
OUT (C),A
OUT (C),H ;NX
OUT (C),A
OUT (C),L ;NY
OUT (C),A
OUT (C),A ;dummy
POP AF
OUT (C),A ;DIX and DIY

LD A,11010000B ;HMM command
OUT (C),A

EI
RET

GET.STATUS:
PUSH BC
LD BC,(RDVDP)
INC C
OUT (C),A
LD A,8FH
OUT (C),A
IN A,(C)
POP BC
RET

WAIT.VDP:
LD A,2
CALL GET.STATUS
AND I
JP NZ,WAIT.VDP
XOR A
CALL GET.STATUS
RET

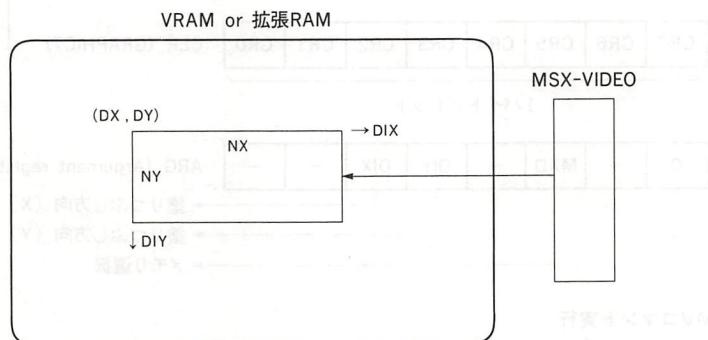
END

```

6.5.4 HMMV(長方形の高速塗りつぶし)

VRAM の指定された領域をバイト単位の色コードデータで塗りつぶします(図 4.82)。

図 4.83 に示したパラメータをセットした後、R#46にC0Hを書き込むとコマンドを実行します。コマンド実行中はS#2のCEビットが1になります。リスト 4.11 に HMMV のサンプルを示します。



MXD : メモリ選択 0 = VRAM, 1 = 拡張RAM

NX : X方向塗りつぶしドット数 (0~511) ※

NY : Y方向塗りつぶしドット数 (0~1023)

DIX : 基準点からのNXの方向 0 = 右, 1 = 左

DIY : 基準点からのNYの方向 0 = 下, 1 = 上

DX : 基準点 X 座標 (0~511) ※

DY : 基準点 Y 座標 (0~1023)

CLR(R#44 : Color register) : 塗りつぶしデータ

*DX, NXともに、GRAPHIC 4/GRAPIHC 6モードのときは下位1ビット、

GRAPHIC 5モードのときは下位2ビットが無視される。

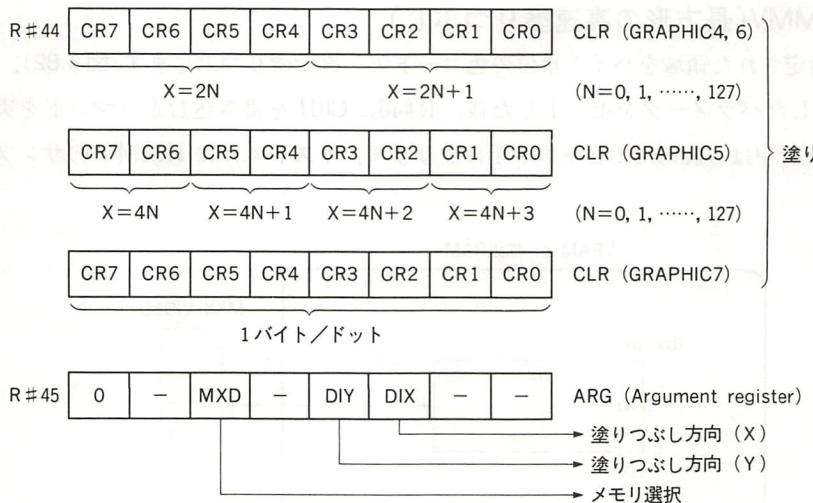
図4.82 HMMVコマンドの動作

▶ HMMVレジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#36	DX7	DX6	DX5	DX4	DX3	DX2	DX1	DX0	DX	基準点
R#37	0	0	0	0	0	0	0	DX8	DY	
R#38	DY7	DY6	DY5	DY4	DY3	DY2	DY1	DY0		
R#39	0	0	0	0	0	0	DY9	DY8		
R#40	NX7	NX6	NX5	NX4	NX3	NX2	NX1	NX0		NX→X方向塗りつぶしドット数
R#41	0	0	0	0	0	0	0	NX8		
R#42	NY7	NY6	NY5	NY4	NY3	NY2	NY1	NY0		NY→Y方向塗りつぶしドット数
R#43	0	0	0	0	0	0	NY9	NY8		

図4.83 HMMV コマンドのレジスタ設定

第4部 VDPと画面表示



▶HMMVコマンド実行

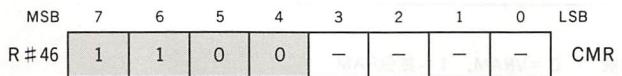


図4.83(続き) HMMV コマンドのレジスタ設定

リスト4.11 HMMV コマンド実行例

```
;=====
; List 4.11  HMMV sample
;          to use, set H,L,D,E,B and go
;          B ---> VRAM (H,L)-(D,E) fill
;=====
```

```
RDVDP EQU 0006H
WRVDP EQU 0007H

----- program start -----
```

```
HMMV: DI ; disable interrupt
      CALL WAIT.VDP ; wait end of command

      LD A,(WRVDP)
      LD C,A
      INC C ; C := PORT#1's address
      LD A,36
      OUT (C),A
      LD A,80H+17
      OUT (C),A ; R#17 := 36

      INC C
      INC C ; C := PORT#1's address
      XOR A
      OUT (C),H ; DX
      OUT (C),A
      OUT (C),L ; DY
      OUT (C),A
```

```

LD A,H ;make NX and DIX
SUB A,D
LD D,00000100B
JP NC,HMMV1
LD D,00000000B
NEG
HMMV1: LD H,A ;H := NX

LD A,L ;make NY and DIY
SUB A,E
LD E,00001000B
JP NC,HMMV2
LD E,00000000B
NEG
HMMV2: OUT (C),H ;fill data
LD H,A ;H := NY
OUT (C),A
OUT (C),H
OUT (C),A
OUT (C),B ;DIX and DIY
XOR A
OR D
OR E
OUT (C),A ;HMMV command
LD A,11000000B
OUT (C),A
EI
RET

GET.STATUS:
PUSH BC
LD BC,(RDVDP)
INC C
OUT (C),A
LD A,8FH
OUT (C),A
IN A,(C)
POP BC
RET

WAIT.VDP:
LD A,2
CALL GET.STATUS
AND I
JP NZ,WAIT.VDP
XOR A
CALL GET.STATUS
RET

END

```

MARRY to MARY

;fill data

;DIX and DIY

;HMMV command

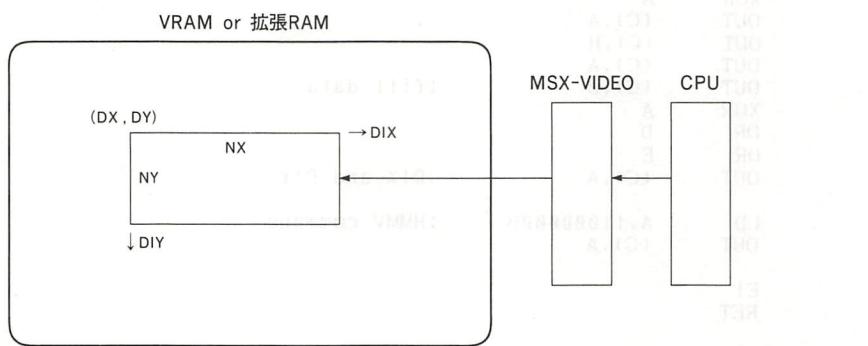
0X0	1X0	2X0	3X0	4X0	5X0	6X0	7X0
0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0

0Y0	1Y0	2Y0	3Y0	4Y0	5Y0	6Y0	7Y0
0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0

6.5.5 LMMC(CPU → VRAM 論理転送)

CPU から VRAM の指定された領域にデータをドット単位で転送します(図 4.84)。このとき転送先とのロジカルオペレーションを指定することができます。なお、この LMMC を始めとする論理転送コマンドではデータはドット単位で転送され、どの画面モードにおいても 1 ドットの情報につき 1 バイトを必要とします。

図 4.85 のデータをセットした後、R#46 にコマンドコード B0H を書き込みます。また、その時コマンドレジスタの下位 4 ビットを用いて、ロジカルオペレーションの指定が可能です。データの転送方法は HMMC と同様、S#2 の TR ビットと CE ビットを参照しながら行います(図 4.86)。リスト 4.12 に LMMC の例を示します。



MXD : 転送先 メモリ選択 0 = VRAM, 1 = 拡張RAM

NX : X 方向転送ドット数 (0~511)

NY : Y 方向転送ドット数 (0~1023)

DIX : 基準点からの NX の方向 0 = 右, 1 = 左

DIY : 基準点からの NY の方向 0 = 下, 1 = 上

DX : 転送先基準点 X 座標 (0~511)

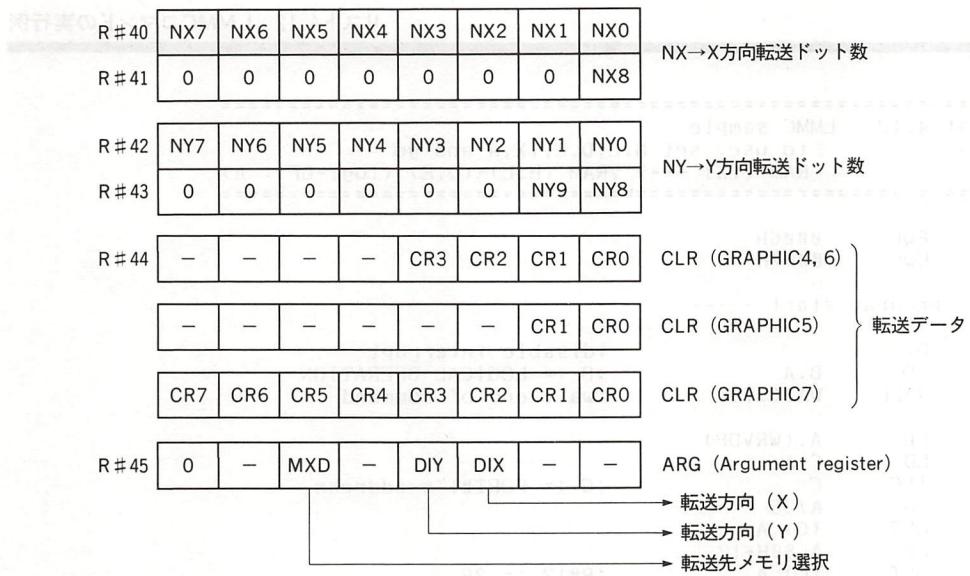
DY : 転送先基準点 Y 座標 (0~1023)

CLR(R#44 : Color register) : 転送データの第 1 バイト

図4.84 LMMCコマンドの動作

▶ LMMC レジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#36		DX7	DX6	DX5	DX4	DX3	DX2	DX1	DX0	
R#37		0	0	0	0	0	0	0	DX8	DX } 転送先基準点
R#38		DY7	DY6	DY5	DY4	DY3	DY2	DY1	DY0	
R#39		0	0	0	0	0	0	DY9	DY8	DY } 転送先基準点



▶ LMMCコマンド実行

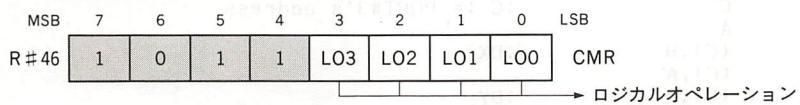


図4.85 LMMCコマンドのレジスタ設定

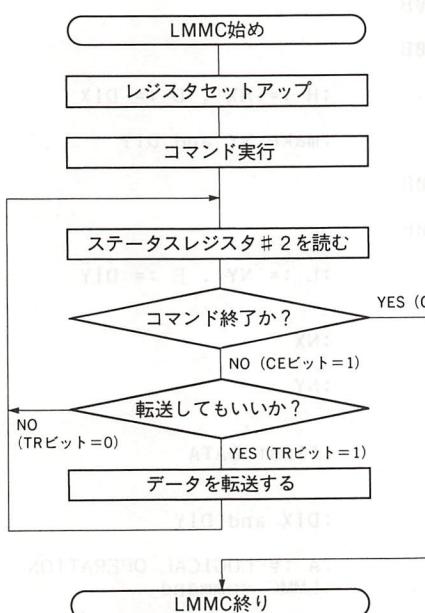


図4.86 LMMCコマンド実行のフローチャート

リスト4.12 LMMCコマンドの実行例

```

=====
; List 4.12 LMMC sample
;      to use, set H,L,D,E,IX,A and go
;      RAM [IX] ---> VRAM (H,L)-(D,E) (logi-OP : A)
=====
;
RDVDP EQU    0006H
WRVDP EQU    0007H
;
----- program start -----
;
LMMC:   DI          ; disable interrupt
        LD B,A       ; B := LOGICAL OPERATION
        CALL WAIT.VDP ; wait end of command
;
        LD A,(WRVDP)
        LD C,A       ; C := PORT#1's address
        INC C
        LD A,36       ; C := PORT#1's address
        OUT (C),A
        LD A,80H+17
        OUT (C),A     ; R#17 := 36
;
        INC C
        INC C       ; C := PORT#3's address
        XOR A
        OUT (C),H     ; DX
        OUT (C),A
        OUT (C),L     ; DY
        OUT (C),A
;
        LD A,H       ; make NX and DIX
        SUB A,D
        LD D,00000100B
        JP NC,LMMC1
        LD D,00000000B
        NEG
;
LMMC1:  LD H,A       ; H := NX , D := DIX
;
        LD A,L       ; make NY and DIY
        SUB A,E
        LD E,00001000B
        JP NC,LMMC2
        LD E,00000000B
        NEG
;
LMMC2:  LD L,A       ; L := NY , E := DIY
;
        XOR A
        OUT (C),H     ; NX
        OUT (C),A
        OUT (C),L     ; NY
        OUT (C),A
        LD A,(IX+0)
        OUT (C),A     ; first DATA
        LD A,D
        OR E
        OUT (C),A     ; DIX and DIY
;
        LD A,B       ; A := LOGICAL OPERATION
        OR 10110000B
        OUT (C),A     ; LMMC command
;

```

```

DEC C ;C := PORT#1's address
DEC C
LD A,2
CALL GET.STATUS
BIT 0.A ;check CE bit
JP Z.EXIT
BIT 7.A ;check TR bit
JP Z,LOOP
INC IX
LD A,(IX+0)
OUT (C),A
JP LOOP

EXIT: LD A,0
CALL GET.STATUS
EI
RET

GET.STATUS:
PUSH BC
LD BC,(RDVDP)
INC C
OUT (C),A
LD A,8FH
OUT (C),A
IN A,(C)
POP BC
RET

WAIT.VDP:
LD A,2
CALL GET.STATUS
AND I
JP NZ,WAIT.VDP
XOR A
CALL GET.STATUS
RET

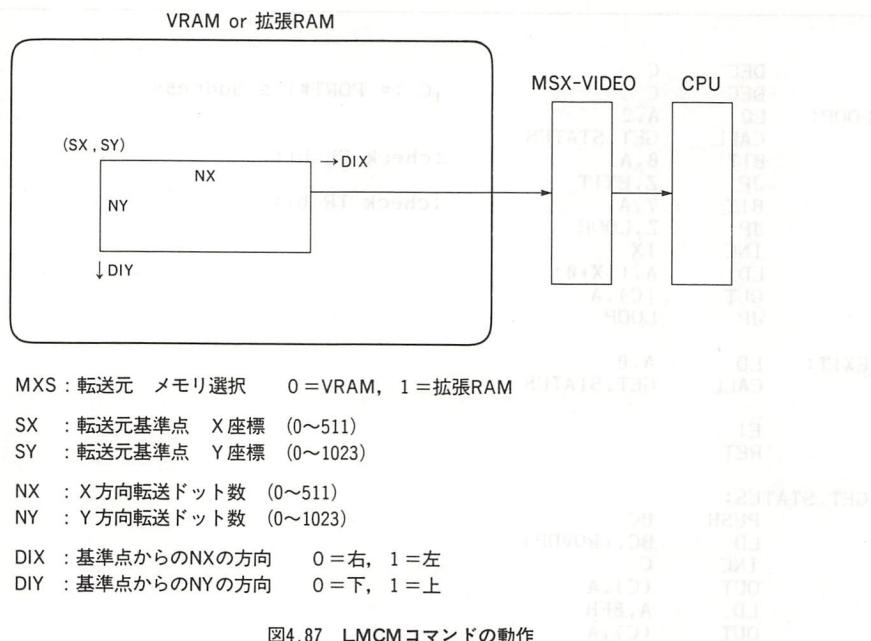
END

```

6.5.6 LMCM(VRAM → CPU 論理転送)

VRAM の指定された領域から CPU にデータをドット単位で転送します(図 4.87).

図 4.88 に示したパラメータをセットした後、R#46にコマンドコード A0H を書き込むとコマンドの実行が開始され、MSX-VIDEO からデータが転送され始めます。CPU 側では、まず S#2 の TR ビットを参照し、この値が“1”ならば MSX-VIDEO のデータが用意できたことを示すので、S#7 からデータを読み出します。S#2 の CE ビットが“0”になれば、データが終了したことを示します(図 4.89)。リスト 4.13 に LMCM の例を示します。



►LMCMレジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R #32		SX7	SX6	SX5	SX4	SX3	SX2	SX1	SX0	
R #33		0	0	0	0	0	0	0	SX8	
R #34		SY7	SY6	SY5	SY4	SY3	SY2	SY1	SY0	
R #35		0	0	0	0	0	0	SY9	SY8	
R #40		NX7	NX6	NX5	NX4	NX3	NX2	NX1	NX0	
R #41		0	0	0	0	0	0	0	NX8	
R #42		NY7	NY6	NY5	NY4	NY3	NY2	NY1	NY0	
R #43		0	0	0	0	0	0	NY9	NY8	
R #45		0	-	-	MXS	DIY	DIX	-	-	

NX → X 方向転送ドット数

NY → Y 方向転送ドット数

ARG (Argument registers)

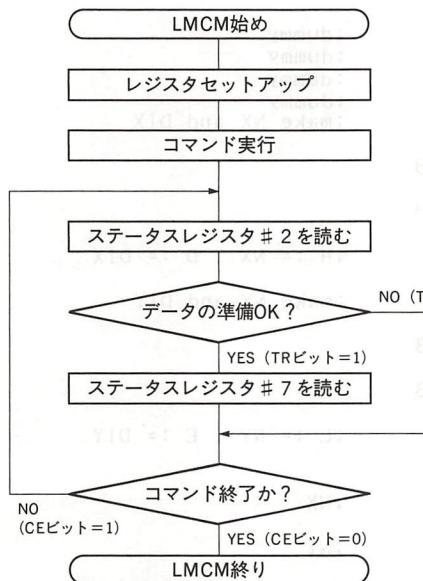
→ 転送方向 (X)
→ 転送方向 (Y)
→ 転送元メモリ選択

►LMCMコマンド実行

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R #46		1	0	1	0	-	-	-	-	CMR

S#7	0	0	0	0	C3	C2	C1	C0	ステータスレジスタ (GRAPHIC4, 6)
S#7	0	0	0	0	0	0	C1	C0	ステータスレジスタ (GRAPHIC5)
S#7	C7	C6	C5	C4	C3	C2	C1	C0	ステータスレジスタ (GRAPHIC7)

図4.88 LMCMコマンドのレジスタ設定



- 注1. コマンド実行の前にTRビットをリセットする必要があるので、
“レジスタセットアップ”の中でステータスレジスタS#7をリード
してください。
2. 最後のデータがステータスレジスタS#7にセットされて、TRビット
ト=1となっていても、MSX-VIDEO内部ではコマンドは終了し、
CE=0となります。

図4.89 LMCMコマンド実行のフローチャート

リスト4.13 LMCMコマンドの実行例

```

=====
; List 4.13  LMCM sample
;          to use, set H,L,D,E,IX,A and go
;          VRAM (H,L)-(D,E) ---> RAM [IX]
=====
;
RDVDP EQU 0006H
WRVDP EQU 0007H
;
----- program start -----
LMMC:  DI          ; disable interrupt
       LD B,A        ; B := LOGICAL OPERATION
       CALL WAIT.VDP ; wait end of command
       LD A,(WRVDP)

```

```

LD    C,A
INC   C
LD    A,32
OUT   (C),A
LD    A,80H+17
OUT   (C),A
INC   C
INC   C
XOR   A
OUT   (C),H
OUT   (C),A
OUT   (C),L
OUT   (C),A
OUT   (C),A
OUT   (C),A
OUT   (C),A
LD    A,H
SUB   A,D
LD    D,00000100B
JP    NC,LMMC1
LD    D,00000000B
NEG
LMMC1: LD   H,A      ;H := NX , D := DIX
        LD   A,L      ;make NY and DIY
        SUB A,E
        LD   E,00001000B
        JP    NC,LMMC2
        LD   E,00000000B
NEG
LMMC2: LD   L,A      ;L := NY , E := DIY
        XOR A
        OUT (C),H      ;NX
        OUT (C),A      ;NY
        OUT (C),L
        OUT (C),A
        LD   A,(IX+0)
        OUT (C),A      ;dummy
        LD   A,D
        OR   E
        OUT (C),A      ;DIX and DIY
        LD   A,7
        CALL GET.STATUS ;TR bit reset
        LD   A,B
        OR   10100000B
        OUT (C),A      ;LMMC command
        LD   A,(RDVDP)
        LD   C,A      ;C := PORT#1's address
        LD   A,2
        CALL GET.STATUS
        BIT  0,A      ;check CE bit
        JP   Z,EXIT
        BIT  7,A      ;check TR bit
        JP   Z,LOOP
        LD   A,7
        CALL GET.STATUS
        LD   (IX+0),A
        INC  IX
        JP   LOOP
        EXIT: LD   A,0
        CALL GET.STATUS
        EI
        RET
        GET.STATUS:
        PUSH BC

```

```

LD      BC, (RDVDP)
INC    C
OUT   (C), A
LD     A, 8FH
OUT   (C), A
IN    A, (C)
POP   BC
RET

WAIT.VDP:
LD     A, 2
CALL  GET.STATUS
AND   1
JP    NZ, WAIT.VDP
XOR   A
CALL  GET.STATUS
RET

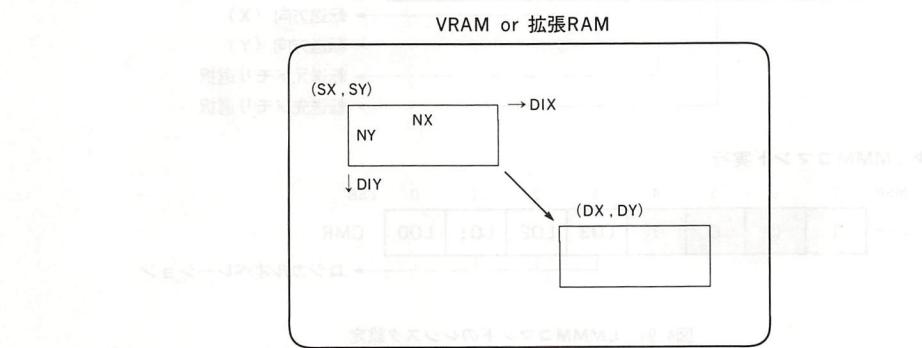
END

```

6.5.7 LMMM(VRAM → VRAM 論理転送)

VRAM の指定された領域のデータを VRAM の他の領域にドット単位で転送します(図 4.90)。

図 4.91 に示すパラメータをセットした後、R#46にコマンドコード 9XH(Xはロジカルオペレーション)を書き込むとコマンドが実行されます。S#2のCE ビットが“1”的間はコマンド実行中であることを示します。リスト 4.14 に LMMM の例を示します。



MXS : 転送元メモリ選択 0=VRAM, 1=拡張RAM

MXD : 転送先メモリ選択 0=VRAM, 1=拡張RAM

SX : 転送元基準点 X 座標 (0~511)

SY : 転送元基準点 Y 座標 (0~1023)

NX : X 方向転送ドット数 (0~511)

NY : Y 方向転送ドット数 (0~1023)

DIX : 基準点からのNXの方向 0=右, 1=左

DIY : 基準点からのNYの方向 0=下, 1=上

DX : 転送先基準点 X 座標 (0~511)

DY : 転送先基準点 Y 座標 (0~1023)

図4.90 LMMMコマンドの動作

► LMMM レジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#32	SX7	SX6	SX5	SX4	SX3	SX2	SX1	SX0		
R#33	0	0	0	0	0	0	0	SX8		
R#34	SY7	SY6	SY5	SY4	SY3	SY2	SY1	SY0		
R#35	0	0	0	0	0	0	SY9	SY8		
R#36	DX7	DX6	DX5	DX4	DX3	DX2	DX1	DX0		
R#37	0	0	0	0	0	0	0	DX8		
R#38	DY7	DY6	DY5	DY4	DY3	DY2	DY1	DY0		
R#39	0	0	0	0	0	0	DY9	DY8		
R#40	NX7	NX6	NX5	NX4	NX3	NX2	NX1	NX0		
R#41	0	0	0	0	0	0	0	NX8		
R#42	NY7	NY6	NY5	NY4	NY3	NY2	NY1	NY0		
R#43	0	0	0	0	0	0	NY9	NY8		
R#45	0	-	MXD	MXS	DIY	DIX	-	-		

ARG (Argument registers)

→ 転送方向 (X)
→ 転送方向 (Y)
→ 転送元メモリ選択
→ 転送先メモリ選択

► LMMM コマンド実行

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#46	1	0	0	1	LO3	LO2	LO1	LO0	CMR	

→ ロジカルオペレーション

図4.91 LMMMコマンドのレジスタ設定

リスト4.14 LMMMコマンドの実行例

```
=====
; List 4.14 LMMM sample
;      to use, set H,L,D,E,B,C,A and go
;      VRAM (H,L)-(D,E) ---> VRAM (B,C) (logi-OP : A)
=====
;
RDVDP EQU 0006H
WRVDP EQU 0007H
```

```

----- program start -----
LMMM:    DI          ; disable interrupt
         PUSH AF   ; save LOGICAL OPERATION
         PUSH BC   ; save DESTINATION
         CALL WAIT.VDP ; wait end of command

         LD A,(WRVDP)
         LD C,A
         INC C      ; C := PORT#1's address
         LD A,32
         OUT (C),A
         LD A,80H+17
         OUT (C),A   ; R#17 := 32

         INC C      ; C := PORT#3's address
         INC C
         XOR A
         OUT (C),H   ; SX
         OUT (C),A
         OUT (C),L   ; SY
         OUT (C),A

         LD A,H      ; make NX and DIX
         SUB A,D
         LD D,00000100B
         JP NC,LMMMI
         LD D,0000000B
         NEG

LMMMI:   LD H,A      ; H := NX , D := DIX
         LD A,L      ; make NY and DIY
         SUB A,E
         LD E,00001000B
         JP NC,LMMM2
         LD E,0000000B
         NEG

LMMM2:   LD L,A      ; L := NY , E := DIY

         LD A,D
         OR E
         POP DE      ; restore DX, DY
         PUSH AF      ; save DIX, DIY
         XOR A
         OUT (C),D   ; DX
         OUT (C),A
         OUT (C),E   ; DY
         OUT (C),A
         OUT (C),H   ; NX
         OUT (C),A
         OUT (C),L   ; NY
         OUT (C),A
         OUT (C),A   ; dummy
         POP AF
         OUT (C),A   ; DIX AND DIY

         POP AF      ; A := LOGICAL OPERATION
         OR 10010000B
         OUT (C),A   ; LMMM command

         EI
         RET

```

```

GET.STATUS:
    PUSH    BC
    LD      BC,(RDVDP)
    INC     C
    OUT    (C),A
    LD      A,8FH
    OUT    (C),A
    IN      A,(C)
    POP     BC
    RET

WAIT.VDP:
    LD      A,2
    CALL   GET.STATUS
    AND    I
    JP      NZ,WAIT.VDP
    XOR    A
    CALL   GET.STATUS
    RET

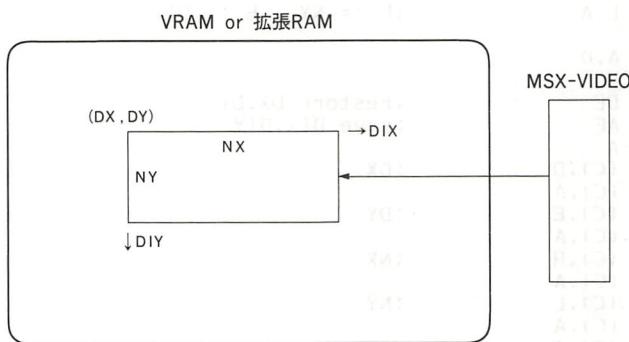
END

```

6.5.8 LMMV(VRAM 論理塗りつぶし)

VRAM の指定された領域をドット単位の色コードで塗りつぶします(図 4.92)。この時 VRAM 上のデータと指定したデータの間でロジカルオペレーションを行なうことができます。

図 4.93 に示すパラメータをセットした後、R#46にコマンドコード 8XH(Xはロジカルオペレーション)を書き込むとコマンドが実行されます。S#2のCE ビットが“1”の間はコマンド実行中であることを示します。リスト 4.15 に LMMV の例を示します。



MXD : メモリ選択 0=VRAM, 1=拡張RAM

NX : X方向塗りつぶしドット数 (0~511)

NY : Y方向塗りつぶしドット数 (0~1023)

DIX : 基準点からのNXの方向 0=右, 1=左

DIY : 基準点からのNYの方向 0=下, 1=上

DX : 基準点 X座標 (0~511)

DY : 基準点 Y座標 (0~1023)

CLR(R#44 : Color register) : 塗りつぶしデータ

図4.92 LMMVコマンドの動作

▶ LMMVレジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#36		DX7	DX6	DX5	DX4	DX3	DX2	DX1	DX0	
R#37		0	0	0	0	0	0	0	DX8	
R#38		DY7	DY6	DY5	DY4	DY3	DY2	DY1	DY0	
R#39		0	0	0	0	0	0	DY9	DY8	
R=40		NX7	NX6	NX5	NX4	NX3	NX2	NX1	NX0	
R=41		0	0	0	0	0	0	0	NX8	
R=42		NY7	NY6	NY5	NY4	NY3	NY2	NY1	NY0	
R#43		0	0	0	0	0	0	NY9	NY8	
R#44		0	0	0	0	C3	C2	C1	C0	CLR (GRAPHIC4, 6)
		0	0	0	0	0	0	C1	C0	CLR (GRAPHIC5)
		C7	C6	C5	C4	C3	C2	C1	C0	CLR (GRAPHIC7)
R#45		-	-	MXD	-	DIY	DIX	-	-	ARG (Argument register)
										→ 塗りつぶし方向 (X) → 塗りつぶし方向 (Y) → メモリ選択

▶ LMMVコマンド実行

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#46		1	0	0	0	LO3	LO2	LO1	LO0	CMR
→ ロジカルオペレーション										

図4.93 LMMVコマンドのレジスタ設定

リスト4.15 LMMVコマンドの実行例

```
=====
; List 4.15 LMMV sample
;      to use, set H,L,D,E,B,A and go
;      data B ---> fill VRAM (H,L)-(D,E) (logi-OP : A)
=====
;
RDVDP EQU 0006H
WRVDP EQU 0007H
```

```

----- program satrt -----
LMMV:   DI      ; disable interrupt
        PUSH AF ; save LOGICAL OPERATION
        PUSH BC ; save FILL DATA
        CALL WAIT.VDP ; wait end of command

        LD A,(WRVDP)
        LD C,A
        INC C
        LD A,36
        OUT (C),A
        LD A,80H+17
        OUT (C),A ; C := PORT#1's address ; R#17 := 36

        INC C
        INC C ; C := PORT#3's address
        XOR A
        OUT (C),H ; DX
        OUT (C),A
        OUT (C),L ; DY
        OUT (C),A

        LD A,H ; make NX and DIX
        SUB A,D
        LD D,00000100B
        JP NC,LMMV1
        LD D,0000000B

LMMV1:  LD H,A ; H := NX , D := DIX

        LD A,L ; make NY and DIY
        SUB A,E
        LD E,00001000B
        JP NC,LMMV2
        LD E,0000000B

LMMV2:  LD L,A ; L := NY , E := DIY

        XOR A
        OUT (C),H ; NX
        OUT (C),A
        OUT (C),H ; NY
        OUT (C),A
        POP AF
        OUT (C),A ; FILL DATA
        LD A,D
        OR E
        OUT (C),A ; DIX and DIY

        POP AF
        OR 1000000B ; restore LOGICAL OPERATION
        OUT (C),A ; LMMV command

        EI
        RET

GET.STATUS:
        PUSH BC
        LD BC,(RDVDP)
        INC C
        OUT (C),A
        LD A,8FH
        OUT (C),A
        IN A,(C)

```

```

POP      BC
RET

WAIT.VDP:
LD       A,2
CALL    GET.STATUS
AND     I
JP       NZ,WAIT.VDP
XOR     A
CALL    GET.STATUS
RET

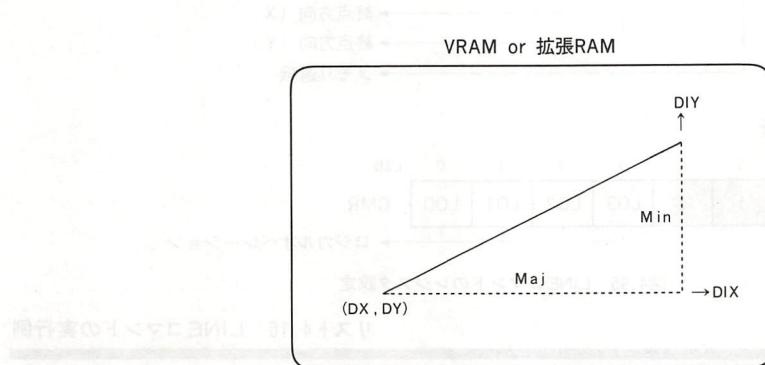
END

```

6.5.9 LINE(直線の描画)

VRAM 上の任意の座標に直線を描きます。指定するパラメータは基準点の座標と直線の伸びる方向、そして直線を対角線とする長方形の長辺と短辺の長さです(図 4.94)。Maj と Min を設定する時は、その前にかならず両辺の比較を行って、長い方を Maj に設定してください。

図 4.95 に示すパラメータを設定した後、R#46に 7XH(Xはロジカルオペレーション)を書き込むとコマンドが実行されます。S#2の CE ビットが 1 の間はコマンド実行中であることを示します。リスト 4.16 に LINE の例を示します。



MXD : メモリ選択 0=VRAM, 1=拡張RAM

Maj : 長辺ドット数 (0~1023)

Min : 短辺ドット数 (0~511)

MAJ : 0=長辺は X 軸と平行, 1=長辺は Y 軸と平行／または長辺=短辺

DIX : 基準点からの終点の方向 0=右, 1=左

DIY : 基準点からの終点の方向 0=下, 1=上

DX : 基準点 X 座標 (0~511)

DY : 基準点 Y 座標 (0~1023)

図4.94 LINEコマンドの動作

▶ LINEレジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#36		DX7	DX6	DX5	DX4	DX3	DX2	DX1	DX0	
R#37		0	0	0	0	0	0	0	DX8	

	MSB	DY7	DY6	DY5	DY4	DY3	DY2	DY1	DY0	LSB
R#38		0	0	0	0	0	0	0	DY8	

	MSB	MJ7	MJ6	MJ5	MJ4	MJ3	MJ2	MJ1	MJ0	LSB
R#40		0	0	0	0	0	0	MJ9	MJ8	

	MSB	MI7	MI6	MI5	MI4	MI3	MI2	MI1	MI0	LSB
R#42		0	0	0	0	0	0	0	MI8	

	MSB	0	0	0	0	C3	C2	C1	C0	LSB
R#44		0	0	0	0	0	0	C1	C0	

	MSB	C7	C6	C5	C4	C3	C2	C1	C0	LSB
R#45		0	-	MXD	-	DIY	DIX	-	MAJ	

	MSB	0	-	MXD	-	DIY	DIX	-	MAJ	LSB
R#45		0	-	MXD	-	DIY	DIX	-	MAJ	

DX }
 基準点
DY }

Maj (NX) → 長辺ドット数

Min (NY) → 短辺ドット数

CLR (GRAPHIC4, 6)

CLR (GRAPHIC5)

CLR (GRAPHIC7)

ARG (Argument register)

→ 長辺選択

→ 終点方向 (X)

→ 終点方向 (Y)

→ メモリ選択

▶ LINEコマンド実行

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#46		0	1	1	1	LO3	LO2	LO1	LO0	CMR

→ ロジカルオペレーション

図4.95 LINEコマンドのレジスタ設定

リスト4.16 LINEコマンドの実行例

```
=====
: List 4.16  LINE sample
:          to use, set H,L,D,E,B,A and go
:          draw LINE (H,1)-(D,E) with color B, log-OP A
=====
RDVDP EQU 0006H
WRVDP EQU 0007H
----- program satrt -----
LINE: DI           ; disable interrupt
      PUSH AF        ; save LOGICAL OPERATION
      PUSH BC        ; save COLOR
      CALL WAIT.VDP   ; wait end of command
```

```

LD    A,(WRVDP)          HR8,A   40
LD    C,A               A,(C)   100
INC   C                 ;C := PORT#1's address 01,A   11
LD    A,36               09       414
OUT   (C),A              10       100
LD    A,80H+17            0B       414
OUT   (C),A              11       100
                           ;R#17 := 36

INC   C                 ;C := PORT#3's address 01,A   11
INC   C               OUTATE,TB0 00001
XOR   A                 00001000000000000000000000000000
OUT   (C),H              00001000000000000000000000000000
OUT   (C),A              00001000000000000000000000000000
OUT   (C),L              00001000000000000000000000000000
OUT   (C),A              00001000000000000000000000000000

LD    A,H                ;make DX and DIX
SUB   A,D
LD    D,00000100B
JP    NC,LINE1
LD    D,00000000B
NEG
LINE1: LD    H,A          ;H := DX , D := DIX
LD    A,L                ;make DY and DIY
SUB   A,E
LD    E,00000100B
JP    NC,LINE2
LD    E,00000000B
NEG
LINE2: LD    L,A          ;L := DY , E := DIY
CP    H                  ;make Maj and Min
JP    C,LINE3
XOR   A
OUT   (C),L              ;long side
OUT   (C),A
OUT   (C),H              ;short side
OUT   (C),A
LD    A,00000001B         ;MAJ := 1
JP    LINE4

LINE3: XOR   A
OUT   (C),H
OUT   (C),A
OUT   (C),L
OUT   (C),A
LD    A,00000000B         ;MAJ := 0

LINE4: OR    D
OR    E                  ;A := DIX , DIY , MAJ
POP   HL                ;H := COLOR
OUT   (C),H
OUT   (C),A
POP   AF                ;A := LOGICAL OPERATION
OR    01110000B
OUT   (C),A
LD    A,8FH
OUT   (C),A
EI
RET

GET.STATUS:
PUSH  BC
LD    BC,(RDVDP)
INC   C
OUT   (C),A

```

0x2	1x2	2x2	3x2	4x2	5x2	6x2	7x2	8x2	9x2	10x2
8x2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0y2	1y2	2y2	3y2	4y2	5y2	6y2	7y2	8y2	9y2	10y2
8y2	0y2									

```

LD      A,8FH
OUT    (C),A
IN     A,(C)
POP    BC
RET

WAIT.VDP:
LD      A,2
CALL   GET.STATUS
AND    I
JP     NZ,WAIT.VDP
XOR    A
CALL   GET.STATUS
RET

END

```

6.5.10 SRCH(色コードのサーチ)

VRAM 上の任意の座標から右または左に向かって、指定した色または指定した以外の色が存在するか否かを調べます(図 4.96)。ペイントルーチンなどに使用するとたいへんに便利なコマンドです。

図 4.97 に示すパラメータを設定した後、R#46に60Hを書き込むとコマンドを実行します。コマンドは目的の色が見つかるか、あるいは画面の端までサーチしても見つからなかった場合終了します。S#2のCE ビットが“1”の間はコマンド実行中であることを示します(図 4.98)。

コマンド終了後、S#2のBD ビットが“1”であれば目的の色コードが発見できたことを示し、その座標がS#8とS#9に格納されています。リスト 4.17 に SRCH の例を示します。

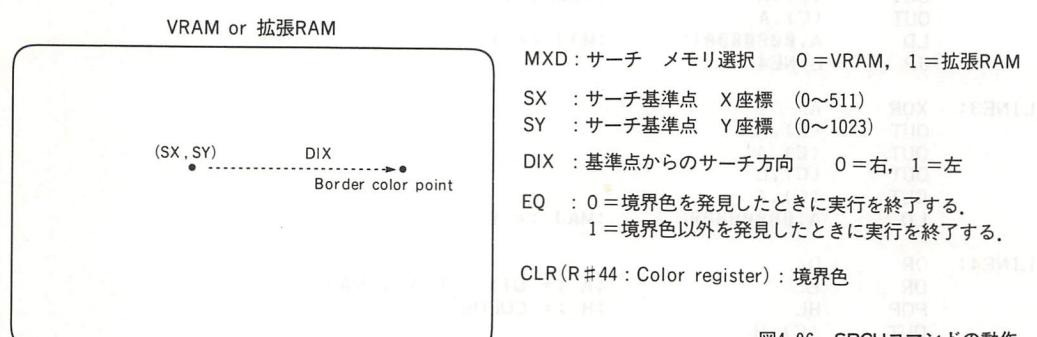
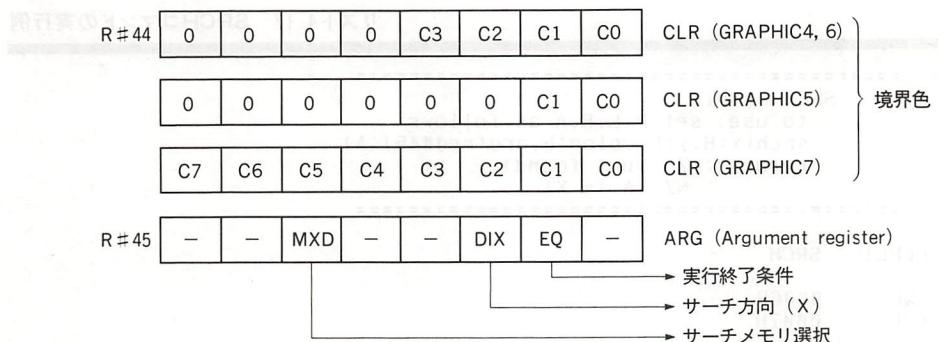


図4.96 SRCHコマンドの動作

▶SRCHレジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#32		SX7	SX6	SX5	SX4	SX3	SX2	SX1	SX0	
R#33		0	0	0	0	0	0	0	SX8	
R#34		SY7	SY6	SY5	SY4	SY3	SY2	SY1	SY0	
R#35		0	0	0	0	0	0	SY9	SY8	

SX } サーチ基準点
SY }



▶ SRCHコマンド実行

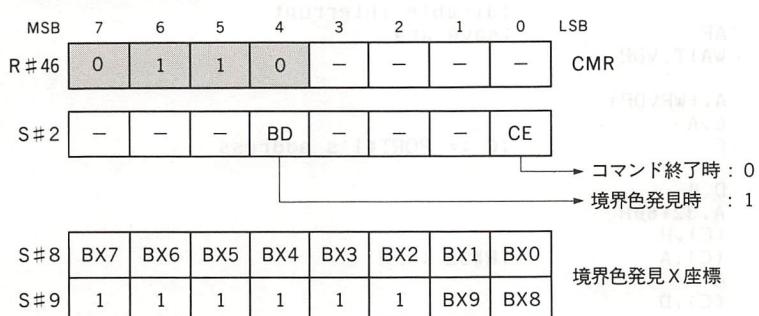


図4.97 SRCHコマンドのレジスタ設定

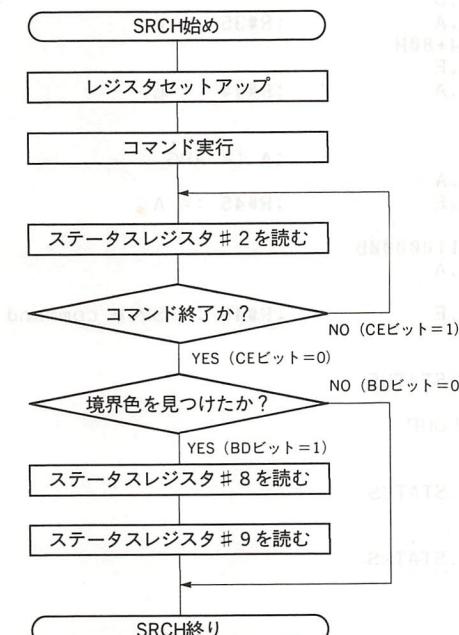


図4.98 SRCHコマンド実行のフローチャート

リスト4.17 SRCHコマンドの実行例

```

=====
; List 4.17  SRCH sample
; to use, set H,L,E,A as follows
; srch(x:H,y:L,color:E,arg(reg#45):A)
; returns: Z (not found)
;           NZ (A := X)
=====

PUBLIC  SRCH

RDVDP  EQU    0006H
WRVDP  EQU    0007H

----- program start -----
SRCH:  DI          ; disable interrupt
       PUSH AF      ; save arg
       CALL WAIT.VDP

       LD  A,(WRVDP)
       LD  C,A
       INC C          ; C := PORT#1's address

       LD  D,0
       LD  A,32+80H
       OUT (C),H
       OUT (C),A      ; R#32 := H
       INC A
       OUT (C),D
       OUT (C),A      ; R#33 := 0
       INC A
       OUT (C),L
       OUT (C),A      ; R#34 := L
       INC A
       OUT (C),D
       OUT (C),A      ; R#35 := 0
       LD  A,44+80H
       OUT (C),E
       OUT (C),A      ; R#44 := E
       INC A
       LD  E,A
       POP AF          ; A := ARG
       OUT (C),A
       OUT (C),E      ; R#45 := A

       LD  A,01100000B
       OUT (C),A
       INC E
       OUT (C),E      ; R#46 := SRCH command

LOOP:   LD  A,2
       CALL GET.STATUS
       BIT 0,A
       JP  NZ,LOOP
       LD  E,A
       LD  A,8
       CALL GET.STATUS
       LD  D,A
       LD  A,0
       CALL GET.STATUS
       LD  A,D
       BIT 4,E
       EI
       RET

```

```

GET.STATUS:
PUSH BC
LD BC,(RDVDP)
INC C
OUT (C),A
LD A,8FH
OUT (C),A
IN A,(C)
POP BC
RET

WAIT.VDP:
LD A,2
CALL GET.STATUS
AND 1
JP NZ,WAIT.VDP
XOR A
CALL GET.STATUS
RET

END

```

リスト4.18 SRCHとLINEを利用した簡易PAINTルーチン

```

=====
; List 4.18 SRCH and LINE sample
; search color to right and left,
; then draw line between the two point
=====
; EXTRN SRCH
; EXTRN LINE
;
Y EQU 0A800H
X EQU 0A801H
COL EQU 0A802H
ARG EQU 0A803H
PCOL EQU 0A804H
;
----- program start -----
;
MAIN: LD (STK),SP
LD SP,AREA
LD HL,(Y)
LD A,(COL)
LD E,A
LD A,(ARG)
PUSH HL
PUSH DE
SET 2,A
CALL SRCH
POP DE
POP HL
JP NZ,S1
LD A,(X)
DEC A
INC A
PUSH AF
LD A,(ARG)

```

```

RES    2,A
CALL   SRCH
JP     NZ,S2
LD     A,(X)
INC    A
S2:   DEC    A
LD     D,A
POP    AF
LD     H,A
LD     A,(Y)
LD     L,A
LD     E,A
LD     A,(PCOL)
LD     B,A
LD     A,0      ;PSET
CALL   LINE
LD     SP,(STK)
RET

----- work area -----

STK:   DS     2
       DS     200
AREA:  $          

END

```

リスト4.19 簡易PAINTルーチンの使用例

```

1000 =====
1010 ' list 4.19  SRCH and LINE sample
1020 ' スペースバー ノ オシカカラ カーソル ノ ソウサ シテ クタサイ
1030 =====
1040 '
1050 SCREEN 5
1060 FOR I=0 TO 50:LINE -(RND(1)*255,RND(1)*211),15:NEXT
1070 I=&HA000 :DEF USR=I
1080 READ A$
1090 IF A$="END" THEN 1130
1100 POKE I,VAL("&H"+A$):I=I+1
1110 READ A$
1120 GOTO 1090
1130 X=128:Y=100:COL=15:PCOL=2:ARG=0
1140 CURS=0
1150 A=STICK(0)
1160 CURS=(CURS+1) AND 1
1170 LINE (X-5,Y)-(X+5,Y),15,,XOR
1180 LINE (X,Y-5)-(X,Y+5),15,,XOR
1190 IF CURS=1 THEN 1290
1200 IF A=1 THEN Y=Y-1
1210 IF A=2 THEN Y=Y-1:X=X+1
1220 IF A=3 THEN X=X+1
1230 IF A=4 THEN X=X+1:Y=Y+1
1240 IF A=5 THEN Y=Y+1
1250 IF A=6 THEN Y=Y+1:X=X-1
1260 IF A=7 THEN X=X-1
1270 IF A=8 THEN X=X-1:Y=Y-1
1280 IF STRIG(0) THEN GOSUB 1300
1290 GOTO 1150

```

```

1300 POKE &HA800,Y
1310 POKE &HA801,X
1320 POKE &HA802,COL
1330 POKE &HA803,ARG
1340 POKE &HA804,PCOL
1350 A=USR(0)
1360 RETURN
1370 DATA ED,73,80,A8,31,4A,A9,2A,00,A8,3A,02
1380 DATA A8,5F,3A,03,A8,E5,D5,CB,D7,CD,AD
1390 DATA A0,D1,E1,C2,21,A0,3A,01,A8
1400 DATA 3D,3C,F5,3A,03,A8,CB,97,CD,AD,A0,C2
1410 DATA 32,A0,3A,01,A8,3C,3D,57,F1,67,3A
1420 DATA 00,A8,6F,5F,3A,04,A8,47,3E
1430 DATA 00,CD,49,A0,ED,7B,80,A8,C9,F3,F5,CD
1440 DATA 0D,A1,C5,3A,06,00,4F,0C,3E,24,ED
1450 DATA 79,3E,91,ED,79,0C,0C,AF,ED
1460 DATA 61,ED,79,ED,69,ED,79,7C,92,16,04,D2
1470 DATA 72,A0,16,00,ED,44,67,7D,93,1E,08
1480 DATA D2,7E,A0,1E,00,ED,44,BC,DA
1490 DATA 90,A0,ED,79,AF,ED,79,ED,61,ED,79,26
1500 DATA 01,C3,9C,A0,ED,61,67,AF,ED,79,ED
1510 DATA 61,ED,79,26,00,7C,B2,B3,E1
1520 DATA ED,61,ED,79,F1,E6,0F,F6,70,ED,79,FB
1530 DATA C9,F5,F3,CD,0D,A1,ED,4B,06,00,0C
1540 DATA 3E,A0,16,00,ED,61,ED,79,3C
1550 DATA ED,51,ED,79,3C,ED,69,ED,79,3C,ED,51
1560 DATA ED,79,3E,AC,ED,59,ED,79,3C,5F,F1
1570 DATA ED,79,ED,59,3E,60,ED,79,1C
1580 DATA ED,59,3E,02,CD,FD,A0,CB,47,C2,E2,A0
1590 DATA 5F,3E,08,CD,FD,A0,57,3E,00,CD,FD
1600 DATA A0,7A,CB,63,FB,C9,C5,ED,4B
1610 DATA 06,00,0C,ED,79,3E,8F,ED,79,ED,78,C1
1620 DATA C9,3E,02,CD,FD,A0,E6,01,C2,0D,A1
1630 DATA AF,CD,FD,A0,C9,END

```

6.5.11 PSET(点の描画)

VRAM 上の任意の座標に点を描きます(図 4.99)。

図 4.100 に示すパラメータを設定した後、R#46に5XH(Xはロジカルオペレーション)を書き込むとコマンドを実行します。S#2のCE ビットが“1”的間はコマンド実行中であることを示します。リスト 4.20 に PSET の例を示します。

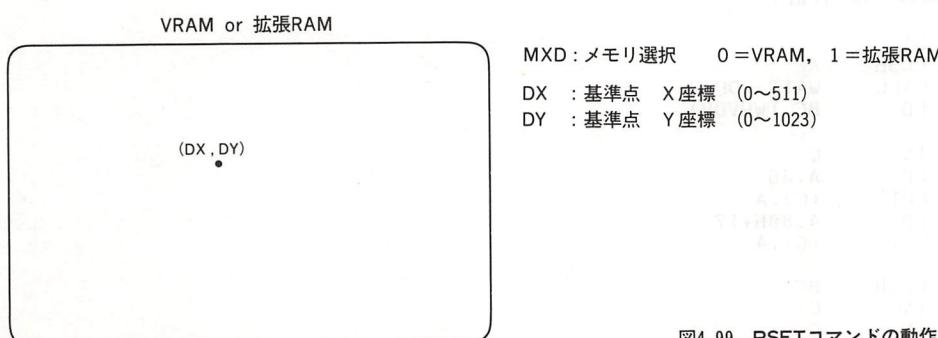


図4.99 PSETコマンドの動作

第4部 VDPと画面表示

▶PSETレジスタセットアップ

R #44 0 0 0 0 C3 C2 C1 C0

0	0	0	0	0	0	C1	C0
---	---	---	---	---	---	----	----

C7	C6	C5	C4	C3	C2	C1	C0
----	----	----	----	----	----	----	----

R #45 0 - MXD - - - - -

DX
DY

CLB (GRAPHIC4_6)

CLR (GRAPHIC5)

CLR (GRAPHIC7)

ARG (Argument register)

→ メモリ選択

▶PSETコマンド実行

MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSP
R#46	0	1	0	1	LO3	LO2	LO1	LO0	C

CMR

図4-100 PSETコマンドのレジスタ設定

リスト4.20 PSETコマンドの実行例

```

=====
; List 4.20 PSET sample
;       to use, set H,L,E,A as follows
;       pset(x:H, y:L), color:E, logi-OP:A
=====

PUBLIC PSET
RDVDP EQU 0006H
WRVDP EQU 0007H

----- program start

PSET:   DI
        PUSH AF
        CALL WAIT.VDP
        LD BC,(WRVDP)

        INC C
        LD A,36
        OUT (C),A
        LD A,80H+17
        OUT (C),A

        PUSH BC
        INC C
        INC C

```

```

    XOR      A
    OUT     (C),H
    OUT     (C),A
    OUT     (C),L
    OUT     (C),A
    POP      BC

    LD      A,44
    OUT     (C),A
    LD      A,80H+17
    OUT     (C),A

    INC      C
    INC      C
    OUT     (C),E
    XOR      A
    OUT     (C),A

    LD      E,0101000B
    POP      AF
    OR       E
    OUT     (C),A

    EI
    RET

GET.STATUS:
    PUSH    BC
    LD      BC,(RDVDP)
    INC      C
    OUT     (C),A
    LD      A,8FH
    OUT     (C),A
    IN      A,(C)
    POP      BC
    RET

WAIT.VDP:
    LD      A,2
    CALL    GET.STATUS
    AND      I
    JP      NZ,WAIT.VDP
    XOR      A
    CALL    GET.STATUS
    RET

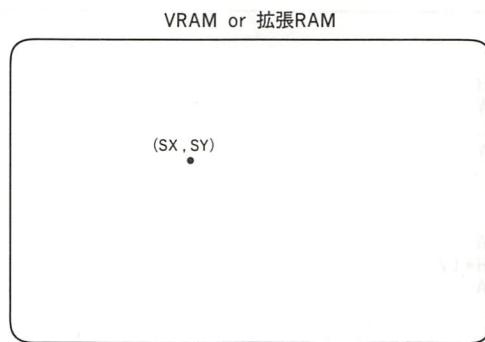
END

```

6.5.12 POINT(色コードの読み出し)

VRAM 上の任意の座標の色コードを読み出します(図 4.101)。

図 4.102 に示すパラメータを設定した後、R#46に40Hを書き込むとコマンドを実行します。S #2のCE ビットが“1”的間はコマンド実行中であることを示します。コマンド終了後、S#7に指定した座標の色コードが格納されています。リスト 4.21 に POINT の例を示します。



MXS : メモリ選択 0=VRAM, 1=拡張RAM

SX : 基準点 X座標 (0~511)
SY : 基準点 Y座標 (0~1023)

図4.101 POINTコマンドの動作

▶POINTレジスタセットアップ

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#32		SX7	SX6	SX5	SX4	SX3	SX2	SX1	SX0	
R#33		0	0	0	0	0	0	0	SX8	SX }
R#34		SY7	SY6	SY5	SY4	SY3	SY2	SY1	SY0	
R#35		0	0	0	0	0	0	SY9	SY8	SY }
R#45		-	-	-	MXS	-	-	-	-	ARG (Argument register)
										→ メモリ選択

▶POINTコマンド実行

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB
R#46		0	1	0	0	-	-	-	-	CMR
S#2		-	-	-	-	-	-	-	CE	→ コマンド終了時 : 0
S#7		0	0	0	0	C3	C2	C1	C0	CL (GRAPHIC4, 6)
		0	0	0	0	0	0	C1	C0	CL (GRAPHIC5) } 色コードデータ
		C7	C6	C5	C4	C3	C2	C1	C0	CL (GRAPHIC7)

図4.102 POINTコマンドのレジスタ設定

リスト4.21 POINTコマンドの実行例

```

=====
; List 4.21 POINT sample
;      to use, set H,L as follows
;      point ( x:H, y:L )
;      returns: A := COLOR CODE
=====
;
; PUBLIC  POINT
;
RDVDP EQU    0006H
WRVDP EQU    0007H
;
----- program start -----
;
POINT: DI
       CALL   WAIT.VDP
;
       LD     A,(WRVDP)
       LD     C,A
;
       INC   C
       LD     A,32
       OUT  (C),A
       LD     A,80H+17
       OUT  (C),A
;
       INC   C
       INC   C
       XOR  A
       OUT  (C),H
       OUT  (C),A
       OUT  (C),L
       OUT  (C),A
;
       DEC   C
       DEC   C
       OUT  (C),A
       LD     A,80H+45
       OUT  (C),A
       LD     A,01000000B
       OUT  (C),A
       LD     A,80H+46
       OUT  (C),A
       CALL  WAIT.VDP
       LD     A,7
       CALL  GET.STATUS
       PUSH AF
       XOR  A
       CALL  GET.STATUS
       POP  AF
;
       EI
       RET
;
GET.STATUS:
       PUSH BC
       LD     BC,(RDVDP)
       INC   C
       OUT  (C),A
       LD     A,8F
       OUT  (C),A
       IN    A,(C)
       POP  BC
       RET
;

```

```

WAIT.VDP:
LD      A,2
CALL   GET.STATUS
AND    I
JP     NZ,WAIT.VDP
XOR    A
CALL   GET.STATUS
RET
END

```

リスト4.22 PSETとPOINTを利用したPAINTルーチン

```

=====
; List 4.22 paint routine with POINT and Pset
; ENTRY: X:H, Y:L, BORDER COLOR:D, PAINT COLOR:E
=====
;
; EXTRN  PSET
; EXTRN  POINT

Q.LENGTH EQU 256*2*2
MAX.Y   EQU 211

;----- paint main routine -----
PAINT: CALL  POINT
CP    D
RET   Z
CALL  INIT.Q
LD    (COL),DE
CALL  PUT.Q
LD    A,(COL)
LD    E,A
XOR   A
CALL  PSET
; logi-OP : PSET
PAINT0: CALL  GET.Q
RET   C
INC   H
CALL  NZ,PAINT.SUB
DEC   H
JP    Z,PAINT1
DEC   H
CALL  PAINT.SUB
INC   H
PAINT1: DEC   L
LD    A,-1
CP    L
CALL  NZ,PAINT.SUB
INC   L
INC   L
LD    A,MAX.Y
CP    L
CALL  NC,PAINT.SUB
JP    PAINT0

```

```

;----- check point and pset -----
PAINT.SUB:
    CALL POINT
    LD D,A
    LD A,(BORD)
    CP D
    RET Z
    LD A,(COL)
    CP D
    RET Z
    LD E,A
    XOR A
    CALL PSET
    CALL PUT.Q
    RET

;----- init Q.BUFFER pointer -----
INIT.Q:
    PUSH HL
    LD HL,Q.BUF
    LD (Q.TOP),HL
    LD (Q.BTM),HL
    POP HL
    RET

;----- put point to Q.BUF (X:H , Y:L) -----
PUT.Q:
    EX DE,HL
    LD HL,(Q.TOP)
    LD BC,Q.BUF+Q.LENGTH+1
    OR A ;clear CARRY
    PUSH HL
    SBC HL,BC
    POP HL
    JP C,PUT.Q1
    LD HL,Q.BUF

PUT.Q1:
    LD (HL),D
    INC HL
    LD (HL),E
    INC HL
    LD (Q.TOP),HL
    EX DE,HL
    RET

;----- take point data to D,E -----
; returns: NC H:x , L:y
;           C buffer empty
GET.Q:
    LD HL,(Q.BTM)
    LD BC,(Q.TOP)
    OR A
    SBC HL,BC
    JP NZ,GET.Q0
    SCF
    RET

GET.Q0:
    LD HL,(Q.BTM)
    LD BC,Q.BUF+Q.LENGTH+1
    OR A
    PUSH HL

```

```

SBC      HL, BC
POP      HL
JP       C, GET.Q1
LD       HL, Q.BUF
GET.Q1: LD       D, (HL)
INC      HL
LD       E, (HL)
INC      HL
LD       (Q.BTM), HL
OR       A
EX       DE, HL
RET

----- work area -----

COL     DS      1
BORD   DS      1
Q.TOP  DS      2
Q.BTM  DS      2
Q.BUF  DS      Q.LENGTH

END

```

リスト4.23 PAINTルーチンの使用例

```

1000 =====
1010 ' list 4.23 paint routine with POINT and PSET
1020 ' ハイント カシイチニカーソルヲアセテスハマヲオシテクタサイ
1030 =====
1040 .
1050 SCREEN 5
1060 FOR I=0 TO 50
1070 LINE -(RND(1)*255,RND(1)*211),15
1080 NEXT
1090 I=&HA000 :DEF USR=I
1100 READ A$
1110 IF A$="END" THEN 1150
1120 POKE I,VAL("&H"+A$):I=I+1
1130 READ A$
1140 GOTO 1110
1150 X=128:Y=100:COL=15:PCOL=2
1160 CURS=0
1170 A=STICK(0)
1180 CURS=(CURS+1) AND 1
1190 LINE (X-5,Y)-(X+5,Y),15,,XOR
1200 LINE (X,Y-5)-(X,Y+5),15,,XOR
1210 IF CURS=1 THEN 1310
1220 IF A=1 THEN Y=Y-1
1230 IF A=2 THEN Y=Y-1:X=X+1
1240 IF A=3 THEN X=X+1
1250 IF A=4 THEN X=X+1:Y=Y+1
1260 IF A=5 THEN Y=Y+1
1270 IF A=6 THEN Y=Y+1:X=X-1
1280 IF A=7 THEN X=X-1
1290 IF A=8 THEN X=X-1:Y=Y-1
1300 IF STRIG(0) THEN GOSUB 1320

```

```

1310 GOTO 1170
1320 POKE &HA8CA,Y
1330 POKE &HA8CB,X
1340 POKE &HA8CD,COL
1350 POKE &HA8CC,PCOL
1360 A=USR(0)
1370 RETURN
1380 DATA ED,73,00,A8,31,CA,A8,2A,CA,A8,ED,5B,CC,A8,CD,67
1390 DATA A0,ED,7B,00,A8,C9,E5,21,D4,A8,22,D0,A8,22,D2,A8
1400 DATA E1,C9,EB,2A,D0,A8,01,D5,AC,B7,E5,ED,42,E1,DA,34
1410 DATA A0,21,D4,A8,72,23,73,23,22,D0,A8,EB,C9,2A,D2,A8
1420 DATA ED,4B,D0,A8,B7,ED,42,C2,4C,A0,37,C9,2A,D2,A8,01
1430 DATA D5,AC,B7,E5,ED,42,E1,DA,5D,A0,21,D4,A8,56,23,5E
1440 DATA 23,22,D2,A8,B7,EB,C9,CD,B8,A0,BA,C8,CD,16,A0,ED
1450 DATA 53,CE,A8,CD,22,A0,3A,CE,A8,5F,AF,CD,F4,A0,CD,3D
1460 DATA A0,D8,24,C4,A1,A0,25,CA,8F,A0,25,CD,A1,A0,24,2D
1470 DATA 3E,FF,BD,C4,A1,A0,2C,2C,3E,D3,BD,D4,A1,A0,C3,7E
1480 DATA A0,CD,B8,A0,57,3A,CF,A8,BA,C8,3A,CE,A8,BA,C8,5F
1490 DATA AF,CD,F4,A0,CD,22,A0,C9,F3,CD,3A,A1,ED,4B,06,00
1500 DATA 0C,3E,20,ED,79,3E,91,ED,79,0C,0C,AF,ED,61,ED,79
1510 DATA ED,69,ED,79,0D,0D,ED,79,3E,AD,ED,79,3E,40,ED,79
1520 DATA 3E,AE,ED,79,CD,3A,A1,3E,07,CD,2A,A1,F5,AF,CD,2A
1530 DATA A1,F1,FB,C9,F3,F5,CD,3A,A1,ED,4B,06,00,0C,3E,24
1540 DATA ED,79,3E,91,ED,79,C5,0C,0C,AF,ED,61,ED,79,ED,69
1550 DATA ED,79,C1,3E,2C,ED,79,3E,91,ED,79,0C,0C,ED,59,AF
1560 DATA ED,79,1E,50,F1,B3,ED,79,FB,C9,C5,ED,4B,06,00,0C
1570 DATA ED,79,3E,8F,ED,79,ED,78,C1,C9,3E,02,CD,2A,A1,E6
1580 DATA 01,C2,3A,A1,AF,CD,2A,A1,C9
1590 DATA END

```

6.6 コマンドの高速化

MSX-VIDEOは与えられたコマンドの実行のほかに目に見えない各種の処理を行っており、これらの作業のために多少コマンドの実行速度が遅くなっています。したがってこれらの処理を止めることにより、コマンドの実行速度を速めることができます。その方法を以下に示します。

1. スプライト表示の禁止

この方法は画面を表示したまま速度を上げられるので有用です。具体的には、R#8のビット1を“1”にします。

2. 画面表示の禁止

この方法は画面が消えてしまうので、画面の初期設定時以外には、あまり使えません。この方法を実行するには、R#1のビット6を“1”にします。

6.7 コマンド終了時のレジスタの状態

各コマンドごとのコマンド終了時におけるレジスタの状態を表4.7に示します。

SY*, DY*およびNYBの値は、Y方向実行ドット数をNとすると次のように計算されます。

$$SY* = SY + N, \quad DY* = DY + N \cdots \text{DIYビットが0のとき}$$

$$SY* = SY - N, \quad DY* = DY - N \cdots \text{DIYビットが1のとき}$$

$$NYB = NY - N$$

注 LINEでMAJビットが0のときは $N = N - 1$ になります。

コマンド名	SX	SY	DX	DY	NX	NY	CLR	CMR H	CLR L	ARG
HMMC	—	—	—	*	—	#	—	0	—	—
YMMM	—	*	—	*	—	#	—	0	—	—
HMMM	—	*	—	*	—	#	—	0	—	—
HMMV	—	—	—	*	—	#	—	0	—	—
LMMC	—	—	—	*	—	#	—	0	—	—
LMCM	—	*	—	—	—	#	*	0	—	—
LMMM	—	*	—	*	—	#	—	0	—	—
LMMV	—	—	—	*	—	#	—	0	—	—
LINE	—	—	—	*	—	—	—	0	—	—
SRCH	—	—	—	—	—	—	—	0	—	—
PSET	—	—	—	—	—	—	—	0	—	—
PINT	—	—	—	—	—	—	*	0	—	—

— : 変化なし

* : コマンド終了時の座標(SY*, DY*)およびカラーコード。

: 画面端を検出したときはそのときのカウント数(NYB)となる。

表4.7 コマンド終了時のレジスタの状態

第5部

BIOSによる 周辺装置の アクセス

MSXの基本的な考え方は、何度も述べたように、 BIOSを通して周辺装置をアクセスすることにより、機種やバージョンの差異を吸収して互換性を高めようというものです。したがって、何をするにもまずBIOSの使用法を知っておかなければなりません。この第5部では、MSXの周辺装置を BIOSによりアクセスする方法と、そのために必要となる各周辺装置の構造を説明します。

「G」 株式会社 BIOSTARの蓄葉式風 式サウナ

お2000年1月より販売開始。尚未入荷するお客様へ
お詫びを込めてお詫びを送ります。お詫び申し訳ござ
いませんが、この度は販売部品不足により販売停止の事
件となりました。誠てお詫び申します。アドバイス
を貰う場合は、お手数ですが、お問い合わせは
お詫び申します。尚且つ販売部品不足の事
件により販売停止の事

1

章

PSGと音声出力

MSXには次に示すような3系統の音声出力機能が存在します。ただし、③はMSXに標準的に付属するものではないため、本書では扱いません。ここではそれ以外の①と②の機能について説明します。

- ① PSGによる音声出力（3チャネル、8オクターブ）
- ② 1ビットI/Oポートによる音声出力
- ③ MSX-AUDIOによる音声出力（FM音源）……………本書では説明しない。

1.1 PSGの機能

MSXの音楽演奏機能およびBEEP音の発生には、AY-3-8910相当のLSIが使われています。このLSIはPSG(Programmable Sound Generator)とも呼ばれ、その名が示すとおり、プログラムにより複雑な音楽やさまざまな効果音を発生することができます。その特徴をまとめると次のようになります。

- ・3チャネルのトーン発生器を持ち、各チャネルには独立に、4096種の音階（8オクターブに相当）と16段階の音量を指定することができる。
- ・エンベロープパターンによって、ピアノやオルガンのような音色を出すことができる。ただし、エンベロープ発生器がひとつしか存在しないため、音色を変えられるのは基本的に1チャネルだけである。
- ・内蔵するノイズ発生器によって、風の音や波の音のような効果音も容易に得られる。ただし、ノイズ発生器がひとつしか存在しないため、ノイズを出力できるのは基本的に1チャネルだけである。
- ・入力クロック f_c を分周することで、トーンやエンベロープをはじめとする必要なすべての周波数を得ている（なおMSXでは、 $f_c=1.7897725\text{MHz}$ と定められている）。このため音程やリズムのふらつきがまったくない。

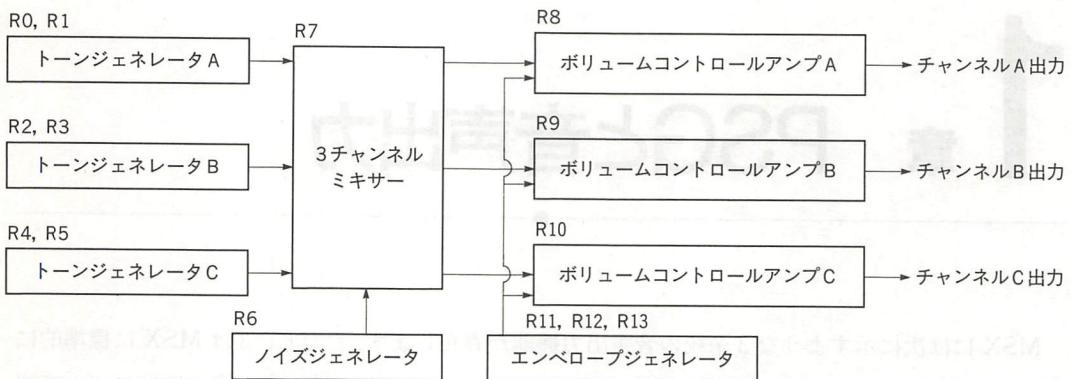


図5.1 PSGのブロックダイアグラム

上のブロックダイアグラムでは省略しましたが、PSGは音声発生の機能とはまったく別に2つの入出力ポートを持っています。MSXではこれを汎用入出力ポートとして、ジョイスティック、タッチパッド、パドル、マウスなどの入出力装置との接続にも利用しています。なお、これらの汎用入出力ポートについては、5章で説明することにします。

● PSG のレジスタ

PSGが音声出力の作業をすべて実行してくれるので、CPUの仕事は単に音が変化する時点でのPSGにそれを教えることだけとなりました。これは図5.2に示したようなPSG内部の16個の8ビットレジスタに値を書き込むことによって行います。

以下に、これらのレジスタの役割とその使用法を説明します。

● トーン周波数の設定 (R0~R5)

A, B, C各チャンネルのトーン周波数はR0~R5によって設定します。まずPSG内で入力クロック ($f_c = 1.7897725\text{MHz}$) を16分周し、それを基準周波数とします。また各チャンネルは、この基準周波数をそれぞれに割り当てられた12ビットのデータで分周して最終的な音程を得ます。12ビットの分周データ (TP) と発生する音の周波数 (ft) には次のような関係があります。

$$\begin{aligned}
 ft &= f_c / (16 * TP) \\
 &= 0.11186078125 / TP \text{ [MHz]} \\
 &= 111860.78125 / TP \text{ [Hz]}
 \end{aligned}$$

12ビットの分周データ TP は、各チャンネルごとに上位4ビットの粗調整値 CT と下位8ビットの微調整値 FT によって、図5.3のように指定されます。また、音階を作るためのレジスタの設定を表5.1に示します。

レジスタ	ビット	MSB								LSB																								
		B7	B6	B5	B4	B3	B2	B1	B0	下位8ビット				上位4ビット																				
R0	チャンネルA 音程分周比	下位8ビット																																
R1		上位4ビット																																
R2	チャンネルB 音程分周比	下位8ビット																																
R3		上位4ビット																																
R4	チャンネルC 音程分周比	下位8ビット																																
R5		上位4ビット																																
R6	ノイズ分周比																																	
R7	Enable	IN/OUT		NOISE				TONE																										
		IOB	IOA	C	B	A	C	B	A																									
R8	チャンネルA音量									M																								
R9	チャンネルB音量									M																								
R10	チャンネルC音量									M																								
R11	エンベロープ周期	下位8ビット																																
R12		上位8ビット																																
R13	エンベロープ波形																																	
R14	I/OポートA																																	
R15	I/OポートB																																	

図5.2 PSGのレジスタ構成

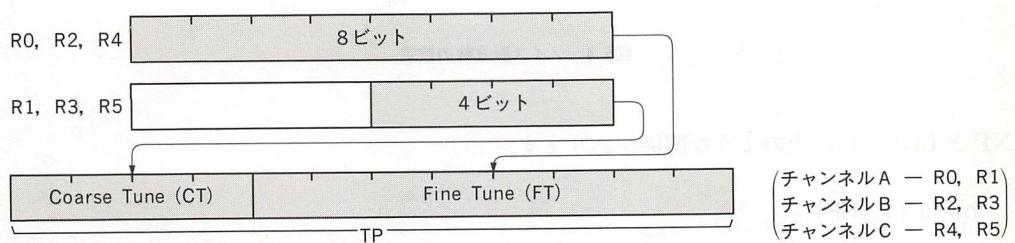


図5.3 音程の設定

音名 \ オクターブ	1	2	3	4	5	6	7	8
C	D5D	6AF	357	1AC	D6	6B	35	1B
C#	C9C	64E	327	194	CA	65	32	19
D	BE7	5F4	2FA	17D	BE	5F	30	18
D#	B3C	59E	2CF	168	B4	5A	2D	16
E	A9B	54E	2A7	153	AA	55	2A	15
F	A02	501	281	140	A0	50	28	14
F#	973	4BA	25D	12E	97	4C	26	13
G	8EB	476	23B	11D	8F	47	24	12
G#	86B	436	21B	10D	87	43	22	11
A	7F2	3F9	1FD	FE	7F	40	20	10
A#	780	3C0	1E0	F0	78	3C	1E	F
B	714	38A	1C5	E3	71	39	1C	E

表5.1 トーン周波数の設定(音階データ)

● ノイズ周波数の設定 (R6)

爆発音や波の音などの合成にかかせないのがノイズ音です。PSGは、ノイズジェネレータによって発生させたノイズをA～Cの各チャンネルに出力できます。ノイズジェネレータは1つしか存在しないため、各チャンネル共通に同一のノイズが出力されます。ノイズは平均周波数を変えることによって様々な効果を出すことが可能であり、R6レジスタがその設定を行います。このレジスタの下位5ビットのデータ(NP)で基準周波数($f_c/16$)を分周し、ノイズの平均周波数(f_n)を決定します。

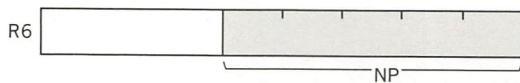


図5.4 ノイズ周波数の設定

NPと f_n の間には次のような関係があります。

$$\begin{aligned}
 f_n &= f_c / (16 * NP) \\
 &= 0.11186078125 / NP \text{ [MHz]} \\
 &= 111860.78125 / NP \text{ [Hz]}
 \end{aligned}$$

NPは1～31の値をとりますから、ノイズの平均周波数は3.6kHz～111.9kHzの範囲で設定できます。

● 音のミキシング (R7)

R7は各チャネルごとに、トーンジェネレータとノイズジェネレータの出力を選択するためのレジスタで、ノイズとトーンの両者を混合することもできます。図5.5に示したように、R7の下位3ビット (B0~B2) はトーン出力、次の3ビット (B3~B5) はノイズ出力の制御を行います。どちらも対応するビットが0の時に出力ON、1の時にOFFとなります。

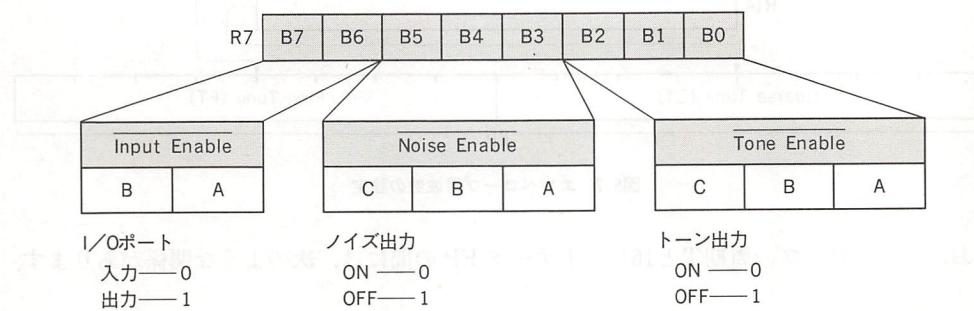


図5.5 各チャネルの出力選択

R7の上位2ビットは音声出力とは関係ありません。これはPSGが持つ2本のI/Oポートのデータ方向を決定するもので、対応するビットが0の時に入力モード、1の時に出力モードが設定されます。MSXではポートAを入力、ポートBを出力として使用していますから、つねにビット6="0"、ビット7="1"と設定しておく必要があります。

● 音量の設定 (R8~R10)

R8~R10は各チャネルの音量を指定するレジスタです。4ビットのデータ(0~15)で音量を固定的に指定する方法とエンベロープを用いてビブラートや減衰音などの効果音を発生させる方法の2通りが選べますが、その選択もこのレジスタで行います。

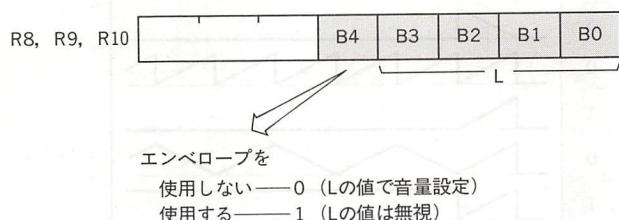


図5.6 音量の設定

なお、これらのレジスタのビット4が“0”的場合、エンベロープは使用されず、レジスタの下位4ビットの値L(0~15)によって音量が指定されます。また、ビット4が“1”的場合はエンベロープ信号によって音量が変化し、Lの値は無視されます。

● エンベロープ周期の設定 (R11, R12)

R11, R12 はエンベロープの周期を16ビットデータによって指定します。データの上位8ビットをR12で、下位8ビットをR11で設定します。

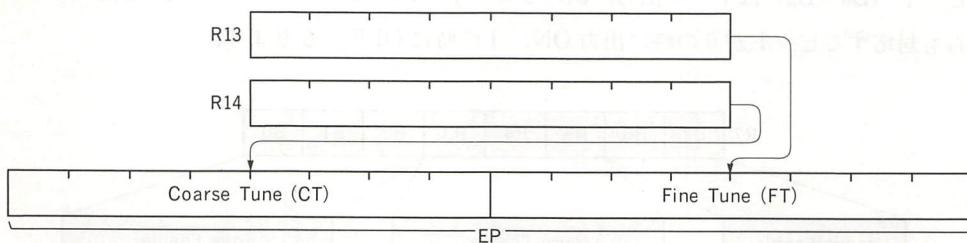


図5.7 エンベロープ周波数の設定

なお、エンベロープの周期Tと16ビットデータEPの間には、次のような関係があります。

$$\begin{aligned} T &= (256 * EP) / fc \\ &= (256 * EP) / 1.787725 \text{ [MHz]} \\ &= 143.03493 * EP \text{ [\mu s]} \end{aligned}$$

● エンベロープパターンの設定 (R13)

R13は、下位4ビットのデータによって図5.8のようにエンベロープパターンを設定します。同図に示したTの間隔がR11とR12で指定されたエンベロープ周期に相当します。

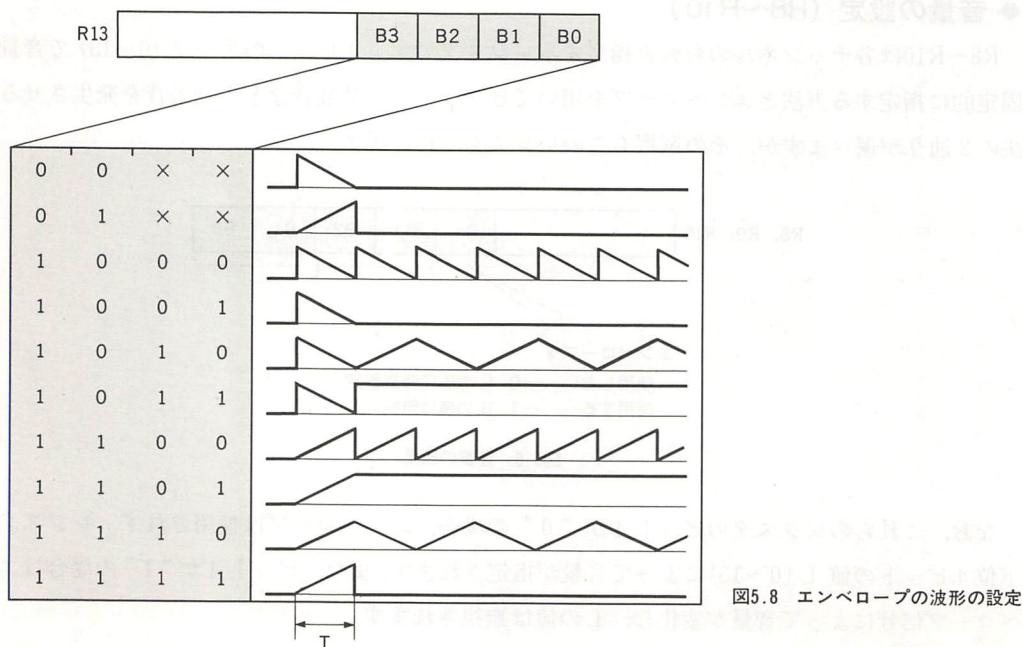


図5.8 エンベロープの波形の設定

● I/O ポート (R14, R15)

R14 と R15 は 8 ビットのデータをパラレルで入出力するポートです。MSX ではここを汎用入出力インターフェイスとして使用しています。詳しくは 5 章を参照してください。

1.2 PSG のアクセス

マシン語プログラム中から PSG をアクセスするために、以下に述べるようないくつかの BIOS ルーチンが用意されています。

● GICINI (0090H/MAIN) PSG の初期化

入力：――

出力：――

機能：PSG のレジスタを初期化し、さらに BASIC の PLAY 文を実行するための作業領域の初期設定を行う。この時 PSG の各レジスタは図 5.9 のような値に設定される。

レジスタ	ビット	7	6	5	4	3	2	1	0
R0	チャンネルA周波数	0	1	0	1	0	1	0	1
		0	0	0	0	0	0	0	0
R2	チャンネルB周波数	0	0	0	0	0	0	0	0
		0	0	0	0	0	0	0	0
R4	チャンネルC周波数	0	0	0	0	0	0	0	0
		0	0	0	0	0	0	0	0
R6	ノイズ周波数	0	0	0	0	0	0	0	0
R7	チャンネル設定	1	0	1	1	1	0	0	0
R8	チャンネルA音量	0	0	0	0	0	0	0	0
R9	チャンネルB音量	0	0	0	0	0	0	0	0
R10	チャンネルC音量	0	0	0	0	0	0	0	0
R11	エンベロープ周期	0	0	0	0	1	0	1	1
		0	0	0	0	0	0	0	0
R13	エンベロープパターン	0	0	0	0	0	0	0	0
R14	I/O ポート A								
R15	I/O ポート B								

図5.9 PSGレジスタの初期値

● WRTPSG (0093H/MAIN) PSG レジスタへのデータの書き込み

入力：A←PSG のレジスタ番号

E←書き込むデータ

出力：――

機能：Aレジスタで指定した番号の PSG レジスタに、E レジスタの内容を書き込む。

● RDPSG (0096H/MAIN) PSG のレジスタのデータの読み出し

入力：A ← PSG のレジスタ番号

出力：A ← 指定したレジスタの内容

機能：A レジスタで指定した番号の PSG レジスタの内容を読み出し、その値を A レジスタに格納する。

● STRTMS (0099H/MAIN) 音楽演奏の開始

入力：(QUEUE) ← 中間言語に変換された MML

出力：――

機能：バックグラウンドタスクとして、音楽が流れているかどうかを判定し、もし流れていなければキューに設定された音楽を演奏する。

リスト 5.1 単音の発生

```
;=====
; List 5.1 440 Hz tone
;
;=====
;
WRTPSG EQU 0093H
ORG 0B000H
----- program start -----
LD A,7 ;Select Channel
LD E,00111110B ;Channel A Tone := On
CALL WRTPSG

LD A,8 ;Set Volume
LD E,10
CALL WRTPSG

LD A,0 ;Set Fine Tune Channel A
LD E,0FEH ;Data 0FEH
CALL WRTPSG

LD A,1 ;Set Coarse Tune Channel A
LD E,0 ;Data 0H
CALL WRTPSG

RET
END
```

1.3 1ビットサウンドポートによる音声発生機能

MSXには、PSGのほかにもうひとつ音源が存在しています。これは1ビットのI/Oポートの出力をソフトで繰り返しON/OFFして音を出すという単純なもので

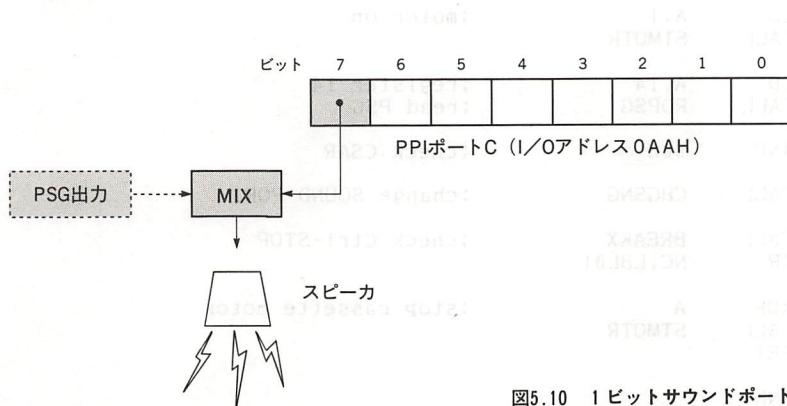


図5.10 1ビットサウンドポート

1.4 1ビットサウンドポートのアクセス

この1ビットサウンドポートをアクセスするために、次に示すBIOSルーチンが用意されています。

● CHGSND (0135H/MAIN)

入力：A←ON/OFF指定（0=OFF, 0以外=ON）

出力：――

機能：Aレジスタに0を入れてこのルーチンをコールするとサウンドポートのビットをOFFにし、0以外の値を入れてコールするとサウンドポートのビットをONにする。

リスト5.2 カセットテープの再生

```
=====
; List 5.2 Read from cassette tape
;
; Set music tape into tape-recorder
; and run this program.
; Then your MSX will replay it.
=====
;
; CHGSNG EQU      0135H
; STMOTR  EQU      00F3H
```

第5部 BIOSによる周辺装置のアクセス

```

RDPSG EQU 0096H
BREAKX EQU 00B7H

ORG 0B000H

;----- program start ----- 1ビットサウンドポートを利用してテープの音声を再生する

START: LD A,1 ;motor on
       CALL STMOTR

LBL01: LD A,14 ;register 14
       CALL RDPSG ;read PSG

          AND 80H ;check CSAR

          CALL CHGSNG ;change SOUND PORT

          CALL BREAKX ;check Ctrl-STOP
          JR NC,LBL01

          XOR A ;stop cassette motor
          CALL STMOTR
          RET

END

```

2 章 カセット・インターフェイス

カセットテープレコーダは、MSXの最も安価な外部記憶装置です。このカセットテープ上の情報をマシン語中で取り扱うためには、カセット・インターフェイスの使用法を知らないわけにはなりません。本章では、このために必要となる情報を説明します。

2.1 ポーレート

MSXのカセット・インターフェイスは以下の2種類のポーレートを使用できます(表5.2)。なお、BASICのスタート時にはデフォルトで1200ポーが設定されています。

ポーレート	特徴
1200bps	低スピード／高信頼性
2400bps	高スピード／低信頼性

表5.2 MSXのポーレート

ポーレートの指定は、SCREEN命令の第4パラメータまたはCSAVE命令の第2パラメータで行います。一度指定すると以後そのポーレートが引き続いて使用されます。

SCREEN „,,,<ポーレート>

CSAVE “ファイル名”,<ポーレート>

(<ポーレート>は両者とも、1で1200ポー、2で2400ポー)

2.2 1ビットの構成

入出力の基本となる1ビットのデータは図5.11のように記録されます。パルスの幅はCPUのT-STATEをカウントして決められるため、カセット・インターフェイス作動中はすべての割り込みが禁止されています。

なお、カセットから入力されるビットデータは、汎用入出力インターフェイスのポートB(PSG

のレジスタ#15) の第7ビットを通して読み取ることが可能です。第5部1章リスト5.3のプログラム例の中で、この機能を使用していますので、参照してください。

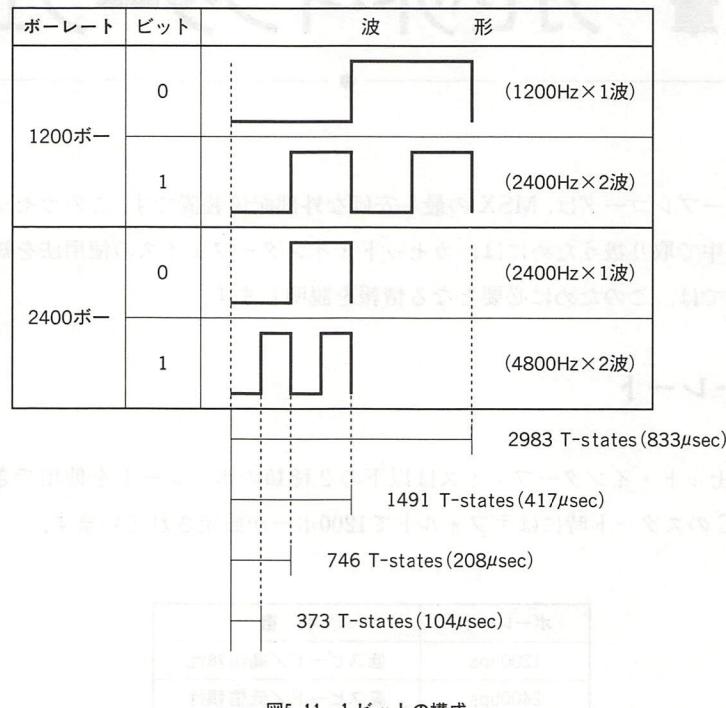


図5.11 1ビットの構成

2.3 1バイトの構成

1バイトのデータは図5.12のようなビット列で記録されます。スタートビットとして“0”的ビットがひとつ、次にデータ本体が最下位ビットから最上位ビットの順で8ビット、最後にストップビットとして“1”的ビットが2つ続き、合計11ビットを使用します。

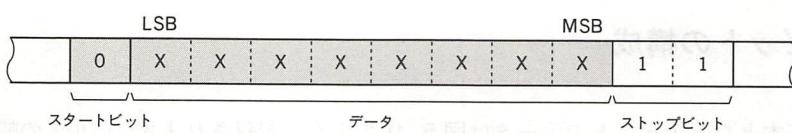


図5.12 1バイトの構成

2.4 ヘッダの構成

ヘッダとはセーブまたはロード時に、カセットテープが動き出してから回転が安定するまでの時間待ちや、ファイル間に区切りをつけるために、ある特定の周波数の信号を一定時間テープに記録させた部分のことです。ロングヘッダとショートヘッダの2種類があり、ロングヘッダはモータの回転が安定するまでの時間待ちに使用されます。また、テープリード時のボーレートは、ロングヘッダを読んで決定されます。ショートヘッダはファイルボディ間の区切りに使用されます。表5.3に両者の構成を示しました。

ボーレート	ヘッダの種類	ヘッダの構成
1200ポー	ロングヘッダ	2400Hz×16000波(約6.7秒)
	ショートヘッダ	2400Hz×4000波(約1.7秒)
2400ポー	ロングヘッダ	4800Hz×32000波(約6.7秒)
	ショートヘッダ	4800Hz×8000波(約1.7秒)

表5.3 ヘッダの構成

2.5 ファイルのフォーマット

MSXのBASICは次の3タイプのカセットフォーマットのファイルをサポートしています。

(1) BASICテキストファイル

CSAVE命令でバイナリセーブしたBASICプログラムは、このフォーマットにしたがって記録されます。なお、ファイルは前半のファイルヘッダと後半のファイルボディに分けられます。

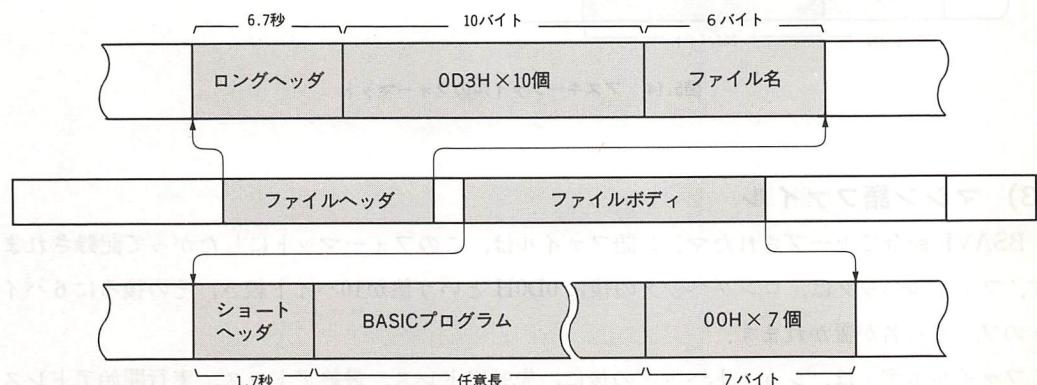


図5.13 バイナリファイルのフォーマット

ファイルヘッダは、ロングヘッダの後に 0D3H という値が10バイト続き、その後に 6 バイトのファイル名が置かれます。ファイルボディはショートヘッダの後にプログラム本体が続き、7 バイトの00Hでファイルエンドを示します。

(2) ASCII テキストファイル

SAVE 命令でアスキーセーブされた BASIC プログラム、および OPEN 命令によって作られたデータファイルは、このフォーマットにしたがって記録されます。

ファイルヘッダは、ロングヘッダの後に 0EAH という値が10バイト続き、その後に 6 バイトのファイル名が置かれます。

データ本体は256バイトごとのブロックに分けられ、それぞれのブロックの前にはショートヘッダが置かれます。ファイルエンドは Ctrl-Z (1AH) で示されます。このため、1AH という値を含むデータファイルを作ることはできません。

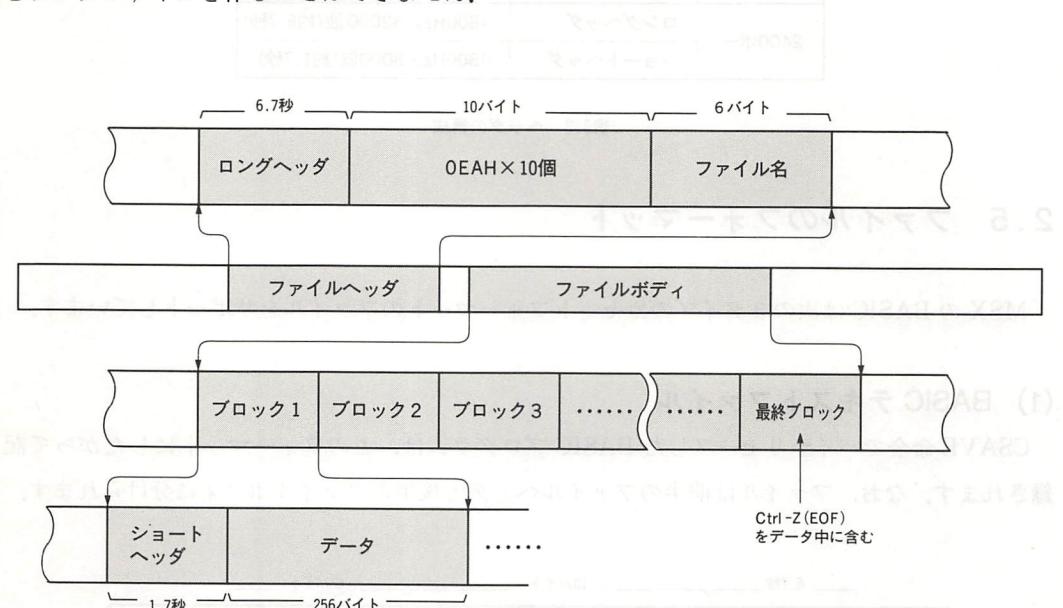


図5.14 アスキーファイルのフォーマット

(3) マシン語ファイル

BSAVE 命令でセーブされたマシン語ファイルは、このフォーマットにしたがって記録されます。ファイルヘッダは、ロングヘッダの後に 0D0H という値が10バイト続き、その後ろに 6 バイトのファイル名が置かれます。

ファイルボディは、ショートヘッダの後に、先頭アドレス、最終アドレス、実行開始アドレスの順に 3 つのアドレスが記録され、その次にマシン語本体が続きます。データの量は先頭アドレ

スと最終アドレスから計算できますから、特別なファイルエンドマークはありません。実行開始アドレスとは、BLOAD命令のRオプション使用時に、プログラムが実行されるアドレスです。

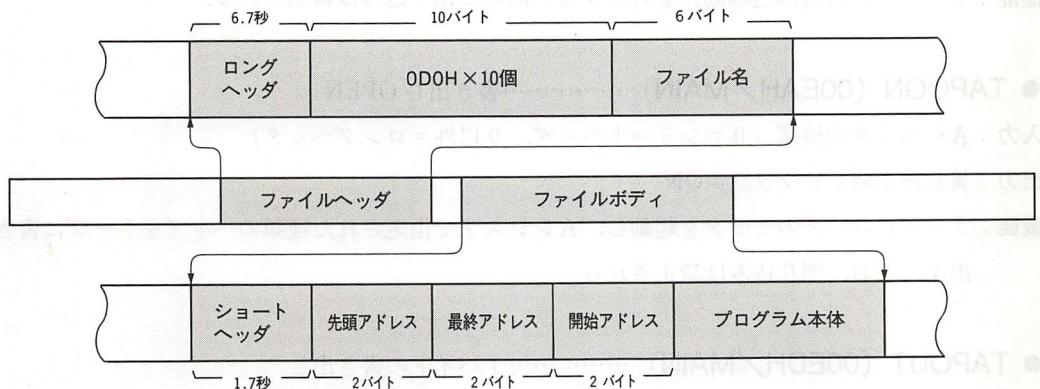


図5.15 マシン語ファイルのフォーマット

2.6 カセットファイルのアクセス

カセットファイルをアクセスするために、以下の BIOS ルーチンが用意されています。

● TAPION (00E1H/MAIN)読み込み OPEN

入力: —

出力: 異常終了時 CY フラグ=ON

機能: テープレコーダのモータを起動し、ロングヘッダまたはショートヘッダを読み込む。同時にそのファイルが記録されたボーレートを判別し、ワークエリアをそれに合わせて設定する。なお、割り込みは禁止される。

● TAPIN (00E4H/MAIN) 1バイトの読み込み

入力: —

出力: A←読み込んだデータ

異常終了時 CY フラグ=ON

機能: テープからデータを1バイト読み込み、Aレジスタに格納する。

● TAPIOF (00E7H/MAIN)読み込み CLOSE

入力：――

出力：――

機能：テープからの読み込み動作を終了する。同時に割り込みは再開される。

● TAPOON (00EAH/MAIN)書き出し OPEN

入力：A←ヘッダの種類 (0=ショートヘッダ, 0以外=ロングヘッダ)

出力：異常終了時 CY フラグ=ON

機能：テープレコーダのモータを起動し、A レジスタで指定された種類のヘッダをテープに書き出す。なお、割り込みは禁止される。

● TAPOUT (00EDH/MAIN)1 バイトの書き出し

入力：A←書き込みデータ

出力：異常終了時 CY フラグ=ON

機能：A レジスタの内容をテープに書き込む。

● TAPOOF (00F0H/MAIN)書き込み CLOSE

入力：――

出力：――

機能：テープへの書き込み動作を終了する。同時に割り込みは再開される。

● STMOTR (00F3H/MAIN)モータの動作指定

入力：A←動作の指定 (0=停止, 1=起動, 255=現在と反対の状態にする)

出力：――

機能：A レジスタで指定した値にしたがって、モータの動作状態を設定する。

これらの BIOS を使用してカセットファイルの READ/WRITE ルーチンを作成する際、なるべく無駄な動作をせずに、ただひたすら READ または WRITE のみに専念するようにしてください。たとえば、テープからデータを読み込みながらそのデータを CRT に表示させたりすると、READ エラーを生じことがあります。

リスト 5.4 に BIOS ルーチンを使用したサンプルプログラムを示します。

リスト5.3 カセットにセーブされたファイル名の表示

```

=====
; List 5.3      Cassete files
;
; Set cassette tape into recorder and run this program.
; Then the all names and attributes of the programs
; in that tape are listed out.
;
=====
;
; CHPUT  EQU    00A2H
; TAPION EQU    00E1H
; TAPIN   EQU    00E4H
; TAPIOF  EQU    00E7H
;
; ORG    0C000H
;
----- program start -----      カセットテープ内のプログラム名一覧を表示する
;
START: CALL    TAPION           ;motor on and read header
;
        LD     B,16
        LD     HL,WORK          ;work area address
LBL01: PUSH   HL
        PUSH   BC
        CALL   TAPIN           ;read a byte of data from tape
        POP    BC
        POP    HL
        JR    C,ERROR          ;set carry flag if read error
        LD    (HL),A
        INC   HL
        DJNZ  LBL01
;
        LD     HL,FILNAM         ;write file name
        CALL   PUTSTR
        LD     HL,WORK+10
        CALL   PUTSTR
        CALL   CRLF
;
        LD     A,(WORK)          ;check file attributes
;
        LD     HL,BINFIL
        CP     0D3H
        JR    Z,LBL03           ;check binary file
;
        LD     HL,ASCFIL
        CP     0EAH
        JR    Z,LBL03           ;check ascii file
;
        LD     HL,MACFIL
        CP     0D0H
        JR    Z,LBL03           ;check machine code file
;
ERROR: LD     HL,ERRSTR
;
LBL03: CALL   PUTSTR
        CALL   TAPIOF
        RET
;
----- put CRLF -----
;
CRLF: LD     HL,STCRLF
        CALL   PUTSTR
        RET

```

第5部 BIOSによる周辺装置のアクセス

元の表示によっては本稿で一部記すやがれ。8.8イタリ

```

;----- put string -----
PUTSTR: LD      A,(HL)           ;get a character from strings
        CP      '$'              ;check end of strings
        RET
        CALL   CHPUT             ;write a character to CRT
        INC    HL
        JR     PUTSTR            ;repeat until all characters of
                                ;the file have been output
;----- strings data -----
FILNAM: DB      'FILE NAME :$'
ASCFIL: DB      'ASCII FILE',0DH,0AH,'$'
BINFIL: DB      'BINARY FILE',0DH,0AH,'$'
MACFIL: DB      'BSAVE FILE',0DH,0AH,'$'
ERRSTR: DB      'TAPE READ ERROR',0DH,0AH,'$'
STCRLF: DB      0DH,0AH,'$'

;----- WORK AREA -----
WORK:  DS      16,0
       DB      '$',0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0,0;end of strings

END

```

3 章 キーボード・インターフェイス

MSX 2 のキーボードは MSX 1 と同じ構造をしていますが、カナの入力時にローマ字カナ変換方式が使えるようになり、機能的にはたいへん便利になりました。本章では MSX 2 のキーボード・インターフェイスについて説明しましょう。

なお、キーの配列などについては日本仕様のキーボードをもとに説明しますが、海外仕様の MSX ではデータが少し異なる部分もあります。

3.1 キー配列

MSX のキーボードの配列は、英数字は JIS 標準配列を採用しており、カナは JIS 標準配列と五十音順配列をジャンパ線により切り換えていました。ただし、このジャンパ線による設定はシステム起動時にどちらの配列を選ぶか決めているだけであり、ワークエリア KANAMD の値で任意に変更可能です。

- KANAMD (FCADH, 1) ……キー配列 (0=五十音配列, 0 以外=JIS 配列)

3.2 キースキャン

MSX は図 5.16 のようなキーマトリクスを持っています。このキーマトリクスを調べることによって、キーの押されている状況をリアルタイムに得ることが可能であり、ゲームなどの入力に使用できます。

キーマトリクスのスキャンは、次の BIOS ルーチンを用いて行います。

- SNSMAT (0141H/MAIN) ……キーマトリクスの指定行の読み出し

入力：A ← 読み出すキーマトリクスの行 (0 ~ 10)

出力：A ← 指定したキーマトリクスの行の状態 (押されているキーのビットが 0 になる)

機能：図 5.16 のキーマトリクスの 1 行を指定し、その状態を A レジスタに返す。この時、押されているキーに対応するビットが “0”，押されていないキーに対応するビットは “1” になる。

	MSB	7	6	5	4	3	2	1	0	LSB	
行		,	&	%	\$	#	"	!	0		
0	7 二	土 ナ	6 オ	木 才	4 エ	3 ウ	2 イ	1 ア	0 ノ		
1	+	;	〔 モ	○ 口	@ レ	¥ ル	~ リ	= ラ) ネ	(ヌ	
2	B ト	A サ	- ン	◆ ヲ	? 。	> ワ	< ヨ]● 。	:	* "	
3	J ミ	I フ	H 時 マ	G ソ	F セ	E ク	D ト ス	C ル ツ			
4	R ケ	Q カ	P ホ	O ヘ	N ヤ	M ユ	L メ	K ム			
5	Z タ	Y ハ	X チ	W キ	V テ	U ヒ	T コ	S シ			
6	F8 F3	F7 F2	F6 F1	かな	CAPS LOCK	GRAPH	CTRL	SHIFT			
7	RETURN	SELECT	BS	STOP	TAB	ESC	F10 F5	F9 F4			
8	→	↓	↑	←	DEL	INS	CLS HOME	SPACE			
	[TEN KEY]										
9	4	3	2	1	0	option	option	option			
10	.	,	-	9	8	7	6	5			

図5.16 キーマトリクス

リスト5.4 キースキャンルーチンの使用法

```

;=====
; List 5.4 scan key-matrix and display it
;=====

CHPUT EQU 00A2H
BREAKX EQU 00B7H
POSIT EQU 00C6H
SNSMAT EQU 0141H

ORG 0B000H

----- program start -----      キーマトリクスを読んでそのビットパターンを表示する

SCAN: LD C,0 ;C := line of key matrix

SC1: LD A,C
     CALL SNSMAT ;Read key matrix

     LD B,8
     LD HL,BUF ;HL := buffer address
     LD D,'.'
     RLA ;Check bit
     JR C,SC3
     LD D,'#'
     LD (HL),D ;store '.' or '#' to buffer
     INC HL
     DJNZ SC2

     LD H,05H ;x := 5
     LD L,C ;y := C+1
     INC L
     CALL POSIT ;set cursor position

     LD B,8 ;put out bit patterns to CRT
     LD HL,BUF
     LD A,(HL)
     CALL CHPUT
     INC HL
     DJNZ SC4

     CALL BREAKX ;check Ctrl-STOP
     RET C

     INC C ;line No. increment
     LD A,C
     CP 09
     JR NZ,SC1
     JR START

----- work area -----
BUF: DS 8

END

```

3.3 文字の入力

MSXは、タイマ割り込みにより1/60秒ごとにキーマトリクスをスキャンしており、キーが押されていれば、その文字コードを図5.17のようなリング状のキーボードバッファに格納します。なお、MSXのキー入力は、一般にこのキーボードバッファを読むことによって行っています。

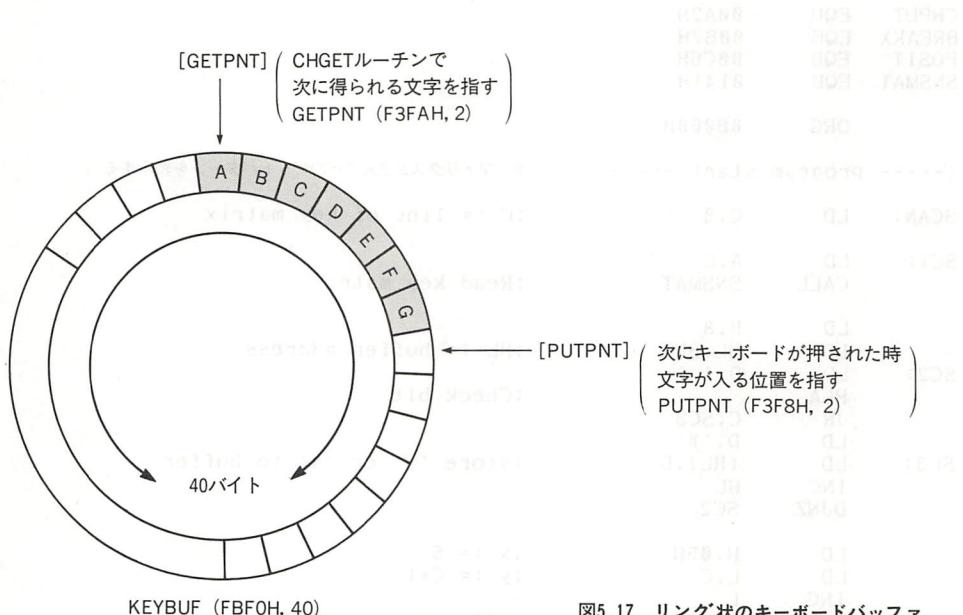


図5.17 リング状のキーボードバッファ

このキーボードバッファを使用したキー入力およびそれに関連する機能を持ったBIOSを以下に示します。タイマ割り込みを禁止すると、当然これらは使用できなくなります。

● CHSNS (009CH/MAIN) キーボードバッファの残りのチェック

入力：――

出力：バッファが空なら、Zフラグ=ON

機能：キーボードバッファに文字が残っているかどうかを調べる。キーボードバッファが空であればZフラグを立てる。

● CHGET (009FH/MAIN) キーボードバッファから1文字入力

入力：――

出力：A←文字コード

機能：キーボードバッファから1文字読み出してAレジスタに格納する。バッファに文字が入っていない場合には、カーソルを表示してキー入力があるまで待つ。キー入力待ちの間、

CAP ロック, カナロック, ローマ字カナ変換ロックも有効である。関係のあるワークエリアは以下に示すとおりである。このうち, SCNCNT と REPCNT は CHGET ルーチン実行後に初期化されてしまうので, オートリピートの時間間隔を変えるためには CHGET コールのたびにこのワークを設定する必要がある。

ワークエリア

CLIKSW	(F3DBH,1)	キークリック音 (0=OFF, 0以外=ON)
SCNCNT	(F3F6H,1)	キースキャンの時間間隔 (通常は1)
REPCNT	(F3F7H,1)	オートリピート開始までの時間 (通常は50)
MODE	(FAFCH,1)	ローマ字カナ変換のモード (図 5.18 参照)
CSTYLE	(FCAAH,1)	カーソルの形 (0=■ 0以外=▬)
CAPST	(FCABH,1)	CAPS ロック (0=OFF, 0以外=ON)
KANAST	(FCACH,1)	カナロック (0=OFF, 0以外=ON)

MODE (FAFCH)

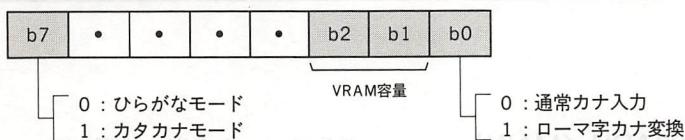


図5.18 ローマ字カナ変換モードの設定

● KILBUF (0156H/MAIN)キーボードバッファを空にする

入力：—

出力：—

機能：キーボードバッファを空にする。

リスト5.5 1文字入力ルーチンの使用法

```
=====
;
; List 5.5      get key code
;
;      this routine doesn't wait key hit
;
=====
;
CHNSN  EQU      009CH          ;check keyboard buffer
CHGET   EQU      009FH          ;get a character from buffer
CHPUT   EQU      00A2H          ;put a character to screen
BREAKX  EQU      00B7H          ;check Ctrl-STOP
KILBUF  EQU      0156H          ;clear keyboard buffer
=====
```

```

REPCNT EQU 0F3F7H ;time interval until key-repeat
KEYBUF EQU 0FBF0H ;keyboard buffer address
ORG 0B000H

;----- program start ----- CHGETを使ったリアルタイムキー入力

KEY: CALL CHSNS ;check keyboard buffer
      JR C,KEY1
      LD A,1
      LD (PEPCNT),1 ;not to wait until repeat
      CALL CHGET ;get a character (if exists)
      JR KEY2

KEY1: LD A,'-' ;A := '-'
KEY2: CALL CHPUT ;put the character
      CALL KILBUF ;clear keyboard buffer
      CALL BREAKX ;check Ctrl-STOP
      JR NC,KEYY
END

```

● CNVCHR (00ABH/MAIN) グラフィック文字の処理

入力 : A←文字コード

出力 : A←グラフィック文字は変換される (通常文字ならば変換されない)

CY フラグ=OFF (入力はグラフィックヘッダバイト01Hだった)

CY フラグ=ON, Z フラグ=ON (入力はグラフィック文字なので変換された)

CY フラグ=ON, Z フラグ=OFF (入力は通常の文字なので変換されなかった)

機能 : CHGET の後にこの CNVCHR を実行すると、グラフィック文字は図 5.19 のような 1 バイトコードに変換し、グラフィック文字以外は無変換でそのまま返す。グラフィック文字はグラフィックヘッダバイト (01H) を伴う 2 バイトの変則的なコードで表されるため文字処理の時にめんどうな手続きが必要だが、このルーチンによって多少は手間が省ける。

● PINLIN (00AEH/MAIN) 1 行入力

入力 : —

出力 : HL ← F55DH

[F55E] ← 入力した文字列 (行末は00Hで示される)

CY フラグ ← STOP で終了した場合=ON, RETURN で終了した場合=OFF

変換前	後	変換前	後
0141H (月) → 41H	0150H (π) → 50H	0142H (火) → 42H	0151H (田) → 51H
0143H (水) → 43H	0152H (日) → 52H	0144H (木) → 44H	0153H (月) → 53H
0145H (金) → 45H	0154H (田) → 54H	0146H (土) → 46H	0155H (日) → 55H
0147H (日) → 47H	0156H (月) → 56H	0148H (年) → 48H	0157H (田) → 57H
0149H (円) → 49H	0158H (日) → 58H	014AH (時) → 4AH	0159H (月) → 59H
014BH (分) → 4BH	015AH (田) → 5AH	014CH (秒) → 4CH	015BH (日) → 5BH
014DH (百) → 4DH	015CH (月) → 5CH	014EH (千) → 4EH	015DH (大) → 5DH
014FH (万) → 4FH	015EH (中) → 5EH		015FH (小) → 5FH

図5.19 グラフィック文字のコード変換表

機能：入力した文字列をラインバッファ BUF (F55DH) に格納する。文字列の入力時にはスクリーンエディットのすべての機能が有効である。RETURN キーまたは STOP キーを押すと入力動作を終了する。なお、ワークエリアは以下に示すとおりである。

ワークエリア

BUF	(F55DH, 258)	文字列が格納されるラインバッファ
LINTTB	(FBB2H, 24)	物理的 1 行が、上の行の継続であれば00H

● INLINE (00B1H/MIN) 1 行入力 (プロンプト使用可)

入力：――

出力：PINLIN と同じ

機能：PINLIN ルーチンと同様に、入力した文字列をラインバッファ BUF (F55DH) に格納する。ただし、こちらはルーチン実行開始時のカーソル位置より前の部分は入力されない。両者の違いをリスト 5.6 に示す。

リスト5.6 INLINとPINLINの違い

```

; =====
; List 5.6 INLIN and PINLIN を比較する例
; =====

CHPUT EQU 00A2H
INLIN EQU 00B1H
PINLIN EQU 00AEH
KILBUF EQU 0156H

BUF EQU 0F55EH
ORG 0B000H

----- program start -----
LD HL, PRMPT1
CALL PUTMSG ;put prompt message
CALL INLIN ;use INLIN routine
LD HL, BUF
CALL PUTMSG

LD HL, PRMPT2
CALL PUTMSG ;put prompt message
CALL PINLIN ;use PINLIN routine
LD HL, BUF
CALL PUTMSG

RET ;終了

----- put a string -----
PUTMSG: LD A,(HL)
CP '$'
RET Z
CALL CHPUT
INC HL
JR PUTMSG

----- string data -----
PRMPT1: DB 0DH,0AH,'INLIN:$'
PRMPT2: DB 0DH,0AH,'PINLIN:$'

END

```

3.4 ファンクションキー

MSX には10個のファンクションキーが存在し、ユーザーが自由に定義して使うことができます。ファンクションキーの定義を行うために、ワークエリアが各キーについて16バイトずつ割り当てられています。そのアドレスを以下に示します。

- FNKSTR (F87FH,16) F・1 キーの定義用領域
- +10H (F88FH, 16) F・2 キーの定義用領域
- +20H (F89FH, 16) F・3 キーの定義用領域
- +30H (F8AFH, 16) F・4 キーの定義用領域
- +40H (F8BFH, 16) F・5 キーの定義用領域
- +50H (F8CFH, 16) F・6 キーの定義用領域
- +60H (F8DFH, 16) F・7 キーの定義用領域
- +70H (F8EFH, 16) F・8 キーの定義用領域
- +80H (F8FFH, 16) F・9 キーの定義用領域
- +90H (F90FH, 16) F・10 キーの定義用領域

1つのファンクションキーを押すと、それぞれの領域に定義された文字列が [KEYBUF] に格納されます。文字列の最後は 00H で示され、最大15文字まで定義可能です(16文字を超えた分は、複数のファンクションキー定義領域にまたがって定義される)。ファンクションキーを初期設定の状態に戻すには、次の BIOS ルーチンを利用するとよいでしょう。

● INIFNK (003EH／MAIN) ファンクションキーの初期化

入力：――

出力：――

機能：ファンクションキーの定義を BASIC スタート時の設定に戻す。

3.5 割り込み中の STOP キー

3.3 で説明した 1 文字入力ルーチン CHGET は、どのキーが押されているかの判断をタイマ割り込みの処理ルーチン内で行っています。したがって、たとえばカセットデータの入出力時などタイマ割り込みが禁止されている状態では、どんなキーが押されても読み取ることができません。しかし、次に述べる BIOS ルーチンを使用すると、割り込みが禁止されている場合でも、CTRL キー+STOP キーが押されていることを判定できます。

- BREAKX (00B7H/MAIN) CTRL+STOP の判定

入力：—

出力：CTRL+STOP が押されていれば、CY フラグ=ON

機能：キースキャンを行い、CTRLキーとSTOPキーが同時に押されているか否かを判定する。

もし両キーが押されていれば、CY フラグを“1”にセットして戻る。CTRL+STOP が押されていなければ、CY フラグを“0”にリセットして戻る。このルーチンは、割り込み禁止中でも使用可能。

4 章 プリント・インターフェイス

本章では、MSX のプリント・インターフェイスをマシン語からアクセスする方法について説明します。ここで述べる情報は、特にビットイメージ印字によってグラフィックスを表示するような目的でプリントを使用する場合に必要となってきます。

4.1 プリント・インターフェイスの概要

BIOS と BASIC により、プリントのサポートをしているので説明します。MSX は規格により 8 ビットパラレルの出力ポートで、BUSY と STROBE 信号によるハンドシェーク方式でプリントを動かします。コネクタなども規格に定められています(アンフェノール14ピン、本体側メス)。信号線表を図 5.20 に示します。

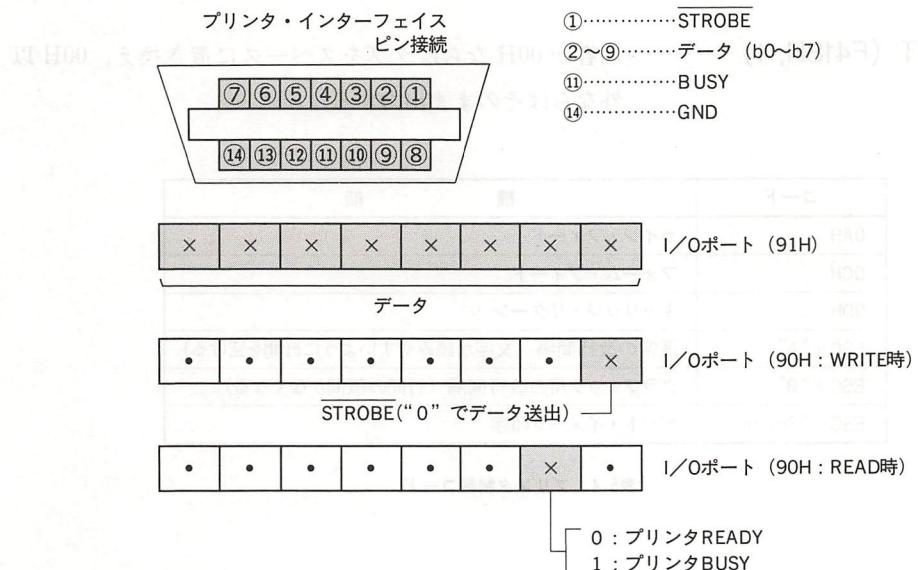


図5.20 プリント・インターフェイス

4.2 MSX仕様のプリンタへの出力

MSXからプリンタへデータを送る場合、送られる側のプリンタがMSX仕様であるか否かによって、その動作は異なります。そこで、まずMSX仕様のプリンタの使い方について説明しましょう。MSX仕様以外のプリンタについては次の節で述べることにします。

MSX仕様のプリンタは、MSXが画面に表示できるすべてのキャラクタが印字でき、キャラクタコードn=01H～1FHに相当するグラフィックキャラクタ（月、火、水……）も、グラフィック・キャラクタ・ヘッダ(01H)の後に40H+nというコードを出力することによって印字可能です。さらに、MSX仕様のプリンタは、少なくとも、表5.4に示す制御コードが使用できます（漢字印字など、これ以外の機能を備えたプリンタの制御に関しては、それぞれのプリンタの説明書を参照）。

MSX仕様のプリンタに改行させるためには、0DHと0AHを続けて出力してください（MSX仕様でないプリンタには、0DHのみで改行する機種もある）。ビット・イメージ印字を行うには、ESC+“Snnnn”（nnnnは10進4桁の数字）というエスケープ・シーケンスの後に、nnnnバイトのデータを出力します。ただし、MSXはタブ機能を持たないプリンタのために、タブコード(09H)を適当な数のスペースコード(20H)に変換してプリンタに送る機能があり、通常は常にこの変換を行っています。09Hという値を含むビット・イメージを正しく表示するためには、次のワークエリアを書き換えてください。

- RAWPRT (F418H, 1) ……内容が00Hならばタブをスペースに置き換え、00H以外ならばそのまま出力する。

コード	機能
0AH	ライン・フィード
0CH	フォーム・フィード
0DH	キャリッジ・リターン
ESC+“A”	通常の改行間隔（文字が読みやすいように行間を空ける）
ESC+“B”	グラフィック用の改行間隔（行間の隙間がなくなる）
ESC+“Snnnn”	ビット・イメージ印字

表5.4 プリンタ制御コード

4.3 MSX仕様以外のプリンタへの出力

MSX仕様ではないプリンタを使用する場合に問題となるのは、“ひらがな”をどう扱うかという点でしょう。普通は、カタカナは印字できても、ひらがなは印字できないというプリンタが一般的です。MSXには、そのようなプリンタのために、ひらがなをカタカナに変換して出力する機能があります。BASICからは、SCREEN命令の第5パラメータで指定しますが、これは次のワークエリアを書き換えることによっても可能です。

- NTMSXP(F417H,1) 内容が00Hならば、ひらがなをカタカナに変換、00H以外ならば、ひらがなをそのまま出力。

4.4 プリンタのアクセス

プリンタへの出力をを行うために、以下に示すBIOSルーチンが用意されています。

- LPOUT (00A5H/MAIN)

入力：Aレジスタ←文字コード

出力：異常終了時CYフラグ=ON

機能：Aレジスタで指定した文字をプリンタに出力する。

- LPTSTT (00A8H/MAIN)

入力：――

出力：Aレジスタ←プリンタの状態

機能：現在のプリンタの状態をチェックする。このルーチンを呼び出して、Aレジスタが255でかつZフラグが0ならばプリンタは使用可能であり、Aレジスタが0でかつZフラグが1ならば使用できない。

● OUTDLP (014DH／MAIN)

入力：Aレジスタ←文字コード

出力：異常終了時 CY フラグ=ON

機能：Aレジスタで指定した文字をプリンタに出力する。LPTOUT ルーチンとの相違点は次のとおりである。

- ・TAB コードは相当する個数のスペースをプリントする。
 - ・MSX 仕様でないプリンタでひらがなを出力する場合、カタカナに変換する。
 - ・異常終了した場合、Device I/O error となって返ってくる。

5章 汎用入出力インターフェイス

1章でも説明したように、MSXの使用しているPSGは、音声出力の機能とは別にポートAとポートBという2つの8ビット入出力ポートを持っています。MSXはこの2つのポートを汎用入出力インターフェイス（いわゆるジョイスティックポート）に接続して、ジョイスティックやパドルなどの装置とのデータ入出力に利用しています（図5.21）。この汎用入出力インターフェイスに接続される各種の装置は、それぞれ専用のBIOSルーチンがROM内に用意されており、手軽にアクセスすることができます。

本章では、各入出力装置の機能とBIOSルーチンによるアクセス法について説明します。

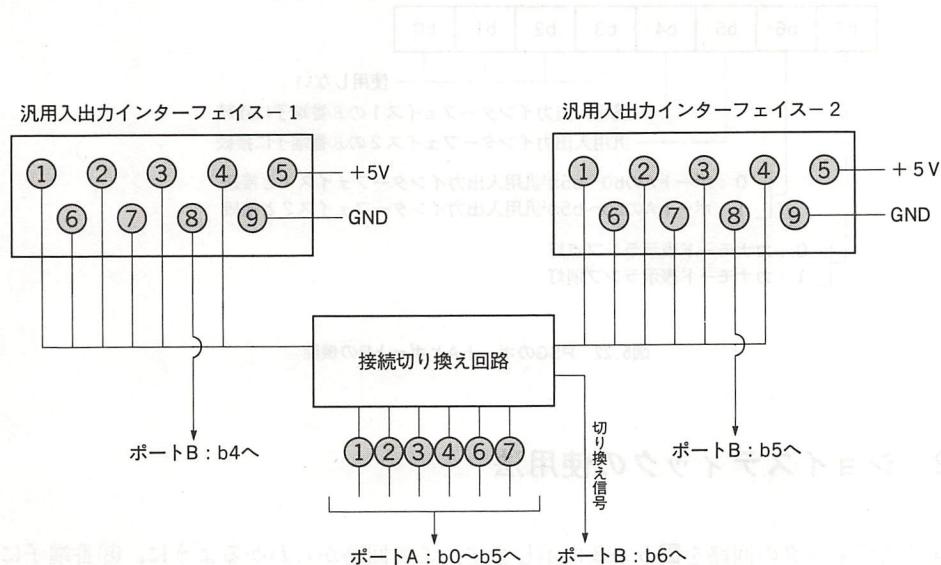


図5.21 汎用入出力インターフェイス

5.1 ポートの機能

PSGの2つの入出力ポートは、図5.22のように利用されています。

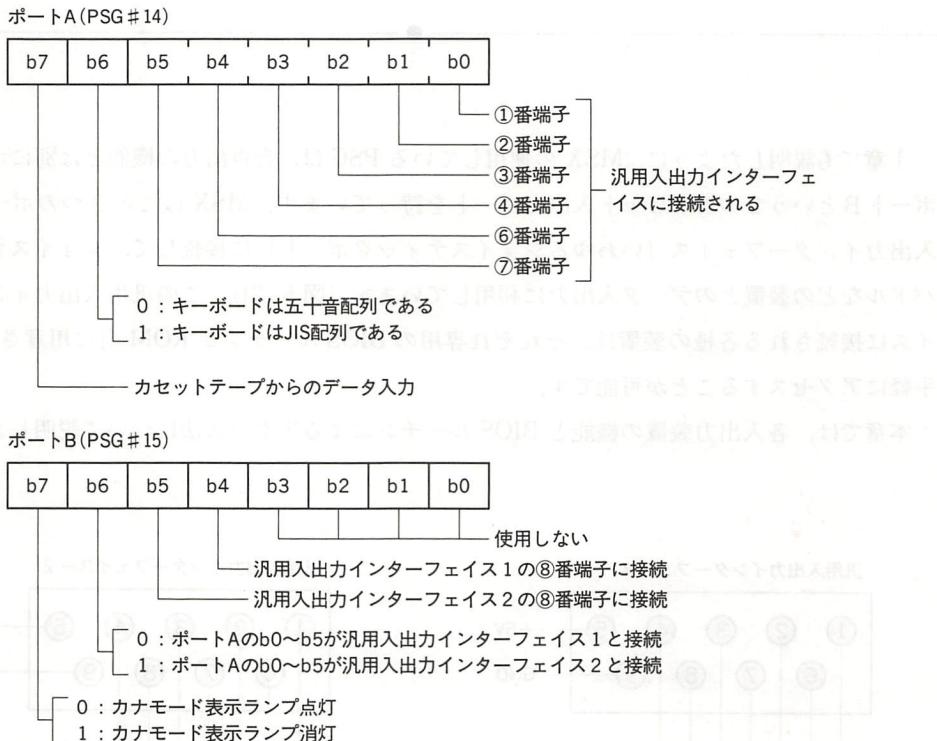


図5.22 PSGのポートAとポートBの機能

5.2 ジョイスティックの使用法

ジョイスティックの回路を図5.23に示します。この回路からわかるように、⑧番端子に“0”を出力し、①～④、⑥～⑦の端子を読み出せば、スティックとトリガボタンの情報は得られますが、プログラムの移植性などを考慮すると、ジョイスティックのアクセスはやはりBIOSを利用して行う方が無難でしょう。

ジョイスティックをアクセスするためには、以下に示すBIOSルーチンが用意されています。なお、これらのルーチンはBASICのSTICK関数やSTRIG関数とほぼ等しい機能を持っているもので、ジョイスティック以外にカーソルキー・スペースバーの状態をリアルタイムで読み取ることも可能です。

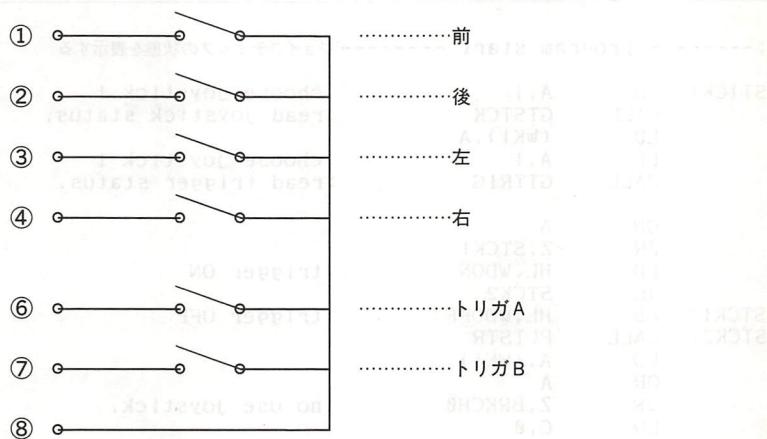


図5.23 ジョイステイック回路図

● GTSTCK (00D5H/MAIN)ジョイステイックの読み出し

入力：A←ジョイステイック番号（0=カーソルキー，1~2=ジョイステイック）

出力：A←ジョイステイックまたはカーソルキーの押された方向

機能：現在のジョイステイックまたはカーソルキーの状態をAレジスタに返す。値はBASICのSTICK関数と同じである。

● GTTRIG (00D8H/MAIN)トリガボタンの読み出し

入力：A←トリガボタン番号（0=スペースバー，1~2=トリガボタン）

出力：A←トリガボタンまたはスペースバーの状態（押す=0FFH，離す=00H）

機能：現在のトリガボタン、またはスペースバーの状態をAレジスタに返す。この値はトリガが押されていれば0FFH、押されていなければ0となる。

リスト5.7 ジョイステイックの使用法

```
=====
; List 5.7 Joystick and trigger access
=====
;
CHPUT EQU 00A2H
BREAKX EQU 00B7H
GTSTCK EQU 00D5H
GTTRIG EQU 00D8H
ORG 0D000H
```

```

;----- program start ----- ジョイスティックの状態を表示する

STICK: LD A,1 ;choose joystick 1
CALL GTSTCK ;read joystick status.
LD (WK1),A
LD A,1 ;choose joystick 1
CALL GTTRIG ;read trigger status.

OR A
JR Z,STCK1
LD HL,WDON ;trigger ON
JR STCK2
STCK1: LD HL,WDOFF ;trigger OFF
CALL PUTSTR
LD A,(WK1)
OR A
JR Z,BRKCH0 ;no use joystick.
LD C,0
STCK3: DEC A
JR Z,STCK4
INC C
JR STCK3

STCK4: SLA C ;C := C*16
SLA C
SLA C
SLA C
LD B,0 ;Accounting Strings data address.
LD HL,WDSTK
ADD HL,BC
CALL PUTSTR

BRKCH0: LD A,0DH ;put carriage return
CALL CHPUT ;code := 0DH

BRKCHK: CALL BREAKX ;break check
RET C
JR STICK

;----- put strings to screen -----

PUTSTR: LD A,(HL)
CP '$'
RET Z
INC HL
CALL CHPUT
JR PUTSTR

;----- string data -----

WDON: DB 'Trigger ON: $'
WDOFF: DB 'Trigger OFF: $'
WDSTK: DB 'UP only ',0DH,0AH,'$'
DB 'Up and Right ',0DH,0AH,'$'
DB 'Right only ',0DH,0AH,'$'
DB 'Right & Down ',0DH,0AH,'$'
DB 'Down only ',0DH,0AH,'$'
DB 'Down and Left ',0DH,0AH,'$'
DB 'Left only ',0DH,0AH,'$'
DB 'Left and Up ',0DH,0AH,'$'

WK1: DW 0

END

```

5.3 パドルの使用法

パドルの回路は図 5.24 のとおりです。⑧端子にパルスを送ると单安定マルチバイブレータは、ある時間幅のパルスを発生します。この幅は可変抵抗の値によって $10\mu s \sim 3 ms$ の範囲で変化しますので、パルス長を測定すれば可変抵抗の値、ひいてはその回転角を知ることができます。

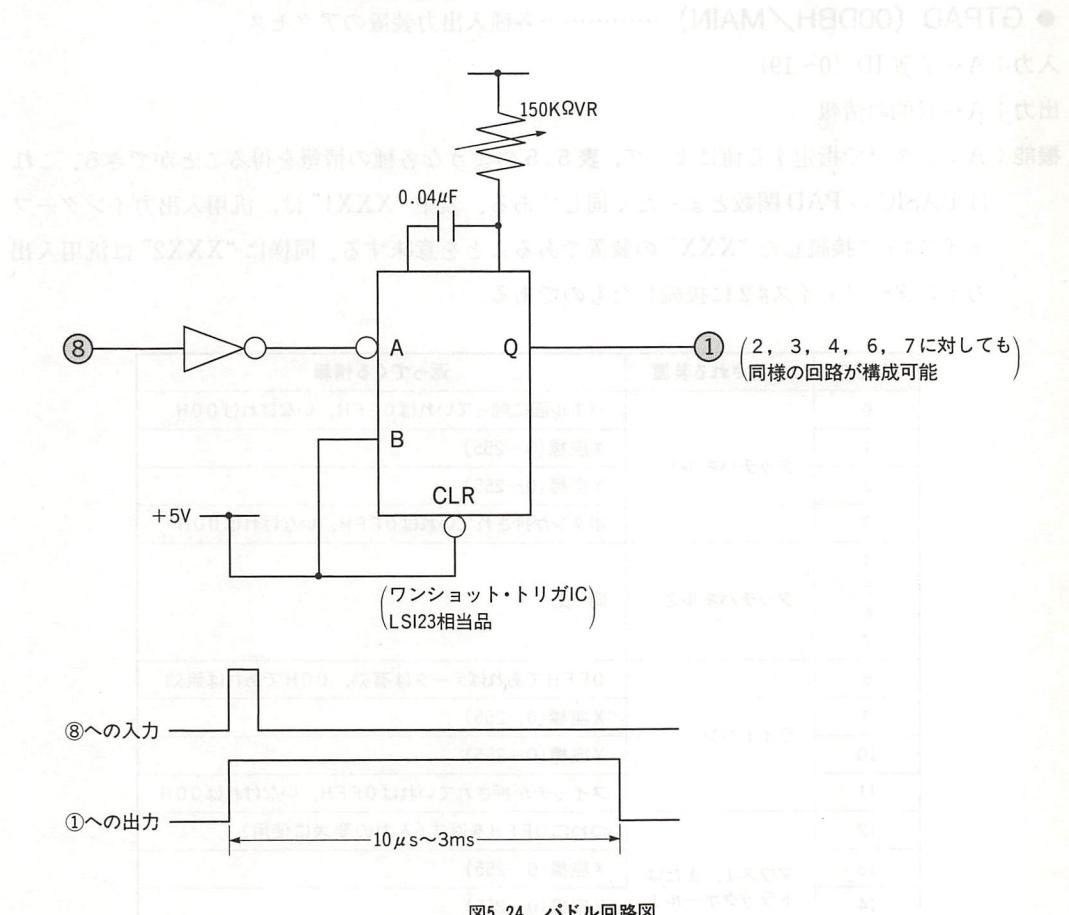


図5.24 パドル回路図

パドルをアクセスするための BIOS ルーチンを次に示します。

● GTPDL (00DEH/MAIN)パドル情報の読み出し

入力：A←パドル番号（1～12）

出力：A←パドルの回転角（0～255）

機能：A レジスタで指定したパドルの状態を調べ、結果をA レジスタに返す。

5.4 タッチパネル, ライトペン, マウス, トラックボールの使用法

タッチパネル, ライトペン, マウス, トラックボール（キャット）はすべて同一の BIOS を用いてアクセスすることが可能です。その使い方を以下に説明します。

● GTPAD (00DBH/MAIN) 各種入出力装置のアクセス

入力 : A ← 装置 ID (0~19)

出力 : A ← 目的の情報

機能 : A レジスタで指定する値によって、表 5.5 のような各種の情報を得ることができます。これは BASIC の PAD 関数とまったく同じである。表中 “XXX1” は、汎用入出力インターフェイス #1 に接続した “XXX” の装置であることを意味する。同様に “XXX2” は汎用入出力インターフェイス #2 に接続したものである。

装置ID	指定される装置	返ってくる情報
0	タッチパネル 1	パネル面に触っていれば OFFH, いなければ 00H
1		X 座標(0~255)
2		Y 座標(0~255)
3		ボタンが押されていれば OFFH, いなければ 00H
4 5 6 7	タッチパネル 2	同 上
8	ライトペン	OFFH であればデータは有効, 00H であれば無効
9		X 座標(0~255)
10		Y 座標(0~255)
11		スイッチが押されていれば OFFH, いなければ 00H
12	マウス 1, または トラックボール 1	つねに OFFH を返す(入力の要求に使用)
13		X 座標(0~255)
14		Y 座標(0~255)
15		つねに 00H を返す(無意味)
16 17 18 19	マウス 2, または トラックボール 2	同 上

注1 : ライトペンの座標(A=9, 10)とスイッチ(A=11)の情報は、A=8として BIOS をコールしたとき同時に読み込まれますが、その結果が OFFH の時にのみ、他の値が有効となります。A=8として BIOS をコールした結果が 00H の場合は、その後に得られる座標値やスイッチの状態は意味を持ちません。

注2 : マウスと トラックボールは自動的に判別します。

注3 : マウスや トラックボールの座標値を求める場合、まず入力要求のコール(A=12 または A=16)を行い、その後に実際に座標値を求めるコールを実行する、という手順をとります。このとき 2 つのコールの時間間隔はできる限り小さくとらなければなりません。入力要求から座標値の入力までに必要以上に時間をかけると、得られたデータは保証されません。

注4 : マウスまたは トラックボールについているトリガボタンの状態を得るためにには、この GTPAD ルーチンではなく、GTTRIG(00D8H/MAIN)を使ってください。

表5.5 GTPADのBIOSで得られる情報

リスト5.8 タッチパネルの使用法

```

=====
; List 5.8 touch pad access
;
=====
;----- program start ----- タッチパッドで指定した位置に "*" を表示する
;
PAD:   XOR    A           ;check sense
       CALL   GTPAD
       OR     A
       JR     NZ, PAD1
       LD     A, 3
       CALL   GTPAD           ;break check
       OR     A
       RET
       JR     PAD
;
PAD1:  LD     A, 1         ;get X axis
       CALL   GTPAD
       SRL   A             ;A := A/8
       SRL   A
       SRL   A
       LD     (WORK), A      ;reserve X axis
       LD     A, 2         ;get Y axis
       CALL   GTPAD
       LD     L, A           ;HL := Y data(0-255)
       LD     H, 0
       LD     C, A
       LD     B, 0
       ADD   HL, BC          ;HL := HL*3 (HL:= 0-767)
       ADD   HL, BC
       LD     A, L
       AND   11100000B
       LD     L, A
       LD     A, (WORK)
       ADD   A, L
       LD     L, A
       LD     BC, 1800H        ;VRAM start address.
       ADD   HL, BC
       LD     A, 2AH
       CALL   WRTVRM          ;write VRAM.
       LD     A, 3
       CALL   GTPAD           ;break check.
       OR     A
       RET
       NZ
       JR     PAD
;
;----- work area -----
;
WORK:  DW     0           ;work
;
END

```

リスト5.9 マウスとトラックボールの使用法

```

=====
; List 5.9 mouse and track ball access
;
=====
; GTPAD EQU 00DBH
; WRTVRM EQU 004DH
; RDVRM EQU 004AH
; BREAKX EQU 00B7H

        ORG 0D000H

;----- program start ----- マウスまたはトラックボールで指定した位置に "*" を表示する -----
TEST:  CALL VADR ;Put old data.
       LD A,(WKOLD)
       CALL WRTVRM
       LD A,12
       CALL GTPAD ;Request mouse/track ball data.
       LD A,13
       CALL GTPAD ;Read X val.
       LD (WKXVAL),A
       LD A,14
       CALL GTPAD ;Read Y val.
       LD (WKYVAL),A

       LD A,(WKX)
       LD B,A
       LD A,(WKXVAL)
       ADD A,B
       CP 245 ;X<0?
       JR C,TEST01
       XOR A ;X=0
       JR TEST02

TEST01: CP 32 ;X>31?
       JR C,TEST02
       LD A,31

TEST02: LD (WKX),A
       LD A,(WKY)
       LD B,A
       LD A,(WKYVAL)
       ADD A,B
       CP 245 ;Y<0?
       JR C,TEST03
       XOR A ;Y=0
       JR TEST04

TEST03: CP 24 ;Y>23
       JR C,TEST04
       LD A,23

TEST04: LD (WKY),A
       CALL VADR
       CALL RDVRM ;Read old data.
       LD (WKOLD),A
       CALL VADR
       LD A,2AH
       CALL WRTVRM ;Put cursor("*").

```

```

CALL    BREAKX      ;Break check.
RET

CALL    WAIT

JR     TEST

VADR: LD     A,(WKY)      ;Make SCREEN Address.
LD     H,A          ; From X,Y axis on WORK ARIA
LD     L,0          ; To HL reg.
SRL    H
RR     L
SRL    H
RR     L
SRL    H
RR     L
LD     A,(WKX)
ADD   A,L          ; Y*32+X
LD     L,A
LD     BC,1800H     ; VRAM start address.
ADD   HL,BC
RET

WAIT: LD     A,0          ;WAIT routine
WLP1: INC   A
LD     B,(IX+0)
LD     B,(IX+0)
LD     B,(IX+0)
JR     NZ,WLP1
RET

----- data -----
WKX:   DB     10          ;X axis
WKY:   DB     10          ;Y axis
WKOLD: DB     0           ;Character code on (X,Y)
WKXVAL: DB    0           ;X variable.
WKYVAL: DB    0           ;Y variable.

END

```

6 章 CLOCKとバッテリバックアップ・メモリ

MSX 2 は CLOCK-IC を用いて時計機能を実現しています。この IC はバッテリバックアップされており、MSX 2 本体の電源を切っても動作を続けるようになっています。またそのために内蔵されている少量の RAM を、MSX 2 では CLOCK 機能のほかに PASSWORD の設定やスタート時のスクリーンモードの自動設定などに利用しています。

6.1 CLOCK-IC の機能

この IC の機能は以下の 3 つに分けられます。

● CLOCK 機能

- ・「年、月、日、曜日、時、分、秒」の設定／読み出しができる。
- ・時刻の表現は、24時間計／12時間計の切り換えができる。
- ・月の更新は、大の月と小の月を考慮する（4 年に 1 度の閏年も判別する）。

● アラーム機能

- ・アラーム時刻を設定しておくと、CLOCK がその値に一致した時点で信号を発生する。
- ・アラーム時刻は「XX 日 XX 時 XX 分」の単位で設定できる。

● バッテリバックアップ・メモリ機能

- ・26 個の 4 ビットメモリを持ち、各種の情報をバッテリバックアップすることができる。
- ・MSX 2 では、このメモリに以下のようなデータを記憶させている。

- | | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1. CRT 表示の上下左右の調整値 | 5. 国別コード |
| 2. SCREEN, WIDTH, COLOR の初期設定値 | 6. パスワード |
| 3. BEEP の音色と音量 | 7. BASIC のプロンプト |
| 4. タイトル画面の色 | 8. タイトル文字 |
- どれかひとつ
が有効

6.2 CLOCK-IC の構造

CLOCK-IC の内部は、図 5.25 に示すように 4 つのブロックに分かれています。各ブロックは 13 個の 4 ビットレジスタで構成され、それぞれのブロック内のレジスタは 0～12 のアドレスで指定します。またブロックの選択や機能コントロール用に 3 個の 4 ビットレジスタを持ち、これを 13～15 のアドレスで指定します。

各ブロックに含まれるレジスタ (#0～#12) と、MODE レジスタ (#13) は書き込みも読み出しあり可能ですが、TEST レジスタ (#14) と RESET レジスタ (#15) は書き込み専用で読み出しありません。

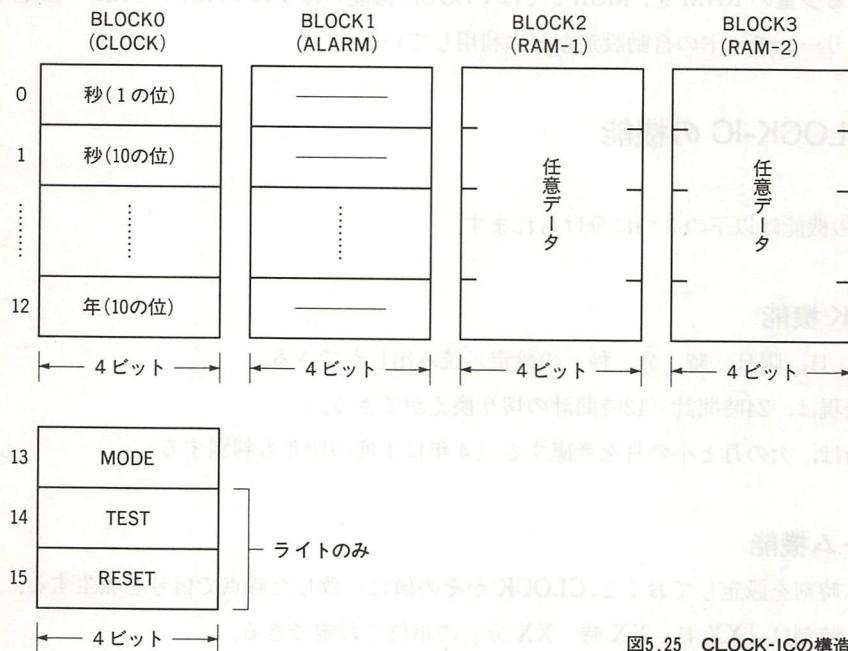


図 5.25 CLOCK-IC の構造

6.3 MODE レジスタの機能

MODE レジスタ (#13) は以下の 3 つの機能を持ちます。

● ブロックの選択

#0～#12 のレジスタの読み書きを行う場合は、まず使用するブロックを選択してから目的のアドレスをアクセスしなければなりません。ブロックの選択には MODE レジスタの下位 2 ビット

を使用します。

なお、#13～#15のレジスタは、どのブロックが選択されている時でもアクセス可能です。

● アラーム出力のON/OFF

MODEレジスタのビット2でアラーム出力のON/OFFを行います。ただしMSX2の標準仕様ではアラームに関するサポートはしていませんから、このビットを書き換えるても一般には何も起こりません。

● CLOCKカウントの停止

MODEレジスタのビット3を“0”にすると、秒以降のカウントを停止し(秒より前の分周段は止まらない)、時計機能をストップさせます。ビット3を“1”にするとカウントを再開します。

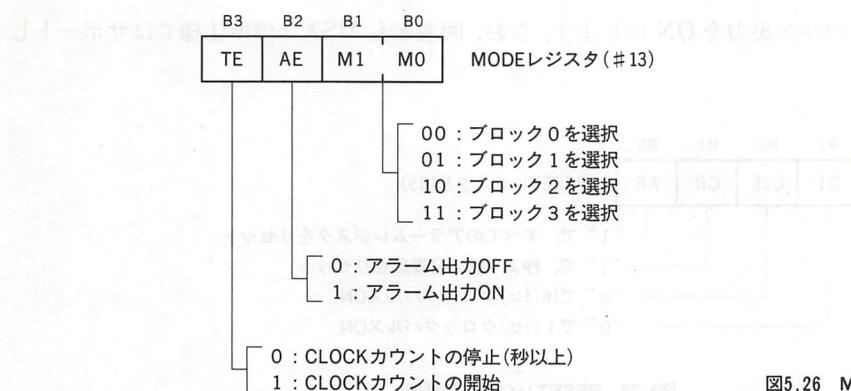


図5.26 MODEレジスタの機能

6.4 TESTレジスタの機能

TESTレジスタ(#14)は上位のカウンタを素早くカウントアップさせ、時刻や日付の繰り上がり動作を確認するために用います。このレジスタの各ビットに“1”を立てる時、それぞれ日、時、分、秒のカウンタに直接 2^{14} (=16384)[Hz]のパルスが入力されます。



図5.27 TESTレジスタの機能

6.5 RESET レジスタの機能

RESET レジスタ (#15) には以下の機能があります。

● アラームのリセット

ビット 0 を “1” にすると、すべてのアラームレジスタを 0 にリセットします。

● 秒合わせ

ビット 1 を “1” にすると、秒以前の分周段をリセットします。この機能は 1 秒の始まりを正確に合わせる場合に用います。

● クロックパルスの ON/OFF

ビット 2 を “0” にすると、16Hz のクロックパルス出力を ON に、ビット 3 を “0” にすると、1Hz のクロックパルス出力を ON にします。なお、両者とも MSX 2 標準仕様ではサポートしていません。

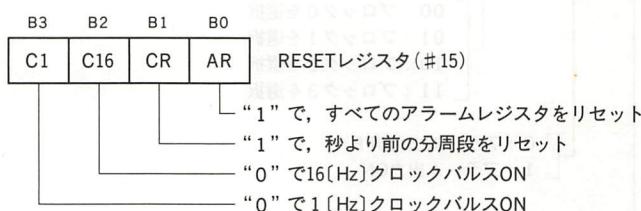


図5.28 RESETレジスタの機能

6.6 クロックおよびアラームの設定

● 日付と時刻の設定

クロックの設定にはブロック 0 を使用します。MODE レジスタでブロック 0 を選択し、目的とするレジスタにデータを書き込めば日付や時刻が設定されます。また、そのレジスタの内容を読み出せば現在の時間を知ることができます。レジスタの意味とそのアドレスについては図 5.29 を参照してください。

アラームの設定はブロック 1 を使用します。ただしアラーム時刻は日、時、分の単位しか指定できません。また、クロックがアラーム時刻に一致しても一般には何も起こりません。

クロックの中で、年は 2 桁 (レジスタ #11～#12) で表されます。MSX-BASIC では、この値にオフセット 80 を加えて西暦年数の下 2 桁を表すことにしています。たとえばレジスタ #11=0, レ

ジスタ #12=0, と設定した後 BASIC の GET DATE 命令を用いて日付を読み出すと, "80/XX/XX" のように、年数は 80 となっているはずです。

曜日は 0~6 で表されます。これは単に日付とともに更新される 7 進カウンタにすぎず、実際の曜日と 0~6 の数値の対応は決まっていません。

		プロック 0 : CLOCK				プロック 1 : ALARM				
		B3	B2	B1	B0		B3	B2	B1	B0
0	秒(1の位)	×	×	×	×	—	•	•	•	•
1	秒(10の位)	•	×	×	×	—	•	•	•	•
2	分(1の位)	×	×	×	×	分(1の位)	×	×	×	×
3	分(10の位)	•	×	×	×	分(10の位)	•	×	×	×
4	時(1の位)	×	×	×	×	時(1の位)	×	×	×	×
5	時(10の位)	•	•	×	×	時(10の位)	•	•	×	×
6	曜日	•	×	×	×	曜日	•	×	×	×
7	日(1の位)	×	×	×	×	日(1の位)	×	×	×	×
8	日(10の位)	•	•	×	×	日(10の位)	•	•	×	×
9	月(1の位)	×	×	×	×	—	•	•	•	•
10	月(10の位)	•	•	•	×	12時 OR 24時	•	•	•	×
11	年(1の位)	×	×	×	×	閏年カウンタ	•	•	×	×
12	年(10の位)	×	×	×	×	—	•	•	•	•

図中に“•”で示したビットは常に 0 であり、変更できない

図5.29 CLOCKとALARMの設定

● 12時間計／24時間計の選択

時刻の表示は、昼の 1 時を「13時」と表す24時間計と、「午後 1 時」と表す12時間計のどちらかを選ぶことができます。この選択にはプロック 1 のレジスタ #10 を使用します。図 5.30 に示したように、B0 が “0” の時12時間計、“1” の時24時間計となります。

12時間計を選んだ場合は、図 5.31 のように10時間カウンタ（プロック 0, #5）の B1 ビットによって午前／午後を表現します。

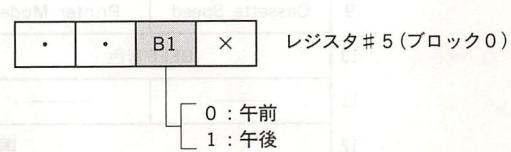
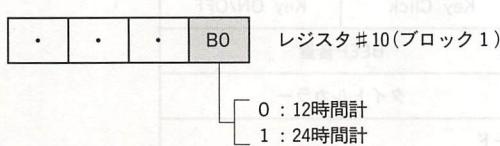


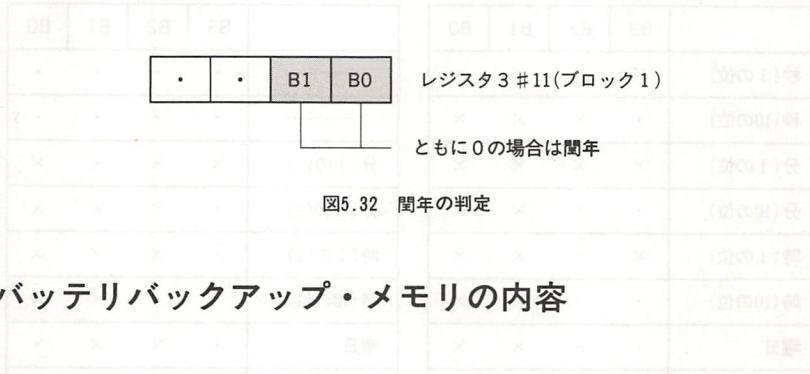
図5.30 12時間計／24時間計の選択

図5.31 12時間計の午前／午後フラグ

● 閏年カウンタ

ブロック1のレジスタ #11は、年のカウントとともに更新される4進カウンタです。このレジスタの下位2ビットが00Hの場合は閏年とみなされ、2月を29日までカウントします。

MSX-BASICで“SET DATE”命令を実行すると、与えた年を4で割った余りがこのレジスタに設定されます。たとえば“80/XX/XX”という日付を指定すると閏年カウンタは0になりますが、これは西暦1980年が閏年であるという事実に一致するわけです。



6.7 バッテリバックアップ・メモリの内容

CLOCK-ICのブロック2とブロック3は、それぞれ4ビット×13のバッテリバックアップされたメモリブロックとして用いられ、MSX 2ではこの部分を以下のような用途に使用しています。

● ブロック2の内容

	B3	B2	B1	B0
0			ID	
1			Adjust X(-8~+7)	
2			Adjust Y(-8~+7)	
3	—	—	Interlace Mode	Screen Mode
4			WIDTHの値(Lo)	
5			WIDTHの値(Hi)	
6			前景色	
7			背景色	
8			周辺色	
9	Cassette Speed	Printer Mode	Key Click	Key ON/OFF
10		BEEP音色		BEEP音量
11	—	—		タイトルカラー
12			国別コード	

図5.33 ブロック2の内容

● ブロック3の内容

ブロック3は、ID値(レジスタ#0)の内容により、3通りの機能を持っています。図5.34にその機能を示します。

ID=0：初期画面にタイトル(6文字以内)を表示する

0	0
1	Lo1 タイトルの1番目の文字
2	Hi1
:	:
11	Lo6 タイトルの6番目の文字
12	Hi6

6文字

ID=1：パスワードの設定

0	1
1	Usage ID=1
2	Usage ID=2
3	Usage ID=3
4	パスワード
5	パスワード パスワードデータを4ビット×
6	パスワード 4に圧縮して格納する
7	パスワード
8	Keyカートリッジ存在フラグ
9	Keyカートリッジの値
10	Keyカートリッジの値
11	Keyカートリッジの値
12	Keyカートリッジの値

ID=2：BASICのプロンプト設定

0	2
1	Lo1 プロンプトの1番目の文字
2	Hi1
:	:
11	Lo6 プロンプトの6番目の文字
12	Hi6

6文字

図5.34 ブロック3の内容

6.8 CLOCK-IC のアクセス

クロックおよびバッテリバックアップ・メモリをアクセスするために、下記のような BIOS ルーチンが用意されています。このルーチンは SUB-ROM に存在するため、一般にはインターフェースロットコールを用いて呼び出します。

● REDCLK (01F5H / SUB) CLOCK-IC のデータの読み出し

入力：C←CLOCK-IC のアドレス（図5.35 参照）

出力：A←読み出したデータ（下位 4 ビットのみ有効）

機能：C レジスタで指定したアドレスの CLOCK-IC レジスタを読み出し、A レジスタに格納する。アドレス指定には図 5.35 のようにブロック選択情報も含めているため、MODE レジスタを設定し、次に目的のレジスタを読み出す、という手間をかける必要はない。

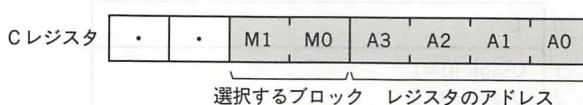


図5.35 CLOCK-ICのレジスタ指定法

● WRTCLK (01F9H / SUB) CLOCK-IC のデータの書き込み

入力：C←CLOCK-IC のアドレス（図 5.35 参照）

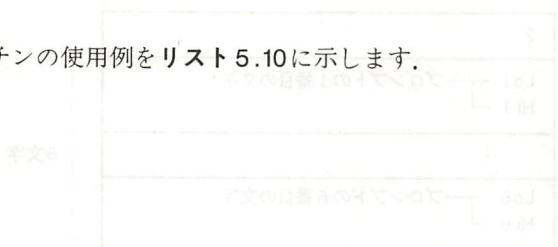
A←書き込むデータ（下位 4 ビットのみ有効）

出力：――

機能：C レジスタで指定したアドレスの CLOCK-IC レジスタに、A レジスタの内容を書き込む。

アドレスは REDCLK と同様に図 5.35 のようなフォーマットで指定する。

この BIOS ルーチンの使用例をリスト 5.10 に示します。



リスト5.10 プロンプトの設定

```

=====
; List 5.10 set prompt message
;
; WRTCLK EQU      01F9H
; EXTROM EQU      015FH
;
ORG      0B000H
;
----- program start -----      BASICのプロンプトメッセージを設定する
;
START: LD      C,00110000B      ;address data
LD      A,2                  ;ID := prompt mode
CALL    WRTRAM              ;write to back-up RAM
;
LD      B,6                  ;loop counter
LD      HL,STRING            ;prompt data
L01:   LD      A,(HL)           ;read string data
AND    0FH                  ;A := hi 4 bit
INC     C                   ;address inc
CALL    WRTRAM              ;write data to buck-up RAM
LD      A,(HL)
RRCA
RRCA
RRCA
RRCA
AND    0FH
INC     C                   ;address inc
CALL    WRTRAM              ;write low 4 bit
INC     HL
DJNZ    L01
RET
;
----- write data to buck-up RAM -----
;
WRTRAM: PUSH    HL
PUSH    BC
LD      IX,WRTCLK
CALL    EXTROM              ;use interslot call
POP     BC
POP     HL
RET
;
----- string data -----
;
STRING: DB      'Ready?'
;
END
=====
```


7

章 スロットとカートリッジ

MSXで使用されているCPU(Z80)は、通常64Kバイト(0000H～FFFFH)のアドレス空間しかアクセスできません。しかし、MSXは1M(メガ)バイトに相当する空間を自由にアクセスすることができます。これはMSXが“スロット”的概念を採用し、同一のアドレスに複数のメモリあるいはデバイスを割り当てる機能を備えているからです。

本章では、このスロットの使用法、およびスロットを介してMSXにカートリッジソフトや新しいデバイスを接続するために必要となる情報を紹介していきます。

7.1 スロット

スロットは大量のアドレス空間を確保するためのインターフェイスの役目をするもので、MSXのアドレスバスに接続されるメモリやデバイスは、すべてスロットを介して実装されています。それは、本体内にあるBASICのROMであろうとMSX-DOSモード時のRAMであろうと例外ではありません。カートリッジソフトを差す場所も、1つのスロットです。ここでは、スロットに接続されたソフトウェアやデバイスの取り扱い方を説明します。

7.1.1 基本スロットと拡張スロット

スロットには基本スロットと拡張スロットの2種類があります。“基本スロット”とは、図5.36に示すようにCPUのアドレスバスに直結するスロットを指し、MSXの仕様では最大4個持つことができます。基本スロットは、スロット拡張ボックスを接続することにより(本体内で拡張していることもある)、最高4個のスロットに拡張でき、この時のスロットを“拡張スロット”と呼びます。4個の基本スロットをそれぞれ4つの拡張スロットに拡張した場合、スロットの数は最大の16個となり、16スロット×64Kバイト=1Mバイトのアドレス空間をアクセスすることができます。

なお、拡張スロットにさらに拡張ボックスを差し込んだ場合はシステム自体が起動できなくなりますので、このようなことは行わないでください(MSX標準のカートリッジ用スロットはかならず基本スロットだが、各機種のオプションハードウェア専用コネクタは、拡張スロットに接続されていることがある)。

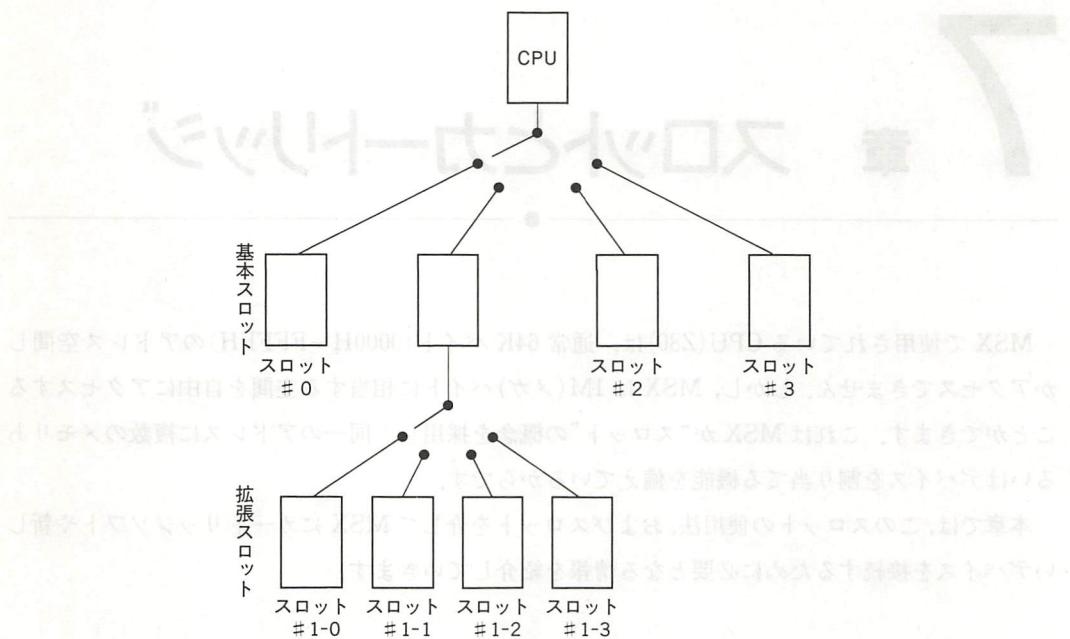


図5.36 基本スロットと拡張スロット

各スロットは 0000H～FFFFH までの 64K バイトのアドレス空間を持ちますが、MSX ではそれを 16K バイトずつ 4 つに分け“ページ”として管理しています。CPU はページごとに任意のスロットを選択してアクセスでき、図 5.37 のように、いくつかのスロットから必要な部分だけを選んで組み合わせることも可能です。ただし、ある番号のページを異なる番号のページに割り当てることはできません(つまり、各スロットのページ n は、CPU から見てもページ n である)。

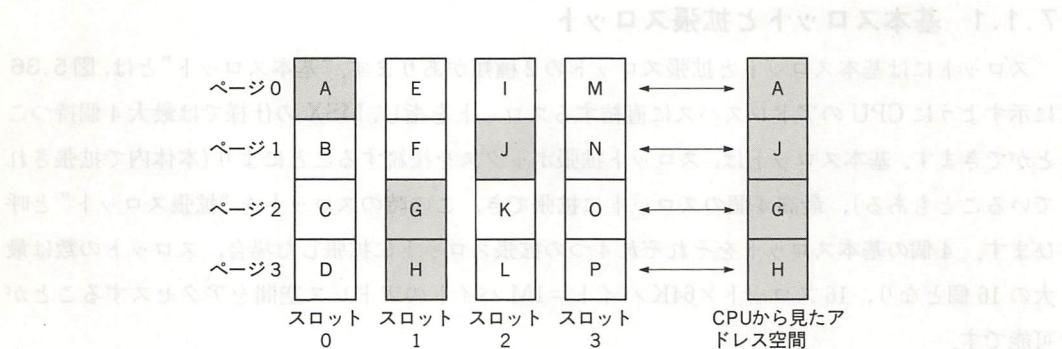


図5.37 ページ選択の例

7.1.2 スリットの選択

スロットの選択方法は、基本スロットと拡張スロットでは異なります。基本スロットの場合はA8H番地のI/Oポートによって行い(図5.38)、拡張スロットの場合は実装された拡張カートリッジの“拡張スロット選択レジスタ(FFFFH)”によって行います(図5.39)。しかし、それらを直接変更することはたいへん危険ですから、スロットの切り換えは不要意に行わないでください。特に、プログラムが自分自身のいるページのスロットを切り換えた場合、動作は保証されません。他のスロットにあるプログラムを呼び出したい場合は、次節で説明するインターフェースコールを使用してください。

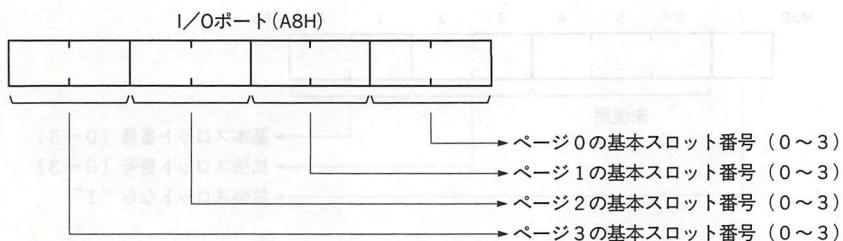
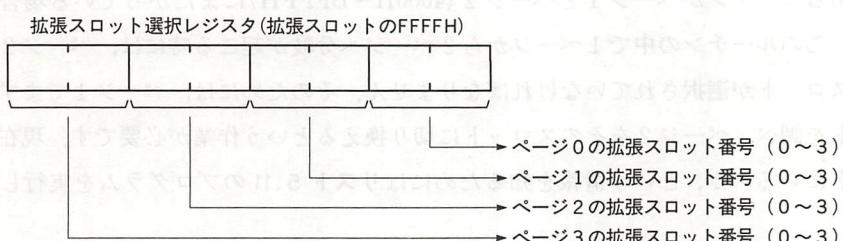


図5.38 基本スロットの選択



注) このスロットが基本スロットか、拡張スロットかが判るように、拡張スロットの場合は値を書き込んだ後に読み出すと、書き込んだ値の反転した値となって読み出されます。

このレジスタは同一基本スロット内であれば、どの拡張スロットでも同じ値です。

図5.39 拡張スロットの選択

どこのスロットに MAIN-ROM や RAM が実装されているか、またカートリッジ用のスロットが何番のスロットであるかは機種によって異なります。もし手持ちの MSX がどのようにスロットを使用しているかを知りたい人はマニュアルなどで調べてください。しかし、MSX はどのスロットに何があろうと正常な動作ができるように仕様が決められていますから、その仕様に準じている限り、通常はスロットの使用状況を気にする必要はありません。

しかし、場合によっては特定のソフトウェアが何番のスロット上に置かれているのかを知る必要が生じることもあります。たとえば、従来は BASIC の MAIN-ROM は基本スロット#0、または基本スロット#0 を拡張した拡張スロット#0-0 に置くという仕様でしたが、MSX-VIDEO と BASIC ver 2.0 の ROM を増設して MSX 2 の機能を持たせる場合には、MAIN-

ROM がスロット #0 やスロット #0-0 以外の上に置かれることになります。また、MSX 2 の SUB-ROM が入っているスロットは機種によってまちまちで、このような場合、下記のワークエリアを参照することにより、BASIC インタープリタの ROM が置かれているスロットを知ることが可能です(スロット情報は図5.40のフォーマットで得られる)。DOS から BIOS を呼び出す時も、この方法を使用して MAIN-ROM のスロットを調べてください。

- EXPTBL(FCC1H, 1) MAIN-ROM のスロット
- EXBRSA(FAF8H, 1) SUB-ROM のスロット (MSX 1 では 0)

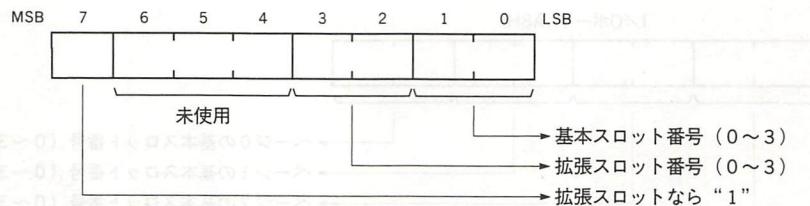


図5.40 スロットのフォーマット

また、あるルーチンがページ 1 とページ 2 (4000H～BFFFH) にまたがっている場合を考えてください。このルーチンの中で 1 ページから 2 ページへ分岐が起こる時には、ページ 2 にページ 1 と同じスロットが選択されていなければなりません。そのためには、ページ 1 でまず自分のいるスロットを調べ、ページ 2 をそのスロットに切り換えるという作業が必要です。現在自分がどのスロットにいるのか、という情報を知るためにリスト 5.11 のプログラムを実行してください。

リスト 5.11 自分のいるスロットを知るためのプログラム

```
=====
; List 5.11 to know where you are
=====
; Suppose your program cartridge is 32K bytes
; long (4000H..0BFFFH). You set the ID at 4000H
; and 4001H and the execution start address within
; page 1 (4000H..7FFFFH). MSX passes control
; to this address so the part which resides in
; page 2 is not yet enabled at this point. You
; have to know where you are (in what primary
; slot, in what secondary slot) and enable the
; part at page 2. Below is the sample program
; to do this.
;
ENASLT EQU 0024H ;enable slot
RSLREG EQU 0138H ;read primary slot select register
EXPTBL EQU 0FCC1H ;slot is expanded or not
-----
program start -----
```

```

ENAP2:
    CALL    RSLREG      ;read primary slot #
    RRCA
    RRCA
    AND    00000011B   ;move it to bit 0.1 of [Acc]
    LD     C,A
    LD     B,0
    LD     HL,EXPTBL  ;see if this slot is expanded or not
    ADD    HL,BC
    LD     C,A      ;save primary slot #
    LD     A,(HL)   ;get the slot is expanded or not
    AND    80H
    OR     C          ;set MSB if so
    LD     C,A      ;save it to [C]
    INC    HL        ;Point to SLTTBL entry
    INC    HL
    INC    HL
    INC    HL
    LD     A,(HL)   ;Get what is currently output
    AND    00001100B   ;to expansion slot register
    OR     C
    LD     H,80H     ;Finally form slot address
    JP     ENASLT    ;enable page 2
;
END

```

7.2 インタースロットコール(スロット間コール)

前述のように、MSX ではプログラムが異なったスロットに分かれているため、現在選択されているスロット上にないプログラムが必要になることもあります。これは主に以下のような場合が考えられます。

- (1) MSX-DOS レベルから、MAIN-ROM にある BIOS を呼び出す。
- (2) BASIC レベルから、SUB-ROM にある BIOS を呼び出す(MSX 2 のみ)。
- (3) カートリッジソフトから、MAIN-ROM あるいは SUB-ROM の BIOS を呼び出す。

これらの作業を行う際スロット切り換えが簡単かつ安全に行えるように、インターフロットコールという一群の BIOS ルーチンが存在し、どのスロットに存在するルーチンでも呼び出せるようになっています。本節では、このインターフロットコールの使用法を説明しましょう。

7.2.1 インタースロットコールの動作

たとえば MSX-DOS から MAIN-ROM 上の BIOS を呼び出す場合、スロットの状態の遷移は以下に示すとおりです。

- (1)初めは MSX-DOS モードなので 64K のアドレス空間すべてに RAM が選択されており、このままでは BASIC-ROM をアクセスできない(図 5.41-イ).
- (2)ROM の BIOS を呼び出すためにページ 0 を BASIC の MAIN-ROM に切り換える。アクセス可能な状態にする。そして BIOS を呼び出す(図 5.41-ロ).
- (3)BIOS の処理が終わったら再び元の状態に戻し、初めに呼ばれたアドレスにリターンする。

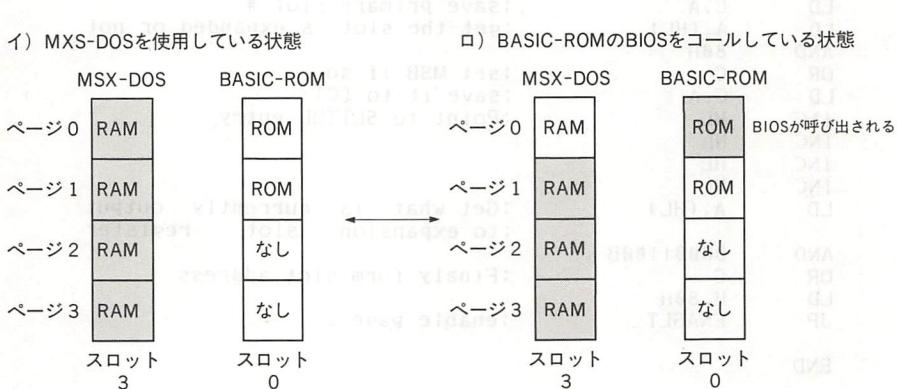


図5.41 インタースロットコールのされ方

この時、MSX-DOS 側のプログラムが、ページ 0 以外に存在するならば話は簡単なのですが、呼び出す側のプログラムが呼び出される側の BIOS と同じページ 0 に存在している時は、そう単純にはいきません。呼び出す方のプログラムがページ 0 を切り換えたとたんに自分自身がいなくなってしまう、ということのないように配慮しなければならないのです。インターフェーススロットコールでは、いったんページ 3 へ分岐してから実際のスロット切り換えを行うという方法で、この問題を解決しています。

7.2.2 インタースロットコールの使用法

インターフェーススロットコールは、以下に述べるいくつかの方法で行うことができます。これらは BIOS として MAIN-ROM 内に含まれているのですが、その中のいくつかは MSX-DOS の環境下においてもまったく同一のものが用意され、MSX-DOS 使用時のインターフェーススロットコールを可能としています。

(1) BIOS のインターフェーススロットコール・ルーチン

● RDSL(T000CH/MAIN) 指定スロットの指定アドレスから値を読む

入力：Aレジスタ←スロット指定

HL レジスタ←読み出すアドレス

出力：A レジスタ←読み出した値

使用：AF, BC, DE

機能：指定したスロットの、指定したアドレスの内容を読み出し、A レジスタに格納する。スロットの指定は A レジスタによって図 5.40 の形式で行う。この時、目的のスロットが基本スロットならば、上位 6 ビットはすべて “0” に設定し、下位 2 ビットでスロット #0～#3 を決める。もし拡張スロットを指定するならば、同様にビット 0 とビット 1 で基本スロットを指定し、その基本スロットに接続されるどの拡張スロットかということをビット 2 とビット 3 で指定、さらにビット 7 を “1” とする。

● WRSLT(0014H／MAIN) 指定スロットの指定アドレスに値を書き込む

入力：A レジスタ←スロット指定(図 5.40 と同じフォーマット)

HL レジスタ←書き込むアドレス

E レジスタ←書き込む値

出力：――

使用：AF, BC, D

機能：A レジスタで指定したスロット(指定の形式は図 5.40 と同じ)の、HL レジスタで指定したアドレスに、E レジスタの値を書き込む。

● CALSLT(001CH／MAIN) 指定したスロットの指定アドレスをコールする

入力：IY レジスタの上位 8 ビット←スロット(図 5.40 と同じフォーマット)

IX レジスタ←コールするアドレス

出力：呼び出し先プログラムの実行結果により異なる

使用：呼び出し先プログラムの実行結果により異なる

機能：IY レジスタの上位 8 ビットで指定したスロット(指定の形式は図 5.40 と同じ)の、IX レジスタで指定するアドレスに存在するルーチンをコールする。

● ENASLT(0024H／MAIN) スロットを切り換える

入力：A レジスタ←スロット(図 5.40 と同じフォーマット)

HL レジスタ←上位 2 ビットでスロット切り換えを行うページを指定する

出力：――

使用：すべて

機能：HL レジスタの上位 2 ビットで指定したページを、A レジスタで指定したスロットに切り換える。

● CALLF(0030H／MAIN) 指定スロットの指定アドレスをコールする

入力：インライン・パラメータ形式でスロットとアドレスを指定する

出力：呼び出し先のプログラムの実行結果により異なる

使用：呼び出し先のプログラムの実行結果により異なる

機能：指定したスロットの、指定したアドレスをコールするが、前述の CALSLT と異なり、スロットおよびアドレスの指定は次に示すように、インライン・パラメータ形式で行う。すなわち、この CALLF を呼び出す命令の直後にスロットを指定する値 1 バイト (RDSLT と同じフォーマット) を置き、その次にアドレスを指定する数値 2 バイトを置くという形でパラメータを渡すのである。“CALL 0030H” の代わりに “RST 30H” という RST(リストート)命令を使ってもよい。その場合、4 バイトでインターフースロットコールが実現可能である。

RST	30H	; interslot call
DB	0000000B	; select slot#0
DW	006CH	; call address = 006CH

図5.42 インタースロットコールの実行例

● RSLREG(0138H／MAIN) 基本スロット選択レジスタの読み出し

入力：――

出力：A レジスタ←読み込んだ値

使用：――

機能：基本スロット選択レジスタの内容を読み出し、A レジスタに入れる。

● WSLREG(013BH／MAIN) 基本スロット選択レジスタへの書き込み

入力：A レジスタ←書き込む値

出力：――

使用：――

機能：基本スロット選択レジスタに A レジスタの値を書き込み、スロットを選択する。

● SUBROM(015CH／MAIN) SUB-ROM の指定したアドレスをコールする

入力：IX レジスタ←コールするアドレス、PUSH IX (352ページ参照)

出力：呼び出し先のプログラムの実行結果により異なる

使用：裏レジスタと IX, IY レジスタは保存される

機能：特に BASIC の SUB-ROM を呼び出すためのルーチンである。SUB-ROM の存在するスロットは自動的に調べられる。普通は、次の EXTROM を使う。

● **EXTROM(015FH／MAIN)** SUB-ROM の指定したアドレスをコールする

入力：IX レジスタ←コールするアドレス

出力：呼び出し先のプログラムの実行結果により異なる

使用：裏レジスタと IY レジスタは保存される

機能：BASIC の SUB-ROM を呼び出すためのルーチンである。上記の SUBROM との EXTROM とは、IX レジスタの値をプッシュするか否かという点だけが異なる。

(2) MSX-DOS のインターフェースロットコール

MSX-DOS では、以下に示す 5 種類のインターフェースロットコールが用意され、MSX-DOS ジャンペクタにそのエントリーアドレスが定義してあります。これらは BIOS 内の同名のルーチンとまったく同じものですから、機能や使用法に関しては、上記の BIOS をご覧ください。なお、MSX-DOS から SUB-ROM 内のルーチンを呼び出す場合、これらのルーチンを使用してはいけません。

- ・ RDSLT(000CH) 指定スロットの指定アドレスから値を読み出す
- ・ WRSLT(0014H) 指定スロットの指定アドレスに値を書き込む
- ・ CALSLT(001CH) 指定スロットの指定アドレスを呼び出す
- ・ ENASLT(0024H) 指定スロットを使用可能な状態にする
- ・ CALLF(0030H) 指定スロットの指定アドレスを呼び出す

リスト 5.12 MSX-DOS から BIOS を呼び出す

```
;=====
; List 5.12 How to use BIOS from MSX-DOS.
;=====

CALS LT EQU 001CH ;Inter slot call
EXB RSA EQU 0FAF8H ;Slot address of BIOS (main) ROM
EXPT BL EQU 0FCC1H ;Slot address of extendex ROM

LD IY, (EXPTBL-1) ;Load slot address of the BIOS ROM
;in high byte of IY
LD IX, address of the BIOS jump table
CALL CALSLT
```

```

----- Sample program to set text mode -----
INITXT EQU      006CH
LINL40  EQU      0F3AEH
;
TOTEXT: LD       B, 40
        LD       A,(EXBRSA)    ;slot address of SUB-ROM
        OR       A            ;0 if MSX1
        JR       Z,T040
        LD       B, 80
T040:   LD       (LINL40),B   ;set width into work area
        LD       IX,INITXT
        LD       IY,(EXPTBL-1)
        CALL    CALSLT         ;get expanded slot status to IYH
        EI
        RET

END

```

7.2.3 スロットの状態を知るためのワークエリア

スロットに関するワークエリアには、以下のものがあります。

- EXBRSA(FAF8H,1) SUB-ROM のスロット

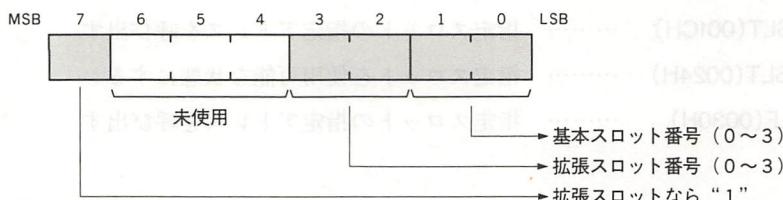


図5.43 SUB-ROMのスロット

- EXPTBL(FCC1H,4) 基本スロットの拡張の有無

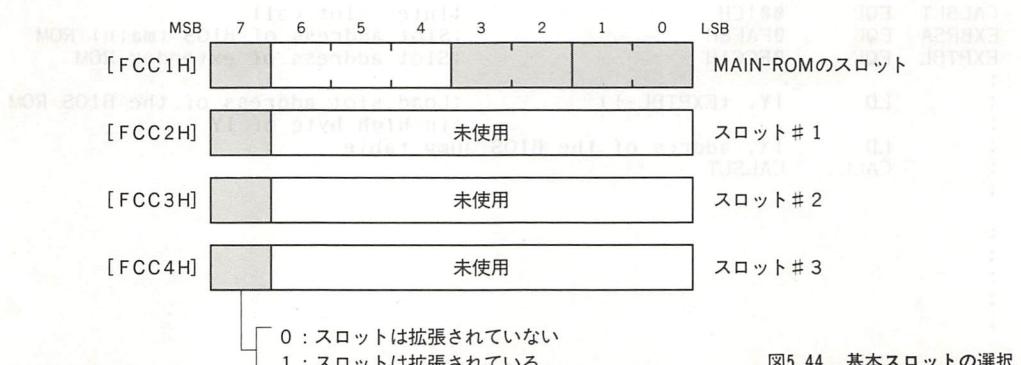


図5.44 基本スロットの選択

● SLTTBL(FCC5H, 4) 拡張スロット選択レジスタ値の保存エリア

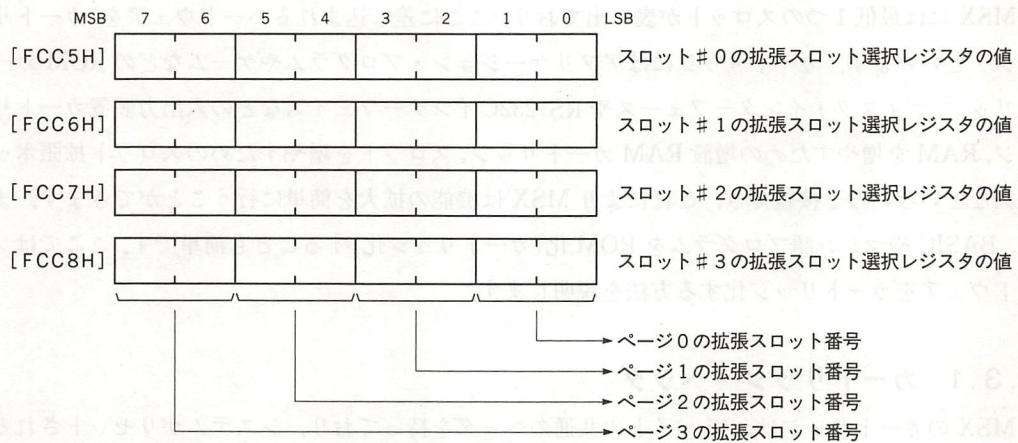


図5.45 拡張スロットの選択

● SLTATTR(FCC9H, 64) 各スロット／ページにおけるアプリケーションの有無

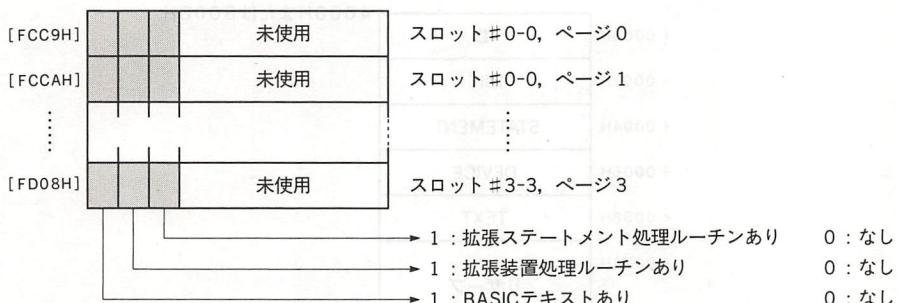


図5.46 アプリケーションの有無

● SLTWRK(FD09H, 128) アプリケーション用ワークエリア

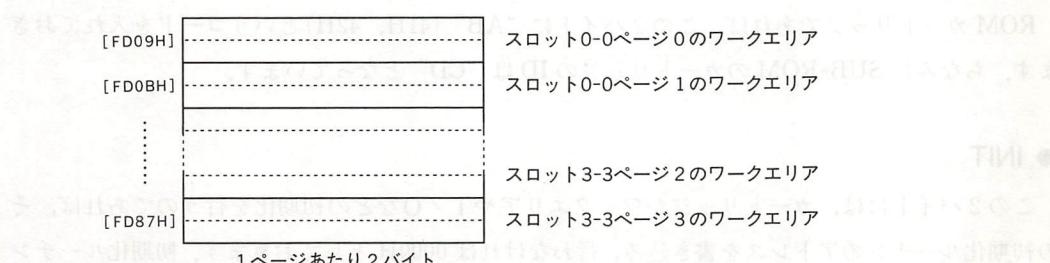


図5.47 アプリケーション用ワークエリア

7.3 カートリッジソフトの作成法

MSXには最低1つのスロットが表に出ており、ここに差し込まれるハードウェアを“カートリッジ”といいます。カートリッジにはアプリケーション・プログラムやゲームなどのROMカートリッジ、ディスク・インターフェースやRS-232Cインターフェイスなどの入出力装置カートリッジ、RAMを増やすための増設RAMカートリッジ、スロットを増やすためのスロット拡張ボックスなどいろいろと接続でき、これによりMSXは機能の拡大を簡単に行うことができます。また、BASICやマシン語プログラムをROM化(カートリッジ化)することも簡単です。ここではソフトウェアをカートリッジ化する方法を説明します。

7.3.1 カートリッジ・ヘッダ

MSXのカートリッジは、16バイトの共通のヘッダを持っており、システムがリセットされると、このヘッダに記述された情報によりカートリッジの初期設定が行われます。BASICやマシン語のプログラムをROM化したカートリッジの場合は、このヘッダに書き込む情報によってオートスタートさせることも可能です。カートリッジ・ヘッダの構成を図5.48に示します。

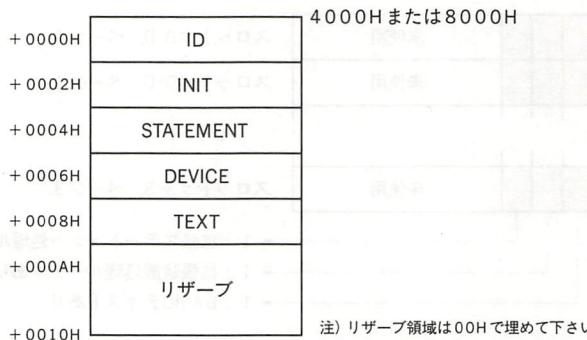


図5.48 プログラムカートリッジのヘッダ

● ID

ROMカートリッジであれば、この2バイトに“AB”(41H, 42H)というコードを入れておきます。ちなみにSUB-ROMのカートリッジのIDは“CD”となっています。

● INIT

この2バイトには、カートリッジがワークエリアやI/Oなどの初期化を行うのであれば、その初期化ルーチンのアドレスを書き込み、行わなければ0000Hとしておきます。初期化ルーチンの中でワークエリアの確保など必要な処理を行ったら、“RET”で終了させてください。この時SP

以外のレジスタは内容を破壊してもかまいません。なお、ゲームのようにカートリッジ内でループしていればよいマシン語プログラムの場合は、ここからそのまま目的のプログラムを実行することができます。

● STATEMENT

この2バイトには、カートリッジがCALL文の拡張を行うのであれば、ステートメント拡張ルーチンのアドレスを書き込み、行わなければ0000Hとしておきます。CALL文の拡張を行う場合、ステートメント拡張ルーチンは4000H～7FFFHになければいけません。CALL命令は以下の書式で記述されます。

CALL<拡張ステートメント名> [(<引数> [<引数>…])]

拡張ステートメント名は15文字以下でなければいけません。CALLの省略形として“_”(アンダースコア)も使用できます。

BASICインタープリタはCALL文を見つけると、ワークエリアのPROCNM(FD89H, 16)に拡張ステートメント名を入れ、ヘッダのSTATEMENTの内容が0以外のカートリッジにスロット番号の小さい方から順に制御を渡してきます。この時HLレジスタは拡張ステートメント名の次のテキストアドレスを指しています(図5.49 a)

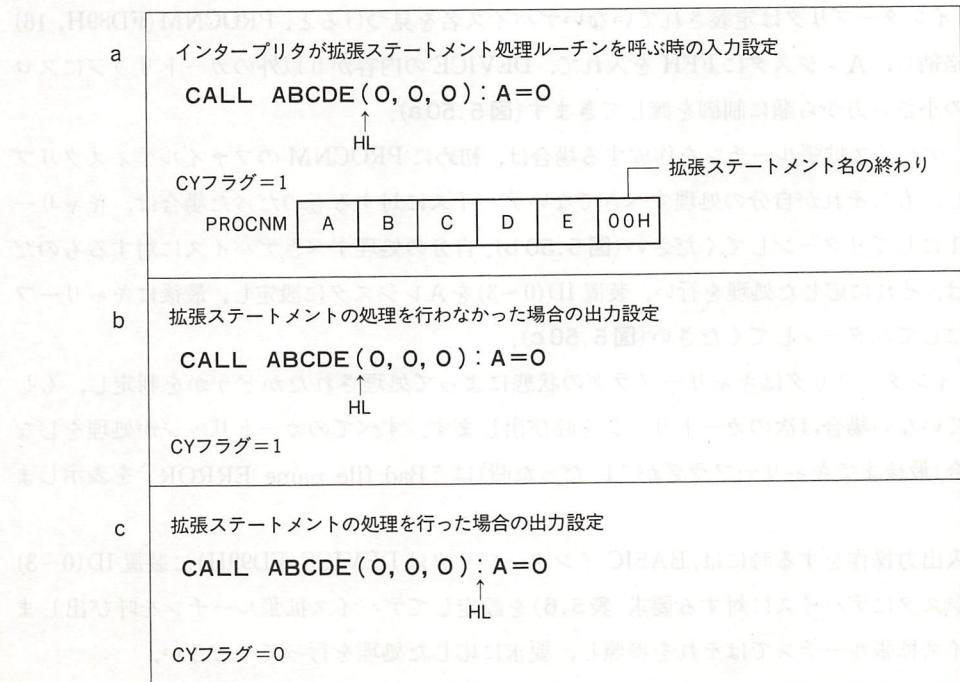


図5.49 拡張ステートメント処理ルーチンの入出力

そこで、ステートメント拡張ルーチンを作成する場合は、まず PROCNM に書かれた拡張ステートメント名を識別し、もしそれが自分の処理すべきものではなかった場合は、HL レジスタの変更はせずに、キャリーフラグを“1”にしてリターンしてください(図 5.49 b)。拡張ステートメント名が自分の処理すべきものであった場合は、それに応じた処理をし、HL レジスタ(テキストポインタ)を自分が処理したステートメントの次(普通は 00H または 3AH が入っているところ)に更新し、最後にキャリーフラグを“0”にしてリターンしてください(図 5.49 c)。

BASIC インタープリタはキャリーフラグの状態によって、CALL 文が処理されたかどうかを判定し、処理されていない場合は次のカートリッジを呼び出します。すべてのカートリッジが処理をしなかった場合(最後までキャリーフラグが“1”だった時)は“SYNTAX ERROR”を表示します。ステートメントの引数評価には第 2 部 4.4 節の“ステートメント拡張のための内部ルーチン”を利用すると便利です。

● DEVICE

この 2 バイトには、カートリッジがデバイスの拡張(入出力装置の拡張)を行うのであれば、デバイス拡張ルーチンのアドレスを書き込み、行わなければ 0000H としておきます。デバイスの拡張を行う場合、デバイス拡張ルーチンは 4000H～7FFFH になければいけません。デバイスは 1 つのカートリッジについて、4 つまで持つことができます。また、拡張デバイス名は 15 文字以下でなければいけません。

BASIC インタープリタは定義されていないデバイス名を見つけると、PROCNM(FD89H, 16) にそれを格納し、A レジスタに FFH を入れて、DEVICE の内容が 0 以外のカートリッジにスロット番号の小さい方から順に制御を渡してきます(図 5.50 a)。

そこで、デバイス拡張ルーチンを作成する場合は、初めに PROCNM のファイルディスクリプタを識別し、もしそれが自分の処理すべきでないデバイスに対するものだった場合は、キャリーフラグを 1 にしてリターンしてください(図 5.50 b)。自分の処理すべきデバイスに対するものだった場合は、それに応じた処理を行い、装置 ID(0～3)を A レジスタに設定し、最後にキャリーフラグを 0 にしてリターンしてください(図 5.50 c)。

BASIC インタープリタはキャリーフラグの状態によって処理されたかどうかを判定し、もし処理されていない場合は次のカートリッジを呼び出します。すべてのカートリッジが処理をしなかった場合(最後までキャリーフラグが“1”だった時)は“Bad file name ERROR”を表示します。

実際の入出力操作をする時には、BASIC インタープリタは DEVICE(FD99H) に装置 ID(0～3)を、A レジスタにデバイスに対する要求(表 5.6)を設定してデバイス拡張ルーチンを呼び出します。デバイス拡張ルーチンではそれを参照し、要求に応じた処理を行ってください。

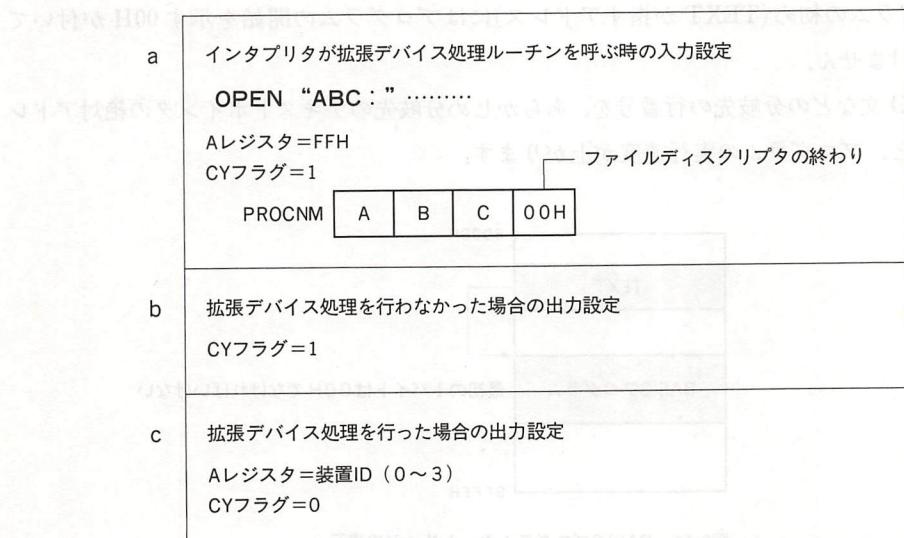


図5.50 デバイス拡張ルーチンへの入出力

Aレジスタ	要 求
0	OPEN
2	CLOSE
4	ランダムアクセス
6	シーケンシャル出力
8	シーケンシャル入力
10	LOC関数
12	LOF関数
14	EOF関数
16	FPOS関数
18	バックアップキャラクタ

表5.6 デバイスに対する要求

● TEXT

この2バイトには、カートリッジ内のBASICプログラムをオートスタート(リセット時に実行)実行するのであれば、BASICプログラムのテキストポインタを入れておき、行わなければ0000Hとしておきます。プログラムのサイズは8000H～BFFFHの16K以下でなければいけません。

BASICインターパリタはイニシャライズ(INIT)を終え、システムを起動した後、ヘッダのTEXTの内容をスロット番号の小さい順に調べます。そして、そこが0000H以外であった場合、そのアドレスをBASICテキストポインタとしてそこから実行を始めるようになっています(図5.51)。この時のBASICプログラムは、中間コード形式で格納されている必要があり、また

BASICプログラムの初め(TEXTが指すアドレス)にはプログラムの開始を示す00Hが付いていなければいけません。

なお、GOTO文などの分岐先の行番号を、あらかじめ分岐先のテキストポインタの絶対アドレスにしておくと、プログラムの実行速度が上がります。



図5.51 BASICプログラムカートリッジの実行

● BASIC プログラムの ROM 化の方法

1 BASIC のテキスト格納先頭アドレスを 8021H に変える。

POKE &HF676,&H21 : POKE &HF677,&H80 : POKE &H8020,0 : NEW

(注) 必ず 1 行にまとめて実行する。

2 目的の BASIC プログラムをロードする。

LOAD "PROGRAM"

3 ID を作成する。

AD=&H8000

FOR I=0 TO 31

POKE AD+I, 0

】 ID エリアのクリア

NEXT I

POKE &H8000,ASC("A")

POKE &H8001,ASC("B")

POKE &H8008,&H20

POKE &H8009,&H80

4 8000H～BFFFH をそのまま ROM に焼き込む。

7.3.2 カートリッジ用ソフトの作成に関する諸注意

● カートリッジで使用するワークエリアの確保

他のカートリッジに入っているプログラムといっしょに実行する必要がないプログラム(ゲームカートリッジのようなスタンドアロンのソフトウェア)では、BIOS の使用するワークエリア(F380H)よりアドレスの小さい部分は自由に使用することができます。

しかし、BASIC インタープリタの機能を利用して実行されるプログラムでは、同じ領域をワークエリアとして使用するわけにはいきません。その対策としては以下の 3 つの方法があります。

- (1) カートリッジ自体に RAM をのせてしまう(最も安全確実な方法)。
- (2) 必要なワークエリアが 1 バイトあるいは 2 バイトならば SLTWRK(FD09H～)の自分に対応する 2 バイトをワークとして使用する。
- (3) 必要なワークエリアが 3 バイト以上ならば BASIC で使用する RAM から確保する。具体的には、まず BOTTOM(FC48H)の内容を SLTWRK(FD09H～)の対応するエリアに書き写し、BOTTOM の値を必要なワークエリア分増やし、そこをワークエリアとして確保する(図 5.52)。

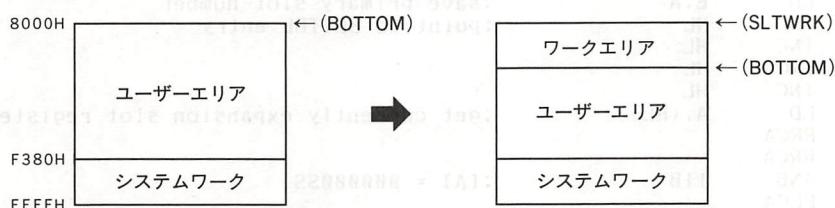


図5.52 ワークエリアの確保

(2)と(3)については以下のリストを参考にしてください。

リスト 5.13 ワークエリア確保の実行例

```
=====
; List 5.13 subroutines to support slot
; for ROM in 1 page
=====

RSLREG EQU    0138H
EXPTBL EQU    0FCC1H
BOTTOM  EQU    0FC48H
HIMEM   EQU    0FC4AH
SLTWRK  EQU    0FD09H

-----
;      GTSL1  Get slot number of designated page
;      Entry  None
;      Return A      Slot address as follows
;      Modify Flags
```

```

FxxxSSPP
|   |
|   +--- primary slot # (0-3)
|   +--- secondary slot # (0-3)
|       00 if not expanded
+--- 1 if secondary slot # specified

This value can later be used as an input
parameter for the RDSLTL, WRSLT, CALSLT, ENASLT
and 'RST 30H'

PUBLIC GTSL1@  

GTSL1:;  

    PUSH HL      ;Save registers  

    PUSH DE  

    CALL RSLREG  ;read primary slot #  

    RRCA  

    RRCA  

    AND 11B      ;[A]=000000PP  

    LD E,A  

    LD D,0      ;[DE]=000000PP  

    LD HL,EXPTBL  

    ADD HL,DE    ;[HL]=EXPTBL+000000PP  

    LD E,A      ;[E]=000000PP  

    LD A,(HL)    ;[A]=(EXPTBL+000000PP)  

    AND 80H      ;Use only MSB  

    JR Z,GTSL1NOEXP  

    OR E        ;[A]=F00000PP  

    LD E,A      ;save primary slot number  

    INC HL      ;point to SLTTBL entry  

    INC HL  

    INC HL  

    LD A,(HL)    ;get currently expansion slot register  

    RRCA  

    RRCA  

    AND 11B      ;[A] = 000000SS  

    RLCA  

    RLCA  

    OR E        ;[A] = 0000SS00  

    ;[A] = F000SSPP  

    ;  

    GTSL1END:  

    POP DE  

    POP HL  

    RET  

GTSL1NOEXP:  

    LD A,E      ;[A] = 000000PP  

    JR GTSL1END  

    ;  

    ASLWI Get address of slot work  

    Entry None  

    Return HL      address of slot work  

    Modify None  

    PUBLIC ASLWI@  

ASLWI@:  

    PUSH DE  

    PUSH AF  

    CALL GTSL1@    ;[A] = F000SSPP, SS = 00 if not expanded  

    AND 0000111B  ;[A] = 0000SSPP  

    LD L,A      ;[L] = 0000SSPP  

    RLCA  

    RLCA

```

```

RLCA
RLCA ;[A] = SSPP0000
AND 00110000B ;[A] = 00PP0000
OR  L ;[A] = 00PPSSPP
AND 00111100B ;[A] = 00PPSS00
OR  01B ;[A] = 00PPSSBB

; Now, we have the sequence number for this
; cartridge as follows.

00PPSSBB
!!!!!
!!!!+--- higher 2 bits of memory address (1)
!!+--- secondary slot # (0..3)
++--- primary slot # (0..3)

RLCA      ;*= 2
LD E,A
LD D,0      ;[DE] = 0PPSSBB0
LD HL,SLTWRK
ADD HL,DE
POP AF
POP DE
RET

-----
; RSLW1 Read slot work
; Entry None
; Return HL Content of slot work
; Modify None

PUBLIC RSLW1@

RSLW1@:
PUSH DE
CALL ASLW1@      ;[HL] = address of slot work
LD E,(HL)
INC HL
LD D,(HL)      ;[DE] = (slot work)
EX DE,HL      ;[HL] = (slot work)
POP DE
RET

-----
; WSLW1 Write slot work
; Entry HL Data to write
; Return None
; Modify None

PUBLIC WSLW1@

WSLW1@:
PUSH DE
EX DE,HL      ;[DE] = data to write
CALL ASLW1@      ;[HL] = address of slot work
LD (HL),E
INC HL
LD (HL),D
EX DE,HL      ;[HL] = data to write
POP DE
RET

-----
; How to allocate work area for cartridges
; If the work area is greater than 2 bytes, make the SLTWRK

```

```

: point to the system variable BOTTOM (0FC48H), then update
: it by the amount of memory required. BOTTOM is set up by
: the initialization code to point to the bottom of equipped
: RAM.
: Ex. if the program is at 4000H..7FFFH.

: WORKB allocate work area from BOTTOM
: (my slot work) <- (old BOTTOM)
Entry HL required memory size
Return HL start address of my work area = old BOTTOM
: 0 if can not allocate
Modify None

PUBLIC WORKB@  

WORKB@:  

PUSH DE
PUSH BC
PUSH AF
;
EX DE,HL :[DE] = Size
LD HL,(BOTTOM) :Get current RAM bottom
CALL WSLW1@ :Save BOTTOM to slot work
PUSH HL :Save old BOTTOM
ADD HL,DE :[HL] = (BOTTOM) + SIZE
LD A,H :Beyond 0FFFFH?
CP 0E0H
JR NC,NOROOM :Yes, cannot allocate this much
LD (BOTTOM),HL :Update (BOTTOM)
POP HL :[HL] = old BOTTOM
WORKBEND:  

POP AF
POP BC
POP DE
RET
;
: BOTTOM became greater than 0FFFFH, there is
: no RAM left to be allocated.
NOROOM:  

LD HL,0
CALL WSLW1@ :Clear slot work
JR WORKBEND :Return 0 in [HL]
END

```

● フック

MSX-BASIC が使用するワークエリアの FD9AH～FFC9H には“フック”という BASIC の機能拡張のための領域があります。1つのフックは5バイトあり、そこには普通“RET”が書かれています。

MSX-BASIC はある処理(ワークエリアのフックの説明で示すような処理)を行うと、そこから一度このフックをコールします。“RET”的場合はすぐ戻ってしまいますが、その5バイトをあらかじめイニシャライズ(INIT)ルーチンによりカートリッジ内のプログラムにインターフォードコールするよう書き換えておけば、BASIC の機能を拡張することができるわけです(図5.53参照)。

この例として、割り込み処理用の H.KEYI というフックをカートリッジが利用する場合のプログラムをリスト 5.14 に示します

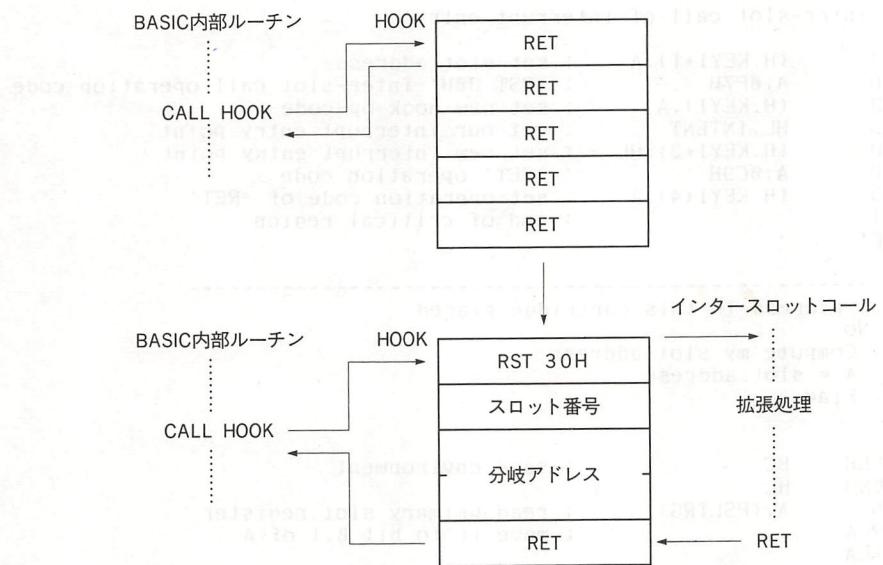


図5.53 フックの設定

リスト 5.14 フックの使用

```
=====
; List 5.14 Sample program to use HOOK
=====

;
; Start-up initialize entry
; This procedure will be called when system initializing.
;

H.KEYI EQU 0FD9AH ; interrupt hook
EXPTBL EQU 0FCC1H ; slots expanded or not
PSLTRG EQU 0A8H ; I/O port address of primary slot register
EXT MYINT ; my interrupt handler

INIT:
;     <<< Please insert other initialize routine here, if you need. >>>

; Set interrupt entry
        DI ; start of critical region

; Get old interrupt entry inter-slot call hook
        LD DE,OLDINT ; set address of old interrupt hook saved area
        LD HL,H.KEYI ; set address of interrupt entry hook
        LD BC,5 ; length of hook is 5 bytes
        LDIR ; transfer
```

```

; What slot address is this cartridge placed
CALL GTMSLT           ; get my slot address

; Set new inter-slot call of interrupt entry
LD (H.KEYI+1),A        ; set slot address
LD A,0F7H               ; `RST 30H' inter-slot call operation code
LD (H.KEYI),A           ; set new hook op-code
LD HL,INTENT           ; get our interrupt entry point
LD (H.KEYI+2),HL         ; set new interrupt entry point
LD A,0C9H               ; `RET' operation code
LD (H.KEYI+4),A         ; set operation code of `RET'
EI                      ; end of critical region
RET

;-----
; What slot address is this cartridge placed
; Entry: No
; Action: Compute my slot address
; Return: A = slot address
; Modify: Flag

GTMSLT:
PUSH BC                ; save environment
PUSH HL
IN A,(PSLTRG)          ; read primary slot register
RRCA                   ; move it to bit 0,1 of A
RRCA
AND 00000011B          ; get bit 1,0
LD C,A                 ; set primary slot No.
LD B,0
LD HL,EXPTBL           ; see is this slot is expanded or not
ADD HL,BC
OR (HL)                ; set MSB if so
LD C,A
INC HL                 ; point to SLTTBL entry
INC HL
INC HL
INC HL
LD A,(HL)              ; get what is currently output to expansion
                         ; slot register
AND 00001100B          ; get bit 3,2
OR C                   ; finely form slot address
POP HL                 ; restore environment
POP BC
RET                   ; return to main

----- Interrupt entry -----
INTENT:
CALL MYINT              ; call interrupt handler
JP OLDINT               ; go old interrupt handler

----- HOOK save area -----
OLDINT: DS 5
END

```

● スタックポインタの初期化

ディスク内蔵の MSX の場合、スロットの位置によってはカートリッジよりもディスク・インターフェイス ROM の方が先に初期化動作を行い、ワークエリア確保のためスタックポインタを下位アドレス方向に下げることがあります。この時、ディスクを使わないソフトウェアはカートリッジに制御が渡ってきてからもう一度スタックポインタを設定し直さないと、スタック領域がなくなり暴走などのトラブルを生じる可能性があります。プログラムの初めにはスタックポインタのイニシャライズを忘れずに行ってください。

● 拡張スロットでの動作チェック

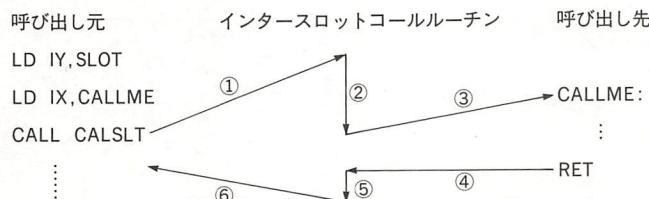
一般の市販ソフトウェアが拡張スロットに差し込まれた場合や RAM が拡張スロットにある場合に、アプリケーションプログラムが動作しないという問題があります。MSX 2 の多くの機種は本体内部で拡張スロットを使用しているので、拡張スロットでの動作不良は致命的です。市販されるソフトウェアは、それが拡張スロットに入れられている場合と RAM が拡張スロットにある場合について、かならず動作チェックを行ってください。

特に FFFFH 番地には拡張スロットレジスタが置かれますので、そこを RAM のつもりで参照してはいけません。たとえば、プログラム中で “LD SP, 0” を行って FFFFH 番地にスタックを設定すると、そのプログラムは拡張スロットを用いた機種では暴走します。

● CALSLT 使用時の注意

CALSLT および CALLF でインタースロットコールを行うと、IX, IY, および裏レジスタの内容は破壊されます。また、このルーチンから帰ってくる時、MSX 1 では割り込みが禁止されていますが、MSX 2 では呼び出す前の状態に戻ります。

CALSLT または CALLF を使ってインタースロットコールを行うと、目的のプログラムが呼ばれる時(図の③)と呼び出し元に戻る時(図の⑥)に必ず割り込みが禁止されています。



MSX2 では、インターフェースロットコールルーチンの前後で割り込みの状態が保存されます。つまり、図の③の時に①と同じ状態になり、⑥の時に④と同じ状態になります。呼び出されたプログラムが “EI” や “DI” を行う場合は、注意して下さい。

A PPENDIX

A PPENDIX

A.1 BIOS一覧

ここではユーザーが利用可能な 126 の BIOS エントリを紹介します。

BIOS には MAIN-ROM と SUB-ROM 内のルーチンの 2 種類あり、コーリング・シーケンスはそれ各自異なります（これについては後述）。ここでエントリは、次のように表記します。

ラベル名 (アドレス) *n

機能	機能解説および注意
入力	呼び出し時に必要なパラメータ
出力	リターンされるパラメータ
レジスタ	内容が破壊されるレジスタ

n の値は次のような意味を持ちます。

- *1 …… MSX1 と同じもの。
- *2 …… スクリーン・モード 5 ~ 8 では内部で SUB-ROM を呼び出す。
- *3 …… つねに SUB-ROM を呼び出す。
- *4 …… スクリーン・モード 4 ~ 8 の変更はあるが、SUB-ROM は呼び出さない。

また、何もついていないものは、MSX2 用に新たに追加されたルーチンです。

MAIN-ROM

MAIN-ROM 内のルーチンを呼び出す場合は、通常のサブルーチンコールとして CALL 命令または RST 命令で行います。

● RST 関係

以下の RST のうち、RST 00H ~ RST 28H は BASIC インタープリタが使います。RST 30H はスロット間コール（インターフェースロット・コール）に、RST 38H はハードウェア割り込みに使われます。

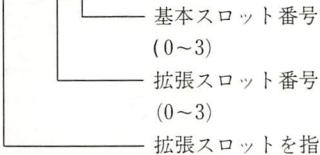
CHKRAM (0000H) *1

機能	RAM をチェックし、システム用の RAM スロットをセット
入力	なし
出力	なし
レジスタ	すべて

SYNCHR (0008H) *1

機能	[HL] の 1 文字が指定した文字かどうかチェック。違っていたら SYNTAX ERROR を発生し、同じなら CHRGTR (0010H) へ行く
入力	[HL] にチェックする文字、比較する文字をこのルーチンを呼び出す RST 命令の次にセット（インライン・パラメータ）

例	LD	HL, MOJI
	RST	08H
	DB	'A'
		:
		:
		:
MOJI :	DB	'B'

出力	HL が 1 進み, A には [HL] が入る。チェックした文字が数字であれば CY フラグをセット, ステートメントの終わり (00H または 3AH) ならば Z フラグをセット	出力	タ出力 PTRFIL(F864H)が 0 以外なら PTRFIL で示されるファイルへ出力
レジスタ	AF, HL	レジスタ	なし
RDSLTL (000CH) *1			
機能	A の値に対応するスロットを選択し, そのスロットのメモリを 1 バイト読む。このルーチンを呼ぶと割り込みを禁止し, 実行を終えても解除しない	機能	他のスロットのルーチンを呼び出す (インターフェースロット・コール)。
入力	A にスロット番号 [F000EEPP]  └── 基本スロット番号 (0~3) └── 拡張スロット番号 (0~3) └── 拡張スロットを指定するとき "1"	入力	IY レジスタの上位 8 ビットでスロットを指定 (RDSLTL と同じ). IX にコールする番地
出力	HL に読み込むメモリの番地	出力	呼び出すルーチンによる
レジスタ	A に読み込んだメモリの値	レジスタ	呼び出すルーチンによる
AF, BC, DE			
CHRGRTR (0010H) *1			
機能	BASIC テキストから文字 (またはトクン) を取り出す	機能	HL と DE の内容を比較
入力	[HL] に読み込む文字	入力	HL, DE
出力	HL が 1 進み, A には [HL] が入る。文字が数字であれば CY フラグをセット, ステートメントの終わりならば Z フラグをセット	出力	HL=DE ならば Z フラグを, HL<DE なら CY フラグをセット
レジスタ	AF, HL	レジスタ	AF
WRSLT (0014H) *1			
機能	A の値に対応するスロットを選択し, そのスロットのメモリに値を 1 バイト書き込む。このルーチンを呼ぶと割り込みを禁止し, 実行を終えても解除しない	機能	A の値に対応するスロットを選択し, 以降そのスロットを使用可能にする。このルーチンを呼ぶと割り込みを禁止し, 実行を終えても解除しない
入力	A でスロットを指定 (RDSLTL と同じ). HL に書き込む番地, E にその値	入力	A でスロットを指定 (RDSLTL と同じ)
出力	なし	出力	なし
レジスタ	AF, BC, D	レジスタ	すべて
OUTDO (0018H) *2			
機能	現在使っているデバイスに値を出力	機能	DAC (デシマル・アキュムレータ) の型を返す
入力	A に出力する値	入力	VALTYP(F663H) には DAC の型が入っている
	PRTFLG (F416H) が 0 以外ならプリント	出力	DAC の型によって S, Z, P/V, CY フラグが以下のように変化する
		整数型	・ 単精度実数型
		C = 1	C = 1
		S = 1 *	S = 0
		Z = 0	Z = 0
		P/V = 1	P/V = 0 *

・文字列型	・倍精度実数型
C = 1	C = 0 *
S = 0	S = 0
Z = 1 *	Z = 0
P/V = 1	P/V = 1
各型は、*マークの付いたフラグを調べ ればチェックできる	
レジスタ AF	
CALLF (0030H) *1	
機能	他のスロットのルーチンを呼び出す。呼 び出し方は次のとおり
RST	30H
DB	n ; nはスロット番号 (RDSLト同じ)
DW	nn ; nnは呼び出すアド レス
入力	上記の方法による
出力	呼び出すルーチンによる
レジスタ	AF, その他は呼び出すルーチンによる
KEYINT (0038H) *1	
機能	タイマ割り込みの処理ルーチンを実行
入力	なし
出力	なし
レジスタ	なし
● I/O 初期化	
INITIO (003BH) *1	
機能	デバイスを初期化
入力	なし
出力	なし
レジスタ	すべて
INIFNK (003EH) *1	
機能	ファンクションキーの内容を初期化
入力	なし
出力	なし
レジスタ	すべて
● VDP アクセス用	
DISSCR (0041H) *1	
機能	画面表示の禁止
入力	なし
出力	なし
レジスタ	AF, BC

ENASCR (0044H) *1	
機能	画面の表示
入力	なし
出力	なし
レジスタ	AF, BC
WRTVDP (0047H) *2	
機能	VDPのレジスタにデータを書き込む
入力	Cにレジスタ番号, Bにデータ。レジ タ番号は0~23および32~46
出力	なし
レジスタ	AF, BC
RDVRM (004AH) *1	
機能	VRAMの内容を読む。ただし、これは TMS9918に対するものでVRAMのア ドレスは下位14ビットのみ有効。全ビッ トを使う場合はNRDVRMをコール
入力	HLに読み出すVRAMのアドレス
出力	Aに読み出した値
レジスタ	AF
WRTVRM (004DH) *1	
機能	VRAMにデータを書き込む。ただし、こ れはTMS9918に対するものでVRAM のアドレスは14ビットのみ有効。全ビッ トを使う場合はNWRVRMをコール
入力	HLにVRAMアドレス, Aにデータ
出力	なし
レジスタ	AF
SETRD (0050H) *1	
機能	VDPにVRAMアドレスをセットして、 読み出せる状態にする。これは、VDPの アドレス・オート・インクリメントの機 能を使って、連続したVRAM領域から データを読み出す時に使用する。これに よりRDVRMをループ中で使うより高 速に読み出しが可能になる。ただし、こ れはTMS9918に対するものでVRAM のアドレスは14ビットのみ有効。全ビッ トを使う場合はNSETRDをコール
入力	HLにVRAMアドレス
出力	なし
レジスタ	AF

SETWRT (0053H) *1

機能 VDPにVRAMアドレスをセットして、書き込める状態にする。使用目的はSETRDと同様。ただし、これはTMS9918に対するものでVRAMのアドレスは14ビットのみ有効。全ビットを使う場合はNSTWRTをコール。

入力 HLにVRAMアドレス

出力 なし

レジスタ AF

FILVRM (0056H) *4

機能 VRAMの指定領域を同一のデータでうめる。ただし、これはTMS9918に対するものでVRAMのアドレスは14ビットのみ有効。全ビットを使う場合はBIGFILを参照。

入力 HLに書き込みを開始するVRAMアドレス、BCに書き込む領域の長さ、Aにデータ

出力 なし

レジスタ AF, BC

LDIRMV (0059H) *4

機能 VRAMからメモリへブロック転送

入力 HLにソース・アドレス(VRAM), DEにデスティネーション・アドレス(メモリ), BCに長さ。指定するVRAMのアドレスは全ビット有効

出力 なし

レジスタ すべて

LDIRVM (005CH) *4

機能 メモリからVRAMへブロック転送

入力 HLにソース・アドレス(メモリ), DEにデスティネーション・アドレス(VRAM), BCに長さ。指定するVRAMのアドレスは全ビット有効

出力 なし

レジスタ すべて

CHGMOD (005FH) *3

機能 スクリーン・モードを変える。パレットは初期化しない。パレットの初期化が必要ならSUB-ROMのCHGMDPを参照。

入力 Aにスクリーン・モード(0~8)

出力 なし

レジスタ すべて

CHGCLR (0062H) *1

機能 画面の色を変える

入力 Aにモード

FORCLR (F3E9H)に前景色

BAKCLR (F3EAH)に背景色

BDRCLR (F3EBH)に周辺色

出力 なし

レジスタ すべて

NMI (0066H) *1

機能 NMI (Non Maskable Interrupt)処理ルーチンを実行

入力 なし

出力 なし

レジスタ なし

CLRSPR (0069H) *3

機能 すべてのスプライトを初期化。スプライト・パターンをヌルに、スプライト番号をスプライト面番号に、スプライト・カラーを前景色にする。スプライトの垂直位置は209(モード0~3)または217(モード4~8)にセット

入力 SCRMOD (FCAFH)にスクリーン・モード

出力 なし

レジスタ すべて

INITXT (006CH) *3

機能 画面をTEXT1モード(40*24)に初期化。このルーチンではパレットは初期化しない。パレットの初期化が必要なら、このルーチンをコールした後、SUB-ROMのINIPLTをコールする

入力 LINL40(F3AEH)に1行の幅

出力	TXTNAM (F3B3H) にパターンネーム・ テーブル
入力	TXTCGP (F3B7H) にパターンジェネレ ータ・テーブル
出力	なし
レジスタ	すべて

INIT32 (006FH) *3

機能	画面を GRAPHIC1 モード (32*24) に初 期化。このルーチンではパレットは初期 化しない
入力	T32NAM (F3BDH) にパターンネーム・ テーブル
	T32COL (F3BFH) にカラー・テーブル
	T32CGP (F3C1H) にパターンジェネレ ータ・テーブル
	T32ATR (F3C3H) にスプライトアトリ ビュート・テーブル
	T32PAT (F3C5H) にスプライトジェネ レータ・テーブル
出力	なし
レジスタ	すべて

INIGRP (0072H) *3

機能	画面を高解像グラフィックモードに初期 化。このルーチンではパレットは初期化 しない
入力	GRPNAM (F3C7H) にパターンネーム・ テーブル
	GRPCOL (F3C9H) にカラー・テーブル
	GRPCGP (F3CBH) にパターンジェネレ ータ・テーブル
	GRPATR (F3CDH) にスプライトアト リビュート・テーブル
	GRPPAT (F3CFH) にスプライトジェネ レータ・テーブル
出力	なし
レジスタ	すべて

INIMLT (0075H) *3

機能	画面を MULTI COLOR モードに初期 化。このルーチンではパレットは初期化 しない
入力	MLTNAM (F3D1H) にパターンネーム・ テーブル

出力	MLTATR (F3D7H) にスプライトアト リビュート・テーブル
入力	MLTPAT (F3D9H) にスプライトジェ ネレータ・テーブル
出力	なし
レジスタ	すべて

SETTXT (0078H) *3

機能	VDP のみを TEXT1 モード (40*24) に する
入力	INITXT と同じ
出力	なし
レジスタ	すべて

SETT32 (007BH) *3

機能	VDP のみを GRAPHIC1 モード (32* 24) にする
入力	INIT32 と同じ
出力	なし
レジスタ	すべて

SETGRP (007EH) *3

機能	VDP のみを GRAPHIC2 モードにする
入力	INIGRP と同じ
出力	なし
レジスタ	すべて

SETMLT (0081H) *3

機能	VDP のみを MULTI COLOR モード にする
入力	INIMLT と同じ
出力	なし
レジスタ	すべて

CALPAT (0084H) *1

機能	スプライト・ジェネレータ・テーブルの アドレスを返す
入力	A にスプライト番号
出力	HL にアドレス
レジスタ	AF, DE, HL

CALATR (0087H) *1

機能	スプライトアトリビュート・テーブルの アドレスを返す
入力	A にスプライト番号
出力	HL にアドレス
レジスタ	AF, DE, HL

GSPSIZ (008AH) *1	
機能	現在のスプライト・サイズを返す
入力	なし
出力	Aにスプライト・サイズ (バイト数). 16*16のサイズの場合のみCYフラグをセット。それ以外の場合はCYフラグをリセット
レジスタ	AF
GRPPRT (008DH) *2	
機能	グラフィック画面に文字を表示
入力	Aにキャラクタコード。スクリーン・モードが5~8ならLOGOPR(FB02H)にロジカル・オペレーションコード
出力	なし
レジスタ	なし
● PSG 関連	
GICINI (0090H) *1	
機能	PSGを初期化し、PLAY文のための初期値をセット
入力	なし
出力	なし
レジスタ	すべて
WRTPSG (0093H) *1	
機能	PSGのレジスタにデータを書き込む
入力	AにPSGのレジスタ番号、Eにデータ
出力	なし
レジスタ	なし
RDPMSG (0096H) *1	
機能	PSGのレジスタの値を読む
入力	AにPSGのレジスタ番号
出力	Aに読み込んだ値
レジスタ	なし
STRTRMS (0099H) *1	
機能	バックグラウンド・タスクとしてPLAY文が実行中であるかどうかチェックし、実行中でなければPLAY文の実行を開始
入力	なし
出力	なし
レジスタ	すべて

● キーボード、CRT、プリンタへの入出力

CHSNS (009CH) *1	
機能	キーボード・バッファの状態をチェック
入力	なし
出力	バッファが空であればZフラグをセット。 そうでなければZフラグをリセット
レジスタ	AF
CHGET (009FH) *1	
機能	1文字入力 (入力待ちあり)
入力	なし
出力	Aに入力された文字コード
レジスタ	AF
CHPUT (00A2H) *1	
機能	1文字表示
入力	Aに出力する文字コード
出力	なし
レジスタ	なし
LPTOUT (00A5H) *1	
機能	1文字プリンタ出力
入力	Aに出力する文字コード
出力	失敗した場合はCYフラグをセット
レジスタ	F
LPTSTT (00A8H) *1	
機能	プリンタの状態をチェック
入力	なし
出力	Aが255でZフラグがリセットされればプリンタはREADY。Aが0でZフラグがセットされていればプリンタはNOT READY
レジスタ	AF
CNVCHR (00ABH) *1	
機能	グラフィック・ヘッダかどうかをチェックし、コードを変換
入力	Aに文字コード
出力	CYフラグがリセット→グラフィック・ヘッダではない CYフラグとZフラグがセット→Aに変換後のコード CYフラグがセット、Zフラグがリセット→Aに変換されていないコード
レジスタ	AF

PINLIN (00AEH) *1

機能 リターンキーやSTOPキーがタイプされるまでに入力された文字コードを指定されたバッファに格納する
入力 なし
出力 HLにバッファの先頭アドレス-1, STOPキーで終了したときのみCYフラグをセット
レジスタ すべて

INLIN (00B1H) *1

機能 AUTFLG (F6AAH)がセットされる以外はPINLINと同じ
入力 なし
出力 HLにバッファの先頭アドレス-1, STOPキーで終了したときのみCYフラグをセット
レジスタ すべて

QINLIN (00B4H) *1

機能 “?”とスペース1個を表示してINLINを実行
入力 なし
出力 HLにバッファの先頭アドレス-1, STOPキーで終了したときのみCYフラグをセット
レジスタ すべて

BREAKX (00B7H) *1

機能 Ctrl-STOPキーを押しているかどうかチェック。このルーチンでは割り込みが禁止される
入力 なし
出力 押されていればCYフラグをセット
レジスタ AF

BEEP (00COH) *3

機能 ブザーを鳴らす
入力 なし
出力 なし
レジスタ すべて

CLS (00C3H) *3

機能 画面クリア
入力 ゼロフラグをセット
出力 なし
レジスタ AF, BC, DE

POSIT (00C6H) *1

機能 カーソルの移動
入力 HにカーソルのX座標, LにカーソルのY座標
出力 なし
レジスタ AF

FNKSB (00C9H) *1

機能 ファンクション・キーの表示がアクティブかどうかチェックし(FNKFLG), アクティブなら表示, でなければ消す
入力 FNKFLG (FBCEH)
出力 なし
レジスタ すべて

ERAFNK (00CCH) *1

機能 ファンクション・キーの表示を消す
入力 なし
出力 なし
レジスタ すべて

DSPFNK (00CFH) *2

機能 ファンクション・キーを表示
入力 なし
出力 なし
レジスタ すべて

TOTEXT (00D2H) *1

機能 画面を強制的にテキストモードにする
入力 なし
出力 なし
レジスタ すべて

●ゲーム I/O アクセス

GTSTCK (00D5H) *1

機能 ジョイスティックの状態を返す
入力 Aに調べるジョイスティックの番号
出力 Aにジョイスティックの方向
レジスタ すべて

GTTRIG (00D8H) *1

機能 トリガボタンの状態を返す
入力 Aに調べるトリガボタンの番号
出力 Aが0ならトリガボタンは押されていない
Aが0FFHならトリガボタンは押されている

レジスタ AF

GTPAD (00DBH) *1

機能 タッチパッドの状態を返す
 入力 Aに調べるタッチパッドの番号
 出力 Aに値
 レジスタ すべて

GTPDL (00DEH) *2

機能 パドルの値を返す
 入力 Aにパドルの番号
 出力 Aに値
 レジスタ すべて

●カセット入出力ルーチン

TAPION (00E1H) *1

機能 カセットのモーターONの後、ヘッダ・
 ブロックを読む
 入力 なし
 出力 失敗した場合はCYフラグをセット
 レジスタ すべて

TAPIN (00E4H) *1

機能 テープからデータを読む
 入力 なし
 出力 Aにデータ。失敗した場合はCYフラグ
 をセット
 レジスタ すべて

TAPIOF (00E7H) *1

機能 テープからの読み込みをストップ
 入力 なし
 出力 なし
 レジスタ なし

TAPOON (00EAH) *1

機能 カセットのモーターONの後、ヘッダ・
 ブロックを書き込む
 入力 A=0ならショート・ヘッダ
 A≠0ならロング・ヘッダ
 出力 失敗した場合はCYフラグをセット
 レジスタ すべて

TAPOUT (00EDH) *1

機能 テープにデータを書き込む
 入力 Aにデータ
 出力 失敗した場合はCYフラグをセット

レジスタ すべて

TAPOOF (00FOH) *1

機能 テープへの書き込みをストップ
 入力 なし
 出力 失敗した場合はCYフラグをセット
 レジスタ なし

STMOTR (00F3H) *1

機能 カセットのモーターの動作設定
 入力 A=0 → ストップ
 A=1 → スタート
 A=0FFH → 現在と逆の動作
 出力 なし
 レジスタ AF

●その他

CHGCAP (0132H) *1

機能 CAPランプの状態を変える
 入力 A=0 → ランプを消す
 A≠0 → ランプをつける
 出力 なし
 レジスタ AF

CHGSND (0135H) *1

機能 1ビット・サウンドポートの状態を変え
 る
 入力 A=0 → OFF
 A≠0 → ON
 出力 なし
 レジスタ AF

RSLREG (0138H) *1

機能 基本スロット・レジスタに現在出力して
 いる内容を読む
 入力 なし
 出力 Aに読み込んだ値
 レジスタ A

WSLREG (013BH) *1

機能 基本スロット・レジスタにデータを書き
 込む
 入力 Aに書き込む値
 出力 なし
 レジスタ なし

RDVDP (013EH) *1

機能 VDPのステータス・レジスタを読む
 入力 なし
 出力 Aに読み込んだ値
 レジスタ A

SNSMAT (0141H) *1

機能 キーボード・マトリクスから指定した行の値を読む
 入力 Aに指定する行
 出力 Aにデータ（押されているキーに対応するビットが0になる）
 レジスタ AF, C

ISFLIO (014AH) *1

機能 デバイスが動作中かどうかチェック
 入力 なし
 出力 A = 0 → 動作中
 A ≠ 0 → 動作中ではない
 レジスタ AF

OUTDLP (014DH) *1

機能 プリンタ出力。LPTOUT とは次の点で異なる
 1. TABはスペースに展開される
 2. MSX仕様でないプリンタの場合、ひらがなをカタカナに、グラフィック文字を1バイト文字に変換する
 3. 失敗した場合、device I/O error となる
 入力 Aにデータ
 出力 なし
 レジスタ F

KILBUF (0156H) *1

機能 キーボード・バッファをクリア
 入力 なし
 出力 なし
 レジスタ HL

CALBAS (0159H) *1

機能 BASICインタープリタ内のルーチンをインタースロット・コール
 入力 IXに呼び出すアドレス
 出力 呼び出すルーチンによる
 レジスタ 呼び出すルーチンによる

● MSX2用に追加されたエントリ

SUBROM (015CH)

機能 SUB-ROMをインターフェースロット・コール
 入力 IXに呼び出すアドレス、同時にIXをスタックに積む
 出力 呼び出すルーチンによる
 レジスタ 裏レジスタとIYはリザーブされる

EXTROM (015FH)

機能 SUB-ROMをインターフェースロット・コール
 入力 IXに呼び出すアドレス
 出力 呼び出すルーチンによる
 レジスタ 裏レジスタとIYはリザーブされる

EOL (0168H)

機能 行の終わりまでデリート
 入力 HにカーソルのX座標、LにY座標
 出力 なし
 レジスタ すべて

BIGFIL (016BH)

機能 機能的にはFILVRMと同じ。ただし、以下の点で異なる。
 FILVRMでは、スクリーン・モードが0～3であるかをチェックし、もしそうならVDPは16KバイトのVRAMしか持っていないものとして扱う(MSX1とのコンパチビリティのため)。しかし、BIGFILはモードのチェックは行わず、与えられたパラメータどおりに動作する
 入力 FILVRMと同じ
 出力 FILVRMと同じ
 レジスタ FILVRMと同じ

NSETRD (016EH)

機能 VDPにアドレスをセットして、読み込む状態にする
 入力 HLにVRAMアドレス
 出力 なし
 レジスタ AF

NSTWRT (0171H)

機能 VDPにアドレスをセットして、書き込む状態にする
 入力 HLにVRAMアドレス
 出力 なし
 レジスタ AF

NRDVCRM (0174H)

機能 VRAMの内容を読む
 入力 HLに読み出すVRAMのアドレス
 出力 Aに読み出した値
 レジスタ F

NWRVCRM (0177H)

機能 VRAMにデータを書き込む
 入力 HLにVRAMアドレス、Aにデータ
 出力 なし
 レジスタ AF

SUB-ROM

SUB-ROMのコーリング・シーケンスは以下のとおりです。

```
:
LD    IX, INIPLT      ; Set BIOS entry address
CALL  EXTROM          ; Returns here
:

```

また、IXを壊したくない場合には次のようにコードします。

```
:
INIPAL: PUSH  IX      ; Save IX
LD    IX, INIPLT      ; Set BIOS entry address
JP    SUBROM          ; Returns caller of INIPAL
:

```

GRPPRT (0089H)

機能 グラフィック画面に1文字出力(スクリーン5~8のみで動作)
 入力 Aに文字コード
 出力 なし
 レジスタ なし

NVBXLN (00C9H)

機能 ボックスを描く
 入力 始点: BCにX座標、DEにY座標
 終点: GXPOS (FCB3H)にX座標、GYPOS (FCB5H)にY座標
 色: ATRBYT (F3F2H)にアトリビュート
 ロジカルオペレーション・コード: LOGOPR (FB02H)
 出力 なし
 レジスタ すべて

NVBXFL (00CDH)

機能 塗りつぶされたボックスを描く
 入力 始点: BCにX座標、DEにY座標
 終点: GXPOS (FCB3H)にX座標、GYPOS (FCB5H)にY座標
 色: ATRBYT (F3F2H)にアトリビュート
 ロジカルオペレーション・コード: LOGOPR (FB02H)
 出力 なし
 レジスタ すべて

CHGMOD (00D1H)

機能 スクリーン・モードを変える
 入力 Aにスクリーン・モード(0~8)
 出力 なし
 レジスタ すべて

INITXT (00D5H)

機能 画面をテキスト・モード(40*24)にして初期化する
 入力 TXTNAM (F3B3H)にパターンネーム・テーブル
 TXTCP (F3B7H)にパターンジェネレータ・テーブル
 出力 なし
 レジスタ すべて

INIT32 (00D9H)

機能 画面をテキスト・モード(32*24)にして初期化する
 入力 T32NAM (F3BDH)にパターンネーム・テーブル
 T32COL (F3BFH)にカラーテーブル

T32CGP (F3C1H) にパターンジェネレータ・テーブル T32ATR (F3C3H) にスプライトアトリビュート・テーブル T32PAT (F3C5H) にスプライトジェネレータ・テーブル なし すべて	SETT32 (00E9H) VDPをテキスト・モード (32*24) にする INIT32と同じ なし すべて
INIGRP (00DDH) 画面を高解像グラフィック・モードにして初期化する GRPNAM (F3C7H) にパターンネーム・テーブル GRPCOL (F3C9H) にカラー・テーブル GRPCGP (F3CBH) にパターンジェネレータ・テーブル GRPATR (F3CDH) にスプライトアトリビュート・テーブル GRPPAT (F3CFH) にスプライトジェネレータ・テーブル なし すべて	SETGRP (00EDH) VDPを高解像度モードにする INIGRPと同じ なし すべて
INIMLT (00E1H) 画面をMULTI COLORモードにして初期化する MLTNAM (F3D1H) にパターンネーム・テーブル MLTCOL (F3D3H) にカラー・テーブル MLTCGP (F3D5H) にパターンジェネレータ・テーブル MLTATR (F3D7H) にスプライトアトリビュート・テーブル MLTPAT (F3D9H) にスプライトジェネレータ・テーブル なし すべて	SETMLT (00F1H) VDPをMULTI COLORモードにする INIMLTと同じ なし すべて
SETTXT (00E5H) VDPをテキスト・モード (40*24) にする INITXTと同じ なし すべて	CLRSPR (00F5H) すべてのスプライトを初期化。スプライト・パターンをヌルに、スプライト番号をスプライト面番号に、スプライトの色を前景色にする。スプライトの垂直位置は217にセット SCRMOD (FCAFH) にスクリーン・モード なし すべて
	CALPAT (00F9H) スプライトジェネレータ・テーブルのアドレスを返す (このルーチンはMAIN-ROMの同名のBIOSと同じ) Aにスプライト番号 HLにアドレス AF, DE, HL
	CALATR (00FDH) スプライト属性テーブルのアドレスを返す (このルーチンはMAIN-ROMの同名のBIOSと同じ) Aにスプライト番号 HLにアドレス AF, DE, HL

GSPSIZ (0101H)

機能 現在のスプライトサイズを返す（このルーチンは MAIN-ROM の同名の BIOS と同じ）
 入力 なし
 出力 A にスプライトサイズ。16 * 16 のサイズの場合のみ CY フラグがセット
 レジスタ AF

GETPAT (0105H)

機能 キャラクタ・パターンを返す
 入力 A に文字コード
 出力 PATWRK (FC40H) にキャラクタ・パターン
 レジスタ すべて

WRTVRM (0109H)

機能 VRAM にデータを書き込む
 入力 HL に VRAM アドレス (0 ~ FFFFH), A にデータ
 出力 なし
 レジスタ AF

RDVRM (010DH)

機能 VRAM の内容を読む
 入力 HL に読み出す VRAM のアドレス (0 ~ FFFFH)
 出力 A に読み出した値
 レジスタ AF

CHGCLR (0111H)

機能 画面の色を変える
 入力 A にスクリーン・モード
 FORCLR (F3E9H) に前景色
 BAKCLR (F3EAH) に背景色
 BDRCLR (F3EBH) に周辺色
 出力 なし
 レジスタ すべて

CLSSUB (0115H)

機能 画面クリア
 入力 なし
 出力 なし
 レジスタ すべて

DSPFNK (011DH)

機能 ファンクション・キーの表示

入力 なし

出力 なし

レジスタ すべて

WRTVDP (012DH)

機能 VDP のレジスタにデータを書き込む
 入力 C にレジスタ番号, B にデータ
 出力 なし
 レジスタ AF, BC

VDPSTA (0131H)

機能 VDP のレジスタを読む
 入力 A にレジスタ番号 (0 ~ 9)
 出力 A にデータ
 レジスタ F

SETPAG (013DH)

機能 ページの切り換え
 入力 DPPAGE (FAF5H) にディスプレイ・ページ番号
 ACPAGE (FAF6H) にアクティブ・ページ番号
 出力 なし
 レジスタ AF

INIPLT (0141H)

機能 パレットの初期化（現在のパレットは VRAM にセーブされている）
 入力 なし
 出力 なし
 レジスタ AF, BC, DE

RSTPLT (0145H)

機能 パレットを VRAM からリストアする
 入力 なし
 出力 なし
 レジスタ AF, BC, DE

GETPLT (0149H)

機能 パレットからカラーコードを得る
 入力 A にパレット番号 (0 ~ 15)
 出力 B の上位 4 ビットに赤のコード
 B の下位 4 ビットに青のコード
 C の下位 4 ビットに緑のコード
 レジスタ AF, DE

SETPLT (014DH)

機能 カラーコードをパレットにセット
入力 Dにパレット番号 (0~15)
 Aの上位 4 ビットに赤のコード
 Aの下位 4 ビットに青のコード
 Eの下位 4 ビットに緑のコード
出力 なし
レジスタ AF

BEEP (017DH)

機能 ブザーを鳴らす
入力 なし
出力 なし
レジスタ すべて

PROMPT (0181H)

機能 プロンプトを表示
入力 なし
出力 なし
レジスタ すべて

NEWPAD (01ADH)

機能 マウス、ライトペンの状態を読む
入力 Aに以下のデータを入れてコール。カッコ内は戻り値
 8 … ライトペン・チェック (0FFH で有効)
 9 … X座標を返す
 10 … Y座標を返す
 11 … ライトペン・スイッチの状態を返す
 (押されたとき 0FFH)
 12 … マウスがポート 1 に接続されているか (0FFH で有効)
 13 … X方向のオフセットを返す
 14 … Y方向のオフセットを返す
 15 … (つねに 0)
 16 … マウスがポート 2 に接続されているか (0FFH で有効)
 17 … X方向のオフセットを返す
 18 … Y方向のオフセットを返す
 19 … (つねに 0)
出力 A
レジスタ すべて

CHGMDP (01B5H)

機能 VDPのモードを変える。パレットは初期化される

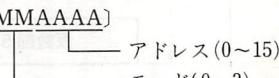
入力 Aにスクリーン・モード (0~8)

出力 なし
レジスタ すべて

KNJPRT (01BDH)

機能 グラフィック画面 (モード 5~8) に漢字出力
入力 BC に JIS 漢字コード、A に表示モード。
 表示モードは BASIC の PUT KANJI 命令と同様に以下の意味を持つ
 0 … 16×16 ドットで表示
 1 … 偶数番目のドットを表示
 2 … 奇数番目のドットを表示
出力 なし
レジスタ AF

REDCLK (01F5H)

機能 クロック・データを読む
入力 C に クロック RAM アドレス [00MMAAAA]

出力 A に読み込んだデータ (下位 4 ビットのみ有効)
レジスタ F

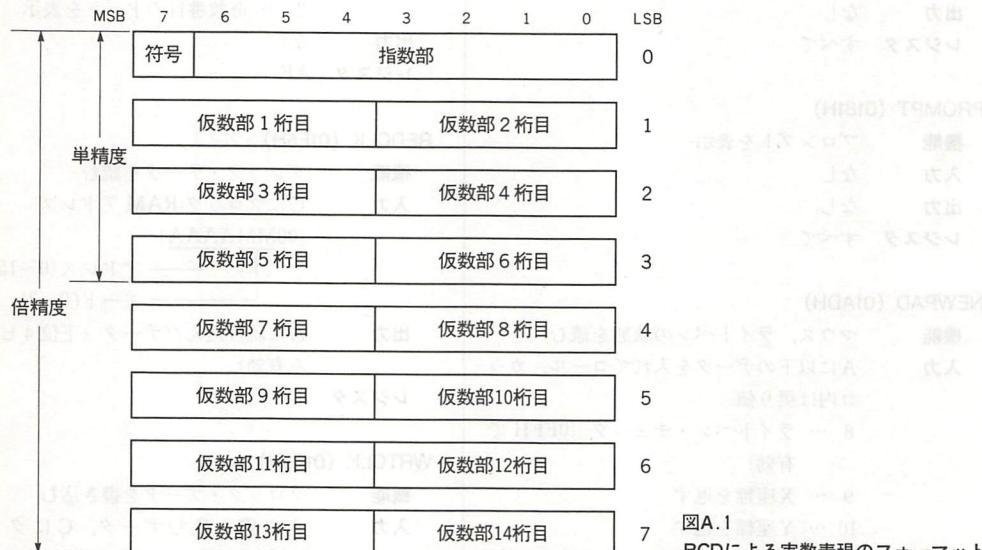
WRTCLK (01F9H)

機能 クロック・データを書き込む
入力 A に書き込むデータ、C に クロック RAM アドレス
出力 なし
レジスタ F

A.2 Math-Pack

Math-Pack とは、MSX-BASIC の数値演算ルーチンの中核をなすもので、これらを機械語から呼び出すことにより、簡単に浮動小数点演算や三角関数ルーチンを利用することができます。

Math-Pack での実数演算はすべて BCD(Binary Coded Decimal=2 進化 10 進法) 表現によって行われます。また、実数表現には“単精度”と“倍精度”的 2 種類があり、単精度(6 衔)は 4 バイト、倍精度(14 衔)は 8 バイトで表現されます(図 A.1, 図 A.2)。



図A.1
BCDによる実数表現のフォーマット

单精度表現の例

$$123456 \rightarrow 0.123456 \times 10^6$$

	0	1	2	3
DAC	46	12	34	56

倍精度表現の例

$$123456.78901234 \rightarrow 0.12345678901234 \times 10^6$$

	0	1	2	3	4	5	6	7
DAC	46	12	34	56	78	90	12	34

図A.2 実数の表現例

1 つの実数は、符号部、指数部、仮数部から成り立っています。符号部とはこの仮数の符号を表し、0 ならば正、1 ならば負となります。指数部はバイナリ表現であり、+63 乗～−63 乗まで表すことができます(図 A.3)。倍精度実数の有効範囲を図 A.4 に示します。

符号	指数部							意味
0	0	0	0	0	0	0	00
1	0	0	0	0	0	0	0未定義(-0?)
×	0	0	0	0	0	0	110の-63乗
×	1	0	0	0	0	0	010の0乗
×	1	1	1	1	1	1	110の+63乗

図A.3 指数部フォーマット

注) “×”は、その値が1または0のどちらであ
っても関係がないことを表します

DAC	0	1	2	3	4	5	6	7	(バイト)	
	FF	99	99	99	99	99	99	99		-0.999999999999999 E+63
	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
	81	10	00	00	00	00	00	00		-0.100000000000000 E-63
	00	×	×	×	×	×	×	×	0	
	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
	01	10	00	00	00	00	00	00		+0.100000000000000 E-63
	7F	99	99	99	99	99	99	99	+	0.999999999999999 E+63

図A.4 倍数度実数表現の有効範囲

Math-Pack では、演算の対象となるメモリがあらかじめ決められています。このメモリエリアを“DAC(Decimal ACCumulator)(F7F6H)”, それとの演算対象となる数値を格納するエリアを“ARG(F847H)”といいます。たとえば乗算ルーチンの場合、DACに入っている数と ARGに入っている数の積が計算され、その結果が DACに入ることになります。

DACには、単精度実数、倍精度実数、2バイト整数を格納することができますが、これらのうちのどれが入っているのかを示すために“VALTYP(F663H)”が使われ、それぞれの場合について4, 8, 2の値が入ります。

単精度実数と倍精度実数は、いずれも DACの先頭から数値を格納しなければなりません。ただし、2バイト整数の場合だけは、下位、上位を DAC +2, +3に格納してください。

Math-Pack は BASIC の内部ルーチンであるため、エラーが起きた場合(0除算やオーバーフローなど)はそれに応じたエラールーチンへ自動的に分岐し、その後 BASIC コマンドレベルに戻ります。それを避けたいときは、H. ERRO(FFB1H)を書き換えてください。

● Math-Pack ワークエリア

ラベル	アドレス	サイズ	意味
VALTYP	F663H	1	DACに入っている数の形式を表す
DAC	F7F6H	16	BCD形式の浮動小数点アキュムレータ
ARG	F847H	16	DACの演算対象

● Math-Pack エントリ

基本演算

ラベル	アドレス	機能
DECSUB	268CH	DAC \leftarrow DAC - ARG
DECADD	269AH	DAC \leftarrow DAC + ARG
DECNRM	26FAH	DACを正規化する (※1)
DECROU	273CH	DACを四捨五入する
DECMLU	27E6H	DAC \leftarrow DAC * ARG
DECDIV	289FH	DAC \leftarrow DAC / ARG

注) これらは、いずれもDAC, ARGにある数を倍精度実数として扱う

レジスタは、いずれも保存されない

※1 仮数部の不要な0を取り去ること (0.00123 → 0.123E-2)

関数 1

ラベル	アドレス	機能	変化するレジスタ
COS	2993H	DAC \leftarrow COS(DAC)	すべて
SIN	29ACh	DAC \leftarrow SIN(DAC)	すべて
TAN	29FBH	DAC \leftarrow TAN(DAC)	すべて
ATN	2A14H	DAC \leftarrow ATN(DAC)	すべて
LOG	2A72H	DAC \leftarrow LOG(DAC)	すべて
SQR	2AFFH	DAC \leftarrow SQR(DAC)	すべて
EXP	2B4AH	DAC \leftarrow EXP(DAC)	すべて
RND	2BDFH	DAC \leftarrow RND(DAC)	すべて

注) すべてBASICにおける同名の関数の処理ルーチンである

変化するレジスタすべてとは、A, B, C, D, E, H, Lの各レジスタを指す

関数 2

ラベル	アドレス	機能	変化するレジスタ
SIGN	2E71H	A \leftarrow DACの符号	A
ABSFN	2E82H	DAC \leftarrow ABS(DAC)	すべて
NEG	2E8DH	DAC \leftarrow NEG(DAC)	A, H, L
SGN	2E97H	DAC \leftarrow SGN(DAC)	A, H, L

注) エントリラベルSIGN以外のルーチンは、すべてBASICにおける同名の関数の処理ルーチンである

変化するレジスタすべてとは、A, B, C, D, E, H, Lの各レジスタを指す

SGNは、結果が2バイト整数で表されるので注意

移動

ラベル	アドレス	機能	対象	変化するレジスタ
MAF	2C4DH	ARG ← DAC	倍精度	A, B, D, E, H, L
MAM	2C50H	ARG ← [HL]	倍精度	A, B, D, E, H, L
MOV8DH	2C53H	[DE] ← [HL]	倍精度	A, B, D, E, H, L
MFA	2C59H	DAC ← ARG	倍精度	A, B, D, E, H, L
MFM	2C5CH	DAC ← [HL]	倍精度	A, B, D, E, H, L
MMF	2C67H	[HL] ← DAC	倍精度	A, B, D, E, H, L
MOV8HD	2C6AH	[HL] ← [DE]	倍精度	A, B, D, E, H, L
XTF	2C6FH	[SP] ↔ DAC	倍精度	A, B, D, E, H, L
PHA	2CC7H	ARG → [SP]	倍精度	A, B, D, E, H, L
PHF	2CCCH	DAC → [SP]	倍精度	A, B, D, E, H, L
PPA	2CDCH	[SP] → ARG	倍精度	A, B, D, E, H, L
PPF	2CE1H	[SP] → DAC	倍精度	A, B, D, E, H, L
PUSHF	2EB1H	DAC → [SP]	単精度	D, E
MOVFM	2EBEH	DAC ← [HL]	単精度	B, C, D, E, H, L
MOVFR	2EC1H	DAC ← (CBED)	単精度	D, E
MOVRF	2ECCH	(CBED) ← DAC	単精度	B, C, D, E, H, L
MOVRMI	2ED6H	(CBED) ← [HL]	単精度	B, C, D, E, H, L
MOVRM	2EDFH	(BCDE) ← [HL]	単精度	B, C, D, E, H, L
MOVMF	2EE8H	[HL] ← DAC	単精度	A, B, D, E, H, L
MOVE	2EEBH	[HL] ← [DE]	単精度	B, C, D, E, H, L
VMOVAM	2EEFH	ARG ← [HL]	VALTYP	B, C, D, E, H, L
MOVVFM	2EF2H	[DE] ← [HL]	VALTYP	B, C, D, E, H, L
VMOVE	2EF3H	[HL] ← [DE]	VALTYP	B, C, D, E, H, L
VMOVFA	2F05H	DAC ← ARG	VALTYP	B, C, D, E, H, L
VMOVFM	2F08H	DAC ← [HL]	VALTYP	B, C, D, E, H, L
VMOVAF	2F0DH	ARG ← DAC	VALTYP	B, C, D, E, H, L
VMOVFM	2F10H	[HL] ← DAC	VALTYP	B, C, D, E, H, L

注) [HL], [DE]は、それぞれHL, DEレジスタが指したメモリ上の数値を示す

()内の4レジスタ名は、左から(符号+指数部), (仮数部1, 2桁), (仮数部3, 4桁), (仮数部5, 6桁)を示す単精度実数である

移動の対象がVALTYPとなっているものは、VALTYP(F663H番地)に示されている型に応じた移動(2, 4, 8バイト)を行う

比較

ラベル	アドレス	対象	左辺	右辺	変化するレジスタ
FCOMP	2F21H	単精度実数	CBED	DAC	HL
ICOMP	2F4DH	2バイト整数	DE	HL	HL
XDCOMP	2F5CH	倍精度実数	ARG	DAC	すべて

注) 結果はすべてAレジスタに入る。レジスタの意味は、

A = 1 → 左辺 < 右辺

A = 0 → 左辺 = 右辺

A = -1 → 左辺 > 右辺

単精度の比較で、左辺のCBEDとは各レジスタに、それぞれ単精度の(符号+指数部), (仮数部1, 2桁), (仮数部3, 4桁), (仮数部5, 6桁)が入ることを意味する

浮動小数点入出力

ラベル	アドレス	機能
FIN	3299H	浮動小数点を表す文字列を、実数表現に変換してDACに格納する

エントリー条件 HL ← 文字列の先頭アドレス
A ← 文字列の先頭文字

リターン条件 DAC ← 実数
C ← FFH : 小数点なし, 0 : 小数点あり
B ← 小数点以降のケタ数
D ← 総ケタ数

ラベル	アドレス	機能
FOUT	3425H	DACに入っている実数表現の数を文字列に変換する(フォーマット指定なし)
PUFOUT	3426H	DACに入っている実数表現の数を文字列に変換する(フォーマット指定あり)

エントリー条件 A ← 変換のフォーマット
bit7 0 : フォーマット指定なし, 1 : フォーマット指定あり
bit6 0 : コンマによる区切りなし, 1 : 3ごとにコンマで区切る
bit5 0 : 意味なし, 1 : 先頭のスペースを“*”でうめる
bit4 0 : 意味なし, 1 : 数値の前に“\$”を付ける
bit3 0 : 意味なし, 1 : 正の数の場合も符号“+”を付ける
bit2 0 : 意味なし, 1 : 数値の後ろに符号を付ける
bit1 未使用
bit0 0 : 固定小数点, 1 : 浮動小数点
B ← 小数点を含まない, 小数点以前のケタ数
C ← 小数点を含む, 小数点以降のケタ数

リターン条件 HL ← 文字列の先頭アドレス

ラベル	アドレス	機能
FOUTB	371AH	DAC+2, 3に入っている2バイト整数を2進表現の文字列に変換する
FOUTO	371EH	DAC+2, 3に入っている2バイト整数を8進表現の文字列に変換する
FOUTH	3722H	DAC+2, 3に入っている2バイト整数を16進表現の文字列に変換する

エントリー条件 DAC+2 ← 2バイト整数

VALTYP ← 2

リターン条件 HL ← 文字列の先頭アドレス

注) レジスタはいずれも保存されない

出力ルーチンにおける文字列先頭アドレスは、通常FBUFFR(F7C5H番地から)内となるが、場合により先頭アドレスは前後する

FOUTB, FOUTO, FOUTHに限らずDAC+2に入れた整数を扱うときには、VALTYP(F663H番地)に必ず2を入れること

型変換

ラベル	アドレス	機能
FRCINT	2F8AH	DACを2バイト整数にする(DAC+2,3)
FRCSNG	2FB2H	DACを単精度実数にする
FRCDBL	303AH	DACを倍精度実数にする
FIXER	30BEH	$DAC \leftarrow SGN(DAC) * INT(ABS(DAC))$

(注) 実行後VALTYP(F663H番地)には、DACの型を表す数(2,4,8)が入る
レジスタは、いずれも保存されない

整数演算

ラベル	アドレス	機能	変化するレジスタ
UMULT	314AH	$DE \leftarrow BC * DE$	A, B, C, D, E
ISUB	3167H	$HL \leftarrow DE - HL$	すべて
IADD	3172H	$HL \leftarrow DE + HL$	すべて
IMULT	3193H	$HL \leftarrow DE * HL$	すべて
IDIV	31E6H	$HL \leftarrow DE / HL$	すべて
IMOD	323AH	$HL \leftarrow DE \bmod HL (DE \leftarrow DE / HL)$	すべて

べき乗

ラベル	アドレス	機能	基数	指数	結果
SNGEXP	37C8H	単精度実数のべき乗を求める	DAC	ARG	DAC
DBLEXP	37D7H	倍精度実数のべき乗を求める	DAC	ARG	DAC
INTEXP	383FH	2バイト整数のべき乗を求める	DE	HL	DAC

(注) レジスタは、いずれも保存されない

A.3 ビットブロック・トランスファー

ビットブロック・トランスファーは BASIC の COPY 命令に相当し、RAM、VRAM、ディスク間でデータを転送するものです。これは拡張 ROM 内のルーチンによって実行され、マシン語からも簡単に使うことができます。拡張 ROM 内にあるため、このルーチンを利用する場合は、BIOS の SUBROM あるいは EXTROM を使ってください。

1. VRAM 間の転送

● BLTVV(0191H/SUB)

機能 VRAM 領域内で転送を行う

入力 HL レジスタ←F562H

さらに以下のパラメータを設定する

- ・ SX(F562H, 2) ; ソースの X 座標
- ・ SY(F564H, 2) ; ソースの Y 座標
- ・ DX(F566H, 2) ; デスティネーションの X 座標
- ・ DY(F568H, 2) ; デスティネーションの Y 座標
- ・ NX(F56AH, 2) ; X 方向のドット数
- ・ NY(F56CH, 2) ; Y 方向のドット数
- ・ CDUMMY(F56EH, 1) ; ダミー(セットする必要はない)
- ・ ARG(F56FH, 1) ; 方向と拡張 RAM の選択(VDP の R #45 と同じ)
- ・ LOGOP(F570H, 1) ; ロジカルオペレーション・コード(VDP のロジカルオペレーション・コードと同じ)

出力 CY フラグをリセット

レジスタ すべて

2. RAM と VRAM 間のデータ転送

以下のルーチンを使う場合、グラフィックのデータ領域として、スクリーンモードによって次のような大きさの領域を確保しておく必要があります。

- ・スクリーンモード 6

X 方向のドット数 * Y 方向のドット数 / 4 + 4

・スクリーンモード 5 または 7

X 方向のドット数 * Y 方向のドット数 / 2 + 4

・スクリーンモード 8

X 方向のドット数 * Y 方向のドット数 / 2 + 4

ただし、割り算の端数を切り上げてください。なお、ディスクや RAM では配列データと同様にサイズを示すデータが付加されます。このデータは先頭から 2 バイトが X 方向のドット数、次の 2 バイトが Y 方向のドット数を示しています。

● BLTVM(0195H/SUB)

機 能 配列を VRAM に転送する

入 力 HL レジスター ← F562H

さらに以下のパラメータを設定する

- DPTR(F562H, 2) ; メモリのソース・アドレス
- DUMMY(F564H, 2) ; ダミー(セットする必要はない)
- DX(F566H, 2) ; デスティネーションの X 座標
- DY(F568H, 2) ; デスティネーションの Y 座標
- NX(F56AH, 2) ; X 方向のドット数(セットする必要はない。これは転送するデータの先頭にすでに持っている)
- NY(F56CH, 2) ; Y 方向のドット数(セットする必要はない。これは転送するデータの先頭にすでに持っている)
- CDUMMY(F56EH, 1) ; ダミー(セットする必要はない)
- ARG(F56FH, 1) ; 方向と拡張 RAM の選択(VDP の R # 45 と同じ)
- LOGOP(F570H, 1) ; ロジカル・オペレーション・コード(VDP のロジカル・オペレーション・コードと同じ)

出 力 転送するデータの個数がおかしければ CY フラグをセット

レジスター すべて

● BLTMV(0199H/SUB)

機 能 VRAM から配列に転送する

入 力 HL レジスター ← F562H

さらに以下のパラメータを設定する

- SX(F562H, 2) ; ソースの X 座標
- SY(F564H, 2) ; ソースの Y 座標
- DPTR(F566H, 2) ; メモリのデスティネーション・アドレス
- DUMMY(F568H, 2) ; ダミー(セットする必要はない)
- NX(F56AH, 2) ; X 方向のドット数
- NY(F56CH, 2) ; Y 方向のドット数
- CDUMMY(F56EH, 1) ; ダミー(セットする必要はない)
- ARG(F56FH, 1) ; 方向と拡張 RAM の選択(VDP の R#45 と同じ)

出 力 CY フラグをリセット

レジスタ すべて

3. ディスクと RAM, VRAM 間の転送

ディスクを使う場合、まずファイル名を設定する必要があります(ファイル名は BASIC と同様に指定)。例を次に示します。

```

    :
LD   HL, FNAME           ; Get pointer to file name
LD   (FN PTR), HL         ; Set it to parameter area
    :
FNAME: DB    22H, 'B : TEST. PIC', 22H, 0      ; "TEST. PIC", end mark

```

ここで、何かエラーが起きれば、BASIC インタープリタのエラーハンドラへジャンプします。そのため、自分のプログラム内でエラーをハンドリングしたい場合や MSX-DOS, ROM カートリッジでこのルーチンを呼ぶ場合、フックをセットする必要があります。このフックは H. ERROR (FFB1H) です。

● BLTVD(019DH/SUB)

機 能 ディスクから VRAM へ転送する

入 力 HL レジスタ ← F562H

さらに以下のパラメータを設定する

- FN PTR(F562H, 2) ; ファイル名のあるアドレス
- DUMMY(F564H, 2) ; ダミー(セットする必要はない)
- DX(F566H, 2) ; デスティネーションの X 座標
- DY(F568H, 2) ; デスティネーションの Y 座標

- NX(F56AH, 2) ; X 方向のドット数(セットする必要はない。これは転送するデータの先頭にすでに持っている)
- NY(F56CH, 2) ; Y 方向のドット数(セットする必要はない。これは転送するデータの先頭にすでに持っている)
- CDUMMY(F56EH, 1) ; ダミー(セットする必要はない)
- ARG(F56FH, 1) ; 方向と拡張 RAM の選択(VDP の R # 45 と同じ)
- LOGOP(F570H, 1) ; ロジカル・オペレーション・コード(VDP のロジカル・オペレーション・コードと同じ)

出 力 パラメータにエラーがあれば CY フラグをセット

レジスタ すべて

● BLTDV(01A1H/SUB)

機 能 VRAM からディスクへ転送する

入 力 HL レジスター ← F562H

さらに以下のパラメータを設定する

- SX(F562H, 2) ; ソースの X 座標
- SY(F564H, 2) ; ソースの Y 座標
- FNPTR(F566H, 2) ; ファイル名のあるアドレス
- DUMMY(F568H, 2) ; ダミー(セットする必要はない)
- NX(F56AH, 2) ; X 方向のドット数
- NY(F56CH, 2) ; Y 方向のドット数
- CDUMMY(F56EH, 1) ; ダミー(セットする必要はない)
- ARG(F56FH, 1) ; 方向と拡張 RAM の選択(VDP の R # 45 と同じ)

出 力 CY フラグをリセット

レジスタ すべて

● BLTMD(01A5H/SUB)

機 能 ディスクから配列データをロードする

入 力 HL レジスター ← F562H

さらに以下のパラメータを設定する

- ・ FN PTR(F562H, 2) ; ファイル名のあるアドレス
 - ・ SY(F564H, 2) ; ダミー(セットする必要はない)
 - ・ SPTR(F566H, 2) ; ロードする先頭アドレス
 - ・ EPTR(F568H, 2) ; ロードする最終アドレス
- 出 力** CY フラグをリセット
- レジスタ** すべて

● BLTDM(01A9H/SUB)

機 能 ディスクへ配列データをセーブする

入 力 HL レジスター ← F562H

さらに以下のパラメータを設定する

- ・ SPTR(F562H, 2) ; セーブする先頭アドレス
- ・ EPTR(F564H, 2) ; セーブする最終アドレス
- ・ FN PTR(F566H, 2) ; ファイル名のあるアドレス

出 力 CY フラグをリセット

レジスタ すべて

● BLTDA(01A9H/SUB)

記述子リストへリストアする。記述子リストは、HL へ入力

する旨書きおく。それ以外は、HL → ESIH

・ SY(F562H, 2)

・ SPTR(F564H, 2)

・ EPTR(F566H, 2)

・ FN PTR(F568H, 2)

・ NX(F56AH, 2)

・ NY(F56CH, 2)

・ CY(F56DH, 2)

・ CY(F56EH, 2)

・ CY(F56FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

・ CY(F572H, 2)

・ CY(F573H, 2)

・ CY(F574H, 2)

・ CY(F575H, 2)

・ CY(F576H, 2)

・ CY(F577H, 2)

・ CY(F578H, 2)

・ CY(F579H, 2)

・ CY(F57AH, 2)

・ CY(F57BH, 2)

・ CY(F57CH, 2)

・ CY(F57DH, 2)

・ CY(F57EH, 2)

・ CY(F57FH, 2)

・ CY(F570H, 2)

・ CY(F571H, 2)

A.4 ワークエリア一覧

MSX 2 のワーク・エリアの概略を図 A.5 に示します。以下の説明では、この図の F380H ~FFCAH のシステム・ワーク・エリアとフックについて解説します。表記は以下のとおりです。ただし、長さはバイト数です。

ラベル名(アドレス、長さ)

初期値、内容、使用目的

FFFF	スロット選択レジスタ
FFFC	リザーブ
FFF8	MAIN-ROMスロット・アドレス
FFF7	新設VDP(V9938)用 レジスタ・セーブ・エリア
FFE7	拡張BIOSコール用プログラム
FFCF	拡張BIOSコール用フック
FFCA	フック・エリア
FD9A	
F380	システム・ワークエリア

図A.5 ワークエリア

● インタースロットのリード、ライト コール用サブルーチン

RDPRIM(F380H, 5)

内容 基本スロットからの読み込み

WRPRIM(F385H, 7)

内容 基本スロットへ書き込み

CLPRIM(F38CH, 14)

内容 基本スロットコール

● USR 関数のマシン語プログラムの 開始アドレス、テキスト画面

USR TAB(F39AH, 20)

初期値 FCERR

内容 USR関数のマシン語プログラム(0 ~ 9)の開始番地、機械語プログラム定義
前の値はすべてエラーレーン FCERR
(475AH)を指す

LINL40(F3AEH, 1)

初期値 39

内容 SCREEN0のときの1行の幅(SCREEN0
のときのWIDTH文により設定される)

APPENDIX

LINL32(F3AFH, 1)
 初期値 29
 内容 SCREEN1のときの1行の幅(SCREEN1のときのWIDTH文により設定される)

LINLEN(F3B0H, 1)
 初期値 29
 内容 現在の画面の1行の幅

CRTCNT(F3B1H, 1)
 初期値 24
 内容 現在の画面の行数

CLMLST(F3B2H, 1)
 初期値 14
 内容 PRINT命令において各項目がカンマで区切られている場合の横位置

●初期化用ワーク

• SCREEN 0

TXTNAM(F3B3H, 2)
 初期値 0000H
 内容 パターンネーム・テーブル

TXTCOL(F3B5H, 2)
 内容 使用せず

TXTCGP(F3B7H, 2)
 初期値 0800H
 内容 パターンジェネレータ・テーブル

TXTATR(F3B9H, 2)
 内容 使用せず

TXTPAT(F3BBH, 2)
 内容 使用せず

• SCREEN 1

T32NAM(F3BDH, 2)
 初期値 1800H
 内容 パターンネーム・テーブル

T32COL(F3BFH, 2)
 初期値 2000H
 内容 カラーテーブル

T32CGP(F3C1H, 2)
 初期値 0000H
 内容 パターンジェネレータ・テーブル

T32ATR(F3C3H, 2)
 初期値 1B00H
 内容 スプライトアトリビュート・テーブル

T32PAT(F3C5H, 2)
 初期値 3800H
 内容 スプライト・ジェネレータ・テーブル

• SCREEN 2

GRPNAM(F3C7H, 2)
 初期値 1800H
 内容 パターンネーム・テーブル

GRPCOL(F3C9H, 2)
 初期値 2000H
 内容 カラーテーブル

GRPCGP(F3CBH, 2)
 初期値 0000H
 内容 パターンジェネレータ・テーブル

GRPATR(F3CDH, 2)
 初期値 1B00H
 内容 スプライトアトリビュート・テーブル

GRPPAT(F3CFH, 2)
 初期値 3800H
 内容 スプライト・ジェネレータ・テーブル

• SCREEN 3

MLTNAM(F3D1H, 2)
 初期値 0800H
 内容 パターンネーム・テーブル

MLTCOL(F3D3H, 2)
 内容 使用せず

MLTCGP(F3D5H, 2)
 初期値 0000H
 内容 パターンジェネレータ・テーブル

MLTATR(F3D7H, 2)
 初期値 1B00H
 内容 スプライトアトリビュート・テーブル

MLTPAT(F3D9H, 2)
 初期値 3800H
 内容 スプライト・ジェネレータ・テーブル

●その他のスクリーン設定

CLIKSW(F3DBH, 1)
 初期値 1
 内容 キークリックスイッチ(0=OFF, 0以外=ON)。SCREEN文の<キークリックスイッチ>により設定される

CSRY(F3DCH, 1)
 初期値 1
 内容 カーソルのY座標

CSRX(F3DDH, 1)
 初期値 1
 内容 カーソルのX座標

CNSDFG(F3DEH, 1)
 初期値 0

内容 ファンクションキー表示スイッチ(0=表示あり, 0以外=表示なし). KEY ON/OFF 文によって設定される

● VDP レジスタのセーブエリアなど

RG0SAV(F3DFH, 1)

初期値 0

RG1SAV(F3E0H, 1)

初期値 E0H

RG2SAV(F3E1H, 1)

初期値 0

RG3SAV(F3E2H, 1)

初期値 0

RG4SAV(F3E3H, 1)

初期値 0

RG5SAV(F3E4H, 1)

初期値 0

RG6SAV(F3E5H, 1)

初期値 0

RG7SAV(F3E6H, 1)

初期値 0

STATFL(F3E7H, 1)

初期値 0

内容 VDP のステータスを保存(MSX2 では
ステータスレジスタ 0 の内容)

TRGFLG(F3E8H, 1)

初期値 FFH

内容 ジョイスティックのトリガボタンの状態
を保存する

FORCLR(F3E9H, 1)

初期値 15

内容 前景色. COLOR 文で設定される

BAKCLR(F3EAH, 1)

初期値 4

内容 背景色. COLOR 文で設定される

BDRCLR(F3EBH, 1)

初期値 7

内容 周辺色. COLOR 文で設定される

MAXUPD(F3ECH, 3)

初期値 JP 0000H (C3H, 00H, 00H)

内容 CIRCLE 文が内部で使用

MINUPD(F3EFH, 3)

初期値 JP 0000H (C3H, 00H, 00H)

内容 CIRCLE 文が内部で使用

ATRBYT(F3F2H, 1)

初期値 15

内容 グラフィック使用時のカラーコード

● PLAY 文用ワークエリア

QUEUES(F3F3H, 2)

初期値 QUETAB(F959H)

内容 PLAY 文実行時のキューテーブルを指す

FRCNEW(F3F5H, 1)

初期値 255

内容 BASIC インタープリタが内部で使用する

● キー入力用ワークエリア

SCNCNT(F3F6H, 1)

初期値 1

内容 キースキャンの時間間隔

REPCNT(F3F7H, 1)

初期値 50

内容 キーのオートリピートが開始するまでの時間

PUTPNT(F3F8H, 2)

初期値 KEYBUF(FBF0H)

内容 キーバッファへの書き込みを行う番地を指す

GETPNT(F3FAH, 2)

初期値 KEYBUF(FBF0H)

内容 キーバッファからの読み込みを行う番地を指す

● カセット用パラメータ

CS120(F3FCH, 5*2)

・1200 ポー

内容(値) 83(LOW01) ビット 0 を表す LOW の幅

92(HIGH01) ビット 0 を表す HIGH の幅

38(LOW11) ビット 1 を表す LOW の幅

45(HIGH11) ビット 1 を表す HIGH の幅

HEADLEN *2 / 256 ショートヘッダ用のヘッダビットの HIGH バイト (HEDLEN = 2000)

・2400 ポー

内容(値) 37(LOW02) ビット 0 を表す LOW の幅

45(HIGH02) ピット 0 を表す HIGH の幅	LPTPOS(F415H, 1)
14(LOW12) ピット 1 を表す LOW の幅	初期値 0 内容 プリンタのヘッド位置
22(HIGH12) ピット 1 を表す HIGH の幅	PRTFLG(F416H, 1) 内容 プリンタへ出力するかどうかのフラグ
HEADLEN * 4 / 256 ... ショートヘッダ用のヘッダビットの High バイト (HEDLEN = 2000)	NTMSXP(F417H, 1) 内容 プリンタ種別 (0 = MSX 用プリンタ, 0 以外 = MSX 用プリンタでない)
LOW(F406H, 2)	RAWPRT(F418H, 1) 内容 raw-mode でプリント中なら 0 以外
初期値 LOW01, HIGH01(デフォルト 1200 ポート)	VLZADR(F419H, 2) 内容 VAL 関数で置き換えられる文字のアドレス
内容 現在のポーレートのピット 0 を表す LOW と HIGH の幅。SCREEN 文の <カセットポーレート> により設定される	VLZDAT(F41BH, 1) 内容 VAL 関数で 0 に置き換わる文字
HIGH(F408H, 2)	CURLIN(F41CH, 2) 内容 BASIC が現在実行中の行番号
初期値 LOW11, HIGH11(デフォルト 1200 ポート)	KBUF(F41FH, 318) 内容 クランチバッファ。BUF(F55EH) から中間言語に直されて入る
内容 現在のポーレートのピット 1 を表す LOW と HIGH の幅。SCREEN 文の <カセットポーレート> により設定される	BUFMIN(F55DH, 1) 初期値 “,” 内容 INPUT 文で使われる
HEADER(F40AH, 1)	BUF(F55EH, 258) 内容 タイプした文字が入るバッファ。ダイレクトステートメントがアスキーコードで入る
初期値 HEADLEN * 2 / 256(デフォルト 1200 ポート)	ENDBUF(F660H, 1) 内容 BUF(F55EH) がオーバーフローするのを防ぐ
内容 現在のポーレートのショートヘッダ用のヘッダビット (HEDLEN = 2000)、SCREEN 文の <カセットポーレート> により設定される	TTYPOS(F661H, 1) 内容 BASIC が内部で持つ仮想的なカーソル位置
ASPCT1(F40BH, 2)	DIMFLG(F662H, 1) 内容 BASIC が内部で使用する
内容 256 / アスペクト比。CIRCLE 文で使用するために SCREEN 文で設定される	VALTYP(F663H, 1) 内容 変数の型の識別に使用する
ASPCT2(F40DH, 2)	DORES(F664H, 1) 内容 保存されている語がクランチできるかどうかを示す
内容 256 * アスペクト比。CIRCLE 文で使用するために SCREEN 文で設定される	DONUM(F665H, 1) 内容 クランチ用のフラグ
ENDPRG(F40FH, 5)	CONTXT(F666H, 2) 内容 CHRGET で使うテキストアドレスの保存
初期値 “:”	CONSAV(F668H, 1) 内容 CHRGET が呼ばれた後の定数のトーク
内容 RESUME NEXT 文のための仮のプログラムの終わり	
● BASIC が内部で使うワーク	
ERRFLG(F414H, 1)	
内容 エラーレコードを保存するためのエリア	

CONTYP(F669H, 1)	内容 保存した定数のタイプ	AUTFLG(F6AAH, 1)	内容 AUTO コマンド有効, 無効フラグ(0以外=有効中, 0=無効中)
CONLO(F66AH, 8)	内容 保存した定数の値	AUTLIN(F6ABH, 2)	内容 一番新しく入力された行番号
MEMSIZ(F672H, 2)	内容 BASIC が使用するメモリの最上位番地	AUTINC(F6ADH, 2)	初期値 10
STKTOP(F674H, 2)	内容 BASIC がスタックとして使用する番地。CLEAR 文により変化する	内容 AUTO コマンドの行番号の増分値	SAVTXT(F6AFH, 2)
TXTTAB(F676H, 2)	内容 BASIC テキストエリアの先頭番地	内容 実行中のテキストのアドレスを保存する領域。主に RESUME 文によるエラー回復で使用される	SAVSTK(F6B1H, 2)
TEMPPT(F678H, 2)	初期値 TEMPST(F67AH)	内容 スタックを保存する領域。主にエラーが起きたとき、エラー回復ルーチンがスタックをリストアするために使用される	ERRLIN(F6B3H, 2)
	内容 テンポラリディスクリプタの空きエリアの先頭番地	内容 エラーが起きたときの行番号	DOT(F6B5H, 2)
TEMPST(F67AH, 3 * NUMTMP)	内容 NUMTEMP 用の領域	内容 何らかの形で画面に表示された、あるいは入力された最新の行番号	ERRRTXT(F6B7H, 2)
DSCTMP(F698H, 3)	内容 ストリング関数の答えのストリングディスクリプタが入る	内容 エラーが起きたテキストのアドレス。主に RESUME 文によるエラー回復で使用される	ONEFLG(F6BBH, 1)
FRETOP(F69BH, 2)	内容 文字列領域の空きエリアの先頭番地	内容 エラールーチンの実行中を示すフラグ。(0以外=実行中, 0=実行中でない)	TEMP2(F6BCH, 2)
TEMP3(F69DH, 2)	内容 ガベージコレクションや USR 関数などに使われる	内容 一時保存用	OLDLIN(F6BEH, 2)
TEMP8(F69FH, 2)	内容 ガベージコレクション用	内容 Ctrl+STOP, STOP 命令, END 命令で中断されたか、あるいは最後に実行された行番号	OLDTXT(F6C0H, 2)
ENDFOR(F6A1H, 2)	内容 FOR 文の次の番地を保存する(ループ時に FOR 文の次から実行するため)	内容 次に実行する文のテキストアドレス	VARTAB(F6C2H, 2)
DATLIN(F6A3H, 2)	内容 READ 文の実行により読まれた DATA 文の行番号	内容 単純変数の開始番地。NEW 文を実行すると (TXTTAB(F676H) の内容 + 2) が設定される	ARYTAB(F6C4H, 2)
SUBFLG(F6A5H, 1)	内容 USR 関数などで配列を使うときのフラグ	内容 配列テーブルの開始番地	
FLGINP(F6A6H, 1)	内容 INPUT や READ で使われるフラグ		
TEMP(F6A7H, 2)	内容 ステートメントコードのための一時保存場所。変数ポインタ、テキストアドレスなどに使用する		
PTRFLG(F6A9H, 1)	内容 変換する行番号がなければ 0、あれば 0 以外		

STREND(F6C6H, 2)

内容 テキストエリアや変数エリアとして使用中であるメモリの最後の番地

DATPTR(F6C8H, 2)

内容 READ 文の実行により読まれたデータのテキストアドレス

DEFTbl(F6CAH, 26)

内容 英文字 1 字に対し変数の型を保持するエリア。CLEAR, DEFSTR, !, #などの型宣言で変化する

●ユーザー関数のパラメータに関するワーク

PRMSTK(F6E4H, 2)

内容 スタック上の以前の定義ブロック(ガベージコレクション用)

PRMLEN(F6E6H, 2)

内容 処理対象のテーブルのバイト数

PARM1(F6E8H, PRMSIZ)

内容 処理対象のパラメータ定義テーブル。PRMSIZ は定義ブロックのバイト数で初期値は 100

PRMPRV(F74CH, 2)

初期値 PRMSTK

内容 以前のパラメータブロックのポインタ(ガベージコレクション用)

PRMLN2(F74EH, 2)

内容 パラメータブロックの大きさ

PARM2(F750H, 100)

内容 パラメータの保存用

PRMFLG(F7B4H, 1)

内容 PARM1 がサーチ済みかどうかを示すフラグ

ARYTA2(F7B5H, 2)

内容 サーチの終点

NOFUNS(F7B7H, 1)

内容 処理対象関数がない場合は 0

TEMP9(F7B8H, 2)

内容 ガベージコレクション用の一時保存場所

FUNACT(F7BAH, 2)

内容 処理対象関数の数

SWPTMP(F7BCH, 8)

内容 SWAP 文の最初の変数の値の一時保存場所

TRCFLG(F7C4H, 1)

内容 トレースフラグ。(0以外=TRACE ON, 0=TRACE OFF)

● Math-Pack 用ワーク

FBUFFR(F7C5H, 43)

内容 マスパックが内部で使用する

DECTMP(F7FOH, 2)

内容 10 進整数を浮動小数点数にするときに使用する

DECTM2(F7F2H, 2)

内容 除算ルーチンの実行時に使用する

DECCTN(F7F4H, 1)

内容 除算ルーチンの実行時に使用する

DAC(F7F6H, 16)

内容 演算の対象となる値を設定するエリア

HOLD8(F806H, 48)

内容 10 進数の乗算のためのレジスタ保存エリア

HOLD2(F836H, 8)

内容 マスパックが内部で使用する

HOLD(F83EH, 8)

内容 マスパックが内部で使用する

ARG(F847H, 16)

内容 DAC(F7F6H)との演算対象となる値を設定するエリア

RNDX(F857H, 8)

内容 最新の乱数を倍精度実数で保存する。RND 関数で設定される

● BASIC インタープリタが使うデータエリア

MAXFIL(F85FH, 1)

内容 ファイル番号の最大値。MAXFILES 文により設定される

FILTAB(F860H, 2)

内容 ファイルデータエリアの先頭番地

NULBUF(F862H, 2)

内容 SAVE, LOAD で BASIC インタープリタが使用するバッファ

PTRFIL(F864H, 2)

内容 アクセス中のファイルのファイルデータがある番地

RUNFLG(F866H, 0)

内容 プログラムをロード後実行するなら 0 でない値。LOAD 文の R オプションなどで使用する

FILNAM(F866H, 11)

内容 ファイル名の保存エリア

FILNM2(F871H, 11)

内容 ファイル名の保存エリア

NLONLY(F87CH, 1)

内容 プログラムロード中は 0 でない値となる

SAVEND(F87DH, 2)

内容 セーブするマシン語プログラムの最終番地

FNKSTR(F87FH, 160)

内容 ファンクションキーの文字列保存エリア
(16 文字 × 10)

CGPNT(F91FH, 3)

内容 ROM 上の文字フォント格納アドレス

NAMBAS(F922H, 2)

内容 現在のパターンネーム・テーブルのベース番地

CGPBAS(F924H, 2)

内容 現在のパターン・ジェネレーター・テーブルのベース番地

PATBAS(F926H, 2)

内容 現在のスプライト・ジェネレーター・テーブルのベース番地

ATRBAS(F928H, 2)

内容 現在のスプライトアトリビュート・テーブルのベース番地

CLOC(F92AH, 2)

内容 グラフィックルーチンが内部で使用する

CMASK(F92CH, 1)

内容 グラフィックルーチンが内部で使用する

MINDEL(F92DH, 2)

内容 グラフィックルーチンが内部で使用する

MAXDEL(F92FH, 2)

内容 グラフィックルーチンが内部で使用する

● CIRCLE 文で使うデータエリア

ASPECT(F931H, 2)

内容 円の縦横の比率。CLRCLE 文の <比率> により設定される

CENCNT(F933H, 2)

内容 CIRCLE 文が内部で使用する

CLINEF(F935H, 1)

内容 円の中心へ線を引くかどうかのフラグ。
CIRCLE 文の <角度> で指定

CNPNTS(F936H, 2)

内容 プロットする点

CPLOT(F938H, 1)

内容 CIRCLE 文が内部で使用する

CPCNT(F939H, 2)

内容 円の 1/8 分割の数

CPCNT8(F93BH, 2)

内容 CIRCLE 文が内部で使用する

CRCSUM(F93DH, 2)

内容 CIRCLE 文が内部で使用する

CSTCNT(F93FH, 2)

内容 CIRCLE 文が内部で使用する

CSCLXY(F941H, 1)

内容 x と y のスケール

CSAVEA(F942H, 2)

内容 ADVGRP の保存エリア

CSAVEM(F944H, 1)

内容 ADVGRP の保存エリア

CXOFF(F945H, 2)

内容 中心からの x のオフセット

CYOFF(F947H, 2)

内容 中心からの y のオフセット

● PAINT 文で使用するデータエリア

LOHMSK(F949H, 1)

内容 PAINT 文が内部で使用する

LOHDIR(F94AH, 1)

内容 PAINT 文が内部で使用する

LOHADR(F94BH, 2)

内容 PAINT 文が内部で使用する

LOHCNT(F94DH, 2)

内容 PAINT 文が内部で使用する

SKPCNT(F94FH, 2)

内容 スキップカウント

MIVCNT(F951H, 2)

内容 移動カウント

PDIREC(F953H, 1)

内容 ペイントの方向

LFPROG(F954H, 1)

内容 PAINT 文が内部で使用する

RTPROG(F955H, 1)

内容 PAINT 文が内部で使用する

● PLAY で使うデータエリア

MCLTAB(F956H, 2)

内容 PLAY マクロ、あるいは DROW マクロのテーブルの先頭を指す

MCLFLG(F958H, 1)

内容 PLAY/DRAW の指示

QUETAB(F959H, 24)

内容 キューテーブル

+ 0 : PUT オフセット

+1 : GET オフセット
+2 : バックアップ・キャラクタ
+3 : キューの長さ
+4 +5 : キューのアドレス

QUEBAK(F971H, 4)

内容 BCKQ で使用する

VOICAQ(F975H, 128)

内容 音声 1 のキュー(1=a)

VOICBQ(F9F5H, 128)

内容 音声 2 のキュー(2=b)

VOICCQ(FA75H, 128)

内容 音声 3 のキュー(3=c)

● MSX2 で追加されたワークエリア

DPPAGE(FAF5H, 1)

内容 ディスプレイページ番号

ACPAGE(FAF6H, 1)

内容 アクティブページ番号

AVCSAV(FAF7H, 1)

内容 AV コントロールポートの保存

EXBRSA(FAF8H, 1)

内容 SUB-ROM のスロットアドレス

CHRCNT(FAF9H, 1)

内容 バッファ中のキャラクタのカウント。ローマ字カナ変換で使用(値は 0 <= n <= 2)

ROMA(FAFAH, 2)

内容 バッファ中のキャラクタを入れておくエリア。ローマ字カナ変換で使用

MODE(FAFCH, 1)

内容 ローマ字カナ変換のモードスイッチと VRAM サイズ

〔K000WVVC〕

1 = 変換する, 0 = 変換しない

00=16KVRAM

01=64KVRAM

10=128KVRAM

0 = マスクする, 1 = マスクしない
スクリーン 0~3 において VRAM アドレスを指定するときに

3FFFH と AND をとって設定するかどうかのフラグ、SCREEN4
~8 ではつねにマスクしない

1 = カタカナ, 0 = ひらがな

NORUSE(FAFDH, 1)

内容 未使用

XSAVE(FAFEH, 2)

内容 (I OOOOOOO XXXXXXXX)

YSAVE(FB00H, 2)

内容 (×OOOOOOO YYYYYYYY)

I = 1 ライトペンのインターラプト
要求あり

0000000 = 符号なしオフセット

XXXXXXXX = X 座標

YYYYYYYY = Y 座標

LOGOPR(FB02H, 1)

内容 ロジカル・オペレーション・コード

● RS-232C で使うデータエリア

RSTMP(FB03H, 50)

内容 RS-232C またはディスクのワークエリ

ア

TOCNT(FB03H, 1)

内容 RS-232C ルーチンが内部で使用する

RSFCB(FB04H, 2)

内容 FB04H+0 : RS-232C の LOW アドレス

FB04H+1 : RS-232C の HIGH アドレス

RSIQLN(FB06H, 1)

内容 RS-232C ルーチンが内部で使用する

MEXBIH(FB07H, 5)

内容 FB07H+0 : RST 30H(0F7H)

FB07H+1 : バイトデータ

FB07H+2 : (Low)

FB07H+3 : (High)

FB07H+4 : RET (0C9H)

OLDSTT(FB0CH, 5)

内容 FB0CH+0 : RST 30H(0F7H)

FB0CH+1 : バイトデータ

FB0CH+2 : (Low)

FB0CH+3 : (CH) (Hogh)
 FB0CH+4 : RET (0C9H)

OLDINT(FB12H, 5)

内容 FB12H+0 : RST 30H (0F7H)
 FB12H+1 : バイトデータ
 FB12H+2 : (Low)
 FB12H+3 : (Hogh)
 FB12H+4 : RET (0C9H)

DEVNUM(FB17H, 1)

内容 RS232C ルーチンが内部で使用する

DATCNT(FB18H, 3)

内容 FB18H+0 : バイトデータ
 FB18H+1 : バイトポインタ
 FB18H+2 : バイトポインタ

ERRORS(FB1BH, 1)

内容 RS-232C ルーチンが内部で使用する

FLAGS(FB1BH, 1)

内容 RS-232C ルーチンが内部で使用する

ESTBLS(FB1DH, 1)

内容 RS-232C ルーチンが内部で使用する

COMMSK(FB1EH, 1)

内容 RS-232C ルーチンが内部で使用する

LSTCOM(FB1FH, 1)

内容 RS-232C ルーチンが内部で使用する

LSTMOD(FB20H, 1)

内容 RS-232C ルーチンが内部で使用する

● DOS が使用するデータエリア

リザーブ(FB21H~FB34H)

内容 DOS が使用する

**● PLAY 文が使用するデータエリア
(以下は MSX1 と共通)**

PRSCNT(FB35H, 1)

内容 D1~D0 文字列パース
 D7=0 1 パス

SAVSP(FB36H, 2)

内容 プレー中のスタックポインタを保存

VOICEN(FB38H, 1)

内容 解釈中の現在の音声

SAVVOL(FB39H, 2)

内容 休止のために音量を保存する

MCLLEN(FB39H, 1)

内容 PLAY 文が内部で使用する

MCLPTR(FB3CH, 2)

内容 PLAY 文が内部で使用する

QUEUEN(FB3EH, 1)

内容 PLAY 文が内部で使用する

MUSICF(FC3FH, 1)

内容 音楽演奏用の割り込みフラグ

PLYCNT(FB40H, 1)

内容 キューに格納されている PLAY 文の数

**● 音声スタイル・データエリアからの変位
(変位は 10 進数)**

METREX(+0, 2)

内容 タイマカウントダウン

VCXLEN(+2, 1)

内容 この音声のための MCLLEN

VCXPTR(+3, 2)

内容 この音声のための MCLPTR

VCXSTP(+5, 2)

内容 スタックポインタの先頭を保存

QLENGX(+7, 1)

内容 キューに格納されるバイト数

NTICSX(+8, 2)

内容 新しいカウントダウン

TONPRX(+10, 2)

内容 トーンの周期を設定するエリア

AMPPRX(+12, 1)

内容 音量、エンベロープの区別

ENVPRX(+13, 2)

内容 エンベロープの周期を設定するエリア

OCTAVX(+15, 1)

内容 オクターブを設定するエリア

NOTELEX(+16, 1)

内容 音の長さを設定するエリア

TEMPOX(+17, 1)

内容 テンポを設定するエリア

VOLUMX(+18, 1)

内容 音量を設定するエリア

ENVLPX(+19, 14)

内容 エンベロープの波形を設定するエリア

MCLSTX(+33, 3)

内容 スタックの保存場所

MCLSEX(+36, 1)

内容 初期化スタック

VCBSIZ(+37, 1)

内容 スタイックバッファの大きさ

●音声スタティック・データエリア

VCBA(FB41H, 37)

内容 音声 0 のスタティックデータ

VCBB(FB66H, 37)

内容 音声 1 のスタティックデータ

VCBC(FB8BH, 37)

内容 音声 2 のスタティックデータ

●データエリア

ENSTOP(FBB0H, 1)

内容 [SHIFT+Ctrl+GRAPH+かなキー]によるウォームスタートを可能にするフラグ(0=不可能, 0以外=可能)

BASROM(FBB1H, 1)

内容 BASIC テキストの存在場所を示す(0=RAM 上, 0以外=ROM 上)

LINTTB(FBB2H, 24)

内容 ラインターミナルテーブル。テキスト画面の各行の情報を保持するエリア

FSTPOS(FBCAH, 2)

内容 BIOS の INLIN(00B1H)で入力した行の最初の文字の位置

CODSAV(FBCCH, 1)

内容 カーソルが重なった部分のキャラクタを保存するエリア

FNKSWI(FBCDH, 1)

内容 KEY ON 時にどのファンクションキーが表示されているか表す(1=F1~F5 が表示, 0=F6~F10 が表示)

FNKFLG(FBCEH, 10)

内容 ON KEY GOSUB 文により定義された行の実行を許可, 禁止, 停止するかファンクションキーごとに保存するためのエリア。KEY(n)ON/OFF/STOP 文により設定される(0=KEY(n)OFF/STOP, 1=KEY(n)ON)

ONGSBF(FBD8H, 1)

内容 TRPTBL(FC4CH)で待機中のイベントが発生したかどうかのフラグ

CLIKFL(FBD9H, 1)

内容 キークリック・フラグ

OLDKEY(FBDAH, 11)

内容 キーマトリクスの状態(旧)

NEWKEY(FBE5H, 11)

内容 キーマトリクスの状態(新)

KEYBUF(FBF0H, 40)

内容 キーボードバッファ

LINWRK(FC18H, 40)

内容 スクリーンハンドラが使う一時保存場所

PATWRK(FC40H, 8)

内容 パターンコンバータが使う一時保存場所

BOTTOM(FC48H, 2)

内容 実装した RAM の先頭(低位)番地。

MSX2 では通常 8000H

HIMEM(FC4AH, 2)

内容 利用可能なメモリーの上位番地。CLEAR 文の<メモリの上限>により設定される

TRPTBL(FC4CH, 78)

内容 割り込み処理で使うトランプテーブル。ひとつのテーブルは 3 バイトで構成される 1 バイト目が ON/OFF/STOP 状態を表し、残りが分岐先のテキストアドレスを表す

FC4CH～FC69H(3*10 バイト) ←

ON KEY GOSUB で使用

FC6AH～FC6CH(3*1 バイト) ←

ON STOP GOSUB で使用

FC6DH～FC6FH(3*1 バイト) ←

ON SPRITE GOSUB で使用

FC70H～FC7EH(3*5 バイト) ←

ON STRIG GOSUB で使用

FC7FH～FC81H(3*1 バイト) ←

ON INTERVAL GOSUB で使用

FC82H～FC99H ← 拡張用

RTYCNT(FC9AH, 1)

内容 BASIC が内部で使用する

INTFLG(FC9BH, 1)

内容 Ctrl+STOP が押された場合など、ここに 03H を入れることによりストップする

PADY(FC9CH, 1)

内容 パドルの Y 座標

PADX(FC9DH, 1)

内容 パドルの X 座標

JIFFY(FC9EH, 2)

内容 PLAY 文が内部で使用する

INTVAL(FCA0H, 2)

内容 インターバルの間隔。ON INTERVAL GOSUB 文により設定される

INTCNT(FCA2H, 2)

内容 インターバルのためのカウンタ

LOWLIM(FCA4H, 1)	GRPACX(FCB7H, 2)
内容 カセットテープからの読み込み中に使う	内容 グラフィックアキュムレータ(X座標)
WINWID(FCA5H, 1)	GRPACY(FCB9H, 2)
内容 カセットテープからの読み込み中に使う	内容 グラフィックアキュムレータ(Y座標)
GRPHED(FCA6H, 1)	DRWFGL(FCBBH, 1)
内容 グラフィックキャラクタを出す時のフラグ(1=グラフィックキャラクタ, 0=通常の文字)	内容 DRAW 文で使用するフラグ
ESCCNT(FCA7H, 1)	DRWSCL(FCBCB, 1)
内容 エスケープコードがきてから何文字目かをカウントするエリア	内容 DRAW スケーリングファクタ(0=スケーリングしない, 0以外=する)
INSFLG(FCA8H, 1)	DRWANG(FCBDH, 1)
内容 挿入モードのフラグ(0=通常モード, 0以外=挿入モード)	内容 DRAW するときの角度
CSRSFW(FCA9H, 1)	RUNBNF(FCBEH, 1)
内容 カーソル表示の有無(0=表示なし, 0以外=表示あり)	内容 BLOAD 中, BSAVE 中, どちらでもない, のいずれかを表すフラグ
LOCATE 文の<カーソルスイッチ>により設定される	SAVENT(FCBFH, 2)
CSTYLE(FCAAH, 1)	内容 BSAVE の開始番地
内容 カーソルの形(0=■, 0以外=_)	EXPTBL(FCC1H, 4)
CAPST(FCABH, 1)	内容 拡張スロット用のフラグテーブル。各スロットの拡張の有無
内容 CAPS キーの状態(0=CAP OFF, 0以外=CAP ON)	SLTTBL(FCC5H, 4)
KANAST(FCACH, 1)	内容 各拡張スロットレジスタ用の、現在のスロット選択状況
内容 かなキーの状態(0=かな OFF, 0以外=かな ON)	SLTATTR(FCC9H, 64)
KANAMD(FCADH, 1)	内容 各スロット用に属性を保存する
内容 かなキー配列の状態(0=50 音配列, 0以外=JIS 配列)	SLTWRK(FD09, 128)
FLBMEM(FCAEH, 1)	内容 各スロット用に特定のワークエリアを確保する
内容 BASIC プログラムをロード中は 0	PROCNM(FD89H, 16)
SCRMOD(FCAFH, 1)	内容 拡張ステートメント(CALL 文の後), 拡張デバイス(OPEN の後)の名前が入る。0 は終わり
内容 現在のスクリーンモードの番号	DEVICE(FD99H, 1)
OLDSCR(FCBOH, 1)	内容 カートリッジ用の装置識別に使用する
内容 スクリーンモード保存エリア	● フック
CASPRV(FCB1H, 1)	H.KEYI(FD9AH)
内容 CAS : が使う文字保存場所	意味 MSXIO 割り込み処理の始め 使用目的 RS-232C などの割り込み処理を追加する
BRDATTR(FCB2H, 1)	H.TIMI(FD9FH)
内容 PAINT で使用する境界色のカラーコード。PAINT 文の<境界色>で指定される	意味 MSXIO タイマ割り込み処理 使用目的 タイマー割り込み処理を追加するため
GXPOS(FCB3H, 2)	H.CPH(FDA4H)
内容 X 座標	意味 MSXIO CHPUT(1 文字出力) の始め 使用目的 他のコンソール出力装置をつなぐため
GYPOS(FCB5H, 2)	
内容 Y 座標	

H. DSPC(FDA9H)	意味 MSXIO DSPCSR(コンソール表示)の始め 使用目的 他のコンソール出力装置をつなぐため	意味 MSXINL INLIN(1行入力)の始め 使用目的 他のコンソール入力装置や他の入力方式を使うため
H. ERAC(FDAEH)	意味 MSXIO ERACSR(コンソール消去)の始め 使用目的 他のコンソール出力装置をつなぐため	H. INLI(FDE5H)
H. DSPF(FDB3H)	意味 MSXIO DSPFNK(ファンクションキー表示)の始め 使用目的 他のコンソール出力装置をつなぐため	意味 MSXINL INLIN(1行入力)の始め 使用目的 他のコンソール入力装置や他の入力方式を使うため
H. ERAF(FDB8H)	意味 MSXIO ERAFNK(ファンクションキー消去)の始め 使用目的 他のコンソール出力装置をつなぐため	H. ONGO(FDEAH)
H. TOTE(FDBDH)	意味 MSXIO TOTEXT(画面をテキストモードにする)の始め 使用目的 他のコンソール出力装置をつなぐため	意味 MSXSTS INGOTP(ON GOTO)の始め 使用目的 他の割り込み処理装置を使うため
H. CHGE(FDC2H)	意味 MSXIO CHGET(1文字取り出し)の始め 使用目的 他のコンソール出力装置をつなぐため	H. DSKO(FDEFH)
H. INIP(FDC7H)	意味 MSXIO INIPAT(文字パターンの初期化)の始め 使用目的 他の文字セットを使うため	意味 MSXSTS DSKO \$(ディスク出力)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため
H. KEYC(FDCCH)	意味 MSXIO KEYCOD(キーコード変換)の始め 使用目的 他のキー配置を使うため	H. SETS(FDF4H)
H. KYEA(FDD1H)	意味 MSXIO NMI ルーチン(Key Easy)の始め 使用目的 他のキー配置を使うため	意味 MSXSTS SETS(セット アトリビュート)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため
H. NMI(FDD6H)	意味 MSXIO NMI(ノンマスカブルインタラプト)の始め 使用目的 NMI 处理をするため	H. NAME(FDF9H)
H. PINL(FDBBH)	意味 MSXINL PINLIN(1行入力)の始め 使用目的 他のコンソール入力装置や他の入力方式を使うため	意味 MSXSTS NAME(リネーム)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため
H. QINL(FDEOH)	意味 MSXINL QINLIN("?" を表示して1行入力)の始め	H. KILL(FDFFH)
		意味 MSXSTS KILL(ファイルの削除)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため
		H. IPL(FE03H)
		意味 MSXSTS IPL(初期プログラムのロード)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため
		H. COPY(FE08H)
		意味 MSXSTS COPY(ファイルのコピー)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため
		H. CMD(FE0DH)
		意味 MSXSTS CMD(拡張コマンド)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため
		H. DSKF(FE12H)
		意味 MSXSTS DSKF(ディスクの空き)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため
		H. DSKI(FE17H)
		意味 MSXSTS DSKI(ディスク入力)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため
		H. ATTR(FE1CH)
		意味 MSXSTS ATTR \$(アトリビュート)の始め 使用目的 ディスク装置を接続するため

H. LSET(FE21H)

意味 MSXSTS LSET(左詰め代入)の始め
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. RSET(FE26H)

意味 MSXSTS RSET(左詰め代入)の始め
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. FIEL(DE2BH)

意味 MSXSTS FIELD(フィールド)の始め
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. MKI\$(FE30H)

意味 MSXSTS MKI\$(整数作成)の始め
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. MKS\$(FE35H)

意味 MSXSTS MKS\$(単精度実数作成)の始め
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. MKD\$(FE3AH)

意味 MSXSTS MKD\$(倍精度実数作成)の始め
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. CVI(FE3FH)

意味 MSXSTS CVI(整数変換)の始め
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. CVS(FE44H)

意味 MSXSTS CVS(単精度実数変換)の始め
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. CVD(FE49H)

意味 MSXSTS CVD(倍精度実数変換)の始め
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. GETP(FE4EH)

意味 SPDSK GETPTR(ファイルポインタ取り出し)
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. SETF(FE53H)

意味 SPCDSK SETFIL(ファイルポインタ設定)
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. NOFO(FE58H)

意味 SPDSK NOFOR(OPEN 文に FOR がない)
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. NUL0(FE5DH)

意味 SPCDSK NULOPN(空きファイルをオープン)
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. NTFL(FE62H)

意味 SPCDSK NTFLO(ファイル番号が 0 でない)
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. MERG(FE67H)

意味 SPCDSK MERGE(プログラムファイルのマージ)
使用目的 ディスク装置を接続するため

H. SAVE(FE6CH)

意味 SPCDSK SAVE(セーブ)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. BINS(FE71H)

意味 SPCDSK BINSAV(機械語セーブ)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. BINL(FE76H)

意味 SPCDSK BINLOD(機械語ロード)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. FILE(FD7BH)

意味 SPCDSK FILES(ファイル名の表示)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. DGET(FE80H)

意味 SPCDSK DGET(ディスク GET)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. FILO(FE85H)

意味 SPCDSK FILOU1(ファイル出力)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. IND\$ (FE8AH)

意味 SPCDSK INDSKC(ディスクの属性を入力)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. RSLF(FE8FH)

意味 SPCDSK 前のドライブを再び選択する

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. SAVD(FE94H)

意味 SPCDSK 現在選択しているドライブを保存する

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. LOC(FE99H)

意味 SPCDSK LOC 関数(場所を示す)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. LOF(FE9EH)

意味 SPCDSK LOF 関数(ファイルの長さ)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H. EOF(FEA3H)

意味 SPCDSK EOF 関数(ファイルの終わり)

使用目的 ディスク装置を接続するため

H.FPOS(FEA8H)	H.ERRP(FFEDH)
意味 SPCDSK FPOS 関数(ファイルの場所)	意味 BINTRP ERRPRT(エラー表示)
使用目的 ディスク装置を接続するため	
H.BAKU(FEADH)	H.ERRF(FF02H)
意味 SPCDSK BAKUPT(バックアップ)	意味 BINTRP
使用目的 ディスク装置を接続するため	
H.PARD(FEB2H)	H.READ(FF07H)
意味 SPCDEV PARDEV(装置名の取り出し)	意味 BINTRP READY
使用目的 論理装置名を拡張するため	
H.NODE(FEB7H)	H.MAIN(FF0CH)
意味 SPCDEV NODEVN(装置名なし)	意味 BINTRP MAIN
使用目的 省略装置名を他の装置に設定する	
H.POSD(FEBCH)	H.DIRD(FF11H)
意味 SPCDEV POSDSK	意味 BINTRP DIRDO(ダイレクトステートメント実行)
使用目的 ディスク装置を接続するため	
H.DEVN(FEC1H)	H.FINI(FF16H)
意味 SPCDEV DEVNAM(装置名の処理)	意味 BINTRP
使用目的 論理装置名を拡張するため	
H.GEND(FEC6H)	H.FINE(FF1BH)
意味 SPCDEV GENDSP(装置割り当て)	意味 BINTRP
使用目的 論理装置名を拡張するため	
H.RUNC(FECBH)	H.CRUN(FF20H)
意味 BIMISC RUNC(RUN のためのクリア)	意味 BINTRP
H.CLEA(FEDOH)	H.CRUS(FF25H)
意味 BIMISC CLEARC(CLEAR 文のためのクリア)	意味 BINTRP
H.LOPD(FED5H)	H.ISRE(FF2AH)
意味 BIMISC LOPDFT(繰り返しと省略値の設定)	意味 BINTRP
使用目的 変数に他の省略値を使うため	
H.STKE(FEDAH)	H.NTFN(FF2FH)
意味 BIMISC STKERR(スタックエラー)	意味 BINTRP
H.ISFL(FEDFH)	H.NOTR(FF34H)
意味 BIMISC ISFLIO(ファイルの入出力かどうか)	意味 BINTRP
H.OUTD(FEE4H)	H.SNGF(FF39H)
意味 BIO OUTDO(OUT を実行)	意味 BINTRP
H.CRDO(FEE9H)	H новости(FF3EH)
意味 BIO CRDO(CRLF を実行)	意味 BINTRP
H.DSKC(FEEEH)	H.GONE(FF43H)
意味 BIO DSKCHI(ディスクの属性を入力)	意味 BINTRP
H.DOGR(FEF3H)	H.CHRG(FF48H)
意味 GENGRP DOGRPH(グラフィック処理を実行)	意味 BINTRP
H.PRGE(FEF8H)	H.RETU(FF4DH)
意味 BINTRP PRGEND(プログラム終了)	意味 BINTRP
	H.PRTF(FF52H)
	意味 BINTRP
	H.COMP(FF57H)
	意味 BINTRP
	H.FINP(FF5CH)
	意味 BINTRP
	H.TRMN(FF61H)
	意味 BINTRP
	H.FRME(FF66H)
	意味 BINTRP
	H.NTPL(FF6BH)
	意味 BINTRP

H.EVAL(FF70H)
意味 BINTRP
 H.OKNO(FF75H)
意味 BINTRP
 H.FING(FF7AH)
意味 BINTRP
 H.ISMI(FF7FH)
意味 BINTRP ISMID \$(MID\$ かどうか)
 H.WIDT(FF84H)
意味 BINTRP WIDTHS(WIDTH)
 H.LIST(FF89H)
意味 BINTRP LIST
 H.BUFL(FF8EH)
意味 BINTRP BUFLIN(バッファライン)
 H.FRQI(FF93H)
意味 BINTRP FRQINT
 H.SCNE(FF98H)
意味 BINTRP
 H.FRET(FF9DH)
意味 BISTR S FRETMP
 H.PTRG(FFA2H)
意味 BIPTRG PTRGET(ポインタ取り出し)
使用目的 省略値以外の変数を使用するため
 H.PHYD(FFA7H)
意味 MSXIO PHYDIO(物理ディスク入出力)
使用目的 ディスク装置を接続するため
 H.FORM(FFA8H)
意味 MSXIO FORMAT(ディスクをフォーマットする)
使用目的 ディスク装置を接続するため
 H.ERRO(FFB1H)
意味 BINTRP ERROR
使用目的 アプリケーション・プログラムのエラー処理
 H.LPTO(FFB6H)
意味 MSXIO LPTOUT (プリンタ出力)
使用目的 省略値以外のプリンタを使うため
 H.LPTS(FFBBH)
意味 MSXIO LPTSTT(プリンタの状態)
使用目的 省略値以外のプリンタを使うため
 H.SCRE(FFCOH)
意味 MSXSTS SCREEN 文の入口
使用目的 SCREEN 文を拡張するため
 H.PLAY(FFC5H)
意味 MSXSTS PLAY 文の入口
使用目的 PLAY 文を拡張するため

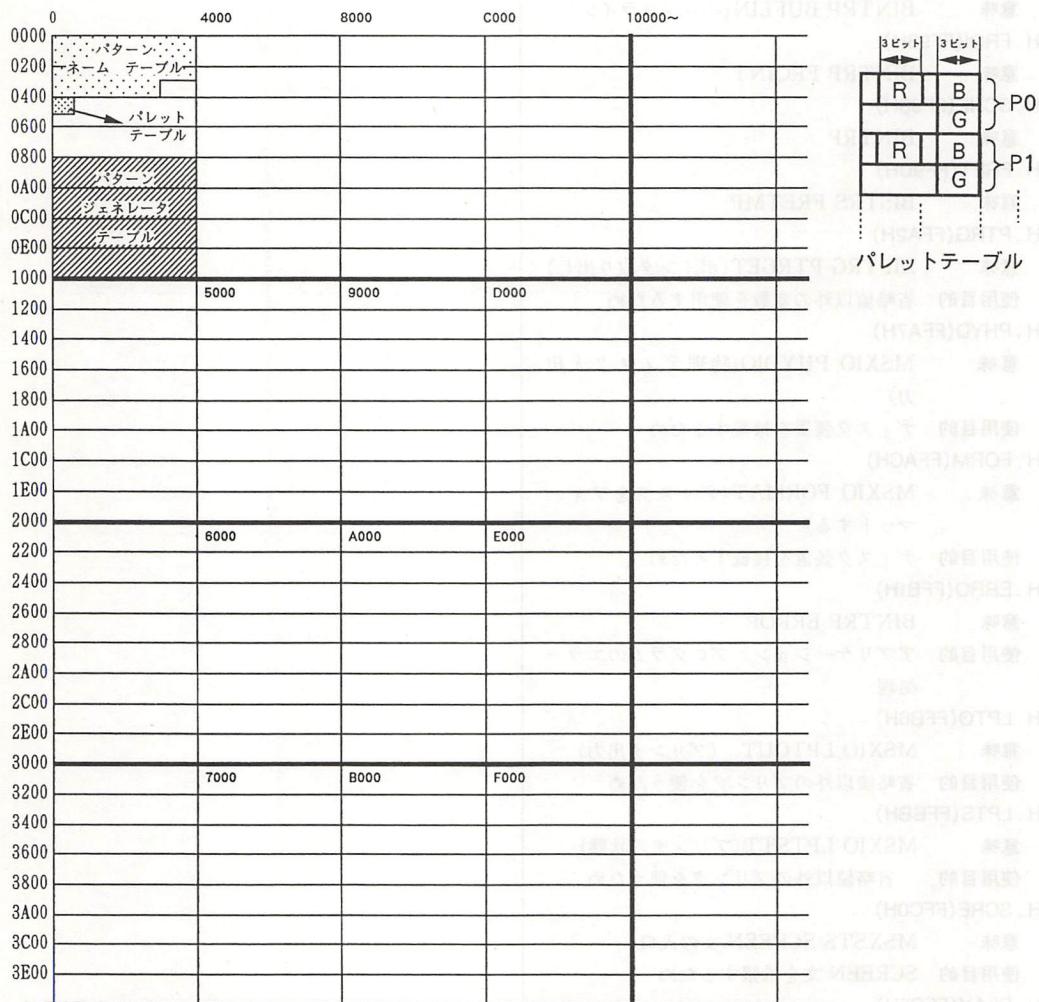
●拡張 BIOS 用

FCALL(FFCAH)
内容 拡張 BIOS が使用する フック
 DISINT(FFCFH)
内容 DOS が使用する
 ENAINT(FFD4H)
内容 DOS が使用する

A.5 VRAMマップ

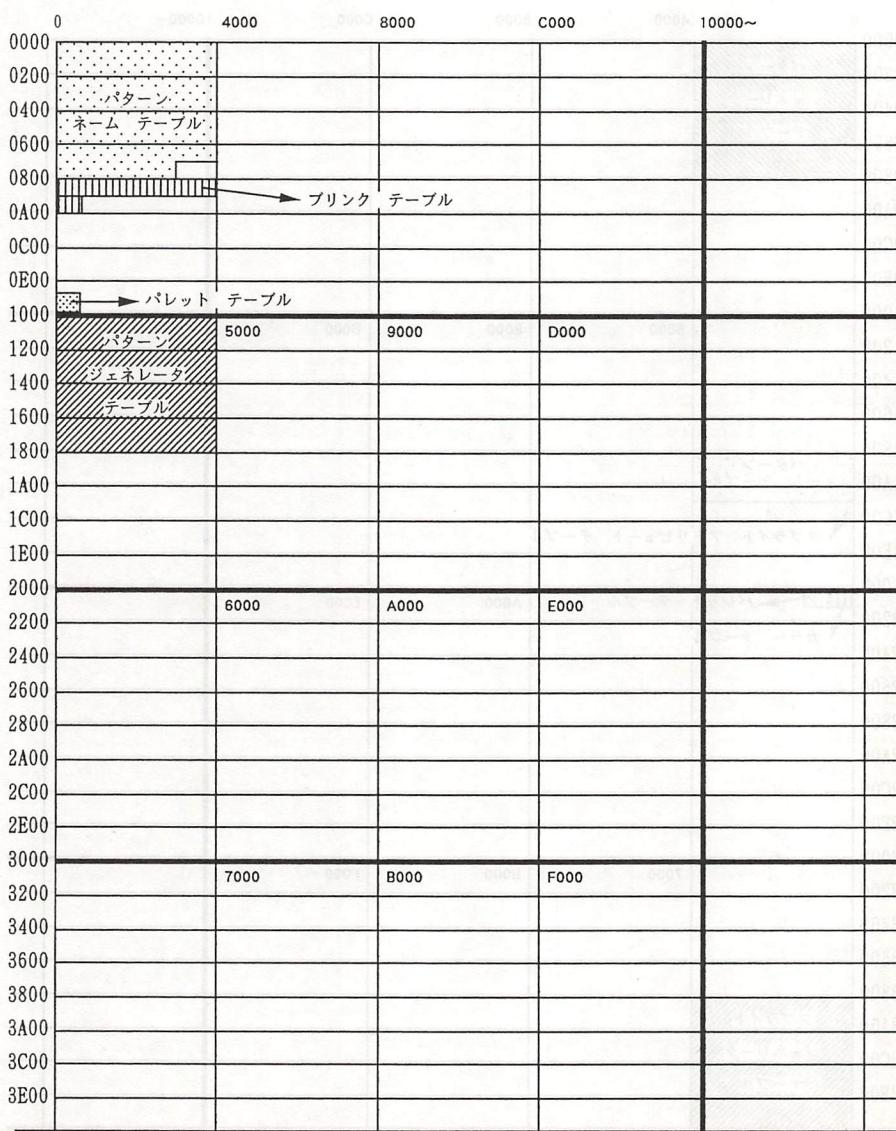
SCREEN 0, (WIDTH 40)

TEXT 1



S C R E E N 0 , (W I D T H 8 0)

T E X T 2



SCREEN 1

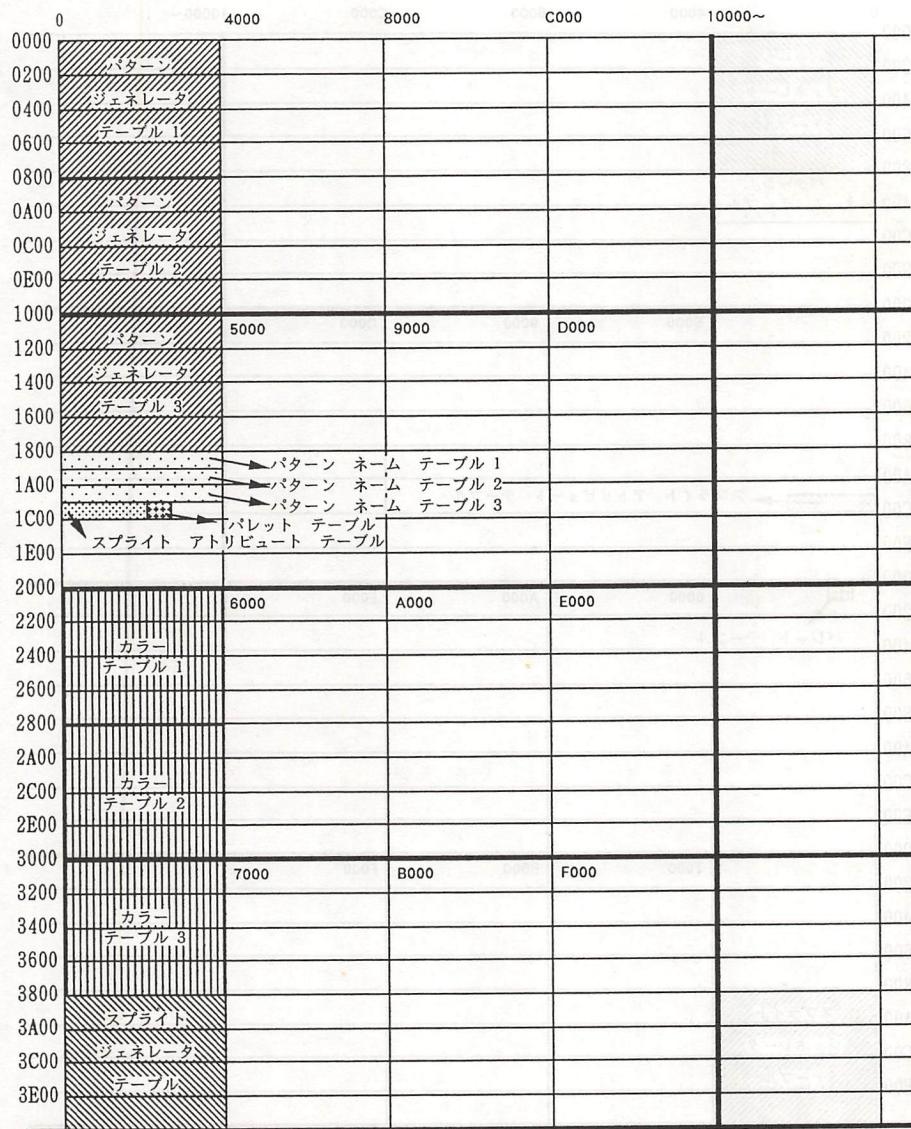
GRAPHIC 1

	4000	8000	C000	10000~
0000				
0200	パターン			
0400	ジェネレータ			
0600	テーブル			
0800				
0A00				
0C00				
0E00				
1000	5000	9000	D000	
1200				
1400				
1600				
1800				
1A00	パターン			
1B00	ネーム テーブル			
1C00	スライド アトリビュート テーブル			
1E00				
2000	パレット テーブル	A000	E000	
2200	カラー テーブル			
2400				
2600				
2800				
2A00				
2C00				
2E00				
3000	7000	B000	F000	
3200				
3400				
3600				
3800	スライド			
3A00	ジェネレータ			
3C00	テーブル			
3E00				

3FFF

SCREEN 2

GRAPHIC 2



S C R E E N 3

M U L T I C O L O R

	0	4000	8000	C000	10000~
0000					
0200	パターン				
0400	ジェネレータ				
0600	テーブル				
0800	パターン				
0A00	ネーム テーブル				
0C00					
0E00					
1000		5000	9000	D000	
1200					
1400					
1600					
1800					
1A00					
1C00	スライト アトリビュート テーブル				
1E00					
2000					
2200	6000		A000	E000	
2400	パレット テーブル				
2600					
2800					
2A00					
2C00					
2E00					
3000		7000	B000	F000	
3200					
3400					
3600					
3800					
3A00	スライト				
3C00	ジェネレータ				
3E00	テーブル				

SCREEN 4

GRAPHIC 3

	0	4000	8000	C000	10000~
0000	パターン				
0200	シェネレータ				
0400	テーブル 1				
0600					
0800					
0A00	パターン				
0C00	シェネレータ				
0E00	テーブル 2				
1000	パターン	5000	9000	D000	
1200	シェネレータ				
1400	テーブル 3				
1600					
1800					
1A00					
1C00					
1E00					
2000		6000	A000	E000	
2200	カラー				
2400	テーブル 1				
2600					
2800					
2A00	カラー				
2C00	テーブル 2				
2E00					
3000		7000	B000	F000	
3200	カラー				
3400	テーブル 3				
3600					
3800					
3A00	スライト				
3C00	シェネレータ				
3E00	テーブル				

SCREEN 5,6

GRAPHIC 4,5

	0	4000	8000	C000	10000~
0000					
0200					
0400					
0600					
0800					
0A00					
0C00					
0E00					
1000		5000	9000	D000	
1200					
1400					
1600					
1800	パターン				
1A00	ネーム				
1C00	テーブル				
1E00					
2000		192 LINE			
2200		6000	A000	E000	
2400					
2600					
2800					
2A00		212 LINE			
2C00	6A00				
2E00					
3000		7000	B000	F000	
3200					
3400					
3600			▶	スライト カラー テーブル	
3800			▶	パレット テーブル	
			▶	スライト アトリビュート テーブル	
3A00	スライト				
3C00	ジェネレータ				
3E00	テーブル				

SCREEN 7, 8

GRAPHIC 6, 7

	0	4000	8000	C000	10000~
0000					
0200					
0400					
0600					
0800					
0A00					
0C00					
0E00					
1000		5000		9000	D000
1200					
1400					212 LINE
1600					D400
1800		パターン			
1A00		ネーム			
1C00		テーブル			
1E00					
2000		6000		A000	E000
2200					
2400					
2600					
2800					
2A00					
2C00					
2E00					
3000		7000		B000	F000
3200					スプライト
3400					ジェネレータ
3600					テーブル
3800					スプライト カラー テーブル
3A00					パレット テーブル
3C00					スプライト アトリビュート テーブル
3E00					192 LINE

A.6 I/O マップ^o

00H ~ 3FH	ユーザー定義
40H ~ 7FH	リザーブ
80H ~ 87H	RS-232C用 80H 8251 データ 81H 8251 ステータス/コマンド 82H ステータスリード/インターラプトマスク 83H 未使用 84H 8253 85H 8253 86H 8253 87H 8253
88H ~ 8BH	MSX1アダプタのためのVDP(V9938)用I/Oポート ここはMSX1にV9938をのせたときのI/Oとなります。VDPを直接I/Oアクセスする場合は必ずメインROMの6番地と7番地を調べ、ポートアドレスを確認して下さい。
8CH ~ 8DH	モデム用
8EH ~ 8FH	リザーブ
90H ~ 91H	プリンタポート
90H	ビット0:ストローブ出力(ライト)
91H	ビット1:ステータス入力(リード) プリントデータ
92H ~ 97H	リザーブ
98H ~ 9BH	VDP(V9938)MSX2用 98H VRAMアクセス 99H コマンドレジスタアクセス 9AH パレットレジスタアクセス(ライトのみ) 9BH レジスタ間接指定(ライトのみ)
9CH ~ 9FH	リザーブ
A0H ~ A3H	サウンドジェネレータ(AY-3-8910)
A0H	アドレスラッチ
A1H	データライト
A2H	データリード
A4H ~ A7H	リザーブ
A8H ~ ABH	パラレルポート(8255) A8H ポートA A9H ポートB AAH ポートC ABH モードセット
ACH ~ AFH	MSXエンジン(1チップMSX I/O)
B0H ~ B3H	拡張メモリ(ソニー仕様)(8255) B0H ポートA, アドレス(A0-A7) B1H ポートB, アドレス(A8-A10, A13-A15), コントロール, R/W B2H ポートC, アドレス(A11-A12), データ(D0-D7) B3H モードセット
B4H ~ B5H	CLOCK-IC (RP-5C01) B4H アドレスラッチ B5H データ

B6H～B7H	リザーブ
B8H～BBH	ライトベンコントロール(サンヨー仕様) B8H リード／ライト B9H リード／ライト BAH リード／ライト BBH ライトのみ
BCH～BFH	VHDコントロール(JVC)(8255) BCH ポートA BDH ポートB BEH ポートC BFH モードセット
C0H～C1H	MSXオーディオ
C2H～C7H	リザーブ
C8H～CFH	MSXインターフェイス
D0H～D7H	フロッピーディスクコントローラ(FDC) フロッピーディスクコントローラは外部からの信号によって遮断される機能を持つような仕様になっており、FDCがアクセスされるときに限って使用可能となります。この機構により、システムが複数の異なるFDCインターフェイスを扱うことが可能になります。
D8H～D9H	漢字ROM(東芝仕様) D8H b5-b0 下位アドレス(ライトのみ) D9H b5-b0 上位アドレス(ライト) b7-b0 データ(リード)
DAH～DBH	漢字のための将来の拡張用
DCH～F4H	リザーブ
F5H	システムコントロール(ライトのみ) ビットを1にすることによりI/Oデバイスが使用可能になります b0 漢字ROM b1 漢字のためリザーブ b2 MSXオーディオ b3 スーパーインポーズ b4 MSXインターフェイス b5 RS-232C b6 ライトペン b7 CLOCK-IC (MSX2のみ実装) 内蔵あるいはカートリッジにより接続されたI/Oデバイスの衝突をさけるためのビット。これによって内蔵のデバイスを無効にすることができます。BIOSの初期化時に、外部デバイスが無ければ内部デバイスを有効にします。ここは、アプリケーションプログラムが読み書きしてはいけません。
F6H	カラーバスI/O
F7H	A/Vコントロール b0 オーディオR L : ミキシング ON (ライト) b1 オーディオL L : ミキシング OFF (ライト) b2 ビデオ入力の選択 L : 21p RGB (ライト) b3 ビデオ入力の検出 L : 入力なし (リード) b4 AVコントロール L : TV (ライト) b5 Ymコントロール L : TV (ライト) b6 VDPレジスター9のビット4の反転 (ライト) b7 VDPレジスター9のビット5の反転 (ライト)
F8H～FBH	リザーブ
FCH～FFFH	メモリーマッパー

A.7 カートリッジ ハードウェア仕様

第5部7章ではカートリッジROM内に収めるソフトウェアの作成法を説明しましたが、実際にカートリッジを製作する場合には、ここに示したハードウェア仕様を参考にしてください。

```
=====
List A.1 MSX ROM Cartridge Header to start by H.STKE
(this program must link List 5.15)
=====

Switch
SNSDEL EQU 1 ;Sense DEL key not to start
BIOS
SNSMAT EQU 141H ;Sense key in real time
System work area
H.STKE EQU 0FEDAH ;Hook for auto start
External symbol
EXTRN START ;Address to start
EXTRN GTSL1@ ;Get my slot address
Header
ASEG
ORG 4000H
DB 41H, 42H
DW INIT
DW 0 ;No STATEMENT
DW 0 ;No DEVICE
DW 0 ;No TEXT
DW 0
DW 0
DW 0
INIT : set H.STKE and return
INIT:
IF SNSDEL
LD A,8 ;Read 8th row
CALL SNSMAT ;Read key
BIT 3,A ;DEL key
RET Z ;Return if DEL pressed
ENDIF ;IF SNSDEL
```

```

;
LD   HL, H.STKE      ;Hook for auto start
LD   A, 0F7H          ;"RST 30H" instruction
DI
LD   (HL), A          ;For fale safe
CALL GTSL1@          ;[A] = my slot address
INC HL
LD   (HL), A          ;Set start address
INC HL
LD   (HL), E          ;
INC HL
LD   (HL), D          ;
EI
RET
END

```

```

=====
; List A.2 MSX ROM Cartridge Header to get work area from HIMEM
=====
.SFCOND
.XALL
.RADIX 10
;
; Switch
;
SNSDEL EQU I           ;Sense DEL key not to start
;
; Constant
;
MYWORK EQU 1024         ;Length of my work area to request
;
; BIOS
;
RSLREG EQU 138H          ;Get primary slot register
SNSMAT EQU 141H          ;Sense key in real time
CALBAS EQU 159H          ;Call BASIC interpreter
;
; System work area
;
MEMSIZ EQU 0F672H
VARTAB EQU 0F6C2H
STKTOP EQU 0F674H
TEMP EQU 0F6A7H          ;To save text pointer
MAXFIL EQU 0F85FH
FILTAB EQU 0F860H
NULBUF EQU 0F862H
BOTTOM EQU 0FC48H
HIMEM EQU 0FC4AH
EXPTBL EQU 0FCC1H
SLTWRK EQU 0FD09H
H.CLEA EQU 0FED0H          ;Hook to get work area
;
; MACROS
;
COMPAR MACRO
    RST 20H             ;Compares HL with DE
    ENDM

```

```

; BIOS    MACRO   ADDRESS
CALL      ADDRESS ; Will be change for DOS version
ENDM

;
; Header
;
CSEG
ASEG
ORG 4000H
DB 41H, 42H
DW INIT
DW 0           ;No STATEMENT
DW 0           ;No DEVICE
DW 0           ;No TEXT
DW 0
DW 0
DW 0

;
; INIT : set H.CLEA and return

INIT:
IF SNSDEL
LD A,8          ;Read 8th row
CALL SNSMAT    ;Read key
BIT 3,A        ;DEL key
RET Z          ;Return if DEL pressed
ENDIF

;
LD HL, H.CLEA  ;Hook to get work area
LD A, 0F7H     ;"RST 30H" instruction
DI             ;For fale safe
LD (HL), A
CALL GTSLI@    ;[A] = my slot address
INC HL
LD (HL), A
LD DE, START   ;Set start address
INC HL
LD (HL), E
INC HL
LD (HL), D
EI
RET

;
; Called by H.CLEA
; Set work area
;

START:
LD (TEMP), HL  ;Save [HL]
DI             ;For fail safe
LD B,5
LD HL, H.CLEA
LD A, 0C9H     ;RET instruction

CLHOOK:
LD (HL), A     ;Clear H.CLEA
INC HL
DJNZ CLHOOK
EI

;
LD HL, MYWORK  ;How many memory to request
CALL WORKH@    ;Change HIMEM

;
; [HL] = (HIMEM) = start address of my work area
; [HL] = 0 if out of memory
;
```

```

; CALL DEFILE           ;Move stack and FCB
; Note that DEFILE changes stack pointer
LD      IX,7D20H       ;Return address
JP      CALBAS         ;Go to BASIC.

; Note that H.CLEA will be called again.
; Make sure that H.CLEA is cleared by 'RET'.

-----  

; BOTTOM became greater than 0FFFFH, there is
; no RAM left to be allocated.

NOROOM:
LD      HL,0
CALL   WSLW1@          ;Clear slot work
JR     WORKBEND        ;Return 0 in [HL]
ENDIF
IF     USEWORKH        ;IF USEWORKB OR USEWORKH

; WORKH allocate work area from HIMEM
; (my slot work) <- (new HIMEM)
Entry  HL               required memory size
Return HL               start address of my work area = new HIMEM
                    0 if can not allocate
; Modify None
; Note This routine shoud be called by H.STKE not by INIT.

LIMHIM EQU    0C400H      ;Lower limit of HIMEM for fale safe
;
PUBLIC WORKH@          ;  

WORKH@:
PUSH   DE
PUSH   BC
PUSH   AF
;
EX     DE,HL            ;[DE] = Size
LD     HL,(HIMEM)       ;Get current RAM top
XOR    A                 ;Clear carry
SBC    HL, DE            ;[HL] = new HIMEM
JR     C, NOROOM        ;HIMEM < 0
EX     DE, HL            ;[DE] = new HIMEM
LD     HL, LIMHIM        ;Lower limit of HIMEM
XOR    A                 ;Clear carry
SBC    HL, DE            ;HIMEM < LIMHIM
JR     NC, NOROOM        ;[HL] = new HIMEM
EX     DE, HL            ;[HL] = new HIMEM
CALL   WSLW1@          ;Save HIMEM to slot work
LD     (HIMEM),HL        ;Update HIMEM
JR     WORKBEND        ;IF USEWORKH

; DEFILE : re-build file structure
; Original program is in INIT.MAC
; Changed to set workarea at H.CLEA
; MAXFIL = 1
; String space = 200
; by nao-i on 3. Feb., 1986

Entry  (HIMEM)           New HIMEM
      (STKTOP)          To know string space if not STR200
      (MEMSIZ)          To know string space if not STR200
      (VARTAB)          To check free space if CHKOME
      [A]                New MAXFIL if not FILMAX1

```

```

Return (MAXFIL) ;For basic words
(FILTAB)
(MEMSIZE)
(STKTOP)
(NULBUF)

Modify AF, BC, DE, HL, SP

Note This routine changes stack pointer.

Constant

NUMLEV EQU 60
FILLEN EQU 265
FL.BUF EQU 9
;
; Switch
;
MAXFIL1 EQU 1 ;MAXFILE = 1
STR200 EQU 1 ;String space is 200 Byte
CHKOME EQU 0 ;Check "Out of memory"
;
IF CHKOME
EXTRN OMERR ;Entry of "Out of memory"
ENDIF

DEFILE:
IFE MAXFIL1
PUSH AF ;Save new MAXFIL
ENDIF
LD HL,(HIMEM)
IF MAXFIL1
LD DE,65536-FILLEN*2-4
ADD HL,DE
ELSE
LD DE,65536-FILLEN-2
DEFIL1:
ADD HL,DE ;[HL] = (HIMEM) - FILLEN - 2
DEC A
JP P,DEFIL1
ENDIF
EX DE,HL ;DE:=FILTAB
IF STR200 ;String space is fixed
LD HL,200
ELSE
LD BC,(STKTOP) ;Get current string space in BC
LD HL,(MEMSIZE)
XOR A ;Clear carry
SBC HL,BC ;[HL] = (MEMSIZE) - (STKTOP)
ENDIF
IFE MAXFIL1
POP AF ;Restore new MAXFIL
ENDIF
PUSH HL ;Save current string space
IFE MAXFIL1
PUSH AF ;Save new MAXFIL
ENDIF
IF CHKOME
LD BC,2*NUMLEV+20
ADD HL,BC
LD B,H
LD C,L
LD HL,(VARTAB) ;Get end of program
ADD HL,BC

```

```

COMPAR      ;Enough breathing room?
JP          NC,OMERR   ;No
ENDIF       IF MAXFIL1 ;IF CHKOME
IF          MAXFIL1
LD          A, 1        ;Make sure MAXFIL = 1
ELSE        POP AF
ENDIF       LD (MAXFIL),A ;Restore new MAXFIL
LD          L,E
LD          H,D
LD          (FILTAB),HL ;[HL] = [DE] = (HIMEM) - FILLEN - 2
DEC         HL           ;Pointer to first FCB
DEC         HL
LD          (MEMSIZ),HL ;[HL] = (HIMEM) - FILLEN - 4
POP         BC           ;Restore current string space
XOR         A            ;Clear carry
SBC         HL, BC
LD          (STKTOP),HL ;[HL] = (HIMEM) - FILLEN - 4 - <string size>
DEC         HL
DEC         HL
POP         BC           ;Get return address
LD          SP,HL        ;Set new temporary stack
PUSH        BC
IF          MAXFIL1
LD          A, 1
LD          HL, 4        ;[A] = MAXFIL
ELSE        LD A,(MAXFIL) ;[HL] = MAXFIL * 2 + 2
LD          L,A
INC         L
LD          H,0
ADD         HL,HL        ;[HL] = (MAXFIL) * 2 + 2
ENDIF       LD HL,DE     ;IF MAXFIL1
ADD         HL,DE        ;Add FILTAB to get start of FCB's
EX          DE,HL        ;DE=Address of first FCB
PUSH        DE
LD          BC,FILLEN   ;Address of first FCB (#0)

DSKFLL:    LD (HL),E
INC         HL
LD          (HL),D
INC         HL
EX          DE,HL
LD          (HL),0        ;Make it look closed
ADD         HL,BC
EX          DE,HL
DEC         A
JP          P,DSKFLL
POP         HL
LD          BC,FL.BUF   ;Restore address of first FCB
ADD         HL,BC        ;Get address of buffer for file #0
LD          (NULBUF),HL
RET

END

```

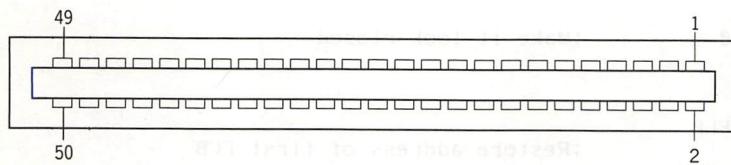
● カートリッジバス信号線表

ピンNo.	名 称	I/O*	ピンNo.	名 称	I/O*
1	<u>CS1</u>	0	2	<u>CS2</u>	0
3	<u>CS12</u>	0	4	<u>SLTSL</u>	0
5	予備 *1	-	6	<u>RFSH</u>	0
7	<u>WAIT</u> *2	I	8	<u>INT</u> *2	I
9	<u>M1</u>	0	10	<u>BUSDIR</u>	I
11	<u>IORQ</u>	0	12	<u>MERQ</u>	0
13	<u>WR</u>	0	14	<u>RD</u>	0
15	<u>RESET</u>	0	16	予備 *1	-
17	A9	0	18	A15	0
19	A11	0	20	A10	0
21	A7	0	22	A6	0
23	A12	0	24	A8	0
25	A14	0	26	A13	0
27	A1	0	28	A0	0
29	A3	0	30	A2	0
31	A5	0	32	A4	0
33	D1	I/O	34	D0	I/O
35	D3	I/O	36	D2	I/O
37	D5	I/O	38	D4	I/O
39	D7	I/O	40	D6	I/O
41	GND	-	42	CLOCK	0
43	GND	-	44	SW1	-
45	+5V	-	46	SW2	-
47	+5V	-	48	+12V	-
49	SUNDIN	I	50	-12V	-

注) 本体を基準にした入出力の区別

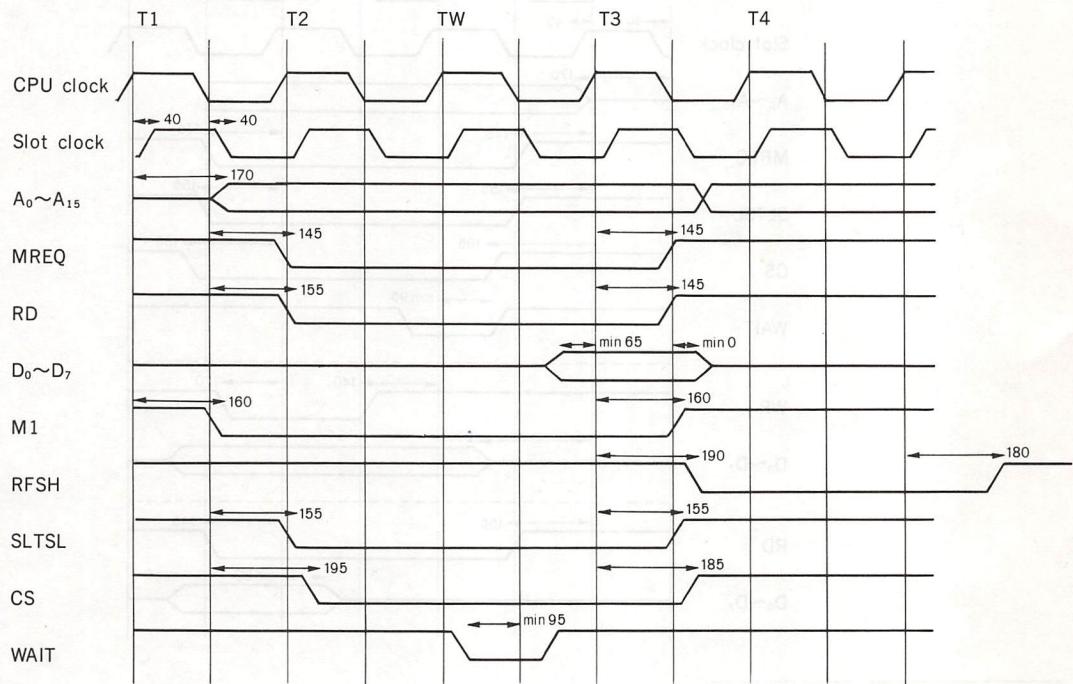
*1 予備は使用禁止端子

*2 OPEN COLLECTER出力

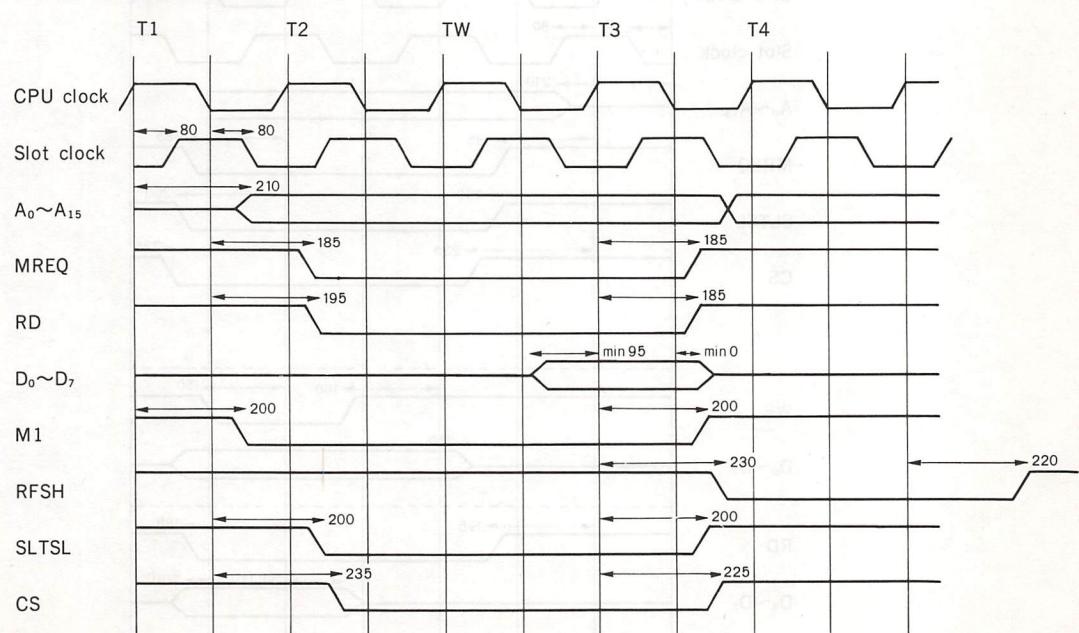


● スロットのタイミングチャート

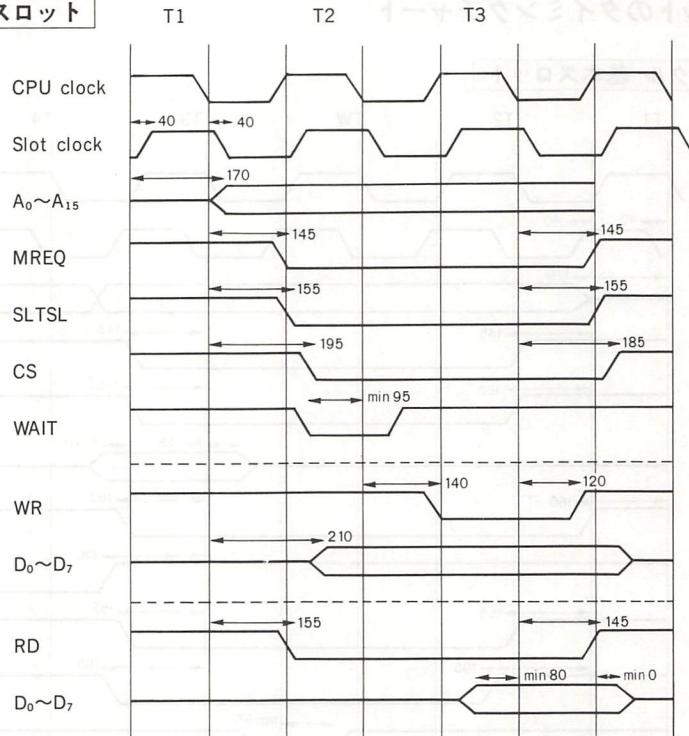
M1サイクル 基本スロット



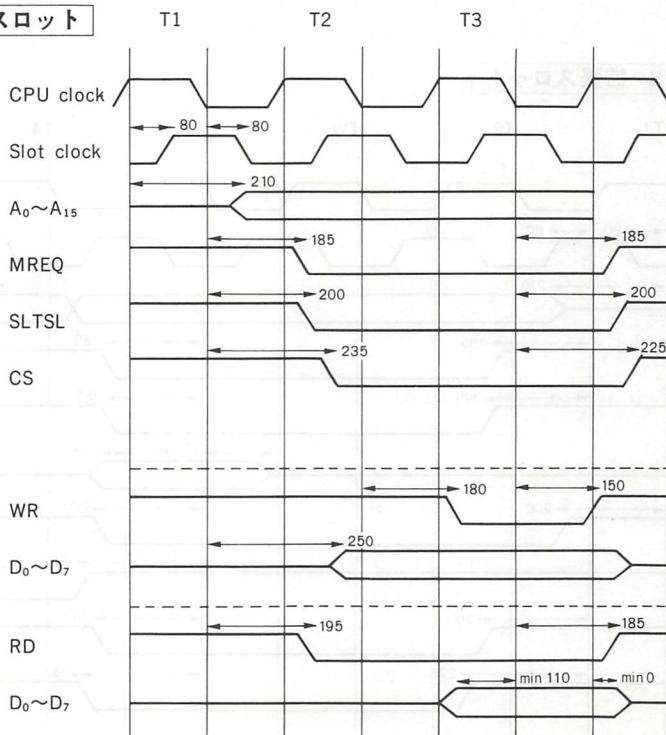
M1サイクル 拡張スロット



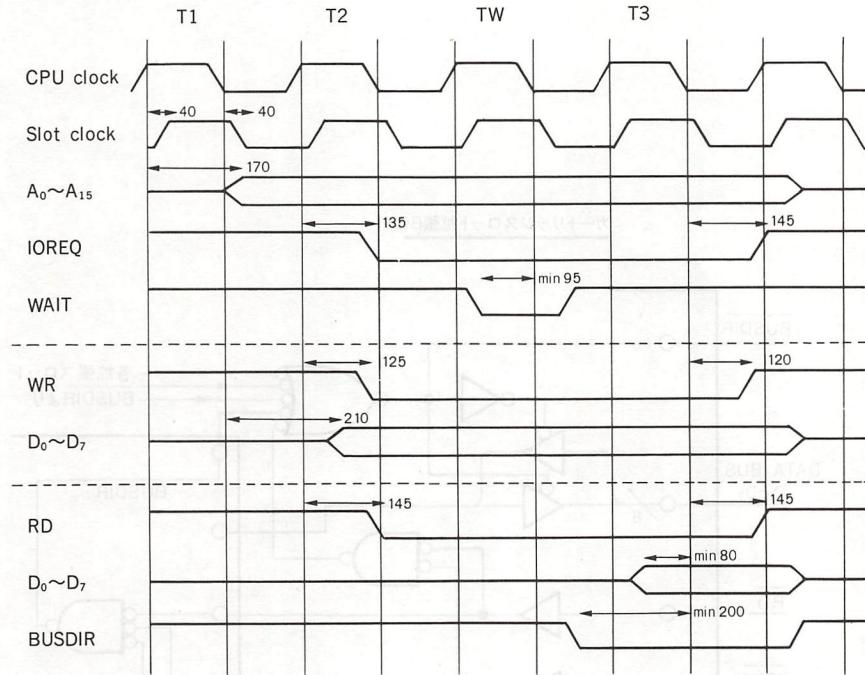
メモリサイクル 基本スロット



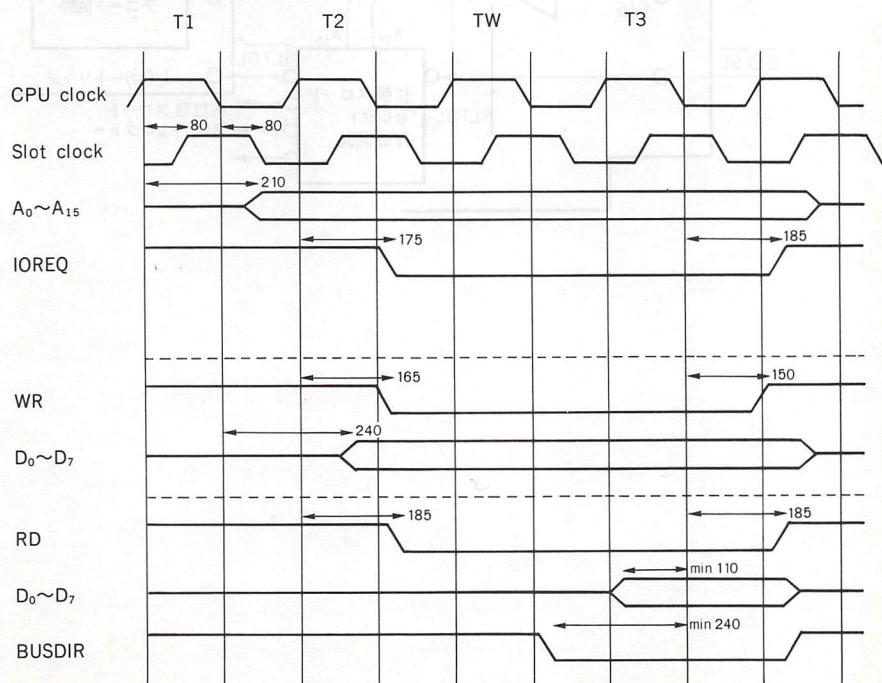
メモリサイクル 拡張スロット



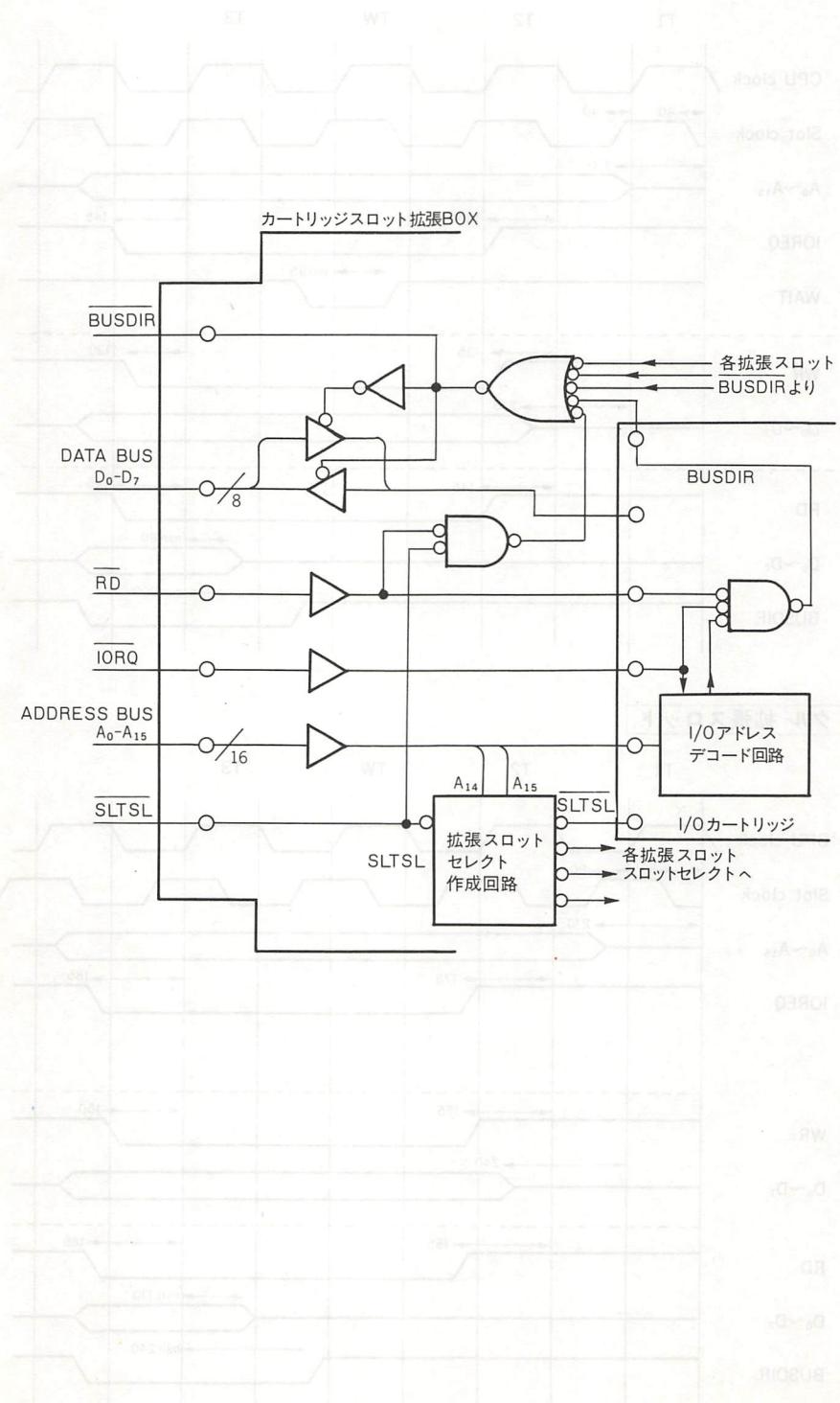
I/Oサイクル 基本スロット

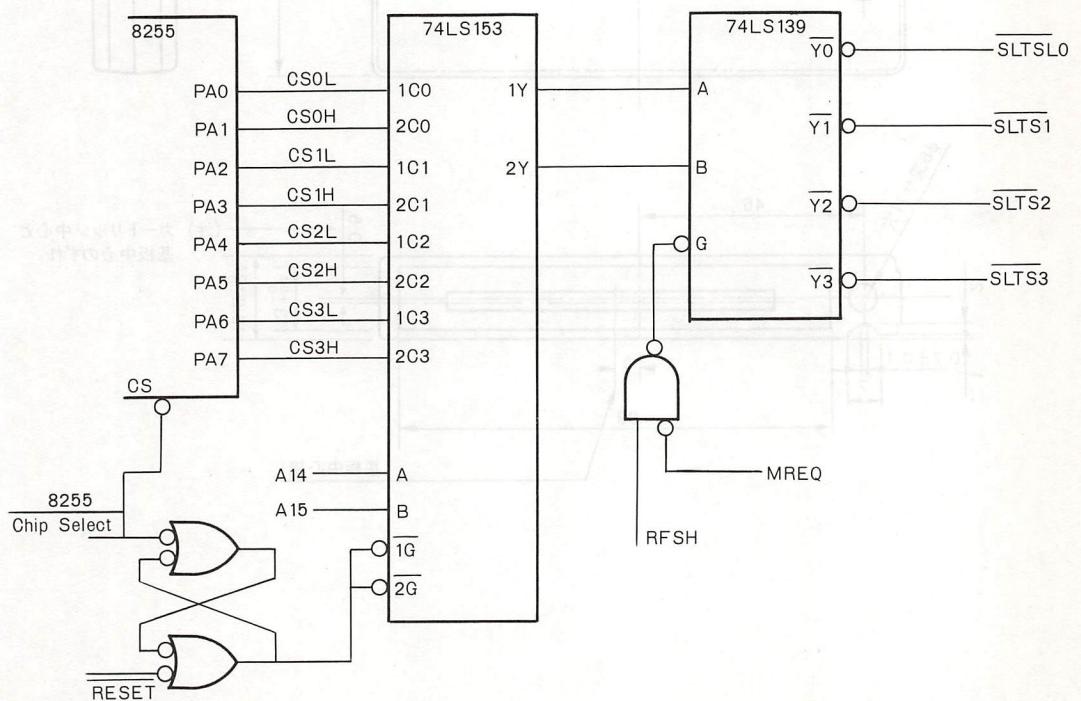
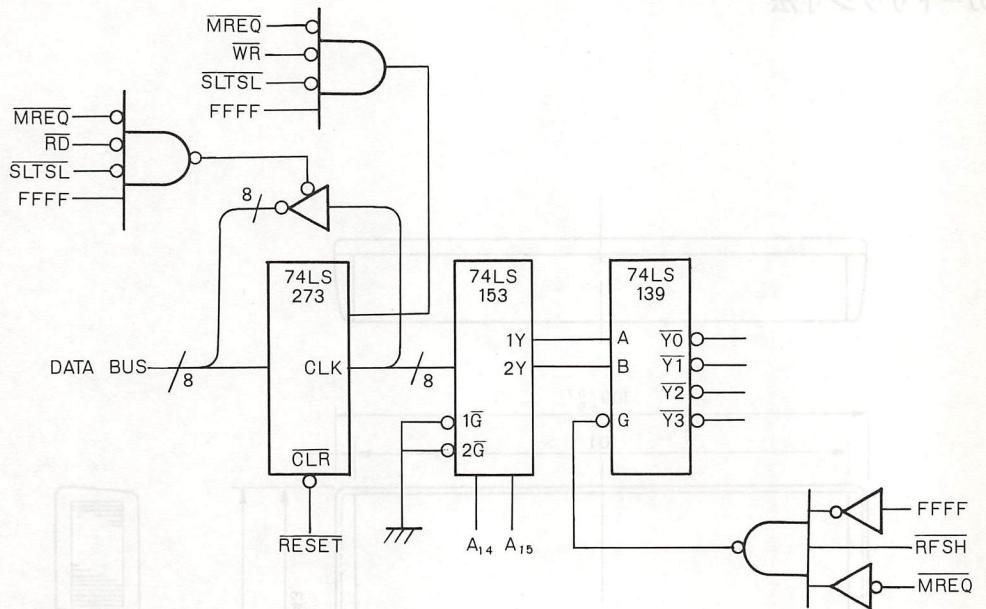


I/Oサイクル 拡張スロット

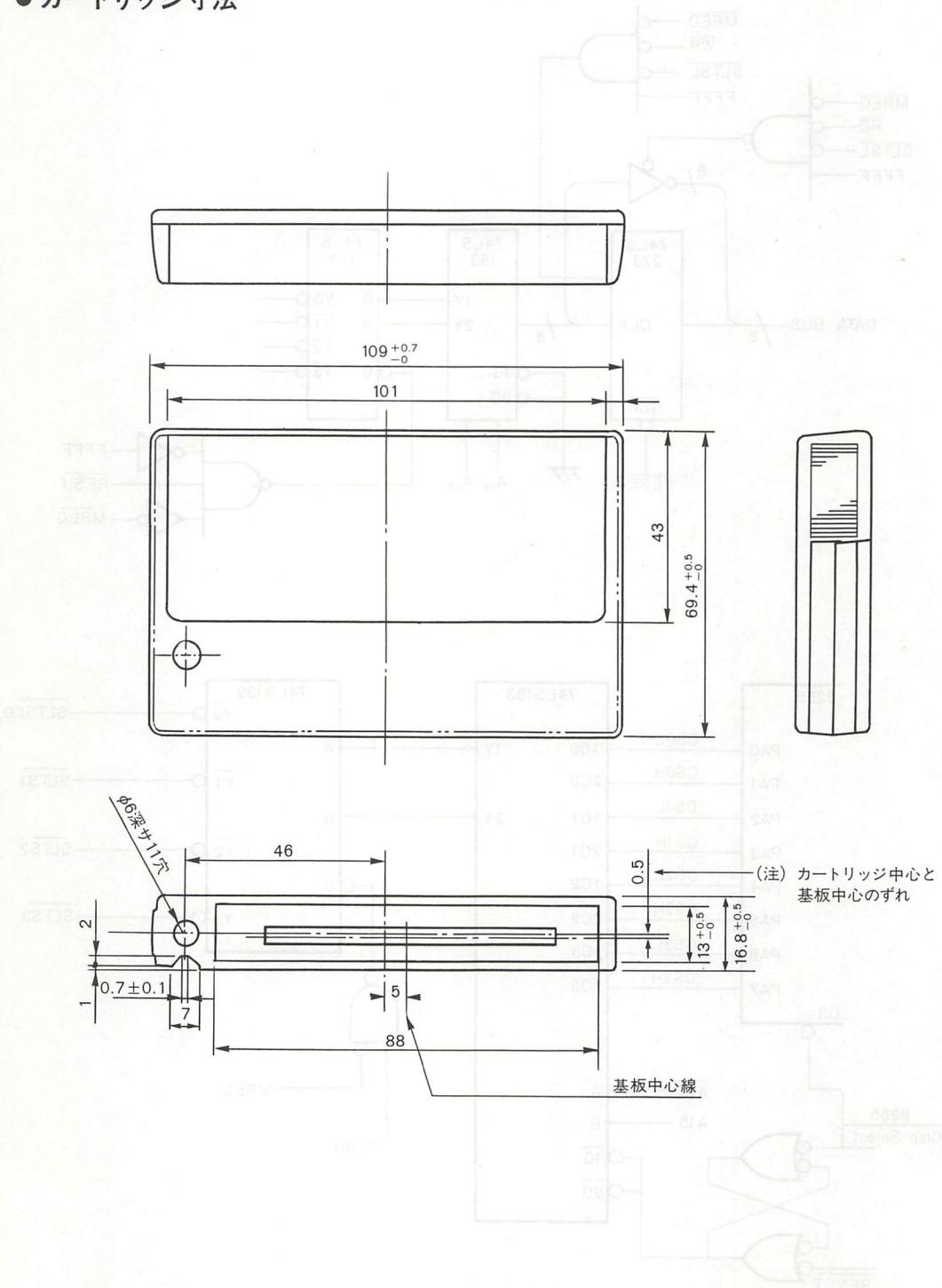


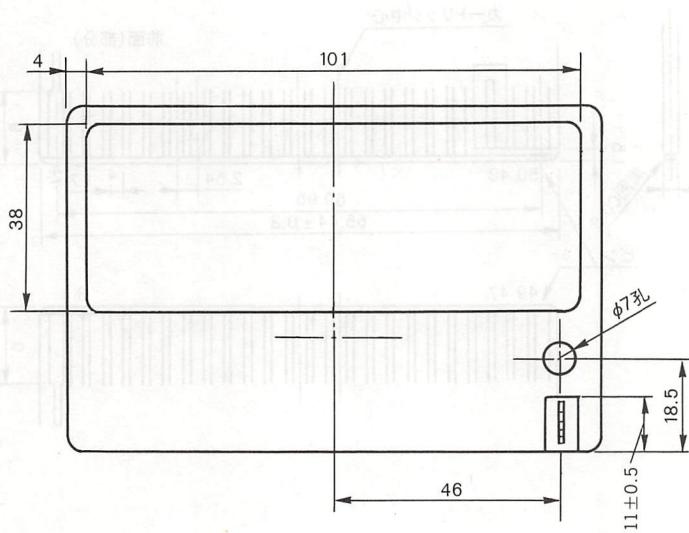
● 拡張スロットセレクト信号作成回路例



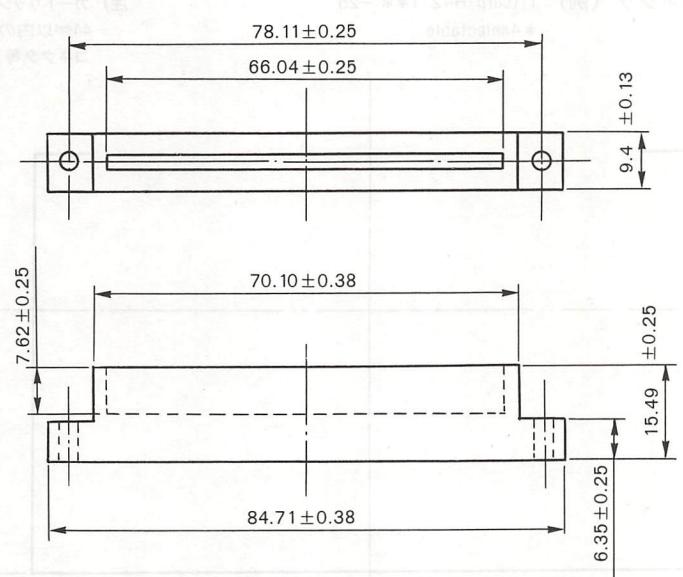


● カートリッジ寸法

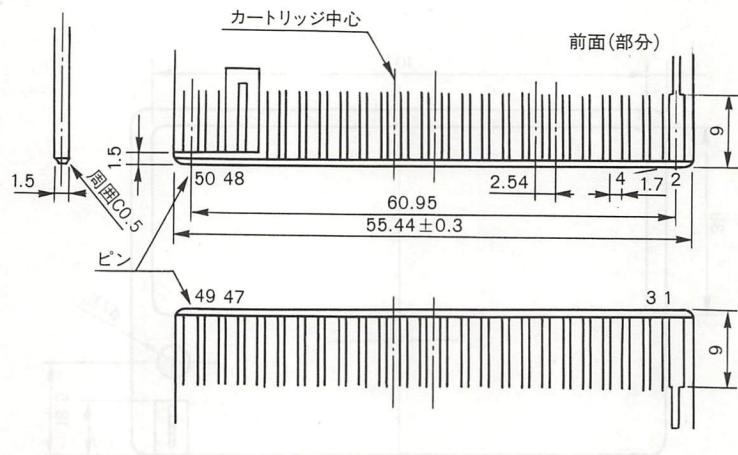




● コネクター寸法例



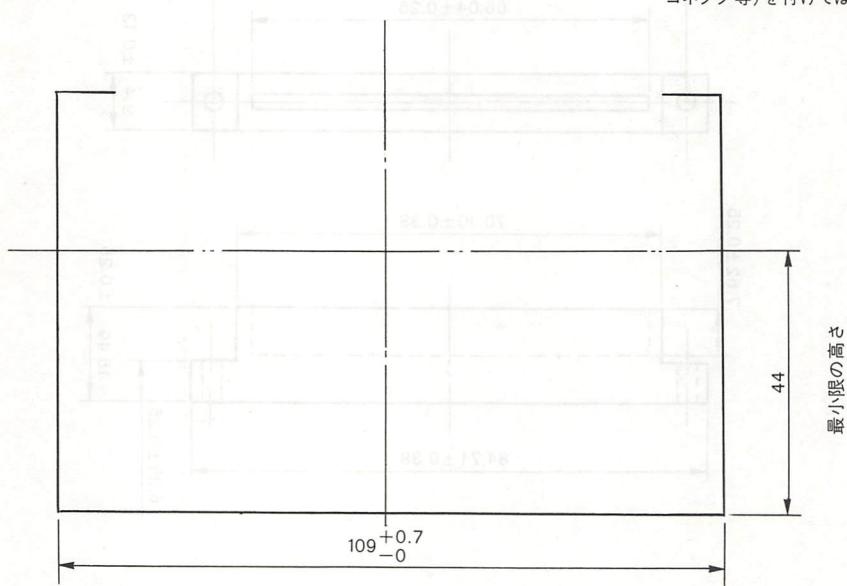
APPENDIX



コネクタ (例) TI(carp)H4211**-25

*4selectable

注) カートリッジのコネクタ側の端から
44mm以内の部分に突起(スイッチ,
コネクタ等)を付けてはいけません。



A.8 コントロールコード表

コード (10進)	コード (16進)	機能	対応キー
0	00H		[CTRL] + [@]
1	01H	グラフィックキャラクタの入出力時のヘッダ	[CTRL] + [A]
2	02H	カーソルを直前の語の先頭へ移動	[CTRL] + [B]
3	03H	入力待ち状態を終了する	[CTRL] + [C]
4	04H		[CTRL] + [D]
5	05H	カーソル以下を削除	[CTRL] + [E]
6	06H	カーソルを次の語の先頭へ移動	[CTRL] + [F]
7	07H	スピーカを鳴らす (BEEP文と同じ)	[CTRL] + [G]
8	08H	カーソルの一つ前の文字を削除する	[CTRL] + [H] または [BS]
9	09H	次の水平タブ位置へ移動	[CTRL] + [I] または [TAB]
10	0AH	行送り (ラインフィード)	[CTRL] + [J]
11	0BH	カーソルをホームポジション (左上) に戻す	[CTRL] + [K] または [HOME]
12	0CH	画面をクリアし、カーソルをホームポジションに戻す	[CTRL] + [L] または [CLS]
13	0DH	カーソルを左端に戻す (キャリッジリターン)	[CTRL] + [M] または [RETURN]
14	0EH	カーソルを行末へ移動	[CTRL] + [N]
15	0FH		[CTRL] + [O]
16	10H		[CTRL] + [P]
17	11H		[CTRL] + [Q]
18	12H	挿入モードのON/OFFスイッチ	[CTRL] + [R] または [INS]
19	13H		[CTRL] + [S]
20	14H		[CTRL] + [T]
21	15H	1行を画面から削除	[CTRL] + [U]
22	16H		[CTRL] + [V]
23	17H		[CTRL] + [W]
24	18H		[CTRL] + [X] または [SELECT]
25	19H		[CTRL] + [Y]
26	1AH		[CTRL] + [Z]
27	1BH		[CTRL] + [I] または [ESC]
28	1CH	カーソルを右へ移動	[CTRL] + [¥] または [→]
29	1DH	カーソルを左へ移動	[CTRL] + [J] または [←]
30	1EH	カーソルを上へ移動	[CTRL] + [↑] または [↑]
31	1FH	カーソルを下へ移動	[CTRL] + [↓] または [↓]
127	7FH	カーソルの指す文字を削除	[DEL]

A.9 キャラクタコード表

コード (10進)	コード (16進)	キャラクタ	コード (10進)	コード (16進)	キャラクタ	コード (10進)	コード (16進)	キャラクタ	コード (10進)	コード (16進)	キャラクタ
0	00H	↑	32	20H	空白	64	40H	@	96	60H	'
1	01H		33	21H	!	65	41H	A	97	61H	a
2	02H		34	22H	"	66	42H	B	98	62H	b
3	03H		35	23H	#	67	43H	C	99	63H	c
4	04H		36	24H	\$	68	44H	D	100	64H	d
5	05H		37	25H	%	69	45H	E	101	65H	e
6	06H		38	26H	&	70	46H	F	102	66H	f
7	07H		39	27H	,	71	47H	G	103	67H	g
8	08H		40	28H	(72	48H	H	104	68H	h
9	09H		41	29H)	73	49H	I	105	69H	i
10	0AH	コントロール	42	2AH	*	74	4AH	J	106	6AH	j
11	0BH		43	2BH	+	75	4BH	K	107	6BH	k
12	0CH		44	2CH	.	76	4CH	L	108	6CH	l
13	0DH		45	2DH	-	77	4DH	M	109	6DH	m
14	0EH		46	2EH	.	78	4EH	N	110	6EH	n
15	0FH		47	2FH	/	79	4FH	O	111	6FH	o
16	10H	キャラクタ	48	30H	0	80	50H	P	112	70H	p
17	11H		49	31H	1	81	51H	Q	113	71H	q
18	12H		50	32H	2	82	52H	R	114	72H	r
19	13H		51	33H	3	83	53H	S	115	73H	s
20	14H		52	34H	4	84	54H	T	116	74H	t
21	15H		53	35H	5	85	55H	U	117	75H	u
22	16H		54	36H	6	86	56H	V	118	76H	v
23	17H		55	37H	7	87	57H	W	119	77H	w
24	18H		56	38H	8	88	58H	X	120	78H	x
25	19H		57	39H	9	89	59H	Y	121	79H	y
26	1AH		58	3AH	:	90	5AH	Z	122	7AH	z
27	1BH		59	3BH	;	91	5BH	[123	7BH	!
28	1CH		60	3CH	<	92	5CH	¥	124	7CH	~
29	1DH		61	3DH	=	93	5DH]	125	7DH	削除
30	1EH		62	3EH	>	94	5EH	^	126	7EH	
31	1FH	↓	63	3FH	?	95	5FH	—	127	7FH	

A.9 キャラクタコード表

コード (10進)	コード (16進)	キャラクタ									
128	80H	♠	160	A0H	。	192	C0H	タ	224	E0H	た
129	81H	♥	161	A1H	「	193	C1H	チ	225	E1H	ち
130	82H	♣	162	A2H	」	194	C2H	ツ	226	E2H	つ
131	83H	♦	163	A3H	、	195	C3H	テ	227	E3H	て
132	84H	○	164	A4H	・	196	C4H	ト	228	E4H	と
133	85H	●	165	A5H	ヲ	197	C5H	ナ	229	E5H	な
134	86H	を	166	A6H	ア	198	C6H	ニ	230	E6H	に
135	87H	あ	167	A7H	ア	199	C7H	ヌ	231	E7H	ぬ
136	88H	い	168	A8H	イ	200	C8H	ネ	232	E8H	ね
137	89H	う	169	A9H	ウ	201	C9H	ノ	233	E9H	の
138	8AH	え	170	AAH	エ	202	CAH	ハ	234	EAH	は
139	8BH	お	171	ABH	オ	203	CBH	ヒ	235	EBH	ひ
140	8CH	や	172	ACH	ヤ	204	CCH	フ	236	ECH	ふ
141	8DH	ゆ	173	ADH	ユ	205	CDH	ヘ	237	EDH	へ
142	8EH	よ	174	AEH	ヨ	206	CEH	ホ	238	EEH	ほ
143	8FH	つ	175	AFH	ツ	207	CFH	マ	239	EFH	ま
144	90H		176	B0H	一	208	D0H	ミ	240	F0H	み
145	91H	あ	177	B1H	ア	209	D1H	ム	241	F1H	む
146	92H	い	178	B2H	イ	210	D2H	メ	242	F2H	め
147	93H	う	179	B3H	ウ	211	D3H	モ	243	F3H	も
148	94H	え	180	B4H	エ	212	D4H	ヤ	244	F4H	や
149	95H	お	181	B5H	オ	213	D5H	ユ	245	F5H	ゆ
150	96H	か	182	B6H	カ	214	D6H	ヨ	246	F6H	よ
151	97H	き	183	B7H	キ	215	D7H	ラ	247	F7H	り
152	98H	く	184	B8H	ク	216	D8H	リ	248	F8H	り
153	99H	け	185	B9H	ケ	217	D9H	ル	249	F9H	る
154	9AH	こ	186	BAH	コ	218	DAH	レ	250	FAH	れ
155	9BH	さ	187	BBH	サ	219	DBH	ロ	251	FBH	ろ
156	9CH	し	188	BCH	シ	220	DCH	ワ	252	FCH	わ
157	9DH	す	189	BDH	ス	221	DDH	ン	253	FDH	ん
158	9EH	せ	190	BEH	セ	222	DEH	ヽ	254	FEH	ゑ
159	9FH	そ	191	BFH	ソ	223	DFH	。			

注) キャラクタコードのFFHはカーソル表示です。

● グラフィックキャラクタコード表

コード (10進)	コード (16進)	キャラクタ	コード (10進)	コード (16進)	キャラクタ
64	40H		80	50H	π
65	41H	月	81	51H	□
66	42H	火	82	52H	■
67	43H	水	83	53H	△
68	44H	木	84	54H	□
69	45H	金	85	55H	田
70	46H	土	86	56H	□
71	47H	日	87	57H	□
72	48H	年	88	58H	□
73	49H	円	89	59H	□
74	4AH	時	90	5AH	□
75	4BH	分	91	5BH	□
76	4CH	秒	92	5CH	▣
77	4DH	百	93	5DH	大
78	4EH	千	94	5EH	中
79	4FH	万	95	5FH	小

注) グラフィックキャラクタはすべて2バイト文字です。CHR\$(1)を識別用のヘッダとし、続けて左記のコードを与えることによって表現します。

A.10 エスケープシーケンス表

○ カーソル移動
<ESC>A カーソルを上に移動
<ESC>B カーソルを下に移動
<ESC>C カーソルを右に移動
<ESC>D カーソルを左に移動
<ESC>H カーソルをホームポジションに移動
<ESC>Y<Y座標+20H><X座標+20H> カーソルを(X, Y)の位置に移動
○ 編集, 削除
<ESC>j 画面をクリア
<ESC>E 画面をクリア
<ESC>K 行の終わりまで削除
<ESC>J 画面の終わりまで削除
<ESC>L 1行挿入
<ESC>M 1行削除
○ その他
<ESC>x4 カーソルの形を'■'にする
<ESC>x5 カーソルを消す
<ESC>y4 カーソルの形を'_'にする
<ESC>y5 カーソルを表示する

索

A	
ARG	357
ASCIIテキストファイル	278
AUTOEXEC.BAS	98
AUTOEXEC.BAT	98, 117
AUX	136
B	
BASE(BASIC)	54
BASIC言語	24
BASICコマンド	106
BASICテキストファイル	277
BASICプログラムエリア	67
BASICモード	24
BCD(2進化10進法)	356
BDOS	14, 25, 96, 131
BEEP	265
BEEP音	61
BIOS	14, 25, 83
BIOS一覧	343
BLOAD(BASIC)	51, 56
BSAVE(BASIC)	52, 56
C	
CALL MEMINI(BASIC)	63
CALL MFILES(BASIC)	63
CALL MKILL(BASIC)	63
CALL MNAME(BASIC)	63
CALL SYSTEM	106
CALL命令	329
CIRCLE(BASIC)	54
CLOCK-IC	307, 314
CLOCKカウント	309
CMD	75
COLOR(BASIC)	51
COLOR SPRITE(BASIC)	59
COLOR SPRITES(BASIC)	58
COLOR=NEW(BASIC)	52
COLOR=RESTORE(BASIC)	52
COMMAND.COM	95, 96
COPY(BASIC)	56
COPY SCREEN(BASIC)	60
COPYコマンド	106
COPY命令	362
CP/M	14, 24, 94
CPU→VRAM高速転送	218
CPU→VRAM論理転送	232
C言語	24
Cコンパイラ	14
D	
DAC	357

引

DATEコマンド	108
DELコマンド	110
DEVICE(カートリッジヘッダ)	330
DIRコマンド	111
DISK-BASIC	25
DMA領域	118
DOSモード	24
DPB	120
E	
EVEN	199
F	
FAT	120, 122
FCB	118, 125, 143, 146
FORMATコマンド	111
FORTH	14
G	
GET DATE(BASIC)	60
GET TIME(BASIC)	60
GRAPHIC1モード	179
GRAPHIC2モード	181
GRAPHIC3モード	181
GRAPHIC4モード	185
GRAPHIC5モード	188
GRAPHIC6モード	191
GRAPHIC7モード	193
H	
HMMC	218
HMMM	226
HMMV	229
H.STKE	97
I	
ID(カートリッジヘッダ)	328
IDバイト	85
INIT(カートリッジヘッダ)	328
INITルーチン	84, 87, 97
I/Oマップ	390
IPL	75
J	
JIS漢字コード	54
JIS配列	19
JIS標準配列	283
L	
LINE	245
LINE(BASIC)	53
LMCM	235
LMMC	232
LMMM	239
LMMV	242
LOCATE(BASIC)	53

索引

LOGO	14	SET VIDEO(BASIC)	59
M		SRCH.....	248
MAIN-ROM(メインロム)	17, 21	STATEMENT(カートリッジヘッダ)	329
Math-Pack(マスパック)	356	STOPキー	291
MODEコマンド	112	SUB-ROM(サブロム)	17, 21
MODEレジスタ(CLOCK-IC)	308	T	
MS-DOS	24, 93	TESTレジスタ(CLOCK-IC)	309
MSX	13	TEXT(カートリッジヘッダ)	331
MSX-BASIC	17	TEXT1モード	168
MSX BASIC ver1.0	49	TEXT2モード	171
MSX BASIC ver2.0	49	TIMEコマンド	113
MSX-DOS	14, 24, 93	TMS9918	17, 157
MSXDOS.SYS	95, 96	TPA	95
MSX-VIDEO	17, 157	TYPEコマンド	114
MSX1システム構成	16	U	
MSX1仕様	15	USR関数	73
MSX2システム構成	16	V	
MSX2仕様	15	VALTYP	75, 357
MULTI COLORモード	175	VDP(BASIC)	55
O		VDP(ビデオディスプレイプロセッサ)	17, 49
ODD	199	VDPコマンド	215
P		VDPレジスタ	157
PAD(BASIC)	64	VERIFYコマンド	114
PAINT(BASIC)	54	VPEEK(BASIC)	55
PAUSEコマンド	112	VPOKE(BASIC)	55
POINT	255	VRAM(ビデオラム)	17, 84, 159
PSET	253	VRAM→CPU論理転送	235
PSG	265	VRAMアドレス設定	164
PSGレジスタ	266	VRAMマップ	382
PUT KANJI(BASIC)	54	VRAM間高速転送	226
PUT SPRITE(BASIC)	58	VRAM間論理転送	239
R		VRAM容量	50, 85
RAM(ラム)	17	VRAM論理塗りつぶし	242
RAMディスク	19, 29, 63	V9938	17
RAM容量	17	W	
REMコマンド	113	WIDTH(BASIC)	50
RENコマンド	113	Y	
RESETレジスタ(CLOCK-IC)	310	YMMM	223
RGBマルチコネクタ	59	Y座標ドット切り換え	198
ROM(ロム)	17	Y軸方向のVRAM間高速転送	223
ROM-BIOS	95, 97	1	
RS-232C	14, 84	1DD	94
S		12時間計	311
SCREEN(BASIC)	49	1ビットサウンドポート	273
SET ADJUST(BASIC)	61	2DD	94
SET BEEP(BASIC)	61	24時間計	311
SET DATE	312	2画面交互表示	49
SET DATE(BASIC)	60	2バイト整数	357
SET PAGE(BASIC)	50	50音配列	19, 283
SET PASSWORD(BASIC)	62	ア	
SET PROMPT(BASIC)	62	アクティブページ	50, 54
SET SCREEN(BASIC)	62	アスキーモード	107
SET TIME(BASIC)	60		
SET TITLE(BASIC)	61		

アラーム 61, 307, 309, 310
 色コード 0 200
 色コードのサーチ 248
 色コードの読み出し 255
 インタースロットコール 321
 インターナショナルMSX 85
 インターフェイス 24
 インターレース 49, 199
 ウォームスタート 87
 閏年カウンタ 312
 エスケープシーケンス 86, 410
 エラーコード 88
 エンベロープ 269
 エンベロープ周期 270
 エンベロープパターン 270
 オーディオ・インターフェイス 24
 オートインクリメント 162
 オートスタート 87
 オートスタートプログラム 117
力
 外部コマンド 96, 100, 117
 拡張BIOS 84
 拡張RAM 159
 拡張ROM 17
 拡張子 29
 拡張ステートメント 329
 拡張スロット 317
 拡張スロット信号作成回路 402
 拡張スロット選択レジスタ 319
 拡張デバイス 330
 カセット・インターフェイス 24, 275
 カセットファイル 29
 カセットフォーマット 277
 画像データ 56
 カーソルスイッチ 53
 カートリッジ 392
 カートリッジ寸法 404
 カートリッジソフト 328
 カートリッジヘッド 328
 画面交互表示 198
 画面表示の禁止 261
 画面モード 168
 カラーバス 59, 60
 カラーパレット 51
 カラーパレット保存テーブル 52
 カレントブロック 130
 カレントレコード 130
 漢字 14
 漢字コード 54
 間接指定(VDPレジスタ) 162
 キースキャン 283
 キー配列 283
 キーボード・インターフェイス 283
 キーボードバッファ 286

基本スロット 317
 キーマトリクス 283, 286
 キャラクタコード 408
 境界色 54
 行番号 70
 クラスタ 119
 グラフィック画面 29
 グラフィックコード 409
 クロックパルス 310
 高速転送コマンド 218
 コマンド 30
 コンソール 136
 コントロールキー 103
 コントロールコード 407
 コントロールレジスタ 157, 161
サ
 識別コード 72
 シーケンシャルアクセス 130
 指数部 356
 システムコール 95, 96, 131
 システム変数 30
 システムワークエリア 367
 実数部 356
 周辺色 51
 ジョイスティックポート 297
 ショートヘッダ 277
 数値演算 356
 スクリーンモード 49
 スクロール 200
 スタックエリア 68
 スタックポイント 83
 ステータスレジスタ 158, 163
 ステートメント 30
 スーパーインポーズ 59
 スプライト 57, 203
 スプライト表示の禁止 261
 スプライトモード1 57, 204
 スプライトモード2 57, 208
 スロット 317
 スロット間コール 321
 セクタ 119
 前景色 51
 走査線位置割り込み 201
 ソースページ 56
タ
 タイトル 61
 タイマ割り込み 81
 タッチパッド 64, 302
 タブコード 294
 単純変数 58
 単精度 356
 中間コード 71
 長方形の高速塗りつぶし 229
 直接指定(VDPレジスタ) 161

索引

直線の描画	245	ファイルのオープン	128
ディスクエラー	105	ファイルのクローズ	128
ディスプレイ・インターフェイス	24	ファイル名(ファイルスペック)	29
ディスプレイページ	50	ファンクション	30, 132
ディレクトリ	120, 123	ファンクションキー	291
テキスト	71	フォーマット	111
テキスト画面	29	フォント	168
デスタイルーションページ	56	符号部	356
デバイスファイル	102	フック	75, 81, 84, 336, 367
デバイス名	102	浮動小数点演算	356
デフォルトドライブ	99	ブートセクタ	97, 120
転送先領域(VDPコマンド)	218	フリーエリア	68
転送元領域(VDPコマンド)	218	プリント	29
点の描画	253	プリント・インターフェイス	24, 293
テンプレート	103	プロンプト	62, 99
ドライブ	29	ページ	318
トラックボール	64, 302	ヘッダ	277
トーン周波数	266	変数領域	58
ナ		ボーレート	275
内部コマンド	96, 100, 105	マ	
内部同期	59	マウス	14, 64, 302
ノイズ周波数	268	マシン語領域	69
ハ		マシン語ファイル	278
背景色	51	ミキシング	269
倍精度	356	メモリ	17
バイナリモード	107	メモリスイッチ	61
外部同期	59	メモリマップ	21
配列変数	68	文字列領域	69
BASICインタープリタ	65	ヤ	
バージョン	85	ユーザーエリア	65, 66
パスワード	62	予約語	71
バッチコマンド	96, 100, 115	ラ	
バッチ処理	112	ライトペン	14, 64, 302
バッチファイル	115	ランダムアクセス	130
バッチ変数	116	ランダムブロックアクセス	128
バッテリバックアップ	307	リンクポインタ	70
バッテリバックアップCLOCK-IC	18	ロジカルオペレーション	53, 57, 216
バッテリバックアップ・メモリ	61, 307	ローマ字カナ変換	19, 283
パドル	301	ロングヘッダ	277
パレット	163	論理セクタ	119, 143
パレット番号	51	論理転送コマンド	218
パレットレジスタ	159	ワ	
パレット・レジスタ間接指定レジスタ	163	ワイルドカード	101
バンクレジスタ	164	ワークエリア	83, 367
汎用入出力インターフェイス	24, 275, 297	割り込み	81
引数	73, 118	オ	
ピクセルサイズ	57	オフセット	119
ピットイメージ印字	294	オペレーティングシステム	119
ピットブロック・トランスファ	362	オペレーター	119
描画コマンド	218	オペレーター	119
表示ページ切り換え	198	オペレーター	119
ファイル	119	オペレーター	119
ファイルコントロールブロック(FCB)	69	オペレーター	119
ファイルスペック	101	リ	

執筆者紹介

論文番号

鎌田 竜一

1964年3月生まれ。国際商科大学経済学部在学中より、(株)スターインターナショナルにおいてMSXマシンの開発に携わる。

宮崎 晓

1963年12月生まれ。工学院大学機械工学科卒業。アスキーHSP(Home Software Products)において、「たわらくん」「サンダーボール」など、多くのMSX用ソフトの開発に携わる。

清水 真佐志

1963年10月生まれ。芝浦工業大学2部電気工学科在学中。鎌田氏とともにMSXマシンの開発に携わる。画像処理に興味を持ち、マルチMSX-VIDEOシステムには大きな関心を寄せている。

執筆者の一人である鎌田君は、1986年2月、不慮の事故により逝去されました。本書の完成は彼の豊富な知識と多大な努力に負うところが大きく、その成果を目にすることなく彼が亡くなられたことは、ほんとうに残念でなりません。この場を借りて追悼の意を表させていただきたいと思います。

株式会社アスキー

参考文献

- MSXテクニカルデータブック1【増補改訂版】
アスキー・マイクロソフトFE本部編著 アスキー発行
- MSXテクニカルデータブック2
アスキー・マイクロソフトFE本部編著 アスキー発行
- V9938 MSX-VIDEOテクニカルデータブック
アスキー・マイクロソフトFE本部／日本楽器製造株式会社編 アスキー発行
- 応用CP/M
村瀬 康治著 アスキー発行

MSX2 テクニカル・ハンドブック

1986年4月5日 初版発行

1988年8月11日 第1版第7刷発行

定価3,500円

監修 アスキー・マイクロソフト FE

発行者 塚本慶一郎

発行所 株式会社アスキー

〒107 東京都港区南青山6-11-1 スリーエフ南青山ビル

振替 東京4-161144

TEL (03)486-7111(大代表)

情報 TEL (03)498-0299(ダイヤルイン)

出版営業部 TEL (03)486-1977(ダイヤルイン)

本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部について(ソフトウェア及びプログラムを含む), 株式会社アスキーから文書による許諾を得ずに, いかなる方法においても無断で複写, 複製することは禁じられています。

編集担当 桜田幸嗣

CTS 福田工芸株式会社

印刷 株式会社加藤文明社印刷所

ISBN4-87148-194-8 C3055 ¥3500E

内容一覧

- ハードウェア概要
- ソフトウェア構成
- MSX BASIC ver.2.0
- MSX-DOS
- VDPと画面表示
- PSGと音声出力
- カセット・インターフェイス
- キーボード・インターフェイス
- プリンタ・インターフェイス
- 汎用入出力インターフェイス
- CLOCKとバッテリバックアップ・メモリ
- Appendix 各種仕様一覧

アスキーブックス
ASCII Books

ASCII
アスキーブックス